
聖天の宝具使い

SHIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖天の宝具使い

【Nコード】

N2152T

【作者名】

SHIN

【あらすじ】

星鏡世界。そこは、ミルフェリーナ王国とルシアーデ王国という強大な力を持つ二つの国が存在し、何千年も前から宝具使いと呼ばれる者達が戦争や殺戮を繰り返してきた世界。そのミルフェリーナ王国には、ルベリージャ学院と呼ばれている学院が存在する。その学院は子供達を宝具使い、通称ナイトへと育て上げるための学院であった

その学院、そして世界すら巻き込み、世界の秘密へと至る少女と少年。そして、二人が目にする世界の真の姿とは！？

小説・漫画投稿屋に投稿してある二重投稿作品です。

全ての序章（前書き）

始めまして、今回からここで作品を掲載させていただきます。面白いかどうかは分かりませんが、とりあえず投稿しました。

楽しんで頂けると幸いです。

直、この作品は、小説&漫画投稿屋に投稿されている二重投稿作品です。

小説&漫画投稿屋の方は物語がかなり進んでいます。

いないとは思いますが・・・もしも続きが気になるといつ心優しい方は、そちらを見てください。

宜しく願います。

全ての序章

朝7時、場所は《ルベリージャ学院》男子寮。

その男子寮の部屋の一つに、一人の少年が住んでいる。

「おい、レオン起きてるか〜！」

と、誰かが自分を呼ぶ声で目が覚めた。

「ああ、おきてるぞ。」

やる気のない声で返事をする。

その少年の部屋は色々な物が散らかっており、いかにも年頃の男子を彷彿とさせる平均的な部屋だ。

ボタンー！！

扉を開け、誰かが部屋に入ってきた。

「何だよ、相変わらずテンション低い奴だな！」

黒と茶色が入り混じったような髪をした男子が入ってくる。

逆に何でお前はそんなにテンション高いんだよ・・・という質問はあえて言わないことにする。

「一体何の様だよ・・・」

レオンがげんなり呟く。

その男子生徒は靴を脱ぐと、レオンが寝ているベッドの横まで歩いてきた。

「何って今日は祭りなんだぞ！！テンションあがない方がおかしいだろうが！」

男子生徒が叫ぶ。

そう、ここはルベリージャ学院。

今日はそのルベリージャ学院が創立されてから800年目の記念日なのであった。

ルベリージャ学院、それは宝具使い・通称ナイトと呼ばれる存在を教育する為の学院だ。

その創立の起源は約900年前にもさかのぼる。

この世界には《ミルフェリーナ王国》と《ルシアーデ王国》という二つの列強国が存在しており、昔から戦争を繰り返している・・・その戦争が原因で命を落とす人達が急増した。

そしてその戦争で大活躍だったのが、宝具使い、通称ナイトと呼ばれる者達だ。

ナイトと呼ばれる者達は昔から強大な力を持つ《宝具》を使って戦う者達で、戦争にも大きな影響を与えてきた。

しかし、お互いに戦争を繰り返しても一向に決着が付かない事から、戦争を無意味と認識して両国の国王による会談で、なんとか和解した。

しかし、今一度戦争が起こるのを防ぐ為、ミルフェリーナ王国の国王は、武力を戦争の為ではなく抑制の為に使う事を決めた。そして抑制に最も適しているのが、戦争に大きな影響を与えたナイト達というわけだ。

ここは、そのナイト達を指導する場所・・・悪い言い方をすれば軍事機関だ、しかし学院内はいたって平和・・・生徒会もあるし、イベントだってある。
用は普通の教育機関と変わらないのだ。

と、レオンが学院創立の理由を思い返していたが。

「はぁ・・・そんなもん・・・めんどくさいだけだろう・・・」
レオンはげんなり呟く。

それに・・・こいつの狙いは・・・

「違う！・・・祭りといったらナンパだろ！」
だろうと思ったよ・・・

こいつはルーク・ブリトニー、俺と同じ一年生だ。

しかしレオンはあることを思い出し、ルークの止める。

「ちょっと待てよ、祭りを回るなら生徒会長の挨拶があるはずだろ？」

レオンが告げる。

そう、学院の祭りごとには生徒会長の挨拶はつき物だ。

「そういえば、そうだったな、あはは・・・忘れてたぜ」
あ、と目を見開き苦笑するルーク。

そういえば・・・生徒会長の名前は確か・・・

レオンが悶々と考えていると・・・

「はあ～～アリスア生徒会長か～～良いよな～～・・・超美人だし成績優秀だし・・・それに何より、宝具使いとしても超一流。そういえばアリスア生徒会長にはファンクラブもあるらしいな。」

ルークが何かを想像して告げる。

「そりゃあるだろうさ、あれだけすごい人なら。」
レオンが半眼で呟く。

ルベリージャ学院生徒会長アリスア・エーテラーゼ、この学院の生徒達の長であり、この学院内で最も強大な力を持つ生徒だ。容姿端麗、学業優秀、伝説に名を残すほどの魔力・・・そういった全てが完璧な生徒であるが故に、学院生徒達からは人気を集め・・・男女に関わらずファンクラブまでがあるほどだ。

あらにこの学院には、無論、生徒会長と副会長がいるわけだが生徒会長の位はかなり凄いらしく、権力は並のものではない。その権力は学園長をも凌駕するといわれている。

どちらにしろ、自分達のような一般生徒には縁が無い話だ。

「おい！そろそろ行くこうぜレオン！！もう待ちきれないぜ！」
ルークが叫ぶ。

「分かったよ・・・」
断るわけにもいかないので仕方なく行くことにした。

さっきまで居た1年寮をでたレオンは、あまりの人の多さに驚いていた。

道のいたる所に出店が並んでいるわけだが、その店を埋めるように人があふれていた。

「すげえ人だな・・・」
学院指定の服装に着替え、寮を少し出ればこれだ。

「さて・・・先に出て行ったルークを見つけないとな・・・」
と、きよるきよる周りを見渡していると、

「おいレオン！！こつちだこつち！！」
見つけたと思っただけです。店で何かを食べていた。

「・・・お前・・・」

レオンが怒りを押し殺した声で告げる。

「ん？どうしたんだ？なんだかまた元気が無くなってるとるな。だめだぜ？・・・青春は謳歌しねえと損だ！」

そんなレオンなど露知らず、ルークは笑う。

・・・こいつ・・・笑顔で・・・よくもそんなことを・・・

「全部お前のせいだああああ！！！」

遂に堪忍袋の緒が切れ、レオンの叫びが響きわたった。

そして、学院の中央グラウンドに集まるよう放送がかかる。

「全員整列！これより、ルベリージャ学院800年目創立祭の開始をアリシア・エーテラーゼ生徒会長より告げて頂きたいと思ひます！それでは会長お願いします。」

男子生徒が告げる。

颯爽と歩み出たのは、赤い髪を優雅になびかせ、金色の瞳をした女

性だった。

女生徒というよりは、もう立派な女性に見える。

「おはようございます、皆さん」

ただそれだけで歓声がわいた。

苦笑する会長だったが、それでも気にはしていないようだった。

「今回の学院祭を開催できることをとても嬉しく思います。今年度新しく入学してきた生徒の人達も存分に楽しんで頂けると思います。また、ミルフェリーナ王室の方々もお越しいただきありがとうございます。」

来賓客用のテントにふんぞり返っている王族に向かって礼をするアリシア。

「とまあ・・・長話もなんなので、話しはこれくらいにして・・・全員、解散!！」

大きな声でアリシア会長は言い放った。

おおおお!!

と、生徒全員が叫んだ。

「なあ、俺たちはどうする?」

ルークが質問をしてきた。

「うん、俺は少し疲れた・・・その辺で休憩でもしてるから、お前自由でいいぜ。」
レオンがひらひらと手を振る。

「相変わらずだな、お前は。」
苦笑するルーク。

「じゃあ、言葉に甘えてナンパでもしに行くか!」
ルークは自分の手の平同士を打ちつけ、叫ぶ。

・・・こいつよく大声でそんな・・・

すでに周りの人が奇異の目をルークに向けていた。

・・・自分ではきき取ってないのが・・・少しだけ、残念な奴である。

さて、どうするかな？ルークはあれだし、やっぱり森で寝るとすっか。

「。うんてうんてお」

全ての序章 ？

ルベリージア学院の敷地はとても広い、学院の裏には広大な森がある。

別に名前がある訳ではないが、ここに迷い込んだ生徒が行方不明になりかけるといふ事故が幾かあったため、学院の生徒達はこの森を、惑わしの森と呼んでいる。

「やっぱりここは静かなんだな・・・まあ、惑わしの森の入り口だもんな・・・」

しかも、噂によればこの森には、魔獣も出るらしいという噂もあった。

レオンはそんな事は気にせず、近くにあったベンチへと寝転がる。

ま、噂は所詮噂だしな・・・と思い寝ようとするレオン。

「さて、寝るとするか」

レオンがそう呟いた刹那。

ズン！！

急に辺りの空気が重くなった。

!?

「なんだ・・・？」

今、確かに何かの気配がしたはずだが・・・

レオンは体を起こし、辺りを見渡しながら気配を探る。

レオンも一応は格闘技の一つや二つなら心得ているが、宝具を顕現させることはまだできない。

それは無論、一年生だからである。

宝具とはいわば、自分の魂を武器として具現化させたものであり、一人一人、形や力は全く異なる。

そして、宝具には、火・水・土・風・雷の五種類が存在している。かつては光と闇の二つの属性も存在していたが、この二種類は消滅したとされている。

そして、この宝具使い「ナイト」を育成するルベリシア学院で最強と言われているのが、アリシア生徒会長だろう。

会長は風属性の宝具を持っている。

無論、レオンにはまだ宝具は使えない。

「どうする？」

仮に魔獣だとするなら、レオンに勝ち目などない。逃げるか？ いや・・まだ魔獣と決まったわけでは・・そう考えてふと足元を見ると、何か影のようなものが映った。

そしてその影がどんどん拡大していく。

来るっ！！

レオンはとっさに飛びのいてかわした。

ズガアアアアン！！

頭上から先ほどレオンが立っていた位置に何か降ってきたのだ。

「な・・何だよ・・？」

ウ・・・ウガアアアアー！！

何かの咆哮。

ブオン！！

突風。

「うわっ！！」

咆哮と同時に突風が吹いた。

おそろおそろ目を開けるレオン。

「な・・・」

言葉を失った。

そこにいたのは黒い毛で覆われた怪物だった。

まるで獅子のような姿だ

まさか・・・これが・・・魔獣・・・？

一応、学園の授業では聞いたことくらいはあった。

この星鏡世界には魔力が満ちているが、その魔力が変質し、意思を持ってしまった存在が魔獣だと聞いていた。

しかし、授業と現実では全く違う存在だった。

これが魔獣・・・こうしてレオンは初めて魔獣と遭遇したのだった。

序章の終わり

こ・・・これが・・・魔獣・・・

レオンの目の前に居るのは、黒色の毛を纏った化け物だった。

グルルルルル・・・

魔獣が頭を低くし、威嚇的な唸り声を発する。

・・・

「あいつ・・・なんて殺気を出しやがるんだ・・・」
レオンは呟く。

ただ睨まれているだけなのに、あの鋭利な黒い爪を、喉元にあてられているような感じがする。

「やっぱり・・・あの時、逃げておけば良かったな。」
苦笑するレオン

ウオオオオオン！！
魔獣が吠える。

「なんだ！？」

急にあの化け物の足元に紫色の魔法陣が展開する。

「なんだ・・・一体何を・・・」

ギリツ・・・

今・・・何かが割れた・・・？
レオンが眉を顰めた瞬間。

ガァン！！

森の岩盤が起き上がり、地割れが起きた。

何も無いところで地割れが起きる・・・そんな超常現象を可能にするのは・・・

「な・・・クソ！！」
レオンが絶句。

逃げないと・・・逃げないと・・・死ぬ！！
とりあえずがむしやらに走った。

レオンは周りを見ずに走り続けた。

魔獣から一步でも離れる為に。

「はぁ・・・はぁ・・・」

レオンは走り続けたが、さすがに体力が続くわけもなく。

巻いた・・・のか・・・？

というかここは・・・？

レオンは辺りを見渡す。

「まずい・・・あいつにビビッて森の奥に走っちゃまったのか・・・」
あたりは樹海のように鬱蒼と木々が茂り、空からの光を遮断していた。

とりあえず・・・学院の方へ出ないと・・・そう思って歩き出そうとしたレオンの足が止まる。

「なんなんだ？ここは・・・？」

目の前に、大きな樹が立っていた。

周りの樹とは一線を越えている、明らかに雰囲気が違う。

「でかい・・・樹齢何年だ・・・」

レオンが真上を向いても一番上が見えない巨大な樹だった。

ていうか・・・こんなもんこの森にあったか？

そして、その樹には、まるでレオンを誘うかのように穴がぽっかりと開いていた。

「・・・・・・・・」

レオンはまるで吸い込まれるようにその穴に入った。

なぜかは分からないが、入らなければならぬ感じがしたのだ。

その中は樹の根が複雑に入り組んでいた。

まるで、木の根で出来た、道のような道だった。

そしてしばらく進むと、その狭い道が開け、光が見えた。

「光？何で樹の中に光があるんだ？」

そして、レオンは発見してしまうのだった。

自分の運命を変えてしまう存在を。

そして・・・レオンの預かり知らぬ所で、ある存在が呟いた。

ハレオン・・・お前は・・・変わるのだ・・・そして・・・十
の存在を集め・・・お前がああ庭園にたどり着いた時・・・世界が・・・
そして・・・お前の中の存在も・・・

出会い

レオンは、樹の根で出来た道を進み、やがてその道の終わりを告げるように、巨大な空間へと出る。

そこは不思議な場所だった。

天井、壁、その全てを樹の根が覆い尽くすように茂り、何故か階段が下の方へと降りている。

そう、現すなら観客席と・・・その観戦対象たるフィールドがあり、そのフィールドへと階段が伸びている状態だ。

レオンがいるのはその観客席とでも言えばいいだろうか。

レオンはコケで覆われた柵のような物を掴んで身を乗り出した。

下の方は暗く、何処まで通じているか分からないが、遙か下から白い光が漏れている。

どうやらこの光が、辺りを照らしていた物の正体のようだ。

「しかし・・・ここまで光が伸びてくるなんて相当な明るさだぞ？・・・
そもそもなんで樹の中が光って・・・いいや、階段がある自体がおかしいよな・・・」

レオンはそう呟くと、階段へと足をかけ、ゆっくりと階段を下っていった。

レオンが階段を降り続けて10分程はたっただろう。

そこでレオンは驚く。

「なんだ・・・これ」

レオンが呆然と呟く。

レオンが階段を降りきって、広い空間の中心、そこにあったのは巨大な十字架。
コケが生え、若干緑がかっているが、純白の十字架という事がよく分かる。

その十字架が発光し、周りを照らしていたようだ・・・しかし、レオンが絶句したのはそこではない。

その白い十字架に、女の子が貼り付けにされていたのだ。

「・・・お・・・おい！大丈夫かっ!？」

レオンはそう叫ぶと、急いで十字架へと駆け寄った。

しかし。

バチン!!

「うあっ!!!!」

十字架へと近ずいたところで、まるで何かに弾かれるように吹き飛ばされた。

「なんだ・・・今の・・・？」

レオンは痛む体に鞭打って、立ち上がる。

「っ!？」

レオンは絶句した。

その女の子と、十字架を守るように白い魔法陣が浮き上がっていた。
・おそらくこの魔法陣がレオンを弾き飛ばしたのだろう。

「くそ・・・待ってる・・・今・・・うあー!!」
レオンが近づくも、又もや弾かれる。

なんでだ・・・
レオンが呆然となる。

その時、《声》が頭に響いた。

《助けて・・・》

「・・・あの子が・・・？」
レオンが考える、しかしあの子ではないかもしれない・・・ただの空耳かもしれない・・・だがレオンにはあの子を救わなければ・・・開放しなければならぬ・・・と、そんな予感が浮かんだ。

レオンは魔法陣が展開している場所へと近づく、手を触れさせる。

バチン!!

「くうっ!!」

痛みで、手が焼けるようだ。

バチバチ・・・

レオンが手を触れ続ける限り、火花が散った。

「く・・・そお!!」

レオンがさらに押す力を強める。

遂には、白い結界のようなものが浮かび上がる。

「上等だ・・・うおおお!!」

レオンはさらに押す力を強める。

手のひらは焼け、感触が感じられない。

「くそっ！・・・行くぞ・・・破れるおおおっ！！」

レオンは願った、この結界を破壊する力を・・・破壊できるだけの力を。

《何を言ってる？・・・砕けるさ、この世界の全てを壊す力を・・・前は手にしているのだから》

頭の中に《男の声》が響いた。

「おおおお！！」

レオンは絶叫し、思い切り押し込んだ。

ミシッ・・・

キ・・・イ・・・イ・・・イ・・・イ・・・イ・・・

悲鳴をあげるように、白い結界が砕けた。

「や・・・った・・・」

レオンはそう呟き、その十字架へと近ずき、触れる。

「っ！？」

レオンは絶句。

ドクン・・・

!?

何だ今のは・・・?

もう一度触れてみる。

・・・?

何も感じない。

「変だな・・・確かにさっき・・・」

ドカアアアーン!!

何かを突き破る音と共に、何かが入り込んできた。

!?

「まさか・・・」

レオンは声が出せない。

グルルルル・・・

「そんな・・・もう・・・追いついてきやがったのかよ!!」

そこにいたのは、さっきレオンが巻いたと思っていた魔獣だった。どうやら、樹の根を突き破ってきたようだ。

グルルルル・ガアアア！！
魔獣の足元に、又もや魔法陣が展開。

「また魔方阵かよ！それはさっき見たぜ！」

さっきの魔法は地属性の魔法だった、なら地面に気をつけていれば・

しかし、魔獣から展開した魔法陣は先の物とは大きさも魔力の巨大さはケタはずれだった。

ウウウウウアア・グルアーー！！

魔獣の魔法陣に魔力が収束していく。

「これは・・・魔道砲撃！？」

それじゃあこいつは・・・セカンド・ビーストだったってのか・・・？

魔獣には全部で四段階存在する。

一番最下級のファースト・ビースト、ファーストの戦闘能力はたい

したことはなく、宝具を使えるものなら誰でも倒すことができる。

そして、セカンド、このレベルは宝具を使い慣れてないと倒すことはできない。

これ以上は・・・レオンは寝ていたので、授業で聞いていなかった。

しかし、ミルフェリーナ王国近辺にはセカンドまでしか存在していないらしい。

そして、魔道砲撃が使えるのはセカンド以上の魔獣だけなのだ。となると、この魔獣がセカンドということになる。

マ・・・マジかよ・・・もしかして俺はここで死ぬのかよ・・・？

こうしている間にも魔獣の魔法陣にどんどん魔力が収束している。いる。

そして・・・

グルアーーー！！

バアン！

魔獣の口から、魔力の塊になる。

そして魔道砲撃は強大な光の柱となってレオンに迫ってきた。

レオンは十字架を守るように立ちふさがった。

くそ・・・ここまでか・・・

調度そのとき、レオンの左腕に触れていた十字架が一際輝いた。

「なんだ!！」

そして脳に直接声が響いた。

「この人には手を出さないで。」

そして十字架に巻きつき、女の子の手足に巻きついていた樹の根がはじけたかと思うと、銀色の髪を長く伸ばした女の子が地面に降り立った。

「さっきの?」

どうして??

いや今はそれより。

「お・・・おい!危ないぞ下がれ!」

「ううん、大丈夫だよ。あなたは・・・私が守るから・・・」

?

どうして俺を・・・

「あなたが・・・私を救ってくれたから。」

救った？俺が？

「だから私も・・・」

彼女は手を伸ばし・・・そして。

「フィール・・・アルクス・・・エーテ・・・アズルブレイム・・・
来たれ・・・浄化の閃光、ハエンシエント・ブレイカー！！！」

彼女の手のひらで描かれた魔法陣は魔獣の魔力など比にもならない
ものだった。

そして、彼女の魔法陣から放たれたのは、光だった。

ただ圧倒的な光、それが魔獣の全てを消し去った。

ルベリージア学院生徒会長

す・・・すげえ・・・

レオンは少女が放った魔法の威力に驚いていた。

いくらセカンドとはいえ、宝具ではなく魔法で倒すという行為があまりにも凄まじいからであった。

この世界には魔法が存在していることにはしているが、宝具使いが魔法を使うことはほとんどない。

それは単純に宝具の方が強力だからである。

魔法は主に補助目的として使われる。

それをこの少女は攻撃目的で・・・それもあの威力はその辺の宝具使いを上回るほどだった。

この子は一体？

「それに、あの魔法・・・」

魔法も宝具と同じく火・水・土・風・雷の五種からなっている。

しかし、あの魔法は・・・レオンにはあの魔法が五種類のどれに当てはまっているか分からなかった。

それに・・・

ドサッ。

「！おい！しっかりしろ！！」

少女が倒れた。

しかし、どれだけ少女に話かけても返事がない。
まさか、死んでるんじゃないや、息はある。

「良かった・・・とりあえずは安し」
安心と言おうとしたレオンの声が止まる。

グルルル・・・

「そんな・・・嘘・・・だろ？」
レオンが周りを見渡してそう言った。

レオンたちの周りに魔獣たちが二十体近くいたのである。

「まさか・・・セカンドを倒したから・・・」

そうさっきのセカンドはファーストをまとめていた統率固体だった
まずい・・・この子だって気を失っているのに・・・逃げられない。

この子を捨てて逃げればあるいは・・・

「はっ！なに言ってんだ！！この子は俺を助けてくれた、なら・・・」

「俺だってこの子を救ってみせる！！」

と言ったものどうすれば・・・

「その君！」

！？ 誰だ？

「！？ まさか・・・！？」

レオンが驚くのも無理はなかった。

そこに降り立ったのは、ルベリージャ学院生徒会長、アリスア・エーテラーゼだったのだから。

「アリスア生徒会長・・・なんですか・・・？」

「ええ、あなたが戻って来ないとルーク・ブリトニーから聞いたの。」

「ルークから！？」

そうか・・・あいつ・・・

「それでその子は・・・？」

「あ！この子を助けてほしいんです！この子俺をセカンド・ピーストから守ってくれたんです。」

「成る程、統率固体を倒したのはこの子だったの・・・それでファースト達が荒れているわけね。」

「ま、とりあえず、ここから出ましようか。」

とアリシアは言った。

「え・・・でも、どうやって?」

「無論、こいつらを全部、掃討するのよ。」

そう言ったアリシアは両手を自らの胸にあて、交差させた。

「わが元に顕現せよ、風を束ねし大いなる双刃よ。大地を駆け、天を掴め、

疾風迅雷の双剣、ハ風王天刃ヱウィンディーネ!!」

アリシアの周りに風が渦巻いたと思ったときには両腕に双剣が握られていた。

始めて見る・・・あれが会長の宝具・・・!!

「これは地道に倒すより一気に倒したほうがいいわね。」

「レオン君だっけ?」

「は・・・はい!」

「これから少し荒い技を使うから、私から離れて頂戴。」

レオンはすかさず離れる。

それを見届けたアリシアは、「よし、これならOKね」と言った。

「解言・・・ウィンディーネ、初撃・・・ハ烈風一陣ヱクロス・エル・

ウィンデー！」

ギャリン！！

ウィンディー、ネをすり合わせ力を溜め、解き放つ。

ザン！！

あ・・

レオンが一言発する間に魔獣は跡形もなく消え去っていた。

「さ、学院に戻りましょうか、レオン・イル・エキテス君。」

アリシア会長は笑ってそう言った。

謎の少女

森の中。

レオンとアリシアは学院へと向かっていた。

「それにしても、レオン君はどうして惑わしの森に？」

う・・・そ・・・それを聞いてくるのか・・・

「それは・・・ですね・・・何というか・・・寝ようと思って・・・」

「寝る？惑わしの森で？あなた勇気があるのか、無謀なのかどっちなのかしらね。」

くすくすと笑うアリシア。

「それにしてもまさか魔獣と遭遇するなんて思いもしませんでした。」

「・

「まあね、私もまさかあれだけの数の魔獣がいたなんて驚いてるわ。」

「理事会に報告しておかないとね、とつぶやくアリシア。」

「とつぶやく・・・その子は・・・」

「あ・・・そうでした、この子俺をセカンド・ビーストから守ってくれたんです、魔法を使って。」

「え、魔法？魔法でセカンドを倒したの？」

「ええ、そうなんです、俺も最初は驚きましたから。」
そう、宝具ならまだしも、魔法だけでセカンドを撃退したのには驚きを隠せなかった。

「魔法でセカンドを倒すなんて、この子只者じゃないわね、でもまあ今はその子もあなたも、学院で一休みするのが先だけだね。」

確かにアリシアの言うとおりだった、レオンもかなり疲れていたのだ。

「でも、会長の宝具凄かったですね、あれだけの数を一瞬で・・・」

「まあね、伊達に生徒会長は名乗ってないもの。それよりその子重いでしょ、抱えるの変わってあげるわ。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

「それにしても・・・この子・・・」

「?・・・どうかしましたか・・・?」

「あ、いいえ、なんでもないわ。」

この子、通常の魔力とは違うわね・・・いいえ、これは異質と言ったほうがいいかしら・・・どちらにする私達とは何かが違う・・・まる

で・・・この世界の住人では・・・いいえ、考え過ぎよね。

「会長、学院が見えてきました！」

「あら、本当ね、それじゃあとりあえず保健室で一休みしなさいね、この子もあなたと同じく保健室で寝かせるから。」

こうして、レオンは学院に帰還した、そして現在は保健室のベッドの上だ。

そして・・・「レオン、お前って奴は・・・心配かけさせるなよ」とルークが言う。

「ああ、わりいな・・・」

「まったく、しかも、アリシア会長と二人きりで森から帰ってくるなんて・・・なんて羨ま・・・いや、けしからん!!」

「そ・・・それは、知らねえよ!!」

「しかも、森の中で白銀の美少女と出くわすなんて・・・ちっ・・・俺が森に行けばよかったか・・・」

・・・そうだ・・・この子は一体・・・

と、その時、誰かが部屋に入ってきた。

「調子はどう？レオン君？」

「！！アリシア会長！」

「その様子だとだいぶマシになったようね。」

「あ・・・あああ、アリシア会長！」

あ・・・ルークが・・・こりゃあ、頭のネジの一本や二本はとんだか・・・

「あなたは、確か・・・ルーク君？」

「はい！！僕前から会長のファンでした！！！」

「あら、そうなの？でも残念だけど今はレオン君と話がしたいの、ごめんなさいね。」

苦笑するアリシア。

ガーン・・・と聞こえてきそうな程落ちこむルーク。

「・・・レオン・・・」

「ん、なんだ？」

後で覚えてる・・・と泣きながら出て行ってしまった。

「・・・悪いな・・・ルーク」

後で飯でも奢ってやるう。

「もしかして・・・私のせいかしら・・・」

ええ、そうですね・・・そう思うレオンであった。

「ところで、レオン君、その子はまだ目を覚まさない？」

「え・・・ええ・・・」

と、その時。

バサリ・・・

！！

なんと、少女が目を覚ましたのであった。

「！！気がついたのか！大丈夫か！！」

「うん・・・大丈夫・・・ところでここは・・・」
戸惑う少女。

「ここはルベリージア学院よ」
とアリシアが言った。

「ルベリージア学院・・・そう・・・ここが・・・」

レオンは改めてその少女を見た。

長い銀髪に水色の瞳、どう見ても美少女だった。

謎の少女？

少女が目を覚ました。

「気がついたのか・・良かった・・」

「ここは・・何処・・？」

「ここはルベリージア学院よ
とアリシアが言う。

「ルベリージア学院・・そう・・ここが・・」

「それで、君は一体、何者なんだ？どうして俺を・・？」

「そうね、私もそれが気になっていたの、どうしてあなたはレオン君の事を知っていたのか、そして、あなたはどうしてあんな森の奥深くにいたのか・・」

真剣な眼差しでアリシアが問う。

「・・分からない・・どうしてあたしはあそこにいたのか・・ただ覚えているのは・・レオンという名前と・・」

レオンを見つめ、少女が言う。

「それから、私が『鍵』の片割れということだけ・・」

「鍵・・なんの鍵なの？」

困惑するアリシア。

「分からない・・・ごめんなさい・・・」
目をふせる少女。

「いや、いいんだ・・・じゃあ・・・俺を助けたのは？」

「あなたを助けなければいけないって・・・そう思ったの。」

「・・・」

似てる・・・俺がああ樹に入ったのも、入らなければいけない気がしたからだ。

それに・・・何故だろう、この少女を見ると、懐かしい感じがする。

もしかして、俺はこの子を知っているのか・・・？

いや、そんなはずはない、俺の記憶にはこの子とあった覚えはないからだ。

・・・
ただ・・・なんだろう・・・この感覚は・・・まるで・・・この子と俺が・・・

「まあ、なんにせよ、この子はレオン君が面倒を見ないといけないわよね？」

「にやにや笑いながらいうアリシア。」

「えっ！！俺ですか！！」

「それはそうよ、だってこの子が知っている人ってレオン君だけだもの。」

「で・・・でも・・・俺も一応、年頃の男子だし・・・」

「いいじゃない・・・面白そうだし。」
今、サラッと本音が出たような・・・

「あ、そうだ！！君の名前は？」

「そういえばそうね、すっかり忘れていたわ。」

「私は・・・アリス、アリス・ランガルド」

「アリス・・・」

ドクン・・・！？

なんだ、今・・・

「じゃあ、この子にはあなたと同じく普通に学院生活を送ってもらおうかしらね。」

え！？

「いいんですか？そんな事しても。」

「ええ、別に良いわよ、生徒が増えるのは私も嬉しいし、何よりこの子には少し興味もあるし・・・」

「理事会には私から伝えておくから、とりあえずはあなたの隣の部屋に空きを作っておかないとね。」

転入

え〜というわけで、今日から新しく転入してきた、アリス・ランガルドさんです。」

・・・

沈黙する教室

うおおおお！！

転校生だ！！

しかも超美人！

髪も超綺麗！

「みんな〜思い思いのことをいうのはここまでにしてくださいよ〜」

ここで嘆いているのが俺達のクラスの担任のエルシー先生だ。

エルシー先生は水系統を専攻としている。

無論、宝具も水系統の宝具だ。

だが、その性格ゆえに完全にクラスのメンバーからなめられているが・・・

因みに俺たちのクラスは1-Aだ。

「よろしくお願いします。」

挨拶をするアリス。

「え〜〜〜ここで・・・皆さんにはいつておかなければならない事があります。」

アリスと頷き、俺も頷く。

そして先生は言った。

「アリスさんは記憶喪失です・・・」

・・・

「え・・・えーと・・・アリスさんは記憶が無くて不安なのです、ですからクラス全員で支えてあげましょうね。」

・・・はい！

全員が返事をした。

そして。

ねね、アリスさん分からないことがあれば何でも聞いてね。私も。

あとでいっぱい話しを聞かせてね。

と皆アリスと打ち解けていた

「ふう・・・良かった・・・」

「一安心だな。」

俺に言うルーク。

「ああ、全くだよ・・・」

「じゃあ、アリスさんの席はレオン君のとなりね。」

「はい。」

「よろしくな、アリス。」

「うん、よろしくね、レオン君。」

微笑むアリス。

「!!!」

こいつ・・・こんな顔もできるんだな・・・

そして放課後。

俺達は雑談室にきていた。

「そう・・・アリスちゃんはきちんと馴染めたみたいね。」

「はい。本当に安心しました。」

俺はそこでアリシア会長に呼ばれて話をしていた。

「全部会長のおかげです。ありがとうございます。」

「いいえ、いいのよ。それより、その会長って呼び方何とかならない?」

「え?」

首をかしげる俺。

「私の事はアリシアでいいわ。」

「ええ〜〜!!で・・・でもそんな恐れ多いこと・・・」

「本人が良いと言っているのだからいいわよ。」
微笑むアリシア。

「わ・・・分かりました、では、アリシアさんと・・・」
照れながら言ってしまう。

「んーま微妙だけど良いわよ。」

苦笑するアリシア

「さて、あなただけをここへ呼んだ本当の理由を言おうかしら。」

そうだ、それはレオンも気になるところだった。
なぜアリスを呼ばなかったのか。

と、急にアリシアの視線が険しくなった。

「そのアリスさんの事についてなのだけど、ねえレオン君、あなた、アリスさんの魔法を見たかしら？」

「え・・・まあ見ましたけど・・・それが・・・何か・・・？」

「その時の魔法・・・どんな魔法だったか覚えてる？」

「・・・そういえば・・・光・・・でした・・・」

「・・・さて、レオン君に問題です、魔法は全部で何系統あるでしょう？」

「それは、もちろん五系・・・!!」

「きずいた様ね、そう、現在、存在している魔法は五系統・・・でも、アリスさんの魔法はどれかに当てはまっていたかしら？」

・・・

「そうだ・・・そういえば・・・アリスが放った魔法は光だった、光・・・それってまさか・・・」

「私も気になっていたのよ・・・アリスさんを抱いた時、違和感の様な感じがしたの・・・私たちとは何かが違うとね、そして今のあなたの意見ではつきりした。」

「そうあの子の属性は、かつて失われた、創生を示す古代の属性つまり、**光**よ。」

!!!

終焉と再生の年代記Ⅱ エクストラ・クロニクル

「終焉と創造の年代記Ⅱ エクストラ・クロニクル」曰く。

この世界は星の力によって作られた世界である・・

それゆえにこの世界はとても豊かで繁栄し、人々はその豊かさを使い、数を増やしていった・・・

そして「神」は言った、この者達に大いなる力を与えよう、魔力と呼ばれる力を・・

そして、この世界には魔力が満ち、人々は魔法と言う物を生み出した。

しかし、この時点での魔法はたいした物ではなく、物を浮かせたりするだけだった。

そして、人々は求めた、もっと強大な力を、そして「神」はそれに答えた。

「ならば、汝等に大いなる奇跡を与える・・」

こうして「神」は魔法を七つに分けたのだ。

「光・闇・火・水・土・風・雷」

人々はこれらの力を使い自分の心を具現化し武器とした存在、宝具を生み出した。

そして、そこで異変がおきる、光と闇が対立したのだ、七つで一つの摂理として設定したものが分裂してしまったのだ。

これによって世界は終焉を迎えてしまう・・・

それを見た「神」は、あまりにも強すぎる、いわば神にすら匹敵すると分かった光と闇をこの世界から消し去り、残った五つをペンタゴンの摂理として再設定した。

こうして世界は完全に《完成》したのだ。

襲撃そして覚醒

そんな・・・アリスが光の属性・・・？

「まだ信じられない？でも今あなたに見せたエクストラ・クロニクルの一章のコピーに書いてあることは本当よ？」

無論、レプリカだから本物の五分の一も書いてないけどね、と告げる。

つまり・・・それが示すのは。

「アリスちゃんは光の属性を使う人間の末裔という確立が高いわね。」

「でも、どうするんですか？アリスは普通に授業を受けられないんじゃない・・・」

「いいえ、そのことに関しては大丈夫よ、すでに学園の上層部に掛け合ってきたから。」

！？

上層部！？

「そ・・・それって・・・大丈夫なんですか・・・上層部なんか報告しても？」

「大丈夫って言ったでしょ、それともレオン君は私が信用できないかしら？」

顔を近づけてくるアリシア。

互いの息が掛かるほどまで近ずかれ、レオンが先に折れた。

「わ・・分かりました!?!」

「うん、それで宜しい。」

笑うアリシア。

「ていうのは、冗談で、上層部に私の友達がいるのよ、その子にお願したから大丈夫よ。」

「さてと、今日はこれで解散にしましょう。」

レオンがはいと言おうとした矢先

「アリシア会長、レオン!!!」

ルークが部屋に飛び込んできた。

「どうしたルーク?らしくない。」

「アリスちゃんが・・さらわれた!?!」

!?

互いを見合すアリシアとレオン。

「誰にさらわれた!?!」

「それが・・急に魔獣共が教室に入ってきて、アリスちゃんをさらって行ったんだ!」

!!

「アリシア会長！」

「ええ、どうやら、魔獣たちはアリスちゃんの力にきずいたのね。」

「くそっ俺がついていながら……すまねえレオン……」
拳を床に叩きつけるルーク。

「いや、お前のせいじゃないさ。」

それより……

「アリシア会長行きましょう！」

「ええ、そうね、ルーク君悪いんだけど、職員室に行ったこのことを報告して頂戴。」

「それとレオン君、私の事はアリシアでしょう。」
ウインクするアリシア

「……はい！アリシアさん！」

頷くアリシア。

そしてレオンとアリシアは惑わしの森にいた。

「とりあえず惑わしの森ね。レオン君私の近くに来て。」

「はい。」

アリシアにちかずいたレオン。

「じゃあ飛ぶわよ!!」
へ???

「風魔法、中位詠唱、ルデル・エノク・フィルダンド!」
「発動、エア・ウイング!!」

アリシアの背中から、風の翼が生える。
そして、羽ばたいた。

ブオン!!

一気にこの辺一帯が見えるところまで上昇した。

「さてと・・・魔獣たちは一体どこに・・・」

そして、レオンは、えええ!!どんな状況だよこれはー!!
と戦慄していた。

アリシアの腰に捕まっていなければ死んでいる。

と、そのとき、《レオン・・・》

!!今・・・アリスの声が・・・

「会長!今アリスの声が・・・」

「!?!?レオン君アリスちゃんの居場所が分かるの?」

「はい！！何故だかわからないですけど・・・あっちです！」
レオンは西を指差した。

「分かったわ。」

すぐさま、西へ向かって飛ぶアリシアとレオン。
時速二百キロは軽いだろう、それほどの速さだった。

そして、しばらく進むと・・・

「邪悪な魔力を感じるわね・・・この辺りよ。」
と、いつて降り立つ二人。

いた・・・

グルルルル・・・

アリスは何十体もの魔獣に囲まれて眠っていた。

「てめえら・・・」

「待ちなさいレオン君、ここは私に任せて、あなたは隙をみてアリスちゃんを救いなさい。」

「はい！！」

「さて・・・いくわよ、わが元に顕現せよ、風を束ねし大いなる双刃よ。」

アリシアの周りに突風が吹きはじめる。

「大地を駆け、天を掴め、疾風迅雷の双剣、ウィンディーネ！」

アリシアの両手にウィンディーネが顕現する。

「行くわよ！！はっ！！」

アリシアは魔獣どもに突っ込んだ。

そして、横になぎ払う。

それだけで魔獣が三体ほど消滅。

魔獣たちも黙ってはいない、十体ほどアリシアめがけて襲い掛かってくる。

「アリシアさん！！」

しかし、そこでアリシアの姿が掻き消える。

ヒュンッ！！

戸惑う魔獣。

そしてアリシアは魔獣の背後に回りこんでいた。

アリシアは双剣を魔獣たちに叩きつける。

ズガアアン！！

消滅。

「す・すごい」

アリシアの剣さばきが目に見えない。

手の動きが既に音速を超えている。

「早すぎるだろ・・・これが、生徒会長の実力・・・」

と、俺は俺のやることをしないと・・・

「ウィンディーネ・・・、解言・・・弑撃・・・**風牙転撃**」カマイタチ
「！！」

アリシアが叫ぶ。

アリシアが魔獣たちの群れの中心に一瞬で入り、二つの刃を回した。

その時、双剣から、無数の風の刃が放たれた。

「今よ！！レオン君！！」

「はい！、アリスーッ！！」
アリスのもとへ向かう。

そしてたどり着いた。
しかし、

「レオン君後ろ！！」
会長が叫ぶ。

！！

後ろを見ると一体の魔獣がレオンに襲い掛かってきた。

そんな・・・まだ残って・・・

いやだ・・・まだ・・・あきらめたくない・・・こんなところでは死ねな

い。

ドクン・・

俺はアリスを・・

ドクン・・

守りたいんだ!!!

ドクン!!

キュアア・・・

なんだ・・魔力・・俺の体から・・?

いける・・

何故かそう思えた。

体から黒い魔力はほとばしる。

そして

「オレノマエカラキエロ・・・黒滅魔法、ハ

」

レオンの手のひらから黒い魔法陣が顕現、そして

全てを飲み込んだ。

ズズズズズズズズ・・ギュアン!!

「な・・・に・・・今の・・・」
呆然とするアリシア。

そして、レオンは氣を失った。

帰還・・・そして・・・

惑わしの森から遠く離れたある場所です。

「ククク・・・ついに目覚めたか・・・レオンよ・・・」

男は静かに笑いをこぼしていた。

「これで、二つの鍵が動き出した・・・やっと我々も動けるといっわけか。」

コツツ・・・コツツ・・・

誰かが男の傍にやって来た。

「随分機嫌がよさそうね・・・ジャック。」

「ああ・・・やっと我等が動けるようになったのだから、当然だ。」

「フン・・・期待してるわけ・・・あの「闇より選定されし者」と「光の再生者」に。」

「当然だ・・・あの二人なら必ずや・・・「あの庭園」への扉を開いてくれるだろう。」

「でも、分かっているのでしょうか？全てはこれからだと。あそこへの扉を開くには、「鍵」以外にも・・・十の「神器」が必要なのだから・・・」

それも含めてだ・・・と呟く男。

「そう、全ては予定通りだ、我等・・・いや、全人類は「絶対運命」のもとに成り立っているのだから・・・」

「でも、もしも、（彼女）が介入してきたら・・・どうするの？」

「ふん・・・ありえんよ・・・よほどの事がなければアレは干渉してこんよ。それに、あの二人も覚醒したとはいえ、まだまだ・・・だ、（彼女）は答えてはくれんだろう。」

「さあ・・・全てを始めようか・・・レオン・・・我が愛しき（よ）。」

場所は戻り、惑わしの森。

レオンの手元で顕現した魔方陣は凄まじいものだった。

ブラックホールのようなものが発生したと思えば森一帯が真っ暗になり、きずいた時には全ての物音が消え去っていた・・・木々のざわめきも、鳥の鳴き声も、生物の気配も・・・そして・・・魔獣も。

まるで、世界を喰らったかのように・・・

「な・・・なに・・・今の・・・」

アリシアは地面に座り込んでいた、あのアリシア・エーテラーゼが、だ。

「今のって、レオン君の魔法・・・よね？」

レオンはさっき妙な魔法を使ったと思えば、地面に倒れてしまった。

「一体なんだったのかしら・・・今は・・・魔力が強大だとかそういうものではなかった・・・まるで・・・魂を持っていかれる様な感覚・・・？」

ふふ・・・自分で言っただけでバカみたいと呟くアリシア。

「アリスちゃんにレオン君か・・・」

これほど特異な何かを持つ二人が一気に現れるなんて・・・これは単なる偶然とはアリシアには考えられなかった、これは少し調べる必要があるそうね・・・と思うアリシアだった。

「でも今は二人を連れて帰らないとね、はあ・・・二人なんてかなり疲れそうだけど、仕方ないわね・・・」

そうしてアリシアは苦笑し学院へ向かうことにしたのだった。

レオンは眠っている間、不思議な夢を見ていた。

そこは、まるで、星鏡世界とは反対の世界だった。

「なんだ？ここは・・・俺はなんでこんなところに・・・？」

歩くというより漂うように移動していたレオンは自分の前に巨大な建造物があることにきずいた。

「なんだ・・・これは・・・城なのか・・・？」

だがレオンは生まれてこのかた、ここまで大きな城をみたことはなかった。

「なんだか・・・まるで・・・闇の世界だな・・・」
だがレオンは同時に不思議な心情に捕らわれていた。

「それに、ここ・・・懐かしい感じがするんだよな・・・来たことなんてないはずなのに・・・」

それはまるで自分の生まれた故郷に帰ってきたような感覚だった。

とそこで、声が聞こえた。

《いいえ、あなたはここに来た事があるはずよ・・・》

!?

「誰だ!？」

《レオン・・・あなたは、力に目覚めたわ・・・これからあなたは・・・大いなる運命に・・・》

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

「何だ・・・?聞こえない!」

《時間ね・・・あなたはもう帰らなくては・・・》

「ま・・・待て!・・・お前は一体誰・・・」

誰だといいかけたレオンだったが言い切れなかった。

急に意識を失ったから。

ガバツ！！

「……………ここは、俺の部屋……………」

ガチャ…………

「あら、きずいた様ね、レオン君。」

扉を開けて入ってきたのはアリシア会長だった。

「アリシアさん…………俺…………一体どうしてこんなところに…………森にいたはずじゃ…………」

「どうやら寝すぎで頭が呆けてしまっているのかしら？レオン君はもう一週間も眠りつづけていたのよ。」
苦笑するアリシア。

「一週間！！そんなに…………」

「ちなみにアリスちゃんは三日前くらいに目を覚まして、普通に学院に通っているわ。」

あなたの事すごく心配してたわよと付け加えて。

「俺…………あの時何をしたんだ…………？確か背後から魔獣が迫ってきて…………それから…………」

だめだ、思い出せない。

何かをしたような感じはするのだが何をしたのかは覚えていない。

「もしかして・・・レオン君・・・自分が何をしたのか・・・覚えてない・・・？」

「アリシアさん、知っているんですか！」

と考え込むアリシア・・・そして、

「いいえ、私も魔獣を相手にしていたから・・・あまり、知らないわ・・・ごめんなさいね・・・」

「そうですか・・・」
がっくり肩をおとすレオン。

「でも、目が覚めたという事は、明日からは大丈夫そうね。」
笑顔で言うアリシア。

「はい、迷惑をかけました・・・」

「くすっいいいのよ、じゃあ明日からまた宜しくね。」

そういつてアリシアは出て行った。

人物解説（前書き）

初、人物解説です。

今後は物語が一定以上進むたびに解説を入れていきますので、宜しくお願いします！

人物解説

―――登場人物―――

レオン・イル・エキテス

本編主人公、16歳、ルベリージア学院1-A所属。

性格はめんどくさがりやだが、色々な人達と交流を重ねることで、物事を前向きに考えるようになる。

アリス・ランガルド

本編メインヒロイン。16歳、レオンと同じ組に所属。

魔法系統は古代魔法系統《光》

世界の秘密にちかづくための「鍵」。

性格は最初は暗かったが、レオンたちと共に行動するようになってからは、明るくなってきている。

アリシア・エーテラーゼ

本編のヒロインの1人。17歳、2-B所属。

魔法系統は風、宝具は風王天刃「ウインディーネ」。

学院最強と噂される生徒。

ルーク・ブリトニー

レオンの悪友、組みもレオンと同じ。

1年生で宝具を発現させており、優秀なグループに入る。

ジャック

謎の男。レオンと何らかの関わりを持ち、レオンに多大な期待を寄せている。

—————用語集—————

星鏡世界

物語の舞台となる世界。

神と星の力によって作られた世界で、現在ではミルフェリーナ王国とルシアーデ王国が互いに領土をかけて戦争を繰り返してきた。

魔法

星鏡世界に満ちている魔力を使い、己の心の奇跡を顕現させる力。

宝具

人間の心を魔力によって具現化させた物で、大きな力を持っている。火・水・土・風・雷の五種類で成り立つ。

終焉と創造の年代記ハエクストラ・クロニクル

星鏡世界の神話や成り立ちが記された書物。

コピーや複写本なら多く存在しているが、コピーは原典の半分も記

されていない為、さほど重要ではない。
原典は何処かに存在するらしい。

転入生はお嬢様！？（前書き）

遂に新キャラ登場です！！

転入生はお嬢様!?

朝、レオンはアリスが部屋に迎えに来た事に驚いていた。

「……アリス……なのか？」

「うん、レオン君、学校一緒に行こ？」
微笑むアリス。

!!

やっぱり……アリスって美少女だよな……何度見てもそう思う。
綺麗に腰の下まで伸びた銀色の髪にスタイルのいい体つき。
それから、青空の如く澄み渡る青い瞳。

は……!!何を見とれてしまってるんだ、俺は!!

「どうしたの……?レオン君……私と行くの……嫌……?」
悲しそうに表情を曇らせるアリス。

「いやいや!!嬉しいよ!!」

「そう……良かった……こうすると喜ばれるって言われたから……」

「安心のアリス。」

「ん?言われたって……誰に……?」

「アリシア会長……」

「アリスちゃん良い?朝、レオン君の部屋に行って学院と一緒に
けるか誘ってみなさい?必ず喜ばれるわ。」

「にやにや笑いながら・・・そう、言ったた。」

「・・・・・・・・・・」

レオンの頭の中に笑いをこらえているアリシアの顔が浮かぶ。

「・・・アリシアさん・・・男心を何と思っているんですか・・・」
一気にテンションダウンするレオン。

「まあ・・・気にしないでおう。とりあえず、教室に行くか。」

「うん。」

時は朝8時。

場所はルベリージャ学院1-A。

レオンとルークは教室で他愛のない会話をしていた。

「なあなあレオン、知ってるか？最近、結構噂になってる事があるんだぜ。」

「？なんだよ、噂になってる事って。」

「ああ・・・実はな・・・アリシア会長と付き合ってる生徒がいるって噂・・・」
「！？」

「何！？本当か！？」
というと、ルークの視線が険しくなった。

「・・・まさか、お前・・・きずいてないのか・・・？」
睨んでくるルーク。

だが、レオンには全く心当たりがなかった。

「お・ま・え・の・こ・と・だ・よ。」
そつと耳打ちするルーク。

「・・・はあああああ〜！？」

絶叫するレオン。

クラス全員が注目する。

そして。

「レオン君、どうかしたの・・・？」
首をかしげるアリス

「いつ・・・いや！！、なんでもないぞおおアリス！！」
なぜか、アリスには知られなくなかった。

「どついう事だよ！ルーク！！」

「聞きたいのはこっちだ！！ていうか、周りの生徒がお前に向けて
る視線にきずいてなかったのか？」

そつえば・・・突き刺さるような視線を朝、アリスと登校している
時に感じたような・・・

「とつとにかく、その噂はでまかせだ！！」

「でもアリシア会長と行動してるのは事実だろう?。」

・・確かに、アリス絡みの事で一緒に居ることが多かった気がする。

「それは、アリス関係がほとんど・・・。」

「しかも!!お前はアリスちゃんとも仲がいい!。」

「うっ!!・・・だけど、それは・・・。」

違うと言おうとしたレオンの口がとまる。

ピンポンパーンポーン・・・

《1年A組、レオン・イル・エキテス君、至急、生徒会長特別室まで来てください。》

アリシアさんからの放送が入った。

・・・・・・

沈黙する教室。

「台無しですよ・・・アリシアさん・・・」
絶望するレオンだった。

生徒会長特別室は、普通入ることができない。理由は生徒会長自らが許可しないかぎり入れない、禁断の部屋だからだ。

因みに、生徒会長特別室に入ったことがある男子生徒は存在しない。

「ここが・・・あの特別室か・・・」

特別室の扉はとても荘厳だった。

コンコン・・・

扉をノックするレオン。

「ああ、レオン君ね、どうぞ入って。」

アリシアの返事が聞こえた。

ガチャリ・・・

「失礼しま・・・」

失礼しますと言おうとしたレオンは硬直した、いや、硬直せざるをえなかった。

そこにいたのは・・・

金色の髪をなびかせた少女だった。

「紹介するわね、こちら、ミルフェリーナ王国第2王女、ヴィクトリア・シア・ミルフェリーナ様よ。」

・・・

レオンは立ち尽くすことしかできなかった。

転入生はお嬢様！？ (前書き)

平穏な学校生活です！

しかし事件の予感が・・・

転入生はお嬢様！？？

……ミルフエリーナ王国・第2王女……？

「ふふっ……案の定、驚いているようね。」

「え……あ……いや……本物……？」
すると、金髪の少女が。

「私の事が偽者に見えるのか？」
実に男に似た喋り方だ……

「え……じゃあ、俺をここに呼んだのは……」

「ええ、ヴィクトリア様は、今日からあなた達のクラスの転入したのよ。だから、1-Aで一番信頼できる人に教室まで連れて行ってもらおうと思っただけあなたを呼んだのよ。」
「迷惑だった？と追加して。」

「い……いえ……ただ、本物の王女様を、俺なんかが……」

「大丈夫よ、ね？王女様？」

クスクス笑うアリシア、完全に遊んでいる。

「……アリシアよ、私をなめているのか……」
アリシアを睨む、ヴィクトリア。

「まさか、そんなことないわ。」

あきらかに親しいもの同士の会話だ。

「あの・・・会長・・・？もしかして会長は、この方と・・・」

「ええ、昔からの知り合いよ。」

！！

「そうだったんですか・・・ていうか、王女様と知り合いって・・・本当に何者ですか・・・会長は・・・」

「おい、レオンと言ったな。」

ヴィクトリアがレオンを見る

「はい！！・・・！！」

美人だ・・・

レオンはそう思ってしまった。

美しい金色の髪に赤い瞳。

「なんだ・・・人の体をジロジロ見て・・・」

頬を軽く染め、両手で肩を抱くヴィクトリア。

「い・・・いえ！！何も！！」

「私はお前などと一緒に居たくなどないが、アリシアが言うからには、責任をもって私を教室まで連れて行け。因みに、少しでも私に不埒な真似をすれば、即刻、打首だ。」

レオンを睨みつけて言う。

「う・・・分かりました、とりあえず教室まで俺がお連れします

「よ。」

よろしくね〜と笑っていたアリシアさんは放っておこう。

そして・・・

「え・・・ええ〜〜またまた、このクラスに転入生がやってきました・・・」

人生に疲れたような雰囲気と言う先生。

また!?

アリスちゃんに続いてまた?

えーだれだれ?

もりあがるクラスだったが、それに当てはまらない人物が二人。
レオンとエルシー先生だ。

「ななレオン、どんな子なんだろうな?？」
ウキウキしながら言うルーク。

「・・・・・・」

「ん?どうしたんだよレオン?暗い顔して。」

「すぐに分かる・・・」

「???首をかしげるルーク

「もしかしてレオン君、転入生と知り合い?」
アリスが問う。

ビクッ！

「おまえ・・・まさか・・・」
レオンを睨むルーク。

「え〜〜それでは、入ってきて、
「下さい」。」

え・・・敬語・・・？

クラス全員がそう思った。

カツン・・・カツン・・・カツン！

「ええー今回ここのクラスに転入してきた、
ヴィクトリア・シア・
ミルフェリーナ第2王女殿下です・・・」

・・・えええええー！！！！！！！！

そして。

「ヴィクトリアだ、よろしく頼む。」

クラス全員、誰も声を発しなかった。

休み時間。

「レオン・・・おまえはすごい奴だよ・・・」
レオンの肩を叩くルーク。

「・・・」

時間は経過し・・・

ある一人の女性徒が声をかけた。

「な・・・ねえ・・・ヴィクトリア様は・・・」

「ヴィクトリアでいい。」

え？

「そ・・・そう？じゃ・・・じゃあヴィクトリアは、魔法系統って何？
緊張した面持ちで話す女生徒。」

「魔法系統・・・？なんだそんなことか・・・水だ。」

「そ・・・そうなんだ・・・ありがとう」

レオンは正直驚いていた。

あのヴィクトリアが自分を名前で呼ぶように促したのだから。
そして帰りごろにはクラスの女子と完全に溶け込めていた。

そう・・・女子とは・・・

なんとヴィクトリアは男性恐怖症だった・・・

レオンは今特別室にいた。

「ふーん、やっぱり溶け込めたのね、クラスの女子とは。」

「ええ、やっぱり、あの人は・・・男性恐怖症・・・」

「その通りよ、あの子は昔、盗賊にさらわれた事があってね、それ以来・・・」

そうですか・・・とレオン

「引き続き監視よろしくね。」

「はい・・・」

そして、事件は起こる。

ヴィクトリアとレオン、そして、アリスやアリシアまでも巻き込む事件が。

—————次回予告—————

遂に明らかになるヴィクトリアの過去。

そして、それを知ったレオンがとる行動とは？

そして・・・レオンとアリスの前に、**「神器」**が現れる!?

次回、王女誘拐編

お楽しみに。

王女誘拐（前書き）

ヴィクトリアが誘拐されてしまった！！
愕然たる状況に驚くレオン達。

そして・・・ヴィクトリアを救う為、レオン達が立ち上がる。

王女誘拐

ヴィクトリアがルベリージャ学院へやって来てから三日がたった。相変わらずヴィクトリアは男子に近づくことしなかった。

そして・・・夜の学院を、そのヴィクトリアは一人で歩いていた。

「ふう・・・やはり、一人が一番落ち着くか・・・やれやれ、父上と母上にも困ったものだ、学院へ行って、多くのことを学んで来い・・・などと・・・」

結局、ヴィクトリアはこの学院へ来て、プラスになることはないなど実感していた。

「・・・・・・・・・・」

しかし、あのレオンという男だけは、少し気になっていた。

あのアリシアに一目置かれている存在だからだ。

しかし・・・

いたって、目立つところもない。

「なぜ、アリシアともあろうものがあんな男を・・・」

カサリ・・・

「・・・・・・・・ふん・・・賊か・・・」

「そこに隠れている愚か者よ、この私を、ヴィクトリアと知っての狼藉か？」

「愚か者とは、随分ないい様だ・・・それとも我等のことを忘れたと

でも言つきか？」

「何・・・？」

！！

「貴様ら・・・昔、私をさらった・・・」

草むらから出てきたのは、黒い戦闘服を着た数人の男達だった。

「そうだ、思い出したようだな・・・」

「ふ・・・そうか、なら、いまここであの時の仕返しをしてやる！！」

「わが元に顕現せよ、水の加護を受けし聖槍よ。流れ、瞬き、沸きあがれ！水真海皇槍《ロンギエールの槍》！！」

ヴィクトリアの周りに水の激流が顕現、それが、槍の形へと姿を変えた。

「ほう・・・宝具か・・・面倒なことになった・・・」

「その余裕が何時までもつか見ものだな！！」

「そうだな、確かに我等ではあなたと真正面からぶつかっても、勝てますまい。しかし、考えなかったのですか、なぜ我等が「ここ」でああなたの前に現れたのかを・・・」

「！？！しまっ！！」

にやりと笑う、男。

「残念でしたね、王女殿下。」

ヴィクトリアの周りの八方向から土の鎖が伸びてきた
それがヴィクトリアの足に絡みついた。

「くそ．．．!!」

男はヴィクトリアに近ずき、手刀をはなった。

ドン

「!?!?」

そしてヴィクトリアは意識をうしなった。

「回収しろ。」
了解。

「ふん、あつけないですね、王女殿下．．．」

そして朝。

「王女殿下がさらわれたですって!?!?」
アリシアは叫んだ。

「しまった．．．もっとちゃんと警備しておくべきだったわ．．．」

バタン!

「アリシアさん!?!」

生徒会室にレオン、アリス、ルークがなだれ込んでくる。

「ああ来てくれたのね、三人とも。」

「はい！もちろん！それで、ヴィクトリアは・・・」尋ねるレオン

「今、王国の方で搜索隊が出ているわ、でも、さらわれた原因は私たちにもある、それで私たち四人で搜索メンバーを作ることにした。」

「まず私、そして強力な魔力を持つアリスちゃん、一年でありながら宝具を顕現できるルーク君、そしてレオン君。このメンバーよ。」

「あ・・・あのアリシアさん三人は良いんですけど・・・俺は・・・」

「大丈夫よレオン君、あなたにも戦える。」
あの時、惑わしの森で見た・・・黒い魔法・・・アレがもしレオンの潜在的な力なら、このメンバーの中で・・・

「レオンにはこれを渡しておくから。」

「これは・・・剣？」

「ええ、その剣は風・・・つまり私が魔力を込めた魔法剣よ。」

「わかりました、ありがとうございます。」
ええ、と頷くアリシア。

「では、ルベリージア学院搜索隊、いくわよ！」

レオンたちはそれぞれ四方に分かれた。

そして、レオンは。

ザザザザザザ・・・

草むらを全力で疾走していた。

ヴィクトリア・・・勝手にさらわれて・・・死ぬなよ・・・

！！見つけた。

「噂では、黒い服を着た連中だったな・・・」

間違いない・・・あいつらだ・・・

レオンの50メートル程先に黒づくめの男が二人いる。

よし！！行くぞ！！！！

レオンは駆け出した。

「うおおおおおおお！！！！」

！？

男達もきずいたようだ。

さて、アリシアさん達には魔法で伝えたり、後は・・・

二人のうち一人がレオンに向かってきた。

「侵入者か・・・」

「ああ、わりいけどヴィクトリアは返してもらっせ。」

なら、やってみると呟く男。

男は魔法を使った、^ハ土魔法、エル・ティア・ウル・・・ストーン・フィンガー！！^ヾ

「甘い！！おおおおお！！」

レオンは空から降ってきた岩を全て切り裂く。

ザンザン！！

袈裟懸け切り。

切った岩を一瞥し進む。

！？

男もこれには驚いた。

レオンは剣術に関しては、トップクラスなのだ。

「その程度じゃ、俺は倒せないぜ。」

アリシアさん使わせてもらいます。

「はああ！！」

思い切り振りかぶり振り下ろす。

ドゥッ！！

なんと剣から風の刃が飛び出した。

「うあああッ！！」

「ふう、何とか一人目・・・」

さ次だ!!

進むレオン。

待ってるよ・・・ヴィクトリア・・・
心のなかでつぶやいた・・・

————次回予告————

少しずつしかし確実にヴィクトリアのもとへ近ずき、辿りついたレオンたち。

そして、レオンはヴィクトリアの真の過去を知ること・・・

「レオン、お前は私が始めて命を託した男だ、一緒に戦おう!!」

そして、もうひとつの危機がレオンとアリスに迫る。

《神器》と呼ばれる存在がレオンとアリスに立ちふさがる。

《終わりの少年と始まりの少女・・・あなた達は・・・進まなければ
ならない・・・》

次回、王女誘拐？

お楽しみに！

王女誘拐 ？（前書き）

ヴィクトリアを救う為、奔走するレオン達。

そしてヴィクトリアを確保した矢先、意外な真実が・・・！！

さらに、レオンの真の力の一端が顕現する！？

王女誘拐 ？

アリス、アリシア、ルークの三人は、レオンから魔法通信で情報を手に入れていた。

「二人とも聞いて、今、レオン君から、ヴィクトリアをさらって行った犯人らしき男達を見つけて、交戦状態に入ったとの連絡を受けたわ。」

「・・・レオン君・・・一人で大丈夫かな・・・」
心配そうに顔を曇らせるアリス。

「なあに、あいつなら大丈夫だろ、それにあいつは、剣に関しては超一流だからな。」
「たいして気にしていないルーク。」

「そうね・・・レオン君が負けるとも思えないけど・・・」
「気になることがある、とっているような顔をするアリシア」

「どうかしたんですか・・・？アリシア会長？」

「ええ・・・仮に強盗犯たちがヴィクトリアの前に現れたとはいえ・・・どうやってさらったのが気になって・・・ヴィクトリアは水系統のスペシャリスト、おまけに宝具まで使える天才なのよ・・・そのヴィクトリアをいともたやすく、誘拐するなんて・・・」

「なるほど、確かにそれはきになるな・・・」
「考え込むルーク」

とりあえず、と気合を入れるアリシア。

「ルーク君、あなた雷系統の力を持っているわよね？」

はい、まあと頷くルーク

「雷は速さを主に司っている魔法系統、なら、ルーク君の力で私たち全員をレオン君のところまで速攻で移動できない？」

「・・・確かに・・・行けるかも知れませんが・・・すこし、負担が掛かるけど、転移の力を使えば・・・」

「じゃあそれで行きましょう。」

レオンはその頃。

黒ずくめの男たちの二人目と戦っていた

「おおお!!」

剣を上から下に振り下ろす

ガキン!!

短剣で受け止める男。

ガン、キン、ガアン!!

剣と剣の打ち合い。

「クソッ・・・キリがねえ!!」

そこで、地面に剣を突き刺した。

「??？」

動揺する男

そして・・・レオンは、思い切り男のほうへ剣を振りぬいた、土を巻き込んで。

そう、レオンは土を相手に向け、目くらましを誘ったのだ。

「!??」

案の定、顔をかばう男。

「今だ!!」

思い切り剣を横になぎばらった。

剣が男のわき腹に直撃、気絶した。

「はあ・・・はあ・・・さすがに疲れたぜ・・・でも、休むわけにはいかないよな・・・」
立ち上がるレオン。

「あの洞窟だよな・・・たぶん・・・」

レオンの目の前に、謎の洞窟があった。

妙な存在感を放つ洞窟だ・・・

そう思うレオン。

「とりあえず、入らないとな。」

そう思い、洞窟に足を踏み入れたレオン。

ドクン……

「!?なんだ今の……」

それは、アリスと初めてであったり、魔獣たちと始めてであったときの感覚と似ていた。

???

そしてレオンは洞窟の入り口に何かの文字が書いてあるのを発見した。

「なんて書いてあるんだ……?」

その文字はなんと書いてあるのか、レオンには理解できなかった。

「ていうか……この文字、この世界の文字じゃないような感じが……」

と、キーン!!と頭に痛みが走る。

「なんだ……今の……」

!!!

「読める……読めるぞ……この文字……おかしいな、さっきは分からなかったのに……」

どれどれ……

「大いなる力から分かれたれし、絶対の〔神器〕、ここに眠らんと恐れるな……力を持って突き進め、自分を信じ疑うな、さすれば道は開かれる……なんだ?」

何を言っているのかレオンには理解できなかったが……

「……なんか、気になるんだよな……この文章、それに、この〔

神器って言葉・・・頭にくっついてはなれねえ様な、そんな感じがするんだよな・・・」

「!!、とりあえず、先にすすまねえと、ヴィクトリアを助けないとな。」

レオンはそう言って、先に突き進むのであった。

しばらく進むと、一人の男が待ち構えていた

「またかよ!!しつこいな・・・こいつらは・・・!!」

男もまた剣を構えた。

「大剣か・・・一撃でもくらえば終わりだな・・・
気を引き締めるレオン

と、その時

「レオン君しゃがんで!!」
!?

アリシアの声が響く。

レオンは慌ててしゃがみ込む

無論男はついていけない。

レオンのすぐ上を風の刃が通過した

「うああッ!!」

男に直撃、そして。

ズガン！！

壁に叩きつけられた。

「……もしかして……」
振り返るレオン。

「！！……アリス、アリシアさん、ルーク！！」

「間に合ったみたいだな！レオン！」

「ごめんなさい、遅くなつたわ。」

「レオン君、大丈夫？怪我とか……してない……？」

「みんな……来てくれたのか……」

あたりまえだろ、とルーク。

お前ばつかいい格好はさせないぜと、付け加える。

ああ……お前はそつち……

「これで、全員そろつたわ、みんな、行きましょう！！」
おお！

と、アリスが向かっている途中、質問を投げかけてきた。

「レオン君……洞窟の入り口に書いてあった、文字、見た……？」

「ああ、見たよ、それがどうかしたのか？」

「うづん・・・ちょっと・・・気になって・・・」

「でも、洞窟に書いてある文字なんて、気にするだけ無駄だぞ？」
うん、そうだよね・・・とアリス。

「全員、気を引き締めなさい・・・いるわよ・・・」
緊張した声音で告げるアリシア、そして。

おおきな洞窟部屋にでた。

！！！！

「ヴィクトリアー！！」
レオンが叫ぶ。

「ほう、ここまで、たどり着くとな・・・正直、驚いた・・・」
そう言う謎の男。

だが、今までの奴とは・・・気配が圧倒的に違う。
こいつは・・・

ヴィクトリアは、四角の形をした結界のようなものに囲まれ、宙に
浮かびながら意識をうしなっていた。

「さて・・・メンバーも全員そろったか・・・」
メンバー？

こいつ、なにを・・・

カチツ・・・
なんだ・・・???

そして、ヴィクトリアを昏倒させていた結界が解ける。

!!

ドサツ……

ヴィクトリアが地面に落下する。

「……う……わた……しは……ここで……何……を」
ヴィクトリアが目を覚ました。

!!

「どういつつもりかしら……？あなたは、ヴィクトリア第2王女を誘拐したかったんじゃないの……？」
アリシアが眉を顰める。

「いや、私の目的は、お前だ、ルーク……！」
男が叫ぶ。

!?

ルーク？……こいつ一体何を……

「やっぱり、おまえか……兄貴……」

「な……兄貴……こいつが、お前の……？」
呆然とするレオン。

「ああ、こいつは……俺の兄貴で……俺の妹を殺した男だ……！」
ルークが激昂。

……妹……？

「みんな……俺をこいつと、二人きりにさせてくれ……」

ルークは俯きながら呟く。

「な・・・なにいつてんだ・・・」

「レオン！！！！！！」

！！

絶叫するルーク。

ルークがここまで怒りをあらわにするのは初めてだった。

「頼む・・・」

「レオン君・・・行こう。」

アリスとアリシアが言う。

ヴィクトリアのもとへ駆け寄る、三人。

「お前達・・・すまない・・・私のせいで・・・」

「いいのよ、警備を甘くした、私にも責任はあるんだから・・・」
謝るアリシア。

そして・・・

「やっと、外にでられたか・・・」

呟くレオン。

「でも、いいのかよ・・・ルーク・・・」

「仕方ないわよ・・・きつと、複雑な事情なのでしょう・・・」

呟くアリシア。

「・・・あの男、ルークという奴の兄だったのか・・・」

「どっぴりで・・・」

？

「知っているのか？あの男のことを？」

「・・・ああ、昔、王室の政策がひどかった時期があって・・・その時にたてついた庶民がいたことがあったらしい。そいつが・・・あの男なのだ・・・」

そして、と続けるヴィクトリア。

「その時あいつが我等の家のものに失礼なことをしたことがあるらしくてな・・・あいつが処刑されるかわりに奴の父親がかわりに殺されたという事故があったのだ・・・無論その時は・・・」

「今は亡き、アシド王がこの国を治めていたときね・・・」アリシアが言う

ああと頷くヴィクトリア。

「なるほどな・・・その殺された父親がルークの家の人間だったというわけか・・・」

呟くレオン。

・・・

沈黙するレオン達。

「ルーク君、かわいそう・・・」

アリスが呟く。

「……そして、王国の捜索隊が到着・ヴィクトリアをつれて帰ろうとしたが・ヴィクトリアがそれを拒否した。」

「少し・考えたいことがある」といって、どこかへ行ってしまった。

「探したぜ・ヴィクトリア・」
レオンが言う。

「なんだ・お前か・」

「なんだってそりゃあねえだろ？」
ヴィクトリアから少し離れて、腰を下ろすレオン。

「アリシアとアリスはどうした？」

「ああ、捜索隊の人達と何か話してるよ。」
そうか・と呟くヴィクトリア。

「私は昔・家では落ちこぼれといわれていたのだ・」
？

「おちこぼれ・？ヴィクトリアが？」

「ああ、無論私とて、天才という部類には入っているのかも知れぬ・
だが・私の家の中では、そうでもなかった・代々ミルフェリ
ーナ王室のなかには、星鏡世界最強と言われるほどの宝具使いが存在
することが結構あってな・」

確かに・・・そういう人達が、存在していたことは確かだ。
現在、ルシアーデ王国との戦争を回避できているのも、現、国王、
アリウス王が世界最強と言われるほどの宝具使いだからだ。

「それゆえに、私は、王室の中では・・・」

「そんなもん、関係ないじゃないか。」

「え・・・」

「だって、そうだろ、ヴィクトリアはヴィクトリアだろ？他人のことなんて関係ないだろ。」

「お前、私を励ましているのか、バカにしているのか・・・？どっちだ？」

「バカになんてしてねえよ・・・俺はただ・・・」
レオンは最後まで言葉をつむぐことができなっかた。

「きゃああああ！！！」

！！

「アリスの声だ！！！」

「本当か！？」

「行こう！！！」

そこには、アリスが土のゴーレムと向かい合っていた。

「アリス無事か!？」

「レオン君!、私は大丈夫でも・・・ルーク君が・・・」

ルーク?

!!

「ルーク!!」

ルークは兄の肩にボロボロの姿で担がれていた。

「ふん・身内相手に宝具は使わん・・・などと言っからこつなるんだ・」

まさか・・・あいつ・・・宝具を使わずに・・・?

「てめえ・・・ルークを離しやがれ!!!」
叫ぶレオン。

「ところで・・・アリスはどうした?あいつがいれば、この局面も切り抜けられるだろうに。」

「アリスさんは捜索隊の人達と学院へ今回のことを報告しにいったの。」

成る程な・・・道理で・・・

「そうか・・・なら・・・」

ヴィクトリアのしゃべりが中断。

ズガン!

地面を裂いて、ゴーレムの腕が出現、アリスを掴み、地面へ引き摺り下ろした。

「アリス!!」

「いやあああああ!!」

「アリスー!!」

「貴様何をした!?!」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「ふん、さっきのあいつとルークを取り戻したければ、さっきの洞窟へ来い。だが、こいつらと遊んでからな。」

すると、地面から、小型ゴーレムが十体飛び出してきた。

!!

こいつら・・・

そしてあの男も地面の中に沈んでいった。

「くそ・・・逃がすか、わが元に顕現せよ、水の加護を受けし聖槍よ、流れ、瞬き、沸きあがれ、ロンギエールの槍!!」

ヴィクトリアの周りに水があふれ、それが槍を形作る。

「あれが、ヴィクトリアの宝具・・・!!」

「はああああ!!」

槍を縦横無人に振り回す。

それはまるで、舞を舞っているようで、隙もまったくない動きだ。

「すごい・・・」

と、レオンの後ろに・・・

「おい、呆けているな!!レオン!!!!」

!?

ダン!!

「え・・・」

レオンが見たものは、ゴーレムにきずかず、呆けていたレオンをゴーレムの攻撃から守り、代わりに攻撃を受け、倒れるヴィクトリアの姿だった。

「・・・ヴィクトリア・・・」

「き・・・さ・・・ま・・・私・・・に見とれるには・・・かまわんが・・・周りを・・・注意して・・・おけ・・・」

「!!!!!!」

俺が・・・俺が、呆けていたばかりに・・・俺が・・・!!!!

「・・・」

「お・・・い・・・レオンどうした?」
だまって立ち上がるレオンそして・・・

「お前・・・たち・・・ゆる・・・さ・・・ナイゾ・・・」
「ああああああああ!!!!!!!!!!」

絶叫。

その時、レオンの体から、漆黒の魔力が全方位に展開。

「オ・・マ・・ラ、ユルサナイ・・・オオオオオ!!!」

「ヨクモ・・俺ノ・・ナカマを・・・」

「な・・なんだこれは・・・?なんという禍々しい魔力だ・・・こんな力が・・レオンに・・・」

レオンの手に魔力が集中。

そして、それが漆黒の剣となった。

「オオアアアア!!!」

一瞬でゴーレムの前に移動。

ズアン!!!

ゴーレムを切り裂いた。

そして、同じように、四体を全て切り裂く。

ザンザンザン!!!!

そして、レオンの姿が消える。

「!?!レオンの奴・・どこへ・・!!!、上か!!!」

ヴィクトリアの目をもってしても、姿を追うことはできなかった。

そして・・・

「ソウダ・・・、スベテを・・黒に・・ヤミに・・ソメロ・
・・・。」

漆黒の魔力がレオンの手に更に集中。

レオンが両手を地面に向けて突き出す。

「黒滅魔法・・・スリサズ・・・アーク・・・アルメタ・・・カルドラ・・・
エールギアス・・・暗黒魔道撃^ハデッド・・・ヘル・・・アンビシャス^ヱ」
レオンの手から強大な魔法陣、この辺一帯、つまり・・・半径三キロ
ほどの魔法陣が顕現。

「大きい・・・なんだ・・・こんな膨大な力・・・始めて見る・・・！」

「タイ・・・シヨウを・・・ゴー・・・レムに・・・限定・・・消し・・・トベ。」

そして、レオンの魔法陣から、膨大な魔力の砲撃が放たれた。

「・・・・・・・・けほっけほっ・・・・・・・・なんなのだ・・・・・・・・今は・・・・・・・・？」
！！

「レオン！！！」

レオンは仰向けに倒れていた。

ヴィクトリアが駆け寄る。

「う・・・・・・・・ヴィクトリア・・・・・・・・？無事だったのか・・・」

「こちらの台詞だ・・・！なんだ今は・・・・・・・・お前の力なのか・・・」
「？」

??

とその時……

「うわああああ！助けてくれー！ー！」

「！？」

洞窟から出てきたのはさっきの男だ。

「お前……！！！」

「助けてくれ！頼む！！！！！」

「ど……どうしたんだ……何か様子が……」
困惑するレオン。

そして……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……
地鳴りそして……

ズガアアアアアアアン！！！！！！

地面からなにかが出てきた。

！？

なんだ……こいつは……？

レオンとヴィクトリアは同時に思っつ。

「我は……絶対の〔神器〕……大いなる十の内の一体……エグザリオ……さあ……我と……戦え……運命によって……選ばれた、者よ……。」

――次回予告――

突然現れた、謎の存在、〔神器〕エグザリオとレオンたちは、この正体不明の存在を退けることはできるのか？

そして、ヴィクトリアとレオンが始めて、エグザリオを前に戦場でお互いの背中を預けあう。

「レオン、お前は私が初めて命を託した男だ、共に戦おう!!」

「ああ!!」

そして、遂にアリスにも、変革の時が迫る!

《アリス……あなたは、この世界を変える存在……だから、教えてあげる……あなたに秘められた力の一端を。そして……あなたの宝具……いいえ……〔神具〕の名前もね……》

王女誘拐 ？（前書き）

突然の乱入者に驚くレオン達。

神器といわれる存在が現れて大ピンチ！

そして、アリスの力が発動して・・・！？

王女誘拐 ？

「我は・・・絶対の《神器》・・・大いなる・・・十の内の一体・・・エ
グザリオ・・・さあ・・・我と・・・戦え・・・運命によって・・・選ばれた・・・
者達よ・・・」

・・・

「なあ、ヴィクトリア・・・」

「なんだ・・・」

「こいつ・・・何・・・」

私に聞くなと呟くヴィクトリア。

突然現れたそいつは、異様な図体だった。

一言で表すと、ペガサスに近い、だが、色が翼と足が茶色、胴体は
緑というなんとも異様な姿だった。

そして、胸の部分に妙な紋章のようなものが刻み込まれている。

「おい・・・きずいていると思うが、こいつの魔力、尋常なものでは
ないぞ・・・」

緊張した面持ちで言うヴィクトリア。

「ああ・・・わかってるよ・・・」

魔力を感知するのは苦手なレオンでも、はっきりと感じ取れるほど
の魔力だった。

先ほどから、肌がビリビリしびれてきている。

そして、その時に、レオンは妙な感覚を得ていた。

・・・なんなんだ・・・この感覚・・・まるで、宿命の敵と出会った
ときのような感じた・・・しかも今まで、何度も、戦ってきたような
・・・

「おいレオン・・・こいつ、さっきから殺気をバンバン向けてきてい
るんだが・・・」

「！！・・・確かに・・・遊んでいる暇は、なさそうだな・・・」

「お前達が・・・我と・・・戦うか・・・？」

「ああ・・・なんだか、わかんねえが、お前とは、戦わなきゃいけな
い気がするんでな」

「では・・・参る・・・！！！」

駆け出すヴィクトリア。

「あ！待てよ！！！」

剣を構え、進むレオン。

「はあああああ！！！」

ヴィクトリアは横に回り込み、思い切り足に槍を叩きつける。

ガキン！

！？

「ばかな・・・弾かれただと・・・？」

「おおおおお！行けええええ！」

思い切り剣を振り下ろし、風の刃を飛ばすレオン。

キン！

弾かれた。

「うそ・・・だろ・・・アリシアさんの力なんだぞ・・・？」

「その・・・程度で・・・我を・・・倒すか・・・？下らん・・・では・・・こちらから・・・参ろう。」

キンキンキンキン・・・

エグザリオの頭上に、緑の魔法陣が五つ展開。

！？

「・・・土魔法・・・高位・・・詠唱・・・」

「！！・・・こいつ・・・高位詠唱を使うのか・・・！？
まずい逃げると叫ぶ、ヴィクトリア。

「！！！！！！」

「シリス・・・エグローテ・・・ミエル・・・ウドロット・グレイブ」
五つの魔法陣から土の「針」が数え切れないほど顕現。
一本一本が柱のように大きい。

「やばいやばいだろこれは！！！！！！」

「レオン、私の後ろに！！」

すばやくヴィクトリアの後ろに隠れるレオン。

「ロンギエールの槍、防御水壁、顕現・・・ウォーター・・・エリクシル
！！」

そう叫んだ瞬間、水が何重にも壁を作る。

ズンズンズンズン・・・
次から次へと水の壁にドロット・グレイブが刺さっていく。

「レオン！私の盾もそう長くは持たん！さっきの力をもう一度使え！！」

「？さっきの力・・・？」

「そうだ！！さっき使った黒い魔法だ！！」

え・・・黒い魔法・・・？

何だよ・・・それ・・・

ドクン・・・

「そんなもの知ら・・・」

ドクン・・・

いいころだ・・・なあレオン・・・今度は己が意志で・・・その力を制御できると良いな・・・どこからか、そんな声が聞こえた気がした。

そのころアリスは意識を失い、ハ夢ヱを見ていた。

「何・・・ここは・・・」

アリスがいたのは、全てが真っ白な世界だった。

おまけに50メートルほど先には、真っ白な城が建っている。

「何・・・何なの・・・」

《やっと・・・たどり着いてくれたのね・・・アリス》

「!?!?・・・誰・・・?」

そこにいたのは、黒い長髪をなびかせ、背中から、白い翼と黒い翼を片方ずつ生やした女性が立っていた。

《私・・・私のことが知りたいの・・・?・・・まあいいわ・・・答え
てあげる・・・私はあなた。》

え?

クスクスと笑う女性。

《私はあなたであり、あなたでなき者、そして・・・光と闇、その狭
間に立つ者・・・そう言えば分かる・・・?》

「何を言っているの・・・分からない・・・」

《いいのよ、分からなくとも、今はね・・・それに私は・・・あなた
と、お喋りをしにきたわけじゃない・・・教えに来たの・・・あなたの
ことをね》

教える?

《アリス、あなたは、世界を変える存在・・・だから教えてあげる・・・
あなたに秘められた力の一端を・・・そして・・・あなたの宝具・・・い
いえ・・・「神具」の名前をね。》

「私の力・・・?神具・・・?何それ・・・?」

きずけば女性がアリスの頭に、手をかざしていた。

!?

《大丈夫・怖がらないで・あなたに・教えるだけだから・
終わりの少年と始まりの少女・あなた達は・進まなければなら
ない・全てが始まった場所・そして・永遠の『』が眠る場
所・あらゆる事象の原点・そう・『魔鏡の庭園』へとね・》

「????」

《そのために・あなた達は・生まれてきたんだから・》

《そして・これこそが・あなたの神具・再生の白王剣》

「なのだから・》

アリスは自分の中に純白の剣を見た気がした。

そして、アリスは意識を失った。

その中で・

《お行きなさい・運命によって選ばれた者よ・》
そう聞こえた気がした・

「レオン急げ!!」
ヴィクトリアが叫ぶ。

んなこと言ってもよ・
「覚えてないんだよ!!」

「ならば思い出せ!!」

無茶言うな！！叫ぶレオン。

「いいか！？魔法というのは単なる力ではないのだ！魔法とは宝具と同じく、己の心の中で描いた奇跡を、この世界の魔力を使い顕現させることをいうのだ！・・・心を見る、レオン！！お前が先ほど使った力は、恐らくお前の心の何かだ！！・・・それを見極めろ！！」

「己の心・・・？」

そうして、レオンは目をとじた・・・

真っ暗だ・・・そりゃそうか・・・目を閉じてるんだもんな・・・いや・・・違う・・・こうじゃない・・・心を見る・・・自分の一番奥深く・・・心の深淵を・・・

そしてレオンの耳から何も聞こえなくなる。

邪魔な雑音は消し去れ・・・今必要なのは・・・自分の中を見ること・・・外との接続を解除しろ、中だけを見渡せ・・・

ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・

そして・・・レオンは、自分の中に、漆黒の剣を見た気がした・・・

「これが・・・俺の力の・・・象徴・・・」

「・・・！！！！」

「見えたぜ・・・ヴィクトリア・・・サンキューな・・・！！」

「!!!べつ・・・別にお前のためではない!!!、早くこの状況を脱したいだけだ!!!」
頬を真っ赤に染め叫ぶヴィクトリア。

しかし、すぐに。

「ぐ・・・レオン・・・急げ・・・」
苦しむヴィクトリア。

「わかった・・・」
魔法とは、己が心で描いた軌跡を、魔力を使い顕現させることを言うのだ・・・

「己が・・・心で・・・描いた・・・奇跡・・・」
ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・!!!
漆黒の剣・・・アレが示すのは・・・?
黒・・・黒色・・・それは・・・夜・・・?
いや・・・それが示すのは・・・《闇》だ・・・!!!

レオンの中で、何かが変わった・・・

キュアアアアアア・・・

「!!!・・・その魔力は・・・!!!」
目を閉じているレオンから、黒い魔力があふれ出ている・・・

「・・・そうか・・・やっと分かった・・・俺の、魔法系統・・・俺の魔法系統は・・・闇だったんだ・・・」

瞠目するヴィクトリア

「や・・・闇・・・闇だと・・・？あの・・・終焉を司るといわれる・・・伝説の系統・・・？」

「ああ・・・俺が今まで、無意識状態で使っていたのは・・・これだったんだ・・・」

レオンの目からなぜか、涙が流れる。

「ありがとう・・・ヴィクトリア・・・お前のおかげで・・・この状況を突破できる・・・」

！？

ヴィクトリアは不覚にも、レオンにときめいてしまった。

「行くぞ・・・エグザリオ・・・」

ギユオオオオ・・・

レオンの手に漆黒の剣が、出現。

「貴様・・・その力は・・・そうか・・・お前が・・・」

「うおおおおおー！！」
失踪。

「は・・・早い・・・」

調度その時、ヴィクトリアの魔法が解ける。

「はっ！！」

跳躍。

一気に20メートルほど上に飛んだ。

「！？・・・なんという跳躍・・・それに・・・なんという魔力・・・」

「はあああああー!!」

レオンは、手に顕現している漆黒のオーラの剣を叩きつける。

しかし、同時に、エグザリオの魔力障壁が展開。

二つが衝突。

ドゴン!!

辺りに衝撃波を撒き散らす。

「くう……!! なんとという力同士のぶつかりあいだ……」
衝撃波だけで、吹き飛ばされそうになるほどだ。

まるで、神と悪魔が戦っているように、ヴィクトリアには見えた。

ガン、ギアン!!

「おおおおおー!!」

地上に着地し、足を切断する。

ザン!!

「くおおおおお……おのれ……人間……」

「切ったのか……? 私の宝具を軽々と弾いたあの足を……」
呆然とする、ヴィクトリア。

「!! そうだ……何を呆けているのだ……私も……私もレオンに加勢せねば……」

立ち上がるヴィクトリア。

「なめるな・・・小僧・・・！、おおおお・・・！」
エグザリオから莫大な魔力が放出。

「我は、神の眷属だ・・・なればこそ・・・我には・・・絶対のちからが・・・ある・・・」

エグザリオの体が発光、そして空へと浮上した。

「な・・・」

そのときに、上から巨大な岩が迫ってきた。

「くそ！はああ！！」
ガン！

切断。

しかし、岩に隠れて先ほどの、ドロット・グレイブの一本が迫ってきた。

「しま・・・！」

その時。

「我は求めん、古の潤いを、叡智の恵みを・・・さあ・・・我の元へ集い、解き放て！！」
「アクア・キングセル・ミグフィース！！」

「いけええ！！」

ヴィクトリアは、莫大な力を槍の先端に溜め、そのまま、先端をドロット・グレイブに向け、撃った。

ズアアアアアアン！

レオンに当たるはずの攻撃が消滅。

凄まじい、威力の高圧水流が、ドロット・グレイブを打ち抜き、消滅させた。

「！！今は……」
トン……

！！
ヴィクトリアがレオンに背中を預けてきた……

「レオン、お前は私が始めて命を託した男だ……！共に戦おう！」

「……ああ！！」
微笑むレオン。

「でも……どうすれば……」

エグザリオは空高く舞い上がり、魔力を溜めつづけていた。

その時……

「レオン君！！」
アリスが走ってくる。

「アリス！！無事だったのか……！」

「うん……それより、レオン君……アレ……」

「ああ、なんとか攻撃をしたいけど……高すぎて、届かないんだ……」

「

落ち込むレオン。

「大丈夫、私なら届く。」

え？

バサア・・・

その時、アリスの背中から白い翼が顕現。

「これは・・・!？」

ヴィクトリアが驚く。

「アリス・・・お前・・・」

うん、と頷くアリス。

「レオン君・・・行こ。」

アリスが微笑み、手を差し出す。

レオンには、アリスが天使に見えた。

「行け、レオン・・・お前は進め、そして、あいつを倒して見せる！

！」

力強く告げるヴィクトリア。

「分かった。」

そして、レオンは、アリスに抱えられ、空中のエグザリオの元へ向かう。

「な・・・なんだと・・・？・・・光と闇が・・・手を取り合うだと・・・？馬鹿な・・・ありえん・・・!！」

始めてみせる、エグザリオの狼狽。

「ならば・・・我が・・・その絆・・・打ち砕いてくれる・・・」

「超神星魔法・・・宝墳のエグザリオ！！」

莫大な魔力の塊を纏ったエグザリオ、つまり・・・エグザリオそのものが、隕石の如く迫る。

「おい・・・あれは・・・まずいだろ・・・」

「ううん・・・大丈夫だよ・・・私とレオン君が・・・ここにいるんだから・・・」

微笑むアリス。

・・・

「ああ・・・そうだな・・・」

そして。

「発動・・・光煌魔法・・・閃光想波（ライト・オブ・ジャスティス）」

アリスの周りに、三つの魔法陣が顕現。

それらが、共鳴しあい、ひとつになり、光の砲撃を放った。

ギョオオオオオオン！！

頭上のエグザリオと激突。

「グアア・・・！！ばかな・・・私の障壁を・・・」

そして。

「レオン君今！！」

「ああ、行くぜ・・・おおおおおおお！！」
もつとだ・・・もつともつと・・・魔力を・・・集めるおおお
お！！

レオンの手に強大な大きさの、漆黒の剣が顕現・

ついに、エグザリオを抜いた。

そして、自然落下のエネルギーを見方につけ、落下。

「おおおおおおお！！終わりだ、エグザリオおおお！！」

ズアン・・・パキン・・・

エグザリオの体が引き裂かれる。

そして・・・エグザリオの体内に埋まっていた宝玉が割れた。

グウオオオオオオオオオン・・・

そして、エグザリオは消滅した。

激戦そして平穩（前書き）

ようやく平穩が戻ってきたレオン達、しかし・・・どうやらレオンやアリスの知らないところで、謎の存在が動き始めたようで・・・

激戦そして平穩

神器エグザリオとの決戦そして、ルークの一軒が解決して、2日がたった。

ルークは、ミルフェリーナ王室の人間と会談を行い、ミルフェリーナ側がルークとその兄、フェオル・ブリトニーに謝罪を行った。

「いやゝすまなつかたわね．．私が学院へ行っている間にそんな事があつたとは．．しかも、レオン君とアリスちゃんがまさか．．闇の属性と光の属性を持っていたなんて．．これはもう、偶然の一言では、かだつけられないわねゝ．．」

そう、レオンとアリスが太古に消滅したとされる伝説の属性だったことに、ミルフェリーナ王室は驚きを隠せないようだった。

今は、この二人の様子見ということ、学院をやめさせられるという、最悪の事態を回避した．．最もヴィクトリアの援助があつたからこそ、成功したのだろうか．．。

無論、このことを知っているのは、国王を含む極一部の人間だけなのだが．．．。

しかし．．まだまだ謎が多い属性の為、身体検査や魔力検査など、基礎的な検査は行った．．結果は．．．．．

「検査の結果をお伝えする。」
白衣を着た男が告げた。

現在レオンたちがいるのは、生徒会長特別室だ。
メンバーは、レオン、アリス、ヴィクトリア、ルーク、アリシアの
5人。

「結果、身体に異常なし、魔力数値も正常・・・しかし・・・」

「ん？どうしたのだ・・・？先を言わんか。」
ヴィクトリアが告げる。

「は・・・そ・・・それが・・・宝具測定の結果なのですが・・・」
この国には、宝具測定ができる技術が存在する。

宝具測定とは、その人間の中、つまり心のイメージを取り上げ、具
現化することができる技術だ。

通常の間人なら、誰でも判明するため、この国では一般の行事とな
っている。

「それが・・・レオン様とアリス様二人の心のイメージ・・・つまり・・・
心の内側に介入できませんでした・・・それどころか・・・宝具の反応
が・・・ありませんでした・・・」

.....

これには全員啞然とした、普通、魔力を行使できるものならば、必
ず宝具の元となる、ものは存在している。

顕現できるようになるかは、分からないが・・・

心があるつまり、人間ならば、必ず宝具の反応があるはずなのだ、
それが無いと言う事は。

「馬鹿な！ありえない！！宝具反応がないだと・・・！？」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「じ・・・事実です・・・！間違いなく、お二人には宝具の反応がないのです・・・しかし・・・」
男が言葉を濁す。

「なんだ！！早く言え！！」

「は・・・はい・・・それが・・・確かにお二人には宝具の反応がありませんでした・・・しかし変わり・・・といえるかは分からないのですが・・・
・お二人ともに、何かのエネルギーのようなものが、あると・・・わかりました・・・」

「エネルギー・・・？」
「なんだよ・・・それ？」

「はい・・・介入が拒まれた為に・・・はつきりとはしていないのですが・・・ある強大な力の集合体のようなものが・・・お二人の心の中に存在していることがわかりました。」

「強大な力？」

ヴィクトリアが首をかしげる。

「はい・・・宝具測定には、魔力検地装置が必要です・・・そして、その装置には、その人間が本質的に秘めている魔力を測るためのメーターがついているのですが・・・お二人のその力の魔力測定を行ったさい、そのメーターが振り切れたのです・・・振り切れそうになった・・・
・というのならば、過去に、生きておられた、現国王、アリウス様

の母君・・・シャルデア様るときに一度だけあつたのです・・・ですが・・・」

「完全にふりきれたことはなかった・・・ということですね？」
アリシアが尋ねる。

「はい・・・シャルデア様は、現国王のアリウス様をも超える宝具使いでいらっしやいました・・・しかし・・・そのシャルデア様でも、メーターが振り切れる事はありませんでした・・・」

「つまり・・・まさか・・・レオンとアリスは・・・祖母上を・・・超えるほどの魔力の持ち主ということか・・・？」

「はい・・・それどころか・・・この世界を、作り出すに足る魔力、つまり、この世界を導くほど・・・いわば、神と同列の力を持っていると、判断されました・・・」

・・・

全員啞然としている・・・

結局、その日は解散することになった・・・
レオンとアリスは二人で話し合うことにした・・・

「大変なことになったね・・・レオン君・・・」

「ああ・・・そうだな・・・」

・・・

「私ね・・・気を失っているときにある人と会ったの・・・その人がね、私の力を、教えてあげるとか・・・あなたの「神具」の名を教えてあげるとか・・・いろいろ・・・言ったの・・・」

??神具?

「なあ、神具つてなんだ・・・?」

「わからない・・・でも・・・自分の心の奥底を見たとき・・・純白の「剣」が見えて・・・」

!? 剣!?

「ちょ・・・ちよつと待て・・・自分の心で・・・剣を見た・・・?」
レオンの頭の中にヴィクトリアの台詞がよみがえる。

「魔法とは、己の心で描いた軌跡を、魔力を使い顕現させるもの・・・つまり、黒いあの魔法を発現させているのは、お前の心の何かだ。」
確か、こんな感じに言っていたような・・・

そして、レオンは自分の力の根源・・・つまり象徴を見た・・・その時レオンが見たのは漆黒の「剣」だった・・・アリスが自分の中で純白の剣を見て・・・俺は漆黒の剣を見た・・・?

それって、まるで・・・いや、考えすぎか・・・。

ボタン!!

「レオン!!皆でパーティーをやるらしいぞ!!今すぐ来い!!」
そういつて、ルークは出て行ってしまった・・・

「はああああ・・・」
苦笑するレオン・・・

「行くか・・・」

「うん！」

微笑むアリス。

そう、俺達が望むのは・・・ただ、こうして、みんな・・・。

そして・・・。

「あなたが期待しているあの二人・・・エグザリオを倒したみたいよ・・・」

「ふん・・・エグザリオ如き、倒せなくては困る。」
つまらなそうに呟く男。

「さあ・・・早く私の元へ来い・・・レオン・・・私は、お前をこんなに待っているのだから・・・」

「あなた・・・本当にあの、レオンって子に執着してるのね・・・」
あきれ女性。

「あたりまえだ・・・レオンと私は、元々ひとつ、私は・・・レオンに全てをかける・・・」

「でも、その前に・・・私はそろそろ・・・行動に移るわね・・・」

「そうか・・・まあかまわんよ・・・それより、我ら、聖七騎士団も、そろそろ・・・活動の時のようだな・・・鍵と神器をそろえ、あの庭園へと、たどり着き・・・世界を統べるのは・・・果たして・・・光か闇か・・・楽しみだ・・・ククク・・・」

—————次回予告—————

大きな一戦が終わり、再び、平穏な日常へ戻ってくる事ができたレオンたち、しかし・・・またもや大事件が発生!!

ミルフェリーナ王国国王が、ヴィクトリアを救ってくれた礼をしたいと、レオンを城へと呼び寄せる!!

「はじめまして、レオン・イル・エキテス君、俺はアリウス・フィレス・ミルフェリーナだ、以後、お見知りおきを・・・」

そして、城にしばらく滞在することになったレオン、そして、レオンの前に最強の炎使いと名乗る男があらわれ、戦うことになったレオン、さらには、そこにヴィクトリアも加わり・・・!?

次回、ミルフェリーナ城、お楽しみに。

ミルフェリーナ城（前書き）

ミルフェリーナ城に呼ばれたレオンとヴィクトリア。

何故呼ばれたのか二人には理解できずにいたが、この事象が、レオンに新たな道を示す。

ミルフェリーナ城

ある時・・・ルベリージャ学院に、ミルフェリーナ城から大使がやってきた・・・その男は、こう述べたのであった・・・

「ルベリージャ学院所属、レオン・イル・エキテス殿、第二王女、ヴィクトリア様、至急、ミルフェリーナ城へ参られよ。」
学院は騒然となった、一国の王が、一学生を城に呼ぶなど、前代身門だったからである。

そうして、レオンは、ヴィクトリアと共に、ミルフェリーナ城へと行く事になったのだった・・・

時は少しさかのぼり・・・ここは、ミルフェリーナ城・・・王の間と呼ばれるところだった。

「ふふふ・・・さて・・・これから、面白くなるな・・・」
ある男が呟いた。

「しかし・・・このような事をして・・・良いのでしょうか・・・」
一人の女が呟く。

「なに・・・かまわんだろう、母も父も、今はここにはいない事だしな・・・」

「ですが・・・」

心配しすぎだと男。

「それに・・・見てみたいんだよ・・・ヴィクトリアが俺以外の男を認めるなんて、すごいことだから・・・」

「そうですね・・・では・・・」

「ああ・・・そのレオンとか言う奴を、この城に呼べ・・・そう言えば・・・そのレオンという奴は、闇の力を持っているのだったな？」

「はい、左様にございます・・・」

「なら、なおさらだ・・・一度、手合わせもしてみたい・・・確かめてやる・・・この、『炎皇の宝具使い』である、この・・・俺がな・・・」

「ニヤリと唇を歪める男。」

「は・・・仰せのままに・・・アリウス・フィレス・ミルフエリーナ様。」

レオンは、馬車の中にいた。

「しかし・・・なんで俺なんかが、城に呼ばれるんだよ・・・」

「知らぬ・・・我が兄・・・いや！、王が考えることは、私にも分からん！！！」

レオンの目の前には、ヴィクトリアが座っていた。

一国の王女と馬車の中で二人きりという、ルークが聞けば羨ましが
る状況なわけだが、レオンにとっては・・・拷問でしかなかった・・・

「それにしても・・・俺なんかが、ヴィクトリアと二人きりで馬車とはな〜」

平然と言うレオン

「そ・・・そうだな・・・」
なぜか、頬を染めるヴィクトリア。

「なあ、アリウス王ってどんな人なんだ・・・？・・・最強の宝具使
いってのはしってるんだけど・・・」

「え・・・？・・・ああ、アリウスのバカ兄・・・いや違う！！・・・わが
国の王は、とても・・・バカ・・・いや！！、とても・・・その・・・
何といえ、いいのだ・・・」

？

「言えないのか・・・？国家秘密とか・・・」

「！！・・・そうなのだ！あまり他人に口外するような、事ではない
のでな・・・！」
慌てるように告げるヴィクトリア。

「そっか・・・ま、着けば分かることだしな・・・」

こうして、レオンたちはミルフェリーナ城に到着した。

正門を通り、城下町を進み、いよいよ城が近くなっていた。

因みにアリスは呼ばれていなかった為、行くことはできなかった。

なんだか・・・かなりショックを受けてたみたいけど・・・何でだっ

たんだろ・・・

「しかし・・・でけえ城だな・・・」
城か・・・あの真つ暗な闇の世界で見た城も・・・同じくらいの大きさだったな・・・

レオンが見上げるほど・・・高い城だった、本城の周りに、四本の塔が立っている。

それぞれ、一本一本の塔ごとに、妙な紋章が描かれている、そして、本城にも、紋章が描かれていた・・・

「なあ、ヴィクトリア・・・あの、塔や城に記してある紋章はなんだ？」

「ああ・・・あれは、ペンタゴンの紋章だ、それぞれ、北の青が水、西の黄色が雷、南の薄い空色が風、東の茶色が土、そして・・・本城の赤は炎を示しているのだ」

「へえ・・・でも・・・なんでこんなもんを・・・？」

「ん？・・・それは、この城の地下に遺跡があつてな・・・その影響だ。」
ふーん・・・遺跡ね・・・と呟くレオン。

「とりあえず・・・中に入ろう。」
ヴィクトリアが門に近ずき、そこにいた男たちに目を合わせると・・・

「おかえりなさいませ！ヴィクトリア様！！」
と門を開けた。

城の内部は凄かった。

真っ赤な絨毯が引かれた長い長い廊下を二人であるく．．．そして、巨大な扉があるところにたどり着いた。

「この先が、アリウスのいる、王の間だ．．．そこまで、気を使う必要はないから．．．普通にいろ．．．」

「え．．．？そうなのか．．．？でも、王と云つからには．．．」

「．．．．．まあ．．．入れば分かる．．．．．」

肩を落とすヴィクトリア。

ギィィィィィィィィィィ

錆びた音を響かせ、扉が開く。

そこにいたのは、広い部屋に一人で、王の椅子に座っている、一人の男だった。

「やあ．．．まつたよ、．．．はじめまして、レオン・イル・エキテス君．．．俺は、アリウス・フィレス・ミルフエリーナだ．．．以後．．．お見知りおきを．．．そして久しいな．．．我が妹よ．．．」

．．．．．若い．．．？いや．．．それに．．．今．．．妹．．．？

「はは．．．やはり．．．驚いているようだね？」

笑う男。

「ど．．．どういふことだよ．．．ヴィクトリア．．．王にしては．．．若

すぎじゃねえのか……？
呆然とするレオン。

「……そうだ……レオン……こいつこそが、この国の王、我が兄……アリウスだ……」

「あ……兄イイイイ！？」
叫ぶレオン。

「ふむ……こいつとは……そんな言い方しなくてもいいじゃないか……？我が妹よ……そんなふうに育てた覚えは、俺にはないぞ？」
首をかしげるアリウス。

「お前に育ててもらった覚えなどないわ……！」

「まあ、そんなこといわずに、昼食をとろうではないか、二人ともお腹をすかせているだろう？」

屈託のない笑みで告げる、アリウス。

そして、昼食をとり、三人で話をするようになった。

「ふむ……ということは、レオン君が正式に力に目覚めたのは最近なのか……」

「はい……今までは、無意識で使ってたみたいなんですけど、前のエグザリオとの戦いで、ヴィクトリアが助言してくれたお陰で、自分で使うことができたんです。」

「エグザリオ……神器と名乗った謎の存在だね？」
はい、というレオン。

すると・・・

「べつ別に、お前の為では・・・!?!」

なにやら顔を真っ赤にして叫ぶヴィクトリア。

それを見た、アリウスは・・・

「・・・・・・・・・・なるほど、そういうことか・・・・・・・・ヴィクトリア、お前は・・・そいつを選んだのか・・・」
小さく小さく呟いた。

「ん？何か言いました？アリウスさん？」

「ん？いいや、何でもないよ。」

微笑む、アリウス。

「ところで・・・もう日も暮れてきた、そろそろ、レオン君の部屋へと俺々が案内するよ。」

え？

「???・・・どうかしたのか・・・?・・・兄上？自分から、案内するなど・・・・・・・・」

「いいや？初めての客人だからね、記念だよ、記念。」
笑いながら言うアリウス。

そして、ヴィクトリアと分かれた後、廊下を歩く二人。

「……………レオン君は、家のヴィクトリアをどう思った？」
突然聞いてくるアリウス。

「どうって……綺麗で、すこし……人見知りか激しいけど、とても
優しい良い人だと思います。」

「……………なるほど。」

なんだ……？さつきとはまるで気配が……

その感覚は、前にエグザリオと戦ったときのような感覚だった……
絶対の存在を前にしている時のような……

「さ、ついたよ。」

！！

「は……はい。」

慌てるレオン

？……さつきのチリチリした感じが消えている。
やっぱり気のせい？

「ふん……………俺の放つ微弱の殺気にはきずいたか……………だが、
これからだ……さて、行くか。」

目に爛々と鋭い光を宿し呟くアリウス。

そして、ひとりで長い廊下を歩いていった。

部屋の中でレオンは就寝につこうとしていた。

「さて・・・ねるとする・・・」
ズン・・・・・・・・・・・・・・・・

！？

「なんだ・・・この殺気は・・・・・・・・外からか・・・よし・・・行くぜ。」

窓をあけ、下の地面に衝撃を殺して降り立つレオン、高さは、2階だったのでたいしたことはなかった。

そして、そこに一人の仮面をつけたおとこが立っていた。

「お前か・・・俺に殺気を向けた奴は・・・何者だよ・・・お前・・・場合によっては・・・」

と男がいきなり突っ込んできた。

「！？、いきなりかよ！！」

こいつ・・・早い・・・アリシアさんと、同等か・・・いや・・・それ以上！？

「炎魔法、中位詠唱、フレイム・ネクスター」
ボンッ！

男の手から炎の炎剣が出現した。

「くそ・・・なら・・・」

レオンは、右手に魔力を集中、黒いオーラが剣の形を形ずくる。

ギョオオン・

「はあああああ！」

黒刃一閃。

ガン！！

炎と闇の剣が激突。

ドオン！！

衝撃波を撒き散らした。

「ぐっ……こいつ……なんて力だ……けど……おおお！！」
さらに魔力を集中。

ガン、ギアン、ガン！！
剣と剣のぶつかり合い。

レオンが横から思い切り切りつけようとするのを男が防ぎ、それから、レオンの攻撃を防御していた剣を、斜めに傾け、剣を流し、突いて攻撃してくる。

とその時。

「フレイム・ネクスター、ダブル。」

！？

「二刀流！？」

男は更に突っ込んでくる。

こいつ……なんて攻撃速度なんだ……弾くのが精一杯じゃねえか……
……！！

あまりに早すぎて、目が追いつけなくなりそうだ。

「なかなか、やるな。」

男が言う。

「はっ・・・てめえは、化けもん並みの強さだな！」

「褒め言葉として受け取っておこう・・・ならば、これならどうだ？」
ニヤリと笑う男。

ザッと、距離をとる男。

「炎魔法、中位詠唱・・・フレイム・ローリング！」

男の左右に炎の車輪のようなものが顕現。

それが、せまってくる。

「!?!?・・・そうくるか・・・!なら・・・」

レオンは剣を頭上に振り上げる。

「おおおおおお・・・!」

力を溜めて・・・振り下ろす!!

ザン!!

黒い斬撃が男に向かう、そして、炎の車輪と激突。

ドオン!!

お互いに消滅。

さっきの技は、アリシアさんから、剣を借りたとき、魔力を飛ばす方法を見つけ、それを練習した結果できたことだった。

「……………ほう……まさか……ここまでできるとはな……少々俺も遊びが過ぎたか……」

ズアン!!!!

「!?!」

さっきの何十倍という殺気が当たりを支配する

「な……………」

あまりの殺気にレオンは一步も動けない。

「こいつ……あのエグザリオ以上の殺気を……こつも……たやすく……」

「では、行くぞ、一撃でも防げたなら、君の勝ちだ。」

!!来るか。

そう思いなんとか構えるレオンと。

とん…………

真横。

!?

先ほどは30メートルほど先にいた男が、一瞬でレオンの横にいた。

うそ……だろ……これは……もう、早いとか、そんな類の話じゃ……

「そこまでだ!!」

よく通る声が当たりに響く。

なんと、塔の上に、ヴィクトリアが立っていた。

「!?!」

男が動揺。

「!?!…今だ……!!」

「おおおおおおお!!」

剣に莫大な魔力が集中。

「何!?!」

男が動揺。

「はああああ!!、これでも、くらいやがれええええ!!」
先ほどとは比べ物にならない大きさの斬撃が放たれる。

「ちっ……」

男は、手を前にかざし。

「炎よ、偉大なる力よ、我を包み、我を守れ!」

炎の壁が顕現し、その壁と激突。

そして、お互いに消滅した……

謎の襲撃者との戦闘を終え、そのことをアリウスへと報告するレオンとヴィクトリア。

「ふむ・・・そうか・・・なら、これからは、なるべく二人で行動すると良い。」

笑いながら告げるアリウスだが、あの襲撃者の正体は一体!?

そして、レオンとヴィクトリアは城の地下にあるという、ハフルセイクの遺跡を探検することに・・・

そして、そこでレオンはあるものを発見する。

それは、ペンタゴンの文様が描かれた、壁画だった・・・

「これは、遥かなる太古、神より選ばれし、属性の頂点に立っていた宝具使いたちだ・・・」

ヴィクトリアの解説によって判明する、『炎皇の宝具使い』『水碧の宝具使い』『土帝の宝具使い』『雷神の宝具使い』『風翔の宝具使い』と呼ばれていた、伝説の宝具使いの謎へと近ずき始める・・・!

次回、フルセイクの遺跡偏、お楽しみに。

フルセイクの遺跡（前書き）

仮面の男の正体わかり、驚くレオン。

そして、遂に遺跡へと行く事になり……？

フルセイクの遺跡

レオンとヴィクトリアは王の間の前の扉に立っていた。

「おい、なぜアリウスが・・兄上がいない？貴様ら、早く兄上を連れて来い！」

「しかし・・アリウス様は誰も入れるなと・・・」
困り果てている城の衛兵。

「関係ないだろう！私が言っているのだ！！駄目なはずがない！」
叫ぶヴィクトリア。

「で・・・ですが・・・」

「何を騒いでいるんだい？」

！！

レオンとヴィクトリアが同時に振り返る。
そこに居たのは、アリウス王だった。

「兄上！！聞いてくれ！！レオンが城の内部で襲われたのだ！」

「ほう・・・？城の内部で？それは、本当かい？」
首をかしげるアリウス。

「本当だ！！私を疑っているのか！？」

「まさか、そんなはずがないだろう・・？・・ただ城の内部という

のが気になってね。」

「それは、城の警備の話か・・・？」
頷くアリウス。

「この城の警備は完璧だよ？　（空中）には、風魔法の高位詠唱、究極結界の（エアリアル）の加護（）が施されているし、それに地中にも（グレゴリオ）の聖刻（）の印も刻んである。外からの進入は、ありえないよ。」
つまり、と告げるアリウス。

「ば・・・バカな・・・それでは兄上は、城の内部に犯人がいると、そう考えているのか・・・？」

「ああ、その通りだ。」
さも、当然のように頷くアリウス。

・・・

レオンとヴィクトリアは、城の待機室で話し合いをしていた。

「レオン、お前が戦っていた相手は炎使いだったのだな？」
真剣な目で問う、ヴィクトリア。

「ああ・・・しかも・・・めちゃくちゃ強かった・・・闇の魔法を使っても、勝負にならなかったからな・・・」

時は少しさかのぼる。

レオンの下にヴィクトリアが駆けつける。

「おい！！貴様・・・我らの客人に手を出すとは・・・それに、城への不法侵入、その他諸々の罪で、貴様を捕まえる、大した腕のようだが、はたして・・・レオンと私、二人を相手にしても、勝てるかな・・・？」

ニヤリと笑うヴィクトリア。

「・・・ふ・・・どうやら、今回は引き下がらなければならぬようだ・・・これ以上やれば、^ハ正体がばれるしね・・・では、また会おう！」

そういつて飛び去ってしまった。

「わりい・・・助かったぜ・・・」

「ふん、私がしたのは虚勢をはっただけだ・・・たとえば、私とお前でも、アレに勝つことはできんかった・・・」

「そうなのか・・・やっぱり、あいつ・・・只者じゃないのか・・・」

「ああ・・・恐らくな・・・それにあの男の炎の魔法・・・兄上に匹敵するほどの威力だった・・・だが、あいつは恐らく、自分の力の半分も出してはいないだろうし・・・」

「・・・兄上？」

「なあ、アリウスさんも、炎使いなのか・・・？」

ああ・・頷くヴィクトリア。

「兄上は、世界最強の炎使いとしても、有名だ。そもそも・・兄上より炎において、この世界で上に出るものは存在してはならない・・いや、存在しないんだ・・」
呟くように言うヴィクトリア。

??

「とりあえず、城に戻り、兄上に報告しよう・・私、個人としても・・確かめたいこともあるしな。」

そして、時は今に戻る。

「で・・・・ヴィクトリアは、アリウスさんが犯人だって言うのかよ・・・?」

「ああ・・さっき言った通り、兄上はかなりのひねくれ者で・・何をしてくれるか、私にも分からん・・」
困った様に告げるヴィクトリア。

「でも・・そんなことって・・」

「一応だ・・一応でかまわんから、警戒しておけ。あまり露骨に警戒すると怪しまれるからな。」
分かったと言うレオン。

「で・・そ・・その、なんだ・・これからのことなんだが・・」
頬を染めうつむく様に言うヴィクトリア。

！．．．
とレオンも頬を軽く染めた。

そう、先ほどアリウスから告げられたことが、原因だった。

「ふむ．．．なら、これからは二人で行動するといい．．．」
笑いながらアリウスは言っていた。

「ど．．．どうするのだ．．．ここで．．．ずっと二人きりというのも．．．」

「あ．．．ああ、そ．．．そうだな．．．」
二人して俯いてしまう。

「と．．．とりあえず．．．私は帰る！！」
急に立ち上がり、前へ踏み出した、ヴィクトリアだが．．．慌てていたせいか、机のかどに足をつまずかせてしまった。

！？
このままじゃ、ヴィクトリアが床に．．．！
そう思った瞬間体が動いた。

バサ．．．
レオンがヴィクトリアの前に周回り、抱きとめる。

「あ．．．．．」
呆然と眩き、顔全体を真っ赤に染めるヴィクトリア。

「大丈夫か！ヴィクトリア！」

「え……あ……はい!!」

?

敬語?

「おい……どうかしたのか……?」

ヴィクトリアは、レオンに抱かれた状態、つまり、レオンの胸に顔を埋める形のまま、固まっている。

ヴィクトリアの甘い香りが広がる。

そして、ヴィクトリアのかすかな吐息があたるたびに、レオンは死にそうになった。

「お……おい、ヴィクトリア!」

「はっ……!す……すまん……!!つい……」

いいよ、気にしてないからと、言おうとしたレオンが黙る。

ゾン……!!

この辺一帯に殺気が充満する。

!?

これは……あの時の……つまり、あの仮面の男のときと同じさっきだった。

「ヴィクトリア……これは……」

「ああ……間違いない……あの男だ……」

二人で頷き、窓を開け、外に着地する、二人。

「また、お前か！．．お前は一体何者なんだ！？答える！！」

「ふ．．．答える必要はない。」

「なら、何で俺を狙う？」

．．．．．

考え込む男。

「そうだな．．強いていうなら．．君を確かめる為．．．かな？
確かめる．．？何を言ってるんだ？

その時、ずっと黙っていたヴィクトリアが口を開いた。

「そこまでで良いだろう？兄上。」

「！！それは、あくまで予想だろう！！」

「．．．．．いや．．正解だよ？レオン君。」
男が告げる。

！？

まさか．．．

「その通りだヴィクトリア、大した洞察力だ．．我が妹ながら、誇らしいよ。」

そう言いながら男は仮面を投げ捨てる。

そこから覗いた顔は、アリウス王その人だった。

「そんな．．なんで．．．」

呆然とするレオン。

「言っただろう？君を・・確かめるためだと。」

「そうか・・・気にはなっていたのだ・・いくら私を救ったとはいえ、一介の学生を城に呼ぶなど、ありえないからな。・・つまり、兄上は全てを知っていたのか・・我らを確認するために、何をすればいいのかを。」

唇を曲げ、告げるヴィクトリア。

「その通り・・全く・・そこまで読んでいたか・・恐ろしい子だ。憎らしく笑うアリウス。」

「なら、分かっているな？今から私が何をするのか・・」

「ああ・・私とレオンをタッグにし、我らと戦う気だな？」

「そう・・その通りだよ。だからこそ・・始めようか・・」

ズン・・・・・
辺りを殺気が支配する。

「レオン・・行くぞ・・兄上は本気だ・・」

「ま・・待てよ！！相手はお前の兄貴だぞ？・・ヴィクトリアはそれでも戦うつてのわ！？」

「レオン君、俺達の話は、気にしないでいい・・ヴィクトリアと共に、全力で向かってきたまえ。」

・・・・・わかったぜ・・・なら・・

「全力で・・・行かせてもらいます!!」

レオンから漆黒の魔力が展開。

ヴィクトリアも、すでにロンギエールの槍を構えている。

「俺の力は・・・あまりに強大すぎるため・・・力を全力の4割程度しか使えない・・・だが・・・君達を相手にする分には、調度良いだろう。」

笑うアリウス。

「では・・・行くぞ!!!・・・炎魔法、中位詠唱、フレイム・ネクスタ
ー、ダブル!」

炎の剣が二振り、アリウスの手に顕現。

「おおおお!来い!!」

レオンの手にも漆黒のオーラが集中し、剣を形作る。

二人は一斉に駆ける。

ガン!!

激突。

ガンガンギアン!!

お互いに剣をぶつけ合う。

「ふ・・・前より強くなっている・・・たった一日しか経ってないというのに、ここまで成長するとは・・・やはり、君は天才だな・・・!」

「それは、どうも・・・でも、負ける気はありませんよ!アリウスさん!!」

叫ぶレオン。

「そうこなくてはな!!」
笑うアリウス。

「はああああ!!」
力を溜め、斬撃として、放つ。

しかし、アリウスがそれを防ぐ。

「どうした!!レオン君!君の力はそんなものか!」

くっ・・・やっぱり強い・・・これで、半分にも至ってないなんて・・・

とその時、ヴィクトリアが突っ込んできた。

「はっ!!」

槍を斜めしたから振り上げる。

ガイン!!

受け止めるアリウス。

「ふ・・・やっときたか・・・我が妹よ。」

「何時までその余裕があるか、確かめてやる!」

そして、二人で、壮絶な打ち合いを始めてしまった。

「なんて戦いだ・・・やっぱりあの二人は別格だな・・・」
呆然と眺めるレオン。

しかし。

「ぐ……うああ！」

ヴィクトリアは吹き飛ばされた。

！！

「ふ、どうやら、そこまでのようだな……終わりだ！」
炎剣を振り上げるアリウス。

「まずい……ヴィクトリアが……」
させるかよ……俺が……俺が救ってやる。

ドクン……

「おおおおおおおおお……！」
絶叫。

「何！？」

レオンの体から漆黒のオーラが身を包む。

ヒュン……

レオンの姿が掻き消える。

そして。

アリウスの真後ろに現れる。

「！？何時の間に……」

「はあああつー!!」

「く・・・」

ガンー!!

「何?・・・俺が押される???」

そう、レオンの力がアリウスを押ししていた。

「ばかな・・・ここまでの力が・・・」

「はあああああ!これでどうだ!」

ドクン・・・

さあ・・・使え・・・全てを飲み込む漆黒の波動、敵の全てを殲滅する力・・・「黒滅魔法」を・・・

そんな声が聞こえた気がした。

「発動・・・」

レオンの体からあふれる魔力が、辺りの天候すらかえる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「な・・・なんだ・・・この・・・禍々しい力は・・・これではまるで・・・」

「発動・・・黒滅魔法・・・黒波激剣「シャドウ・オブ・ブレード」

レオンの手に巨大な力を秘めた剣が二振り顕現。

「なんだ・・・」

アリウスは妙な感覚を得ていた、先ほどと、剣の形はかわっていないが、ビリビリとあの力は危険だ、さっきまでとは違つと、アリウスの感が告げていた。

辺りの空が真つ暗に染まっている為、レオンの剣が闇にまぎれて、見えずらくなつていた。

「ふ……ふふ……そうか……これが闇か……確かに……神がこの世界から歸し去りたい気持ちも分かる……これは……人が使っていない力ではないな……」

「行きます……」

レオンは不思議なほど、落ち着いていた。

「……良いだろう……こうでなくては……やはり君は、俺の……みこんだ人間だ。」

そっい。

「我が元に集まりたまえ、千の軍勢を打ち破りし炎よ、断罪の時は来た、世界を照らし、その栄光を我が告げよう……炎魔法・高位詠唱、ルゲイル……エズル……スリアシュー……ゲヘル……、
n i x · E n d } 「

アリウスの周りに炎が集まり、その炎が意思を持ったかのように、火の鳥、つまり……フェニックスの形をとる。

「さあ、レオン君……この一撃を、防いでみたまえ!!」

フェニックスがレオンに迫る。

「いけるさ・・・俺なら・・・俺達なら・・・さあ・・・行くぜ・・・」

レオンは、自分でも分からない言葉を呟いた。

そして・・・

レオンは、剣を、上から下へと・・・ただ・・・振り下ろした。

「・・・まさか・・・あの技が防がれる・・・いや・・・消し去られるとはね・・・驚いたよ・・・」
アリウスは苦笑した。

そう、レオンはただ剣を振り下ろしたただだった。

それだけで、炎の高位魔法は・・・跡形もなく・・・消え去った。

「いくら・・・俺の力が半分も出せていないとはいえ、完全に無効化されるとはね・・・」

ヴィクトリアは気絶して眠っている。

「・・・合格だ、君には、それだけの器がある、これならヴィクトリアを任せられる。」

???

任せる？

ヴィクトリアを・・・？

「あの・・・それは・・・どういことですか？」

首をかしげるレオン。

「……君は……相当に鈍いみたいだね？」
苦笑するアリウス。

「う……ううん……あれ……私は……何故……」
ぼーっとしているヴィクトリア。
やがて……

「……！……そうだ、兄上との勝負は……」

状況説明タイム。

「な……な……たお……した……？……レオンが……兄上を……」
？」

呆然とするヴィクトリア。

「そうか……やはり、お前はすごいな……レオン……」
ヴィクトリアに褒められ、照れるレオン。

「い……いや、そんな事はないよ……」

次の日。

レオンとヴィクトリアはアリウスに呼び出されていた。

「レオン君……君にこれから、この城の地下にある、ハフルセイクの遺跡へ行って貰いたい」

「フルセイクの遺跡・・・それって、この城に描かれている紋章に係あるって言う・・・」

「そうか・・・すでにヴィクトリアから聞いていたか・・・それなら話が早い、今すぐそこに行きたまえ、ヴィクトリアに案内させる。」

フルセイクの遺跡 ? (前書き)

遺跡にて、謎の壁画を見つけるレオンとヴィクトリア。
そこには驚きの真実が描かれていた・・・!!

そして、ある存在が二人の前に現れ・・・!?

フルセイクの遺跡？

「レオン君、君には今から、フルセイクの遺跡へ行ってもらいたい。」
「ミルフェリーナ城、王の間で、アリウスはそう告げた。」

「フルセイクの遺跡をレオンに案内しろと・・・そういうことか？しかし・・・なぜ急に」
首をかしげるヴィクトリア。

「ああ、私にもどうしてかは分からないが・・・なんとなく・・・ただ、本当になんとなく・・・レオン君をあつた遺跡へと連れて行かなければならない・・・そんな感じがしたんだ。」

「？・・・まあ・・・あんな遺跡・・・あつても意味など無いから・・・見せても仕方ないと思うが、良いだろう。」
頷くヴィクトリア。

「意味がない・・・か・・・確かに俺も・・・最初はそう思っていたが・・・」
意味深げに考え込むアリウス。

「まあ、とりあえずレオン君を連れて行ってあげてくれ。」

というわけで、二人はフルセイクの遺跡の入り口にいた。
城の最下層まで降り、それからしばらくまっすぐ歩いたところに入り口はあつた。

「ここが遺跡への入りぐちだ。」

「へえ〜遺跡なんて始めてみたぜ・・どんなもんがあるんだろうな・・ヴィクトリアは来たことがあるんだよな？」

「ああ、まあ・・来たことがあるといつても・・兄上に連れられて少し入っただけだがな・・奥に何があるかまでは・・私にも分からん。」

じゃ、行くかと言うレオン。

こうして、二人は遺跡へと入った。

「しかし・・本当に遺跡っぽいな・・」
レオンは啞然といった。

中は暗く、通路は、人が横に並んで5人くらいが並べるくらいの広さしかない。

通路の端には、ずっと先まで存在している柱があった。

「まあ・・そうだろう、この遺跡は三千年前くらいに作られたらしいからな。」

「三千・・・すげえ昔だな・・」

通路が暗くて進めなかった為に、ライトを使って進んでいる。

無論、ただのライトではない、魔力を込めると発光する、特殊な鉱石が入れている、マジック・ライトだ。

しばらく歩くと、少しだけ広いところに出た。

「お？ここは結構広いんだな・・」

「ふむ．．確かに．．私もここまで奥には来た事は無いな。」
そこは、広さが四方の半径、十メートルくらいのところだった、天
壤は高く上が見えないほどだ。

そして。

「？．．なあヴィクトリア．．これ．．なんだ？」

「ん？」

二人でそれを見る。

それは、妙な台座に置かれていた、（黒い欠片）だった。

「なんかの石か．．？でも．．それにしては．．」

「確かに、ただの石ではないようだが．．」

そういつて石を持つヴィクトリア。

それをころころ手の平で回し、観察している。

「別段、変わったところも無い．．魔力を感じるわけでもない．．
ただの石か．．？」

しかし．．レオンには、その石が、ただの石には思えなかった。

！？

そこで、レオンは驚くべきものを発見する。

「なあ．．さっきの石が置いてあったところの台座の上に何か．．
刻んであるぞ．．」

「ん？．．これは．．魔法陣．．？だが．．見たことが無いも

のだ．．何の属性かも読み取れん．．なんなのだ．．この魔法陣は．
」

さっきの黒い欠片が置いてあったところに、何かの魔法陣が刻まれていたのだ．．つまり、その石は、魔法陣の中心に置いてあった石、ということになる。

しかし、レオンはその魔法陣に妙な感覚を覚える．．まるで．．

！？

「ヴィクトリア！！」

レオンが叫ぶ。

遺跡だった為、声が反響した。

「な！なんだ！？．．どうした！？」

ビクン！と肩を動かし、こちらを見るヴィクトリア。

「す．．すまん．．でも！この魔法陣見ろよ！．．この魔法陣．．俺の魔法陣に似てないか？．．闇の魔法陣に！」

「た．．．確かに．．似ているどころか．．全くの同じものだろう．．
．．．！」

驚きを隠せないヴィクトリア。

ヴィクトリアの中で、今まで見てきた、レオンの漆黒の魔法陣の模様とこの台座に描かれた魔法陣の模様が一致した。

「どういうことだ．．？この遺跡は．．闇にも関係あるってことなのか．．？」

「わからん・私が兄上から聞いた限りでは、この遺跡はペンタゴンのものに関係する遺跡だと言われていなかった・だが・ここに、レオンの力と同じ文様の魔法陣があるということは・闇にも関係がある遺跡かも・しれんな・」

・
・
・
・

二人でお互いを見合わせる。

「！！・・・じゃあ、その石も・・・」

「ああ・・・もしかすると・・・闇の力に関係あるものだと見て良いだろう、ならば、これは、お前がもつべきだな。」
そういつて、石を差し出してくるヴィクトリア。

そして、レオンがその石に触れたとき、異変が起きた。

ギュウウウン・・・

！？

なんと、突然石が「光だした」のだった。

「光って・・・る・・・？」

「ああ・・・間違いない・・・」

啞然とするレオンとヴィクトリア。

それは不思議な光景だった。

黒い色のはずの石が光りだしたのだから。

そして、二人は、意識を失った。

・・・

「う・・・うああ・・・なんだったんだ・・・？今は・・・
何とか腰を起こすレオン。」

「レオン・・・無事か・・・？」

ああ・・・呟くレオン。

「なんだったんだ・・・今は・・・」

「分からん・・・だが、ただ事では・・・！！！！」
ヴィクトリアが絶句する。

「どうした？」

「レ・・・レオン・・・前を・・・見る・・・」

そういつてライトを前にかざす。

！？

これは・・・

そこにあつたのは、ペンタゴンの文様が描かれた・・・壁画だった。

「なんだよ・・・これは・・・こんなもん・・・さっきはなかったはずだ
る・・・？」

「ああ・・・それは、無かつただろうな・・・なぜなら、我々は・・・さ
つきと違う場所にいるのだから・・・」

「？・・・！！・・・嘘・・・だろ・・・さつきと違うところに・・・俺達
は飛ばされたのか・・・？」

「どつやら、そのようだな・・恐らく・・あの石が、お前に反応して、このような事を起こしたのだろつが・・」

「!？」

レオンは自分の手をみて驚いた、

「石が・・・無くなってる・・」
やはりなと・・ヴィクトリア。

「恐らく、消滅したのだろつ。」

「消滅？」

「ああ、物質変化と同じだ、お前に反応し、その役目を終えたのだろつ。」

「役目？」

「そうだ・・我ら・・いや、お前をここに連れてくるという、役目をな。」

「俺を・・ここに・・？」

「まあ、それはいいとして・・驚いたな・・これは・・」
呆然と見上げるヴィクトリア。

「なんだ・・この壁画は・・？」

「これは・・ペンタゴンの紋章だ・・」

よく見ると・・そのペンタゴンの一角ごとに、一人ずつ・・全部で五人の人の姿が描かれていた。

「この人のようなものは？」
尋ねるレオン。

「これは・・・伝説の宝具使いたちだ。それぞれ・・・『炎皇の宝具使い』 『水碧の宝具使い』 『土帝の宝具使い』 『雷神の宝具使い』 『風翔の宝具使い』と呼ばれていた。」

「伝説の宝具使い？何なんだよそれ・・・？」
そして、ヴィクトリアが壁画を見ながら語りだした。

「かつて・・・世界には、七つの属性が存在していた・・・それは知っているな？」
頷くレオン。

「しかし、闇と光が対立し、世界が崩壊しそうになっていたところを、神がこの世界から、それらを消滅させることで・・・世界は完全に安定し・・・世界と言う物が完成したとされている・・・しかし・・・この壁画に描かれているのは・・・また、別のことだ・・・壁画によれば、神によって選ばれた、大いなる力をもった、五人の宝具使いがいたそうだ・・・」

ヴィクトリアは、壁画に記されていることを、読み取り、レオンに分かりやすいよう、解説してくれているのだろう。

「その宝具使いたちは、ただの宝具使いではなかった、神の属性を受け継いだ宝具を持っていた・・・」
しかし・・・そこで、ヴィクトリアの言葉が止まる。

「?・・・どうした？」

「……これは……読めない……」

は……？

「読めんだ……私は、この世界の言語全てをマスターしているが……こんな文字は知らない……それどころか……この文字は、この世界の……星鏡世界の文字ではない……」

「読めない？」

「ああ……ここまでは読めるのだが……この先からは、急に言葉が変わってしまったている……」
悔しそうなヴィクトリア。

だが……

「しかし、そのもの達に、絶対の災いが訪れる……」
レオンが読んだ。

！？

「レオン!!お前!……読めるのか!?!」
驚くヴィクトリア。

「あ……ああ……何でだかわかんねえけど……読めるんだ……」

「そうか……レオンは、古代の属性……闇を受け継いだ者……だからこそ……レオンには読めるというわけか……」
考え込むヴィクトリア。

「……先……読んでもいいか……？」

ああ・・・と頷くヴィクトリア。

「世界に平和が訪れたはずだったが・・・そこで、絶対の危機が訪れた・・・その宝具使いたちは、それに対抗する為、力を振るった・・・

『炎皇』は大いなる神炎を使い、全ての悪を焼き・・・

『水碧』は、聖なる神水を大量に使い、浄化を行い・・・

『土帝』は強固な神壁を作り・・・

『雷神』は、怒涛の、神雷を使い、魔を撃ち・・・

『風翔』は、蒼空の神風を吹かせ、敵を戒めた・・・

これら・・・聖なるペンタゴンの力を使い、その《絶対なる者》をある場所へと封じた・・・

我ら・・・古の民はその時の《絶対なる者》をこう現そう・・・我らの見たそのままを・・・ここに記す・・・《漆黒の光》と・・・

.....

「これで・・・終わりだ・・・」
疲れたように言うレオン。

しかし、ヴィクトリアは。

「なんとということだ・・・この世界にそんな事が・・・」

「ええ・・・本当にあったことよ・・・」

!?

「誰だ!?!」
叫ぶレオン。

「はじめまして、ヴィクトリア第二王女、それから、レオン・イル・エキテス。」

「どうして私たちの事を知っている!?!」
叫ぶヴィクトリア。

「それは」

「それはな・・・」
と・・・そこで別の声が響く。

「この声・・・兄上!?!」
なんと、レオンたちの後ろから、アリウスが現れた。

「やれやれ・・・自分の役割をこんなところで、見つけてしまうとは・・・運命とは皮肉なものだ・・・」

「アリウスさん!?!・・・どうしてここに・・・」

「ああ・・・城で休憩していたら、懐かしい奴の魔力を感じたんで、

こうして、出向いたんだけど・・・レオン君のお陰で・・・自分の使命もはっきりして、一石二鳥だよ。」
笑うアリウス。

使命？

「あら、あなたが自ら動くとは・・・炎皇の宝具使いの末裔、アリウス。」
女が言う。

「炎皇の末裔!?!」
レオンが叫ぶ。

「ああ、黙っていてすまなかった・・・ヴィクトリアも驚いているだろっ?」
コクリと頷くヴィクトリア。

「さて・・・どうしようか・・・の前に・・・久しぶり・・・と言っべきか・・・
雷神の末裔、ゼクシア・フィラ・ベ。」

雷神!?!

こいつが・・・?

「何をしに来た?・・・まあ、大方、この遺跡の破壊か?」
笑うアリウス。

「ええ・・・その通りよ・・・この遺跡は邪魔なのよ・・・」
「我らに
とってはね。」

「我ら・・・ねえ・・・させると思うか・・・?」

ズン・・・

辺りに莫大な魔力が満ちる。

だが、女は顔色ひとつ変えない。

「・・・面倒なことになったわね・・・」

「ま・・・いいわ・・・付き合っただげる・・・あなたの・・・遊びにね・・・」

女は不適に笑った。

-----次回予告-----

レオンたちの前に現れた、雷神の末裔、ゼクシア・フィラーベ。

そして、炎皇の末裔であることが判明した、アリウス。

レオンたちの目の前で、伝説の宝具使いの末裔である二人が激突。

そして、その戦闘の最中、レオンは急に意識を失う。

さらに、レオンは夢の中で、謎の女性と出会う。

《レオン・・・あなたにもそろそろ・・・教えなくてはね・・・》
微笑みながら告げる女性。

遂に姿の断片を見せ始めた、レオンの「神具」、そして・・・物語の時計の針はゆっくりと動き出す。

次回、炎皇竜の轟剣「ジーク・フリート」をお楽しみに。

炎皇竜の轟剣（前書き）

アリウスの宝具が遂に現れ、驚くレオン達。

ヴィクトリアは、アリウス達を見守っていたが、レオンは……

レオンは謎の場所で、白と黒の翼を生やした女生と出会い……!?

炎皇竜の轟剣

レオンとヴィクトリアは、その場で硬直していた、いや、硬直せざるを得ないと言つのが妥当だろう。

なぜなら、目の前に、伝説の宝具使いの末裔が二人で睨みあっているのだから。

「随分、久しぶりだな・・ゼクシア・フィラーベ・・いや、ゼクシア。」

懐かしむように名を呼ぶアリウス。

「・・・あなたから名前では呼ばれるのは、初めてね。」

「あ・・・あの・・・兄上？・・・この女とは・・・どういう・・・」
呆然と聞くヴィクトリア。

「ああ・・・こいつとは昔、ルベリージア学院で同じく所属していた同期だよ。」

同期・・・？

でもなんで今、こんなに睨みあっているんだ・・・？

「さて・・・あなたはこれだけの魔力を私に向けて・・・何をしようとしているの・・・？」

質問する女。

そう、先ほどからアリウスは、レオンやヴィクトリアがゾツとするほどの魔力を放出していた。

さつきレオンと戦っていたときより、強大な魔力だ。

「なに、簡単な話だ・・・お前はこの遺跡を、恐らく・・・お前が所属している何らかの組織の命令で壊しにきたんだろう・・・？」

「ええ、その通り・・・この遺跡は必要ないの・・・」

「なぜ・・・必要ないんだ？」

「それは・・・私たちの作戦の邪魔になりそうだから。」

作戦？

「作戦ね・・・何を考えている・・・？・・・ゼクシア？・・・お前達の・・・」

アリウスは最後まで言葉を紡げなかった。

女・・・ゼクシアの放つ魔力が跳ね上がったから。

「ほう・・・大した魔力だ・・・さすがは、学生時代に俺と並ぶと言われていた女だ・・・」

アリウスさんに・・・並ぶ・・・？

「それは・・・本当なのですか・・・？・・・兄上・・・その女が・・・兄上に匹敵するなどと・・・」

「ああ、本当さ・・・こいつは俺と同じく学院内で、最強と言われていた女だからな、なぜならこいつは・・・先代ルベリージャ学院生徒会長だったんだからな・・・」

唇を歪め、言うアリウス。

生徒・・・会長・・・今のアリシアさんと、同じ・・・

「そんな話・・・今必要な事・・・？」
痺れを切らしたように言うゼクシア。

「ふん・・・相変わらず・・・先のことしか考えていない女だ・・・では・・・
お前の期待どおり、殺し合いとでもいこうか。」

ズン・・・
辺りに強大な魔力が満ちる。

「・・・なんとという魔力だ・・・あの、ゼクシアとか言う女・・・本
当に兄上と同じくらいのを・・・」
呆然とするヴィクトリア。

「ま・・・待ってください！！アリウスさん！！」
叫ぶレオン。

「いまここで戦えば・・・この遺跡が吹き飛んでしまいます！」

「大丈夫さ、レオン君・・・俺が何の作もなしに、こんなところに乗
り込んでくるとでも・・・？」
笑うアリウス。

「転移魔法発動。」
告げるアリウス。

「！？・・・まさか、あなた！」
動揺する女。

「ふ・・・さあ、場所を移そう。お前との戦いは・・・外でやる。」

ギユイイイイイン・・・

目の前が急に真っ白になる。

そしてきずいた時には、レオンたちは、見慣れた城の前にいた。

「やってくれたわね・・・アリウス・・・」
殺気をあらわにするゼクシア。

「クク・・・さあ始めよう・・・伝説の宝具使いの末裔として、お互いに恥じぬ戦いをしようではないか。」

「少し・・・遊んであげるわよ・・・アリウス。」

と、突然、ゼクシアの手に雷が発生、その手をアリウスに向ける。

「雷魔法、高位詠唱、ハシエルの電洗」

「何！？・・・高位詠唱を、詠唱なしで・・・？」
目を見開くヴィクトリア。

「!!!」

ズバアアアン!!

ゼクシアの手から雷の槍が放たれた。

バチバチと音をたてながら迫る雷。
しかしアリウスは慌てない。

「炎魔法、高位詠唱、グレス・・・エーテ・・・ハ脊赤のトバリ」
アリウスの前に強大な炎の柵が出現。

ドオン！！

激突、爆風が辺りを撫でる。

「うわっ！！・・・なんて戦いだよ・・・！」
顔をかばいながら告げるレオン。

「まさか・・・詠唱なしで高位の魔法を発動させるとはな・・・大した奴だ。」

呟くアリウス。

「・・・あまい。」

雷を更に強く両手に纏い。

「雷魔法、高位詠唱、ハバルテリアの雷拳」

雷を両手に纏い、突進。

しかも姿が見えない。

「成る程・・・雷は速さが象徴的な系統だったな。」

トン・・・

アリウスの後ろに現れた。

「終わりね。」

アリウスに殴りかかるゼクシア。

ガン・・・

「残念・・・なめすぎだ・・・」

ゼクシアの拳が届く寸前、炎の壁がアリウスを守っていた。

続けて跳躍。

上から振り下ろす。

ガン……！

又もや炎の壁が顕現、攻撃を通さない。

一度離れるゼクシア。

「!?……………どうということ……？」

「残念だが……お前が攻撃に転じる前、炎魔法の高位詠唱、**ハドラ** グラーズの炎鱗」を発動させていた。」

「成る程……そういうこと……」

この戦いを離れたところで、レオンとヴィクトリアは観戦していた。

「なんとという戦いだ……」
ヴィクトリアが告げる。

「ああ……でも……」

レオンは変な気分だった。

初めて見る技なのに、過去に見たことがあるような……
と。

ズキン・・・

レオンの頭に痛みがはしる。

「ぐ・・・なんだ・・・どどん痛みが・・・強く・・・」

バタン・・・

レオンが倒れた。

「!?!?・・・レオン!?!?・・・おい!!どうしたのだ・・・?何故急に・・・レオ・・・」

レオンは、だんだん、ヴィクトリアの声が聞こえなくなっていくた。

・・・

俺・・・何・・・してんだ・・・?

確か・・・急に頭が・・・

それに・・・ここは・・・前にも来た・・・

そう、レオンが居たのは、前にも見た、漆黒の巨大な城が建っていた世界だった。

《お目覚めかしら?レオン》

!?!?

声が響く。

「誰だ!?!?!?・・・お前は・・・?」

そこに居たのは、黒と白の翼を生やした女性。

《久しぶりというより、始めましての方がいいかしらね？あなたに姿を見せるのは、初めてなわけだし・・・アリスには見せたのだけど》

アリス・・・？

なんでアリスの名がここで？

「あんたが・・・俺をここに・・・？」

《まあ、呼んだというより・・・あなたがここに来れるように心の扉を開いた、と言ったほうが正しいわね》

心の扉？

《まあ、その話はまたいつか、今は今すべきことをしなければ・・・レオン、あなた、自分が闇の属性だって事は、もう知っているわよね？》

「ああ・・・それがどうした・・・？」

《なら・・・なぜあなたが闇の属性を使えると思う・・・？どうしてあなたとアリスがお互いに対となる属性を宿していると思う？》

？

そんなこと・・・

「わかんねえよ・・・偶然じゃないのか・・・？」

答えるレオン。

《偶然・・・？ふふふ・・・それは違うわ・・・全ては決まっていた事
なの・・・あなたがアリスと出会い、神器と戦い、世界の歴史を、遺
跡によって理解し・・・伝説の宝具使い達の戦いに違和感を覚える・・・
その全てが、あるひとつの事象を中心に展開しているというのに・・・》

！？

こいつ・・・なんで、そこまで知って・・・？

「お前・・・何者だ・・・」
後ずさるレオン。

《怖がらなくともいいじゃない・・・？私はあなたに変革への道標を、
与える者なのに。》

変革？

《レオン・・・あなたにも・・・そろそろ・・・教えなくてはね・・・あな
たの力を・・・幸い、あなたは自分の力の象徴と一度、交わっている
わけだし・・・》

！！・・・俺の力の・・・象徴・・・？

漆黒の剣のことが・・・？

でも、あんなの、俺の思い過ぎ・・・

《言うておくけど・・・アレはあなたの見間違いではないわ、アレは、
あなたへのそのものよ・・・》

？？

こいつ・・・さっきから何わけの分からないことを・・・

《まあ・・・いいわ、とりあえず、あなたはここで・・・(神具)と完全に交わる、アリスは未だ到っていないけれど・・・あなたならば・・・今すぐにも、発現できる。》

《ふふ・・・さあ、あなたの・・・闇の本当の力・・・世界に示してみなさい?・・・それが、この世界においての、真の覚醒なのだから・・・でも、今のままでは・・・まだ自分だけでは発現させられないでしょうから・・・私が力を貸してあげる・・・最初だけね・・・》

「?・・・発現・・・?・・・それは宝具のことか・・・?」
問うレオン

《違うわね・・・宝具と神具では、根本から存在が異なっている・・・宝具は、いくら強大な力を秘めているとはいえ・・・人間の魔力が根源・・・まあ、なかにはバカみたいに強い宝具もあるけれど・・・それでも、神具とは・・・あまりに違う・・・神具は世界に直接、介入できる・・・さあ・・・いきなさい・・・》

「!?・・・さてよ・・・お前の名前は!？」

《?・・・名前・・・?》
ぽかんと呆ける女性。

「そつだ!!・・・お前の名前を・・・!!」

《・・・ふふ・・・そう、これが・・・あなたなのね・・・》
自らの胸に手を添える女性。

《わたしの名前は・・・ミートルフィリス・アルビオン・・・ミーフイスと・・・呼んで・・・》

なぜか、寂しそうに言うミーフィス。

ミーフィス……どこかで聞いたこと……

《……なぜかしらね……名前を聞かれただけなのに……本当……
あなたって……変わらないのね……五万年前から……ずっと……
》

苦笑するミーフィス。

！？……今聞き捨てなら無いことを聞いた気が……

《行きなさい……あなたが行くべき場所へ……》
そして……

《もう……しばらくはあえないでしょう……》

レオンは意識を失った。

「……い!!……きろ……レオ……!」

なんだ……だれかが……呼んでる……?

「おい!!おきろレオン!!……どうしたのだ……?レオン!!」
きずけば、ヴィクトリアがレオンをゆすっていた。

「あれ……ヴィクトリア……?なんで……」

「呆けるな!何を急に寝ておるのだ……!?!」

「?・・・寝ていた・・・?俺が・・・」

「そうだろう・・・!?ほんの10分程度とはいえ、焦ったぞ!!」
「10分?・・・だけ・・・?」

ガン!!

爆音が響く。

!!・・・そうだ・・・今は・・・

離れたところで、アリウスとゼクシアが戦っている。

「さすがに・・・これ以上遊ぶと・・・まずいな・・・きりが無い・・・」

つまらなそうに言うアリウス。

「そうね・・・私もこれ以上は・・・きついわ・・・そろそろ本気で
いきましよう?」

笑うゼクシア。

「ああ・・・そうだな・・・お互い・・・これ以上は無意味だ・・・宝具
を使い・・・終わらせよう・・・」

「・・・行くぞ・・・我が元に顕現せよ!大いなる
炎より生まれし灼熱の炎剣よ、あらゆる存在を焼き払い、完全であ
り無二の姿を示せ!炎皇竜の轟剣ハジーク・フリート!」

アリウスが腕を前にかざし、詠唱する。

その時、上空に存在していた、全ての雲が消え去った、そして・アリウスの周りに、空まで届こうかというほどの炎の竜巻がアリウスを包み、その竜巻が晴れたときには、アリウスの手に、赤い炎を纏った剣が握られていた。

ここからはよく見えないが、剣の刃の元に竜が口をあける様がある。

「……………!!」

ゼクシアはジーク・フリートから漏れるあまりの魔力に後ずさる。

「噂には聞いていたけど・まさか・ここまでとは……………」

「どうする……？やろうと思えば……この城全てを一瞬で灰にできるほどだぞ……？まだ……やるか？」

ニヤリと笑うアリウス。

「……………仕方ないわね……私も、宝具を……といたいところだけど……かかったわね……」

「なに？……………!!」

アリウスはきずいた……この城の本城の真上……そこに、莫大な魔力が集まっているのを。

「まさか……お前……この城ごと……全てを消し去る気か!？」
激昂するアリウス。

「ふふ……その通り……そしてあなたは私と戦っている……いくら宝具があっても、私から目を背ければ、あなたとたたき合えない……」

笑うゼクシア。

「くそお！！逃げるんだ！！ヴィクトリア！！レオン君！！」

「な・・・なんとということだ・・・させない・・・させないぞ・・・
そんなことは！！」
叫ぶヴィクトリア。

そして、走ろうとしたヴィクトリアを雷の一端が触れる。

バチン！！！！

「うあああ！！！！」

吹き飛ばされるヴィクトリア。

左腕が焼かれていた。

「くうう・・・うああ・・・」

涙を流しうづくまるヴィクトリア。

「！！！！・・・ヴィクトリア！！！！」

すかさず近寄るレオン。

「くそ・・・くそ・・・くそ！！！！」

「俺に・・・俺に・・・全てを守りきる力があれば・・・！！！！」

ゼクシアが生み出した、空中に浮かんでいる強大な雷球・・・いや・・・
これは・・・あの遺跡に記されていた、『雷神』が使う、神雷と呼ばれるものでは？とレオンは何故か思った。

事実・・・この魔力量なら・・・この城どころか、ミルフェリーナ王国
領土の半分が消し飛んでもおかしくない程だった。

「どうすれば・・・いいんだ・・・こんな魔力・・・いくら闇でも・・・
対抗できないじゃないか・・・」

《レオン・・・あなたの闇の力を世界に示してみなさい》
と、ミーフィスの言葉が脳裏によぎる。

「そつだ・・・神具なら・・・あの・・・漆黒の剣なら・・・とめられ
るかもしれない！」

――――次回予告――――

圧倒的な力を前に絶望しそうになるレオンだったが、全ての可能性
を自分の神具にかけることを決めたレオン。

「俺は・・・守りたいんだ・・・ヴィクトリアも、ルークも、アリシ
アさんも・・・そして、アリスも!!」

そして、レオンの真なる力がこの世界に現れる。

それに合わせ、学院にいる筈のアリスもまた、胸騒ぎを覚える。

「レオン君?・・・何をしようとしているの・・・?」

「あああああああああ!!!!!!」

そして、レオンが完全に闇に吞まれる。

「我が元に、君臨せよ」・・・

次回、闇の覚醒、お楽しみに。

闇の覚醒(前書き)

遂に・・・レオンの神具が顕現した。

世界に響くレオンの覚醒、そして・・・あの男も・・・

闇の覚醒

ミルフェリーナ王国は大混乱に陥っていた。

ミルフェリーナ城上空に、突如、強大な魔力の塊が出現したのだから。

逃げ惑う人、家に隠れる人、さまざまな人の流れができ、国は完全にパニック状態だった。

その国の中心、ミルフェリーナ城では、猛烈な激戦が繰り広げられていた。

「そうだ・・・そうだよ！俺の神具なら・・・この魔法を無効にできるかもしれない・・・」

「もういやなんだ・・・誰かが傷つくのも・・・誰かが悲しむのも・・・もう見たくないんだ！」

叫ぶレオン。

「あの子・・・」

ゼクシアが見上げる。

???

あいつ・・・なぜレオン君を気にして・・・

そう思うアリウス。

「思い出せ・・・ヴィクトリアが教えてくれた・・・自分の心を見るんだ・・・」

目をつぶるレオン。

ドクン……

ドクン……

そしてレオンは、意識を失い、さっきまでいた、黒い城がある世界に来ていた。

ここは……？

「どうして、ここに……今までここに来たことなんてないのに……」

しかし、レオンは自分の少し前に宙に浮いている漆黒の剣を見た……

これが……これが、俺の神具。

そう思い剣に手を伸ばし、触れた瞬間。

バチン！！

「!？」

弾かれた。

「な……なんで……どうして弾かれるんだ？」

まるでレオンを拒絶するかのようには、魔力を放ち始める剣。

「まさか……俺を主と認めてない……？」

そんな……これでは……皆を救えない……嫌だ……救うんだ……皆

を・・・俺の大切な人達を！！

「頼む・・・力を貸してくれ・・・俺には力が必要なんだ・・・！！」

その時、剣が莫大な魔力を斬撃として勝手に飛ばしてきた。

「うおっ！！」

精神世界で交わすレオン。

「そうか・・・認めてほしければ・・・戦えってか・・・」

両腕に魔力を込めるレオン。

ギユウウウウン・・・

「はあ！！」

剣に向かって、思い切り自分の剣を叩きつけるレオン。

ガアン！！

「ぐ・・・・・・な・・・まさか、押される・・・？・・・どうして・・・」
悩むレオンだったが、すぐに理由が分かる。

「そうか・・・この剣は俺の力の源・・・力の根源に立ち向かっても・・・
そりゃ、勝てないわけだ・・・」

でも、と付け加えるレオン。

「俺には・・・あきらめきれない理由がある！！そのためにはお前の
力が必要だ！！・・・お前も俺も、融合することで真の力に目覚める・
・だからこそ・・・全力でお前に向かってやる！！」
叫ぶレオン。

「おおおおおおおおおおおおおお！」

漆黒の魔力がレオンの体を包み、そして・

バサア・・・

漆黒の翼が顕現した。

「行くぞ！！・・・お前の主・・・持ち主は・・・俺だ！！・・・さあ・・・お前の名を告げてやる！！・・・お前の名は・・・」

突撃するレオン。

《レオン・・・その剣は・・・あなた自身・・・だからこそ・・・あなたはそれを・・・受け入れなければならない・・・その子も・・・あなたをずつと・・・待っていたのだから・・・》

ミーフィスの声がどこからか聞こえた気がした。

ああ・・・分かってるさ・・・ミーフィス・・・

「お前の名は・・・殲滅の黒王剣ハレーヴァテイン！！！！」

「さあ・・・俺と来い、レーヴァテイン！！」

剣が輝き、レオンの体に吸い込まれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

目を開けるレオン。

「レ・レオン・・・どうした・・・早く・・・逃げぬか・・・」
弱弱しく告げるヴェクトリア。

「レオン・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ズバン!!!!

レオンの体から、凄まじい量の魔力が放出。

「!!!」

驚くゼクシア。

「!?!?・・・あれは・・・レオン君なのか・・・？」

呆然とするアリウス。

それもそのはず・・・今レオンが放っている魔力量は、ゼクシアやアリウスが放っている魔力量を遥かに・・・絶対的な差があるほどの魔力を放っていたのだから。

「oooooooooooooooo!!」

絶叫するレオン。

レオンの体からあふれ出た魔力は、レオンの体を包み込む・・・
「おおおおおおお・・・！」

バサア・・・

レオンの背から、漆黒のオーラの翼が顕現。
大きさは、100メートル程あるだろうか・・・それほどの大きさだった。

さっきまであつた太陽が消え始める。

「バカな・・・！？・・・日食・・・？時期でもない今に！？」
叫ぶアリウス。

「目覚めた・・・闇より選定されし者々が・・・」
意味深い言葉を呟くゼクシア。

「・・・全て・・・魔力を削り取る・・・そのためには・・・もつと力が必要だ・・・そのためには・・・」
上空の雷球を睨みながら告げるレオン。

そして、ミルフェリーナ王国全土を覆うほどの、漆黒の魔法陣が天空に展開。

そのころ、ルベリージア学院では。

突然の日食が始まったことに、全員が驚いていた、おまけに、遠い
天空に、漆黒の巨大な魔法陣が顕現した。

「これは……」

呆然と呟くアリシア。

「おいおい……どうなってんだよ……こりゃあ……!?」
叫ぶルーク。

「レオン君?……何をしているの?」
心配そうに呟くアリス。

「だめ……だめだよ……レオン君……」
泣きそうなアリス。

さつきから、胸が締め付けられる……なぜかは分からないが……動
機が収まらない。

そして……あの男も。

「ク……クク……ハハハハハハ!!……やっと……やっと目覚め
てくれたな……!レオン!!……我が愛しき、
ハハハハハハ!!」
空に向かって両手を掲げるジャック。

「世界の全てを闇が覆う時……終焉の剣が姿を現す……さあ……
レオン……その力を解放しろ!!……世界を闇に変えろ!!」

そして、場所は戻り、ミルフェリーナ城。

「おおおおおおおおお！！」
叫び続けるレオン。

そして、空中にあった、魔法陣から、ブラックホールのようなものが、発生、あれほどの莫大な力を食い尽くした。

「……………バカな……………いくら闇でも……………あの、伝説の神技を
あっさり……………」
呆然と呟くゼクシア。

「どうやら……………お前の組織の予想を……………レオン君が裏切ったようだ
な……………」
ゼクシアを睨むアリウス。

「さて……………こっちはこっちで続ずきをやるつか」
笑うアリウス。

「あなた正気！？……………あそこまでの力をあの子如きが制御できると、
そう思ってるの！？……………だったら無駄よ……………もう終わり……………逃げな
きゃあなたも死ぬわよ！！」
叫ぶゼクシア。

「……………いや……………レオン君なら……………制御できるさ……………俺達は……………
それを信じてる。」

「!?!?!?!?!」
絶句するゼクシア。

しかし……ここで異常発生……顕現させた魔法陣の様子がおかしい。さつきから、不安定になり……明滅を繰り返している。

「まずい……暴走している……このままでは……この国……いいえ……星鏡世界が終わる……!」
混乱しているゼクシア。

「まあ、妥当なところだろう……アレほどの力を一発目で制御しようとする……こと自体、無謀だ……でも……」

「早く逃げなさい……最後よ……同期のよしみでいってあげる……死ぬわよ」

真剣な顔をするゼクシア。

「へえ……でも残念……信じてるから……何があっても……レオン君は信じるに値する人間だ。」
当たり前のように告げるアリウス。

「まずいぞ……レオン……このままでは……」
眩くヴィクトリア。

「………ああ……でも……大丈夫だ……全てを終わらせ

るから。」
微笑むレオン。

「……………そうか……なら、お前の思うままにしてみるかい」

微笑むヴィクトリア。

「ああ……ありがとう。」

そして……

「力を貸してくれ……ミーフィス……我が元に君臨せよ……世界を終焉へと導く魔剣よ……全てを殲滅し、我を全ての頂へと導かん……漆黒の戸帳よ……今、降りよ……神よ……嘆け……恨め……来よ、殲滅の黒王剣ハレーヴァテインヰ！」

レオンのなかで、誰かが自分に魔力を流し込んでくれているような感じがする。

「……………」

レオンは目を閉じ、それから見開く。

レオンの体から魔力が放出、それが天空へと伸びる、レオンは片手を伸ばす……そして。

ガシャン……

レオンの手に一振りの剣が握られた。

剣というより、大剣に近い。

だが、レオン自身は、重さを感じていないようだった。

あるところで、ジャックは呟いた。

「これからだ・・・これから、全てが・・・にしても・・・邪魔な女だ・・・ミールフィリスめ・・・《聖天王国アルビオンの皇女》風情が・・・」

-----次回予告-----

次回から、新章へと突入します。

見てくださった皆様には感謝しても仕切れません。

これからも、聖天の宝具使いをよろしく願います。

次回、新章、聖七騎士団編・・・スタートです！

レオンは見事、事態を沈静化させ、英雄となったレオン。やっとの思いでルベリージャ学院での生活が再び始まる。

新章・ブレイド・カーニバル(前書き)

大きな争いが終わりを告げ、ようやく学院へと帰ってきたレオン。

新章・ブレイド・カーニバル

一週間前、この世界を揺るがす程の大事件が起きた。

それは、謎の襲撃者によって、ミルフエリーナ王国が消滅しかけ、揚句の果てに世界が滅ぼうかという事態にまで発展、しかし、その事態をたつた一人で鎮圧した人間がいた。その者の名前はレオン・イル・エキテス、ルベリージア学院所属の一年生だ。

ミルフエリーナの人々には、それが誰か知らされていない、それは無論、余計な混乱を防ぐためである、しかし。人々はその名も知らない。英雄を讃えた。

ミルフエリーナ城、王の間。

「レオン君。ありがとう、君のお陰でこのミルフエリーナ王国は救われた。皆を代表し。本当に感謝する。」
頭を下げるアリウス。

「そ。そんな!!。頭を上げてくださいアリウスさん!!」
慌てて告げるレオン。

「いいや。こうしなければ。俺の沽券にも関わるしね。何よ、君は我が妹やこの国を救った英雄だ。これぐらいは当然だ。」
笑うアリウス

「英雄!?!。俺が!?!」

驚くレオン

「ああ、当然だ、正体を表立ってだせないから、イベントのようなものは開けない・・・だからこうして俺が変わりに君に感謝しているんだ・・・本当にありがとう。」

「あ、そうだ！・・・あのゼクシアという奴は・・・」

「ああ・・・あいつなら何処かへ行ってしまったよ、でも不思議なことが起きてね・・・フルセイクの遺跡があったろう？・・・あの遺跡の壁画が全て消えていたんだ、跡形もなくね。」

え？

「遺跡が・・・ですか・・・？」

「ああ・・・勝手に・・・まるで役割を終えたかのようにね・・・」

ふとレオンは遺跡でのヴィクトリアの言葉を思い出した。

《恐らくここに我ら・・・いいや、お前を連れてくることを・・・》
確かこう言っていた。

「・・・！？・・・アリウスさん！！ヴィクトリアは！！」

あせるレオン

「ああ・・・ヴィクトリアは大丈夫だ、治癒魔法を使って腕を治療している。」

・・・よかった・・・

「そうそう、ゼクシアが去り際に君にこれを渡すよう頼まれてね。」
アリウスがレオンに差し出してきたのは、手のひらサイズの緑色の玉だった。

これって・・・

「何でもゼクシアが言うには、神器の核らしいよ。」

神器・・・エグザリオの核・・・

「まるで・・・宝玉ですね・・・」
呟くレオン。

「しかし・・・本当に君には驚かされてばかりだ・・・まさか、ゼクシアの必殺技をあも簡単に消滅させたのだから・・・それに、あの剣・・・レオン君がいうには神具だったな・・・？・・・アレも凄まじいものだ・・・我々とは、次元を異にしていた。」
思い出すように言うアリウス。

「そう・・・ですね・・・でも」
恐らく、自分ひとりでは、もう出せないだろう・・・あの時はミーフイスが協力してくれていた・・・でも、自分一人では・・・あの強大すぎる力を制御できない。

「どうかしたのかい？」

「あ・・・いいえ！何でも！！」

「そうか・・・とりあえず・・・君はこれから、学院へ戻るといい。」
告げるアリウス。

「はい・・・でもヴィクトリアに挨拶を・・・」

「いや・・・それが・・・今はレオン君と顔を合わせずらそうだったから・・・恐らく自分が何もできなかったことを悔いているのだろう、今はそつとしてやってくれ・・・」

しみじみ告げるアリウス

「はい・・・分かりました・・・では、お世話に・・・」
待つてくれとアリウス。

「君には特別に王室許可証を渡しておく。」
アリウスが渡してきたのは、何かの巻き物だった。

広げると、この者を、自由に城へ行き来できることを許可する、と記してある、しかも・・・アリウス王のお墨つきだ。

「!?!?・・・これ・・・こんなものいただけませんよ!?!」
驚き叫ぶレオン

「いいや、君はそれほどの活躍をしたのだよ、レオン君・・・だからこれは君にあげよう。」

「はい・・・分かりました・・・」

「では・・・レオン・イル・エキテス!」
急にフルネームで呼ばれあせるレオン。

「は・・・はい!?!」

「今日から君は宝具使い(ハナイト)だ、精一杯頑張ってくれ。」

え？

「今日から君はナイトだよ、レオン君、本来なら、神具というものを使う君は・・・ナイトと呼ぶには妙かもしれないが、これが一番シツクリ来る。今から、儀式を行う。」

！！

「はい！！」

そして・・・

「レオン・イル・エキテス・・・汝は大いなる力を正義のために使うことを誓うか？」

壇上の上にアリウスが立ち、その下でレオンが跪く、そしてアリウスは剣をレオンの肩に添える。

「はい！」

「そして、世界に危機が訪れれば、弱き者のために武器を取ることを誓うか？」

「はい。」

頷くアリウス。

「レオンよ・・・我が名において・・・汝をここで・・・正式なナイトに任命する。」

「は……我が王よ。」
真剣に告げるレオン。

そして、儀式を終え、レオンは城を出た。

そして……学院に到着。

「レオン君!!」

アリスが急にレオンに抱きついてきた。

「レオン君！大丈夫？・怪我とかしてない!？」

泣きながら聞いてきたときは、胸が熱くなった。

「レオン君……お疲れ様……大活躍だったそうね、こっちからも、レオン君の力の一端が見えたわ……お帰りなさい。」

そして……更にはアリシアにまで抱きつかれた時は、死ぬかと思っ
た。

「レオン……お前って奴は……なんて奴だよ……ったく……」

皆から心配されていたことにレオンは感動していた。

「にしても……お前……ナイトになったんだな……俺と遂に並びや
がったか。」

嬉しそうに言うルーク。

「ところでレオン君・・・ヴィクトリアは・・・
探すアリシア。」

「それが・・・」

状況説明・・・

「なるほど、それで・・・まあ、あの子なら大丈夫でしょう。
ところでアリシア。」

「レオン君が背中に下げている剣は何？」

「え・・・ああ、アリウスさんが、くれたんです。」

「おい・・・お前・・・そんな呼び方で・・・王様のことを呼んでんのか・・・」
「恐れ多い奴だと告げるルーク。」

そう・・・レオンが城を出る前・・・

「レオン君、君にあげたいものがある。」

そういつて、アリウスが差し出したのは一振りの剣だった。

「これは・・・？」

「ああ・・・遺跡が消えたことは話したね・・・？・・・そこに、この剣
が一振り刺さっていたんだ。」

「遺跡に・・・？・・・そんなことが・・・」

驚くレオン

「ああ・・・だから、恐らくこの剣は、君に関係するものだろうと踏んでね。」

「名前は、ハ被剣ミスティルテインヰと刺さっていた場所に記されていた」

「ふーん・・・きつと・・・ろくでもない剣だろうけどな・・・」
ルークが告げる。

!?

「ええ・・・確かに・・・そうかもね・・・」
アリシアまで告げる。

「レオン君・・・この剣・・・危険だよ・・・」
アリスまで・・・

「なんでだよ・・・？」

「だってよ・・・この剣・・・とてつもないハ何かヰを感じるぜ・・・」
「ええ・・・魔力でもなければ・・・気でもない・・・」
「レオン君・・・」

ルーク、アリシアさん、アリスの順で告げる。

「ええ！そんな事ないだろう？・・・俺は別に何も感じないぜ？」
キョトンとするレオン。

「じゃあ、ちよつと貸してみる」
ルークが剣に触れる直前・

バン！！

ルークが弾かれた。

！？

「なんでだ！？」

「……ててて……だろ……その剣……お前にしか触れねえよ……」
うんざりするルーク

「でも……アリウスさんは……」
……！！

そう言えば……魔力をこれでもかと両手に溜めて、膜を作ってから触れてたような……

「じゃ……じゃあ……これ……超危険……？」
今更きずくレオン。

「ええ……でもレオン君は大丈夫みたいだけどね」
苦笑するアリシア

「レオン君……何かあったら、私に言って……破壊するから。」
さらりと怖いことを言うアリス

と……

「ところでレオン君? ・ ・ ・あなた、あと少しで、ブレイド・カーニバルが始まるって知ってた? 」

ブレイド・カーニバル?

はて ・ ・ ・そんなものは知らない。

「なんなんですか? そのブレイド・カーニバルというのは? 」
尋ねるレオン。

「ブレイド・カーニバルはその名の示すとおり、剣を使って戦いあうの、でも ・ ・ ・魔法系一切使用禁止だけどね? 」
告げるアリシア。

「魔法禁止? ・ ・ ・へえ、そんな行事があつたんですか ・ ・ ・」

「ええ、女子は自由参加だけど、男子は強制参加だから気をつけてね。」

レオンはふと、頭に浮かんだことをアリシアに質問した

「あ ・ ・ ・アリシアさん ・ ・ ・こんなこと聞くの ・ ・ ・変かもしれませんけど ・ ・ ・」

「何 ・ ・ ・? 急にあらたまつて ・ ・ ・」
真剣になるアリシア。

「アリシアさんは ・ ・ ・ゼクシア・ファイラーベって人 ・ ・ ・知っていますか ・ ・ ・? 」

恐る恐る尋ねるレオン。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・？」
呆然となるアリシア。

「どうして・・・・・・・・レオン君が・・・・・・・・ゼクシア会長のことを知ってるの・・・・・・・・？」

「あ・・・・・・・・いえ・・・・・・・・有名な人だったから・・・・・・・・それに・・・・・・・・アリウスさんの同期って聞きましたし・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・そういうこと・・・・・・・・」
ホッと安心するアリシア

「あの人はね・・・・・・・・私の憧れよ・・・・・・・・あの人に憧れたからこそ・・・・・・・・私はいま、会長をしているの。」
懐かしむように言うアリシア

「・・・・・・・・その人が・・・・・・・・国を襲った張本人とは・・・・・・・・言わないほうが良いだろうな・・・・・・・・」

「じゃあ・・・・・・・・とりあえず・・・・・・・・部屋に戻ります。」

「分かったわ・・・・・・・・じゃあ。」
手を振り去っていくアリシア

「レオン君・・・・・・・・お帰りなさい・・・・・・・・」
微笑むアリス

「ああ・・・・・・・・ただいま・・・・・・・・アリス」

やっと……かえって来れたんだ……俺の居場所に……

場所は、ルシアーデ王国……

「ふふ……失敗したようだな……ゼクシア……
ある男が告げる

「は……申し訳ありません……この償いは何なりと……
跪くゼクシア。

「よい、顔をあげよ」
はい、とゼクシア。

「それで、闇の方は目覚めたのか……？」

「はい……完全とは言いませんが……半分ほどは目覚めたかと……」

「ふむ……そうか……ジャックの奴はなんと……？」
首をかしげる男。

「ジャックは……」
ゼクシアが告げようとしたとき……

「俺の話か……」
ジャックが暗がりから歩いてきた。

「ほう・・・私に気配をきずかせないか・・・さすがだな・・・」

「ふん・・・どうでも良からう」

機嫌悪そうに首を横に振るジャック

「ジャック・・・王の御前だぞ！」

叫ぶゼクシア。

「よい・・・それよりジャックよ、聖七騎士団はそろそろ、動くのか？」

「ああ・・・今メンバーを集めている、直に集まるだろう・・・」

そうかと男

「しかし・・・今回失敗したからには、ミルフェリーナも黙ってはいまい・・・アリウスも馬鹿ではない・・・こちらも・・・そろそろ始めなければな。」

.....

「これからだ・・・これから世界は動き出す・・・今まで眠りについてきた者達も目覚め始める・・・さあ・・・始めよう、愚かなる《漆黒の光の生贄》どもよ」

-----次回予告-----

遂に開催された、ブレイド・カーニバル、レオンは猛烈な剣術で相手を圧倒！

しかし、レオンの前に、アリシアが立ちはだかり!?

「レオン君!! 全力で戦いましょう!」

しかし・・・裏では、事件がひっそりと・・・しかし、確実に進行していた。

レオンたちの前に、フォース・ビーストが現れてしまう!?

次回、ブレイド・カーニバル? お楽しみに

ブレイド・カーニバル？（前書き）

学院主催のイベント・・・ブレイド・カーニバル・・・それは己の実力だけを信じて戦う、魔法禁制の戦い。

レオンは優勝できるのか・・・？

ブレイド・カーニバル？

ルベリージャ学院ではブレイド・カーニバルの開催を前に、生徒達は色気だっていた。

剣と剣をぶつけ合う、金属音がそこらかしこに響いている。

「しかし・・・レオン・・・お前は訓練する必要がなくて羨ましいぜ。」
レオンを羨ましそうに見つめるルーク

ここは、ルベリージャ学院、総合訓練場、普段は宝具や魔法の使用訓練で使われる場所なのだが、ブレイド・カーニバルが近いため、たくさん生徒が使っている。

「何が羨ましいんだ？」

問いかけるレオン

「だって、お前・・・剣に関しては超一流だろ？・・・ったく・・・なんで剣術にだけは長けているんだ・・・お前は・・・」
うんざりしているルーク

そう、学院の授業の優劣はレベルによって分けられている、一番最上位のA・中間位のB・最下位のCで成り立っており、Aをとる人間はかなり優秀なものとされている。

因みにアリシアのように魔力レベル、宝具制御率、運動能力などなど・・・かなりAランクがついている生徒もほんの一握りだけ、ルベリージャ学院に在籍している。

レオンは、刀剣技術がAランクであり、教師の間でも認められているほどだ。

「俺はそれしか特技がないんだ。」

と・・・レオンの頭に過去の出来事がよみがえる。

《レオン・・・あなたは最強のナイトとなるのよ・・・なぜならあなたは・・・この私の・・・ナイトなのだから・・・》

？・・・あれ・・・過去にそんなことを言われたような気がするけど・・・誰に言われたんだっけ・・・？

「レオン？・・・どうかしたのか？」

不思議そうな顔をしているルーク
どうやら、ぼけっと突っ立っていたようだ。

「あ、いや！なんでもない！！」
そうかとルーク。

「ルーク、俺と手合わせを頼めるか？」

「ああ、いいぜ。」

レオンとルークは互いに10メートルほど離れる。

「さあ、レオン！来い！！」

掛かって来いとルーク

剣を両手で持ち、斜め前に突き出している。

は・・・ルーク・・・それじゃ隙だらけだぜ・・・

「行くぞ・・・」

対してレオンは剣をだらりと下げたままだ。

「レオン隙だらけだ！！おおおおお！」

叫び、突進してくる

そして、ルークが剣を思い切り振りかぶる。

そして振り下ろす。

アリウスさんとの戦いで、かなり進歩したんで・・・

振り下ろされた剣をレオンは自分の剣を真横にし真上に突き出す。

ガアン！！

「はっ・・・どうした！・・・防戦一方だな！！」

笑うルーク

「さて・・・あまいのは・・・どっちかな？」

レオンは剣を斜めに傾ける。

つまり・・・レオンの剣が水平だと思い、全力を加えていたルークの

剣がスライドし地面に叩きつけられる。

「な・・・！！！」

驚くルーク

「はっ・・・！！！」

ここぞとばかりに下から上に振り上げ、剣を絡ませ、弾く。

「ガイーン!!」

ルークの手から剣が離れる。

「ザン！」

ルークの後ろに刺さる。

「……さすが……お前、すんげえ強くなってるな……」
感嘆するルーク。

と、ここで拍手が。

「レオン君すごいね。」

微笑みながらアリスが近寄ってきた。

「アリス? …お前なんでここに?」

「レオン君達の様子を見に来たの。」

はい、とレオンとルークにタオルとドリンクを渡すアリス。

「そういえば……レオン君たちは女子が何人参加するか知ってる?」
問うアリス

「さあな……あんまり知らねえな。」
とルーク

「俺もだ、何人出るんだ?」

「話では8人らしいけど……」

アリスが言う。

そういえば・・・アリス・・・だいぶ明るくなったな・・・
良い事だよな・・・これって。

「あと・・・噂ではアリスさんも参加するらしいよ。」
さらりと衝撃の事実を告げるアリス

ピキリと硬直する二人。

「お・・・おい、それって・・・かなりやばいんじゃないか・・・」
青ざめるルーク

「ああ・・・アリスさんが本気でしたら・・・俺でも勝てるかどうか・・・
魔法系禁止で・・・本当助かった・・・」
震えるレオン

「たぶん、魔法OKなら、俺達に命はなかった・・・」

ああ・・・たぶん・・・いや、絶対そうだった・・・

ここは、惑わしの森・・・そこに、大量の魔獣たちが終結していた、
五百体は軽いだろう・・・

そこに・・・人型の黒い存在が現れた・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして魔獣たちはルベリージア学院の方へと進み始めた・・・

「それでは、ブレイド・カーニバルをこれより開催したいと思えます！」

マイクを片手に話す男子生徒。

「アリシア会長より、挨拶いただきます。」

マイクを渡されるアリシア。

「皆さん、今回のブレイド・カーニバルも頑張ってくださいませよう、友達だからと手加減せず・・・無論女子が相手でも全力で向かうよう心がけて下さい。」

苦笑する男子。

「それから・・・なんと今回は・・・アリウス王がお見えになっています！」

!?

そして・・・

「やあ、学生諸君！・・・自分の全力を精一杯だしてくれたまえ！」

朗々と宣言するアリウス。

.....

全員沈黙・・・

おおおおおおお！！

大声援。

「……うそ……だろ……アリウスさん……!?」
驚きのあまり声がでないレオン

「おいおい……あれが・アリウス様か……若くねえ……?」

「うん……若いね……」

ルークもアリスも驚きで上手く喋れていない。

……

アリウスは学院の女子生徒から詰め寄られていた。

それもそうだろう、完璧なイケメン顔にヴィクトリアと同じ金髪の髪……いわゆる……モテル男という奴だ……

しばらくすると、レオン、アリス、ルークの三人は客室間に呼び出された。

「やあ、レオン君、久しぶりだね」

笑うアリウス。

「それから、ルーク・ブリトニー君だね?……うちの者がすまないことをした。」

い……いえ! 言いですよ……そんな!! と慌てるルーク

「それから……君が……光の末裔か……」

アリスを見つめるアリウス

「あ……あの……アリス・ランガルドです……」

アリスでさえも、若干緊張しているようだ。

「皆には、ヴィクトリアを守ってくれたことの礼を言いたくてね。礼を告げるアリウス。」

そして・・・

アリシアさんが部屋に入ってきた。

「ああ、久しぶりだね？・・・アリシア」
「はい、お久しぶりです、アリウス王」

さらりと会話を始めた二人

ていうか・・・この二人・・・

「あの・・・もしかして・・・二人は・・・
おずおずと尋ねるレオン

「ああ、ちょっとした知り合いだよ
アリウスが告げる

やっぱり・・・只者じゃあないんだ・・・アリシアさん・・・
レオンのような特別な例を除いて、ただの一学生が、王と知り合い
などと、誰が考えるだろう？

「すこし縁があってね・・・」

「それより、みんなをここに呼んだのは、こんなことだけをする為
に来たんじゃあないんだ。」
真剣になるアリウス

「実は、この近辺に、強大な魔力反応を察知したのよ．．．しかも．．．その魔力レベルがとんでもないものでね。」
アリシアが告げる

「魔力．．．？．．．敵かなんかつすか．．．？」
尋ねるルーク

「敵であることには敵なんだけど．．．魔獣の魔力反応だったのよ．．．」

「魔獣ですか．．．？でも．．．魔獣なんて．．．大した脅威では．．．」
アリスが質問する

「そうだ．．．魔獣など．．．その辺の人間に任せれば、済む話だ．．．それで、一国の王が来るなんて、ありえない。」

「そして、その魔力がね、私達にも匹敵するほどの魔力を持つ魔獣だということが分かったわ。」
さらりと告げるアリシア

「?????．．．魔獣が、俺達に匹敵するほどの魔力をもつなんて．．．あるんですか．．．？」
呆然となるレオン。

「ありえない、普通ならね、でも．．．魔獣は魔獣でも、俺達と同等の魔力を持つ者だっているのさ．．．」
レオンを睨むアリウス。

「！！」

「まさか．．．」

「そう・・・魔獣の頂点・・・フォース・ビーストだ。」

.....

絶句するレオンたち。

フォース・ビースト・・・魔獣の頂点に君臨する存在、その戦闘能力は計り知れないと言われ、生息数はかなり少ないとされる。

やろうとおもえば、国のひとつくらいは、消せるらしい。噂では、人型らしい。

「そんな奴が.....」

「だから、みんなをここに呼んだのよ・・・？」

そうか.....だから・・・

「でも、ブレイド・カーニバルだけは、開催しなければならない。だから、あなた達に注意を促そうと思ってるね。」

微笑むアリシア。

「でも、勝負は勝負！全力で挑みなさい。」

「ああ、今回来たのは、その観戦もあるからね、楽しみにしているよ。」

微笑むアリウス。

「もし・・・魔獣がきたら・・・」

「大丈夫、この学院の周りに、強力な魔力結界を何重にも張り巡らせてある、そんなに心配はいらないよ、全力で頑張ってきたまえ。」

はい！

三人で返事をする。

そして・・・ブレイド・カーニバルが開催。

開催場所は、ルベリージア学院所有のコロシウムだ。

おおおおおお！！

歓声と剣戟の音が響く。

「第三回戦、2 - A所属、シンジ・アルスター対2 - B所属、アリシア・エーテラーゼ！！」

おおおおおお！！

「始め！！」

「いきます！アリシア会長！！」
シンジが突っ込む。

「あの人・・・早い・・・」
ルークが言う

シンジが剣を横に薙ぐ。

ブオン！！

凄まじい剣圧。

アリシアは剣を地面に刺し、その取つてを軸に宙で一回転。

おおおおお!!

これには、観戦客全員が驚く。

そのまま剣を抜く。

そして、振り下ろす。

ガン!!

シンジが受け止める

「ぐ・・・さすがですね・・・アリシア会長・・・
苦しそうに告げるシンジ。

「あなたもね・・・でも・・・まだまだ甘い。」

アリシアが剣を超高速で切りつける。

早すぎて見えない程だ。

「ぐあ・・・!!」

シンジの手から剣が吹き飛ぶ。

そして・・・

アリシアは剣をシンジの首元に突きつけていた。

わーーーーー!!!

大声援。

「さすが・・・アリシア会長だぜ・・・当たらなくて良かった・・・」
ほっと安心しているルーク。

「にしても・・・アリシアさん・・・宝具、双剣だろ・・・なのに・・・普通の剣をあんなに上手く扱えるのか・・・」

「すごいね・・・レオン君・・・」
「アリスも驚いているようだ・・・」

「試合が近い選手は準備に入ってください。」
放送がかかる。

「あ、そう言えば・・・俺もか。」
ルークが言う。

「がんばれよ！ルーク、それなりに頑張ってきて来い！！」
それなりって何だよ・・・と愚痴をこぼし行ったルーク。

「第六回戦、1-A所属、ルーク・ブリトニー対3-A所属、ベリジェ・クリスレント！！」

「三年か・・・運がないな・・・ルーク。」
しみじみ告げるレオン

しかも相手は女生徒・・・何から何まで最悪だった。

無論・・・ルークの敗北。

しかし・・・

ルークの敗北により、レオンがその女生徒と、戦うことに・・・

「レオン・・・俺の仇をとってくれ・・・」
「そういい残して、意識を失った。」

あのベリジェという生徒、とてつもなく強かった。

「第七回戦、1 - A所属、レオン・イル・エキテス対3 - A所属、ベリジエ・クリスレント！」

「さて・・・いくわよ・・・坊や・・・」
レオンを睨む、ベリジエ。
完全になめている。

「いいですよ、いつでも・・・」
レオンは告げる。

「では・・・は！」
突っ込んでくるベリジエ。

早い・・・さすが・・・最上学年・・・
剣を上から振り下ろしてくる。

ガンー！！
受け止めるレオン

「く・・・重い・・・これはルークが負けるわけだぜ・・・」

「けど・・・なめるな。」
レオンを中心に殺気が広がる。

「!？」

「はっ！！！！」
横になぎ払い。

ガン!!

受け止めるベリジエ・・・だが・・・

「きゃあああ!!」

あまりの力に吹き飛ばされるベリジエ。

「終わりだ!!」

剣を振り下ろすレオン。

「なめないで!!」

ベリジエが激昂。

ドウツ!!

「魔力!？」

「ベリジエ選手!! 魔力を使ってしまったー!! 不戦勝!!」

しかし・・・

「終わりよ!! 一年生の分際でわきまえなさい!!」
突っ込んでくるベリジエ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レオンは黙って剣を掲げる。

「レオン君逃げて!!」

アリスの叫びが聞こえる。

「はっ!! 魔力なしで私に対抗する気!!」

「ああ・・・終わりだよ・・・あんた。」
レオンの剣に一瞬、漆黒のオーラが宿る。

「はっ!!」
なぎ払う。

バオン!!!

突風が発生。ベリジエを圧倒的な力で壁に叩き付けた。

ドカン!!

「か・・・あ・・・」

倒れるベリジエ。

「・・・な・・・なんと!!レオン選手!・・・魔力を使った三年を一撃で倒したー!!」

わああああああ!!

大声援。

「ほう・・・成長したな・・・やはり、彼は天才か・・・」
目を軽く見開くアリウス。

「さすがね・・・レオン君・・・」
アリシアは手を震わせていた・・・
武者震いだ。

「レオン君・・・あなたと戦うのが・・・楽しみだわ・・・」

バキン!!

レオンの使っていた剣が粉々に砕けた。

「!?!?・・・なんで・・・」

そういえば・・・さつき・・・漆黒の魔力が見えたような・・・気のせいかな・・・

「レオン君!・・・無茶しないで・・・」

「ごめん・・・アリス・・・」

アリスの頭をそつとなでるレオン。

観客席に戻った瞬間そう言われた。

「でも・・・どうすっかな・・・剣が折れたんじゃ・・・」

あ!?!・・・確か・・・俺の部屋にアリウスさんからもらった剣があった!?!

「仕方ない・・・アレを使うか・・・」

-----次回予告-----

レオンは次に備え、準備を始める。

アリシアもそれは、同じだった。

そして・・・遂に、レオンとアリシアの決闘の時が・・・!!

「行きます!!アリシアさん!!」

「ええ！・・・来なさい！！レオン君！」

そして・・・フォース・ビーストが学院へ入りこんでしまう！？

次回、ブレイド・カーニバル？ お楽しみに。

ブレイド・カーニバル ? (前書き)

生徒会長 VS レオン!!

ブレイド・カーニバル？

レオンは急いで寮に戻っていた、理由は、レオンが先ほど使っていた剣が突然折れてしまったからだだった。

「しかし・・・なんで折れたんだろ・・・あのベリジェって人・・・強かったけど、剣が折れるほど強力で無かった・・・」

ていうか、剣が物理的に壊れるなんてまず無いわけだが、レオンは気にしないことにした。

ガチャリ・・・

扉を開け、ベッドの横に立てかけてある剣を掴む。

「でもこの剣・・・結局なんなんだろうな・・・アリス達が言うには、この剣・・・危険らしいけど、俺にはなんとも無いんだよな・・・」

キーン・・・

剣を抜くレオン。

どこからどう見ても普通の細剣だ・・・おかしなところもない・・・

・・・？

レオンは剣の側面に何か掘り込んであることにきずいた。

「何だ・・・なんて彫ってあるんだ・・・？・・・古代文字・・・？いいや・・・違うか・・・」

レオンにはなんと剣に文字が掘り込んであるのか、読み取ることができなかった。

「とりあえず、行くか。」

ブレイド・カーニバルも半分が終わり、いよいよ盛り上がりは最高状態になるうとしていた・

「終了ー！！これにより、今までで残った最後の女生徒は、やはり我らが生徒会長、アリシア・エーテラーゼだー！！」

わあああああー！！

「やっぱりアリシアさんが最後まで残ったか。」
寮から戻ってきたレオンはそう言った。

「あ、レオン君、戻ってきたんだ？」
アリスが言う。

「何しに行ってたんだ？」
ルークが問う。

「ああ、俺が戦った時、剣が折れただろう？・その代わりにこれを使おうと思つて。」
ガシャン・

二人に剣を見せるレオン。

「レオン君・大丈夫なのそれ・危険なんじゃ・」
「ああ・ていうか、お前よりも、お前と戦う生徒が・」

「何、大丈夫だろ？．．．どうせそんなすごい人とはあたら．．．」
レオンが言いかけたその時。

「第三十開戦、1 - A所属、レオン・イル・エキテス対2 - B所属、
アリシア・エーテラーゼ！！」

．．．．．

ルークとアリスがぼかんとしている。

「．．．．．まあ．．．その、なんだ．．．がんばれ。」
ルークはグッドラックと指を立てる。

「レオン君．．．成せばなる、だよ。」
アリスは目をそらす。

「．．．．．マジかよー！ー！ー！！！」
レオンの絶叫が響きわたった。

「ほう．．．これは．．．今回は一番の見世物かな。」
アリウスは薄く笑っていた。

「しかし．．．そろそろ魔獣どもが学院に現れてもおかしくない．．．
気をつけなければな．．．」

そして．．．

「レオン君・・・遂にこの時がきたわね・・・」

「はい・・・でも、相手がアリシアさんでも、手加減はしません。」
アリシアを睨むレオン。

「ええ、そうでなければならぬわ・・・もし少しでも手を抜けば・・・命は無いも同然と考えたほうがいいわよ、レオン君・・・」

ズン・・・

「!!」

アリシアから凄まじい殺気が放出される。

一方観客席では、誰もが口を閉ざしている。

あんなアリシアの姿を見たのは、全員はじめてだったから。

「・・・レオン君・・・がんばって・・・アリシアさんも・・・」

アリスは祈っていた。

「レオンにアリシア会長か・・・どうなるか、わかんえな・・・それに、この・・・」

殺気・・・離れていても、ビリビリと肌に響くこの感覚・・・
これが・・・

「本物の戦場・・・レオン・・・お前は、こんな世界を生きてきたのか・・・」

「さてさて・・・どうなるかな・・・まあ、俺個人としては、レオン君に勝ってほしい・・・だが、先輩としては・・・アリシアに勝ってほ

しい気もある・・・」
アリウスはそんなことを考えていた。

「どうあれ・・・君がどれだけ強くなったか、見せてもらおうか？・・・
レオン君。」
笑うアリウス。

「そ・・・それでは・・・これより・・・試合を、開始します!!」
司会すら、怯えて言葉を上手く話せないでいた。

「!!!」
レオンは一気に突っ込む。

「・・・・・・・・・・」
アリシアは黙って向かいうつ。

「はああ!!」
レオンは上から振り下ろした。
アリシアは防ぐ。

ただ、それだけ・・・それだけのはずが・・・

ガァン!!!
衝撃波を撒き散らす。

レオンとアリシアを中心に、地面にクレータができる。

「・・・・・・・・・・レオン君・・・私ね、あなたと戦いたくて、ウズウズ
してた・・・こんなことは初めて・・・いままで、何人もの生徒と戦っ
てきたけど・・・あなたが一番私を・・・・・・・・」

ガイン！

レオンの剣を弾く、それから、剣を目にも留まらぬ速さで、横切りに薙ぐ。
凄まじい剣圧。

「！！！」

レオンは本能的に危険を感じ、足を自分で払い、地面に倒れる。

剣が頭上を通過・・・風を斬る音を聞いた気がした。

アリシアは隙なく、剣を地面に叩きつける。

ガイン！

レオンは転がり何とかやり過ごす。

「危なかったぜ・・・でも、さすがアリシアさん・・・全力で行かないと死ぬ・・・」

「レオン君・・・その剣・・・アリウス王からもらった剣よね？」
アリシアが問う。

「はい・・・そうですね・・・」

「なら・・・全力で剣同士をぶつけても大丈夫じゃない？」
アリシアは言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルークとアリスは観客席から、アリウス王と同じところにいた。

「どういうことだ・・・？アリシア会長・・・何をいつて・・・戸惑うルーク。」

「きつとそれは・・・」
アリスが言いかける。

「それは、レオン君が本気で戦っていないからだろう。」
アリウスが告げる。

「ア・・・アリウス王・・・？」
ルークが驚く。

「レオンが・・・全力で戦っていない・・・？アレだけの動きをして？」

「ああ・・・君達は知らんかもしれんが・・・レオン君はこの私と戦い、対等に戦い抜いたのだよ？」

「レオンが！？」
「レオン君・・・そこまで強くなってたんだ・・・」
ルークとアリスが順に驚く。

「ばれてましたか・・・」
レオンは苦笑する

「ええ、レオン君・・・あなたアリウス王と対等にやりあつたらしいわね？・・・なら、私とも対等以上に戦えるはず・・・」

アリウスさん・・・！！・・・なんて余計なことを・・・！！

でも……知ってるなら……全力でいける……

「じゃあ……全力で、行きます……」
レオンの周囲が、暗くなる。

ズアン!!!
殺気。

「!!!」
アリシアが動揺。

ヒュン……
レオンの姿が消える。

!?

「な……レオンの奴……どこへ……」
見渡すルーク。

「後ろだよ……」
アリスが平然と告げる。

「見えるのか!?!?……アリスちゃん……?」
「うん……」

ほう……このアリスと言う子……あの動きを目で追うとはな……
アリウスは驚いていた。

ドン。

アリシアの後ろにレオンが出現。

剣を思い切り振り切る。

ガアアアアン！！

ドオオン！！

衝撃波。

アリシアは剣をかるうじて受け止める。

「く・・・やるわね・・・レオン君・・・私もきつめで行くわよ・・・」

アリシアの気配が変わる。

「行くわよ。」

アリシアがレオンに切りかかる。

ガン、ギン！

お互いに一步も譲らず剣を打ち合う。

「！！！！」

レオンが一步踏み出す。

「ふっ！！！！」

レオンは、剣を地面すれすれの部分で剣を上を思い切り薙ぐ。

レオンの剣が、砂埃を巻き上げる。

「！！！」

アリシアが目をつさぐ。

今だ！！

「はああ！！！」

レオンは「空間」を切った。

「何！？」

そうレオンが切ったのは、空間つまりアリシアの姿が無い。

しまった！？

「上か！！！」

反応するより早くレオンは剣を思い切り、上からの防御に当てる。そうしなければ・・・死んでしまう。

ドゴン！！！！！！

アリシアが空中から、剣を思い切り振り下ろす。

レオンは受け止めるも・・・

「ぐう……………」

重い……………！！

「負ける……………かあ！！！」

レオンは押し返す。

「なんですって?」
アリシアは驚く。

「おおおおおおおおお!!」
絶叫。

レオンから凄まじい「気」が放出。

「……これが……レオン君の本当の、実力……」

「はあああああ!!」

レオンは最後とばかりに突っ込む。

「なら……私も……少し本気を出さなければね……はああ!!」

アリシアもまた突っ込む。

そして……お互いが交差。

ドカアアアアアアアン!!

砂埃と衝撃波がコロシウムを覆う。

そして……

アリシアがレオンに剣を突きつけていた。

「!!!」

「レオン君!!!」

「.....」

アリウスは拍手した。

それにつられ、みんなが拍手をいだした。

「.....負け.....ましたか.....」

座り込むレオン。

「やっぱり.....アリシアさんは強い.....」

「いいえ.....あなたも十分に強いわ.....レオン君.....」

アリシアが手を差し出す。

レオンがそれを掴む。

「はっ!!!.....こ、この勝負.....いいえ、今大会、優勝は、アリシア・エーテラーゼだー!!!」

その時.....

「きゃあああああああ!!!魔獣よ!!!」
女生徒が悲鳴を上げる。

!?

「しまった！・・・入られたか！」
アリウスが叫ぶ。

「全員聞け！！・・・このルベリージャ学院に魔獣が侵入した、今から名前を呼ぶもの以外・・・学院の体育館に行け！！・・・そこに風魔法の上位詠唱・・・『エアリアル』の加護が施されている！！・・・レオン！アリス！アリシア！ルーク！この四名以外は非難しろ！！」
アリウスが叫んだ。

うわあああああ！！
きゃあああああ！！

逃げ惑う生徒達。

すぐさま、アリウスのもとへ終結する四人。

「レオン君、先ほどの戦い、見事だった。」

「は・・・はい！」

「さて・・・これから・・・」
アリウスの言葉がとまる。

「やれやれ・・・どうやら・・・お出ましのようだ・・・」

アリウスが前が出る。

立ち込める煙から出てきたのは、人の形をした、真っ黒い存在だった。

「ウ……ウアアアアア!!」

咆哮。

ドウ!!

凄まじい魔力。

「なん……」

レオンが絶句。

これが……フォース・ビースト……

フォース・ビースト（前書き）

魔獣の中で最強の存在が襲い掛かる。

フォース・ビースト

「どうやら・・・現れたようだな・・・」
アリウスは煙で見えないはずの所を睨む。

・・・

誰も言葉を発しない・・・いや、発せられない。

「すげえ魔力を感じるぜ・・・」

ルークが緊張した面持ちで告げる。

言われなくても・・・皆同じだろう。

そして、煙が立ち込める場所から出てきたのは、人の姿をしている
「何か」

あれが・・・

「フォース・ビースト・・・」

アリスが言う。

体の形は人型だが、悪魔のような尻尾が生え、顔も、人というより
ドラゴンに近い顔つきだ・・・そして全身が黒い。

「ウ・・・ウアアアアア!!!」

咆哮。

ズン・・・

膨大な量の魔力が放出。

「みんな！来るわよ！！」
アリシアが叫ぶ。

！！

ヒュン……

魔獣「フオース・ビースト」の姿が掻き消える。

「何！？」

レオンが叫ぶ。

ドン！

「！！」

ルークの横に出現。

それから魔獣はルークに回し蹴りを放つ。

「ぐあ！！」

ルークが吹き飛ぶ。

ガアン！！

壁に叩きつけられ意識を失う。

ルークが一撃で？

「くそお！！」

レオンが、自分の真横にいる魔獣に向けて剣を振り上げる。

「……………」

しかしその前に魔獣がレオンのみぞおちにパンチを放つ。
ドゴン！

「か……………あ……………!?」
重い……………!

吹き飛ばすレオン。

しかし…………

「レオン君！」

アリスが白い翼を顕現させ、レオンをキャッチする。

「アリウス王、行きます！」

「ああ、行くぞ。」

アリシア、アリウスが順に告げる。

二人はすぐさまその場から距離をとり、まずアリシアが切りかかった。

「はっ!!!」

試合用の剣を横に薙ぐ。

ガキン!!!

「!?!」

なんと魔獣はアリシアの剣を片手で受け止めた。
バキン!

魔獣に触れた部分が割れる。

「!!!」

距離をとるアリシア。

「炎魔法、高位詠唱、フルス・アレク・エーテス・ハフレイム・グレイドル」

アリウスの手には強大な力を持つ、炎の鎌が握られた。

「はっ！」

一瞬で距離をつめる。

ガアン！！

魔獣に叩き突きつける。

しかし、魔獣は片腕を前に突き出して、受け止める。

キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「魔道砲撃か！！」

魔獣は、もう片方の腕をアリウスに向けたと思った瞬間、指先から魔力が放射された。

ズン！！

「く……………さすがに早い……………砲撃に予備動作が全くないとは……………」

炎の鎌で受け止めながら呟くアリウス。

「はっ！！」

鎌をスライドさせ、砲撃をそらすアリウス。

と。

「我が元に顕現せよ、風を束ねし、大いなる双刃よ。大地を駆け、天を掴め、疾風迅雷の双剣、ウインディーネ！」

アリシアの手に宝具が顕現。

「ウインデーネ・・・解言・・・参錬迅・・・一雙波△デルト・クライ
シスㇿ！！」

宝具顕現から連続して攻撃へと転じた。

双剣から、風の塊が放たれる。

「ウ・・・ア・・・」

魔獣が両腕を前に突き出し受け止める。

その隙に・・・

アリスアの姿が掻き消え、魔獣の後ろに回り込む。

「はぁ！！」

振り下ろす。

ドゴン！

しかし、魔獣の体から魔力障壁が展開。
お互いにぶつかる。

強大な魔力同士の衝突で衝撃波が発生。
辺りを撫でる。

「ぐう・・・」

なんて戦いだ・・・

レオンはそう思った。

凄まじいほどの魔力のぶつかり合い、その辺の生徒なら魔力にあて
られ、気絶しているだろう。

「レオン君・・・大丈夫？」

立ち上がるレオンを心配するアリス。

「ああ・・・俺達も・・・いっつぜー!!」
「うん!!」

ガイン!!

「く・・・」

なんと魔獣の魔力障壁がアリシアの宝具を弾いた。
そのまま後ろまで吹っ飛ばされるアリシア。

そこで・・・

「発動!黒滅魔法!黒波激剣ハシャドウ・オブ・ブレイドヾ!!」
「発動!光煌魔法、白天創剣ハライト・ブル・エクレスヾ!!」

レオンとアリスが左右から黒と白の剣を纏い、挟み撃ちにする。

「!?!」

魔獣が動揺。

そして・・・
ドオオオオオン・・・

魔獣が片方ずつ腕を左右に突き出して受け止める。
激突。

「ウ・・・グ・・・」

「はあああああ!!」

「はああ!!」

レオンとアリスが押している。

凄まじい魔力同士が激突。

「凄いわね・・・これが、光と闇・・・」
アリシアでさえも、怯むほどだ。

「レオン君達！！そのまま、魔獣を抑えているんだ！！」
アリウスが上から告げる。

何時の間にもいたのか、アリウスは学院の屋上にいる。

「今からデカイのやる、そのままだ！」

『はい！！』

レオンとアリスが呟く。

「ゲ・・・ウ・・・ア・・・」

魔獣の、レオンとアリスの防御に当たっていた手のひらが、ボロボロと崩れ始めた。

二人の魔力に押されている。

「炎系・・・神技魔法・・・」

あれは・・・とレオンは戦いながらアリウスを横目で見た。

神技魔法は、伝説の宝具使いの末裔にしか使うことはできない。

「神炎・・・・・・緋炎紅蓮陣ハスカーレット・エンブレム！！」

アリウスから途方もない魔力が放出。

そして、天空に強大な赤い魔法陣が展開。

「二人とも、そこから離れなさい！！」

アリシアが叫ぶ。

即座に二人は離れる。

「威力縮小・・・千分加減・・・行け!!!」

アリウスの魔法陣から強大な赤い火の柱が魔獣に叩きつけられる。

「グウウウウウオオオオ!!!」

魔獣が絶叫。

「すごい・・・これが・・・神技・・・」

レオンが絶句。

「まずい!!!」

屋上から降りてきたアリウスが告げる。

「何がまずいんですか?」

「神技はあまりに強大な力なんだ・・・そのまま・・・いや、半減させ
たとしても・・・国の一つや二つは軽い・・・この学院を巻き込まない
よう、千分の一に抑えたんだが・・・」

千分の一!?

これが・・・!?

「加減させすぎて、魔獣に少し、余裕を与えてしまった・・・!」

魔獣は何とか逃げようとしている。

「まずい!!!このままじゃ・・・」

どうすればいい・・・?魔獣を撃つにはあの魔法の中を越えていかな
ばならない・・・

そんなことできるのか・・・人の身で・・・

ドクン……

「!?!?……これは……」

レオンが叫ぶ。

なんと、念のために持ってきていた、
ハ被剣・ミスティルティン
が輝いている。

「これって……」

レオンは剣を持つ。

……

そうか……!!

レオンはこの剣の力を唐突に理解した。

そして、その瞬間なぜあの時、
レオンが使っていた剣が折れたか理
解した。

「そうか……あの時俺は……無意識で剣に魔力を込めちまったんだ・
・だから、剣が耐えられなくて……」

「お前なら……耐えられるか!!」
レオンに答えるように剣が一際輝く。

「レオン君……それは……」
アリスが問う。

「ああ……こいつなら……俺の闇にも耐えられる。」
微笑むレオン。

そして・・・

「おおおおおおおおお！！」

レオンは全力で剣に魔力を注ぐ。

剣から漆黒の力が溢れる。

剣が漆黒に染まる。

・・・これ、どことなく・・・レーヴァティンに似てる・・・

「おおおおお！！行くぜ・・・吹き飛ばええええ！！」

レオンは思い切り振り下ろす。

ズズズズズン・・・

レオンの斬撃は、アリウスの炎を突きぬけ、魔獣の体を真っ二つにした。

それならず、そのまま学院を突きぬけ、森一体を大地ごと縦に裂いた。

それによって、五百体ほどいた魔獣も一掃された。

「・・・・・・・・・・レオン君・・・・・・・・」

アリシアが絶句。

「ほう・・・レオン君は実は・・・破壊魔だったか・・・」
アリウスが笑う。

「すいませんでしたああああ!!」

結局・魔獣が襲来し、被害を加えたより、レオンの与えた被害の方が大きかったりするのだが・このことは・気にしないでおこう・

――次回予告――

遂に学院旅行に行くことが決定し、テンションがあがるレオン達。

学院旅行とは、1・2年生の合同で行う旅行である。

訪れる地は、ミルフエリーナ王国から、少し離れたところにある、
「ネルクス市」

そこは、商業が盛んな土地でもあった。

そこで、アリスやアリシア達と一緒に行動するレオン。

しかし、なぜか、生徒達から羨ましがられてしまい!?

そして・又もや事件の予感・

二体目の神器の陰がちらつき・

次回、学院旅行、お楽しみに。

学院旅行（前書き）

今回は学院での旅行！！

しかしレオン達にとっては、最悪な出会いの始まりだった。

学院旅行

ルベリージャ学院、生徒会長特別室にてアリシアとアリウスの二人が、話し合いを行っていた。

「それにしても・・・このルベリージャ学院近辺に最上級レベルの魔獣が現れるとはな、さすがに驚いた・・・」
アリウスはしみじみ告げる。

「ええ・・・そうですね・・・でも、レオン君やアリスちゃん、ルーク君のお陰で、回避できましたけどね」
微笑むアリシア。

するとアリウスはつまらなさそうに。

「ふん・・・お前も大したことは言えまい?・・・わざと手加減して戦ったな?」

ニヤリと笑うアリウス。

「・・・・・・・・・・」

「今回の魔獣戦、お前には到らないところが多かった・・・まずいくら最上級といえど、お前の宝具が弾かれるわけがない、それから、レオン君達はきずいていなかったようだが・・・俺は一度、お前の全力をみたことがあるからな・・・今まで・・・一度も本気を出したことなどないのだろう・・・?」

「・・・・・・・・やっぱり・・・きずいてましたか・・・さすがですねアリウス王。」

苦笑するアリシア。

「お前が本気を出せば、あの魔獣を一人でも撃退できたのではないか？」

アリウスが問う。

「無茶言わないでください、いくら私でも一人では無理です・・それに・・個人がどれだけ強くても、味方を信用できないナイトは、ナイトではない。」

「ふ・・確かにな・・だがお前なら・・『風翔』になりうる可能性を秘めているのだがな・・」

アリウスは独り言のように呟く。

「そういえば・・もうじき学院旅行か・・」

懐かしそうに告げるアリウス

「ええ・・ですから、思いきり楽しんでこないとはいけません」

笑うアリシア

「ああ・・だが・・一つ小耳に挟んでほしい話があつてな」

アリウスが真剣に告げる。

「何か・・あつたんですか・・？」

「それが・・」

ここは、ルベリーシア学院、中央グラウンド。

「皆さん、今日は待ちに待った学院旅行です、節度ある行動を心がけるよう、お願いします、それでは、出発してください。」
アリシアが笑顔で告げる。

因みに旅行する地はネルクス市だ、ネルクス市は物資の流通が盛んで、商業の街として有名である、しかも、千年前にネルクス市があった場所に住み着いていた異民族が残した、「アリガロス神殿」という遺跡も存在しており、学院の旅行には最適といえる。

街までの移動手段はさまざまで、グループによって違う。
陸を移動したり、空を飛んで移動したりと、魔法の力によってかなり複雑なものとなっている。

「んーどうするレオン、俺達、どうやって移動する？」
ルークが首をかしげる。

「俺とアリスの翼を使うのも・・・気が引けるんだよな・・・」

「そうだね・・・」

そう、二人は古代の魔法系統を使える、奇異な存在なわけだが、その力をむやみやたらと使うのは、自粛するよう、学院側から釘をさされている。

因みにアリシアやアリウスからは・・・

「別にいいんじゃないの？」

「気にせず使えばいい」

と・・・言っていたが・・・そんなわけにはいかないと、レオンとアリスは決めていたりする。

「うーん・・・どうすれば・・・」

レオンが悶々としているところへ。

「あれ？レオン君達、何をしているの？」

！！

全員が上を見ると、アリシアがいた。

「そう・・・それで、移動に困っていたわけね・・・」
苦笑するアリシア。

「いいじゃない、使っちゃえば。」
笑うアリシア。

そんなんでいいんですか・・・生徒会長・・・
全員がそう思った瞬間であった。

結局・・・レオンがルーク、アリスとアリシアがそれぞれ飛んでいる。

レオンの漆黒の翼とアリスの純白の翼はかなり目立っていて、地上を移動している学院生徒達や、一般の人からかなり見られている。

「なんか・・・あまり見られるのも・・・いいもんじゃないな・・・」
レオンは身をもって体感した。

「そうだなー下から見りゃ、天使と聖女と悪魔が飛んでいるような感じだろう」
笑うルーク。

恐らく、天使がアリス・聖女がアリシア・悪魔がレオンと言ったところか・・・

「あんまりふざけると落とすぞルーク」
ルークは下を見ると青ざめて口をつぐんだ。

高度は地上三百メートルはある。

そして……

「はあくやっとなつたぜ」
ルークが背伸び。

「はあ……はあ……さすがに疲れた……」
レオンにとって初飛行だった、この道のりは、かなりつらいものだった。

アリシアとアリスはピンピンしているが……

「とりあえず、私達が一番乗りみたいね。」

市長に挨拶に行きましようとアリシア。

「ようこそ、ルベリージア学院、諸君……といつても、代表者だけのようだね？」

レオンたちを迎えたのは、小太り系のおじさんだった。

「はじめまして。あなたが、トラークアさんですね？」
アリシアが握手を求めた。

「ああ、ようこそ、それから君がアリシア・エーテラーゼ君か、お噂はかねがね」

「光栄です。」

完璧なる営業スマイルを決めるアリシア。

「後ろにいるのは生徒会の方々かね？」

「いいえ、私と共に来た者達です。」
アリシアが紹介する。

「そうか、とりあえずようこそと、言うべきかな。私は、このネルクス市の市長をしているトラークア・ゲリボル、だ、よろしく。」
全員と握手を交わすトラークア。

「とりあえず、街を回ってみたらどうだい？」
トラークアがそう告げたので、街を回るレオン達。

街の建物はすべて、洋風的なつくりになっていた。

「すごいね・・・学院とは全然違うんだ・・・」
アリスは街に見入っている。

「それはそうよ、ルベリージャ学院周辺は、街なんかないから。」

「でもよ、これだけ大きい街ってことは、物騒なことも多そうだけ
どな。」

さらりと嫌なことを告げるルーク。

「そうでもないわよ、この街は平和なことでも有名なのよ。」
笑顔で告げるアリシア。

しばらく進むと、丘が見えた。

「あの丘は、インフェリオルの丘々と言ってね、あの上に、ハアリガロス神殿」立ってるの。」

アリシアが解説する。

この街は、周りをぐるりと岩肌に囲まれた街で、
「インフェリオルの丘」はその岩肌が大きく街の上に突き出している形になっている。

遺跡・・・か・・・大抵、遺跡って聞くと、ろくでもない目に合うけど・・・
今回は大丈夫そうだな・・・
レオンがホッとため息をつく。

「レオン？どうかしたのか・・・？」
ルークが問う。

「え・・・ああ、いつもいつも、遺跡って大抵ろくでもないものだから、
気をつけないとなくって思ったけど・・・今回は大丈夫そうだなと。」

ビクン！

アリシアが肩を震わせる。

「アリシアさん？」

「え・・・いいえ！なんでもないわ！！」
無駄に声を張り上げる。

「・・・いえない・・・レオン君・・・こんなに安心しきってるのに・・・」
アリシアはアリウスから言われたことを考えていた。

「実は、アリガロス神殿に入った観光客が帰ってこないという事件が多発しているらしくてな・・・」

なんで・・・こんなことになるのかしら・・・
と、アリシアはがっくりしていた。

「まるで・・・レオン君とアリスちゃんに、こづいづのが舞い込んで
きてるみたい・・・」
アリシアが呟く。

しばらくたち、他の学院生も集合してきた。

それから、全員が揃ったところで、トラークアの挨拶があり、それ
も終了。

自由行動時間となった。

「さてと、レオン、俺達は、二人寂しく回ろっぜ・・・」
ルークが肩を叩いてくる。

こいつに、近親間を抱かせてしまった・・・
とレオンは嘆いた。

と、その時。

「レオン君」
と、アリスとアリシアの二人がレオンに話しかけてきた。
そして、こづいづたのである。

「一緒に回ろっぜ」

.....

ええええええええ!!

街中に、生徒の絶叫が響いたと言う。

-----次回予告-----

美少女二人＋ルークと回ることになったレオン。

学院生徒から、なぜか、睨まれることに・・・

そして、アリシアが語る、この街の古い伝承とは？

そして、アリガロス神殿で、また事件が起こり!?

次回、学院旅行　？、お楽しみに。

学院旅行 ？（前書き）

遺跡を調査するレオン達。

しかし、そんなレオン達の前に謎の存在の影がちらつき・・・？

学院旅行 ？

「レオン君、一緒に回ろう?」

「一緒に回りましょう?」

アリスとアリシアは順にそう告げた。

.....

沈黙。

ええええええええええ!!

全員が絶叫。

レオン!! 最近怪しいとは思ってたがそこまで進展していたのか!!
レオン君!!

とそこらかしこから文句が飛んだ。

「な、なんでだ!?!? ..俺なにもしてねえぞ!?!」

「お前・・今世紀最強の鈍さだな・・」
ルークはあきれて物も言えないらしい。

いやいや、何にあきれているんだ?

結局、周りの生徒達から睨まれながら、観光を開始するレオンであった。

「しかし・・この街って本当に崖に囲まれてるんだな・・あの丘なんか崩れたら、ひとたまりもないだろうに・・」
レオンはうんざり呟いた。

するとアリシアが。

「大丈夫よ、あのハインフェリオルの丘は確かに街の上空に突き出しているけど、魔力的な力で支えられているのよ」

「へえ〜詳しいんですね、アリシアさん。」
「感心するレオン。」

「ええ、まあね、じゃあ・・・」
「続きを言いかけたアリシアの前に。」

「レオン君、あの神殿に行かない？」
「アリシアが言う。」

「!？」

「またもやアリシアが体を震わせる。」

「・・・ね・・・ねえ二人とも!・・・神殿はやめましょう?」
「アリシアが必死な形相で言う。」

「え・・・でも・・・行きたいのですが・・・」
「アリシアが困った顔をする。」

「別にいいんじゃないですか?自由行動なんだし・・・」
「というレオンやルークの言葉により、結局、神殿に行くことになった。」

「・・・何・・・この・・・不安定要素のオンパレードは・・・」
「そう嘆いているアリシアの心情は露知らず、レオン一行は、神殿に

向かうのであった。

そして神殿に到着。

「アリガロス神殿」は、何本もの柱が立ち並んでおり、まるで、柱だけがあるただの建物にしか見えないわけだが、学術的価値は計り知れない。

「なあ、レオン、この階段なんだ？」

ルークがあるところを指差した。

ん？

柱だらけの遺跡にポツンと階段が存在していた。

しかも下ではなく、空へと伸びている、だが途中で崩落したのか、意味の無い状態になっていた。あたかも、この世とは違う場所に繋がっているかのように……

「階段の先がないじゃないか……なんなんだ……？」
と、ルークが階段に足をかける。

ドクン……

！！

「やめろ！！」

「だめ！！」

「！？」

レオンとアリスが同時に叫び、驚き、足を下げるルーク。

「な……なんだよ……？」

ルークが聞いてくる。

「え・・・あ、いや・・・なんだか、この階段は・・・」

「うん・・・この階段に登るのだけは・・・やめておいたほうが・・・」
レオンとアリスは言葉を濁す。

「・・・・・・・・・・」

そんな二人の様子をアリシアは、横目で見ていた。

実は、アリウスから、階段に登った人間が消えたらしいという話を、アリシアは聞いていたりする。

「ほ・・・ほら・・・ここ凄い価値のある遺跡だろ・・・階段を壊したりしたら・・・」

レオンが告げる。

「ふむ・・・確かに俺だけの問題じゃなくなっちまうか・・・」
考えるそぶりを見せるルーク。

「みんな・・・ちょっと下に下りましょう。」
アリシアがそう告げる。

三人はいっせいにアリシアに反抗しようとしたが、アリシアの真剣な表情を見ると、頷き、従った。

「実は・・・この街に関してね・・・アリウス王から聞いていたことがあるの・・・」

アリウスさん・・・？

「なにか・・・この街にあるってことですか・・・？」
アリスが真剣に告げる。

「ええ・・・実はね・・・あの階段があったじゃない・・・？」

「ああ・さつき俺が足をかけた、あの階段ですか？？」

ルークが問う。

「ええ、その階段に登った観光客が消えるという事件が発生しているの。」

！？

これには全員絶句した。

「じゃ・・・じゃあ、あの時・・・レオンとアリスちゃんがとめてくれなきゃ・・・」

ルークが顔を真っ青にする。

「ええ・・・恐らく・・・消えていた可能性があったということ・・・」
アリスアが真剣に告げる。

「レオン・・・アリスちゃん・・・」

「ええ・・・それが気になっていたのよ・・・どうやって、この話を知らない二人が、あの階段が危険だと、見抜いたのか・・・」
ルークとアリスアが睨んでくる。

「それが・・・」

二人は顔を見合わせ話し出した。

「なるほど……ルーク君が足をかけた瞬間に、なにか、嫌な感じがしたのね……」

「ええ……何故かは分かりませんが……そんな感じがして……上手く表現できないレオン。」

「もしかすると……古代の力を継いだ二人には……あの遺跡の力が分かるのかもね……」

アリシアが考える。

「とりあえず……この街そして……あの遺跡の真実……いえ、伝承を話さなければいけない様ね……」

そして、アリシアは語りだした。

アリシアに因ると、この街は……

この街は、最初は存在しておらず、この街よりも、現在存在する、あの丘が最も最初にあったものらしい……そして、この地に天使が舞い降り、そこにたまたま住んでいた異民族の者達は、その天使の言葉通りの神殿を作り、その遺跡を「アリガロス神殿」となすけたそう。

そして、その天使は、この神殿に強大な力を持つ「何か」を封印した

そして、天使は、ここに街を作り見守るように告げ、姿を消したら

しい。

この神殿が建つ丘の、「インフェリオル」の丘という名前は、そこから来ているものらしい……というのがアリシアの話の全貌だった。

「なるほど・・・でもその話と階段の事件がどう関係しているんですか・・・？」

ルークが問いたくなるのも当然だった、この話には関連性がない。

「ええ・・・それは私もあまり知らないのだけど・・・なんでもあの階段は・・・天使が現れた時、調度、あの階段があった場所に舞い降りたらしいわ。」

つまり・・・あの階段は・・・

「そう・・・この世界ではない何処かへに通じている可能性があるということ・・・」

アリシアはそう告げた。

「そんなことが・・・」

三人は絶句した。

「だから・・・今日にでも調査を開始したいのだけど・・・三人とも・・・手伝ってくれるかしら？」

アリシアが微笑む。

はい！！

三人は頷いた。

-----次回予告-----

神殿の調査を行うレオンたち・・・しかし、レオンたちに事件が降りかかる！！

アリスが、急に操られたように階段を登り、姿を消してしまう。

そして、作戦を考えている時、ある人物が参上！？
「さあ、皆、アリスを助けに行くぞ！！」
金髪の少女はそう告げる。

次回、第二の神器、お楽しみに。

第二の神器（前書き）

第二の神器が出現・・・そして、神器の秘密も明らかに・・・

第二の神器

ネルクス市、夜8時、学院生徒達は、ホテルでワイワイ騒いでいるところであるが、レオン他3名はアリガロス神殿にいた。

「うーん・・・何もないな〜・・・」
ルークが困ったように言う。

「そんな簡単には見つからないわよ、遺跡の秘密なんてものはね。」
苦笑するアリシア。

「でも・・・本当になんなんですかね・・・アリガロス神殿の存在意義
って・・・」

レオンが告げる。

「存在意義？」

アリシアが首を傾げる。

「ええ・・・ミルフェリーナ王国のフルセイクの遺跡の時のように、
神殿とか遺跡には、何か重要な意味があって存在している・・・と、
そういうふうを感じるんです。」

そう、フルセイクの遺跡が、レオンを覚醒へと導いたように。

「レオン君・・・」

アリスが呼んだ。

「ん？・・・どうした？」

「なんか・・・声が聞こえない？」

アリスが階段を見つめる。

「階段から？」

アリシアが問う。

「はい・・・まるで・・・」

アリスはそれつきり黙ってしまった

「おい・・・アリス、どうした・・・？」

レオンがアリスに話しかける。

「呼んでるの・・・？・・・私を・・・」

と、アリスが階段に近ずき、足をかけた。

！？

「おい！アリス！！」

「アリスちゃん！？」

「おいおい！」

三人がアリスを止めにかかる。

しかし。

アリスは階段を上りきってしまった。

「アリス！！」

レオンが手を伸ばす。

バチン！！

「うぁー！！」

まるで見えない壁に弾かれるように、レオンが弾かれた。

「アリスーっ!!」

レオンが叫ぶ。

キイイイイイイン……

急に階段が輝いたと思うと、アリスの姿が消えた。

!?

三人は騒然となり、そこから一步も動けなかった。

……

三人は一度神殿から離れ、学院で予約しておいたホテルの部屋に集まり、話し合いを行っていた。

「まさか……本当に人がいなくなるとは……予想外だったわ……」

考え込むアリシア。

「俺のせいだ……俺がもっとちゃんとしていれば……」
レオンが落ち込む。

「んなこと言ってもよ、何も変わらないぜ?……俺達がしっかりしていないきゃ、助けられるもんも、助けられなくなっちゃう。」
ルークが真剣な表情で告げる。

「そうね……レオン君だけに責任があるわけでは無いわ、私たちにも責任がある、この事件を解決させて、アリスちゃんを救いましょう。」

アリシアが微笑む。

「はい・・・でも、具体的にどうすれば・・・」

と、その時。

「なんだ？・・・私を知る限り、レオンはその程度では折れぬ男だと思っていたのだがな？」

！？

突然、部屋に聞きなれた声が響く。

「まさか・・・」

そう、部屋に入ってきたのは、ミルフェリーナ第二王女、ヴィクトリアだった。

「ヴィク・・・トリ・・・ア・・・？」

レオンたちは呆然となった。

「久しぶりだな、レオン。」

ヴィクトリアが微笑む。

「そう・・・ヴィクトリア、あなた、王国で修行を・・・」
アリシアとヴィクトリアが少し、話し合いを行う。

「ああ・・・あの兄上と、何週間も戦い続けるのは、かなりつらいものだった・・・」

しみじみ告げるヴィクトリア。

「でも・・・今はあまり再開を喜んでいる場合ではないの。」
アリシアが真剣に告げる。

「そのようだな・・・」

ヴィクトリアがレオンを横目で見てから、そう告げる。

「・・・・・・・・・・」

レオンは黙ってしまったている。

「・・・・・・・・レオン、アリスを助けに行くぞ。」
ヴィクトリアが宣言した。

「!!!!・・・でも、どうやって・・・」

「何、簡単なことだ、アリスが階段を上り、姿を消したのなら、我らも階段を上ればいい、ただそれだけのことではないか。」
ヴィクトリアが微笑む。

「・・・・・・・・ヴィクトリア・・・」

すると、さっきまで黙っていたアリシアとルークが。

「決まりね・・・」

「仕方ねえ、アリスちゃんを救う為だ。」
そういつて立ち上がるアリシアとルーク。

「さあ、皆、行くぞ！アリスを助けに行くぞ！！」

「ああー！」

そして、アリガロス神殿に到着。

「さて・・・誰が階段を上るかだが・・・」
ヴィクトリアが告げる。

「俺は行く。」

「俺もだ。」

「私も行く。」

レオン、ルーク、ヴィクトリアの三人は一斉に言った。

「はぁ・・・どうやら今回も、私の役目はないみたいね・・・いいわ、なら、皆が戻ってくるまで、私が神殿を守護しておくから・・・皆は階段を行きなさい。」
アリシアは苦笑した。

「はい!!」

一斉にそう告げた。

「行くぞ、ルーク、ヴィクトリア・・・」

「ああ。」

「いつでも良いぞ。」

三人は階段を上る。

レオンが先頭、ヴィクトリアが二番手、ルークが最後尾だ。

そして、レオンが最後の一段を上る。

その時。

キィィィィン・・・

レオンたちの目の前に、光の扉が現れ、その扉が開いた。

「!？」

三人は圧倒的な光に飲み込まれた。

「……………う……………」

レオンは目を覚ました。

「なんだ……………ここは……………」

辺りを見渡し、レオンは呆然となった。

なんと、一面真っ白な世界だった。

しかも、地面が雲のようなものでできており、拳句の果てに、雲でできた階段が、そこらじゅうに、張り巡らされている。

「!…皆、無事か!？」

レオンは二人に声をかけた。

「あ、ああ……………なんとかな……………」

「なんなんだ……………一体……………」

ヴィクトリアとルークも周りを見渡し、呆然としている。

「まるで、天国のようだ……………」

ヴィクトリアが乙女チックなことを平然と言いつつ放った。

しかし、言いたくなるのも分かる……………まるでここは天国なのだから……………

「とりあえず・・・アリスを探そう・・・」
ヴィクトリアがそう告げたとき。

「成る程・・・たどり着きましたか・・・運命の子供達」

！？

まるで頭に直接響いたかのような声にレオンたちは一斉に頭上を見上げた。

そこに居たのは・・・

水色の羽を生やし、白い服、白い髪をした・・・天使だった。

「て・・・天使・・・？」

レオンは呆然となった。

ヴィクトリアとルークも同じらしく、呆然としている。

「あなた達がここまで来るだろうとは、予測していましたが・・・ここまで早いとは・・・」

天使が雲の上に降り立つ。

なんなんだ・・・こいつのこの魔力は・・・こんな化け物が・・・事件の黒幕だったのか・・・？
しかし、レオンが悩む必要はすぐになくなった、なぜなら、天使が名乗ったからである。

「聞きなさい、運命の子供達よ、私の名は・・・氷結の神器インフエリオル」

!?

「神器・・・だと!？」

レオンが叫ぶ。

「あのエグザリオと同じ神器と呼ばれる存在か・・・!!」
ヴィクトリアも心底驚いているようだ。

「神器って・・・アレだよな・・・前に、ヴィクトリア様がさらわれたときに現れたっていう・・・」
ルークが問う。

「ああ、絶対的な強さを持つてる・・・」

「お前がアリスを何処かへやったのか!!」
レオンが叫ぶ。

「アリス・・・ああ・・・『光の再生者』のことですか・・・」

??

光の再生者??

なんだ・・・それ・・・?

「彼女には、少し・・・眠ってもらっています・・・彼女を助けたいのなら、私を倒してみなさい?」
天使が告げる。

ドン！！

莫大な魔力が天使を中心に展開。

こいつ・・・まさかと思っただけど・・・エグザリオよりも、強い！？

「来るぞー！！」

「！！！！」

ヴィクトリアとルークも戦闘態勢に入る。

そして、レオンたちは驚くべきものを目にする。

「発動、氷結魔法。」

「！？・・・何！？」

「何だと、氷結！？・・・ペンタゴンの法則に無い属性だ！？」

「おいおい・・・そんなのありかよ！？」

「氷結魔法、ハアイス・ストレージ」

天使が手を上にかざす、すると・・・虚空に氷の槍が顕現。
それが、レオンたちに迫る。

「！！・・・くそ・・・やるしかないか・・・」

レオンは両手に魔力を集中。

漆黒の剣が完成。

ミスティルティンは学院に置きっぱなしのため、もって来ていなかった。

まさか・・・こんなところで、神器とぶつかるとはな・・・

「はああ!!」

凄まじい魔力と共に、振りぬく。

ガシヤアアアアアン・

氷の槍が爆砕。

すると、ロンギエールの槍を顕現させたヴィクトリアが天使に切りかかる。

「はあ!!」

ガン!!

激突。

衝撃波が発生。

「ヴィクトリア・前よりだいぶ強くなってる・・・」
レオンは愕然とした。

「んじゃ・・・俺も、やんねえとな!!」

ルークが叫ぶ。

「雷魔法・中位詠唱、スリサズ・アルド・デノク・・・雷の豪拳」

ルークは拳に雷を纏う。

あれが・・・ルークの魔法!!

「行くぜ!!」

ルークの姿が消える。

早い!

レオンが愕然とする。

天使の後ろに回りこむ。
ガアン！！

天使に殴りかかった。
しかし、魔力障壁が展開する。

「ぐ・・・こいつ・・・なんて魔力だ・・・!!」

「早いですね・・・あなた、雷ですか・・・雷は速さを最も得意な領分とする系統でしたね」
天使が告げる。

「はっ!・・・今更きずいても遅い!!」
ルークの姿がぶれる。

次の瞬間。

ブン・ブン・ブン!

ルークの姿が一瞬で三人に増える。

あまりの速さで、姿がダブっている。

「ヴィクトリア様!! 離れてください!!」
ルークが叫ぶ。

「ああ、分かった!」
ヴィクトリアはすぐさま離れる。

「おおおおお!!」

三方向から、一斉に殴りかかった。

ガァン!!

「うあ!!」

「く・・・なんて威力だ・・・」

レオンもヴィクトリアも愕然となる。

しかし・・・天使の周り氷の壁が顕現していた。

「何!?!」

愕然となるルーク。

「良い一撃でした、ですが・・・甘いですね・・・氷結魔法、
ブレード」

天使の手に氷の剣が顕現。

ザン!!

ルークの体を切り裂いた。

「ぐあ!?!」

ルークが吹き飛ばす。

「ルーク!?!」

「くそおお!!!!」

レオンの手に更に魔力が集中。

そして・・・

「おおおおおおおおお!!」
全力疾走。

闇の加護を受けているレオンの身体能力は計りしれない。
跳躍し、上から思い切り振り下ろした。

ガイン!!!

天使の氷の剣と激突。
魔力が衝撃波となる。

ズウウウン・・・

「く・・・受け止めやがった・・・」

「ほう・・・なかなか・・・」

ガン!!

天使が弾く。

「終わりです。」
冷淡に告げる天使。

だが。

「ロンギエールの槍、
「アクア・サブマリン・インデルカ」!!」
ロンギエールの槍に水の魔力が宿り、水が実体化。

「乱舞・・・三の舞・・・!!」
ヴィクトリアが隙のない動きで天使に切りかかっている。

ガン・ガン・ギアン！！

槍が振り回されるたび、水が凄まじい威力となって、天使を襲っている。

と・・・

「我が元に、顕現せよ・・・雷の力を司りし拳の鎧よ、轟き、世界に雷鳴を、鳴り響かせよ・・・雷電極拳双ハサンダー・ゲイル！！」
ルークの手に、凄まじい雷を纏った、ナツクルのようなものが顕現。

凄まじい魔力を放っている。
直視できない。

「さすがに・・・この数は・・・まずいですね・・・では・・・アレを使わせてもらいましょう」

天使の体から、今までの比にならないほどの魔力が放出。

「この感じは！！！」

レオンは知っている、この・・・絶対的な力の波動を・・・

「超神星魔法・・・」

やはり・・・！！

「まずいぞ・・・この技は！」

レオンが叫ぶ。

「レオン！！・・・今から俺とヴィクトリア様で、あの力を封じる、レオンはその隙に、全力をぶつける！！！」

ルークが叫ぶ。

「分かった!!!」

「超神星魔法・・・氷結の神剣・ブリューナクヱ」
天使が伝説の剣を手に向かってくる。

「ブリューナクヱとは、持ち主に絶対の勝利と永遠の栄光もたらす。
その伝説の武器が今、顕現した。」

「おおおおおおお!!!」

「はああああああ!!!」

ルークとヴィクトリアが天使と激突。

ズガイイイイイン!!!

その際に。

「おおおおおおお!!!」

レオンの手に莫大な力が集中。

「もっと・・・もっと・・・もっと・・・おおおおお!!!」
ドクン・・・

レオンは自分の中の魔力に変化が起こったことを感じた。

「発動・・・黒滅魔法・中位詠唱、ルベル・・・エノキアス・・・ガルア
ス・・・ベリオス・・・真・黒滅魔道砲「カオス・インテビティ」!!!」

レオンの両手から漆黒の魔方陣が展開、そこから、圧倒的な闇の柱
が天使に向かう。

「！！・・・これは・・・!?」

ズン!!

だんだんと天使の方が、押される。

いくら、伝説上の武器でも、三人の力には・・・かなわない!!

そして、その時。

「皆!!」

アリスが次元を裂き、現れた。

「ばかな!?・・・あなたは眠らせたはず・・・まさか・・・破ったの?」

・あの「トータイスの眠り」を・・・そんな!?」

「発動!光煌魔法・高位詠唱・閃光一陣「ライト・エッジ・サーガ」
!」

アリスの純白の翼から、圧倒的な光が放たれる。

キィィィィィィィィィィィィィィィィィィ

あまりの眩しさに目を開けられない。

「そ・・・そんな・・・これほどの・・・闇をも超える程なんて!?!?!
ああああああ!!」

天使が絶叫。

そして・・・

・ レオンたちが目を開けたときには・・・天使の姿は無かった・・・

――次回予告――

見事、天使を倒したレオンたちだったが、新たな疑問が浮上。
なぜ、神の御使いたる天使が神器なのか、レオンたちには理解できないでいた。

そして・・・やっと、学院に戻ってきたレオンたち、これからは、ヴィクトリアも一緒に学ぶことになり、喜ぶレオン。

しかし・・・またまた、暗雲が立ち込める。

次回、ルベリージャ学院理事長、お楽しみに。

ルベリージア学院理事長

「アリス!!」

レオンが叫ぶ。

「レオン君!」

レオンとアリスは二人で抱き合った。

「え〜イチャイチャするのはかまわないだが・・・ひとまず帰らねえか?」

ルークが怒りマークを浮かべ、微笑む。

「ああ・・・そうだな、レオン・・・お前はここで死刑だな。」
何故か宝具をレオンに向けるヴィクトリア。

「え・・・何!?・・・ちよつと・・・待てえええええええ!!」

レオンの絶叫が雲の世界に響いたと言う。

「あら?・・・レオン君・・・どうしてあなたはそんなにポロポロに・・・もしかして強敵でもいた?」
雲の世界からレオンたちが出て、神殿を見ていたアリシアがそう言った。

「ええ・・・いましたよ強敵が・・・二重の意味で・・・」

「ところで、どうだったの?」

アリシアが真剣に問い詰めてくる。

「ええ・・・それが・・・」
レオンが語りだす。

レオンとアリスが抱き合い、ヴィクトリアとルークにこっ酷くやられた後。

「ところでアリス、お前はどっやってここまで来たのだ？・・・というかここはなんなのだ？」
ヴィクトリアが問う。

「うん・・・私にもよく分からないんだけど・・・多分あの神器が創り出した空間だと思う・・・私が眠らされていたところは、今いる所じやなくて、別の空間だったの」
アリスが告げる。

別の空間・・・？

「この空間はね、複数の空間が並行に存在しているの・・・幾つかの空間で成り立っているんだけど・・・一つの空間ごとに、枠で区切るようなものかな・・・？・・・そんな感じでここはできてるの。」

レオンとルークには、さっぱりな話だが。

「成る程・・・ここは複数の空間が同時に存在している世界で、アリスはその空間の区切りである、枠のようなものを、魔力に物を言わせ破壊して、ここまで来た・・・そういうわけだな？」

ヴィクトリアには分かったらしい。

「因みに、他の囚われていた人達も、全員外に出してあげたよ？」
アリスが微笑む。

「すげえな・・・アリス・・・」
レオンが絶句する。

「え・・・う、うん・・・私も皆へレオン君が助けに来てくれて嬉しかった。」

アリスも頬を軽く染め、頷いた。

・・・・・・・・

「ヴィクトリア様・・・イラつくのは俺だけっすかね・・・」

「心配するな・・・私もイラついている・・・」

「ところで・・・ここを出るにはどうすればいいんだ・・・？」
レオンが問う。

「うん・・・それは・・・魔力をぶつければいいんだけど・・・この空間の枠は、普通の魔力では破れないの・・・もし破れたとしても・・・すぐに再生するから・・・」

「再生だと・・・？・・・ではどうすれば良いのだ？」
ヴィクトリアがアリスに問う。

「だからこそ・・・私とレオン君の力が有効になるの。」
成る程・・・普通の魔力は無理でも、異端の魔力である、光と闇なら破れると言っわけか・・・

「じゃあ・・・早速やるか！」
レオンが告げる。

「発動、黒滅魔法・中位詠唱・ハカオス・インテビティヤー！！」
レオンが両手を前に突き出す、すると漆黒の魔方陣が展開、魔力を収束し始める。

「発動、光煌魔法・中位詠唱・ハエンシエント・ブレイカーヤー！！」
アリスの両手から、白く発光する魔方陣が展開、魔力を溜める。

そして・・・
「行けええええ！！！」
レオンとアリスが同時に叫ぶ。

それと同時に、二人から光の柱と闇の柱が、なにもない空間に向かう・・・

ズウン！！
空間に激突。

「！？・・・何も無いところにぶつかると!?？」
「すげえな・・・こんなことになるのか・・・」
ヴィクトリアとルークが驚いている。

それもそうだろう・・・何も無いはずの空間に、砲撃がぶつかっているのだから。

「おおおおおお！！」
「はああああああ！！」

そして・・・
ズガアアアアン・・・

!?

何かが破れたと思ったら、急に目の前が真っ白になる。

そして、きずけば、神殿にいた。

「ということなんです。」
レオンが語り終えた。

「成る程・・・じゃあ、また神器というのが現れたと言うわけ・・・それにしても・・・氷結魔法って・・・この世界の力ではないわね」
アリシアが考え込む。

それもそのはず、この世界にあるのは五つの属性のみ、レオンとアリスの力を加えても、七属性だけだ・・・そもそも、神が生み出した属性に「氷」などないのだから。

「とりあえず・・・これは、トラークアさんに聞くしかないわね。」
アリシアが真剣に告げる。

レオンたちは、市長がいる施設へと向かった。

「成る程・・・そうでしたか・・・とりあえず、礼を言わねば、事件を解決してくれただけでなく・・・お客様も助けていただいて・・・

ありがとうございます・・・」
頭を下げるトラークア。

「ところで・・・聞きたいことがあるのですが・・・この街を作るように、告げたという天使の名前を聞きたいのです」
アリシアが問う。

「名前・・・ですか？・・・ええ、かまいませんよ、ですがこの名前はエクストラ・クロニクルにも載っているような、かなり有名な天使なのですが・・・」

エクストラ・クロニクルにも載っている!?

「名前は確か、インフェリオル・・・そして、真名はハガブリエルです。」

!?

レオンたちは絶句した、あの戦っていた敵が、まさかあの有名な天使だったとは想像もしていなかったのである。

「ガブリエル・・・まさか、そんなことって・・・」
アリシアでさえも絶句している。

ガブリエル、ハ　　ヰの誕生を告げたといわれる伝説の天使。
その存在は、神話の中に何度も出現している、そんな存在が神器だったとは、誰も分からないだろう。

レオン達は話を終え、一度ホテルに戻ることにした。

レオン達はその敵がハガブリエルだったとは言わなかった、無論、余計な混乱を招くからだ。

「それにしても……まさかね……」
アリシアがため息をつく。

「なあ……レオン……本物の天使を、倒してよかったのか……？」
ルークが恐る恐る告げる。

「確かに……ハガブリエルという名前には驚いたが、人間に危害を加えたのだぞ？……天使は本来、人間を導く存在ではないのか？」
確かに、ヴィクトリアの言うことも分かる、なぜ神によって作られた、完全な存在が、神器なのか……

「神器って……なんなのかな……」
アリスが呟く。

「でも、今一番喜ぶべきことは、こうして帰ってきたことね」
アリシアが微笑む。

「それに、レオン君達が戦った天使って、あのハブリューナクを使っただけでしょ？」

アリシアが笑う。

「？……ブリューナクってなんだ？」
レオンが問う。

「なんだ……ブリューナクも知らんのか……」
呆れ顔のヴィクトリア。

ヴィクトリアによると、ブリューナクは、何者にも防げず、必ず持ち主を勝利へと導く聖剣らしい。

エクストラ・クロニクル曰く、ガブリエルが使ったと記録が残っているらしい。

そして、話し合いを終わらせ、それぞれの寝室で、睡眠をとる事になった。

「はあ〜もう3時かよ・・・もうすぐ夜明けじゃん・・・結局何の為に、ここまで来たのか・・・」
うんざりするレオン。

「とりあえず・・・もう寝よう・・・」
そういつて目を閉じた。

.....

「起きて・・・おきてください」
誰かが呼んでいる・・・？

「なんだよ・・・こんな夜中に・・・って・・・お前は!?!」

レオンが驚くのも無理はなかった、目の前にいたのは、さっき倒したはずのインフェリアルだった。

「インフェリアル!・・・なんで生きて!?!」
レオンが叫ぶ。

というか・・・レオンの周りは真っ白で、何も無い。

「ここはどこだ!?!?・・・また俺達に危害を・・・」

「いいえ、礼を言いに来たのです・・・」

礼?・・・礼って言ったか・・・?

そういえば・・・神殿であったときの・・・

「魔力を感じない・・・?」

どういうことだ?あの天使なら、エグザリオを超えるほどの力を持つていたのに・・・

「あなた達と戦っていたのは、私ではありません、私の体に乗っ取った、^ハ神玉^ヾが引き起こしたものです・・・」

「^ハ神玉^ヾ・・・なんだよ・・・それ?」

レオンは呆然となった。

「いいでしょう・・・本来、このことを話すのは・・・神の意思に反するのですが・・・私を救ってくれたあなたには・・・お話します・・・^ハ神玉^ヾとは、神器そのものです・・・神器という存在が、もともとあるのではなく、^ハ神玉^ヾを宿した存在が、神器となるのです・・・」

「じゃあ・・・」

レオンは呆然となる。

「ええ・・・あなた方が今日戦ったのは、私、ガブリエルではなく、^ハ神玉^ヾ・インフェリアル^ヾです。」

そんな・・・嘘だろ・・・？

「私は、三千年ほど前・・・この世界に降りました、そして神玉を封印するようになり、ここに住んでいた者達に、告げました・・・あまりに危険な存在だったから・・・ですが、あるうことが私が、神玉に乗っ取られてしまいました・・・だからこそ・・・私の声を聞くことができただけに、全てをかけた・・・」

じゃあ・・・あの時アリスが聞いた声って・・・この天使の・・・

「そして、あなた達は、私を救ってくれました・・・そして、これをあなたに・・・」

そういつてガブリエルが差し出したのは、水色の玉だった。

「じゃあ、もしかして・・・あの緑の玉も・・・」

「ええ、そう、あの玉も・・・神玉・エグザリオ・・・」

そうか・・・だから・・・

「時間です・・・あなたとこうして会話するのも限界です・・・神玉はあなたに託します・・・それから、最後に一つあなたに、ハ天使、神の御使いハとして、言葉を授けます・・・」

「レオンよ、あなたには、大いなる災いがおとずれ・・・あのアリスという、あなたにとって大切な人も、その災いに飲み込まれる・・・そして・・・十の神玉を集め、その災いを回避するのです、そうしなければあなた達、人類は・・・自らの選択でその歴史に幕を引いてしま・・・」

「幕を引く？・・・何だよ！どういう・・・」

「詳しくは言えません．．．ですが、あなた達が十の神玉をあつめて、《魔鏡の庭園》にたどり着いた時．．．世界は変わる．．．」

「《魔境の庭園》．．．？」

ドクン．．．．

なんだ．．．始めて聞くはずの言葉なのに．．．どうしてこんなにも．．．不安になるんだ．．．

「《魔境の庭園》．．．あそこは、我々天上の住人でも、たどり着くことはできない．．．アレは．．．《世界の中心》．．．そして、全ての魂の帰るべき場所．．．」

一体何を．．．．．

「レオン．．．あなた達で．．．この危機を、回避してください．．．間違っても、《聖天王国アルビオン》のの前になってはならない．．．さあ．．．行きなさい．．．運命の子供達．．．あなた達に、全てを託します．．．．」

そうして、レオンは、意識を失った。

翌日、朝早く起きたレオンは、事件の真実を全て、アリシアたちに話した。

アリシア達は絶句していたが、レオンの真顔を見ると、頷いてくれた。

「そう．．．それが、真実なのね．．．．分かったわ．．．このことは

誰にも言わないこと・・・いいわね・・・」
アリシアはそう告げた。

そして今は、ルベリージア学院へ向かう途中だ。

レオンがアリシア達に話したのは、神器の正体が神玉である、と言うことまでしか言わなかった・・・《魔鏡の庭園》という言葉は言わないほうがいいと、判断したからだ。

「この世界に・・・何かが起きようとしてるのか・・・、なら俺は・・・」
アリスを・・・皆を守る・・・それだけだ・・・

レオンはそう、決意した。

そして、学院に到着。

しかし、そこで、ある人物が、待ち受けていた・・・

空中から降り、地面に足をつけた瞬間。

「ア~~~~リ~~~~シ~~~~ア~~~~!!」

!?

なんだ!!

「う・・・ど・・・どうしてあなたがここに!?!」
アリシアが叫ぶ。

「フフフそれは~~~~もちろん~~~~アリシアに会う為よ~~~~!!」
アリシアに抱きつく女性。

「あ・・あの、アリシアさん?・・この人は・・・」
レオンが尋ねる。

すると。

「ん〜?・・あーっ!あなたがレオン君?」
女性が指をさしてくる。

なんなんだ・・この人は・・・

「紹介するわ・・この人こそが、ルベリージャ学院・理事長、セル
ヴィア・オルセイドよ・・・」

・・・

ええええええ!!

レオン・アリス・ヴィクトリア・ルークの叫びが木霊した。

ルベリージア学院理事長？

理事長？

今・・・アリシアさんは理事長と言ったのか・・・？

・・・

「えっと・・・まあ・・・こんな性格だから理事長にふさわしくないとかそういうことはあまり、言わないであげてね・・・」
苦笑するアリシア。

「もう～アリシアちゃんては酷いな～私はこれでも学院最強のアリシアちゃんと並ぶ宝具使いなんだよ～」
セルヴィアが告げる。

・・・

「あの、アリシアさん・・・？この人が言っているのは本当なんですか・・・？」
絶句するレオン。

ヴィクトリアもアリスもルークも呆然としている。

「ええ・・・本当よ、この人はね、私と同等の戦闘能力を持つてるの・・・
・と言うより・・・この性格じゃ、普通は理事会を任されるわけはないの・・・でもこの人の戦闘能力の高さ、ナイトとしての才能から、理事会の最高責任者に抜擢されたの。」
アリシアは苦笑しっぱなしだ。

「本当のようだな・・・」

ようやく戻ってこれたらしいヴィクトリアがそう告げる。

「私も一応、噂では聞いたことがあった．．ルベリージア学院理事長は、会長すら凌駕するナイトだという話だ．．兄上から聞いた話だから．．事実だろうとは思っていたが．．まさか、こんな性格の方だったとは．．．」

「おゝ！あなたは確か、アリウスの妹のヴィクトリアちゃん？」
セルヴィアが平然と告げる。

！？

ていうか、あのアリウスさんを、呼び捨て．．．？

「は．．はい、ところでつかぬ事をお伺いしますが．．兄上とはどういう関係で．．．」

呼び捨てで名前を呼んだことに、やはりヴィクトリアも違和感を覚えるらしい。

すると、セルヴィアが。

「いやだな〜別にそんな関係じゃないわよ〜？ただちよつと彼が学生時代だったころにね、少し悪戯をしたくらいよ〜．．まあ、彼、相当嫌がってたけどね〜」

笑いながら告げるセルヴィア。

マジかよ．．あのアリウスさんを手玉に．．．？

「一体何者なんだ．．この人．．．」

「ところで、あなたは一体何をしにきたの？．．なんの理由も無く、あなたがここまで来るなんてありえないもの。」
アリシアが真剣な顔になる

「うんうん！さすが私のアリシアね〜そこをきちんと突いてきたか
〜実はね〜？」

「フォース・ビーストのことかしら？」
アリシアが言う。

「フォース・ビースト？」

「ええ、撃退したけどね。」
アリシアが告げる。

「まさか〜あんな雑魚なんかのことじゃないわよ〜」
微笑むセルヴィア。

雑魚！？・フォース・ビーストを雑魚扱いかよ！？
レオンが絶句する。

ヴィクトリアもルークもアリスも同じようだ。
啞然としている。

「ちょっと、雑魚扱いしないでよ、アリウス王も来て下さったのよ
？」
アリシアがあきれを。

「へえ〜あのアリウスがね〜以外〜と言うことは、この中にアリウ
スの気になっている子でもいるの〜？」
セルヴィアがアリシアに問う。

「気になっている、と言うより・・・期待していると言ったほうがい

いかもね・・・」
アリシアがレオンを見る。
と、セルヴィアもレオンを見る。

「もしかしてこの子？・・・アリウスの期待の星って。」
急にセルヴィアが顔を近づけてきた。

「！！！」

青色の髪をした美女にここまで接近されると、さすがに緊張するレオンなわけだが、相手には関係なさそうだ。

「ふ〜ん・・・この子って確か・・・閻系統の使い手よね・・・？」
！？

なんで知って・・・？
少し警戒するレオン。

「あなたには言っていないはずよね・・・セルヴィア？」
アリシアが少し、セルヴィアを睨む。

「ん〜でも、分かるわよ、ここまで魔力が私達と違っていればね〜」
さらりと凄いことを言うセルヴィア。

まさか・・・俺の魔力を解析したのか・・・？・・・あの一瞬で・・・
何者だ・・・こいつ・・・

「さて、おふざけはこの辺にして、今回はね、少し面倒な物を持ってきたのよ。」

笑うセルヴィア。

「面倒？」

アリスが呟く。

「あらら？あなたはアリスちゃんね〜光の属性を持つ。」

「!？」

アリスが絶句する。

アリスの魔力まで・・・？

「で・・・あなたの言う面倒なものってなに・・・？」

アリシアがうんざり顔で問う。

「ん〜何よ〜その顔〜あたかも私をトラブルメーカーを見るような目で見てる〜」

眉を曲げるセルヴィア。

トラブルメーカーだろ・・・

その場の全員がそう感じた。

「実はね〜上の老いぼれ共からこんなものを渡されてね〜」
セルヴィアがそういつて差し出したのは、
「槍」だった。

しかも、丁重に布を巻いてある。

「これ何よ？」

アリシアが顔をしかめる。

「ん〜これはね〜？上の連中が「デュランダル」とか言ってたもの

「よ〜?」
「そういい布を外す。」

出てきたのは・・・「赤黒い槍」だった。

「なにこれ・・・性悪ね、あなた・・・」
「さすがのアリシアも絶句している。」

それもそのはず、まるで血が全部を塗りつぶしているような・・・そんなイメージを彷彿とさせる槍だ。

「・・・」
「ヴィクトリアが槍を見つめ、黙っている。
そして。」

「それをすぐに捨てるべきです。」
真顔で告げる。

「?・・・どうしてだ?」
「さすがのレオンも驚いた。」

「危険だ・・・この槍・・・妙な気配を感じる・・・」
「ヴィクトリアがここまで真剣に告げるのは初めてかもしれない。」

「ん〜やっぱり、優秀ね〜さすがあいつの妹ね?」
セルヴィアが言う。

「ということとは・・・危険物なの・・・?これ?」
「アリシアが告げる。」

「ええ、そうそう、なんでもこの槍はね、勝手に動いて人を殺そうとするんだって」
笑顔で告げるセルヴィア。

勝手に・・・動く!?

・・・

全員啞然。

「そんなのを私達に信じると・・・?
ジロリとセルヴィアを睨むアリシア。

「じゃあ、これで証明になるから・・・封印・・・解く!」
すると、槍から莫大な魔力が放出。

!?

「何!?!」

レオンが叫ぶ。

槍が勝手に浮き上がる。

そして・・・

ヒュンッ!!

アリスに向かう。

「!?!」

アリスが硬直。

「くそっ!!」

とっさに漆黒の剣を作り受け止める。

ガアン!!

「く……押される……」

なんて力だ……この槍……

「封印」

セルヴィアが告げる。

オオオオン……

ポトリと、地面に落ちる。

……

「ね？本当でしょ？」

笑うセルヴィア。

「ね、じゃないわ!!あなた、アリスちゃんに当たってたら……」
アリシアが激昂。

「大丈夫～そんなこともあるかと思って、ここの全員に、結界を張ったわ～」

???

結界……?

レオンが自分の前を触ると……透明な壁にぶつかった。

「マジかよ!?!」

何時の間に……

「じゃあ、とりあえず・・・その槍・・・少しの間だけ預かって？」
セルヴィアは微笑んだ。

—————次回予告—————

セルヴィアの身勝手で槍を預かることになったレオンたち。

しかし・・・まるでこの時を狙っていたかのように、盗賊が、学院に襲い掛かってきた。

そして、遂に槍が、盗賊の手に渡り!?

次回、デュランダル、お楽しみに。

デュランダル（前書き）

新たなる存在、デュランダル始動！

デュランダ

惑わしの森にて、十数人の男達が集まっていた・・・

「リーダー、例の物が学院へと渡りました。」

一人の男が告げた。

「そうか・・・では行くのでしょうか・・・待っている、デュランダ
ルよ・・・」

リーダーと言われていた男は微笑んだ。

ルベリージャ学院、1-A、ここは、レオン達が所属するクラスであつた。

「で・・・どうするんだろうな・・・あの槍。」
ルークが慥然と呟く。

「どうするって言われても・・・あの槍は確か、宝物庫に保管するんだろ・・・？」
レオンが聞き返す。

そう、セルヴィアが持ってきたあの槍は、普通に保管するのが危険と判断された為、何重にも結界を張り、宝物庫に保管してあるのであつた。

「でも・・・本当に大丈夫なのかな・・・アレ・・・」
アリスが心配そうに告げる。

と。

「はい皆さん、席についてください」
エルシー先生が教室に入ってきた。

「え〜では、皆さんは一度会っているので知っていると思いますが、
ヴィクトリア王女殿下が、この学院へ再入学されたので、お伝えし
ておきますね〜」

と、ヴィクトリアが教室に入ってきた。

「皆、一度は退学したのだが・・・また入学することになった、よろ
しく頼む。」

！！

なんと、あのヴィクトリアが頭を下げたのだ。

パチパチと拍手が起こる。

「ありがとう・・・」

頬を軽く染めるヴィクトリア。

「変わったな・・・ヴィクトリア様。」

ルークが驚いている

「ああ・・・そうだな・・・良い変化だと思うよ。」
レオンも安心していた。

因みに、ヴィクトリアの男性恐怖症は、無くなったわけではないが、
マシにはなったようだ、触れられるのはまだ無理だが、会話程度な
ら、男子生徒とも行えるようになったらしい。

アリウスさんから聞いた話なので、間違いないだろう。

「いや〜しかし、お前がきっかけで変わったんだ、さすがはレオン

だぜ。」

ルークがレオンの肩を叩く。

???

「俺は何もしてないぞ・・・？」
レオンが首を傾げる。

「・・・」

ルークが大げさにため息をつく。

???

「レオン君、良かったね、仲間が増えて。
アリスが微笑む。」

ああ・・・まったく・・・

「ということで、ヴィクトリア様のお席はあちらになります。
エルシー先生が指差したのは、レオンの隣だった。」

!!

クラス全員が騒然となる。

「先生・・・それは不平等ではありませんか・・・？」
ルークが挙手。

うんうん。

クラス全員が頷く。

「?????・・・なんでですか・・・？」

先生はポカンとしている。

「なぜなら・・・それは、レオンがあまりにもうらやま・・・いいえ、レオンの周りには女子が多すぎます!」

レオンの席には、左にアリス、そして・・・今ヴィクトリアが座ると、左右両方に女子が来ることになってしまふのだ。

すると、先生は困った様子で。

「でもでも、レオン君の隣が良いと言ったのは、ヴィクトリア様ご本人ですし・・・」

!?

クラスが一斉にヴィクトリアを見る。

「ち・・・違う!! 私はまだ、知り合いの近くが良かったのだ!・・・決してレオンの隣などに座りたかったのではない!!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

レオン、お前、そんな奴だったのか!!

アリスちゃん、アリンシア生徒会長と続いて・・・次は、王女様ってか!?

レオン君酷い!!

と、さまざまな声が飛んできた。

「なんでだ!?!」

レオンの平穩は遠いようだ。

昼休み、レオン達は、アリシアに呼ばれ、特別室に来ていた。通常は入れないが、レオン達にとっては、もうなれた場所だった。

「さてと・・・とりあえず、ヴィクトリアが上手くクラスに馴染めてよかったわ。」

アリシアが微笑む。

「ええ・・・まったくです。」
レオンも頷く。

と、一瞬、アリスとルークから殺気を感じたような気がするのだが、気のせいだろう。

「実はね、この学院へ盗賊が向かっているという情報が入ったわ、だから、注意を促そうと思ってね。」

「賊・・・ですか・・・」
レオンがうんざり言う。

「そうなのよ・・・もうすぐ副会長も帰ってくるし・・・あまり問題は残しておきたくないのよ。」
アリシアがうんざりした様子で告げる。

副会長・・・それは、アリシアさんに並ぶ生徒のことを意味する、つまり、学園ナンバー2という訳だ。

「では、私達にあの槍を守護しろと?」
ヴィクトリアが告げる。

ええ・・・そうよ。

ということで、レオン達は、宝物庫の前にいた。

宝物庫は、学院の裏にある。

学園校舎とは少し離れている為、何か盗まれても分かりづらいらしい。

「さて・・・ここで、私達は見張りをするわけだが・・・」
ヴィクトリアが最後まで言葉を発することはできなかった。

「・・・皆・・・きずいていると思うが・・・」
ヴィクトリアが周りを見渡す。

三人は頷いた。

辺りから、複数の視線を感じる。

「さてと、どうするか・・・」
ルークが静かに告げる。

ガサリ・・・

「おおおおお!!」
男が一人、草むらから飛び出てきた。

「ふん・・・随分・・・」

ヴィクトリアが後ろを振り返る。

別の男が、斧を振り上げていた。

「!!!!」

「ヴィクトリア!!!!」

レオンが叫ぶ。

「なめるなよ・・・水魔法・中位詠唱・ハアクア・ガーデン」
ヴィクトリアが詠唱を完了した。

ドン！

ヴィクトリアの周りから、水の波が発生、目の前にいた男達6人ほどを飲み込んだ。

「うあああ！」

「ふん、たわいない・・・」

「ほう・・・今のはなかなか・・・」
草むらの中から、もう一人男が現れた。

「まだいたか・・・はあ！」

ヴィクトリアが水の波を操作する。

波が男に迫る。

「やれやれ・・・攻撃的だね、随分・・・土魔法・中位詠唱・ハノーム・エクセラード」

男が詠唱を完了させる。

男の周りに、土の壁ができる。

ギン！！

波を防ぐ。

「何！？」

ヴィクトリアが瞠目する。

「あまいね・・・土魔法・中位詠唱・ハノーム・スレッド」
男の手に土の鎌が顕現。

「はあ！」

男がヴィクトリアに迫る。

「くそ・・・まさか、魔法を使うのか・・・なら、水魔法・中位詠唱・
ハウオーター・グレイブ」
ヴィクトリアの周りに水の槍が顕現。

「行け！！」

ヒュン・・・

槍が、男に向かう。

「ほう・・・しかし・・・やはり、詰めが甘い。これでは決定打にならない」

ザンザン！

男が槍を全て引き裂く。

ニヤリと笑う男。

しかし・・・

「ロングエールの槍！！」

いつの間にか詠唱を完成させ、宝具を持ったヴィクトリアがいた。

「！？・・・宝具か！？」

男が動揺。

「遅い！！」

ヴィクトリアが攻撃する。

ガン!!

男が土の鎌で受けとめる。

しかし……

ピシ……

鎌に輝が入る。

「ふん……魔法程度では、宝具は防げんぞ……？」
笑うヴィクトリア。

「確かに……君の宝具は強力だ……だが……」

ドオン!!

宝物庫で爆発が起こる。

何!?

「バカな……レオン達は一体なにを……!?!」

!?

「レオン!!」

レオンたち三人は眠らされていた。

「まさか……睡眠の魔法……？」

ヴィクトリアが愕然とする。

「そんな……まさか属性にも含まれない初歩的な魔法で……
なんだ……眠い……まさか……私……も」

バタン！

全員が倒れてしまった。

「ふん・たわいない・・・槍を回収しろ。」

男が冷徹に告げる。

男達が、リーダーの下へ槍を持ってきた。

それをリーダーが手に取る。

「ククク・手に入れたぞ・・・神遺物・呪槍デュランダルクを・
・この俺、グラン・ジルグ様がな・！！！」

学院に男の笑い声が響き渡った。

デュランダル ？

「ククク・・・やっと・・・やっと手に入れたぞ！」
グランが笑う。

すると男の一人がグランに質問を投げかけた。

「あの、グランさん・・・この槍は一体何なのですか・・・？」

周りにいた男達は頷いた。

どうやら、この槍を詳しく知っているのはグランだけの様だ。

「ふん・・・この槍はな、ただの槍じゃあないんだよ、勝手に動いて人を殺すって能力は本ただけだな・・・これは神遺物、別名、ハアーティファクトってやつだ。」

グランが唇を歪ませ呟く。

「アーティファクト・・・？・・・聞いたこと無いですね・・・」
男の一人が首を傾げる。

「そりゃそうだろう・・・この槍以外にも、ハアーティファクトは幾つか存在しているらしくてな・・・この槍、デュランダルもその内の一つだ・・・俺がある人から聞いた話じゃ、このハアーティファクトってのはこの世界のもんじゃないらしい。」

男が槍を見つめ、告げる。

「この世界では無い??」

男が困ったように顔を歪ませる。

「なんでも、強大な神の如き存在を封じ込めたところある場所から、

持ち出されたものらしいのだが・・・分からんでも良い・・・一番重要なのは・・・この槍が秘めている力が強大な物である、ということだ・・・さて・・・始めるとするか・・・目に物見せてやるよ・・・ナイト共・・・

男が笑った。

レオン達は、男達に眠らされた後、アリシア達に発見され、保健室に運び込まれていた。

「すみません・・・アリシアさん・・・」
レオンが頭を下げる。

「いいのよ、まさかここまで強力な睡眠魔法を使う奴が、賊の中に居たなんて・・・誰も想像していなかったんだから・・・」
アリシアは微笑む。

因みに、レオン以外の三人は全員まだ眠っている。

「でも、どうしてレオン君だけは効果が薄かったのかしら・・・」
アリシアが首をかしげる。

ああ、それはと、レオン。
「魔力を体に纏ったんですよ、嫌な感じがしたんで、魔力で自分の体を守ったんです。」

「成る程ね・・・咄嗟にそんなことを・・・」
アリシアは驚いているようだ。

「それより、やっぱり槍は・・・」

「盗まれたわ・・・おまけに、宝物庫を破壊して行っただし・・・最悪ね・・・」

アリシアがため息をつく。

でも・・・と付け加えるアリシア。

「あの槍には、セルヴィアの張った超強力な結界があるから、完全に力が解放されることはないらしいわ。」

「そうなんですか・・・良かった・・・でも、そこまで強力な物なんですか・・・あの槍。」

「ええ・・・セルヴィアがあの後、独自にあの槍・・・デュランダルについて調べてくれてね、あれは、アーティファクト・・・と呼ばれていたものらしいわ。」

アリシアが真剣に告げる。

「アーティファクト・・・」

アリシア曰く、簡単に言うと、古代の遺物だそうだが、その秘めている力は強大で、宝具よりも強力な力を持っているらしい。

因みに、何時、何処で、誰が作ったのかは、誰にもわからないんだそう。

「でも、このままじっとしてるのも・・・」
レオンが言いかけたその時。

「ええ、そうね〜じっとしているなんてできないわね〜」
なんと入り口からセルヴィアが堂々としてきた。

「ちょ．．あなた、セルヴィア！どうしてここに！？」
アリシアが椅子から立ち上がる。

「何でつて、そりゃ槍を取り返すためよ」
セルヴィアが微笑む。

「遺物つてもものらしいけど、貴重なものなんですか．．？」
レオンが尋ねる。

「いいえ、というより、価値はもちろんあるらしいんだけど．．それよりも、デュランダルが秘めた力の大きさね、あの槍は、ただ勝手に動いて人を殺すのが、真の能力ではないのよ。」

真の能力ではない．．？

レオンとアリシアが呆けていると、セルヴィアは語りだした。

「あの槍はね？．．ミルフエリーナ王国の領土の端にある、ハデルムの遺跡、つてところで発見されたようなの、その遺跡にポツンと、あの槍があつたらしくてね、その遺跡に、槍について記された文献があつたらしいのよ．．」

「文献．．？」

レオンが首を傾げる。

「そう．．なんでもその文献にはこう記されていたらしいわ．．《其の者、大いなる所より放たれし者なり．．紅き衣を纏いて、この地に降りたたん．．其の者、禁断の呪力を宿し、この世を血で染めるであろう．．》って書いてあってね、考古学の爺さんが言うには、あの槍は、人と融合することで、真の力を所有者に与える物ら

しいわ〜」

セルヴィアが若干真剣な顔で告げる。

「人と・・・融合ですって・・・？・・・じゃあもしかしてあの賊たちは・
・そのことを・・・」

「ええ、知っていたことになるわね〜」

「まずいですよ！早く行かないと・・・」
レオンが言いかけたその時。

ドオン！！

！？

学院のどこかで爆発音。

「ほ〜ら、やっぱり来た〜」

セルヴィアはまだ笑っている。

「ちょっと・・・あなたはどうしてそこまでへらへらしていられるの
よ・・・良いわね〜人生楽しそうで・・・」
アリシアがうんざりする。

「会長！！」

一人の男子生徒が保健室に走ってきた。

「大変です！！侵入者がこの学院へ！！・・・数は30程、幸い、最上
級生達が、宝具を使って、対抗しています！！」

「へえ〜あの男子・・・大した分析能力ね〜関心関心〜」
「遊んでは居られないわよ？・・・私は行くわ！！」

と、アリシアはそういつて、走って出て行ってしまった。

「あらあら、相変わらず真面目ね〜アリシアは〜」

「セルヴィアさんは良いんですか？行かなくても・・・」
レオンが尋ねる。

「ん〜そうね・・・でもレオン君はあまり魔法は使えないでしょ？だから私が守ってあげるわ〜」
微笑むセルヴィア。

大丈夫なのかな・・・こんな人に守ってもらって・・・

因みに、アリスとヴィクトリアとルークは、ベッドに寝ているが、結界を張ってるので心配ない。

と。

男の一人が部屋に入ってきた。

「ほう、まだ居たとはな・・・死ねよ!!」

男は大剣を振り上げる。

「あらら〜無理よ〜あなたでは、私に届くことすらない。」
セルヴィアが片腕をスツ・・・と振るう。

バキン!!

「!?!」

剣が折れた。

「な・・・」

レオンが絶句。

遅いわね〜と言い、セルヴィアが立ち上がる。

「な、何をしやがった!?!」
男が叫ぶ。

「ふふん・・・何だと思う?」
笑うセルヴィア。

フツ・・・
とセルヴィアの姿が消える。

!?!

消えた?

レオンはそう思った。

「ぐあああ!?!」

きずけば男の左腕が切り取られていた。

ぐああああ!と叫び、血を撒き散らす男。

「・・・残念・・・無理よ?」

男の後ろに立っていたセルヴィアは微笑んだ。

レオンには悪魔にしか見えなかった。

やがて男は気を失い、ぐったりとなった。

「マジですか・・・」

レオンは呆然となった。

「大丈夫?レオン君?」

話しかけてくるセルヴィア。

というか・・・手を汚さずにどうやって、人の片腕を切り飛ばしたん

だよ・・・と思っっているレオンだった。

きずけば辺りから、悲鳴や怒号、爆発音が聞こえてくる。

「俺も行かないと!!」

そういうレオン。

「行くなら私も行くわ。ただし・・・そうするとこの子達が危険だから・・・魔法を使って守っておかないと。」
セルヴィアはそう告げる。

「風魔法・高位詠唱・スルズ・・・グレートース・・・アルマ・ハブリテンド・グラニス」

セルヴィアが手をかざすと、風が文様を描き、それが三人を包む。

すげえ・・・

レオンはそう感じていた。

余りに神聖で清い魔力があたりに満ちる。

「この魔法はね〜宝王級の結界だから、絶対に破られはしないわ、あの槍を使わない限りはね。」

この人・・・本当にアリシアさんと・・・

「さて行きましょう?」

セルヴィアはそういって、歩き出した。

外にでたときレオンは我が目を疑った。

あまりに酷い現状だった。

怪我をしている生徒も居れば、治療を受けている生徒も居る。

「ひどい・・・こんな・・・」

レオンは沸々と怒りがわいてきた。

レオンは、自分の教室から、ミスティルティンを持ってきてきたので、武器には困らない。

「魔法を使えないぶん、こいつだけが頼りだ。」

レオンは剣を抜く準備をする。

「来た。」

セルヴィアが告げる。

ズン・・・

辺りに強大な魔力が満ちる。

「ククク・・・やっと融合が完了した・・・これで・・・」

！！

レオンは絶句した。

男の手に持っている槍が紅く輝いている。

「まるで、あの文献の通りね・・・」

セルヴィアが見つめる。

「ああ・・・いたか・・・まだ・・・君は確かあの時の・・・」

男はレオンを見つけると、微笑んだ。

「覚えてくれて何よりだ・・・」

レオンは剣を抜く。

「君如きが勝てるものではないよ?」

男が告げる。

「ああ、そうだ、名乗っておこう。俺は、グラン・ジルグ・よろしく。」

「グラン・・・どこかで聞いたことあると思ったら・・・あなた、ミルフエリーナ傭兵部隊の副隊長だった男じゃない？」

セルヴィアが告げる。

「ほう・・・俺を知っているのか・・・なら・・・なおさらここで生かして返すわけにはいかな・・・」

グランから、膨大な魔力が放出。
ヒュン・・・
姿が掻き消える。

「！」
セルヴィアが驚く。

「上です！！」
レオンが叫ぶ。

「おおおおお！！」
男はデュランダルを振り下ろした。

ガン！！！！
「・・・・・・・・何・・・？」

レオンは、漆黒の剣を作り、セルヴィアの上にかざしていた。

ガン！

槍を弾くレオン。

「レオン君・・・？」
驚くセルヴィア。

「てめえ・・・もう、ゆるさねえ・・・」
ズアン！！

レオンから漆黒の魔力が展開。

「なんだ・・・？この・・・魔力は・・・小僧・・・何者だ？」
グランが警戒する。

レオンは剣を構える。
ミスティルティンに魔力を流す。

ズズズ・・・
剣が漆黒に染まる。

「てめえのせいで、学院の生徒が傷ついた・・・その罪・・・償っても
らう。」

ダン！
レオンは思い切り踏み込む。

「！！！」
グランが動揺。

「おおおおお」
レオンは跳躍し、漆黒の剣を思い切り振り下ろす。

「ちっ！！！」
グランは槍を防御に当てる。

ガン！

衝撃波が辺りを一掃。

「ぐ・・・何者だ・・・」

グランが告げる。

「てめえに名乗る必要はない!!」
レオンは更に魔力を剣に通す。

ガン！

グランを飛ばす。

「なめるなよ・・・お前が何者かはしらねえが・・・こっちはこれがあんだよ!!」

グランが槍に魔力を込める。

キイイイイイン・・・

槍が紅く発光。

そして・・・

「おおおお!!」

男が槍の先端をレオンに向ける。

「デュランダル!!放て!!」

槍の先に紅い魔力が集中したと思えば、光線が放たれた。

「!？」

レオンは剣を前に突き出す。

ガン!

受け止めるレオン。

「ぐ……なんて力だ……」
レオンが押される。

その時。

「我が元に顕現せよ、風吹かす永久の風弓よ……我が古の契約に
え、其の姿をここに示せ……風塵蒼弓へヘル・シムルグ」
セルヴィアが宝具を顕現させる。

セルヴィアが弓を軽く引く、そして、放つ。
キュン……

「!!!」

グランが槍を防御に当てる。
風の矢が激突。

とてつもない衝撃波を発生させた。

「ぐう……弓の一発だけで、ここまで……」
凄まじい風が発生。

「大丈夫レオン君？」
セルヴィアが駆け寄ってくる。

「は……はい……」
「もう、無茶はだめよ……それに闇系統はあまり使わないこと……
だったけど、この際仕方ないわね……」

「今のは威力をだいぶ抑えたわ！本気の一割も出してないけど、こ

ここで降参するなら、まだ取り返しがつくわよ？」
セルヴィアが叫ぶ。

一割・・・？・・・マジか・・・アレだけ凄くて・・・？
どうしてドイツもコイツもこんなに凄いやつってのは、ここまで力
を持ってんだ・・・？

レオンは本気で考えた。

しかし。

「おのれ・・・許さない・・・デュランダルの力・・・お前らに見せ
てやる・・・」

「おおおおおおおおー！！」

グランの絶叫と同時に、槍が真っ赤に発光。
直視できないほどだ。

やがて、槍がグランの右腕と一体化を始めた。

それと同時に魔力もさっきの数倍にまで膨れ上がった。

「何だよ・・・これ！？」

「・・・これは・・・」

「フフフフ・・・ドウだ・・・コレガ・・・槍の・・・力だ、ハハハ

！！」

グランの言葉が変化している。

「あららら槍に吞まれたわね」

しかし、レオンはこの話し方を、知っていた。

「この・・・力の波動は・・・」

そう、まるで、レオンが無意識で闇の力を振るっていた時と・・・

「サア・・・始めルゾ・・・コロシアイをナ!!」

-----次回予告-----

あまりに強大な存在となったデュランダル。

レオン達はその力に打ち勝てるのか!?

そして、遂に、あの剣が目覚める。

「そうか・・・お前も・・・デュランダルと同じ・・・」

次回、被剣覚醒、お楽しみに。

被剣覚醒（前書き）

ミスティルテインの真の力が目覚める・・・

被剣覚醒

「そんな・・嘘だろ・・・・・？」
レオンは呆然と呟く。

「オオオオオオ!!」
グランは空に向かって叫び続けている。

「槍が・・腕に・・いいえ、これは体に溶けていつている？」
セルヴィアもグランを睨んでいる。

「ク・・クク・・そうダ・・この、デュランダルはな・・所有者と
一体化スルコトによって・・真ノチカラをエルンダヨ・・」
グランが笑う。

「あなた・・本当に馬鹿ね、どんどん自分という存在が飲み込まれ
てるってきずかない・・？」
セルヴィアが哀れむように告げる。

「クク・・キズイテいるさ・・俺はモウ長くモタナイ・・ダロウ・・
だが・・それでも、十分ダ!!」
グランから邪悪な魔力が放たれる。

「どうするんですか!!あのままじゃ、この学院が吹き飛んでもお
かしくない魔力量ですよ!？」
「そうね〜とりあえず、あの槍をあいつから引っ張り出さないと、
話にならないわね〜」

「イツマデ話をシテイル気だ!!」

ダガン！

グランが思い切り踏み込んでくる。

「うるさいわね〜会話ぐらいさせなさいよ！」
セルヴィアが片手を突き出す。

「風魔法・高位詠唱・スリサズ・プリズム・サリサズ・風壁の盾へオーデイン〜！！」

セルヴィアの前に、紋章が描かれた、巨大な盾が顕現。

ガン！！！！

「ナニ！？」

グランの一撃を受け止めた。

「すげえ・・・あの槍の一撃を・・・」
呆然となるレオン。

「・・・・・・レオン君、悪いんだけど・・・あなたを守りながら戦つのは・・・きついかも・・・」
セルヴィアが告げた。

「大丈夫です！俺も戦います！！」
頷くセルヴィア。

「フン・・・ドレだけ来ようと・・・俺ノ敵ではナイ！！」

「それはどうかな！！」
レオンは剣に意識を集中させる。

ズン・・・

剣に魔力が集中。

黒いオーラが剣を包み込む。

「おおおおおおお！」

レオンは真上に跳躍、そして振り下ろす。

「オオオオオオアア！」

グランも負けじと槍を振り上げる。

ガアン！！

剣と槍が激突。

衝撃波が周りの生徒を吹き飛ばす。

「あらあら、まずいわね〜風魔法・中位詠唱・ハウインド・ウォール〜」

風が渦巻き、周りを囲んだ。

「おおおおお！」

レオンが剣を叩きつけている。

ドクン・・・

！？

「なんだ・・・今、ミスティルティンが・・・」

「ナニを考えている！！！」

グランが叫ぶ。

剣が弾かれた。

「くそ!!」

レオンが吹き飛ばす。

「レオン君がかんで!」

後ろからセルヴィアの声が聞こえた。

!!

慌てて頭を下げるレオン。

セルヴィアが後ろで弓を引いていた。

「放て・・・ハウル!!」

バン!!

弓から風の矢が放たれる。

「クソ!」

グランが槍を振りぬく。

ガイン!

矢が消滅。

「!?!」

グランが前に倒れ、手をついた。

セルヴィアは、グランに向かって撃った後、高速で背後に回りこんでいたのだ。

「甘いわね、私の宝具の一発一発はの攻撃力が高い上に、凄まじい連射能力と・・・自動的に相手を追尾する効果があるこの矢は、そんな簡単には防げない」

キユンキユンキユン・・・

セルヴィアは三発同時に矢を放った。

レオンには、セルヴィアが何時、三回も弓を引いたか、分からなかった。

「ウオオオア！」

グランは同時に三発全てをモロにくらう。

爆風が凄まじい。

「すげえ・・・と、俺もいかねえと・・・」

それにしても・・・さっき、ミスティルティンが鼓動したように感じたのは・・・一体？

「ナメヤガツテ・・・オオオオオオオオ・・・」

グランが空に向かって咆哮を發した。

空が紅く染まり始める。

「なんて魔力だ・・・この辺全土を覆っちゃうほどなんて・・・」

レオン呆然となった。

「レオン君」

セルヴィアが呼んでいるようだ。

「今からアリシアちゃんに連絡を・・・」

そう言いかけたセルヴィアの言葉が止まる。

ズドン！！

？

レオンは今何が起きたか理解できなかった。

「・・・・・・・・セルヴィアさん・・・・・・・・？」

「ぐ・・・・・・・・う・・・・・・・・」

セルヴィアが倒れる。

セルヴィアの背中を何かが刺したのだ。

「・・・・・・・・赤い・・・・・・・・槍」

レオンは呆然と呟く。

「ハハハハ！！」

背後でグランが笑い声を上げている。

ドクン・・・・・・・・

セルヴィア・・・・・・・・さんがやられた・・・・・・・・？

嘘だろ・・・・・・・・？

「フッフ・・・・・・・・そうやってオレを意識カラハズスカラコウナル」
グランが笑う。

「てめえええ！！」

ズドン・・・・・・・・

え・・・・・・・・？

レオンは自分の腹の辺りに激痛が走ったように感じた。

レオンは自分の体に、槍が刺さっているのを見た。

「クク・・・槍と一体化ヲカンゼンにした俺にとって、槍を無限に作

りダセルチカラヲ・俺はテニイレテンダヨ・・・」
グランが憎らしげに笑う。

ドシャ・・・

レオンは地面に倒れる。

レオンは力を振り絞って、グランを見た。

グランの体全体が赤く発光し、手のひらから槍が突き出ていた。

「く・・・そ・・・」

レオンは自分の体から、力が抜けていくのを感じていた。

死ぬのか・・・俺は・・・こんなところで・・・

レオンは朦朧とする意識のなかで、何かの映像を見た。

それは、何処かの街だった・・・

大きな街・・・いや・・・王国・・・？

そこらじゅうに火の手があがっている。

《お下がりに下さい！皇女さま！！》

ある男性が叫んだ。

《いいえ、私は下がらない・・・この国は私が救います！・・・それが私の・・・》

その人は白いドレスを着た女性だった。

《ですが危険です！・・・ここは私どもが・・・！！》

《言ったでしょう？・・・私の国は私が救うと・・・この《アルビオン》は私の国なのです！！》
女性は勇敢にも前に出る。

《私は誓ったのです・・・彼と・・・とともに・・・この国を・・・！！》

そんな映像を見た。

なんだろう・・・俺は・・・一体なんでこんな映像を・・・

レオンは意識を失った。

「ククク・・・ハハハ！やったぞ・・・これで・・・ああ、その前に俺ノシヨウタイを知ってるコイツをヤラネエト・・・」
グランは槍をセルヴィアに向ける。

「シネヨ・・・女・・・」
槍を振り下ろす。

ズン・・・

！？

「ナニ？」

なんと、レオンが片腕で、槍を止めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

バキン・・・！

「！！！」

グランは慌てて距離をとる。

レオンが素手で槍を砕いたからだ。

「・・・・・・・・・・」

レオンは黙って立ち上がった。

ズバン！！

レオンから先ほどとは次元が違うほどの魔力を放出した。

「ナ・・ナンナダ・・オマエハ・・？」

グランが後ずさる。

「fkvdffkfgv1」

レオンが何かを告げた。

レオンの背中から漆黒の翼が顕現。

バサア・・・

「・・・・・・・・・・DETHU・END」

レオンが何かを呟き・・・そして・・・

「!?!?・・・コゾウ・・・キサマハ・・・!?!?」

グランが一步下がる。

「・・・ナンダ・・・このカンカクは・・・？」

グランがまた一步下がる。

「・・・・・・・・・・」

レオンが人差し指をグランに向ける。

漆黒の魔法陣が展開。

しかし、その魔法陣はいつもレオンが使うものとは、文様の形が違うようだ。

そして……

「!?!」

グランが思い切り体をそらす。

キュン……

レオンの指先から何かが放たれた。

ズウウウウウウウウン……

「!?!」

なんと……学院の近くにあった山が一つ消滅した。
爆風が直撃する。

「ぐう……!?!?・ナン……」

「……う……ああ……」

レオンが急に倒れる。

「なんだ……今……俺は何を……」

レオンが頭を振る。

「フン……ただのガキデハナイナ……貴様……」
グランの顔が引きつっている。

「なんだよ……俺は一体……痛……」

レオンは痛みの残る体に鞭をうち立ち上がる。

そして前を見たレオンは絶句した。

「な……山が……」

「お前!!! 山まで消滅させやがったのか……!!!」
レオンが叫ぶ。

「ナメテイルノカ……? ……アレはお前がヤツタコトダ」
グランが告げる。

は……?

俺……?

「冗談は言つな……俺でもあそこまでの力はない……」
レオンがグランを睨む。

「オボエテナイ……ノカ……まあいい……ドノ道、オマエハこゝ
で死ぬ……」

「!!!」

くそ……でも……って……あれ?

俺、確か……槍を刺されなかったか……?

しかしレオンが触っても、傷は一つもなかった。

??

「まあいい……それに今は……セルヴィアさんを安全なところへ……」

「」

その時。

「レオン君!!!」

!

「アリシアさん!!!」

アリシアがレオンに駆け寄ってきた。

「レオン君！無事！？」

「はい！・・・でもセルヴィアさんが・・・」

アリシアがセルヴィアを見る。

「・・・あれ、偽者よ・・・」

アリシアが半眼で告げる。

は・・・？

「おい！皆！」

！！

「！！！」

グランも驚いたようだ。

なんとセルヴィアが校舎の影から出てきたのだ。

「いや〜ごめんね〜、ちょっとやることがあったから、ある程度の魔力を付与させた風の分身で代用させたんだけど・・・まさか破られるとはね・・・」

「分身！？」

レオンが叫ぶ。

「そう、アレは分身・・・って言っても、宝具までコピーさせた完璧な分身なんだけど・・・」

セルヴィアがグランを睨む。

「ハハハハハ！！・・・オモシロイ！！・・・この俺を手玉にトツタカ！！・・・ならば、礼にコチラも全力でイク！！！」

グランの背後に魔法陣が展開、そこから大量の槍が出現した。

！！

全員が固まる。

「サア・・・ここからが・・・ホンバンダ・・・」

「くそ・・・まずいぞ・・・」

レオンが呟いたその時。

ドクン・・・

「！！！」

なんと、レオンの手にしているミスティルティンが輝いている。

「これは・・・！！！」

レオンが驚く。

「死ね！！！」

グランが手をかざし、こちらに向けた。

ヒュン・・・

何十もの槍がこちらに飛んでくる。

！！

ドクン・・・

ミスティルティンが勝手に動いた。

「！！」

ミスティルティンが勝手にレオンの片腕を動かし、剣を振らせた。

キュン……

「!？」

レオンだけで無く、アリシアもセルヴィアも驚いていた。

「ヤリガ……キエタ……ダト!？」

グランも驚いている。

そう、レオンの腕が動いた瞬間、槍が全て消え去ったのだった。

—————次回予告—————

遂にその力を発揮した、ミスティルティン。

レオンは、ミスティルティンがデュランダルと同じ、アーティファクトだということを理解する。

そして、戦いの行方は!？

次回、終結、お楽しみに。

終結

「消えた・・・？」

レオンが呆然と呟く。

セルヴィアもアリシアも呆然としている。

それはグランも同じだろう。

「ナ・ナニを・・・した・・・小僧・・・!？」

グランがレオンを怯えたような目で見ている。

「・・・まさか・ミスティルティン？」

レオンが剣に視線を落とす。

ミスティルティンはレオンの手に握られ、輝いていた。

今・・・確かにミスティルティンが勝手に動いた・・・俺の腕を勝手に動かして・・・

「レオン君・・・今は・・・」

アリシアが尋ねてくる。

「・・・レオン君・・・その剣・・・何処で手に入れたの？」

セルヴィアが尋ねてくる。

「これはアリウスさんに貰ったんです、フルセイクの遺跡にあったとかで・・・」

レオンが思い出しながら告げた。

《フルセイクの遺跡の壁画が消えた後、これが刺さっていたんだ》

確かアリウスさんはこう言っていた・・・

「・・・フルセイクの遺跡・・・レオン君・・・私の予想で悪いんだけど、多分それはデュランダルと同じ、アーティファクトじゃないかしら・・・」

セルヴィアが驚きの真実を告げた。

！！

「バカな！！・・・あり得ん！！・・・オレガ持つデュランダル以外にもアーティファクトをモツモノガイルトイウノカ！！」
グランが叫ぶ。

そしてグランが両腕をかざす。

魔法陣が三つ展開。

「ナラバココで殺スマデダ！！」
槍が大量に出現。

！！

「まずいわ！！」
アリシアが叫ぶ。

・・・

「そうか・・・おまえは・・・」
レオンは意識を集中させた。

お前の力・・・試させてもらっぞ・・・！！

ヒュン！！！！

槍がこちらに向かってくる。

「！！！！」

レオンは思い切り振りぬく。

キンー!!

「ナ・・・」

グランが絶句。

レオンが剣を振った瞬間、槍の半分が消滅。

「はあ!!」

アリシアがウインディーネを振るう。

風が渦を起こし、レオンたちの盾となった。

キンキンキン・・・

槍を弾く。

「レオン君! どうやらその剣の能力は、恐らく魔法の力を無効化することよ!!」

アリシアが叫ぶ。

無効化!?

「多分・・・そうでしょうね。恐らく今までは、レオン君が魔力を飛ばすことにしか使っていなかったから、力が覚醒しなかったのですようけど・・・」

セルヴィアが告げる。

まさか・・・同じアーティファクトであるデュランダルに触れて、覚醒したのか!?

「つまり・・・これなら・・・」

「ええ、この危機を乗り越えられる!!」

アリシアが頷く。

「よし!!」

レオンは剣に意識を集中させる。

ドクン……

剣と意識を一つにしる……

俺がコイツを振るうんじゃない……体の一部として振るうんだ……

バン!!

アリシアの風の盾が破られる。

槍が一本レオンに迫る。

「っ!!」

レオンが力を解き放つ。

ミスティルテインの剣の腹筋に刻まれた文字が輝く。

「全ての魔力をこの世から抜え!……ミスティルテイン!!」

レオンが全力で剣を横に薙いだ。

カツ!!

バキン!!

槍が消滅。

「ナ!?!……バカな……コンナ……」

グランが後ずさる。

バキン!!

「!?!?・・・私が張った結界まで消えた・・・?」
セルヴィアが呟く。

それだけでなく、周りで治癒魔法を使っていた生徒の魔法も打ち消されてしまったようだ。

「・・・まさか・・・力を制御しないと、この辺一帯の魔力を消してしまうのか・・・!?!?」
レオンが呆然。

なんて、無茶苦茶な力だよ・・・!!

「ウ・・・オオオオオオ!!!!」
グランが絶叫。

魔力が上昇していく。

「まずい!完全に槍に飲み込まれたの!?!」
アリシアが叫ぶ。

ズズズズ・・・
地面にひびが入り始める。

どうやら、大地そのものが、グランの魔力に耐えられないようだ。

「まずいぞ・・・これは!!」

しかしそこで。

「ふふん、こんなこともあるかと、私が大規模術式を設置しておいたわ」

セルヴィアが微笑む。

「なんで早く言わないのよ!!」
アリシアが叫ぶ。

「だってその方が面白いし、だてに分身使って時間を稼いでいたわけじゃないわ」

そうか・・分身を使ったのは、このためか・・!

「風魔法・高位詠唱・ウル・・・スリサズ・・デガター・・アンデ
ノク・・・キール・・ゼルガ・・」

セルヴィアが詠唱を開始した。

「オオオオオオオオ・・ワレハコノセカイヲ・・!!」
グラン・・いや、デュランダルが叫ぶ。

「ワレハコノセカイノ王とナル!・・闇ニモ、光ニモ、ソシテ・・
《》ニモワタサナイ!!!」

天空に強大な魔法陣。

「ゲテル・・アノク・・ガルデラ・風魔煉迅縛へコーデス・エテリ
カーダ」

セルヴィアが人差し指を空中のデュランダルに向ける。

学院の彼方此方から風の鎖が伸びる。

ギャリン!!

「!?!」

デュランダルが驚く。

そして最後に大きな魔法陣がデュランダルを拘束し空中へと押し上げた。

「今よ！！」

セルヴィアが叫ぶ。

「私があそこまで風で送るわ！」

アリシアがウィンディーネに魔力を溜める。

そして、思い切り振り上げた。

風が渦巻き、レオンの足元を包む。

そして、上へ押しあげる。

ブン！

更にレオンは空中で漆黒の翼を顕現させる。

アリシアとレオンの力が一つになり、凄まじいスピードを生み出した。

「グオオオオオオオオ！！！！」

デュランダルが必死にもがいている。

「おおおおお！！」

レオンはミスティルティンの力の出力を全力にした、さらに自分の魔力を全て流し込む。

ズン！

ミスティルティンが完全に漆黒に染まり、漆黒のオーラが剣から大量に漏れ出す。

「グ・クソオオオオオ！ワレヲ・ナメルナ！！」
デュランダルが両手を上にかざす。

すると、手に、今までで一番紅い槍が顕現した。

「アレが・デュランダルの核！！」
レオンが叫ぶ。

「オオオオオオ！コレデ・オワリダ！！」
デュランダルが全身全霊をもって、槍を放つ。

槍を放った圧力だけで、上空の雲が吹き飛んだ程だ。

「行くぜえええええ！！」
レオンは思い切り振りかぶる。

そして横に思い切り振り切る。
漆黒の斬撃が槍に近ずき、そして激突。

ガアアアアン！！！！
凄まじい衝撃波が二人を、そして、地上を襲う。

赤と黒の激突。

しかし、レオンは更に空中へと進んだ。
もう一度振りかぶり……

「ナ・マダクルノカ！？」
デュランダルが動揺。

「槍ごと全てを切り裂いてやる!!!」

レオンの上空で先ほど放った斬撃と槍が大爆発を起こした。

しかし槍がまだ残っている。

しかしボロボロのようだ。

「これで・・・終わりだ!!!」

レオンが槍を思い切り斬りつける。

バキン・・・・・・・・

槍が砕ける。

そしてそのまま、グランの体に乗っ取っているデュランダルのもとへ突き進む。

「ウ・・・・・・・・アアアアア!!!クルナ!!!」

デュランダルの最後の力を振り絞り、魔法陣が大量に展開。数がざっと、五十はある。

地上では。

「ちょっと・・・アレはまずいわよ!!!」

アリシアが叫ぶ。

しかし。

「いいえ・・・大丈夫・・・彼なら・・・きっと・・・」

セルヴィアが安心しきった目で見つめている。

「???・・・あなた、どうしたのよ・・・あなたがそこまで他人を信用

するなんて……」
アリシアが驚いている。

「彼なら成し遂げるわ……」

そう……私を守ってくれた……あなたなら……
アリウスが期待したのも……分かる気がする……
私……あなたを気に入ったわ……レオン……

セルヴィアはレオンをただ、見つめていた。

槍が何百と顕現、一斉に降り注ぐ。

「……全てを消し去るぞ！！ミスティルティン！！」
レオンが魔力を込め、叫んだ。

「うおお！！」
思い切り振る。

バキバキバキン……
全てが碎け散る。

「!?」
デュランダルが絶句。

「これで……最後だ！！」
レオンが剣を思い切り下から切り上げた。

ミスティルティンは、グランの体を傷つけることなく、体内のデュ

「やっと、出会えたな・・・我が愛しき片割れよ
ジャックは微笑えむ。」

遂に動き出すルシアーデ王国、そして・・・彼らの目的は!?

次回、邂逅、お楽しみに。

人物・用語解説

物語を更新しようと思ったのですが、もう一度世界観を認識して欲しいということで、再度、人物・用語解説を載せました。

勝手に申し訳ないですが、よろしくお願いします。
物語は次回から更新します。

―――登場人物―――

レオン・イル・エキテス

本編主人公、16歳、ルベリージャ学院1-A所属。

魔法系統は古代魔法系統《闇》。

性格はめんどくさがりやだが、色々な人達と交流を重ねることで、物事を前向きに考えるようになる。

周りの女性から好意を向けられているが、鈍感なため、きずけていない。

神具は、殲滅の黒王剣ハレーヴァティン

アリス・ランガルド

本編メインヒロイン。16歳、レオンと同じ組に所属。

魔法系統は古代魔法系統《光》

世界の秘密にちかづくための「鍵」。

性格は最初は暗かったが、レオンたちと共に行動するようになってからは、明るくなってきている。

神具は不明。

アリシア・エーテラーゼ

本編のヒロインの1人。17歳、2-B所属。

魔法系統は風、宝具は風王天刃ハウィンディーネ。

学院最強と噂される生徒。

ヴィクトリア・シア・ミルフェリーナ

本編ヒロインの一人。メインに近いヒロインでもある。

16歳。

ミルフェリーナ王国第二王女。

魔法系統は水。宝具は水真海皇槍ハロンギエールの槍。

性格はきついと思われがちだが、実は心優しい。

エグザリオとの戦いを経て、レオンにさりげなく好意を向けるようになるが、レオンは全くといっていいほどきずいていない。

ルーク・ブリトニー

レオンの悪友、組みもレオンと同じ。

魔法系統は雷、宝具は、雷電極拳双ハサンダー・ゲイル。

1年生で宝具を発現させており、優秀なグループに入る。

アリウス・フィレス・ミルフェリーナ

ミルフェリーナ王国現、国王。

魔法系統は炎。星鏡世界最強と目される宝具使い。

宝具は炎皇竜の轟剣ハジーク・フリート。

『炎皇の宝具使い』の末裔でもある。

ゼクシア・ファイラーベ

聖七騎士団所属の宝具使い、謎が多く、かつてルベリージア学院の生徒会長をしていた。

魔法系統は雷。

アリウス曰く、『雷神の宝具使い』の末裔。

セルヴィア・オルセイド

ルベリージア学院の理事長であり、アリシアの旧友。

魔法系統は風、風塵蒼弓^{ハヘル}・シムルグ^ヤ

その実力はアリウスやアリシアとも肩を並べるほど。

独特の口調で話し、何事にも柔軟に対処する。

グラン・ジルグ

元・ミルフェリーナ傭兵部隊副隊長。

アーティファクト・デュランダルを使い、学院を襲撃するも、

レオンたちの奮闘によって失敗に終わる。

フィオル・ブリトニー

ルークの兄。

魔法系統は土。

宝具は不明。

ジャック

謎の男。レオンと何らかの関わりを持ち、レオンに多大な期待を寄せている。

ミーターファイリス・アルビオン

背中から、白い翼と黒い翼をはやした女性。レオンとアリスの秘密を知っており、物語の重要な時だけ、介入してくる。

――用語集――

星鏡世界

物語の舞台となる世界。

神と星の力によって作られた世界で、現在ではミルフェリーナ王国とルシアーデ王国がお互いに領土をかけて戦争を繰り返してきた。

魔法

星鏡世界に満ちている魔力を使い、己の心の奇跡を顕現させる力。

宝具

人間の心を魔力によって具現化させた物で、大きな力を持っている。
火・水・土・風・雷の五種類で成り立つ。

黒滅魔法

闇属性の魔法で、通常の魔法とは力の威力が桁違い。
現在の世界の法則に当てはまらない、異端な力。
現在この魔法を使えるのはレオンのみ。

光煌魔法

光属性の魔法で、威力は黒滅魔法と同等。
世界の法則に当てはまらない。
使用できるのはアリスのみ。

終焉と創造の年代記へエクストラ・クロニクル
星鏡世界の神話や成り立ちが記された書物。

コピーや複写本なら多く存在しているが、コピーは原典の半分も記されていない為、さほど重要ではない。
原典は何処かに存在するらしい。

神具

レオンとアリスがだけが発現できる存在で、その力は宝具とは別格
現在確認されているのは二つである。

レオンの、殲滅の黒王剣「レーヴァテイン」
とアリスの、再生の白
王剣「」の二つ。

神器

強大な力を持つ存在、まだまだ謎が多い。

その正体は、神玉と呼ばれる宝玉を埋め込まれた存在。
全部で十体存在するらしい。

超神星魔法

神器だけが行使できる、強大な魔法、通常は太刀打ちすら不可能。

神遺物「アーティファクト」

謎の物質、宝具を上回る程の力を秘めており、非常に危険な存在。
古代の遺物であり、何処からか持ち出されたものだとも言われている。

現存確認されているのは、「被剣ミスティルテイン」と「呪槍デユ
ランダルの二つ。

氷結の神剣・ブリューナク

神器インフェリオルが使った、超神星魔法、ブリューナクは完全な
勝利や栄光をもたらすとされている神話上の武器のため、人間が

抗うこと事態が不可能な存在。

聖七騎士団

謎の組織、ジャックという男もここに所属している。

魔鏡の庭園

物語の核となる場所、ミールフィリス曰く、レオンとアリスはここにたどり着く為に生まれてきたらしい。

邂逅

グラン・ジルグの起こした事件から三日がたった・・・
レオン達は学院の特別室にて話し合いを行っていた。

アリス・ヴィクトリア・ルークの三人も目を覚ましたので、事情説明をした後だ。

「いや〜それにしても、何とか乗り切れてよかったわ〜」
セルヴィアがのんびりソファーに腰を降ろし、ティーカップを傾けながら告げる。

本当・・・この人、戦闘時とは雰囲気は全く違うよな・・・
あの時のセルヴィアさん、とても頼りになったのに・・・
レオンは正直残念に思った。

「あ、そういえばあの人はどうなっ たんです？」
ルークが尋ねる。

「ああ、それはね、デュランダルを長時間使用した挙句、体に乗っ取られたために体の負担が大きくてね・・・魔法を二度と使えなくなつたそうよ・・・理事会が調べたところによるとね、アーティファクトには特性のようなものかしら、そういうものが存在しているそうよ。」

アリスが真剣に告げる。

「特性？」

アリスが首を傾げる。

「ええ、そう特性・・・というよりは性格とか習性とかそういうのに

近いわね、あのデュランダルはすこし面倒なものでね、人の意識を乗っ取ってしまうような呪力をもってたの．．だからこそグラン・ジルグは体に乗っ取られたのよ。」

「成る程．．だからあいつ、世界の王となるとか叫んでやがったのか．．．」

レオンが思い出すように呟く。

???

レオンは周りの人間がレオンを見つめているのに気がついた。

「???. どうかしました?」

レオンは首を傾げる。

「. レオン君. 世界の王って、どういうこと.?」

アリシアが心底不思議そうな顔をしている。

「そうね. あいつが最後に叫んだのは、絶叫したところまででしょ?」

セルヴィアも頷く。

?

「いやいや、叫んでたじゃないですか. 誰にも. とか、世界の. とか」

レオンがすぐさま告げる。

「私達. そんな言葉聞いていないわよ? ねえセルヴィア」

「そうね. 絶叫したが最後、全く話さなくなっただし.」

アリシアとセルヴィアが二人で話し合っている。

???

どういうことだ・・・まさか・・・あのデュランダルの言葉を聞いたのは、俺だけ？

「そんな・・・馬鹿な・・・」

レオンが絶句する。

「レオン君？」

「レオン・・・？」

「頭でも壊したか？」

三人も不思議そうにレオンの顔を覗き込む。

と、その時・・・

コンコン・・・

誰かが扉をノックした。

「はい、どちら様ですか？」

アリシアが言う。

「ミルフェリーナ王室より参りました、レデクというものです、アリウス王より至急確認して欲しい件があると、お手紙を預かりました。」

「・・・兄上から・・・？」

ヴィクトリアが扉を開け、手紙を受け取る。
それを開く。

「・・・これは！？」

ヴィクトリアが絶句。

「？・・・どうかしたのかヴィクトリア・・・？」

レオンがヴィクトリアに近づく。
そしてレオンも手紙を覗く。

「!?・・・これ・・・」
レオンも絶句。

するとヴィクトリアが。

「全員・・・聞いてくれ・・・今回の事件のことで、兄上と・・・ルシア
ーデ王国・国王、アーフェリオン王が、学院を訪問しに来るそうだ・
」

セルヴィアが告げる。

・・・

ええ〜!!!

特別室に、絶叫が響きわたった。

「これは・・・」

アリシアが手紙を見て絶句。

「あらあら〜これは大変なことになったわね〜」

セルヴィアはこんな状況でも、のんびりと紅茶を飲んでいる。

さすがだ・・・セルヴィアさん・・・

レオンは別の意味で歡心。

「まずいわね・・・これは・・・アリウス王ならまだしも・・・ルシアー
デ王国の王がこの学院を訪問するなんて・・・こんな事、今までなか
った・・・」

アリシアが告げる。

「でも、しかたないわよ〜来るなら来るで、何とかしないと・・・

ん〜でもぶつちゃけ面倒ね〜代理でも立てようかしら〜」
紅茶を飲みながらしみじみ告げるセルヴィア。

「・・・あなたは本当に・・・」
アリシアが呆れ顔。

それから一週間後、アリウスとアーフェリオン王が、ルベリージア学院を訪問した。

レオン達は王を迎える為、学院の入り口で立っている。

「でも、どうしてわざわざこの学院なんかに来るんすかね〜」

「なんだか・・・緊張する・・・」

「・・・はあ〜」

ルーク・アリス・ヴィクトリアの三人はそれぞれ勝手なことを呟いている。

「しかし・・・まさか・・・戦争を今は回避しているとはいえ、敵国の中心へ乗り込んでくるなんて・・・相手は何を考えているのか・・・」
アリシアが憂鬱そうに呟く。

「そうね〜それは私も気になっているわ〜・・・レオン君、アリスちゃん」

セルヴィアが急に二人を呼ぶ。
???

二人はセルヴィアを見る。

「二人は特に気をつけなさい、あまり一人では行動しないこと・・・
いいわね〜」

口調はいつも通りだが、視線だけは真剣そのものだった。

はい、二人は頷いた。

「でも、どうしてですか？」

アリスは尋ねる。

「ん〜。ちよつと気になってね〜」

セルヴィアが前方を鋭く睨む。

？

レオンもセルヴィアに見習い前方を見る。

「!!!」

前方に強大な魔法陣が展開。

キユイイイイイイ．．．．．

「来たようね．．．」

アリシアが告げる。

「あれは．．．」

レオンが呆然とする中、セルヴィアが教えてくれた。

「あれは、大規模転移魔法よ、大人数を一斉に転移できるから、こういうことにはよく使われるわ」

やがて、人影が大量に出現。

そして．．．．．

「やあ、待たせたね、皆」

アリスが微笑む。

やがて．．．．．

アーフェリオン王が現れた。
白い髪に鋭い双眸、まさに王の威厳に包まれたような人だった。
その後ろに、何十人という護衛が姿を現した、先頭には、一番目立つ服装を着た人も居る。

おそらく、部隊長だろう。
セルヴィアが一歩進み出る。

「始めまして、ルベリージア学院の理事長、セルヴィア・オルセイドと申します。以後、お見知りおきを、今回はご訪問いただきとても嬉しく思います」
セルヴィアが握手を求める。

「ああ、ご苦労だったな、学院生諸君」
アーフェリオンは微笑む。

.....

なんだか、イメージと違う.....
レオンが抱いていたのは、極悪非道というイメージだった。

「悪いね、というより久しぶりと言ったほうがいいか？セルヴィア」
アリウスが憎らしげに笑う。

「ええ、そうね〜でも今は先に、あちらの方々をお通しした方がいいでしょ？」
セルヴィアが促す。

アーフェリオンはセルヴィア達に連れられ、学院の王族専用の部屋へと姿を消した。

しかし、今回の事件を解決した張本人であるレオンは、すぐに呼ば

れることになったが・

場所は王族特別室。

「君がレオン君か、始めまして、ルシアーデ王国国王、アーフェリオン・ギル・ルシアーデだ、今回のことで話が色々あってな」
アーフェリオンはレオンを見つめる。

まるで心の奥底まで覗かれるような、そんな瞳だった。

「さて・・落ち着いたところで・・理由を話しましょうか、アーフェリオン王・・なぜ今回の事件のことであなをこんな所まで呼んだのかをね・・それも、「敵地」のど真ん中にまで来させて」
アリウスが鋭く微笑む。

これには、周りの者が驚いた。

護衛騎士団の団長らしき人物が剣を抜き放ちアリウスの首にあてる。

「アリウス王、今の発言・・どういった理由で?・・あなたがいくら王だとしても、今の発現は許されない・・」

しかしアリウスは微笑んだままだ。

「・・・剣を収めよ・・エクセリーゼ、相手はアリウス王であるぞ」
アーフェリオンがエクセリーゼと言われた男を見ずに告げる。

「・・・はっ」

エクセリーゼは剣を収めた。

「失礼したアリウス王、我が騎士はいささか堅物でな、冗談が通じぬのだ・・最も・・今のあなたの発言は、冗談ではないでしょうが・」

アーフェリオンは微笑む。

.....

二人の間に気まずい沈黙が訪れる。

この状況で飄々としているのは、セルヴィア、エクセリーゼの二人だけだろう。

アリウスとアーフェリオンに到っては、この状況をどこか楽しんでいるようにも見える。

「まあ、本題に入りましょう、先ずは今回の件についてですが、急な呼び出しに応じてくれたこと・・・感謝する」

アリウスが告げる。

「いいえ、こちらこそ、こちらもどうして私が呼ばれたのか気になるところでしたので」

「実はですね、今回起きた事件の主犯を取り締まりましたね、その男にデュランダル・アーティファクトについて聞いたのです、するとその男はルシアーデ王国の人間から、デュランダルのことについて聞かされたと・・・言っていたのですよ・・・さらには、その槍を持ってくるようにとまで、頼まれたそうでしたね・・・もし、持つてくることができれば、大量の金と引き換えにするから・・・とそういわれた、とね」

アリウスは自分の顎に手を当て、アーフェリオンを睨む。

レオンは事実を聞き、驚いていた。

まさか、そんな裏があったとは。

「残念ですが・・・身に覚えがないですね」

アーフェリオンは首を横に振る。

「はたしてそうでしょうか？．．．その男、グランというのですが、そいつが頼まれた人物の名前も教えてくれましてね．．．そう．．．アーフェリオン王．．．あなたの国の《聖七騎士団》という組織のメンバーから頼まれたと．．．」

アリウスが微笑む。

と、その瞬間、アーフェリオンとエクセリーゼの気配が変わった。

「はて．．．聖七騎士団．．．そんな組織は知りませんね．．．」
アーフェリオンは告げる。

今までと口調や雰囲気は変わっていないが、何かが変わったとレオンには感じられた。

と、その時。

「レオン君、セルヴィア．．．悪いけど、部屋を出て行ってくれないか」

アリウスが告げる。

「お前もだ、エクセリーゼ」

アーフェリオンもそう言った。

「はっ」

「分かりました．．．」

「わかったわ」

三人はこうして部屋を退室することになった。

そのころ、アリスは・・・
学院の庭を散歩していた。
学院は今日に合わせて休校状態の為、一般生徒はいない。
ヴェクトリアとルークも、今は一般生徒と同じく、寮に引きこもっ
ている。

アリスは、レオンの事が気になり、寮を出てきたのだった。

「レオン君・・・大丈夫かな・・・」
アリスが呟いたその時。

「大丈夫じゃないかしら」
女性の声が響いた。

!?

アリスは振り向く。
すると、木の枝の上に女性が立っている。

薄い金色？・・・そうとしか言い表せないような髪の色をしている。
綺麗な人だ・・・

「誰・・・？」

アリスは警戒した、今の今まで、全く気配を察知できなかったから
だ、まるで今、現れたかのような・・・どちらにしろ、只者ではない
ことは確かだ。

「本能的に私を警戒する・・・正しい選択ね、もしあなたが警戒心を
抱かなければ、あなたを殺していたかも」
女性が微笑む。

「!?!」

アリスは更に警戒する。

「でも、大丈夫、今はあなたを襲いやしないわ．．と、名乗らないとね．．私は、《聖七騎士団》所属、順列ナンバー6《ゼクス》エヴェリウス．．宜しくね．．アリス・ランガルドさん」
エヴェリウスと名乗った女性が告げる。

どうして私の名前を．．？

「エヴェリウス．．さん？．．あなたは何者ですか．．？．．それに．．」

聖七騎士団という言葉が気になった。

「ああ．．気になるの．．私は何者か．．でもごめんなさい？．．私はこれ以上の事は語れないの．．」
エヴェリウスが肩をすくめる。

「語らないなら．．」
アリスが魔力を手に集中させる。
キィィィン．．．
手に白い剣が顕現。

「．．．．．だめよ？．．あなたは．．いいえ、あなた達は確かに覚醒したけれど、私達を相手にしていい段階にはないの．．今のあなたでは、力不足よ。あなたはまだ．．自分の力で何ができるのか．．あなたのその力が何なのか．．まだあなたは理解できていない」
エヴェリウスは告げる。

「何を．．言ってるの．．？」

アリスは困惑した。

「理解なさい・・・アリス、あなたの力の・・・〔本質〕をね・・・そうすれば、あなたは真に目覚めることができる」

・・・

アリスはこの女性が何を言っているのか、理解できなかった、だが、何か重要なことを言っているのは、理解できた。

「・・・そろそろ行かないと・・・じゃあね、アリスさん」

エヴェリウスはそう告げた。

「！！・・・待って！」

アリスは手を伸ばす。

しかし。

「大丈夫よ、どうせまた会うしね・・・いいえ、戦うかもしれないわね」

エヴェリウスが笑う。

???

戦う???

「そうそう、あなた、あのレオンとか言う少年と仲が良いわね?」

レオン君・・・?

どうしてここでレオン君の名前が・・・

「一つだけ言っておくわ・・・あなたがもしこのまま行けば・・・あなたはレオンという子と・・・殺しあうことになってしまつかも

しれないわよ？」

エヴェリウスが微笑む。

ゾクツ・・・

「！！！」

アリスの背中に冷たいものが駆け上った。

まるで、エヴェリウスの告げたことが、自分を変えてしまうような気がしたからだ。

「じゃあね」

エヴェリウスは指をパチンと鳴らした。

フツ・・・

と、きずいた時には、エヴェリウスの姿が消えていた。

・・・

アリスは呆然となった。

-----次回予告-----

レオンは部屋を出た後、教室に忘れ物をとりに行っていた、しかしそこでレオンは、ジャックと名乗る男と出会う。

「ああ・・・やっと・・・やっと出会えた、我が愛しの片割れよ・・・

「てめえ・・・何者だ・・・」

レオンの前に現れた謎の男、ジャック、彼がレオンにもたらす物とは？

そして、二人は戦うことになり！？

「さあ、レオン・・・戦おう・・・私達の戦いを・・・発動・・・黒滅魔法・・・」

「なんでお前が闇の魔法を・・・！？」
レオンは絶句する。

次回、邂逅　？、お楽しみに。

邂逅？

アリスがエヴェリウスと合っている最中、レオンは教室へと急いでいた。

「しまった・・・教室に宿題のレポートを忘れちゃった・・・」

レオンはそう呟き、学院の廊下を走っていた。

今日は学院が休みなので誰も居なかった。

そして教室に到着するレオン。

「ふう・・・到着・・・相変わらず広いよな〜この学院は・・・」

レオンは慥然と呟く。

ルベリージャ学院は膨大な土地を所有している為、校舎も馬鹿みだいに広いわけであるが、最初の内は学院内で迷子になるのも、お馴染みのことらしい、無論、レオンやルークも入学したてのころはよく迷ったものだ。

「それにしても・・・大丈夫なのか・・・？・・・アリスさんのことだし、まずい事にはならないはずだけど・・・」

そう、現在ルシアーデ王国との戦争を回避できているのは、アリスとアーフェリオンがお互いに強大な力を持つ宝具使い「ナイト」だからである。

お互いに同等の力を持つからこそ、牽制し合えているわけだ、その均衡が何かの拍子に崩れれば、戦争が開始される・・・そう、何百年ごとになんども繰り返された、ハアルビオン戦争が・・・

「・・・ま・・・アリスさんに任せておけば、戦争なんて起きないよな・・・起きちゃいけないんだ・・・アルビオン戦争なんて・・・」

「
レオンが眩く。」

そう・・・姉さん〴〵を殺した・・・あの戦争だけは・・・
レオンが感傷に浸っていると・・・

「本当に・・・？本当に戦争が起きないと・・・お前はそう言えるのか、
レオン？」

！！

廊下にレオン以外の声が響く。

「誰だ！？」

レオンが思い切り振り向く。

そこにいたのは、漆黒のマントを着た男だった。

「・・・何者だよ・・・お前・・・」

レオンは後ずさる。

どう見ても学院の関係者には思えない。

奇妙な男だ・・・漆黒の髪に漆黒の瞳・・・まるで・・・《ヤミノモノ
》・・・

「ッ！？」

ズキンとレオンの頭に痛みがはしる。

「うあああ！」

レオンは思わず床に膝をつく。

な・・・なんで急に痛みが・・・どうしたんだよ、俺の体・・・！！

しかし、男は愉快そうに。

「フフ・・・この私に反応しているのだよ・・・君が・・・いや、《君に刻まれた記憶》がね・・・」

漆黒の男は笑う、愉快そうに・・・本当に愉快そうに・・・

「何者だ・・・てめえ・・・」

レオンは痛みが残る頭を無理やり振り、立ち上がる。

「フフフ・・・何、せつかくここまで来たのだ、挨拶にな・・・ああ、やっと会えた・・・我が愛しき片割れよ」

男が両手を広げる、まるでわが子の帰りを待っていたかのように。

ゾクツ・・・

「!?!」

レオンは後ずさる。

しかし男は一步近づく。

「・・・ツ・・・」

怖かった、何故だか分からない・・・だが、怖かった・・・

「受け入れるのだ・・・さあ・・・レオン、私を取り込め、そうすれば

お前は・・・」

男は笑う。

「来るな・・・来るな!!」

レオンは魔力を手に集中、漆黒の剣が出来上がる。

「・・・ふむ、まだ時ではないようだな・・・だが、抵抗するのも、

選択肢の一つか・・・」

男は意味不明な言葉を告げる。

「まあいい・・・では、始めようか・・・お互いを理解する為の・・・戦いをな・・・発動・黒滅魔法・」

男が告げたそれは・・・

「どういうことだよ・・・どうしてお前が・・・闇の魔法を・・・!？」

レオンが絶句。

「驚くことは無いだろう?・・・私はお前であり、お前は私なのだから・・・」

意味不明な言葉を続ける男の手から漆黒の闇が辺りを覆う。

ズズズ・・・

闇は辺りを覆う、そしてレオンはその闇に吞まれた・・・そして意識を・・・失った・・・

・・・

「う・・・ん・・・」

レオンは体を起こした。

そして辺りを見渡す。

!!

「ここは・・・!!」

レオンがいたのは、巨大な城が建っていた、闇の世界・・・ミーフイスと始めて合った場所・・・

「どうしてここに・・・」

「私が連れてきたのだよ、レオン」

！！

レオンは立ち上がり距離をとる。

「お前！？・・・どうして・・・」

レオンは呆然となった。

ここは、レオンだけが来れる場所だと、思っていた。

「何も不思議なところはない・・・だが、^ハ星鏡世界^ニで戦うのは・・・気が引けてな」

男は上を見上げ告げる。

・・・星鏡世界・・・？

男の言葉には違和感があった。

自分達の住む世界を、星鏡世界と呼ぶものか・・・？・・・もし呼ぶとしたら、それはこの星鏡世界以外にも、世界が存在していると・・・そう、レオンには聞こえた。

「・・・不思議そうだな・・・調度いい、ここが何か、お前に教えておこう・・・ここは、お前達を知る^ハ世界ではない^ニ・・・つまり、星鏡世界では無い、ここは・・・^ハ魔鏡^ニと^ハ星鏡^ニの狭間・・・お前の心の深遠とつながる・・・^ハ終焉の世界^ニ・・・」

男が静かに告げる。

「・・・終焉の世界・・・？・・・何を言ってるんだ・・・」

レオンは呆然となった。

「魔境の庭園」

男が告げる。

「!!!・・・なんでお前がその言葉を・・・インフェリオルと同じ言葉を・・・」

レオンが驚く。

「・・・やはり少しは知っていたか・・・まあ最も、まだ魔鏡の庭園のことを完全に知るには早すぎるか・・・なら、戦いながら教えるでしょうか・・・」

男はにやりと笑う。

「黒滅魔法・黒波激剣ハシャドウ・オブ・ブレイド」
男の両手に漆黒の剣が二振り出現。

!!!

やっぱりこいつ・・・闇の・・・

「発動・黒滅魔法・中位詠唱・ハシャドウ・オブ・ブレード」!
レオンの両手に漆黒の剣が出現。

思い切りレオンが踏み込む。

男は一步も動かない。

レオンはこれ見よがしに思い切り剣をたたきつける。

ガァン!!

黒と黒が衝突。

「フフ・・・お互いに同列の力を持ちながら、いがみ合い、ぶつかり合うとは・・・だがそれも一興か・・・」

男は微笑む。

「く……」

コイツ……俺がどれだけ力を加えても、びくともしない……っ!?

「ああ……名乗っておこう、《聖七騎士団》所属、ナンバー2ハツヴァイ、ジャック……だ……宜しくと、今は言っておこう」
ジャックはそう告げた。

「聖七騎士団……?……なんだよそれ……」

「直に分かる、お前達……光と闇が世界の真実に近ずけばな……」

ガイン!

剣をお互いに打ち合い、距離をとる。

「やっぱり、こいつ……滅茶苦茶強い……俺の剣筋も動きも、全部読まれてやがる……」

レオンが歯噛み。

「どうした……お前の力はそんなものではない筈だ、早く本気を出せ……でなければ……無理にでも引き出す……黒滅魔法・高位詠唱・ハガラス・イング・エオー……ベオークン……テイル・黒滅神槍ハゲイ・ボルグ」
ジャックが片手を上に掲げる、すると虚空に漆黒の槍が顕現。

「!」

レオンは絶句。

「さあ、お前の全力を見せてみる……」
ジャックが腕を振り下ろす。

ギャリン!!

槍がレオンに向かって飛ぶ。

凄まじい魔力だ・・恐らく、セルヴィアの張った結界でも防げないだろう。

レオンはそんなことを呆然と考えた。

・・・

ドクン・・・

どうすりゃいいんだ・・あんな魔力・・防ぐことなんて・・いや、逆に・・無効化できれば、あの槍も・・無効化、無効化と言えば、そう・・俺がいつも使う・・

!!

「ミスティルティン!!」

レオンは叫んだ。

レオンが願ったその時。

槍がレオンの目の前にあった。

「しまっ!?!」

ガイン!!!!

・・・

レオンは恐る恐る、閉じていた目を開けた。

「!!!!」

なんと、ミスティルティンがいつの間にか現れ、槍を止めていた。

「!・・え・・何時の間に・・」

レオンが呆然となった。

レオンが、ミスティルティンがあれば・・と願った・・するとミス

ティルティンが本当に現れたのだから、驚くのも無理は無い。

レオンはミスティルティンを掴み。

「うおおおおお．．．！！！」

剣に魔力を通し、槍を抜え、と念じる。

グン．．．．

「！！！！．．．どうして．．．なんで消えないんだ．．．」

レオンはミスティルティンの力を発動させた．．．しかし槍は消えず、受け止めるのが精一杯だ。

するとジャックが。

「ほう、レオン．．．アーティファクトを所持していたのか．．．だが、残念だったな、いくらアーティファクトでも、消し去るのは不可能だ」

男は笑う。

．．．．どうして．．．．まさか！！

「大きすぎる．．．？．．．ミスティルティンが抜える力の限度を超える程の魔力ってことか．．．！！？」

レオンが絶句。

ギリ．．．．

レオンの足が後ろへ下がる。

少しずつ、レオンが押されているのだ。

「！！！！．．．受け止めるのが限界なら．．．．．そらせば良い！」

レオンは足を横に運ぶ。

すると槍はスライドし、後ろへ突き抜けた。

「ほっ」

ジャックが目を軽く見開く。

「おおおおおおー!」

レオンはジャックに迫る。

跳躍。

そして振り下ろす。

「成る程・・なかなか、楽しませてもらった・・礼を言う、レオン・
・お前がもしも、魔境の庭園にたどり着き・・その残酷な運命を乗
り越えられたなら・・私は・・」
僅かに・・ほんの少しだけ楽しそうに告げるジャック。

しかし・・・

「今は・・レオン・・君の成長を見守るとしよう・・・・」
《 魔法・
アイン・ソウル》
ジャックが何かを呟き。

キユイイイイイイ・・・・・

レオンは急に、意識を失った。

レオンは意識を失う前、ジャックの声を聞いた気がした・・・

・・・・レオン・・・君が私の願いを・・かなえてくれる日は・・
近いのかも知れない・・だからこそ・・・君には・・期待している
よ?

そして。

．．．．．行きたまえ．．君ならばたどり着けるだろう．．世界の導き手にして、世界の真なる守護者．．「魔鏡」と「星鏡」を束ねし者．．《聖天の宝具使い》へと．．．．．

．．レオン．．「君が私を倒してくれること」を．．願っている．．

．．．．．

「っー!!」

レオンは跳ね起きた。

「．．．．．ここは．．．．？」

レオンは学院の廊下の真ん中で倒れていた。

「．．．．あいつ．．ジャックって言ったか．．．」

レオンはじつと地面を見て、考えた。

あいつは何者だったんだ．．？．．どうして俺のことを．．

《聖七騎士団・所属、ナンバー2「ツヴァイ」．．．．》

「!．．．．聖七騎士団!」

レオンが思い出したのは、ジャックの残した唯一の手がかり．．

．．．．．

レオンはすぐさま、アリオスの元へと駆け込んだ。

アリオスは生徒会長の特別室で、優雅に紅茶を飲んでいたが、レオ

ンが真剣なのを見ると、話を聞いてくれた。

幸い、レオンが意識を失っている間に、かなりの時間が経っていたらしく、日はもう暮れかけていて、アーフェリオン王は帰国したとのことだった。

因みに、アリスやヴィクトリア、ルークも、部屋に集まっていた。レオンとアリスが同時に、聖七騎士団という名を告げた時は、アリスとアリシアが飲んでいた紅茶のカップを、床に落としたほどだった。

-----次回予告-----

レオンとアリスが、聖七騎士団という組織に所属している者と同時にあつたということを知り、驚くアリス。

アリスが語る、ルシアーデ王国の起こそうとしている事とは・・・そしてアーフェリオンが去り際に言い残していたという言葉とは？

そして、学院に、アリシアの幼馴染を名乗る男子生徒が転入してきて、学院は大騒乱！？

次回、アリシアの許婚！？、お楽しみに。

アリシアの許婚!?

生徒会長特別室にて、レオン達はある出来事について話し合っていた。

セルヴィアは、今回のアーフェリオン王の会談についての会議があるとかで、少し前に帰ったところだった。

「成る程・・・つまりはレオン君とアリスちゃんは、全くの同時刻に、聖七騎士団を名乗る者達に出会ったと・・・そういうことが・・・？」
アリウスが緊張した面持ちで告げる。

はい。

レオンとアリスは同時に応える。

「私が出たのは、エヴェリウスと名乗っていた女性でした・・・」
アリスが思い出すように告げる。

「・・・俺が出たのはジャックって男です・・・」
レオンも同じように告げる。

「ふむ・・・エヴェリウスにジャック・・・か・・・おい！」
アリウスが手を鳴らし、ドアの外側に控えさせていた衛兵を呼ぶ。

「はい」

衛兵が扉を開け、返事をよこす。

「今から王室の個人名簿管理館に行き、そこに介入しろ・・・それから、エヴェリウスとジャックという人間が在籍しているかすぐに調べよう、下に告げる」

アリウスが厳しく告げる。

男は頷き、部屋を出て行った。

そこで、レオンは気になっていた事をアリウスに質問した。

「あの・・アリウスさん・・アリウスさんは聖七騎士団という組織が何か知っているんですか・・？」

レオンが尋ねたくなるのも当然だろう、聖七騎士団と出会ったのはレオンとアリスの二人のみ、出会ったことが無いアリウスが知っているはずは無いのだから・・

ヴィクトリアやルークも頷いていた。

やがてアリウスはポツリポツリと話し始めた。

「実はな・・聖七騎士団と言う組織は、ルシアーデ王国が独自に持つ部隊だという事が分かった」

アリウスが告げた真実にその場の、アリウスとアリシアを除く全員が言葉を失った。

聖七騎士団が・・ルシアーデ王国の、直属部隊ってことか・・？

「アーフェリオン王は誤魔化していたが、我らミルフェリーナ王国は、少人数ではあるが通信役をスパイとして送り込んであってな、その者に命令を下して調べさせたところ・・ルシアーデ王国には、王直属の表部隊である、精霊守護騎士団と・・裏向き・・つまり、陰で暗躍している聖七騎士団の二つを所持しているらしい・・」
アリウスが神妙そうに告げる。

「今日来ていたのは、表向き・・つまり、精霊守護騎士団の方みただけだったけど・・万が一に備えて数名を連れて来ていたようね」
アリシアが付け足した。

「そう・・・だが、精霊守護騎士団と聖七騎士団が完全に別物の存在だとすれば、少し妙なのだよ・・・聖七騎士団を全く、存在すら知らないという事は、お互いに敵対していた可能性もあったということ・・・それが示すのは・・・」

アリウスはそこで言葉を止めた。

「精霊守護騎士団内にも、聖七騎士団に通じる者がいると・・・そういうことですか・・・兄上？」

飲み込みの早いヴィクトリアが早速告げた。

「その通りだ、さすがは我が妹だ・・・そう、先ほどヴィクトリアが告げたように、裏の組織を知らない精霊守護騎士団が、敵対や遭遇が無いのは、おそらく表の方にも、裏に通じる人間がいるということ・・・例えば、あの隊長とかね」

アリウスが謎解きをするように段階的に告げる。

「あの、エクセリーゼとか言われていた人ですよ・・・」

レオンが思い出すように呟く。

エクセリーゼ・・・アリウスさんに剣を向けた人・・・

「恐らくはあのエクセリーゼという人物は、聖七騎士団所属の人間なのだろう・・・あの男が裏と表の要になっているのだろうな・・・お互いが出会わぬように・・・」

アリウスが苦笑する。

それから、と付け加えるアリウス。

「ここまでは、レオン君達に最初話そうと思っていたことだし・・・しかし、レオン君とアリスちゃんが聖七騎士団と出会っていたのなら、せっかくだ、話を聞かせてくれないか？彼らが何かを言ったとか。」

何かないか？」

アリウスが真剣に質問する、恐らくは聖七騎士団について何かを知りたいのだろう。

そういえば・・・と、アリスが告げる。

「エヴェリウスって名乗った人は、聖七騎士団所属、順列ナンバー6「ゼクス」・・・って言ってました・・・」

アリスが何かを思い出し告げる。

！！

「お・・・俺もです！・・・俺が出会ったジャックって男も・・・ナンバー2「ツヴァイ」って言ってました！」
レオンも同じように告げる。

アリウス王・・・と、アリシアが呟く。

「ふむ・・・どうやら、聖七騎士団には順列があるようだな・・・騎士団名から察するに恐らくは7人の人間から成り立っているのだろう・・・現在判明しているのは3人か・・・」
アリウスが考え込む。

3人・・・エクセリーゼ・・・ジャック・・・エヴェリウス・・・

「しかも・・・恐らくは一人一人がとても強大な力を持っていると・・・それこそ、私やここにいる全員と渡り合う程の力・・・」
アリウスが憂鬱そうに呟く。

「他には無い？・・・戦ったとか」

アリシアが付け足す。

「いいえ・・・私は戦いませんでした・・・でも・・・」

アリスが言葉を濁す。

「でも？」

アリシアが首を傾げる。

「いいえ！・・・なんでもありません！」

アリスはエヴェリウスが言ったことを思い出していた。

《あなた・・・このまま行くと、あのレオンって子と、殺しあう運命になるかもね》

殺しあう？・・・私とレオン君が・・・？

アリスはレオンを横目で見る。

ありえない、私がレオン君を殺すなんて・・・私はむしろレオン君と・・・

「そう・・・ならレオン君は？」

アリシアが今度はレオンの方へと頭を向ける。

「え・・・俺は・・・戦いましたけど・・・」

《黒滅魔法・・・》

ジャックが黒滅魔法を使ったこと・・・やっぱり伏せておいた方がいいよな・・・

「すみません・・・すぐに気を失ってしまって・・・」
レオンが頭を下げる。

「そう・・・ならいいわ。皆、今日のご苦労様、部屋に戻って休みなさい、明日から学院も始まるわけだし」
アリシアが告げた。

こうして、アリウスとアリシアを除く全員が外に出て行った。

「あの二人・・・何か隠してましたね・・・」

アリシアがレオン達の出た行った扉を見つめる。

「ああ・・・恐らくは何かあったのだろうな・・・聖七騎士団と・・・アリウスも咳く。」

「何かが・・・始まるうとしているのでしょうか・・・この、星鏡世界に・・・」

アリシアが遠い目をする。

「そうだろうな・・・思い返せば、すべてはある一つの事象を中心に展開しているのだろう・・・そう・・・レオン君とアリスちゃんの二人、闇の力と光の力を持つ二人を中心にね・・・」

それに、とアリウスが付け加える。

「あの二人のみに、聖七騎士団が接触してきたこと・・・恐らくは知っているのだろう、光と闇の出現を・・・そして彼らルシアーデ王国は我らが未だ知らぬ何かを・・・知っているからこそ、行動を起こそうとしている・・・アーフェリオンが帰り際に言った言葉を覚えているか？」

アリウスが質問する。

「ええ・・・確か、《直に時の針は歩みを進めるだろう・・・君達も早くきずくといい、この世界の真の姿に》・・・とか、言っていましたね・・・」

「ああ・・・もしかすると・・・全ては仕組まれていたのだろう・・・神々によって・・・失われたはずの系統を持つ者が同時に現れ、神器

と呼ばれる存在が出現し・・・そして、ルシアーデ王国が動き出した・
」

そして・・・伝説の宝具使いの末裔も、動きだした・・・俺やゼクシアのように・・・と小さく呟いた。

「一体・・・我らは何処へ向かおうとしているのか・・・」
アリウスは窓の外を見て呟いた。

それから一日が経ち、このルベリージア学院に更なる事態が・・・

レオンとアリスは二人で学院へ登校していた。

そして、学院の2・Bに生徒達が集まっているのを二人は発見した。

「レオン君・・・あれ、何かな・・・」
アリスが呟く。

「さあ・・・でも、2・Bってアリシアさんの教室だよな・・・」
レオンも呟く。

その時。

「おい!!」

誰かが二人を呼んだ。

二人は仲良く同時に振り返る。
そこに居たのはルークだった。

「ルークか・・・なんなんだあの集まりは？」
レオンが尋ねた。

「早く俺達も行くぞ！．．あそこにはアリシアさんの許婚が転校してきたらしいんだよ！！」
ルークはかなり焦っている様だ。

．．．．．？

レオンとアリスは何を言われたのか理解に苦しんだ。
お互いに顔を見合わせ．．．

『許婚！？』

二人は同時に叫んだ。

すぐさまレオン達は、2・Bに直行した。
そして、人ごみを掻き分け、教室に入る。

「アリシアさん！」
レオンが叫ぶ。

そこには、教室の中で一人の男子生徒と向かい合うアリシアの姿だった。

オレンジ色の短い髪をした男子生徒が告げる。

「さあ．．行こうか、俺のアリシア．．」
そうやって男子生徒は片手を伸ばした。

！！

レオン達は絶句したのであった。

-----次回予告-----

一難さつてまた一難の状態の学院。

なんと学院に転校してきたのはアリシアと許婚の関係にある男子らしいのだが・・・？

なんとその生徒は、大貴族！

アリシアはそれを受け入れない、そこでその男子生徒が放った言動で、学院は大騒ぎ。

次回、アリシアの許婚！？、お楽しみに。

アリシアの許婚！？？

ルベリージャ学院2 - Bにて、大事件が発生した。
栄えあるルベリージャ学院生徒会長の許婚が転校してきたのだ。

「さあ、俺と来るんだ、アリシア・・・」
オレンジの髪をした男子生徒が告げ、手をアリシアに差し出した。

！？

周りの生徒からざわざわと話し声が聞こえた、全員、この突然の状況に頭がついていけない様だ。

「・・・・・・・・・・」

しかしアリシアはさっきから黙ったままだ。

「・・・？・・・どうかしたのかい？・・・アリシア」
男子生徒が告げる。

「あなた・・・何をもって私の許婚になるといふの？」
アリシアがただ前を睨む。

「何故？・・・何故だつて？・・・決まっているだろう！・・・僕の家、
ルイラージ家は大貴族、君のエーテラーゼ家とは昔から良好の仲だ、
ならばお互いに認め合うのは当然の筈だ！！」

・・・・・・・・

全員が啞然としていた、この男は何を言っているのだ？・・・思っていることだろう。

「そして、君の先代の当主とは生まれた子供を我が家に引渡し、許婚となる契約となっていたのだ、そして君はそのタイミングで生ま

れた、エーテラーゼ家の人間・・・それに・・・君のその美しい容姿・・・完璧な才能、ナイトとして秀でた能力・・・全てが最高のポテンシャルを兼ね備えた、この僕、ジール・ルイラージに最も見合う女性だ！」
ジールが叫ぶ。

「確かに、あなたの家とはそういう契約があることは知っていたわ・・・でも、残念だけど、私はあなたの事を認めていない・・・例えば家柄の関係だろうと、あなたには屈しないわよ、ジール・ルイラージ」
アリシアは毅然と告げる。

レオンはその時、一瞬感動を覚えた、実に立派な考え方だ・・・まあ、アリシアらしいといえばアリシアらしいが・・・というより、あのジールとか言う男とアリシアが完全に釣り合っていない。

アリシアは学院最強とまで噂される生徒、全てが完璧で、歴代の学院在籍生の歴史を振り返っても、アリシアの実力は今まで卒業していった生徒の中でも優秀ランク5本の指には入るらしいとまで言われた生徒だ。

「ふむ・・・受け入れてくれないのかい？・・・まあでも、いきなりは少し僕も気が早かったな・・・仕方ない、少し・・・猶予を与えよう・・・その間に考えたまえ、最も君は・・・僕の前に跪くだろうがね・・・」

ハハハ、と高らかに笑いながら教室を出て行くジール。

・・・

教室は沈黙に包まれる。

「あの・・・アリシアさん・・・」

レオンが恐る恐るアリシアに声をかける。

「ああ・・・レオン君、ごめんなさいね・・・見苦しいところを見せてしまって・・・」
アリシアが苦笑。

「それより・・・本当なんですか？・・・あんな男がアリシアさんの・・・」
レオンは思わず口を噤んだ。

「ここで話し合っても意味は無いわ、とりあえず、全員すぐに自分の教室に戻りなさい！！・授業が始まるわよ！！」
アリシアが周りの生徒達に一喝する。

すると生徒達はバラバラに各々の教室へと戻っていた。

レオンとアリス、ルークの三人は生徒会長の部屋に来ていた、授業は特別に休んだ。
ヴィクトリアは王室で何かの用事があるとかで、学院には来ていない・・・最も、ヴィクトリアが来ていた暁には、ジールに殴りかかっていただろうが・・・

「さて・・・レオン君たちに話すような事ではないのだけど・・・まあ、仕方ないわね・・・あのジールという男が私と許婚の関係にあることは真実よ」

三人は絶句。

「でも・・・それはアリシアさんが自分で望んだことじゃないんじゃない・・・」
アリスが控えめに告げる。

「そう・・・あいつとは私達の親が勝手に決めたこと・・・あいつは私の事を気に入っているのか知らないけど・・・いつも迫ってくるのよ・・・でもね、あいつの家柄だけは本物、だからこそ・・・私は本当は逆らえない・・・」

アリシアはそう呟いたが。

私はあきらめないけどね・・・と付け加えた。

そして、約束の日がやってきた。

ガランと誰もいない2・Bの教室にいる・・・最もレオン達はいるわけだが・・・

「アリシア・・・どういうつもりだい？・・・こんな平民を神聖なる僕達貴族の話し合いに参加させるなんて・・・まあ・・・いいだろう、どうせ平民などいるのもいないのも同じだ」

ジールはレオン達をまるでゴミを見るかのような目で見る。

！！・・・こいつ・・・！！

レオンは危うく殴りかかりそうになった。

アリスが抑えなければ、やばかった。

「ジール・・・あなたにレオン君たちを非難する権利はない」

アリシアが殺気を込めた目で見る。

「ほう・・・そんな目で僕を見ていいと？・・・なめるなよ雌風情が・・・」

ジールはおもむろにアリシアに歩み寄ったと思つと、アリシアの頬を打った。

バチン！
乾いた音が響く。

.....

レオンとアリス、ルークが絶句。

アリシアは今までと同じくただジールを睨み続けていた。
しかし、その頬は真っ赤に腫れて、痛々しい。

レオンは自分のなかで何かが切れたのが分かった。

「お前！！」

レオンは立ち上がる。

しかし。

ジールはバチンと指を鳴らす。

「この下衆を捕らえろ」
ただそう告げた。

すると突然、周りの扉から、鎧を着た男達が現れ、レオンを床に押し倒す。

「レオン！！」

「レオン君！？」

ルークとアリスが叫ぶ。

「あなた.....！！」

アリシアがジールを睨む。

「ふん・・僕に逆らうからこうなるんだ・・これだから平民は・・
さあ、アリシア、僕と来るんだ、君に拒否権はない」
ジールは手を伸ばす。

「さあ！・・・僕は君を迎えてやるんだ、ありがたく思え！！」
ジールが叫ぶ。

アリシアはそんなジールを睨み・・・

「そう・・・分かったわ・・・あなたには失望したわ・・・残念だけど、私はあなたとの婚約を抹消する」

アリシアが漠然と告げる。

しかし。

「ク・・・クク・・・ハハハ！・・・言った筈だよ？・・・君に拒否権は無いと！！・・・おい、アリシアを捕らえろ」

ジールは叫ぶと、他の男達を呼ぶ。

「私に適うと思うの？」

アリシアが呟く。

「まさか、そんなわけ無いだろう・・・君は天才だ、ただの傭兵風情では適わないだろう・・・だが・・・来い、バイロ！・・・ウルクス！」
ジールが更に叫ぶ。

すると、扉を突き破り、二人の男が姿を現した。

一人は頑丈そうな体をした、肉つきの良い男、もう一人は、その男とは反対の痩せた体をした男だった。

「こいつらはナイトだ！・・・いくら君でも、簡単には倒せまい・・・それにこっちはこれがあるんだ！！」

ジールが叫んで取り出したのは、紫色の宝玉だった。

莫大な魔力を感じる。

レオンはこの時、あの玉に妙な感覚を得た・・・そう・・・この感じは・・・

・

「まさか・・・神器の・・・!?!?」
その場の全員が絶句。

「これは凄いなだよ・・・凄まじい力を僕に与えてくれるんだ・・・」
ジールが愛おしそうに玉を撫でる。

「あなた・・・そんなものを・・・」
アリシアが絶句。

そこで。
キイイイン・・・
転移魔法が発動。

「ルーク!?」
レオンが叫ぶ。

「へっ!・・・校舎で戦われるのも気が引けるんでな、移動するぜ!」
ルークが床に手をかざしたまま叫ぶと同時に、目の前が真っ白になった。

そして気がつくくと、学院のグラウンドに移動していた。

「ふん・・・転移か・・・小癪な・・・まあ、いいや・・・始めよう
アリシア、僕達の将来・・・いいや、幸せの為の戦いをさあ!」

――次回予告――

何故か始まった、アリシアとジールの婚約をかけた戦い。

レオン達はジールが呼んだ男達と対峙する。

一方でアリシアは第三の神玉そのものを所持したジールと戦うことに。

しかし、そこでアクシデントが起きる。

神玉にジールが取り込まれた、そして……

アリシアに新たな力が生まれ!?

次回、風翔の宝具使い、お楽しみに。

風翔の宝具使い

ルベリージア学院、中央グラウンド。

そこでは壮絶な戦いの戦場となるうとしていた……

「……ジール……あなた……」

アリシアがジールを呆然と見つめる、いいや性格にはジールの持つ宝玉を。

「クク……凄いだろっ？……これは代々我がルイラージ家に伝わる秘宝でね、歴代の当主は皆、この宝玉を使いルイラージ家を治めてきたんだ」

ジールが誇らしげに語る、その正体が何かも知らずに……

「おい！その神玉はお前が持っていて良い物じゃあない!!」
レオンが叫ぶ。

「?……君は誰に向かって口を聞いているのか、理解しているのかい？」

ジールが呟く。

「……本当よ、ジール……それはあなたが持っていて良い物じゃあないわ……それは神玉、ナイトでもないあなたが所持しているは、余りに危険よ」

アリシアが真剣に告げる。

「……神玉?……なんだそれは、意味不明なことを言っ僕を騙そうとしても無駄だよ?……それに今一番重要なのは君との婚約を賭けた戦いだけさ……これがなんであれ、君との戦いの道具に過ぎない……しかも元よりこれは我が家に伝わっていたもの……君達に渡

すいわれは無い」
ジールが漠然と告げる。

「ちっ・・・やっぱり分かってねえ・・・あの野郎・・・」
レオンが呻く。

「レオン君・・・どうする・・・？」
アリスがレオンに囁く。

「さあ！！始めよう！！・・・僕達の戦いをさあ！！・・・バイロ、ウルクス！！・・・あの雑魚を一掃しろ！！」
ジールが叫ぶ。

ズン

トン・・・

二人の男がレオン達の前に立ちふさがった。

「くそ・・・仕方ない、やるしかねえか！」

レオンが叫ぶと同時に、アリスとルークも戦闘体制に入る。

「ふふ・・・あいつらは馬鹿か？・・・バイロとウルクスは我が家に使える最強筆頭のナイト・・・あんなガキ共風情では相手にならないの・・・」

ジールは腹を抱えて笑う。

「さあ・・・それはどうかしらね・・・レオン君たちを甘く見ると、すぐにやられるわよ？」

アリスが微笑む。

「ほう・・・君にそこまで言わせるとは・・・ま、こっちはこっちで始めようか・・・」

「我が元に顕現せよ、風を束ねし大いなる双刃よ、大地を駆け、天を掴め・・・疾風迅雷の双剣、ウインディーネ！！」
アリシアが叫ぶと同時に宝具が出現。

「はっ！」
呼気と共に地面を思い切り蹴る。

ガン！

それだけの行動のはずが、地面にひびがはいた。

アリシアの姿が掻き消える。
ヒュン・・・

「！！！」

ジールが驚く。

アリシアは既にジールの背後だった。

「ふっ！」

双剣を振りかぶり、叩きつける。

ただの一般人ならそれで終わりだが・・・

ガイン・・・

「！？」

アリシアが絶句。

ジールの後頭部を強打し、意識を飛ばそうとしていたアリシアの宝具が、ジールの周りに展開した紫色の障壁が邪魔をしたのだ。

「これは・・・！？？」

「ふふ・・・そう、これがこの宝玉の力さ・・・！・・・それだけじゃないよ？」

ジールがアリシアに神玉を向ける。

「コイツを吹き飛ばせ」

ジールが命じると、神玉がさらに紫色に輝き衝撃波が放たれた。

ギョーン・・・！

「う・・・ぐ・・・」

アリシアの腹部に直撃、壁まで吹き飛ばされた。

ガアン！

壁に激突、アリシアの口から血が漏れる。

「けほっ・・・成る程、確かに強力ね・・・でも・・・これならどう！」
アリシアがウインディーネに魔力を溜める。

剣筋に風を纏い、突進。

「はあ！」

跳躍し思い切り振り下ろす。

「・・・！！・・・こ・・・この攻撃を止める！」

ジールが慌てて、神玉をかざす。

ガイン！！

莫大な魔力がぶつかり合い衝撃を撒き散らす。

その時、神玉がさらに輝き、衝撃波となってアリシアに向かう。

衝撃波がアリシアに直撃・・・したと思えば、アリシアの姿が消えた。

「何！？・・・まさか・・・風の分身体か・・・！」

ジールが動揺。

「その通りよ、いくらあなたが強力な力を手に入れようと、あなた自身が成長しなければ・・・宝の持ち腐れよ!」
アリシアの声が上から響く。

「!」

ジールが上を向く。

アリシアは上空100メートル程の位置にいた、背中から透明な風の翼が生えている・・・恐らくは魔法の力を使い上空に逃げているだろう。

「知ってる・・・?・・・風属性の宝具であるウィンディーネは、この辺の大气を武器として使用することができる・・・」

アリシアの体から、青緑色の魔力が全方位に放たれた。

あまりの膨大な魔力にジールは後ずさる。

アリシアの魔力に応え、ウィンディーネも輝き始める。
キュイイイイイイイン・・・

やがて甲高い音が辺りに響き始めた、そして・・・

「アリシアの宝具に・・・辺りの空気が集まっているのか?・・・なんて力だ・・・!」
ジールが呆然とする。

アリシアを中心に、大きな風の渦ができる。

「これでもくらいなさい!・・・ウィンディーネ・・・風神降波ハサラスヴァティー!」

アリシアが思い切り振り下ろす。

ゴォア！！

莫大な風の塊がジールに降り注ぐ。

「う・・・うわあああ！・・・これを防げ・・・あれ・・・なんで、何故だ！・・・何故力が・・・うああああ！！」

ジールが絶叫。

ズウウウウウン・・・！！

地面に衝突し、莫大な地鳴りと共に、ジールの立っていた場所に衝撃の嵐が巻き起こった。

一方そのころレオン達は・・・

「おおおおお！！」

男の内の痩せている方・・・ウルクスが薙刀の形の宝具を構え、突っ込んできた。

スピードが速い。

ヒュン・・・！！

ウルクスの突きを難なくかわすルーク。

その後も、怒涛の突きの全てをルークは軽くかわした。

「何故・・・だ・・・何故かすりもしない・・・」

ウルクスが絶句。

「ふうん・・・確かに早いな・・・でも、そんな程度じゃ、俺の早さは・・・適わない」

ルークの姿が一瞬ぶれる。

「!!」
きずくとルークはウルクスの後ろに回りこんでいた。
その体に雷を纏って。

「へ・・・残念でした」
ルークは軽い口調で、しかし・・・重い一撃を相手のみぞおちに叩き込んだ。

ズン・・・
ウルクスは強力な電撃を体に流され、ガクガクと痙攣し意識を失った。

レオン達は・・・
バイロは斧の形の宝具を思い切り振りあげる。

ズガン!!
地面に叩き付けた。
レオンとアリスはこれをおかす。

「ぐおおお!!」
バイロは斧を縦横無尽に振り回す。

「うお・・・凄えな・・・あたればやばいけど・・・当たらなければ・・・
アリス!!」
レオンはアリスの方に声をかける。
アリスが頷く。

アリスは手に魔力を集中。
キィィィン・・・

白い剣が顕現。

「??？」

バイロは呆然とその剣を見つめる、まるで・・神聖なものを崇める様に。

恐らく、こう思っているのだろう、なんだその力は・・と。

そしてレオンはこれを守っていた、相手が光の属性を見て、驚いている間が一番のチャンスだと。

「おおおおお!!」

レオンは空中から漆黒の翼の力を使い、急降下。

「!？」

バイロが思わず、宝具を盾代わりにした。

バキン!!

なんと、レオンの漆黒の剣が、相手の宝具を切り裂き、折ったのだ。

「!??・・俺の・・宝具・・が・・」

これにはバイロも絶句、そして・・アリスが後ろから光の剣で後頭部を強打、バイロはその場に崩れ落ちた。

レオンたちは、アリシアのもとへ集まる。

「アリシアさん・・あの人は・・」

レオンは未だ煙に包まれた穴を見る。

一体どのような力を使えばここまでの跡ができるのかは、聞かないことにした。

「ええ・・・一応はやったわ・・・無論手加減はしたけどね・・・でも、何かが引つかかる・・・何なの・・・この妙な違和感は・・・」
アリシアがそう告げたその時。

ズン！！

辺りに邪悪で強大な魔力が満ちる。

「な・・・」

アリシアが絶句。

ジールが立っていた場所から、紫色の光が空に放たれた。
余りの光力に目を開けていられない。

凄まじい爆風がレオン達を吹き飛ばす。

「うあつ！」

その場の全員が吹き飛ばされた。

そして風がおさまり・・・あの穴から出てきたのは・・・
紫色の魔力を纏った、ジールだった。

「ああ・・・やっと・・・やっと目覚めた・・・この者の体を使い・・・
こうして出てくることできた・・・」

ジールでは無い何か語る。

ジールの目が紫色に輝く。

「あなた・・・誰・・・？」

アリシアが呆然と告げる。

「・・・ああ、名乗らねばならぬな・・・俺様は・・・『鋼魔の神器・イルマタル』・・・俺様を覚醒させてくれたのは・・・お前達か？」

「・・・神器・・・まさか、取り込まれたのかよ・・・神玉に・・・？」
レオンが呆然と告げる。

今のイルマタルに乗っ取られたジールの姿は魔王を思わせるほど、
邪悪な気に満ちている。

オレンジの髪は漆黒に染まり、瞳は濃紫色に変色し・・・体の到るところに紫の文様がはしっている。

「さて・・・どうしたものか・・・こうして目覚めたはいいが、どうにも体が重い・・・この男の体は、いささか使いづらい・・・まあ、それでもこれくらいはできるだろうがな」
イルマタルはニヤリと笑うと、片手を前に突き出した。

「・・・あいつ・・・何をやる気だ・・・？」
レオンは呆然とした。

ジ・・・ジジ・・・
やがてイルマタルの突き出した手に魔力が集中。

！！
バン！

そして溜められた魔力が衝撃となってレオン達に向かってくる。

「く・・・」
レオンが一步前に出て、漆黒の剣で受けとめた。

ガン！

しかし・・・

「うあっ！」

レオンが押し負けた。

後ろまで押されるが、何とか踏みとどまるレオン。

「なんて力だ・・・!!！」

レオンは驚愕した。

「・・・俺様の力は、魔力を収束し・・・超高濃度に圧縮した魔力を飛ばすのみ・・・だからこそ、俺様の力の本質はそこにある」

イルマタルは又もや魔力を集中・・・それを放つ。

先ほどとは比べ物にならない強大な力だ。

アリシア達はその攻撃をかわす。

「かわしたか・・・だがな・・・魔力を両手に溜めて攻撃するのも・・・すこし視点を変えればこんな風にも使えるのだよ」

イルマタルが両手に紫色の魔力を溜め、跳躍。

!!

そこでルークが動く。

「魔力を拳に溜めるなら、俺にもできるぜ！」

ルークの両手にバチバチと爆ぜた音をたて、雷が収束。

ルークもまた跳躍した。

イルマタルとルークが空中で激突。

ガアン!!

衝撃波が地上を撫でる。

「ぐ・・・なんて魔力してんだ・・・」
ルークが苦しそうに告げる。

「ほう・・・俺様についてくるとは・・・なかなかの実力を有すようだ・
・だが遊びはここまでだな」
イルマタルはそう呟く。

ギユイイイイイン・・・
イルマタルの体から莫大な魔力が放たれ、ルークが吹き飛ばす。

「ぐあつ!!」
地面に叩きつけられた。

「ルーク!!」
レオンが駆け寄る。

「さて・・・ようやく俺様も本気を出せる・・・はあ!!」
イルマタルの両手にさらに魔力が集中、そしてイルマタルは空中で
空気をへ蹴った。

ダガン!
空気を穿つ。

!?

「風魔法・中位詠唱・風陣防壁へウィンド・アルス!!」
アリシアが魔法を唱えた瞬間、風の障壁が展開、相手の攻撃を受け
止める・・・ように見えた・・・しかし、アリシアの魔法は一撃で破
られた。

バキン・・・

「そんな・・・!?」
アリシアが絶句。

「俺様をそんな程度の魔法で止める気か?・・・甘いぞ・・・」
イルマタルが静かに呟く。
そこで。

「うおおおおお!!」
漆黒の魔力を纏ったレオンが突撃、衝撃波を撒き散らす。

ガンン!!

「貴様・・・その力・・・成る程・・・もう目覚めていたのだな?」
イルマタルが呟く。

「何でもいい!!・・・お前は危険だ!・・・ここで倒す・・・!!」
レオンの裂帛の気合いに呼応し、漆黒の翼が顕現。

衝撃波はますます強くなる。

「おおおおおお!!」
レオンは莫大な魔力を集中させた。

「やるな・・・闇の力を持つ者よ・・・」
レオンは今、イルマタルと対等にやりあっていた。

ガン、ガン、ガン、ガン!!
お互いに譲らず、魔力をぶつけ合う。

と、そこでアリシアが魔力を集中させているのに、二人はきずいた。
青緑の魔力がアリシアを包む。

そして、その光がウィンディーネに収束、ウィンディーネが莫大かつ、鋭い魔力に包まれる。

「はっ！！」

アリシアが思い切り踏み込んできた。

「……………」

イルマタルが魔力を更に収束、レオンを吹き飛ばした。そしてアリシアを向かい討った。

ガン！

二人はお互いの魔力を打ち合わせる。

「貴様は……この男によほど気に入られているのか？……俺様の存在が訴えている……お前を我が物にせよ……と」
イルマタルが語る。

「へえ……あなた、ジールの思いが分かるの……」
アリシアが睨む。

「俺様は今、この男の魂をも取り込んでいる……この者の考えや願望は、手に取るように分かる……心にある闇もな」

「……成る程……でも私はジールとの婚約は断った、もうジールが私に付きまとうてくるのは……ただ、諦めが悪いだけ……勝手な大人たちの傲慢で……私達の人生が狂わされるのは、もうこりこり」
アリシアの表情に影が差す。

「成る程……それがお前の心の闇か……」

イルマタルは納得したように言う。

「……………」

アリシアの手に魔力が更に集中。

しかし、アリシアは一瞬相手から注意を逸らしてしまった。

「だから甘いのだ・お前達、人間は」

イルマタルがそう呟く。

「アリシアさん!!」

レオンが地上から叫ぶ。

「!?!」

アリシアはレオンの叫びで我にかえる。

だがもう遅い。

イルマタルの魔力がアリシアに向けられていた。

「しまっ!?!」

「残念だ」

ズガアアアアン……………

「……………え……………」

アリシアは自分に何が起こったのかを確認した。

確認できたのは、自分が攻撃を受ける直前、誰かが自分の前に飛び出てきたことだけだった。

「ぐ……………は……………」

レオンが自分の前にいる。

「レオン・・・君・・・?」
アリシアが呆然と呟く。

「何・・・やってんですか・・・アリシアさん・・・は・・・何のため
に・・・戦っているんですか・・・?・・・アリシアさんの・・・過去に・・・
何があつたかは・・・俺には分かりません・・・けど・・・心の・・・闇・・・
なんか・・・全てを任せても・・・なにも変わらない・・・」

レオンは苦しそうに呟く。

「レ・・・レオン君!?!」

アリシアがレオンを抱き寄せる。

「・・・かばつたか・・・つまらぬな・・・闇の少年」
イルマタルがそう告げたとき。

ギユウウウウウウン!!

背後で純白の光が立ち上る。

「何?」

イルマタルが振り返る。

そこにいたのは、天使。

純白の翼を長く伸ばし、圧倒的な魔力を放つ少女、しかも放たれる
殺気は途方も無いものだ。

「レオン君を傷つけるものは・・・誰であろうと、許さない」
アリスが無表情に告げる。

少女の瞳が紅く輝く。

「何だ・・・今までの少女とは・・・何かが・・・」
イルマタルが興味深そうに告げる。

「アリスちゃん・・・？」

意識を取り戻したルークも今のアリスには驚いていた。
それに、アリスの瞳は水色ではなかったか？
なぜあんな禍々しい赤色に染まっている？

ルークには理解できなかった。

アリスはイルマタルに突っ込む。

ズウン・・・・・・

「ぐ・・・なんという力・・・」

あのイルマタルが押されている。

一方アリシアは・・・

レオンの傷を治療していた。

「アリシアさん・・・俺なんかの治療はいいです・・・はやく・・・

あいつを・・・」

レオンは呟く。

「だめよ！！・・・私のせいで・・・レオン君は傷ついた・・・なら・・・
私は・・・」

レオンはアリシアの表情を見て、驚いた。

あのアリシアが泣いていたのだ。
治療しながら涙を流している。

レオンは理解した。

アリシアは確かに強い・・・だが、心はまだ普通の少女なのだ、と。
優秀すぎるが故に、重い責任を背負わされ、それでも進み続けた結果がこれなのだ。

「・・・・・・・・え？」

アリシアが呆けた声を出す。

レオンは無意識に、アリシアの頬に手を添えていた。
そして。

「もう・・・いいです・・・アリシアさんは・・・何も考えなくてもいいんです・・・アリシアさんはもう・・・十分にやりましたよ・・・だから・・・もう泣かないでください・・・」
レオンは微笑む。

「・・・・・・・・」

アリシアは目を見開くばかりで何も言えない様だ。

そんなアリシアをレオンは慰めた。

「アリシアさん・・・自分を解き放つて下さい・・・もうアリシアさんは・・・家柄の問題とか・・・そんなどうでもいいことなんか・・・気にしないでいいんです・・・」

「レオン君・・・・・・・・？」

アリシアは呆然としている。

「ふあなた」はもう・・・自由です・・・」

レオンが告げたその瞬間。

キイイイイイイン……

二人の間に風が渦巻き始めた。

まるでアリシアを祝福するように……

「これは……」

アリシアが呆然と呟く。

「アリシアさん……俺は……アリシアさんが……こうやってくすぶっているのは、見たくないです……アリシアさんは……いつも通りで良いんです……風のように……綺麗なアリシアさんで……」
レオンがアリシアに告げた。

するとアリシアの涙が止まった。

そして……アリシアは少しだけ微笑んだ。

「……ありがとう……レオン君……あなたのおかげで……私は……本当の戦う理由を見つけた……」

アリシアに呼応するように、周りの風が色を変える、透明な普通の風から、神聖な青緑の風に。

「……！」

レオンは驚いた、その風が触れたところの傷が塞がっていく。

「アリシア……さん……まさか……」

レオンは呆然となった。

アリシアの放つ魔力が今までとは違っていたからだ、強大とか……そんなものではなく……魔力の質そのものが変化したのだ……そ

してこの感覚は・・・アリウスさんや、ゼクシア・ファイラーベが放っていた魔力、つまり・・・伝説の宝具使いたちの魔力に酷似していた。

「発動・・・ウインディーネ・・・」
アリシアが呟く。

莫大で神聖な魔力があたりに放たれた。

場所はかわり、ミルフエリーナ王室。

「ん？」

アリウスが顔を上げた。

「どうかしたのか？・・・兄上？」
ヴィクトリアが問う。

「いや・・・今、何か・・・」

場所は再び戻る。

アリスと戦っていたイルマタルも、この異常な魔力にきずいた。
アリスもまた動きを止めた。

「これは・・・」

「・・・アリシアさん・・・？」
アリスの紅かった瞳が元の色に戻った。
何故だろう・・・この風に当てられていると・・・気分が落ち着く。

「ほう・・・どうやら・・・ハ覚醒ハしたようだな・・・伝説の宝具の

使い手が・・・」

キイイイイン・・・
その風はアリシアたちを覆う。

「この力は・・・？・・・でも・・・この力なら・・・」
アリシアは再びイルマタルを睨む。

「ふ・・・来い・・・風に選ばれた少女よ・・・」
イルマタルが告げる。

アリシアは足に力を加える。

ヒュツ・・・

アリシアの姿が消えた、完全な消失にレオンが驚く。

「!？」

イルマタルも絶句。

アリシアはイルマタルの後ろに出現。

剣を叩き付ける。

イルマタルも魔力を溜め、向かい討った。

ガン!

拮抗するかと思われた討ちあいはアリシアの攻撃がイルマタルをあつさり吹き飛ばした。

「ぐは・・・」

「私が戦うのは・・・皆を守る為・・・私を支えてくれる皆を・・・」

だから……」

アリシアが魔力を双剣に集中。

魔力が極限まで研ぎ澄まされていく。

「成る程……ならば……こちらも全力だ……超神星魔法・魔弾ガージ・ヴァーデン」

イルマタルが両手に莫大な魔力の全てを集中させ、一つの強大な銃機を顕現させた。

二人は空中に跳躍。

「おおおおおお！」

イルマタルは全てを紫色に染め上げるほどの魔力弾を放った。

アリシアはただ、突っ込むだけ……しかし……

キン………

イルマタルが放った魔力弾を切り裂き、突き進んだ、そして。

「はあああ!!」

思い切りイルマタルに向かって、剣を振り下ろした。

「……成る程……これが……」

イルマタルは何かを呟くと、消えていった。

-----次回予告-----

見事、第三の神器を打ち倒したアリシア、そしてアリシアが使ったあの力とは!?

さらにアリシアがレオンだけに語った過去とは？

ジールとの婚約は？

そして学院にルイラージ家とエーテラーゼ家の者達が現れて！？

次回、風の少女が選んだ未来、お楽しみに。

風の少女が選んだ未来

私は何の為に生きてきたのだろうか・・私は何故、武器を・・力を手にとるのだろうか・・

家柄なんてくだらない物に縛られて・・私は何を見たのだろうか？

結局私にできるのは、大人達が曳いたレールの上を・・ただ進むだけなのだろうか・・

私が望むのは・・・・・何なのだろう・・

・・・・・

アリシアと許婚の関係にあるジールが神玉に乗っ取られ、神器と化した。

しかし、アリシアとの激戦の末、何とか事態を収拾したのだった。

ルベリージャ学院の中央グラウンドは荒れに荒れていて、とてもではないが立ち入ることさえ憚れるほどの有様だった、現在は土系統の使い手によって修復が成されている。

今回の戦いに参加したレオン達は、それぞれ怪我を負っていたが・・特に酷かったのがレオンの傷だった、早急に治癒魔法が架けられたために、命に別状はなかった。

「レオン君、大丈夫！？」

アリスやヴィクトリア、ルークが地面に倒れているレオンの元に駆け寄った。

「馬鹿者！・・・あんな無茶をして、もしもの事があつたらどうするつもりだ！？」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「いや〜しかし・・・お前つて無茶ばかりするよな・・・こうしてお前はフラグを成立させていくんだろうな・・・」
一人だけ意味不明なことを呟くルーク。

「はは・・・でも、これで良かったと俺は思うよ・・・こうしなきゃアリシアさんが危なかったから・・・」
レオンは痛みで動かない体を無理に動かし、立ち上がるうとした。

しかしそこで肩に手を添えられる。

「だめよ、レオン君の傷はまだ完治してないの」

レオンが振り向くと、そこにはレオンの肩を抑えるアリシアがいた。

「アリシアさん・・・」

アリシアはレオンの肩を優しく地面に押し、もう一度寝かせる。

アリシアの瞳が潤んでいるのは気のせいだろうか？

「アリシアさん・・・傷はもういいんですか？」

アリスが心配そうに告げる。

「ええ・・・大丈夫よ・・・皆・・・本当にありがとう・・・」

アリシアが微笑む。

その後、アリス達はそれぞれの治療を終え、体を休めている。

アリスは自分の部屋に戻り、体を休め、ヴィクトリアは学院の修復作業を手伝っている、ルークもグラウンドの修復に誠を出している。

そのころレオンは学院の屋上にいた。
学院の屋上は人が滅多にくることが無いため、一人ごちるには最適な場所だったりする。

「……アリシアさん……どうするんだろ……大貴族のあいつとあんな問題を起こして、何も無ければいいけど……」
屋上の柵にもたれレオンが小さく呟く。

「大丈夫よ……レオン君のお陰でね」

！！

レオンは後ろを振り返る、そこに居たのは、いつもの学院服を着たアリシアの姿だった。

「アリシアさん……どうしてここが……？」
レオンは驚く。

「だって、レオン君のお見舞いに保健室に行ったのに、レオン君の姿が無かったもの……それでレオン君が行きそうな場所をこうして回っていたわけ」

アリシアが肩をすくめる。

アリシアがゆっくりとレオンの隣に立つ。

「ここね……私も何かあった時は来るの……」
アリシアが呟く。

「え……アリシアさんですか？」
レオンは正直驚いた、アリシアの様な完璧超人がこんなところで気持ち落ち着かせることがあったことに。

するとアリシアはレオンの心を見透かすように……
「レオン君……私だって完璧ではないのよ？……学院の成績が全て

ではないわ・・・私はこう見えても悩みが多いの・・・」
アリシアが苦笑。

レオンは、アリシアでもこんな顔をするのかと、驚いていた。
いつもは表情を引き締め、頼りがいがあったアリシアの表情と、今のアリシアの表情が正反対だったから・・・もしかすると、今の・・・不安で仕方が無い、という表情こそが、アリシアの真の姿ではないのだろうか・・・

「レオン君・・・あなたはもしかするときずいているかも知れないけれど・・・私ね、昔は落ちこぼれだったのよ?」
アリシアが衝撃の真実を告げる。

「え・・・アリシアさんですか!?!」
レオンが絶句した。

「ええ・・・私は生まれたときから魔力が弱くて、家の使用人たちや家族からも馬鹿にされていたの・・・だから私は努力したわ・・・誰にもそんなことを言わせない為に・・・あらゆる人より優れる為に、私を馬鹿にした全ての人を見返す為に・・・」

アリシアは苦しい過去を思い出し告げる、事実その行為はとても辛
いはずだ、今の自分を否定する言葉なのだから。

「本当なんですか?・・・アリシアさんが・・・その・・・落ちこぼれだ
つたなんて・・・」
レオンは驚きを隠せない。

「私は努力を怠らなかつた・・・それが実つたらしくてね、私は学院
に入る前に宝具を発現させることに成功したわ」

アリシアはただ告げた。

しかし、アリシアが言ったことは凄まじい出来事だった、学院では宝具を発現できた人間はナイトと学院内では呼ばれるようになる、宝具を使えない内は、ナイトの候補生のような状態の為、一年生で宝具を発現できた優秀な人間は学院に名を刻まれる。

宝具を一年の内に発現するというのはそれだけの価値があるのだ、事実レオンが知る限り、一年で発現が可能なのは、ルークとヴィクトリアだけだ。

それをアリシアは学院に入学する前・学院の指導・つまり魔力の操作やコツ・などの必要必須事項をなにも教わらぬまま、宝具を発現させたことになる。

そんな存在は、アリウス王以外ではないとされていた・しかし・

「アリシアさんが・そこまで凄い人だったなんて・・・」
レオンは驚くばかりだった。

「・・・そうかもしれないけど、私はきずいたの・・・私は一体何のために力を付けたのだろう・・・ってね、結局私は・・・大人達が曳いたレールの上を走っていただけ・・・どれだけ優秀でも強くても・・・その力に意味は無いの、でも、さっきの戦いの中でレオン君は、私はずっと心の中に抱えていた闇を取り除いてくれた・・・」
アリシアがレオンをまっすぐに見つめてくる。

「・・・!!」

レオンは心臓が一気に跳ね上がるのを感じた。

「レオン君言ってくれたよね・・・私は私のままでいい・・・って、あ

りがとう・・・大切なことを私にきずかせてくれて・・・本当に・・・
ありがとう・・・」

そう言ったアリシアの瞳から涙が一筋流れた、そしてアリシアの顔
が急に近づいた。

え・・・・・・？

レオンは自分に何が起きたのか、理解するのに苦しんだ。

ふと、アリシアの顔が近づいたと思った矢先、レオンの頬に柔らか
い感触をした何かが触れた。

甘い果実のような香りが鼻先をかすめる。

「アリ・・・シア・・・さん・・・？」

レオンは自分の頬に何が触れたのかを理解した、顔が真っ赤に染ま
る。

アリシアは頬を軽く染めながら、レオンの顔から、自分の顔を離す。
「・・・不思議な気分・・・あなたには・・・自分の本当の姿をさら
してしまつたのに・・・心がとても暖かいわ・・・ありがとうレオ
ン君・・・本当に・・・ありがとう」
アリシアは微笑んだ。

！！

レオンはアリシアの眩しいまでの笑顔に見とれてしまう。
アリシアの髪が風になびく。

と、その時。

ガタン！！・・・と屋上の扉が開いた、そこから出てきたのは・・・
「レオン！！・・・お前ええええええ！！！！」

発狂するルーク。

「レ、レレレ……レオン!!……貴様という奴は……なんという
破廉恥な事を……!!」
顔を真っ赤にし、叫ぶヴィクトリア。

「レオン君……何を……してたの……?」
アリスが無表情のまま呟く。

「え……何……何がどうなって……」
レオンがオロオロとする。

それを見たアリシアは……
「ぷ……ぷ……レオン君……本当に鈍いのね……これじゃあこれ
から大変ね」
アリシアが笑う。

「笑い事ではないですよおおおお!!」
レオンが叫ぶと同時に、白い剣を生み出したアリス、雷を拳に纏つた
ルーク、水の槍を顕現させたヴィクトリア……3人の攻撃が、
病み上がりの体にクリーンヒットした。

それから数日後……ルベリージャ学院に、ルイラージ家の当主とエ
ーテラーゼ家の当主の二人が学院を訪問し、今回のことについて謝
罪した。

「本当にすまなかった……内の馬鹿息子が大変に愚かなことを……
……」
ルイラージ家当主、グレイス・ルイラージが叫び、ジールの頭を掴
み下げさせる。

それを遮るのは。

「いえいえ・・・私達こそ、すみませんでした」
なんとエーテラーゼ家の元当主は女性だった。
アリシアと同じ、赤い髪、綺麗な人だった。

父は昔に他界したらしく、今は、その母であるミエル・エーテラーゼが当主らしい。そんな人が笑顔で告げる。

それから二つの家系で話し合い、色々と決まったようだ。

ジールが持ち出したあの宝玉は、学院に預けるといふこと、今回の事件は不問とすること・・・そして・・・

「アリシア、あなたはどうするの？・・・ジールさんと契約通りに、
婚約を誓う？」
ミエルが問う。

「・・・私は今の学院が好きです・・・私を支えてくれる人が・・・沢山いるから・・・それに・・・」
アリシアが真剣に語る。

グレイスも、ミエルも、黙ってアリシアの言葉を聞いている。

「私は・・・この学院で・・・少しだけ気になる人々を見つけることができたから」
アリシアが微笑む。

「なので・・・婚約は解消させて頂きます」
アリシアが振り切るように告げる。

フ・・・とグレイスが微笑む。

「フフ・ふられたよう様だな・我が息子よ・まあ、良い経験だ
！」
そう笑いながら叫ぶグレイス。

「そうね・あなたも良い経験をしたでしょうし・ねえ、アリシ
ア・あなた、変わったわね？・一体、何があなたをそこまで変
えたの？・是非に知りたいのだけど」
ミエルが微笑む。

「それは・内緒です」
アリシアが片目を瞑り微笑む。

「そう・まあ、なんとなくは、分かるけどね・」
ミエルがレオンを見つめ、ウインクしてきた。

そうして、グレイスとミエルは去っていった。
しかし、さっきのウインクはどういう意味だったんだろうか・
レオンが少し考えた。

私は・何かを見つけたのだろうか・？

いいや、私はもうそんなことは気にしなくていいのだ・何故な
ら私には・

仲間がいるのだから・進もう・ウジウジしないで顔を上
げよう・もう私は一人じゃないのだから・

それから一週間が経ったある日。

レオンはアリウスから、すぐに王国へと来て欲しいと、手紙が来たので、ミルフェリーナの王城へ向かった。

そして、王の間。

「いや・・それにしても大変だったようだね、レオン君」
アリウスが玉座に座り苦笑。

「ええ・・・まあ・・」

レオンも苦笑。

レオンはアリウスに今回の事の発端を話した。

「やはり君は・・相当の鈍さだね・・ヴィクトリアが苦勞をするわけだ・・」

などと呟いていたが、何だったのだろうか。

「それより・・さっき言ったことは本当のようだね？」

アリウスが真剣な表情を作った。

はい。

レオンも頷く。

二人が話し合っていたのは、アリシアの魔力の変化についてだった。

「恐らくは覚醒したのだらう・・・『風翔の宝具使い』へとね・・・」

アリウスが驚きの真実を告げた。

！！

「あの伝説の宝具使いの一人ですか．．．!?」
レオンが絶句。

「でも、アリシアさんは．．．」

「ああ．．．普通のナイト．．．の筈だ．．．だが、何故か．．．伝説の存在として覚醒してしまった．．．実は前々から、アリシアの風の魔力が強力過ぎることに疑問を抱いていてね．．．もしま、とは思っていたが．．．本当に覚醒するとは」
アリウスが考え込む。

「でも．．．末裔でもない、アリシアさんがどうして．．．」
レオンが言うのも無理は無い、アリウスやゼクシアのように末裔ならともかく、関係の無いアリシアが覚醒するのは、妙だ。

「ああ．．．それについて、君に見せたいものがあってね」
アリウスはそう促すと、城の敷地内の宝物庫の前までレオンを連れてきた、中に入り、進むと．．．
透明な結界に包まれた、一枚の古ぼけた紙が置いてあった。

「なんですか．．．この紙は．．．」
レオンが質問をする。

「これは、エクストラ・クロニクルの．．．原典だ．．．」
アリウスは驚きの真実を告げた。

「原典．．．って、あの!？」
レオンが叫ぶ。

「ああ家の宝物庫の中に、偶然保管されていた．．．無論、原典の1ページだけだがね」

アリウスが呟く。

「原典つて確か・・・行方不明なんですよね？」
レオンが呟く。

「その通り・・・だが恐らくはこういう風にバラバラに飛び散った確率が高いね、世界中に・・・」
つまり、ここにあるのは、原典の一欠片ってことか・・・

「で・・・今問題なのはそこじゃあない、現在、この世界ではコピーや複写本が出回っているが、原典の十分の一も記されていないことから、重要なものではないとされてきた・・・しかし、原典は違う・・・この1ページだけで、途方も無い量の古代文字が記されていたからね」

マジかよ・・・本物が俺達の目の前に・・・

「そこで、極秘裏にミルフエリーナに所属している考古学を専門とする者達に解読させたところ・・・ほんの少しだけ、解読することに成功した」

アリウスが微笑む。

マジかよ!？

「それによると・・・調度、伝説の宝具使いの事が記されていてね・・・こう記してあったそうだ・・・《伝説の紋章を持つ宝具使いよ・・・汝等は選ばれし者なり・・・かつて起きた世界の危機を、二度と起こさせぬために・・・その紋章を持つ者は心せよ、紋章は伝説の証であり、たとえその力と関係が無い者だろうと・・・選ばれしものはその責務を負うであろう・・・さらに、その力は、最も相応しき者のみが振るうことを許されん》・・・とね」

アリウスが思い出すように告げる。

「伝説の紋章？」

レオンが首を傾げる。

「ああ、恐らくこれだろう」

アリウスが急に上半身の服を脱ぐ。

すると………

！！

アリウスの背中に、あたかもフェニックスの紅い翼を彷彿とさせる、翼の形をした紅い紋章が背中に描かれていた。

これが……紋章……

「因みに……今の一文は、その紙一枚に記されている前文の、ほんの少しに過ぎない……だからこそ、君には伝えておきたかった」
アリウスは服を着ると、そう告げた。

レオンはその話を聞いた後、城を後にした。

-----次回予告-----

いつもと変わらない朝……の筈が……学院は朝からお祭り騒ぎ
！？

なんと、ルベリージア学院の副会長が帰ってきたのだ！！

「やあ皆！……元気だった？」

少女は叫ぶ。

次回、生徒会副会長、お楽しみに。

生徒会副会長

ピピピ・・・ピピピ・・・

レオンの部屋に魔道式時計のアラームが響く。

「ん・・・う・・・はあああ」

レオンは大きく欠伸を一つ。

レオンはベッドの上から外を見る。

空はようやく明るくなってきたところだ、時間は朝5時だ。

「なんだか・・・体が重いな・・・」

何故だろうとレオンが考えていた。

ああ・・・そうか・・・アリシアさんの・・・

と、不意に・・・アリシアの唇の感覚を思い出し顔を真っ赤にするレオン。

「何を考えてるんだ俺は！」

レオンはすぐさま頭を振り、妙な想像を追い払う。

あの時は恐らく、アリシアは混乱していたのだろう、それ以外ありえないと、勝手に納得するレオンだった。

因みにレオンの体の傷は、ヴィクトリアの強力な治癒魔法により完治した。

治癒魔法は風と水との繋がりが強いいため、水系統においては学院でナンバーワンの才能を持つヴィクトリアの治癒魔法は他の人間より群を抜いていた。

「さて・・・着替えるか・・・」
レオンはそう呟くと、服を学院の征服に着替え、朝食を作り始めた。基本的にルベリージア学院の寮生活は自由奔放なもので、生活に必要な事柄は自分でこなさなければならぬ。

朝食をとり、顔を洗い全てを済ませる、そしてふと時計を見た。

「げ、もうこんな時間かよ・・・」

レオンが時計を見ると、時計の針は8時を指していた。

その時。

「レオン君・・・いる？」

玄関からアリスの声が聞こえた。

「ああ、今行く！」

レオンとアリスが学院と一緒に登校するようになって一ヶ月以上が経つ。

「レオン君、傷はもういいんだよね」

アリスが心配そうに告げる。

「ああ、ヴィクトリアのお陰でばっちりだぜ」
レオンが嬉しそうに告げる。

「・・・そうなんだ・・・」
アリスが少し怒ったように呟く。

??

「アリス?・・・どうかしたのか？」

レオンが尋ねる。

「何にも」

ぶいっつとあらぬ方向を向くアリス。
と、校舎の方向を偶然見たアリスが首を傾げ、立ち止まる。

レオンもそれに習い、校舎を見る。

「何だ？」

レオンも首を傾げる。

レオンとアリスが見ているのは、校舎の3階から下に垂れ幕のよう
なものが下がっており、そこに・

『お帰りなさい、サクラ・ファルバレン副会長！！』

と、書かれていた。

「サクラ・・・」

「ファルバレン・・・」

アリスとレオンが順に呟く。

誰？

レオンとアリスは同時に思った。

「なんだよ〜お前らサクラ副会長も知らねえのか？・・・まあ、無理
も無いけどな〜」

二人の後ろから急に声が響く。

二人が振り返ると、そこにはルークがいた。

「ルークは・・・サクラ・ファルバレンという人が誰か知っているの
か？」

レオンが尋ねる。

「ああ、このルベリージア学院の副会長だよ・・・っていうのはあそ
こに書いてあるから分かるよな？・・・まあ、とにかくあそこに書い

である名前はこの学院におけるナンバー2・・・つまり、アリシア会長に匹敵する実力者だったことだ」
ルークが語る。

アリシアさんに匹敵する！？

レオンは呆然となった。

「この学院における会長、副会長の位つてのは、単なるお飾りじゃあないんだよ、生徒会長はこの学院を治めるに足る人物がなり、副会長は、その生徒会長を補佐する役割・・・つまり、会長に匹敵するほどの実力者じゃねえとつとまらねえんだよ」
ルークが腕を組み告げる。

「アリシアさんに匹敵する人物・・・？・・・なんでこの学院にはそんな次元が違うようなナイトたちが在籍してるんだ・・・」
レオンはがっくり肩を落とす。

「レオン君、大丈夫・・・？」

アリスが顔を覗いてくる。

「ああ・・・」

それにしても・・・副会長か・・・どんな人なんだろう？

「因みに噂では、サクラ副会長はアリシア会長と戦って、相打ちだったらしいぜ」
ルークが耳打ちする。

マジかよ！？

あのアリシアさんと・・・相打ち！？

化け物かよ！？

「ねえ、ルーク君、そのサクラさんっていう人は何系統なの？」
アリスが尋ねる。

「ああ、確か・・・雷だったような気がするな」
ルークが思い出すように告げる。

「雷か・・・お前と同じ系統じゃねえか、ルーク」
レオンが呟く。

「バーカ、同じ系統でも核が違いすぎる・・・あの人は、自分の雷の
宝具・・・天剛雷剣へアマノハキリノツルギヤを使つて、ドラゴン
を切り裂いたつて云われもあるんだぜ・・・？」
ルークが小さな声で囁いた。

「は？」

ドラゴン？

ドラゴンはこの星鏡世界に存在する幻獣で、生息している個体数が
非常に少ないとされている古代の眷属だ。
その魔力は、人間のものとは次元が違つていて、人の身では勝利す
ることは不可能とされるほど強大な存在である。

「ま・・・マジかよ・・・」

なんだかその人とは会いたくない、と密かに思うレオンであった。

と、その時。

校門のところに一人の生徒が現れた。

！！

おおおおおお！！

歓声に包まれる学院。

「まさか・・帰ってきたのか!？」
ルークが叫ぶ。

礼の垂れ幕を振り、歓迎を表す生徒達。

すると、少女は一步前に踏み出し。

「やあ皆様!・・元気にしてたく?」

ピンク色の髪をした小柄な少女が手を振った。

はーい!!

学院の彼方此方から歓声が・・

「・・・・なんだよ・・これ・・」

レオンがげんなりと呟く。

「うん・・・そうだね・・」

アリスも呆然としている。

「おい!・・何してんだ!」

早くわき道に行くぞ、と、二人の手を引くルーク。

その時。

ガシヤアアアアン!!

窓ガラスが割れる音。

何!?

何だ?

いやああ!!

叫び声が響く。

よく見ると、近くでナイト同士が喧嘩をしていた。

なかなかの使い手らしく、魔力が凄まじい。
遂には……

「我が元に顕現せよ!!」

「我が元に顕現せよ!!」

二人して宝具を顕現させた。

片方が、アックスの形の宝具を発現。
もう片方が斧の形の宝具だ。

おおおおお!

お互いに突っ込む。

「まずい!!」

レオンが叫ぶ。

あれほどの魔力同士が衝突すれば、周りに被害を及ぼすだろう。

しかし……

「ダメ〜! ……そこ、喧嘩はいけませんよ?」

ピンクの少女・サクラ副会長が叫ぶ。

「言う事を聞かない人には……罰則です!」

サクラ副会長が前に重心を傾けた……と、レオンに見えたのはそこまでだった。

ダガン!!

サクラの踏み込みと同時に、地面にクレータができる。

ガン……

サクラの姿が消えたと思つたら、サクラは既に二人の間に入り、二つの宝具を両手を使い、素手で止めていた。

「な……」

レオンが絶句。

二人が息を呑む音が聞こえた気がした。

「もう、学院内での決闘は、やむを得ないとき意外は禁止だと、決まっているじゃないですか？……ダメですよ」

サクラが微笑む。

しかし、二人はさつきから動こうとしない、急な出来事に頭がついて行っていないのだろう。

50メートル以上あった距離を、この小柄な少女は、一瞬かつ、誰にも認識させぬように移動したのだ。

「……う……おおお!!」

しかし、片方の生徒が狂乱、宝具を振り上げる。

「もう……ダメだって……言ったじゃないですか……」

ため息をつくとき、目にも留まらぬ速さで生徒の懐に入り込むと……宝具を振り下ろすよりも早く。

「弾けて」

そう呟いただけだった。

バチン!!

それだけで生徒が何らかの衝撃をくらい吹き飛んだ。

ガアン！
壁に叩きつけられ、気絶する生徒。

・・・
辺りは静寂に包まれた。

レオンもアリスもルークも・・・啞然としてしまって、体が動かなか
った。

――次回予告――

突然現れ、事態を收拾して見せた、サクラ・ファルバレン副会長。

レオン達はサクラの実力の凄さに驚きまくりで、動けないでいた。
さらには、生徒会特別室にて、初めて会話をしたレオン達・・・

「始めまして、私は・・・サクラって言います」
サクラは微笑む。

そして、副会長の帰還と同時に、聖七騎士団の一人が動く・・・

次回、生徒会副会長　？、お楽しみに。

生徒会副会長 ？

「……マジ……かよ……」

レオンは呆然と呟いた。

レオン達が見たものは、サクラ・ファルバレンが、学院内で決闘していた二人のナイトを一瞬で鎮圧した姿だった。

「もう……ダメですよ、学院内で他の生徒を巻き込むような決闘をしては。アリシアに言いつけますよ？」

サクラが困ったように告げた。

は……はい！

すいませんでした！！

二人が頭を下げる。

と、ここで。

「どうかしましたか！？……なんか凄い音が……」
エルシー先生をはじめ、数人の教師がやってきた。

「おいおい……まずいぜ！こりゃあ
ルークが眩く。」

確かにまずい、このままでは、先ほど決闘をしていた生徒の事がばれてしまう。

そうなれば、退学は間違れない。

「あ……あなたは……サクラ副会長じゃないですか……！」
エルシー先生が驚き、足を止める。

その他の教師もサクラの姿を認めた途端、驚いていた。

「あ・・あの、ここで何かありませんでした？・・凄いい音と強い魔力を感じたのですが・・」
エルシー先生が尋ねる。

！！

レオンは息を呑んだ。

もしここで、サクラがさっきの事を報告すれば、さっきの二人は・

・
「いいえ、何にもなかったですよ？」

サクラは満面の笑顔で告げた。

え・・・？

レオン達や周りの生徒、さっきの二人・・全員がサクラの発言に驚き、動きを止めた。

「そうですか・・ならいいのですか・・本当に何もなかったのですか？」

今度は男性教師が質問を投げかけた、しかも何かを確かめるように・

明らかに疑っている。

と、さっきの二人が。

「あ・・あの・・」

何かを告げようとしたところで・・・

「あ、そうでした、そこのお二人さん」

サクラが指を指す。

「さっきくだらない会話から喧嘩になりそうだったので、すこし魔力を放ってしまいましたか・・大丈夫でした？」

サクラが首を傾げる。

・・・

「え・・・サクラ副会長が魔力を・・・？」
先ほどの男性教師が呟く。

「はい、遂げ」

サクラが微笑む。

そうでしたか、と告げ、教師達は去っていった。

・・・

「さて・・・さあ皆！・・・解散解散！・・・また怒られますよ」
サクラが声を張り上げる。

生徒達はその瞬間、教室へと入っていった。

「おい・・・あの人・・・全部・・・」

レオンが尋ねる。

「ああ・・・サクラ副会長はこういう人なんだ・・・」
ルークが呟く。

レオン達も自分達の教室へと入った。

「レオン君・・・なんだかあの人・・・不思議な人だったね」
アリスが授業中に質問を投げかけた。

「ああ・・・でも、いいのか・・・あんな適当で・・・」

レオンは思い出しながら呟く。

と、そこでレオンは、隣の席で真面目に授業を聞いて、ノートをと

っているヴィクトリアに聞いた。

「なあヴィクトリア」

レオンがヴィクトリアの肩に手を乗せ、声をかける。

「ひゃい！」

肩をビクンと震わせ、ヴィクトリアが変な声をあげた。

クラスの連中が二人に集中。

「え・・・いや・・・すいません、なんでもないです!!」

レオンが弁明。

「な・・・何をするのだ・・・!!」

ヴィクトリアが顔を真っ赤に染めながら、小声で呟く。

「え・・・何って・・・ちょっと聞きたい事が・・・」

「まったく・・・それだけの為に私の肩を・・・緊張するではないか・

」

ヴィクトリアが頬を染め大きく息を吐く。

「？」

レオンは首をかしげた。

はて、自分はヴィクトリアに何かをしただろうか・・・それに何故ここまで頬を染めているんだ？

レオンは首をひたすらに傾げていた。

因みにこのとき、アリスがレオンを、軽く拗ねた様な目で見ていたのは、レオンのあずかり知らぬことである。

「で・・・私に何を聞きたいのだ？」

ヴィクトリアが渋々といったように聞き返す。

「ああ、この学院の副会長を知ってるか？」
レオンが尋ねる。

「ああ・・サクラ・ファルバレン副会長のことか？・・確か噂では今朝帰ってきたらしいな」
ヴィクトリアが顎に人差し指をあて、呟く。

「そうそう、その人ってどんな人なんだ・・？」

「ふむ・・私も余り詳しくは知らぬのだが、幾つもの武勇伝を持っていたり・・教師すら手玉に取ったりと・・まあ、凄い人物には違いない」

ヴィクトリアが呟く・

「やつぱりか・・」

レオンが小さく呟くのを聞くと。

「なんだ・・？・・何かあったのか？」

ヴィクトリアに今朝あったことを話したレオン。

「成る程・・それでサクラ副会長の实力を知ったわけか・・宝具を素手で止めるなど・・まともな人間ならできぬ行為だ・・兄上ならできるかも知れんが・・それにしても、違反を犯した生徒を逃がすとは・・些か甘すぎるような気もするが・・」
ヴィクトリアが考え込む。

「もしかして、生徒に人気があるのは・・」

「大方、その甘さや性格だろう・・生徒会に籍を置いていながら、生徒達の味方をしてくれる副会長、それにあの人は・・信頼を寄せに足る人物とも聞く・・実力も随一・・人気ができるのも分かる気がする」

ヴィクトリアがここまで告げたのだ、間違いないだろう。

「それに・・・あの人は容姿が綺麗だからな！・・・美少女だし・・・私とは違うからな！！」

ヴィクトリアが少し怒ったように告げる。

「何言ってるんだよ、ヴィクトリアも十分綺麗じゃん」
レオンが平然と告げる。

「な！？・・・え・・・あの・・・」

ヴィクトリアがもじもじとしながら頬を染め、俯く。

・・・

と、二人はそこで、周りのクラスメイトから凄まじい殺気を受けているのに気づいた。

『イチヤイチャすんな、鬱陶しい！！』
全員から告げられた。

「むっ・・・レオン君・・・ヴィクトリアばかり・・・」
アリスが呟いていた事は、またまたレオンの知る由もないことであつた。

授業が終わり、放課後の学院。

この学院には、部活動のようなものは存在しない、しかし、魔法や宝具の訓練などを友人と共に、訓練や会話に花を咲かせる生徒も大勢居る。

しかしレオンやアリスは、この世界の法則には当てはまらない異端な力、皆と一緒に訓練をすることは出来ないでいた。

「・・・」

レオンは歩きながら、自分の事について考えていた。

何故自分は失われたはずの系統を宿しているのだろう・・・何故、俺はあの場所でアリスと出会ったのだろう・・・

《何故あなたは、アリスとお互いに対となる属性を宿していると思う？》

《全ては決まっていた事なの・・・あなたがアリスと出会い、神器と戦い、世界の歴史を・・・遺跡によって理解し、伝説の宝具使いたちの戦いに違和感を覚える・・・その全てが、ある一つの事象を中心に展開しているのに》

レオンはミーフィスの言葉を思い出す。

《私に反応しているのだよ・・・君が・・・いいや、《君に刻まれた記憶》がね》

《魔境の庭園》

ジャックが言っていた台詞も思い出した。

「俺は・・・一体・・・《ナンナンダ》？」

レオンが小さく呟く。

「俺が闇の力を宿した事そのものに、何か意味があるってことか？」
レオンは考えたまま、ただ、歩き続けた。

そのころ、アリスは、教室で掃除をしていた。

クラスの順番で掃除の係りを回っていくわけだが、今日はアリスの番だった。

「私・・・どうしてこんな属性を宿したのかな・・・こんな力が無かったら、レオン君と一緒に過ごせたのかな・・・」

アリスは箒をしまい、机に座る。

誰もいない教室で、たった一人で座るアリス。

「そういえば……」

アリスはレオンと始めて会った時の事を思い出した。

アリスはあの時の記憶をあまり覚えていないわけだが、眠っていたことは覚えている。

ずっと一人で・誰にもきずかれず・永遠の孤独の中、アリスは眠り続けていた。

どうしてあそこで眠っていたのかは分からない・だが、レオンが自分をあそこから引きずり出してくれた事は覚えている。

《あなた・このまま行くと、あのレオンって子と、殺しあう運命になってしまいかも知れないわよ?》

エヴェリウスがそう言っていた・あれは何だったのだろうか?

《アリス・あなたは世界を変える存在・だから教えてあげる・あなたの神具の名前をね》

《終わりの少年と始まりの少女、あなた達は進まなければならない・》

あの時出会った、女の人も・こう言っていたっけ……

何時しかアリスはうとうととまどろみ始めた。

……

アリスは夢を見た。

ここは……どこ……?

アリスは真っ暗な世界をただ……漂っていた。

全てが真っ暗・・・何も無い・・・全てが黒色に塗りつぶされた世界・・・

と・・・アリスより100メートル程離れた所に、何かの紋章が描かれた白い巨大な扉が忽然と現れた。

！！

ギイイ・・・と扉が開き、誰かが入ってきた。

「!?!?」

アリスは絶句した。

「レオン君・・・!?!?」

急に現れた扉から入ってきたのは、8歳くらいの少年、しかし・・・レオンの面影がくつきりと残っている。

「どういうこと・・・一体ここは何!?!?」

アリスは叫ぶ。

と、その時、そのレオンに似た少年が呟いた。

「姉さん・・・何処にいるの・・・?・・・姉さん・・・」

少年が呟く。

「お姉さん・・・?・・・誰のことなの・・・?」

しかしアリスが尋ねても、声が少年には届いていないようだった。

「怖いよ・・・姉さん・・・何処にいるの・・・答えてよ!・・・姉さん!」

少年が泣きながら叫ぶ。

「っ！」

アリスは思い切り駆け出した。

あの少年を一人にしてはいけない。

アリスの本能ともいうべきものがそう告げていた。

しかし、どれだけ走ろうと、距離が短くなることはなかった。

まるで・・・アリスではあの少年の傍には・・・一緒には、いることは出来ない、告げるように。

そして・・・

少年の周りの「闇」が渦巻き始めた。

「うわあああ！」

少年が泣き叫ぶ。

その闇は少年を襲うように・・・いや・・・歓迎、祝福するように、少年の体を覆っていく。

「!?!?・・・光煌魔法・・・な・・・発動しない・・・?」

アリスは思わず魔法を使おうとしたが、力が発動しない。

「うわあああ・・・助けて!!・・・姉さん!!」

少年は手をどこかに伸ばす。

アリスも、届かないと分かっているながらも・・・少年に向け、思い切り手を伸ばす。

しかし・・・その瞬間・・・少年の体は飲み込まれた。

「・・・《レオン君》!!!!」

アリスは無意識に叫んだ。

そしてアリスは、意識を失った。

・・・・・・・・

「っ!？」

がばっと、アリスは机から目を覚ました。
日は暮れかけ、オレンジに染まっている。

「・・・・・・・・」

アリスはそのまま、呆然としていた。

「今の・・・夢は・・・何?・・・私・・・どうして泣いてるの?」

アリスは何故か涙を流していた。

・・・・・・・・

アリスの心には、酷い後悔のような・・・悲しみのようなものが満ちていた。

その時。

ピンポンピンポン・・・

放送の合図が鳴り響いた。

「ルベリージア学院1-A所属、レオン・イル・エキテス、アリス・ランガルド、ヴィクトリア王女、ルーク・ブリトニー・・・この四名は至急、生徒会長特別室に来るように」

アリシアからの放送が入った。

アリスは顔を水道で洗い、涙を洗い流す。

さっきまで心を満たしていた、嫌な感覚と共に。

早速、生徒会長特別室の前に集合したレオン達。

「一体なんたる・アリシアさんがここに呼ぶときって・大抵は
るくでもないことだけどさ・」

レオンが呟く。

「う・うん・そうだね」

アリスが苦笑。

「やっぱり・さっき夢で見た、男の子・レオン君に似て
る・」

と、アリスがレオンをじっと見つめていたのがきずかれたのか、レ
オンが首を傾げる。

「どうかしたか?・アリス?」

「え・ううん!・なんでもないよ?」

アリスが誤魔化す。

そして、扉を開け、中に入るレオン達。

『あ・」

全員が一斉に告げた。

そこにいたのは、件のサクラ・ファルバレンだった。

「あ、来たみたいだね」

サクラが微笑む。

ピンク色の髪をツインテイルで括ってある少女。

「始めまして、私は・サクラって言います、これからよろしくね
」

サクラは最高の笑顔でレオン達を迎えたのであった。

「みんなはもう知ってると思うけど、この子が我が学院の副会長、サクラよ」

アリシアが紹介をした。

「んもう・・・アリシアったら、自己紹介くらい自分でできるよ？」
サクラが頬を膨らませる。

「あの・・・アリシアさん・・・俺達を呼んだのって・・・」
レオンが尋ねる。

「そう、私が会いたかったから、呼んだの。気になったから・・・アリシアが気に入っているっていう人達が」
サクラが微笑む。

見る者の心を奪う微笑みだ。

「レオン・・・俺、死にそうだ・・・」
ルークは鼻を押さえている、相変わらず変態な趣味を持つ奴だ。

「良かったな、お前が死んだら、この学院の女子生徒の半分は喜ぶぞ」

レオンが冷徹に告げた。

「ねえ、アリシア、この人達、凄い面白いね、ところでさ・・・アリシアが気になる男子生徒って、誰？」

サクラが満面の笑顔で呟く。

「・・・」

アリシアは無言。

「さあ・・・誰でもいいでしょ」
アリシアが僅かに・・・きずかれない程度に頬を染めた。
しかし、サクラにはお見通しらしい。

「ふん？・・・気になるな」アリシアのお気に入りの、男子」
ニヤアと頬を緩ませるサクラ。

「さ、続きといきましょう」
アリシアが無理やり主導権を握る。

「むっ」

サクラは不機嫌そうだ。

「さて・・・皆に集まってもらった理由はもう一つあるの、三つ目のアーティファクトの在り処が判明したわ」
アリシアが真剣に告げた途端、空気が変わった。

・・・

場所は変わり、惑わしの森。

「ククク・・・せっかく学院に来たんだ・・・少し・・・遊んでみつか・・・
聖七騎士団所属・ナンバー7「アハト」ジョン・ガルーゼがな・・・

「ジョンは微笑んだ。

-----次回予告-----

更なるアーティファクトの存在が明らかになり、緊張するレオン達、

会議をしているところにある乱入者が。

「久しぶりね〜」

セルヴィアは微笑む。

そして、アーティファクトの回収を行う為、レオン、アリス、ヴィクトリア、アリシア、サクラの五人は、アーティファクトが眠るといふ地、ヘディングバルトに向かう。

そして、アーティファクトを発見したレオン達の前に、史上最悪の敵が現れる。

「さあ、かかって来いよ!!!・・・光と闇の使い手共!!!」

次回、聖七騎士団・序章、お楽しみに。

聖七騎士団・序章

「三つ目のアーティファクトの在り処が判明したわ」
アリシアは真剣な表情で告げた。

.....

「三つ目の・・・アーティファクト・・・？」
レオンが呆然と呟く。

「ええ、そう・・・これがレオン君達を呼んだ本当の理由よ」
そういうことか・・・だからアリシアさんは・・・

「ねねアリシア、アーティファクトってアレだよね？・・・前に学院の理事会の連中が発見して持ち込んだっていう・・・槍みたいなのことだよ」

サクラが無邪気な子供のように目を輝かせ、呟く。

「そうよ、けどどうしてサクラが知ってるの？・・・私、話した覚えがないわよ？」

アリシアが首を傾げる。

「えへへ～それはね～」

サクラが言おうとした瞬間。

ガチャリ・・・

「私が教えたのよ～」

！！

この間延びした独特の口調は・・・

「セルヴィアさん!？」
レオン達は絶句。

「あ、セルヴィアじゃないですか」
サクラが叫ぶ。

「あなた・・・どうして・・・」
アリシアが目を見開いている。

「さっきの質問の答えよ、サクラには私が教えたの。今まで起きたことの全てとはいかないけど・・・大体のことは話したわ」
セルヴィアが肅々と告げる。

「あなた・・・まさか、レオン君達のことも・・・」
アリシアがセルヴィアが軽く睨む。

「大丈夫よ、私はこれでも理事会の長、そういうトップシークレッ
トは話してない」

セルヴィアは肩をすくめる。

「??？」

サクラが笑顔のまま首を傾げている。

「・・・それから事情説明。

「成る程ね・・・ようはサクラを帰るように仕向けたのは、あなたっ
てわけ・・・」

アリシアがため息をつく。

「ん、そつだよ、セルヴィアが頼みたいことがあるからって言うか
ら、仕方なくですね」

サクラは微笑みながら呟く。

「と、言うわけで・・・サクラと共に「デングバルト」に行つて頂戴」セルヴィアが告げる。

デングバルト・・・このルベリーシア学院から遠く離れた街で、この辺の一角を仕切っているアロオ山脈を挟んだところにある。

ネルクス市が商業の街なら、デングバルトは魔道具で有名な街だ、魔道具は生活に必要な必需品、無くてはならない街でもある。

そこに、アーティファクトが眠っているらしい。

「因みに、そこに行くメンバーはこつちで選定済みだから、今から言う者は、デングバルトへと行つて貰います、まず・・・アリシア、サクラ、ルーク君、アリスちゃん・・・そしてレオン君・・・この5人はこれからすぐにここを出発しなさい？」

セルヴィアが淡々と言い放つた。

「・・・何から何まで決まっているわけね・・・」

アリシアがセルヴィアを半眼で睨む。

しかし、セルヴィアは微笑むだけで言葉を返すことは無かった。

そしてレオン達は各々で準備を整え、明日出発することになった。

そしてセルヴィアだけが、生徒会長特別室に残された。

「ふう〜偽りの言葉っていうのも辛いものがあるわね〜」

セルヴィアがため息。

そこに、一人の女性が入ってきた。

「セルヴィア理事長・・・」

女性が呟く。

「ええ・・・分かってる・・・言えないわよ・・・理事会よりも上位の存在である「王道賢者」の方々がルシアーデ王国と通じていたなん

てね・・・行くわよ、裏切り者どもをたたき出す為に」
セルヴィアの目に殺気がこもった。

一方レオン達は準備を整えた次の日、出発の前の任務の確認で、校門前に集まっていた。

因みにレオン達は特別な権限によって、授業の拒否を不問とされているらしい。

恐らく、セルヴィアが働きかけたのだろう。

「・・・・・・・・」

??

「どうかしたんですか？アリシアさん・・・」

レオンが質問を投げかけた。

アリシアがさつきから沈黙しっぱなしだからだ。

「いいえ・・・セルヴィアの様子が少しおかしかったから・・・」

アリシアが釈然としない表情で咳く。

・・・・・・・・？

レオン達は妙な気分を抱えたまま、デングバルトへと向かうのだった。

レオン達は途中で休憩を挟みながら、デングバルトへと通じる、移

動魔法陣が刻まれた祭壇へとたどり着いた。

祭壇とは、世界の彼方此方を繋ぐワイプホルの様な物だ。

祭壇の地面には魔法陣が刻まれていて、そこに魔力を通すことで、その魔法陣とリンクしている魔法陣と空間を繋ぎ、その場所へと飛ぶことができる。

「へえ〜これが移動型魔法陣か・・始めて使っぜ」
ルークがワクワクしながら告げる。

「おいおいルーク、あんまりテンション上げんなよ・・今から俺達はアーティファクトを回収しに行くんだぜ？」
レオンが釘を刺す。

「分かってるよ・・じゃあ、行くか・・移動系の魔法は雷の得意分野だからな」
ルークが告げる。

「そうだね〜じゃあ、私とルーク君の二人でこの魔法陣を起動させるから、皆は陣の中に入って」
サクラが告げる。

「待つて」
アリシアが引き止めた。

「ん？何？」
サクラが首を傾げた。

「何・・じゃあないわよ、この魔法陣を機動させるには・・・・」
アリシアは最後まで言葉を紡げない。

ズバン！！

サクラの体から膨大な魔力が放出。

ギユウウウウン……
魔法陣が動き出した、少しずつ回転を始めている。

「なんて魔力だ……！」
ルークが呆然となる。

同じ雷使いでも、あまりの核の違いに驚きを隠せないのだろう。

バチバチバチ……
サクラの体から雷が爆ぜる。

「さあ、ルーク君も中に」
サクラが告げる。

「え……でも……」

「いいから、これくらいなら一人でもいけるし……やっぱり二人より一人の方がやり易いもん……それに……私の魔力は大きすぎて、同じ系統の魔力に干渉して乱してしまうの」
サクラが微笑む。

ルークは頷くと、陣の中に入った。

「よし……行くよ……！」
サクラの体が、余りの魔力によって顕現した雷に包まれる。

キイイイイイン……
目の前が真っ白になった。

……
「あれ……ここは……」

レオンは目を開けた。

レオンは地面に倒れていた。

パチパチと目を瞬かせ、ここがどこか再確認する。

レオン達がいたのは、森の中のような。

「レオン君・・・大丈夫？」

アリスがレオンの顔を覗きこんできた。

「ああ・・・アリスも無事みたいだな」

アリスが頷く。

「痛・・・一体何なのだ・・・？」

ヴィクトリアも体を起こす。

「うあああ・・・」

ルークも同じようだ。

「皆、目が覚めたようね」

アリシアの声が響いたと思ったら、アリシアとサクラの二人が少し離れたところに立っていた。

どうやら気絶しないらしい、改めて実力の違いを認識させられるレオン達だった。

全員が目を覚ましたところで、サクラが事情説明。

「まあ、私一人の魔力で飛ぶことは出来たし、問題は無いんだけど・
・皆は気絶しないように訓練を積むべきだね」

サクラが苦笑。

「とりあえず・・・今から街へ入りましょう、話はそれからよ」

アリシアが告げた通り、レオン達はデングバルトの入り口へと着くと、門番にルベリージア学院の使いであることの証明書を見せた。

すると門番は快く通してくれた。

「開門！！」

門番が叫び、魔力をこめる。

グオオオン……

荘厳な音を響かせ、門が開いた。

「うお！」

ルークが呻く。

「凄い……」

アリスも呟く。

門が開いた瞬間、道の脇にいくつもの店が並んでいる。

しかもその一つ一つが、魔道具を扱う店のようだ。

「うわぁ〜凄いですよアリシア！」

サクラが目を輝かせる。

「もう……観光じゃないのよ……」

アリシアが額に手を当て、ため息。

「いいじゃないですか、少しぐらい回ってみても」

レオンが付け加える。

「ダメよ……とりあえずこの管理者に話を聞きに行きましょう」
アリシアがそう言ったので、街の管理者とやらに挨拶に行くレオン達だった。

「それにしても・・・変わった街だな・・・」
街を歩きながらレオンが呟く。

「何がだ？」

ヴィクトリアがレオンのとりとめも無い呟きに反応してくれたようだ。

「いや・・・この街・・・四方東西、城壁で囲まれているな」と・・・
レオンが呟く。

そう、この街・・・デングバルトは、街の周りを全て城壁で囲まれている、外とは完全に孤立している。

「なんだ・・・そんなことか・・・ここは昔・・・といっても、第4次アルビオン戦争時だがな、その時、この魔道具を狙ってやってきた、ルシアーデ王国のナイト達に、その強大な力を持った戦闘用魔道具を悪用されたそうだな・・・それ以来、この街が二度と危険にさらされぬ様、城壁を巡らせたと聞いたことがある」
ヴィクトリアが語り終わる。

「へえ〜やっぱヴィクトリアは物知りだな・・・」
レオンが関心したように呟く。

「バ・・・バカ!・・・そんな事はない!・・・当然の・・・ことだ・・・」
ヴィクトリアが頬を染めうつむいた。

「レオン君・・・」

アリスが袖を引っ張ってきた。

「ん、どうしたアリス」

レオンが呟く。

「なんだか・・・妙な気配がする・・・」

アリスがレオンの片腕を掴む。

妙な気配？

レオンは辺りに意識を張り巡らす、しかしそんな気配は……

「本当だよ」

突然、レオンの前を歩いていたサクラが呟いた。

「え？」

「本当に気配を感じるよ、どうやら……何かへ良くない者々が……この街には居るみたいだね」
「アーティファクト以外にも……危険な存在があるかも」
サクラが小声で呟く。

アリシアは絶えず前を向き、歩いているが、恐らくきずいている事だろう。

その証拠に先ほどから、アリシアの腕の周りで、風が薄く回転し渦を生み出していた……風の低位詠唱、マテラーズを発動させているようだ。

マテラーズは辺りを監視する風魔法、恐らく……その魔法を使い、辺りを観察しているのだろう。

そして、管理者がいるという宮殿らしき建物に到着した。

-----次回予告-----

街の管理者、エデルと挨拶を終え、本格的な調査を行うレオン達。

しかし、発見したアーティファクトに、強力な結界が張られ、近づくけない。

そして・・・アーティファクトを見守っていたレオンとアリスの前に、
聖七騎士団の一人、ジョンが現れた。

「さあ・・・来いよ!!!・・・闇と光の使い手共!!!」

遂に始まった聖七騎士団との戦闘、しかし・・・その圧倒的な力を前に、
レオンとアリスは苦戦を強いられていた。

そして・・・あの人がレオンとアリスに味方する!

「学院の生徒に手を出さないでくれるかな」
サクラが呟く。

次回、聖七騎士団・序章　?、お楽しみに。

聖七騎士団・序章？

レオン達はデングバルトの「管理者」と会うために街の中心に位置する中央庁という宮殿へと向かっていた。

「あれが・・・」

レオンが呟く。

レオン達の少し前方にあるのは巨大な宮殿の形をした建造物だった。

「しかし・・・でかいな・・・あんな所にこの街の管理者とやらがいるのか」

ルークが眉をひそめ呟く。

そして宮殿に到着。

レオン達が近づく、と、巨大な扉を守護していた甲冑をきた男が声をかけてきた。

「貴様ら何者だ・・・？」

男は長槍を構える。

槍の先端が黄色く輝いているのを見る限り、雷系統の魔力を帯びているようだ。

「すみません・・・私達、ルベリージア学院から派遣されました、アリシアと申します、こちらにあるアーティファクトを回収すべく参りました」

アリシアが証明書を見せる。

男が証明書を覗き込む。

「・・・確かに・・・では、確かめるとする」

男が意味深げなことを呟いた途端。

ガシャン・・・

男が槍の先端をアリシアに向け、両手を使い、前へ凄まじい速度で突き出す。

ブン！

風が唸り、アリシアに槍が迫る。

余りの出来事に誰も反応できない。

無論、アリシアも。

・・・一人を除いて・・・

バキン・・・

！！

レオン達は目を見開く。

レオン達が見たのは、神速とも言える速度でアリシアの前に回りこんだサクラが、片手の手のひらで槍を止め、砕いた姿だった。

「！！」

男が絶句。

「残念ですけど、雷系統の力では、私に対抗するのは不可能ですよ？」

サクラが微笑む。

槍を突き出した男は呆然と折れた槍を見つめ、告げる。

「防御・・・いや、これは同系統への・・・強制干渉・・・」

男が何かを呟いている。

我に返ったレオンは、男の胸倉を掴みにかかった。

「お前！．．．アリシアさんに何を．．．！！」
レオンが激昂。
しかし。

「いいのよレオン君、この人も本気じゃないわ．．．そうですよね、デングバルトの管理者、エデルさん？」
アリシアが憎らしげに笑い、告げた。

！？

管理者！？

レオン、アリス、ヴィクトリア、ルークの4人は呆然と目を見開いた。

「．．．．．ク．．．ハハハハ！！」

男が急に腹を抱え、笑い出した。

「正解だよ．．．いやはや、君達ルベリージア学院の生徒には驚かされるよ！」

まさか．．．本当に．．．？

「この人が．．．」

レオンとアリスが同時に呟く。

「ああ、久しぶりに笑ったよ．．．その通り、この僕がこの街・デングバルトの管理者、エデルだ．．．宜しく、ルベリージア学院の生徒達」

エデルは微笑んだ。

エデルの言葉で、宮殿の中を歩くレオン達は、エデルに質問をした。
「でも．．．どうしてエデルさんはあんなことを．．．」

アリシアが首を傾げる。

「何、ちょっとした悪戯精神だよ・普通に迎えてはつまらないだろう?」

エデルが笑う。

と、レオンはここで、先ほどエデルの襟首を思い切り掴んでしまったことを思い出した。

「あの・エデルさん・さっきはすいませんでした」

レオンは頭を下げた。

「ん?・いや、いいよ、元はといえば僕が悪いんだしね」

エデルは笑う。

この人・なんだかアリウスさんと同じ雰囲気を持つてる・・・
ヴィクトリアも同じ考えらしく、レオンと目が合った瞬間に苦笑をよこした。

やがて客室間に到着し、いよいよアーティファクトの話が始まった。
「さて・君達にここまで来てもらったのは他でもない、アーティファクトと呼ばれる物の存在だ・まずは、実物を見てもらうよ」
エデルはそう告げると、指を鳴らす、すると一人の秘書らしき女性が、長細い箱のようなものを持って入ってきた。

それを置くと、頭を下げ、出て行ってしまった。

これが・・・

「三つ目のアーティファクト・」

アリスが呟く。

「そうだ、これこそが、ここデングバルトに伝わっていたアーティ

ファクト・・・だが・・・」

エデルが箱を開け、何かの手袋のようなものをはめ、アーティファクトを取り出す。

「ただの・・・騎士剣？」

ヴィクトリアが呟く。

そう、箱から取り出されたのは、普通のなんの変哲もない、ただの騎士が使うような剣だった。

形状としては、レオンの持つアーティファクト、ミスティルティンに近い。

「まあ、皆がそう思うのも無理は無い・・・何故ならこいつは、まだ覚醒していない」

エデルが険しい顔で告げる。

覚醒・・・ということとは・・・

「そいつはまだ力がない・・・ってことですね？」
レオンが思わず呟く。

「・・・君はどうしてこの剣の事が分かるんだい？」

エデルが驚きで目を見開く。

そこでアリシアが説明を開始。

「この子の背中に下げている剣は・・・アーティファクトなんです」

「なんと！！・・・本当か！？・・・これは驚いた・・・まさかアーティファクトを扱える者が存在しようとは・・・」
エデルが叫ぶ。

「まあ・・・大変でしたけど・・・」
レオンがため息。

「ふむ・・・ここにアーティファクトの所持者が現れるとは・・・
なら話さねばなるまい・・・まずはこの剣だが・・・デングバルトに
あつた文書には、ハ豊穰剣・アロンダイトヱと記されていた、そして
名の通り、この剣は土系統を司っていたらしくてね、昔の人々は
この剣の力を使っていたらしい・・・しかし」
エデルは言葉を止める。

「あまりの力の強大さに恐れをなし、封印した・・・」
アリシアが呟く。

「その通りだ・・・そしてこの剣には、とても強力な結界魔法が施さ
れていてね・・・このとおり、特殊な手袋を付けないと、まともに触
れないんだ」

エデルが手を見せ付ける。

「だから・・・君達にはこの剣を守護してもらいたい、そして一定期
間内の守護が終わるころまでには、この剣の封印魔法の解除法を見
つけよう・・・そして最後にこの本を渡しておく・・・」
エデルが差し出したのは、一冊の古ぼけた本だった。

これは・・・
本を受け取ったアリスが首を傾げる。

「それは・・・アーティファクト・・・遙か太古よりこの街の地下
に眠っていた古代書・・・ハ鏡界文書ハロンギヌス・クラウンヱと呼
ばれていた物だ」

エデルが驚きの真実を告げる。

全員、啞然として、その場を動けなかった。

宮殿より少し離れた民家の屋根の上に、その男・・・ジヨンは立っていた。

「へえ〜まさか・・・アレがここにあるとはね・・・『境界文書』・・・まあいいや、アレを回収するのは俺の役目じゃないしな・・・そういうのは・・・我らがリーダーのナンバー1『アインス』である『ノア様』に任せりゃいいか」
ジヨンは微笑んだ。

一方レオン達はエデルとの会談を終え、大きな目の部屋で休憩をとっていた。

「いや〜しかしここにはアーティファクトってやつがたくさんあったね〜」
サクラが呟く。

そう、この街には、『アロンダイト』以外にも、もう一つアーティファクトが眠っていた・・・『境界文書』と呼ばれていた書物だ。その『境界文書』はといえば・・・

アリスが持っている・・・というより、アリスしか触れることが出来なかった。

エデルは特殊な魔道具である『無効魔手』と呼ばれる道具を付けていたが、素手で触れられたのはアリスだけだった。

レオンの持つミスティルテインと同じように。

「しかし・・・アーティファクトって一体何なのかしら・・・」

アリシアが考えたが、分からずじまいだった。

アリスは「境界文書」を眺めている。

「どうかしたのか？」

レオンがアリスの隣に座る。

「うん．．ただ、この本．．開かないの」
アリスが呟く。

うん？

「開かない？」

レオンが聞きなおす。

「うん、開かない．．何をしても．．」

「ふむ．．さながら鍵がかかっている様な感じが、
近くで本を観察していたヴィクトリアが呟く。

本の表紙には魔法陣と古代文字のようなものが描かれたいる訳だが、
何を記したもので、何の系統の魔法を司っているのかも不明だった。

「でも．．アリスちゃんしか触れることは出来ないんでしょう？．．
ならアリスちゃんと何らかの謂れがある物かも知れないよ？」

サクラが告げる。

「その通りね．．それしか考えられないわね」
アリシアも頷く。

アリスに謂れがある．．か、アリスには不明な事が多い．．まず
アリスはどうして惑わしの森に眠っていたのか。

どうして光の系統を使えるのか。

どうして・・・俺とアリスは対になる属性を宿して生まれてきたのか・
・
そしてアリスに纏わるたった一つだけの手がかり・・・

《光の再生者》

光の再生者・・・一体なんなんだ・・・？

レオンが悶々と悩む。

「けど・・・アリスが何者でも・・・俺はアリスを守りたい・・・」
レオンは決意を新たにした。

そして二人一組でアロンドイトを守護することが決まった。

レオン・アリス、ヴィクトリア・ルーク、アリシア・サクラ・・・
この組み合わせだ。

まずはレオンとアリスが当番に該当した、

二人はアロンドイトの封印を解くために奮闘しているエデルとアロ
ンドイトを守護する為に、工房の前にいた。

夜中。

物音は全くしない。

今頃工房内では、エデルが封印を解いているだろうが。

「・・・何も聞こえないね」

アリスが呟く。

「ああ・・・そうだな」

と、アリスが震えていることに気がついた。
どうやら寒いらしい。

レオンはアリスに自分の着ていた上着を着せる。
レオンは他にも着物を重ね着していたので寒くは無かった。

「レオン君・・・?」

アリスが驚きレオンを見る。

「いいから・・・じっとしてろよ」

レオンが呟く。

「うん」

アリスは頷くと、レオンの肩に体重をかけてきた。

!!

レオンの鼓動が跳ね上がる。

アリスも頬を真っ赤に染めている。

そのままじつとしていると・・・

「ひゅ〜熱いね〜お二人さん!」

辺りに声が響く。

!?

レオンとアリスが立ち上がり前方を睨む。

空中に一人の男がゝ立っていた

「ふふん〜邪魔したか?」

男が笑う。

「お前・・・何者だ・・・」
レオンが戦闘態勢に入る。

「いいねえ〜そういう本気・・・ゾクゾクするぜ・・・おっと、名乗らねえとな、俺は聖七騎士団所属・ナンバー・ハート・ジョン・ガルーゼだ、宜しくな？」
男が名乗る。

「聖七騎士団だと!？」
レオンが絶句。
アリスも絶句。

「ふん・・・まあ、お前らはエヴェリウスとジャックに会ってるわけだし、俺のことは分かるよな？」
ジョンが呟く。

「何のためにここに来た・・・」
レオンが睨む。

「何のため・・・ね・・・まあ、強いて言いやア・・・お前らを試すためだ」

ズン・・・!!!

辺りに凄まじい魔力が放たれる。

「!？」
この魔力・・・神器以上か・・・!？」

レオンもアリスも魔力に当てられ、一瞬呼吸が止まった。
それほどの魔力だった。

「さあ！．．来いよ、闇と光の使い手共！！」
ジョンが言い放つ。

こいつ、やっぱり俺達のことも．．．
「．．．やるしかないよ．．．レオン君」
アリスが呟く。

「そうそう！さっさとかかって来いよ、じゃねェと．．．こっちからいくぞ？」

ジョンが告げた。

「く．．．」

レオンは両手に魔力を集中。

キイイイン．．．

発動．．黒滅魔法．．シャドウ・オブ・ブレイド！

レオンは心の中で唱える。

するとレオンの両手に漆黒の剣が出現。

「ほう、心で描いて発動できるようになったか、やっとこさ、まともになったな」

ジョンが感心したように告げる。

因みにアリスも同じようだ。

両手に純白の剣を顕現させている。

「行くぞアリス！！」

レオンが叫び、アリスが頷く。

ダン！

レオンが地面を蹴り、跳躍。

「おおおおお！」

思い切り斬りつける。

ガン！

「！？」

レオンが絶句。

なんとジョンを斬り付けようとした漆黒の剣が、何にもない場所で止められた。

「な……に……？」

なんで……

「はあ！」

ジョンの背後に、純白の翼を顕現させたアリスが剣を振り下ろす。

ギャリン！

「！？」

アリスも同じように、ジョンに剣が届く前に止められた。

まるで、ジョンの周りに……

「なんだ……これは……鎖か！？」

レオンが叫ぶ。

そう、ジョンの周りに鎖が張り巡らされていた。

透明で今までできずかなかったようだ。

「クク……きずいたようだなア……そう……これが俺の力……まあ、

これは俺の宝具の力の漏れた一端でしかないけどな」

ジョンが笑う。

「力の一端？」

アリスが眉をひそめる。

「ほらア！！」

ジョンが叫ぶ。

ギャリリン！！

鎖が回転し、レオン達を吹き飛ばす。

ドン！

地面に叩きつけられる。

「か・・・あ」

呼吸が止まる。

「うぐっ！」

アリスも咳き込んでいる。

なんて力だ・・・！！

レオンは背中からミスティルティンを抜き放つ。

キン・・・

「はあああああ！」

漆黒の翼が顕現、ジョンに迫る。

「ふ！」

ジョンが呼吸を吐き出し、鎖が渦巻く。

「なんなんだ、その鎖は！！！」

レオンが叫ぶ。

「ああ？・・・ああ、こいつは俺の・・・宝具の影響の副産物・・・とでも言っとくか？」

ジョンが笑う。

そして。

ジョンが鎖を左右に放つ、よく見ると、先端に針が付いている上に、鎖の本数に制限が無いようだ、先程から鎖を何本も顕現させている。

そして鎖がレオンの平行線に来たとき、鎖が真横に曲がった。

「この鎖っ！・・・曲がるのかっ！？」

レオンが叫んだときにはもう遅い。

ガァン！！

空中で直撃。

「か・・・あ・・・」

レオンのわき腹に鎖が刺さる。

レオンの翼が消え、地上に落下・・・する途中に、レオンが目を見開いた。

レオンの周りに、鎖の先端が何十とレオンに向いている。

まずい・・・このままじゃ、何十って鎖に貫かれる・・・！？

「ほおらァ〜死んじゃうぜ」

ジョンが笑い、鎖を操った。

ギャリ！

鎖が一斉にレオンに迫る。

レオンが目を閉じた瞬間、アリスが兆速で現れ、レオンを抱え、鎖の射程外まで引っ張った。

「アリス!？」

アリスは頷くと、レオンを地上に降ろす。

「へえ、やるじゃあねエか・・・あの場面から抜け出すとはね〜」
ジョンが口笛を吹く。

「アリス・・・ありがとう・・・」
レオンが呟く。

「ううん・・・大丈夫、レオン君??」

アリスが心配そうに告げる。

レオンはジョンを睨む。

そして。

「終わりだなア」

ジョンが空中から何十という鎖を地上に放つ。

!!

レオンもアリスも、その場から動けない。

死ぬ。

たった二文字の単語が浮かぶ。

しかし。

ギユウン・・・バアン!!!!

遠くから何かがはじける音が聞こえる。

バチバチバチン！！

レオン達の目の前を、凄まじい雷光が走り抜け、鎖を消滅させた。

！？

ジヨンが目を細める。

「何者だ？」

「いやあく悪いんだけど、学院の生徒に手を出さないでくれるかな」

なんと、そこに現れたのは、サクラ・ファルバレンだった。

「あなた、聖七騎士団だよな？ ・ ・ ・ 大方、レオン君とアリスちゃん ・ ・ ・ 闇と光の二人でも狙いに来たんではよ？」

！！

「サクラさん ・ ・ ・ 俺達のことを ・ ・ ・ 」

「うん、知ってたよ。セルヴィアもアリシアも ・ ・ ・ 皆、隠し事が下手だからね」

サクラが微笑む。

「何者だと、聞いてんだがなア ・ ・ ・ 」

ジヨンが痺れを切らしたように、サクラに鎖を放つ。

「 ・ ・ ・ 」

サクラが片手を掲げ、雷の魔力を纏わせる。

バチバチ ・ ・ ・

その雷を、放つ。

バァン！

雷が固まりとなって、ジヨンの鎖を消し去る、そのままジヨンに迫るが・・・

バン！

雷が消える。

ジヨンの前に鎖が網目状に展開していた。

「・・・大した防御力だね・・・宝具を使ってないのに」
サクラの声音が真剣になる。

「そつちこそ、俺の鎖を消し去るとはなア・・・」
ジヨンが微笑む。

「私の雷を止めた人間は・・・今までではアリシアとセルヴィアぐらいなんだけど・・・凄い魔力・・・人間とは思えない」
サクラが告げる。

「クク・・・まア・・・いいや、このままやっちまおうか？」
ジヨンが告げた。

-----次回予告-----

レオンとアリスの前に助太刀として現れたサクラ、レオン達はその実力を垣間見えることに・・・

そして、アリスの持つ、ハ境界文書ヅの封印が解かれ・・・アリスの力の新たな一端が、遂に発動した。

《汝・・・光の力を纏いし、光の巫女なり・・・汝の力の本質を・・・》



次回、《光天創造》、お楽しみに。

人物・用語解説 ？

―――登場人物―――

レオン・イル・エキテス

本編主人公、16歳、ルベリージャ学院1-A所属。

魔法系統は古代魔法系統《闇》。

性格はめんどくさがりやだが、色々な人達と交流を重ねることで、物事を前向きに考えるようになる。

周りの女性から好意を向けられているが、鈍感なため、きずけていない。

神具は、殲滅の黒王剣ハレーヴァテインヰ

アーティファクトであるハ被剣ミスティルテインヰの適合者。

アリス・ランガルド

本編メインヒロイン。16歳、レオンと同じ組に所属。

魔法系統は古代魔法系統《光》

世界の秘密にちかずくためのハ鍵ヰ。

性格は最初は暗かったが、レオンたちと共に行動するようになってからは、明るくなってきている。

神具は再生の白王剣ハヰ。

アーティファクト、ハ境界文書ハロンギヌス・クラウンヰの適合者。

アリシア・エーテラーゼ

本編のヒロインの1人。17歳、2-B所属。

魔法系統は風、宝具は風王天刃ハウィンディーネヰ。

学院最強と噂される生徒。

第三の神器との戦いで『風翔の宝具使い』に目覚める。
ジール・ルイラージとの出来事を経て、レオンに薄っすら好意を抱く。

ヴィクトリア・シア・ミルフェリーナ

本編ヒロインの一人。メインに近いヒロインでもある。

16歳。

ミルフェリーナ王国第二王女。

魔法系統は水。宝具は水真海皇槍ハロンギエールの槍。

性格は厳しいと思われがちだが、実は心優しい。

エグザリオとの戦いを経て、レオンにさりげなく好意を向けるようになるが、レオンは全くといっていいほどきずいていない。

ルーク・ブリトニー

レオンの悪友、組みもレオンと同じ。

魔法系統は雷、宝具は、雷電極拳双ハサンダー・ゲイル

1年生で宝具を発現させており、優秀なグループに入る。

同じ雷使いとして、ルベリージア学院の副会長である、サクラ・フアルバレンに憧れを寄せる。

アリウス・フィレス・ミルフェリーナ

ミルフェリーナ王国現、国王。

魔法系統は炎。星鏡世界最強と目される宝具使い。

宝具は炎皇竜の轟剣ハジーク・フリート

『炎皇の宝具使い』の末裔でもある。

セルヴィア・オルセイド

ルベリージア学院の理事長であり、アリシアの旧友。魔法系統は風、宝具は風塵蒼弓へヘル・シムルグ。その実力はアリウスやアリシアとも肩を並べるほど。独特の口調で話し、何事にも柔軟に対処する。

サクラ・ファルバレン

ルベリージア学院副会長であり、アリシアに匹敵するほどの実力者。2-A所属、17歳。

魔法系統は雷。

宝具は天剛雷剣へアマノハハキリノツルギ

子供っぽい口調と雰囲気を持つが、戦闘時には本気になったりもする。

グラン・ジルグ

元・ミルフェリーナ傭兵部隊副隊長。

アーティファクト・デュランダルの力を使い学院を襲撃するも、レオンたちの奮闘によって失敗に終わる。

—————ルシアーデ勢カ—————

アーフェリオン・ギル・ルシアーデ

ルシアーデ王国国王。

聖七騎士団の主とも言つべき存在で、聖七騎士団のメンバーからも、

敬意を寄せられている。
アリウスと並ぶほどの宝具使い（ナイト）。

エクセリーゼ

精霊守護騎士団の隊長にして、聖七騎士団のメンバー。

アーフェリオン曰く、堅物。

エヴェリウス

聖七騎士団所属のナイト、ナンバー6（ゼクス）と呼ばれる称号を持つ。

アリスに接触し、意味深げな台詞を残す。

ゼクシア・ファイラーベ

聖七騎士団所属のナイト、謎が多く、かつてルベリージャ学院の生徒会長をしていた。

魔法系統は雷。

アリウス曰く、『雷神の宝具使い』の末裔。

ジャック

聖七騎士団に所属している存在。

ナイトかどうかは不明。

レオンと何らかの関わりを持ち、レオンに多大な期待を寄せていて、唯一レオン以外で黒滅魔法を使える存在。

レオンとの関係の秘密はレオンの過去にあるようだ。

ノア

ジヨンの言葉の中に登場した、聖七騎士団のリーダー。
全てが謎に包まれていて、「境界文書」を欲している。

—————???

ミイテルフィリス・アルビオン

背中から、白い翼と黒い翼をはやした女性。レオンとアリスの秘密を知っており、物語の重要な時だけ、介入してくる。
ジャックが言うには、聖天王国アルビオンの皇女。

—————用語集—————

星鏡世界

物語の舞台となる世界。

神と星の力によって作られた世界で、現在ではミルフェリーナ王国とルシアーデ王国がお互いに領土をかけて戦争を繰り返してきた。

魔法

星鏡世界に満ちている魔力を使い、己の心で描いた奇跡を顕現させる力。

宝具

人間の心を魔力によって具現化させた物で、大きな力を持っている。
火・水・土・風・雷の五種類で成り立つ。

黒滅魔法

闇属性の魔法で、通常の魔法とは力の威力が桁違い。
現在の世界の法則に当てはまらない、異端な力。

この魔法を使えるのはレオンとジャックのみ。
有を無へと変える力。

光煌魔法

光属性の魔法で、威力は黒滅魔法と同等。

世界の法則に当てはまらない。

使用できるのはアリスのみ。

無を有へと変える力。

終焉と創造の年代記へエクストラ・クロニクル

星鏡世界の神話や成り立ちが記された書物。

コピーや複写本なら多く存在しているが、コピーは原典の半分も記されていない為、さほど重要ではない。

原典の一つが、ミルフェリーナ城の宝物庫に保管されていた。

アリウス曰く、原典はバラバラになり、世界に散らばったらしい。

神具

レオンとアリスがだけが発現できる存在で、その力は宝具とは別格
現在確認されているのは二つである。

レオンの、殲滅の黒王剣へレーヴァテインとアリスの、再生の白

王剣へ の二つ。

神器

強大な力を持つ存在、まだまだ謎が多い。

その正体は、神玉と呼ばれる宝玉を埋め込まれた存在。

全部で十体存在するらしい。

超新星魔法

神器だけが行使できる、強大な魔法、通常は太刀打ちすら不可能。

神遺物「アーティファクト」

謎の物質、宝具を上回る程の力を秘めており、非常に危険な存在。

古代の遺物であり、何処からか持ち出されたものだとも言われている。

—————アーティファクト—————

被剣・ミスティルティン

魔法の力を被う力を持つアーティファクト。

適合者はレオン。

呪槍・デュランダル

あらゆる物を侵食し、乗っ取る力を持つアーティファクト。

適合者はグランだったが、グランが魔法を使えない為、適合者の有無は不明。

豊穰剣・アロндаイト

デングバルトに祭られていたアーティファクトで、結界で能力が封じられており、どのような力を持っているか分からない。

適合者は現在不明。

境界文書Ⅱ ロンギヌス・クラウン

能力は不明。

聖七騎士団も目をつけているらしく、普通のアーティファクトとは違う可能性がある。

適合者はアリス。

—————超神星魔法—————

氷結の神剣・ブリューナク
神器インフェリオルが使った、超新星魔法、ブリューナクは完全なる勝利や栄光をもたらすとされている神話上の武器のため、人間が抗うこと事態が不可能な存在。

宝墳のエグザリオ
エグザリオが使った超新星魔法で、エグザリオそのものが莫大な魔力の塊となり、攻撃する。

魔弾・ガージ・ヴァーデン
鋼魔の神器・イルマタルが使った、超新星魔法。
莫大な魔力を固め、相手に向かって放つ。
圧倒的な魔力の砲弾のため、半端なものでは防ぐことすら不可能。

—————特殊単語—————

聖七騎士団
ルシアーデ王国の裏組織、現在確認されているメンバーはジャック、エヴェリウス、ゼクシア、エクセリーゼ、ジョンの5人。

絶対運命
ジャックが告げた謎の言葉。
世界が歩もうとする道筋そのもの。

聖天王国アルビオン
度々物語の中に登場する王国名。
ガブリエルが、この国の、の前にってはならないなどと、謎の

言葉を残した王国。

ミーフィスと何らかの可能性があると思われる。

光の再生者

世界が望んだ光の適合者の総称。

アリスの存在理由としての真名。

闇より選定されし者

ジャックが告げた真名。

レオンの事。

光の再生者と正反対の意味を持つ言葉。

魔鏡の庭園

物語の核となる場所、ミーテルフィリス曰く、レオンとアリスはここにたどり着く為に生まれてきたらしい。

光天創造

.....

デングバルト工房前にて、レオン、アリス、サクラの三人は聖七騎士団のナイトであるジョン・ガルーゼと相對していた。

「へへ・・・これからだぜエ・・・本当に楽しいのはよ！」

ジョンが叫ぶと同時に、三本の鎖を放つ。

ギャリン！！

「皆、かわして！」

サクラが叫ぶと同時にレオン達は飛び去る。

ザンザンザン・・・

鎖が地面に突き刺さる。

サクラはその鎖の上を駆け上がる。

そして駆け上がりながら、手のひらに雷の魔力を纏い、それを放つ。

バァン！！

雷の塊がサクラの手のひらで弾け、それが雷の槍となってジョンに迫る。

ギャリン・・・

鎖が格子状に展開、雷を受け止める。

ガァン！！

衝撃波が発生し、辺りの土を巻き上げる。

「へえ〜やるじゃねエか・・・事、雷に関しては、ゼクシアの奴に並

ぶかもな・・・」
ジョンが小さく呟く。

そのころレオンとアリスは、ジョンの背後に回りこんでいた。

「黒滅魔法・中位詠唱・・・カオス・インテビティ!!!」

レオンが叫び、両手を前に突き出す、漆黒の魔法陣が展開、魔力を収束し、放つ。

ギユウウン!!!

「!!!」

ジャックが振り返る。

「ち・・・ちよこちよこしやがってよ・・・しゃあねエ、少し力を使うか」

ジョンがそう呟いた途端、今まで半透明だった鎖が、その姿を顕現させた。

「!!!」

レオンが目を見開く。

「放つぜエ、ハマグナマテルの影滝!!!」

ジョンが告げた途端、鎖が黒く変色し、蛇のようにのた打ち回る。

ギャリン・・・

鎖がレオンの放った漆黒の魔道撃を包み込むように展開し、それを吸収した。

ギユウウウン・・・

「!!!・・・なんだと!?!」

レオンが絶句。

と、その時。

アリスが背後の隙をついて、ジョンに剣を振り下ろした。
ガアン！

「ちっ！」

咄嗟に防御したものの、ジョンが地面に叩きつけられる。
ドオン！！

砂埃が舞う。

「レオン君、アリスちゃん・・・2歩下がって」

サクラがいつの間にか跳躍し、ジョンがいる地面に向かって手を突き出している。

「雷魔法・高位詠唱・グリバル・デルソール・エデン・雷神八天撃ハタケミカズチ！」

サクラが詠唱を完了し、両手に凄まじすぎるほどの雷を纏い、それを振り下ろす。

ジジジ・・・ガアン！！

膨大な雷の柱が、ジョンが落ちた地点に放たれた。

衝撃波が辺りを一掃。

レオン達も思わず後ろに飛ばされた。

そして・・・煙が晴れたころ。

「あああ・・・ひっでエな・・・服がボロボロじゃあねエかよ」

！！

三人は絶句。

なんと、雷の高位詠唱をまともにくらった筈のジョンが這い出てきたからだ。

「ったくよ・・もう少し加減しろよ」

ジョンはパンパンと肩の埃を叩き落とす。

「あなた・・どうして」

サクラが呟く。

「あ?・・分からねエか?・・確かに俺はさっきの魔法を放たれた場所にはいたがよ・・俺だって、魔法を使うことは出来るんだぜ?」
ジョンが笑う。

そうか!!

コイツは今まで、あの妙な鎖を使って戦ってきた・・でも、一度も魔法を使わなかっただけで、何かの系統魔法は使えるはずなんだ!!
レオンは自分の見落として気付くと、歯をかみ締めた。

「でも、あれほどの魔法・・高位詠唱を防ぐ程の魔法となると、同じ高位詠唱でしか防ぐすべは無いはずだよ?」
サクラが怪訝そうに質問する。

「ああ・・確かにそうだ・・俺は土系統のナイトではあるが・・俺はどうにも魔法ってやつアが不得意でね、だからこそコイツを使わせてもらった」

ジョンが片腕をサクラに見せる。

その片腕に握られていたのは紅い宝石が埋め込まれた、一つのペンダントだった。

「それは・・・」

「こいつは、守護専用のアーティファクト・・・オシリスの涙」だ
ジヨンが微笑み、告げる。

「何ですって・・・？」

さすがのサクラも絶句。

「アーティファクト・・・？・・・アレも・・・」

アリスが呟く。

マジかよ・・・ってことは、聖七騎士団にも、アーティファクトを行
使できる奴が居るってことか・・・！

レオンは心の中で絶句する。

「・・・驚いているようだなあ・・・高位詠唱すらも防いだことに」

ジヨンが呟く。

「・・・」

サクラが手に魔力を纏う。

そして両手を掲げ。

「我は、世界の理より出でし雷光の御身なり・・・」

サクラが言霊を発する。

サクラが今、発している言葉は、この世界に満ちる魔力を自分の体
に取り込みやすくする言霊だ。

無論、全員が使えるかと言われれば、そうではない、言霊を使うと
いうことは、この世界の魔力の循環に直接干渉するということ・・・
言霊によって引き起こされる「奇跡」は未知なものが多く、使える
のは、神に愛された者のもが使うことができる・・・などと授業では

大げさに言っていたのをレオンは思い出した。

「ほオ・・・言霊ねエ〜お前相当な使い手だな・・・たいしたもんだ」
ジョンが賞賛。

「そうやって余裕ぶっつていられるのも、これで終わりかもね」
サクラが自分の体に莫大な魔力を注ぎ込み・・・

「魔力加速・・・雷・・・神速!!」
サクラの姿が掻き消える。

「何？」

ジョンですら完全に見失う。

ヒュンツ・・・

ジョンの周りにサクラの陽炎のようなものが出現、あまりの速度に光がついていけてない。

「へエ・・・やるねエ〜」

ジョンが呟いた途端、ジョンの体がくの字に折れ曲がる。

「が・・・ア・・・」

ドン・・・

ジョンが吹き飛ぶ。

更にはジョンの体が、吹き飛ばされている途中で、空中に思い切り打ち上げられる。

どうやらサクラが、吹き飛ばされているジョンの体を空中へ向けて蹴り上げたようだ。

レオン達には全く見えないわけだが・・・

「これで終わり」

サクラが呟き。

神速速度のまま、ジヨンの体の上から踵を腹に思い切り振り落とす。

ズグン！

ジヨンの体は凄まじい衝撃とともに、落下した。

ドオン・・・

・・・

沈黙が辺りを覆う。

そしてサクラも地面に降り立つ。

「やりましたか？」

レオンが聞き返す。

「・・・どうだろう・・・感触はあったんだけど・・・」

サクラにも分からないようだ。

「レオン君、サクラさん！！」

穴を見つめていたアリスが叫ぶ。

！？

「まったくダメダメエ〜そんなんじゃないア・・・お前らなめてんのか？」

ジヨンが又もや立ち上がる。

「そんな・・・ありえない」

サクラが呆然と立ち尽くす。

「どうして・・・」

レオンも呟く。

「だからア・俺にはコイツがあんだよ・このアーティファクトの能力は絶対防御・どれだけ強力でも、このアーティファクトの限度を超えるほどの威力じゃねエと、俺はビクともしないぜ？」
まあ、もつともと付け加える。

「この「オシリスの涙」は、神話によると、ある街を滅ぼそうとした、古代竜・ニールラグスのドラゴン・ブレスをも防いだと伝説にあるほどだ、人間の力じゃあ破壊することなんて無理なんだよ」

ジョンが笑う。

ドラゴンのブレスすら防いだアーティファクト？

そんなものが・・・

レオンは絶句する。

「そして・・・お前らは甘い・・・これだから大切な仲間を失う羽目になる」

ジョンが告げた瞬間。

バン！

なんと、アリスの背後の地面から、鎖が一本飛び出してきたのだ。

！？

レオンとサクラが叫ぶ。

『避ける』

しかし。

ズン・・・・・・・・

「え・・・・・・・・あ・・・」

アリスは自分の胸を見つめる。

「・・・・・・・・」

レオンは呆然と事態を見守ることしか出来ない。
サクラもその場を動けない。

アリスの胸を、鎖が貫いたのだ。

アリスは自分の胸を見つめると・・・

「レ・・・オン・・・君・・・」

ドサ・・・・・・・・

アリスが倒れた。

そのことを認識するのに、時間がかかった。

「アリス!!」

レオンは叫ぶと、アリスのもとへ駆け寄る。

「・・・・・・・・」

サクラは無言で二人を見つめ、ジョンに向かって殺気を放つ。

「おう、すげえ殺気だ・・・やれば出来るんだな・・・ガキ」

ジョンが笑う。

そして。

「アリス!、アリス!!目を覚ませアリス!!」

レオンは叫ぶ。

・・・・・・・・

アリスは、どこかを漂っていた。

ここは……どこ……？

私は……どうしたの……？

……

そうか……私……鎖に……

それにしてもここは……何処なの？

アリスは体に力が入らないのが分かると、力を抜いた。

不思議な場所……なんだか懐かしい……私は……ここが何処か知ってるの？

辺りには柱がいくつも立ち並び、ずっと長い長い道が、アリスの前に続いている。

空は闇に閉ざされ、黒い霧の様な物が、覆っている。

と、そこで声を聞いた。

《フフフ……私の声が聞こえるのね？》

辺りに響くというより、アリスの中に直接響いてくる。

誰……？

あの、白い世界で会った、白と黒の翼を持つ人とは違う声だ……

《一つ言うけど……私はミータールフィリスとは違うわ》

女性の声が告げる。

ミータールフィリス？

誰……？

《私は・・・あなたの中にあるもう一つの魂・・・そして、世界の光となる存在・・・お帰りなさい、私は・・・あなたをずっと待っていた》
待つ？
私を？

「ここは・・・どこ・・・？」
アリスはようやく声に出して、言葉を発した。

《ここ？・・・ここは《魔境の庭園》・・・愚かなる《神》が眠る場所、
星鏡世界と対になるように作られた世界・・・そして・・・私とあなた
の世界》
女性の声が頭に響く。

魔境の庭園・・・始めて聞くのに懐かしい言葉・・・
アリスは思った。

《ようやくあなたも目覚めるの・・・太古の古代書があなたに力を貸
してくれる・・・あなたが目覚めて初めて・・・あなたの神具へと到る
道が開かれる・・・進んで、そして私を解放して・・・終わりの力を宿
した少年と、始まりの力を宿したあなた・・・これは仕組まれた道筋・
けれど、あなたが真に望むものがあるならば・・・進んで？》
女性の声が暖かな声音に変わる。

「・・・あなたは誰？」
アリスはそれだけを尋ねた。

《私は・・・アリス・・・アリス・イル・エキテス・・・進んで、あなた
達の未来へ・・・そして《漆黒の光》の邪悪な光に飲み込まれないで・
・・・》

女性の声の主が姿を現した。

！！

アリスは絶句。

姿を現したのは、自分と瓜二つの女性。

白銀の髪に、水色の瞳・・・しかし、アリスより何倍も大人びている。

「あなたは・・・」

アリスは言葉を失う。

《私の不出来な「弟」を・・・導いてあげて・・・そしてあなたが私に
たどり着いた時・・・あなたは・・・》

・・・

アリスと名乗った女性が手をかざす。

そこから放たれたのは白い光、圧倒的な光に吞まれ、アリスは目を
閉じる。

《あなたに・・・《聖なる天の光の鍵》を与えます・・・》

その声が、その女性の言葉の最後だった。

アリス・・・アリス！！

声が聞こえる・・・レオン君の声・・・レオン君・・・

「レオン君っ！！！！」

アリスは叫ぶ。

・・・

レオンはアリスの名前を呼び続けた。

サクラはジョンと戦闘を繰り返している。

と、その時。

「レオン君・・・？」

アリスが目を開ける。

「え・・・？」

レオンは呆然と呟く。

「何？」

「嘘・・・アリスちゃん？」

ジョンとサクラも戦闘を止め、こちらを見つめる。

「アリス・・・アリス！目が覚めたんだな！？」

レオンがアリスに抱きつく。

「レオン君・・・」

アリスが微笑み、レオンの頭を撫でる。

「ハハハハハハ！・・・なんだアこりゃあ！？・・・お前らとんだけ俺を楽しませれば気が済むんだ！？」

ジョンが笑い続ける。

「レオン君・・・私・・・」

アリスが何かを告げようとした時。

キイイイイイン・・・
アリスの懐に入っていた、〔境界文書〕が輝いている。
アリスは取り出す。

「何これ？」

アリスは境界文書・ロンギヌス・クラウンの放つ魔力に驚く。

カチツ・・・

何かの鍵が外れたような音が響く。

バラバラバラ・・・

本が勝手に浮き上がり、ページを1ページだけ捲った。

そして、アリスの頭に声が響く。

《汝・・・光の力を纏いし者・・・光の巫女なり・・・古の契約に従い、
汝の力の本質の・・・その一端を示さん》

その瞬間、アリスの頭の中に、ある情報が流れ込む。

「アリスちゃん、レオン君！！」

サクラが叫ぶ。

「甦ったならもう一度、あの世送りにしてやるよオ！！」

ジョンが鎖に莫大な魔力を宿らせ、放つ。

何十もの・・・いいや、下手をすれば百を超えるほどの鎖が二人に迫る。

「まずい！！」

レオンは叫ぶ。

「・・・」

アリスは片手を前にかざす。

ガン!!!

「何!?!」

ジョンが絶句。

なんと、アリスの前に、巨大な光の壁が顕現、鎖の全てを弾いた。

「アリス!?!」

レオンは驚く。

アリスの放つ魔力が、今までとは明らかに変化した・・・この感覚は・・・アリシアさんの時と・・・

《汝は光の巫女・・・世界に光をもたらす・・・《光聖の宝具使い》なり・・・力の解放を・・・》

「・・・」

アリスは立ち上がる。

「!!!・・・ダメだ!・・・まだ傷が・・・ふさがってる!?!」

レオンはアリスの胸を見て絶句、さっきまであった傷が無い・・・これと似た現象を、レオンは知っている、そう・・・セルヴィアと共に、デュランダルと戦っていたときと・・・同じ・・・

「サクラさん・・・今から私が、その人の動きを止めます、その隙に全力で行ってください」

アリスが呟く。

「!?!」

「はア?・・・何言ってるんだ?・・・俺には『オシリスの涙』あんだぜ?」

二人もぼかんと呆ける。

レオンもそれだけはきついだらうと思った。

あのアーティファクトは、竜の一撃を防いだ物・・・そう簡単には・・・
アリスは力を集中させる。

《汝の力の本質は、創造なり、大いなる幻想を生み出し・・・世界に
反映させる事・・・無を有へと変えるもの》

そう・・・力だ・・・あのアーティファクトを打ち破る・・・圧倒的な質
量・・・圧倒的な魔力・・・圧倒的な速度・・・
アリスが心の中で、奇跡を描く。

「発動・光煌魔法・高位詠唱・光天創造ハイマジン・オブ・エデン」
アリスが呟くと同時に、光で出来た巨大な弓が顕現。

アリスはその弓に手をかけ、そして引く。

「打ち抜く者・・・聖なる光の聖王より来たれ・・・天穿つ聖弓ヘレイ・
ボルグー！」

弓の得意な形、さながら骨董品のような美しい形の光の矢が顕現、
それを放つ。

キュイイイイイイイイイン・・・・・・・・！！！！

矢がジョンに向かう。

「なんだアレは!？」

ジョンが鎖を全力で放つ。

そうしなければ命を落とすと、本能が告げた。

光の矢は、鎖をあっさり消し去り、衝突。

ドゴオオオオン！！
激突と同時に紅い障壁が展開するが・・・
ピシ・・・
輝がはいる。

「バカな！？・・・ドラゴン・ブレスをも防いだ聖域の結界だぞ！？
・それがあんな弓如きにつ・・・！！」
ジョンが叫ぶ。

バキン・・・
澄んだ音と共に、障壁が突破され、ジョンの左肩を打ち抜いただけ
だったのだが、左肩ごと、胸近くまでをこっそりと抉り取った。

「がああああああ！！」
ジョンが絶句。

「今です！！・・サクラさん！！」
アリスが合図を送る。

余りの出来事に驚いていたが、サクラが頷く。

「我が元に顕現せよ、神速で天壤を駆け抜け抜けし者よ、雷の神罰を虚
るなる者へと下せ・・・一撃神刹の神刀・・・天剛雷剣へアマノハハキ
リノツルギ！！」

サクラが叫ぶと同時に、サクラの手に、サクラの身の丈ほどもある
太刀が顕現、研ぎ澄まされた刃に雷を帯びている。

あれがサクラさんの宝具！！
レオンは瞠目した。

余りの魔力に、空の雲から雷鳴が響く、共鳴しているのだろうか。
魔力の大きさは、アリウスやアリシアの宝具に匹敵するだろう。

「はあ!!」

サクラの姿が掻き消え、一気にジョンのもとへと迫る。

「くそがあああああ!!・・・舐めてんじゃねえぞオオ!!・・・
我が元に顕現・・・」

ジョンが宝具顕現を唱えるが。

「遅い!!」

サクラが思い切り踏み込み、横に切る。

風すら起こさない、空間を切断するような静謐の剣閃。

何者にも防ぐことが出来ない刃が、ジョンに迫り・・・

ジョンとサクラの間に何者かが入り込んだ。

ギン!!

「!?!」

サクラが顔を引きつらせる。

なんと、ジョンの前に入り込んだ何者かが、サクラの太刀を手の甲で止めていた。

!?

レオンとアリスも絶句。

あの一撃を素手で止めれる人間が、この世界にいたのだろうか。

「ふむ・・・いい斬撃だ、この私の体に傷を付けるとは・・・恐ろしい
ね」

男の手から、血が滲む。

男が手を動かす。

バンー!!

サクラの宝具が体ごと吹っ飛ばされる。

「きゃあ!」

「あなたは……《ノア様》……何故……ここに……?」
あのジョンが顔を引きつらせる。

「何……君が随分勝手なことをしていると、報告を受けてね」
ノアと呼ばれた男が微笑む。

「それで観察していたのだけど……いや、かなり楽しませてもらった、礼を言おうか、それに、ハ境界文書ヱも覚醒を果たしたみたいだしね」

ノアが微笑む。

「それにしても、宝具を使っていないとはいえ、ジョンをここまで追い込むとは……驚いたよ……では、これで失礼するよ……ああ、これは君達にあげよう、ささやかな贈り物だ」

ジョンの首から、オシリスの涙をはずすと、ピッと、レオンに向かって投げる。

レオンが受け取ったときには、ジョンとノアの二人は姿を消していた。

-----次回予告-----

聖七騎士団の襲来をなんとか退けたレオン達、アーティファクト・アロンダイトの真の能力も判明し、治療を終え学院に戻るレオン達、

しかし・・・学院についた途端、レオン達は絶句する。

なんと、「王道賢者」と呼ばれる最高の権力とそれぞれペンタゴンの絶大な力をもつ存在が、セルヴィアを反逆者とし、処刑すると告げる。

レオン達が取る行動とは！？

次回、王道賢者、お楽しみに。

王道賢者・序章

場所はルシアーデ王国、王城にて。

「くそ……」

真つ暗な部屋で、ジョンは呻いた。

その部屋はとても広いにも関わらず、ジョン以外誰もいない。

ガチャ……

誰かが扉を開け、部屋に入ってくる。

「あら、随分みすばらしい姿ね……ジョン」

女性が笑いながら呟く。

「エヴェリウスか……」

ジョンが憎らしげに告げる。

部屋に入ってきたのは、薄い金色の髪をした女性だった。

「結構苦しそうじゃない、あなたがそこまでやられるとは思わなかったわ……それだけあの子も成長したってことね」

エヴェリウスが嬉しそうに微笑む。

「……嬉しそうだな……それにお前、あのガキ共にえらく執着してやがんなア……」

ジョンが苦笑する。

「ふふふ……それよりあなた、ハノア丫の奴に借りなんか作って……後々面倒よ？」

エヴェリウスが呟く。

「ふん……知ったことか……それよりも、俺のアーティファクトを

あいつらに渡しやがるとは・・・ノア様も何を考えてやがんのか、わからねエな・・・」

「分からなくても良いんじゃない？・・・あの方が考えているのは・・・」
「エヴェリウスが言葉を濁す。」

「・・・《今の世界》のことじゃアないって言いてエんだろ・・・あの方が望むのは・・・お前と同じ・・・」

「ええ、その通りよ・・・この星鏡世界が生まれ変わって・・・新たな世界が誕生する・・・それが私の「願い」・・・まあでも今は、あなたの傷を治すほうが先ね」
エヴェリウスが微笑む。

「新たな世界か・・・下らないなア、俺は世界なんざアどうでもいいんだ・・・俺はただ戦うだけだ」
にしても、と呟く。

「まさかオシリスの涙が破られるとはなア・・・ドラゴン・ブレスを防いだって言いやがるから・・・凄え力だと思つてたんだが・・・」
シヨンが顔をしかめる。

「あらあら、あなたが負けたのはオシリスの涙の所為ではないわ？・・・相手が悪すぎたのよ」
エヴェリウスが片目を瞑る。
「あ？・・・どういうことだ・・・？」

「確かにオシリスの力は絶大よ、神の力に匹敵するほどだしね・・・でも、あの子が放ったあの矢は・・・無理よ・・・力が大きすぎる」
所詮、神の如き力では・・・聖王の攻撃は防げない・・・と小さく呟い

た。

「ぐは……」

ジョンが吐血。

「あら、大丈夫かしら？……仕方ないわね……コレを使うわね……アリス「煌く王の天の鍵」の《願い》より抜粋、《アルトレア界法》・《青・オーシャン》」

エヴェリウスが《ある言葉》を呟く。

エヴェリウスの体が青く輝き始める。

そして、ジョンの肩と胸近くまで抉られていた傷が、一瞬で消える。

……

ジョンが肩を回し、動きを確かめる。

「ヘエ……コイツが……《新世界の力の欠片》ってやつか……恐ろしいまでの力だ」

ジョンがエヴェリウスを興味深そうに見る。

「あなたを治療するようにジャックから言われたのよ」
エヴェリウスが肩をすくめる。

「……ジャック……か、アイツは一体何なんだろうな……俺達ですらアイツの事は知らない……知っているのはノア様と、アーフェリオン王だけ……まア……どうでもいいかア、一応礼は言っとくぜエ」

ジョンはそう呟くと、部屋を出て行った。

部屋にはエヴェリウスだけが残る。

「ジャック……あなたは どうして「あの少年」に賭けるの？……あの子では……世界を改変するには、力が足りないのに……」

エヴェリウスはそう呟いた。

一方、デングバルトでは。

レオン達が襲撃を受けたことを全員に報告し、何故アリシア達がきずかなかったのだろうと、疑問が浮かんだが、結界のようなものが張られていることが、ヴィクトリアの調べで判明した。

「しかし・・・あなたが襲撃を受けるとはね・・・迂闊だったわ、ごめんなさい・・・全員で守護したほうが良かったわね」
アリシアが頭を下げる。

「ううん・・・居なくて助かったよ・・・」
サクラが告げる。

「何故？」
アリシアが首を傾げる。

「アレだけの強さの敵を・・・大人数で相手をしてたら、負けてたかもだし・・・」
サクラが唇を噛む。

「あなたがそこまで言うとはね・・・そこまで強いよね、聖七騎士団っていうのは・・・」
アリシアがため息。

と、そこで。

「今、兄上と連絡をとった所、ルシアーデ王国側からの連絡はないそうだ・・・」

ヴィクトリアが部屋に入ってきた、どうやらアリウスさんと連絡をとっていたらしい。

！！

これには全員驚いた、自国が持つ部隊が、相手国を襲撃したのにも関わらず、音沙汰なしとは・・・まるで、戦争を起こしたがっているように・・・

そこからは、サクラが今回の戦闘のことについて、話し合いを行っていた。

アリスの力が発動し、今回の勝利の鍵となったとは、サクラは言わなかった。

どうやら、秘密にしてくれるらしい・・・学院生徒が信頼を寄せるのも、少し分かる気がするレオンだった。

そして。

デングバルトの工房。

「やあ、大変だったみたいだね・・・大丈夫だったかい？」
中に入ると、エデルが腕を組んで待っていた。

「ええ・・・なんとか・・・」

「はい・・・」

レオンとアリスが応える。

「そうか・・・良かった、これでアロングイトの力が明かせる」
エデルが微笑む。

！！

全員に軽い緊張が走る。

「これはね、大地を支配する魔剣だったよっだよ？・・・大地の力を自在に行使できる力・・・」
エデルがアロンダイトを持つ、どうやら普通に持つことが出来るようになったらしい。

「大地を支配する力・・・？」
レオンが首を傾げる。

「そう・・・例えば・・・の前にアーティファクトについて・・・教えておかないといけない事がある・・・それは、アーティファクトに適合者と呼ばれる存在が必要ということだ」
エデルが告げる。

適合者？
全員が首を傾げる。

「適合者とは、アーティファクトによって選ばれた使い手たちだ・・・この剣の適合者は、当の昔に無くなっているから使えない・・・などということではなくてね、適合者は別に一人だけという制約はないらしくてね、何時適合者が現れてもおかしくない」
エデルが真剣に告げる。

「つまり・・・ミスティルティンに選ばれたレオン君、境界文書に選ばれたアリスちゃん・・・過去で言うなら、デュランダルに選ばれたグラン・ジルグのような存在ね」
アリシアが呟く。

「そう、そしてこのアロンダイトはね、大地を支配・・・例えば、大地をかなりの広範囲で変動させたり・・・大地に流れる気を使って、凄まじい斬撃を飛ばすこともできる」

「さらにこのアーティファクト達には、存在意義があるんだ」
エデルが呟く。

存在意義？

全員が呆然となった、強大な力を持つ古代の遺物だけとしか思っていなかったアーティファクトに存在意義があったとは誰も予想していなかっただろう。

「このアーティファクト達はね・・・来たるべき聖戦」を戦い抜く為の存在らしいんだ」

エデルが言う。

「来たるべき聖戦と言うのは？」
アリシアが尋ねる。

「分からない・・・でもその聖戦は直に来ると思うんだ・・・どんな戦いを示すのかはわからない・・・けれど、アーティファクトの適合者たちがこれだけ一斉に現れた・・・これが示すのは・・・」

「その役目が近ずいてきているから・・・」
アリスが呟く。

・・・
全員が沈黙した。

そしてアロндаイトを回収したレオン達は、エデルに礼を告げると、学院に戻る為の準備を始めた。

「ありがとうございます」
レオンが頭を下げる。

「いやいや、こちらこそ楽しかったよ．．．またいつでも来てくれて構わないから」

エデルが笑顔で手を振る。

レオン達は門をでて、学院へと向かうのであった。

．．．．．

動き始める時の針．．凍りついていた時間が動きだす．．世界に生
きる全てのものは、己の大切なものを守る為、武器をとる．．

そして．．全ては．．絶対運命の道筋通りに．．世界が動き出す．
．．

「．．．．なんだ．．．これは．．．」
レオンが思わず呟く。

「嘘．．．でしょ．．．？」
アリシアが膝をつく。

レオン達はデングバルトを出て、移動魔法陣を使い、学院近辺に到着した。

しかし、学院の方面が騒がしいことにきずいたアリシアは、すぐさま学院へと走った。

そして……
レオン達が見たのは……

崩落する校舎……泣き叫ぶ生徒……そして

ボロボロに引き裂かれ、血溜まりの中に倒れたセルヴィアの姿だった。

そこに……

「我ら……大いなる『王道賢者』なり……理事長・セルヴィア・オルセイドを反逆者として処刑することを決定した」

5人の男達が現れた。

-----次回予告-----

騒然となる学院、そして瀕死のセルヴィア……それを見たレオン達がとる行動とは!?

「我が元に顕現せよ……」
アリシアは呟く。

「てめえら!!!!」
レオンは叫ぶ。

「許さない・・・」
アリスは呟く。

しかし、レオン達5人の前に立ちふさがる者が・・・

「アリ・・・ウス・・・さん・・・!?!」
レオンは呆然となる。

そして、お互いの信念を賭けてぶつかり合う者達・・・戦いの行方は・・・
セルヴィアの運命は!?!

次回、王道賢者・本章、お楽しみに。

王道賢者・本章

ルシアード王国にて。

「どういうことだ・・・ノア？」

王の御前にて、二人のナイトは言い争っていた。

「どうもこうもないよ・・・僕はただ世界の事だけを考えて行動しているのだよ?・・・エクセリーゼ君」

ノアが微笑む。

「世界だと・・・?・・・その世界とやらの為に、貴様は王道賢者などという劣等な組織をたぶらかしたのか?・・・本来我等は・・・」

「エクセリーゼは言葉を濁す。
「分かつている、この聖七騎士団は世界を導く為の組織・・・けれどね、多少面白みに欠けているのだよ」
ノアがほくそ笑む。

「!」

エクセリーゼは剣をいつの間にか抜き放ち、ノアの首にピタリと添えた。

「いつ抜いたのか、いつ首に剣を添えたのか・・・そんな些細な疑問は、エクセリーゼにとっては無意味だった。
まさに神速とも言える速度だった。

「ほう・・・早いね・・・しかし私としてはこのようなことで争いたくはないのだが・・・」
ノアが呟く。

「まだそのようなことを言うか・・・貴様は!」

ギン！！

エクセリーゼの剣の刀身が紅く輝く。
凄まじい魔力が辺りを満たす。

「コレが君の力かい？」

ノアが剣を見つめ、目を細める。

「そうだ・・・」

エクセリーゼが呟く。

「・・・この世の万物と霊的存在の全てを切り裂く、精霊殺しの魔剣・バルムンク・私の持つ、英雄の宝剣へゴッド・ブレイブでも・防ぎきることはできないか・・・それに君はまだ本気を出すどころか、半分も出していない・・・と」

ノアが苦笑。

「・・・」

首を切り落とすぞ、と脅すように剣を動かすエクセリーゼ。

「・・・厄介だね・・・この剣を持つてすれば、たとえ絶対の神域を守護する結界でも切り裂かれそうだ・・・でも残念、君と遊んでいる暇はないんだ、君がそれほどの剣を使うなら・・・こちらもそれに恥じぬ名剣で相手をしよう・・・来い、天地切断の宝剣へカリバーン」
ノアが言霊を呟く、するとその手に黄金の光によって包まれた白い剣が顕現した。

「な・・・」

その剣を見たエクセリーゼが絶句。

どういう事だ・・・あれはカリバーン・・・何故奴があんなものを・・・いや、それより・・・あの剣が相手では遊んでいられない・・・

エクセリーゼが剣を構えなおしたところで・・・

「私の玉座の前で、何をしている？」
部屋にアーフェリオンが入ってきた。

！！

二人は即刻剣を下げ、振り返る。

「アーフェリオン王・・・」

エクセリーゼが呟く。

「ノア・・・君の魔力を珍しく感じたから、来て見れば・・・争い事か？」

アーフェリオンがため息。

「いえ、少し話し合いの延長線上で言い争っただけです」
ノアが微笑む。

568

「そうか・・・では・・・エクセリーゼに少し頼みたいことがある・・・
今から行って貰いたいところが・・・あるのだが」

アーフェリオンがエクセリーゼを見る。

「は」

エクセリーゼが跪く。

「今からミルフェリーナ王国に行き、王道賢者の方々を抹殺してくれ」

アーフェリオンが微笑む。

！？

エクセリーゼが顔を上げ、ノアが軽く目を見開く。

「お前の実力なら一瞬で決着する」

「はっ！」

エクセリーゼが頷いた瞬間、そのからだが消えうせる。二人の視認すら許さないほどの速度で、移動したのだ。

「何故、あのような命令を？」

ノアが尋ねる。

「ふふ・・・余興だな、昨日・・・多少面倒なことが起きてな・・・その日までは王道賢者の方々を利用しようと思っていたのだが・・・」
アーフェリオンが目を細める。

「面倒・・・？」

「ああ・・・」

アーフェリオンが苦笑。

ノアが目を見開き・・・

「そうですか・・・では、王道賢者などという弱者共に頼る必要がなくなつたわけですね・・・成る程・・・では私もそろそろ・・・」
ノアがしつとりと微笑んだ。

ノアが出て行つたあと、アーフェリオンは部屋を移動し、
「ある部屋」へとやってきた。

「願わくば・・・大いなる運命の名の下に・・・皆が一つになり・・・新たななる世界への架け橋に・・・ならんことを・・・」

アーフェリオンが見つめる先には、何千もの剣が刺さって封印された巨大な白き門だった。

「
「光の再生者」と闇より選定されし者々が魔鏡の庭園へとたどり着き・・・
「光の再生者」の所持する《聖なる天の光の鍵》と彼女が所持する《煌く王の天の鍵》の二つが揃ったとき・・・この門

の真の力が目覚める・・・レオン・イル・エキテス・・・お前は、どのような選択を・・・するのだ・・・」
アーフェリオンは悲しそうに呟いた。

・・・

場所は変わり、ルベリージア学院。

「なんだよ・・・これ・・・」

レオンが呟く。

「セルヴィア！！」

アリシアが叫び、セルヴィアに向かって走る。

アリス、ヴィクトリア、ルーク、サクラの4人は呆然とただ事態を見守っていたが。

「皆・・・気をつけて・・・何かが来るよ・・・」

サクラの一言で全員が我に帰った。

空中に突如として、魔法陣が展開。

これは・・・移動型魔法陣・・・！！

そしてそこに降り立ったのは・・・

「その者から離れよ・・・アリシア・エーテラーゼ」

5人の男達が現れ、その内の一人がそう告げた。

アリシアは顔を上げ、絶句した。

「あなたがたは・・・どうして・・・？」

アリシアが声を上ずらせる。

「誰なんだ……あいつらは……」
ルークが呟く。

「あの方々はね……王道賢者だよ」
サクラが呟く。

王道賢者？
全員が首を傾げる。

「理事会よりもさらに上……トップの権力を持ち……その全員がかなりの使い手だって聞いたことがある……」
サクラが警戒を強める。

「その者は、我らに反逆したのだ……」
男が告げる。

「反逆！？……そんな……ありえませんか！」
アリシアが叫ぶ。

「私情を挟むな、生徒会長……お前もそれ以上抵抗すれば……反逆者とみなす」

！！
これにはレオン達も絶句。

「てめえら……」
レオンは怒りを押しつぶした声で呟く。

「……」
サクラも同じようだ。

「……私は……」

アリシアが顔を下げたまま、上げようとしなない。

「貴様ら、一体その者が何をしたというのだ？」

なんとその場で、ヴィクトリアが立ち上がり、声を張り上げた。

「……何者だ？」

男のうちの一人が告げる。

「我が名はミルフエリーナ王国、第二王女・ヴィクトリア……その者が何をしたか申してみよ……いかにトップの権力を持つとはいえ……私の命令には抗えまい」

ヴィクトリアが言い放った。

「……」

今度は男達が黙る。

「どうした？……早く申してみよ」

ヴィクトリアが怒りを滲ませ告げる。

と……その時。

「待つんだ……ヴィクトリア」

辺りに一人の男の音が響く。

！？

この声は……

そこに現れたのは、移動型魔法陣を越えてきた……

「兄……上……!?!?」

ヴィクトリアが絶句。

「アリウスさん！？・・・なんで・・・」
レオンが叫ぶ。

「すまないね、レオン君・・・でも、王道賢者の言うことは正しい、
投降するんだ」

アリウスが告げる。

「・・・なんで・・・」

レオンが呆然となる。

「アリシア・・・君もだ」

アリウスがアリシアに声をかける。

「アリウス王・・・どうして・・・あなたが・・・」

アリシアが呆然となったが・・・

「？」

すぐに眉をひそめた。

「どうかしたか？」

アリウスが告げる。

「・・・断ります」

アリシアが顔を上げ、告げる。

「アリシアさん・・・！」

レオンが呟いた。

「王の命令に逆らうのか？」

アリウスが顔を歪ませる。

そして。

「発動・風魔法・中位詠唱・ハウインド・ウォール」
アリシアが小さく呟いた瞬間、風が渦を巻き、竜巻を起こす。
全員が目を瞑る。

そして目を開けたときには、アリシアとセルヴィアの姿が消えていた。

「逃げたか・・・」

アリウスが呟く。

「・・・」

そうだ・・・俺は何をしてる・・・アリシアさんの出した答えこそが、正しい答えなんじゃないのか・・・セルヴィアさんが反逆者なわけがないんだ・・・!!

レオンは両手に魔力を集中。

キイーン・・・

漆黒の剣が顕現。

思い切り踏み込んだ。

ガァン!!

アリウスは咄嗟に炎の剣を作り、受け止めた。

「レオン君・・・君まで!!」

「すみません・・・アリウスさん・・・俺はアリシアさんは間違っていないと思います、例えセルヴィアさんが反逆者だとしても、決断が早すぎる・・・」

レオンが告げる。

「反逆者に早いも遅いも・・・」
アリウスが告げようとしたところで。

「発動・水魔法・・・」

ヴィクトリアが詠唱を開始した。

「ヴァクトリア!?」

アリウスが驚き、叫ぶ。

「すまぬ、兄上・・・私はレオンの方が正しいと思う・・・だからこそ、私はレオンに味方する!・・・今の兄上はおかしい!!」
ヴィクトリアが魔力を放つ。

そのころ、アリシアは・・・惑わしの森の中に居た。

「アリ・・・シア・・・何をしているの・・・早く逃げなさい・・・」

セルヴィアが息も絶え絶えに呟く。

「だまりなさい・・・あなた、一体何をしたの・・・」
アリシアがピシヤリと告げる。

「・・・実は・・・」

セルヴィアが語る。

・・・

「なんですって・・・あの方々が・・・ルシアーデ王国と・・・?」
「ええ・・・そうよ、だから調査をする為に・・・あなた達を、口実をつけてデングバルトに送ったの・・・巻き込まないようにね」

セルヴィアが苦笑。

成る程・・・そういうこと・・・あの時感じた違和感はコレ・・・
「でも、危ないかも・・・しれない、私達無しで・・・あのアリウス王に勝てるとても？」
セルヴィアが告げる。

「大丈夫よ、だって・・・アレは本物のアリウス王じゃあないもの」
アリシアが微笑む。

「!？」

セルヴィアが目を見開く。

「大丈夫・・・あの子たちは、もう・・・私達が不要なくらい強いから・・・さあ、今から治療を開始するわ」
アリシアは空を見上げた。

—————次回予告—————

遂に始まる、王道賢者との戦い。

アリス・サクラ・ルークの三人は王道賢者を、レオンとヴィクトリアはアリウスとの戦いを迫られる。

そして、最も凄まじかったのは、レオン・ヴィクトリアとアリウスの戦いだった。

そして、アリウスとの戦いで、レオンは自分の力の本当の「意味」を理解する。

「なんだ・・・これは!?!」

アリウスは絶句する。

「d i f i f k f k v j d j f k c ! ! !」

レオンが叫ぶ。

次回、王道賢者、終章、お楽しみに。

王道賢者・終章

「発動・水魔法・中位詠唱・アクア・ガーデン!!」
ヴィクトリアが叫ぶと同時に水流が顕現し、それがアリウスに襲い掛かる。

「ヴィクトリア・・・仕方ない・・・発動・炎魔法・中位詠唱・フレ
イム・ネクスター」

アリウスが炎剣を顕現させ、それを切り裂く。

ザン!!

炎と水がぶつかり合い、大量の水蒸気を発生させた。

「ヴィクトリア・・・アリウスさん・・・」
どうして・・・兄妹同士で争うなんて・・・
レオンは呻いた。

一方、王道賢者と相對しているアリス達は。
「汝等は反逆者として、厳正に処理する」
王道賢者の一人が告げる。

「さあ、来るよ!!」
サクラが叫ぶ。

アリスとルークが戦闘体制に入る。

「こい、愚かなる反逆者ども」

ガアン！！

アリウスとヴィクトリアはお互いに魔力をぶつけ合う。

「くそっ！！」

レオンは手に魔力を集中。

漆黒の剣が顕現。

「おおおお！！」

レオンはアリウスに思い切り切りかかる。

「！？？」

アリウスはレオンの突進にきずくなり、ヴィクトリアを弾き、炎剣をスライドさせてレオンを受け止める。

「ちっ……」

アリウスが呻く。

???

レオンは眉を潜めた。

「わが元に顕現せよ、水の加護を受けし聖槍よ。流れ、瞬き、沸きあがれ！ロンギエールの槍！！」

ヴィクトリアが宝具を顕現させる。

そして思い切り跳躍し、槍を振り下ろす。

ガアン！！

「ぐ……」

アリウスは受けとめる。

「どうした兄上！兄上の力はそんなものではないだろう！！」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「・・・あまり調子に・・・乗るな！！」
アリウスが叫び、二人を吹き飛ばすが、レオンは耐えた。
そのままアリウスに攻撃する。

「うおおおお！！」
レオンは思い切り踏み込み、横に薙ぐ。
風を切り裂きながら、漆黒の剣がアリウスに迫る。

ガァン！！
アリウスとレオンが鏝迫り合いを始める。
「アリウスさん・・・なんで！」
レオンが叫ぶ。

「反逆者を裁くのに、理由はいらない」
アリウスがほくそ笑む。
そこでレオンはきずいた。

「お前・・・何者だ・・・？・・・アリウスさんはそんな風に笑わない！」
レオンは叫ぶ。

その時。
「きゃあああ！」
ヴィクトリアの悲鳴が響く。

！？
「ヴィクトリアっ！！」

レオンがヴィクトリアの方を見ると、もう一人のアリウスが現れ、ヴィクトリアに炎剣を振り上げていた。

な・・・アリウスさんが・・・二人・・・!?

「くそおお!!」

レオンは魔力を放ち、アリウスを吹き飛ばす。

「ぐあ!」

アリウスは軽々と吹き飛ばす。

やっぱり、こいつ・・・本物のアリウスさんじゃない・・・俺の知っているアリウスさんなら、あの程度じゃ吹き飛びはしない。

レオンはヴィクトリアの方へと跳躍し、思い切り剣を振り下ろす。

「!!」

もう一人のアリウスは、レオンにきずくと身を翻し、かわした。

「大丈夫か!?!・・ヴィクトリア!!」

レオンはヴィクトリアに語りかける。

「ああ・・・大丈夫だ・・・」

ヴィクトリアは立ち上がる。

どうやら、アリウスが二人現れ、驚いたところを攻撃されたようだ。

「貴様ら・・・何者だ・・・?・・・兄上の偽者を語るなど・・・言語道断!・・・私が殲滅してくれる!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「ククク・・・どうやら・・・」

「きずかれたようだ」

二人のアリウスが告げる。

「お前ら・・・一体何者だ・・・」
レオンが呻く。

「俺達は俺達だ。・・・それ以外の何者でもない」
偽のアリウスは告げる。

「・・・レオン・・・ここは・・・」
ヴィクトリアが何かを告げようとする。

「ああ・・・二手に分かれて倒そう」
二人は頷く。

「発動・黒滅魔法・シャドウ・オブ・ブレイド!!」
レオンは叫び、漆黒の剣を二振り顕現させる。
レオンは思い切り踏み込み、偽アリウスに向かって上から下へと振り下ろした。

ガァン!!
アリウスは受け止める。
「ぐ・・・」
だが、レオンの方が力は上のようだ。

そして。
「うおおおお!!」
レオンはそのまま押し込み、偽アリウスの炎剣を折った。
バキン!!

そのまま体を切り裂いた。
「ぐあ!!」

偽アリウスは呻くと、倒れた。

「発動・炎魔法・中位・・・」

偽アリウスが詠唱を始めた矢先。

「遅い！！」

ヴィクトリアが凄まじい速度で槍を突き出し、偽アリウスの腹部を思い切り、貫通させる。

「ぐ・・・あ・・・」

偽アリウスが吐血し、崩れ落ちた。

「ふう・・・」

ヴィクトリアが息をついた瞬間。

「甘いな、俺達の人数制限は存在しない」

レオンの背後からアリウスの声が響く。

！？

レオンとヴィクトリアが瞠目。

なんと、二人の後ろに、20人近くのアリウスの姿があった。

「なんだと・・・？」

ヴィクトリアが絶句。

「まさか・・・ここまで」

レオンも同じく絶句。

まずい・・・ここまでの数となると・・・

その時。

『発動・炎魔法・中位詠唱・フレイム・ローリング』

偽アリウス全員が全く同じタイミングで、詠唱を完了した。

「まずい！・・・この数では！！」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「くそ！」

レオンは背中から、ミスティルティンを抜き放ち、魔力を通し叫ぶ。
「この魔力を祓え、ミスティルティン！！」

レオンが叫び、剣を振る。

その瞬間、偽アリウス達の放とうとしていた偽者達の発動しようとしていた魔法の半数が消滅。

その隙間を二人は思い切り走りぬけ、そのまま走りつづけた。

そして何時のまにか、神器エグザリオと戦った草原へとたどり着いた。

「ここは・・・」

レオンは辺りを見渡す。

「ふ・・・皮肉なものだな・・・またお前とこうしてここで戦うことになるとは・・・だが、今は背中を預けることが出来る」
ヴィクトリアが頬を軽く染めて呟く。

「あ・・・ああ・・・そうだな・・・」

レオンも軽く頬を染めながら呟く。

そして。

「追いかけてここは終わりか？」

「もう、きやがったのか・・・」

レオンは呻く。

あっという間に包囲陣を布かれてしまった。

その頃、アリシア達は。

気を失ったセルヴィアを治療していた。

「はぁ・・・大丈夫かしら・・・レオン君・・・」

そしてハツと目を見開く。

「私・・・どうしてレオン君だけを・・・」

顔を真っ赤にして呟くアリシア。

と、その時。

僅かな魔力をアリシアは見逃さなかった。

「誰!？」

アリシアは叫ぶ。

・・・

やがて。

「ほう・・・魔力をこれだけ消していたのに、私にきずくとは・・・
さすがといったところか」

木の上から降りてきたのは、アーフェリオン王の騎士・・・

「久しいな・・・アリシア・エーテラーゼ生徒会長」

「あなたは・・・エクセリーゼ・・・さん」

アリシアが警戒態勢をとる。

「フフ・・・私を聖七騎士団の一員として・・・警戒しているのか」
エクセリーゼが笑う。

「っ!？」

アリシアが殺気を放つ。

「そこまで警戒されても困るんだがな……だが安心しろ、今はお前達と遊んでいる暇はない……私は……王道賢者の愚か者どもを抹殺せねばならない」

エクセリーゼが慄然と呟く。

「今……なんて……」

アリシアが呆然となるが。

「では、これで失礼する……ああ、最後に名乗っておこう……聖七騎士団所属・ナンバー3ハツヴェルフ、エクセリーゼ・ヴァリエルだ」

そう告げた途端、エクセリーゼの姿が掻き消えた。

アリシアは気配を探るが、見つけることは出来なかった。アレだけの近さに居たのに……だ。

場所は戻り、レオンとヴィクトリアの戦闘場所。

「レオン……ここも……二手に分かれよう」
ヴィクトリアが呟く。

「何言つてんだ!……この数じゃあ……」
レオンは言葉を濁す。

「だが、そうするしか方法がないのだ……」

ヴィクトリアがレオンを見上げる。

「！！」

レオンはヴィクトリアの決意を感じ取ると、頷いた。

「ありがとう」

ヴィクトリアが微笑む。

「！」

レオンはヴィクトリアの笑みに魅せられたが、すぐに平常心へと戻ると、ヴィクトリアと左右逆の方向に走り出した。

「左右に・・・ならば」

偽アリウスの一人が呟くと半分ずつになり、レオンとヴィクトリアを追い始めた。

「よし！！」

レオンはヴィクトリアの意図するところが成功し、微笑む。

レオンはそのまま走り、やがて立ち止まる。

「何処まで逃げてても無駄だ」

偽アリウスが告げる。

「そうだな・・・けど、ここでお前達を倒す！！」

レオンは漆黒の剣を顕現させる。

偽アリウスたちが突っ込んでくる。

レオンは炎剣を受け止め、弾き、切り裂き、突き、ナギ払う。そしてある事にきずいた。

『発動・炎魔法・中位詠唱・フレイム・バスター』

周りの10人近くの偽アリウスが、一斉に砲撃系の魔法を詠唱した。

「まずいつ!?!」

レオンは絶句。

たとえ一人一人の力は弱くとも、これだけの数となると……

「発動・黒滅魔法・中位詠唱・カオス・インテビティ!!」

レオンが詠唱を完了し、闇の一撃を放つのと、偽アリウスたちが砲撃を放つのが同時だった。

レオンから放たれた漆黒の柱が偽のアリウスたちの元へ向かう。

偽アリウスたちが放った砲撃は、一つに集まり、莫大な赤い砲撃となり闇の一撃とぶつかり合い、拮抗した。

衝撃波が発生し周りの物を一掃する。

岩盤が起き上がり、木々を薙ぎ払う。

「行けえええええええ!!」

レオンは絶叫する。

ズン……

闇の柱が炎の柱を飲み込む。

あたかも、魔力を喰らったかのように……

そのまま、闇の柱は偽アリウスたちの元へと突き進んだ。

ズン……

衝撃波が辺りを撫でる。

そのころ、ヴィクトリアは。

「おおお!!」

偽アリウスが炎剣を振り上げる。

ガンー！！

ヴィクトリアは受け止める、そのまま足を一步ずらし、槍を傾け、相手の炎剣を地面に叩き付ける。

そして槍を軸にして、跳躍。

そのまま槍を引き抜き、思い切り振り下ろす。

ガンー！！

頭部に槍が直撃し、偽アリウスは気絶した。

そして着地、そのまま。

「我は求めん、古の潤いを、叡智の恵みを・・・さあ・・・私の元へ集い、解き放て！！アクア・キングセル・ミグフィースー！！」

槍を頭上でバトンの様に回す、そのまま槍の先に収束した魔力を高圧水流として放ち、周りに居た偽者達を一掃した。

「ふう・・・まさか、ここまで骨がおれるとは・・・」

ヴィクトリアは呟く。

レオンはそのころ、ヴィクトリアの方へと走っていた。

林を走りぬけ、ヴィクトリアの姿が確認できた・・・が。

「ヴィクトリアっ！？」

レオンは叫ぶ。

ヴィクトリアの背後に、偽のアリウスが一人、魔力を集中させている。

ヴィクトリアはレオンが叫んだのを怪訝に思い振り返る。

「っ！？」

ヴィクトリアは呆然となった。
偽アリウスが魔道砲撃を放とうと、魔力を集中させていた。

何故……私が、どうして今までできずかない？
まさか……気配を消す魔法……？
しまった……何故そんなことにも……

「まずい……ヴィクトリア……!!」

レオンは考えた、どうすればヴィクトリアを救うことが出来るか……
・ただ、それだけを……
アレだけの魔力……ミスティルティンでも打ち消せねえ！
どうすればいい……どうすればヴィクトリアを救える!？

そうだ……ミスティルティンで消しきれないなら……俺が……
でも、どうやって？

その瞬間、レオンの頭に、ある出来事が浮かぶ。
それは、デュランダルと戦ったときのことだ、アイツは何か妙なことを言っていなかったか……？

《アレヲヤツタノハオマエダ》

山を消したとか言っただけか……
山を消し去る？……そんな魔法は聞いたことも見たこともない。
ならなんで俺はこんなことを思い出す……俺は……俺に……一体
何が出来る……？

その時、レオンの頭に痛みが走る。

「ぐ……なんだ……この痛みは……」

レオンは膝をつく。

「こんなことしている暇じゃ……」
レオンは痛みを抗い、立ち上がるうとする。

ドクン……

絶えようのない痛みが走り、レオンは気を失っていく。

「ヴィ……ク……」

そして、完全にレオンは気絶した……筈だった……

ヴィクトリアは呆然となった。

「終わりだな」

偽アリウスが呆然と告げる。

「っ！！」

ヴィクトリアの瞳から涙が流れる。

死ぬのか……私は……こんな……ところで……

観念して目を閉じようとした……その時。

ヴィクトリアは見た、偽のアリウスの胸が輝いているのを。

「貴様……その輝き……まさか神器!？」

ヴィクトリアは叫んだ。

「なんだ……ようやくきずいたのか……その通り、私は神器だ……私の力は他人の力をコピーするだけでしかない……だが、自由に人数を増やせる……増尋の神器・バルバトスだ」

バルバトスが笑う。

そして、胸元に埋まっている神玉がオレンジ色の光を放つ。

「さて……どうやって殺……」

バルバトすが何かを言いかけた。

ヴィクトリアは見た。

バルバトスの背後に、レオンが立っているのを。

ズン……………

「ぐあ……………」

バルバトスの胸元を、神玉ごと漆黒の剣が貫いた。

「貴様……………」

バルバトスが苦痛のあまり膝を突く。

そして、アリウスの姿を採っていたものが消え、オレンジ色のオーラを纏う、老人の姿に変貌した。

アレが奴の本当の……………

ヴィクトリアは絶句した。

「……………」

しかしレオンは冷徹にバルバトスを見下ろしている。

「レオン……………」

ヴィクトリアは首を傾げた。

妙だ……………いつものレオンとは……………何が。

「ぬう……………」

バルバトスは跳躍し、レオンと距離をとる。

「己……………貴様風情に……………!!」

バルバトスは魔力を溜める。

どうやら姿は消えても、力はそのまま残るらしい。

「発動・炎魔法・高位詠唱・フレイム・デス・バースト！」

バルバトスが魔道砲撃を放つ。
莫大な魔力が柱となりレオンに迫るが……

レオンは片手を前に突きだす。
そのまま……

バチン！！
砲撃を弾いた。

「バカな……高位詠唱の魔法を……片手で……」
ヴィクトリアが絶句。

「……！！！」
バルバトスは固まっている。

「……」
レオンはただ無言で立ち尽くしていたが……
ヒュン……
レオンの姿が掻き消えた。

「何！？」
きずくと、レオンはバルバトスの背後に現れていた。
そのまま漆黒の剣を振りぬく。

しかし、バルバトスも炎剣を咄嗟に呼び出し、受け止めるが……
バキン！！

レオンの黒剣に触れた瞬間、一撃の下に折れてしまった。
「な……」
バルバトスは物も言えない。

そのままレオンは剣を振りぬく。
バン！！
バルバトスの体を引き裂いた。

「ぐあああああ！！」
バルバトスが絶叫。

「おのれおのれおのれ！！！！許さん・・・許さん！！！！発動・超神星魔法、ハ聖剣・フルンティング！！」
バルバトスが叫び、超神星魔法が発動、圧倒的な魔力が辺りを満たす。

「ハハハハハハ！！！！世界の生命力を喰らい、力を増す伝説の聖剣だ！！！！貴様程度では抗えまい！！」
バルバトスは、投擲の槍のように、聖剣をハ投げた。

その同時期に、周りの草木が枯れ始める、生命力を吸い取っているのだろう。

「なんだ・・・苦しい・・・」
ヴィクトリアが胸を押さえる。

聖剣は莫大な魔力を纏い、レオンに迫る。
しかし、レオンは・・・
「d i f i f k f k v j d j f k c」
レオンが何かを叫ぶ。

そのまま、片手を突き出し、手のひらを握る仕草を行う。
キ・・・イ・・・イ・・・ン・・・

甲高い音を響かせ、聖剣がハ消滅した。
跡形もなく・・・何も残さず・・・最初からそんなものは存在しな

ったかのように。

「え………あ………な……ぜ……」
バルバトスが膝をつく。

「d u d s j u d j g g j j f s g j ……発動・・d j s f
h s u ……黒滅・・魔法・・魔鏡詠唱・・s d f h f d u j
c s p ……カオス・エラー」
レオンが顔を始めて上げる。

「……アレが……レオンなのか……？」
ヴィクトリアは絶句。

レオンの瞳は紅く輝き、禍々しい魔力を放っている。
神器はどちらだと聞かれれば、レオンだと答えたかもしれない。

レオンが手のひらをそつと開く、そこに一つの「漆黒の玉」が浮いている。

「g l k l g j b j f ……!!」
レオンが人間には聞き取れず、理解できない何かを叫ぶ。
この世界に「音声」として発声されていない何かは、まるで黒い玉
へと何かしらの命令を送っているように見えた。

そして、球体が弾け、急速に広がり……全てを飲み込んだ・
バルバトスも……ヴィクトリアも……大地も……光も……全て
を……

ン―――
その頃・・・「レオン・イル・エキテス」はといえば・・・

「？」

レオンはそこに立っていた。

「あれ・・・ここは・・・？」

レオンは辺りを見渡す。

「お前！！・・・早く逃げろ！！！」

一人の少年が話しかけてきた。

「え・・・」

レオンは話しかけてきた少年を見た。

「ルーク・・・!？」

レオンは話しかけてきた声に聞き覚えがあったので振り返ったが・・・
やはりルークだった。

「ルーク・・・お前、ルークだよな!？」

レオンは叫ぶ。

「あ？・・・なんでお前、俺の名前知ってるんだ・・・？」

ルークは首を傾げる。

「なんでって・・・お前は王道賢者と戦って・・・」

レオンが困惑する。

「はあ・・・？・・・何言ってるんだ？・・・それより早く逃げろ！！・・・
もうじきここには「大いなる漆黒の光」がやってくるんだ！！・・・
お前ももう知ってるんだろ？」

.....

は？

レオンは呆然と、立ち尽くした。

-----次回予告-----

時の針は巻き戻る。

大いなる時の流れは、時に優しく、時に残酷に。

終わりの少年は自分が来た世界を見て何を思うのか……
そして少年は一人の女性と出会う。

「あの方はな……アルビオン王国・皇女……ミールフィリス様
だ」
ルークが告げる。

そして、アルビオンという国に閉じ込められたレオンは、無事に星
鏡世界に帰える鍵を手に入れる事ができるのか！？

次回、新章、アルビオン偏……スタートです。

次回、聖なる天の王国、お楽しみに。

聖なる天の王国

・・・・・・・・・・は？

「早く、行くぞー！」

そう言いながら、ルークラしき少年はレオンの手を引き、走り出した。

な・・・何が・・・一体何がどうなってんだあああああ！？

レオンは手を引かれながら心の中で絶叫したのであった。

時は現在。

場所はルシアーデ王国。

ある場所で・・・・・・・・

「レオン・・・どうやら『記憶の世界』へと行くことが出来たようだな・・・気をつけるのだぞ？・・・その世界は記憶の世界だが・・・痛み・・・苦しみ・・・そして死も存在する・・・お前がそちらの世界で機能を停止すれば・・・お前は死んでしまう・・・」

ジャックは天井を見上げ、呟く。

「お前はそこでアルビオンにあった真実を知ることになる・・・そしてお前が何かを掴み・・・私の元へとたどり着いた時・・・私はお前の・・・『過去の真実』を話すことが出来るようになるのだ・・・世界の变革は直に始まる、全ては次の段階へと進む為にある・・・光の再生者も・・・お前も・・・私も・・・魔境の庭園も・・・ただそれだけの為に存在しているのだから」

ジャックは妖艶に微笑んだ。

場所はレオンの元へと戻る。

レオンはルークという名前の少年に手を引かれ、走っていた。

「お・おい！何処まで走るんだ！？」

レオンは叫んだ。

「何処までつて決まってる！？・漆黒の光が届かないところまでだよ！」

ルークが叫ぶ。

「漆黒の光・・・」

レオンは呟いた。

どこかで聞いたことがある名前だ・何だったっけ・・・？

レオンは周りを見渡す。

周りには白い石でできた家が立ち並んでおり、レオン達が走って向かっている遙か先には純白の居城が立っている・・・その居城を中心に、この街は存在しているようだ。

「なあ・・・ここってなんて街だ？」

レオンは何気なく尋ねたのだが。

「はあ！？・・・お前頭おかしいんじゃないの？・・・ここは、聖天王国アルビオンだろ！？」

ルークが走りながら叫ぶ。

聖天王国・・・？

レオンが疑問に思った瞬間。

ズガアアアアアン！！

二人の背後で爆音。

「何だ！？」

レオンが叫ぶ。

「馬鹿！！立ち止まるなよ！・死ぬぞ！？」

死ぬ・・・？

走りながら後ろを振り返ったレオンは絶句した。

なんと、二人の後ろに、白と黒のオーラを纏った巨大な竜がいた。

《グオオオオオオオオン・・・！！》

竜は咆哮を放った。

それだけで、周りの民家が消し飛んだ。

「な・・・何だよ・・・アレは！？」

レオンは思わず立ち止まった。

「ああ！？・・・お前本当に何も知らねえんだな・・・アレは《混沌の

領域》からの使者だよ！」

ルークが叫ぶ。

「混沌の領域・・・」

レオンが呟いた瞬間。

「きゃあああああ！！」

悲鳴が辺りに響いた。

「何だ！？」

レオンが辺りを見渡す。

「あそこだ!!」

ルークが指を指す。

「っ!!」

なんと、竜の足元に一人の少女がしゃがみこんでいた。

「おいおい・・・」

レオンが絶句。

「まずいじゃねえか・・・」

ルークはオロオロしている。

「クソっ!!」

レオンが走り出そうとしたとき。

「おい！何考えてんだ!!・・・お前じゃ適わないぞ!?!」
ルークが引き止める。

「じゃあ見殺しにしろっていつのかよ!?!」

レオンが叫ぶ。

「そ・・・それは・・・」

と、その時。

竜の頭上に「漆黒の斬撃」が降り注いだ。

ズウウウウウウウウン・・・!!

《グオオオオオオオン・・・!》

竜が絶叫。

「なんだ?」

レオンが呆然となる。

「まさか・・・来てくれたんだ!!」
ルークが叫ぶ。

何が・・・
レオンは思った。

その瞬間、民家の屋根の上に、部下を10人程従えている青年が現れた。

「誰だ？」
レオンが呟く。

「レオン様だ!!」
ルークが叫んだ。

「レオン様？」
レオンは妙な違和感を得た、単なる同名の人物なのだろうが、近親感が沸く。

その時。
青年が叫んだ。
「忌まわしき使者め・・・お前はここで倒す!!」

青年が竜を睨む。
竜もまた青年を睨む。

その瞬間。
フツ・・・と青年の姿が掻き消え、きずいた時には少女を抱え、別の民家に移っていた。

「この少女を安全なところへ」
青年が告げ、現れた部下に渡す。

「さて・・・行くぞ、発動・黒滅魔法!!」
青年が叫ぶ。

「黒滅魔法・・・!?!」
レオンが絶句。

「発動・中位詠唱・シャドウ・オブ・ブレイド!!」
青年が叫び、レオンがよく知る、漆黒の剣が二振り顕現した。
そのまま青年は剣を振り上げ、きずいた時には竜の片翼を切り落と
していた。

《グアアアアアアアア!!》
竜が絶叫。

そして跳躍。

しかし、竜も黙ってはいない。
魔力を溜め、莫大なブレスを放った。

「黒滅魔法・二重詠唱・シャドウ・ヘル・スレイヤー!」
青年が叫んだ瞬間、二振りだった剣が一つの巨大な大剣になり、ブ
レスと激突した。

「はああああ!!」
青年の魔力が更に強まり、ブレスを切り裂き、竜の頭ごと体を断ち
切った。

《グギヤアアアアアアアア!!》

竜が絶叫し、体が消滅していく。

「す．．．すげえ．．．」

レオンは絶句。

「さすがだ．．．レオン様!!」

ルークは信仰者のような目で青年を見つめている。

「なあ．．．闇の系統を使えるのは、あの騎士さんだけなのか？」
レオンは何気なく尋ねた。

「当たり前だろ!!．．．闇は神に選ばれた者しか使うことが出来ない伝説の系統．．．俺やお前じゃ、到底無縁な話だ!!」
ルークはまるで自分の事のように、胸を張り、呟く。

ルークの姿をした奴にここまで言われると、さすがに癪に障るわけだが、ここにいるルークはレオンの知るルークではないようなので、さすがにやめておいた。

と、その時。

ズ．．．．．

「!」

なんと、ルークの頭上にあつた民家の屋根が崩落し、ルークに襲い掛かるうとしていた。

恐らく、先ほどの戦闘の余波で崩落したのだろう。

「君達!!」

さっきレオン様と言われていた青年が叫ぶ。

「っ!?!」

ルークは頭上を見るなり、硬直した。

レオンは魔法を発動しようとした瞬間。
「バチン！！」

二人の頭上を雷が走り抜けた。

瓦礫が消滅。

「……………」

二人は啞然として、事態を見守った。

「まったく・ちゃんとしなさいよ・騎士王レオン」
そこに一人の女性が現れた。

「はは・すまないな・セリア・」
騎士王レオンが苦笑。

「まったく・『雷神の宝具使い』である私を出動させるなんて・」
「
セリアと呼ばれた女性がため息。

「あ……………あ・」
ルークが絶句。

「おい……………どうしたんだ・」
レオンが小声でルークに耳打ちした。

「何って……………騎士王レオン様だけでも凄いのに……………雷神の宝具使い』であるセリア様まで……………ああ・母さん、俺死んでもいいよ」

ルークは呆然と二人を見つめている。

「へえ、俺の知ってるルークなら……ここまで人に憧れを持つなんてあり得ないんだけど……やっぱりここ……星鏡世界じゃない……」

レオンは改めて認識した。

「とりあえず……この子達を……」

騎士王レオンは呟く。

「君達大丈夫か？」

「はっ……はい！！……あの僕と握手してください！！……ルークが速攻で立ち上がり握手を求めた。

僕って………

レオンは半眼でルークを睨む。

「あ、ああ……はは……人気がありすぎるのも困るな……」
騎士王レオンは苦笑。

「そっちの君は大丈夫かい？」

騎士王レオンが微笑み、聞いてきた。

「え……はい」

レオンは立ち上がった。

その時。

「ちょっと……何をするの!?!」
「またもや女性の叫び。」

レオン達がそちらを見ると、男が女性の荷物をひったくったところだった。

「ねえ……やっちゃっていい?」

セリアがうんざり眩く。

「おらぁおらぁ！どけ、死にたいのか！？」

男がナイフを突き出し走る。

ナイフの刃が光っている、魔力が付加されているようだ。

「・・・・・・・・」

レオンは自分の背中にミスティルティンがあることを思い出し、剣を抜き放つ。

「おい、お前！・・・あぶねえぞ！」

ルークが叫ぶが・・・

レオンの姿がルークたちの前から掻き消える。

ヒュンツ・・・・・・・・

「！！！」

「！？？」

騎士王レオンとセリアが目を見開く。

「なんだぁ？・・・ガキはすっこんでろ！！！」

レオンが前に立ちはだかると、男はそのまま突っ込んでくる。

「あの魔法を抜うぞ、ミスティルティン！！！」

レオンは剣を振りぬく。

男のナイフがレオンの剣に触れた瞬間、粉々に砕けた。

キ・・・・・・・・ン・・・

「な・・・・・・・・」

男が絶句。

「何をした・・・魔法を打ち消しやがるだど!?!?」
男が一步下がる。

・・・アーティファクトの力は使えるのか・・・

ドカッ・・・

何かを殴る音がして、見ると、セリアが男の頭を強打し、気絶させたところだった。

「まったく・・・それにしても、あなた・・・」
セリアがレオンを見る。

まずい・・・怪しまれたか・・・?
レオンが冷や汗を流す。

「強いわね!」

セリアが微笑み、頭を撫でてきた。

「え・・・」

「あ・・・いいなあ・・・セリア様に触れてもらえるなんて・・・!」

ルークは怒っているようだ。

やっぱり、根本は同じか。

「君、中々強いじゃないか・・・名前は?」
騎士王レオンが尋ねる。

「あ、そうだったな・・・お前何処の地区から来たんだ？・・・ここに
ついて疎いみたいだけど・・・」
ルークが呟く。

「えっと・・・俺は、レオン・イル・エキテスって言います」
レオンはおずおずと名前を言う。

・・・

周りの全員が絶句している。

「レオン様と同名!？」

「あんたと同名!？」

「・・・俺と同じ名前!？」

その場の全員が叫んだ。

と、その時、凜とした声が響く。

「何をしているの？」

!?

全員が一斉に振り向く、そこにいたのは・・・

「ミーフィス・・・!？」

レオンは小声で呟く。

「ミールフィリス・・・皇女殿下・・・」
ルークは目を白黒させている。

そこにいたのは、白いドレスをきた、黒髪の女性だった。

-----次回予告-----

突然、聖天王国アルビオンという国に来てしまったレオン、レオンは自分の世界、星鏡世界のことを話す。

「成る程・・・では、あなたはその星鏡世界という世界から来たのですね？」

ミーフィスは告げる。

そしてレオンはこの国でしばらく滞在しながら、元の世界に帰る為の方法を探すことに・・・

次回、聖なる天の王国？、お楽しみに。

聖なる天の王国 ？

「何をしているの？」

女性の声が響いた。

「……？」

レオンは自分の中で何かが引っかかるのを感じた。

「……この声……どこかで……」

「!!」

「!!」

騎士王レオンとセリアが肩を震わせる。

そしてそのまま跪いた。

「失礼しました、ミールフィリス皇女殿下」

セリアが事務的に告げる。

「まことに申し訳ありません、〔混沌の領域〕の使者と戦いながら、子供達を守っていたもので……」

騎士王レオンが申し訳なさそうに呟く。

「いいえ、構わないわ……よくぞ帰ってきてくれました……それで、この子達があなたたちが救った……大丈夫？……怪我とかない？」

ミールフィリスが覗き込んでくる。

「は、ひゃい!!」

ルークが叫ぶ。

「ろれつが回ってないぞ・・・」
レオンが半眼で突っ込む。

「お・・・俺はルークって言います！！・・・皇女様と会えて光栄です
っ！」

ルークはすかさず告げる。

「あらあら、ありがとう」

ミールフィリスが微笑む。

と、ミールフィリスがレオンの方を見つめる。

「おい・・・お前も早く挨拶しやがれ！」

ルークが肘で突いてくる。

「・・・・・・・・レオンです」

レオンが頭を下げる。

すると、あら・・・と目を見開く。

「あなた、レオンと同じ名前なのね・・・」

ミールフィリスが面白そうに見つめてくる。

・・・・・・・・

何故だろう・・・初めて会ったはずなのに・・・懐かしい・・・
レオンは妙な感覚を体験した。

「どうかした？」

ミールフィリスが首を傾げる。

「あ・・・いえ！」

レオンが慌てて首を振る。

でも・・・どういうことだ・・・？・・・俺が闇の世界で出会ったミール

フィスは・・・

「あ・・・いい考えがあるわ、せっかくだし、アルビオン城に来てもらいましょう?」

ミートルフィリスが微笑みながら告げる。

「え!?! マジですか!?!」
ルークが絶句。

「いいのですか・・・?」
騎士王レオンが呟く。

「ええ、かまいません」
ミートルフィリスは微笑む。

「フッフ・・・ねえ、あなたレオン君だったわよね?」
セリアがレオンを面白そうに睨む。

「え・・・そうですけど・・・」
レオンが苦笑いを浮かべ後ずさる。

「あなた、中々見所がありそうだから、私と組み手とかしない?・・・するわよね?」
セリアが迫ってくる。

「わ・・・分かりました!!」
レオンは遂に膝を屈した。

「というわけで・・・」
「さて、到着だ」

騎士王レオンが告げる。

「・・・・・・・・・・！」
でかい・・・・・・・・ここまで大きかったのかよ・・・・
レオンはアルビオン城を見上げ感嘆する。

レオンの目の前には、圧倒的な存在感を放つ、純白の居城が立っている。

「さてと・・・・それじゃあ入りましょうか」
ミールフィリスが先を促す。

と、騎士王レオンが巨大な門に手をかざす。

「わが名は『大いなる力』の片割れを宿し者なり、わが名、騎士王レオンの名において門の開錠を」

騎士王レオンが告げた途端、門に刻まれた紋章が煌く。

「・・・・・・・・あれ・・・？」

レオンは思わず呟いた。

あの紋章・・・・・・・・どこかで・・・・

レオンは少し引つかかったが、気にし始めるときりが無いので、考えるのをやめた。

「なんせここは、俺の住んでた星鏡世界じゃないし・・・・・・・・」
レオンが思わず呟く。

「ん？なんか言ったか？」
ルークが質問してきた。

「いや・・・・何でも・・・・」
レオンが顔を逸らす。

その行動を、ミールフィリスが見ていたりするのだが・・・レオン

の知る由は無かった。

そして門が開いた。

『お帰りなさいませ、ミールファイリス皇女殿下、騎士王レオン様、雷帝セリア様』

入り口の脇にずらつと並んだ使用人達が一斉に叫ぶ。

「ええ」

「ああ」

「はい」

二人と一人が、笑顔とめんどくさそうに告げる。

「この方たちは私の客人なの、丁寧に御もてなししてあげてミールファイリスが使用人の一人に呟く。

「はい、かしこまりました」

男が頭を下げる。

するとすぐに男は。

「お荷物、お持ちします」

レオンの剣を取り上げると、向こうに歩いていってしまふ。

「え・・・あ！」

レオンが叫んだ瞬間。

「待つて、今から私がこの子と組み手をするから剣は返すよつに」
セリアが命令口調で告げた。

「は・・・かしこまりました」

男がレオンに剣を返し、立ち去っていく。

・・・なんか・・・余所余所しいな・・・

「仕方ないのさ、ここにいる連中は全員そついう奴だ・・・目上の連中に何かをされるのが怖いのだ」
広間に、男の声が響く。

「!」

「あら、あんたが来るなんて珍しいわね・・・」土帝の宝具使い「、
ガイ」

セリアが驚いたように話しかける。

・・・待てよ・・・待て待て、俺は何を順応してるんだ!?!?今
思えばこの人達・・・

『雷神の宝具使い』セリア。
『土帝の宝具使い』ガイ。

「で・・・伝説の宝具使い!?!」
レオンが叫ぶ。

「あら?今きずいたの?」
「ほう?・・・この子供達がミールフィリス様が言っていた・・・」

「ええ、ルーク君とレオン」
セリアが笑い、告げる。
「ん?・・・レオンだと?」
ガイが眉をひそめる。

やはり、さっきの人と同じ名前だから・・・
レオンはそう思った。

「ハハハ！・・・レオンと同じ名前か！・・・面白い子だ！」
ガイが笑う。

「それにこの子、それだけじゃあない」
セリアが更に告げる。

「ん？・・・それはどういう・・・」
ガイが聞こうとする。

「すぐに分かるわ、さあレオン？・・・私と決闘よ？」
セリアが挑戦的に告げる。

「は？・・・今から？」

セリアは首根っこを掴むと、レオンを引きずっていった。

「おいおい・・・セリア、アイツ何を考えてんだ？・・・ただの子供に・・・」
ガイが呆然となる。

「・・・」
ルークもまた、呆然となった。

そして、少し後。

「昼食ができたぞ、さあ皆・・・って・・・いない？」
騎士王レオンがやってきたが、時既に遅し。

レオン、セリア、ガイ、ルークの4人は、城内にある広場に来ていた。

「さて〜これからが面白いところね〜」
セリアが足首や手首を伸ばしたりしている。

「あの・・・これってやんなきゃいけないんですか・・・？」
一方のレオンは正直やる気ではなかった。
理由は無論、あいてが伝説の宝具使いだからである。

レオンが考えるに、この世界はレオン達が住んでいた星鏡世界ではない・・・とすると、ここではレオンが知っているような常識は通じない。

恐らく、この人達は・・・この世界での、伝説の宝具使い・・・

それに、この世界には闇の系統を使える騎士王レオン・・・ルークの話では、この国で闇の系統を使えるのはあの人だけらしい・・・となるとやはり自分が闇の系統だとは言わないほうがいい・・・

「・・・・・・・・よし」

レオンは決意を固めた。

「やります・・・俺が相手になります」

レオンがセリアをまっすぐに見つめ、呟く。

「ふふふ・・・そう来なくちゃ」

セリアが告げる。

そして、セリアは一振りの長剣を手にとる。

レオンもまた、背中のミスティルティンを抜き放つ。

「おい！セリア！・・・お前そいつを消すきか！？」

ガイが叫ぶ。

「大丈夫、私の読みが正しければ・・・」

「お前の読みが今まであたったことが無いから言っただよー！！」

ガイが突っ込む。

そしてその真上では。

城の窓から、騎士王レオンとミールフィリスが覗いている。

「いいのですか・・・あんなことをさせて・・・」

騎士王レオンが心配そうに告げる。

「でも、面白そうじゃない・・・あの子、なんだか興味があるし
ミールフィリスが面白そうに告げる。

「さあ・・・いくわよ・・・」

セリアが剣を構える。

・・・

レオンもまた剣を構える。

「レオン・・・」

ルークが心配そうに告げる。

そして・・・

「はあっ!!」

セリアが踏み込んだ・・・そう思ったときには、目の前にセリアの体
が・・・

「っ!？」

セリアが剣を振りぬく。

レオンは思い切り屈みこみ、剣をかわす。

頭上を剣が唸りながら通過した。

そのままセリアが剣を叩きつけてくる。

レオンは咄嗟に後ろに跳躍。

「へえ〜やつぱり・・・あなた只者じゃないわね!」
セリアが叫ぶ。

「はああ!」

レオンは思い切り踏み込み、地面すれすれを薙ぐ。
砂埃が舞い上がり、セリアの視界を悪くする。
そして上から下へと振り下ろす。

ガアアアアン・・・!!

セリアが防ぐ。

「ふっ!」

セリアがレオンを力で押し切る。

「なっ!？」

まさか自分が力で押されるとは・・・

レオンは呆然となる。

そのまま、セリアが踏み込んでくる。

まっすぐ前にただ・・・突く。

それだけの行動に、レオンは命の危機を覚える。

「つつ!」

レオンは全力で頭を横に反る。

ジッツツ・・・!

剣に触れていないはずのレオンの頬が切れる。

「マジかよ!?!」

レオンが絶句。

剣圧だけで人の皮膚を切り裂くなんて……一体どんな運動神経を持ってはできるのか……

セリアが剣を突いた隙を使い、剣を絡ませるレオン。

ギャリイイイイン……

セリアの剣を弾いた……と思ったら、レオンの剣が弾かれていた。

「何時の間に……」

弾き返し……?

今の一瞬で……

そして……

キ……ン……

セリアの剣がレオンの首筋に……

しかしレオンは咄嗟にセリアの剣の軌道を読み、剣の腹に足を架け、真上に跳躍。

そこでレオンは、弾かれて空中にあるミスティルティンを掴む。

「何ッツ!?!」

セリアが叫ぶ。

「うおおおおおっ!!!!」

レオンが上から思い切り下へと落下。

体重、自由落下の引力、全てを乗せて振り下ろす。

「さすがね!!・・・やっぱり私の目に狂いはない!!」
セリアが笑い、剣を上へ突く。
セリアの剣は、空気を裂きながら進んでくる。

レオンは体をひねり、剣を紙一重でかわし、着地。
そのまま、剣を横に薙ぐ。

ガイン・・・!!
しかしセリアの剣がレオンの剣を受け止める。

「な・・・」
レオンは絶句。
まさかこの速度を反応してついてくるなんて・・・
人間の反射神経ではありえないことだ、やはりこの人は只者ではない。
い。

その時。
パキン・・・
「!!」
セリアの剣が折れる。

「・・・はあ・・・はあ・・・」
レオンも剣を地面に落とす。
手の握力がもう無いのだ。

恐らく、剣が折れていなければ、セリアの圧勝だっただろう。
それほど、この人の動きは尋常ではなかった。
アリシアさんや、サクラさん・・・あの二人でも勝てたかどうか・・・

「やっぱり……あなた強いわね……」
セリアが自分の手を見てから、レオンを見る。

「あの小僧……何者だ……まだセリアは本気を出しちやいな
いが……それでもアイツについていくあの動き……」
ガイが厳しい目線でレオンを見つめる。

「レオン……お前……？」
ルークも呆然となる。

「これは……」
ミールフィリスも目を見開く。
「……驚きました……これほどの剣使いが、このアルビオンに居
ようとは……それもあの歳で……きちんと指導すれば、恐らく最
強の剣使いとなる可能性が高いでしょう」
騎士王レオンがこのようなコメントをとるのは珍しい。

その後、昼食をとったレオンにミールフィリスが質問を投げかけ
てきた。

「レオン、あなたはこの世界の住人ではありませんね？」
突然、ミールフィリスがレオンに聞いてきた。

「……」

レオンは絶句。

他の全員も驚いている。

「あなたは……星鏡世界という世界の住人なのでしょう？」

「……はい」

レオンは頷く。

「レオン……本当か？」

ルークも聞いてくる。

「あなたが城の前で話をしていましたね……それを少しばかり聞かせてもらいました」

ミーテルフィリスが告げる。

「話してもらえませんか……あなたの住む星鏡世界という世界のことを……そして……あなたの秘密も」

ミーテルフィリスが告げる。

全員の視線が集中する。

「はい……分かりました……でも……」

レオンが告げようとした時。

コンコン……

「皇女殿下、城に侵入しようとした者を捕らえました」
男が告げる。

「侵入者？」

騎士王レオンが立ち上がり告げる。

「通せ」

と、扉から声が聞こえた。

「こら離さぬか！．．私はミルフェリーナ第二王女なのだぞ！？」
どこかで聞き覚えが．．．．．

っ！？

レオンはきずいた。

「ヴィクトリアか！？」

椅子から立ち上がり、レオンが叫ぶ。

そして扉が開いた。

ギイイイイ．．．．．

そこに姿を見せたのは。

金色の髪に、赤色の瞳．．．間違いなく、ヴィクトリアだ！！

「レ．．レオン．．．．．？．．レオンではないか！？」

ヴィクトリアが叫んだ。

「．．．．．」

なんだよ、これは．．一体．．どうなってるんだ．．！？

――次回予告――

アルビオン城に姿を見せたヴィクトリア、どうして彼女がここに？
困惑するレオンに、ミートルフィリスが質問をする。

そして、ヴィクトリアの語ったこの世界の秘密とは？

さらにこの城に、五人の伝説の宝具使いが揃う。

そして又もやあの存在が……

《グオオオオオオオン……！！》

「発動……黒滅魔法……」

レオンは唱える。

次回、聖天王国アルビオン、お楽しみに。

聖天王国アルピオン

「ヴィクトリア!？」

レオンは椅子から立ち上がり叫んだ。

「レオン!?!?・・・レオンではないか!?!？」

ヴィクトリアは城の兵士に両腕をつかまれたまま叫んだ。

・・・

と、レオンは呆けていたが・・・

「レオン?!?・・・あなたの知り合い?？」

ミールフィリスが首を傾げる。

「あ、はい!?!？」

レオンが慌てて叫ぶ。

結局、ヴィクトリアを交えて食事をする事になった。

「それで・・・なんでヴィクトリアはここにいるんだ?？」

レオンはヴィクトリアに問う。

「それはこちらが聞きたいぞ?・・・どうしてお前がこのようなの?・・・
るにいる?・・・神器と戦っていたのではないのか?？」

ヴィクトリアが睨む。

「俺にも分からねえんだよ・・・」

レオンはげんなり呟く。

「・・・それで・・・その方とは一体どのような関係なのですか?？」

それまで黙っていたミールフィリスが質問を投げかける。

「あ、はい．．．ヴィクトリアは俺達の世界の王族です．．．」

「ミルフェリーナ王国第二王女、ヴィクトリア・シア・ミルフェリーナと申します」

こういう礼儀正しい行為については、慣れているのか、きびきびと挨拶をした。

「始めまして、異世界の方．．．私は、この聖天王国アルビオンの皇女、ミールフィリス・アルビオンと申します．．．それで、質問したいのですが．．．あなたはどうやってこの世界に．．．アルビオン王国に来たのですか？」

ミールフィリスは真剣に問う。

それもそうだろう、ヴィクトリアが何かを知っていれば、レオンがどうしてもここにいるのかも判明するのだから。

「それが．．．分からないのです．．．」

ヴィクトリアにしては珍しく、敬語で応える。

相手が王族だと知っているからだろうか。

そしてレオンに視線を戻す。

「レオン．．．私はお前が神器と戦っている途中．．．レオンが発動した魔法で、闇に吞まれたのだ．．．その後、暗闇の中で《声》を聞いたのだ．．．」

ヴィクトリアが真剣な瞳で告げる。

「声？」

レオンは首を傾げる。

「ああ．．．私の空耳かも知れぬ．．．だが、どうしても気になる

のだ・・・その《声》はこう告げた・・・《あなたは選ばれし者・・・大いなる運命の審判に従い、あなたを《水の王》として覚醒させます・・・そのために、あなたは聖天の国へと行かなければならない》・・・と、こう告げていた、真つ暗で姿は見えなかったが・・・確かにそう言ったのだ」

「なんだよ・・・それ・・・俺はきずいたらここにいたから・・・全く分からないから・・・だからヴィクトリアについて思ってたけど・・・意味不明だな」

レオンはせつかく掴みかけた希望を消され、落ち込んだ。

「すまぬ・・・レオン・・・」

ヴィクトリアも申し訳なさそうにする。

と、ミールフィリスがその気まずい空気を取り払うように質問した。

「・・・今のあなた達の会話では、分かりづらいものがあります・・・まず、質問を幾つかします・・・答えられる範囲で構いません・・・まずあなた達のいる世界・・・星鏡世界というところについて・・・その星鏡世界という所は、どのような場所なのですか？」

ミールフィリスは真剣に尋ねているが、内心は興味本位だろう、自分たちが暮らす世界以外に他の世界があり、その世界からの来訪者がやってきたのだから。

レオンとヴィクトリアは、学院でならった世界観を総動員して、世界観を説明した。

因みに、レオンの説明は基礎の世界観の説明だけだったが、授業を真面目につけているヴィクトリアは、魔法、宝具、国家事情・・・その全てを詳しく、的確に説明していった。

「ここが、凡人と超人の違いなのだろう。」

「成る程・・・大方、星鏡世界については理解しました・・・レオンやヴィクトリアさんが所属しているのはミルフェリーナ王国で、その相手国たるルシアーデ王国は、妙な事件を引き起こし・・・何かを成そうとしている・・・と、そういうわけですか」

ミーテルフィリスは呟く。

「しかし・・・本当にそのような世界が・・・」

騎士王レオンが告げる。

「そうね・・・やっぱりあなた、只者じゃなかったのね、レオン」

セリアがレオンを見つめる。

「その通りね・・・でも、世界観は似ているところもあるわね・・・まずお互いの世界には魔力が満ちていること・・・そして魔法の属性は元々、七つだった事・・・闇と光は消滅したこと・・・宝具が存在する事・・・そしてその宝具を扱うものがナイトと呼ばれている事」

ミーテルフィリスが告げる。

「しかし、闇と光は・・・むぐっ・・・」

ヴィクトリアは告げようしたので、レオンは慌てて口をふさぐ。

「悪い、ヴィクトリア・・・闇と光については黙っててくれ・・・後で話す」

レオンがヴィクトリアの首に腕を巻きつけ、耳に口を寄せながら呟く。

「・・・っ!?・・・わ、分かった!」

ヴィクトリアは、ボン、と音をたてんばかりに顔を真っ赤にそめ、頷いた。

「さて・・・次は私達の番ね、レオン」
ミールフィリスが告げる。

『はい』

騎士王レオンとレオンが同時に返事をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミールフィリスが目丸くする。

「どういうことだ・・・何故レオンが返事をするのだ？」

ヴィクトリアは疑問に思った。

「くすくす・・・そういえばそうだったわね・・・あなた達、名前が同じだったのよね・・・」

ミールフィリスは苦笑。

「??？」

ヴィクトリアが首を傾げる。

・・・・・・・・状況説明・・・・・・・・

「な・・・では、この方が・・・騎士王レオンという方で・・・」
ヴィクトリアが絶句。

「そうよ、もっとも・・・騎士王レオンの本名は、レオン・シクイー
ルだけだね・・・それでも、このアルビオンではレオンという名前は
珍しいのよ」

騎士王レオンが頭を下げる。

「では、気を取り直して・・・我等が王国について説明をしようと思

います・・・まず、この国以外・・・この世界には国や人は存在しません」

騎士王レオンが告げる。

は??

レオンとヴィクトリアは絶句。

「あら?知らなかったの?・・・そう・・・ならいい機会ね、二人とも、私についてきて」

ミールフィリスは立ち上がると、そう言った。

そういつて、二人をミールフィリスが連れてきた場所は・・・城の最下層・・・地下の空間だった。

その空間は、不思議な場所だった、城の昼食を取っていた場所を出て、階段を降り・・・巨大な門を開け、開けた後は、ひたすらに階段を降り続けた。

「すごい・・・広いですね・・・」

レオンは呆然と呟く。

その空間は、高さが100メートルはあるつかという高さ、天井には青い石でできた壁画、床には妙な古代文字が中心に向かって躍っている。

「この聖堂はね、《光闇の間》と呼ばれているのよ・・・」
セリアが付け加える。

というか、この人・・・何時の間についてきていたんだ?

「光闇の間?・・・なんなのですか、それは?」

天井の壁画を眺めていたヴィクトリアは、質問した。

「光闇の間とは・・・その名の通りなのです・・・ここは、全てを滅却する為の・・・聖堂ですから」

騎士王レオンが憂鬱そうに告げる。

全てを滅却・・・？

「この事を話す前に、この景色を見てもらわないとね・・・」
ミイテルフィリスは指をパチンと鳴らす。

ギユウウン・・・

すると、床が青白く光始める。

「！！」

「っ！？」

レオンとヴィクトリアは絶句した。

床が透けたのだ、そしてそこから見えるものは・・・

「闇・・・」

レオンが呆然と呟く。

「この闇こそが・・・この、空中に浮かぶ王国、アルビオンの下に広がる・・・《混沌の領域》・・・私たちが魔境の庭園と呼ぶ《転生絶界》なの」

ミイテルフィリスが驚きの真実を告げる。

「っ！？」

レオンは思わず後ずさる。

「？・・・どうかしたのか？」

レオンの変化にきずいたのは、幸いヴィクトリアだけだった。

「い・い・いや、なんでも・ない・」

しかし、レオンは内心穏やかには居られなかった。

魔境の庭園・・・・？

この下に広がるこの黒い領域が・・・・？

「この・魔境の庭園・・・・ですか？・これはなんなのですか？
ヴィクトリアは質問を投げかける。

「分かりません・」

騎士王レオンが話を継ぐ。

「ただ分かつているのが・この下に広がる領域が、突如出現した
ということですよ・いきなりでした・そもそも、この国は天に浮
いてなど居なかった・」

「え・でも、この国は・」

レオンが首を傾げる。

「はい、宙に浮かぶ国です・この国は、もともと地上にあった
のです・しかし、あの謎の領域が現れた事により、空中に浮かぶ
方法で、難を免れました・大いなる伝説の5人の宝具使いと・
ハ光と闇の使徒」によって」
今度はミールフィリスが告げる。

「伝説の・・・・」

レオンが呆然となる。

「つまり・この国は元々、地上にあった・しかし、突然現れ

たあの黒い領域によつて、天空へと逃げる方法しか、生き延びる方法はなかった、そしてそれを実行したのが・・5人の伝説の宝具使いと・・光と闇の使い手・・というわけですか」
ヴィクトリアが話をまとめる。

「そう、その通り・・随分優秀な子ね・・あなた」
ミールフィリスが苦笑。

「でも、問題が起きたの・・天空に逃げたこの国だけど・・今度は下に広がる謎の領域から、使者達が送られてきたの」
ミールフィリスが眉に影を落とす。

「あの、白と黒のオーラを纏った・・」
レオンが告げる。

「ええ・・その通り・・アレのことを私たちは『魔鏡神獣』と呼んでいる・・アレはとつともなく強大な力を持っているの・・アレを倒せるのは、神によつて選定された、5人の伝説の宝具使いと、闇の担い手である、レオン・シクイール・・光の担い手である私だけ・・」

ミールフィリスが驚きの真実を告げた。

「光の担い手!？」
レオンが叫ぶ。

「まさか・・あなたが」
ヴィクトリアもまた、絶句している。

「ええ、黙っていてごめんなさい・・それで、この聖堂の存在理由なんだけど・・魔境の庭園へと、行くためにあるの・・」

え・・・それは、一体どういう・・・

そう告げようとした、レオンとヴィクトリアの思考が停止する。

ズウウウウウウン・・・

城が揺れた。

「何事だ!?!」

騎士王レオンが叫ぶ。

すると、衛兵がすぐさま降りてきて。

「はっ!・・・ご報告申し上げます!・・・これから始まる、五大会議「エクストラ」を開催する為、5人の内の残りの三人の伝説の宝具使いの方々を集めたのですが・・・魔鏡神獣がアルビオンに侵入しました!!!」

・・・!!!

その場の全員に戦慄が走る。

「数は、どれくらいだ!?!」
今度はセリアが叫ぶ。

「はっ・・・それが・・・十体です・・・」
衛兵が頭を下げる。

「じゅっ・・・!?!」

ミールフィリスが絶句。

「へえ、敵さんもどうやら本気モードってなあ．．．」
セリアが苦笑。

「ふざけている時間は無い．．．アルビオンに張り巡らされた結界を突き破ったということは、それほど強力な固体だということだ．．．これより、魔鏡神獣の殲滅を行う！！」
騎士王レオンが叫ぶ。

「因みに、他のやつらはどうしてるの？」
セリアが尋ねる。

「はっ．．．『炎皇』 『風翔』 『土帝』 の方たちは、魔鏡神獣の討伐、『水碧』は、けが人の治療に回られております」
衛兵があせりながら呟く。

「分かったわ、さて．．．私もそろそろ出るとするかしらね」
セリアが手首を回す。

「待ちなさい．．．レオン、セリア．．．必ず、生きて帰ってきてください」
ミールフィリスが祈るように告げた。

『はっ、我等が主よ』
二人して頭を下げると、二人の姿が掻き消えた。

ズウウウウン．．．
又もや、聖堂が大きく揺れる。

「さあ．．．私たちは城の中心点へと行きましょう．．．あそこは一番安全です．．．異世界からの来訪者を、死なせるわけにはいきません」
ミールフィリスが真剣に告げた。

しかし、レオン達の答えは違っていた。

「いいえ、違いますよ・・俺達も・・戦います」
レオンが。

「その通りです・・今までお世話になりました、そのまま何もしな
ければ・・ミルフェリーナ王国の王女としての核が下がりますゆえ」
笑いながらヴィクトリア。

二人はそう告げた。

「あなた達・・・・!!」

ミーターファイリスが呆然となる。

と、その時。

ズン!!

ひとときわ強い揺れが聖堂を襲う。

ガン・・・・

なんと、天井の一部が崩れ、調度ミーターファイリスが居る位置に降
り注いだのだ。

「っ!?!」

ミーターファイリスが上を向くが、もう遅い。

「発動・黒滅魔法・中位詠唱・シャドウ・オブ・ブレイド!!」
レオンが魔法を発動。

ガン!!

レオンはすばやく踏み込み、岩を切り裂く。

ミールファイリスは見た、自分を助けた少年が、何をしたのかを。だがそれは、ミールファイリスの常識を覆すものだった。

「え……あ……どう……して、闇の……系統？……嘘……」
ミールファイリスが呆然と座り込む。

「さあ……これからだ!!」
レオンは叫んだ。

-----次回予告-----

遂に黒滅魔法を発動させたレオン、ミールファイリスは絶句する。

そして、十対の魔鏡神獣はアルビオンを蹂躞する。

《グオオオオオオオオン……!!》

「行くぞ!!……おおおおお!!」
レオンとヴィクトリアは戦う。

そして、あの魔剣も、姿を再びレオンの前に現す。
「来い、レーヴァテイン!!!!」

次回、魔鏡神獣、お楽しみに。

魔鏡神獣

「黒滅魔法・シャドウ・オブ・ブレイド!!」
レオンは叫び、素早く踏み込むと、落下物を切り裂いた。
ザン!

「ふう……」
レオンは肩の力を抜いた。

一方で、ミールフィリスは絶句していた。
「え……どうということ……レオン、あなた……どうして……」
ミールフィリスはへなへなと座り込む。

「結局……自分でばらしているではないか……」
ヴィクトリアは不満そうに腕を組んだ。

「すみません……黙ってて、俺は……闇の系統のナイトなんです……」
レオンは、そう告げた。

そして、アルビオン王国の居住区は……
「いやああ!!」
女性が叫ぶ。

《クオオオオオオ……》

黒と白のオーラを纏った鳥のような姿をした巨大な魔鏡神獣が叫ぶ。鳥の魔鏡神獣は咆哮した後、その女性がいる一帯に向けて、ブレスを溜め始めた。

魔鏡神獣にとって、人を殺すという行為について何かを思う感情は無い。

ギユウウウウウン……！

「ひっ！？」

女性は背後を振り返り、思わず転んでしまう。

女性の目に映るのは、鳥の姿をした化け物が、強大な魔力砲撃を放つ姿だった。

バン！！

炎のブレスが、女性のいる一帯へ放たれた。

灼熱の炎の熱量を持つブレスは、空気さえも消滅させながら、女性に迫る。

何者にも止め難い一撃が迫り……

「発動・土魔法・高位詠唱！！……土葬創ハアルブレス・イール」
！！」

辺りに、聞き覚えのある男の声が響いた。

ガンガンガンガン！！

女性を守るように、土の壁が高さ25メートル・長さ100メートル程に渡って顕現した。

ドオオオオオン……！！

ブレスと土の巨壁が衝突。

ガアアアアン！！
大爆発を起こし、辺りを撫でる。

女性はうずくまっていたが、自分が無事なのを確認した。

「え．．．私．．．」

「大丈夫かい？」

女性に声をかける男性。

その男性は、地面に両手を付けていた『土帝の宝具使い』、ガイだった。

「あ．．はい．．あなたは．．」

女性は自分を助けた男性を見つめる。

「俺の事はいい、早く逃げるんだ」

ガイは告げた。

「は、はい！！」

女性は走り去っていく。

「あゝあ．．これが非常時じゃなけりや、モテモテだろうがな．．

残念だ．．」

何気に妙な事を告げる、ガイ。

《キアアアアアア！！》

魔鏡神獣が叫ぶ。

「ふん．．俺のモテモテライフを邪魔しやがるお前には．．．《土の王》たる俺自身が．．裁きをくだしてやるよ」

ガイは不適に笑う。

そしてガイは叫ぶ。

魔鏡神獣は呻き、そして消滅した。

「はぁ・・・終わりか・・・だが・・・これだけの数は・・・」
ガイは後ろを振り返る。

そこに居るのは、圧倒的な破壊力でアルビオンを蹂躪する魔鏡神獣達だった。

それも、大きさはバラバラで、普通の人並みの大きさの者や、巨大な姿をしている者もいる。

「たとえ小動物の大きさでも・・・手を抜けば殺されるからな・・・」

「
ガイはそう呟き、アロングイトをしまうと、そちらに向け走り出した。」

《ギアアアアア！！》

今度は、恐竜の姿をした魔鏡神獣が咆哮をあげた。

場所はアルビオン王国・北中部。

大きさは民家より少し大きめだ。

《グアアツ！！》

魔鏡神獣は魔力を纏い始める。

魔鏡神獣の体を魔力が包みこむ。

その時・・・

ブォン！！

風が唸る音が響く。

ザン！！

突然、魔鏡神獣の体が真っ二つに切り裂かれた。

《・・・・・・・・》

魔鏡神獣は悲鳴をあげる事すら許されず、絶命した。

魔鏡神獣の体がサラサラ消えていった頃、その女性は現れた。

「・・・・・・・・こんなものか・私の敵は・下らない・実に下らない」

その女性はそう呟き、現場を見渡す。

その時。

ズン・・・・・・・・

「っ！」

その女性は振り返る。

「貴様・何者だ・この私を、『風翔の宝具使い』アレミラ・イグレインと知つての登場か？」

アレミラが振り返りながら告げる。

そこに居たのは・・・・・・・・

「貴様・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

アレミラが呟いたとき、ひソレは呟く。

《e f j j d j j v k f k c 抹殺・・・・・・・・》

「ッー!!」

ガアアアアアアアアン！！

大爆発が起こった。

その頃、アルビオン城正門前では。

「どうか！お願いします！！・・・この子を・・・この子を救ってくださいませ！！！」

女性が叫ぶ。

その女性の腕の中には、大怪我を負った9歳ほどの子供だった。

その女性に向け、その者は告げた。

「分かりました、その子をこちらに」

「はい！！！」

女性は子供をすぐさまその人物に預ける。

「発動・水魔法・高位詠唱・エル・セルス・ヒスタ・ハピー
リング・レイ」

キユオオオオオオ・・・

青い輝きを纏い、治療を開始したのは、一人の長い水色の髪をした女性だった。

その女性は、青い輝きを放つ右手を子供の体に添える。

キイ・・・イ・・・イ・・・ン・・・

甲高い音共に子供の体の傷が、見る見る塞がっていく。
子供の母親である女性がハッと息を呑む。

「・・・どうぞ・・・これで大丈夫ですよ」

女性は微笑み、その母親に預けた。

「あ、ありがとうございます！！！」

母親はそう告げると、走っていった。

「すみません！！コイツを・・・」

「この子も・・・」

次から次へとその女性に詰め掛ける住人達。

「分かりました、私が全てを直します・・・『水碧の宝具使い』であるこの私、エレイン・マリアガンズが・・・全てをね・・・」

場所は戻り、光闇の間。

「あなたが・・・闇の担い手・・・？」

ミーターファイリスが呆然とレオンを見上げる。

「担い手って言うか・・・闇の系統を使う者って言ったほうが正しいですけど・・・」

レオンは頭を掻く。

「簡単に説明します・・・要は、このアルビオン王国と同じです、星鏡世界にも闇と光の系統は存在します・・・ですが何故レオンが闇の系統を使う事ができるのかは不明ですが」

ヴィクトリアは状況を整理する為、簡潔に告げた・・・だが大部分はミーターファイリスの混乱を、早めに覚ます為だろう。

「・・・すみません・・・少し見苦しいところを見せてしまいましたね・・・私を助けてくれたのに・・・分かりました・・・つまりレオン、あなたは闇の系統を扱える特別な存在ということですね？」
ミーターファイリスが真剣に問う。

「え・・・まあ、はい」

レオンは渋々告げる。

「では、戦いに参戦してくれませんか？・あなたが闇の系統を扱えるのなら、伝説の宝具使いたち以上の活躍ができる・騎士王レオンと共に戦ってあげて下さい、あなたならば・大丈夫、何故かはわかりませんが・あなたならば信用できる気がする・」

ミールフィリスがレオンを見つめる。

ドクン……

あれ……前にもこんな事が……

《あなたは……最強の……何故ならこの私が……》

……

「……レオン？」

きずくとミールフィリスが首を傾げていた。

「あっ……いいえ、ならヴィクトリアと共に行って来ます！！」
レオンが告げる。

ヴィクトリアもまた頷く。

そして行こうとしたレオンを、ミールフィリスが呼び止める。

「ちよつと待って」

レオンが振り返ったとき……

「!？」

ミールテルフィリスの唇が、レオンの額に触れていた。
香水のような・・けれど自然と落ち着く、そんな香りがレオンの鼻をくすぐる。

「なっ!?!?・・なななな」

ヴィクトリアが顔を真っ赤にして口を開け、オロオロしている。

「っ・・・っ!」

レオンは顔が真っ赤になるのを感じた。

そして唇を離すミールテルフィリス。

「あなたに・・大いなる神のご加護があらん事を・・」

ミールテルフィリスが両手を自分の胸の前で合わせ、祈るような姿勢をとる。

レオンは頷くと、走っていった。

ヴィクトリアも後を追うように走っていった。

レオンとヴィクトリアは、城の中を全力で走っていた。

時折、大きな揺れが城を襲っている、それだけでこの事態の深刻さが伺える。

「レオン・・さっきのは・・その・」

途中でヴィクトリアがレオンに質問を投げかける。

「ん?・・なんか言ったか?」

「い、いや!・・なんでもない・」

ヴィクトリアが目を逸らす。

やはり・・・レオンはさっきの女性が・・・いやしかし、星鏡世界にはアリスも・・・

「って、何を考えているのだ私はっ!？」

ヴィクトリアが急に叫んだ。

「うおっ・・・どうかしたのか？」

レオンが驚いている。

「全部・・・お前のせいではないかああああ!」

ヴィクトリアがアツパーを放ち、レオンにヒットした。

レオンとヴィクトリアは城の内側の正門前まで到着した。

「おい、レオン・・・この門はどう開けるのだ？」

ヴィクトリアが目の前にある、強固に閉じられた門を見上げる。

「俺に聞くなよ・・・」

レオンは呆然と、目の前にある扉を見つめる。

二人の目の前には、強固に閉じられた、門とも扉ともいえる物が立ちふさがった。

この門・・・確か、レオンさんが門を開けてたな・・・でも、俺達でどうやって開けるんだ？

「壊すか・・・」

レオンが真剣に呟く。

「何を平然と物騒な事を言っておるのだ！？．．．そんな事できるわけなかるう！！」
ヴィクトリアが突っ込む。

「良いか？．．．城の門というのはとても高価で．．．．．」
ヴィクトリアが語りだしたので．．．．

「発動・黒滅魔法！！」
レオンが叫んだ瞬間、漆黒のオーラが体から溢れ、辺りを満たす。

「レオン！？」
ヴィクトリアがドン引き。

「うおおおお！！」
レオンが漆黒の剣を生み出し、踏み込んで．．．．

ガチャン．．．．．ギイイイイ．．．．．

「！！」
「な！？」
二人は絶句。

レオンが闇の魔法を発動させた瞬間、門に刻まれた紋章が輝き、門が開いたのだ。
「何でだ！？」
レオンが絶句。

「分からぬ．．．だが、パツと見ではお前の魔法に反応したようにも見えたが．．．」
ヴィクトリアが首を傾げる。

「とにかく、開いたのなら行くだけだ!!」

二人は頷くと、城の外に出た。

「っ!?!」

二人は外にでた瞬間、絶句した。

「これは……」

ヴィクトリアが口を押さえる。

それもその筈、辺りを満たすのは……

「血の匂い……」

レオンも絶句。

辺りの町並みは崩壊し、人々の怒号や悲鳴が飛び交う。

さらには到る所で、強大な魔力の衝突も感じ取れた。

恐らく、伝説の宝具使いたちが、魔鏡神獣と戦闘を行っているのだらう。

と、その時。

ズン!!

辺りを邪悪な魔力が満たす。

魔獣とも、神器とも違う……これは……

「なんだ……?」

レオンは呟く。

そして目の前の地面が膨らみ始める。

そして……

《ガアアアアアアン!!!》

地面が膨らんだと思えば、地中からマンティコアのような生物が飛び出してきた。

しかし、その体は白と黒のオーラに包まれている。

大きさは、レオン達の身長のおよそ3倍はあるだろう。

《グルルルルルル……》

魔鏡神獣が威嚇してくる。

《ガアアアアアアン!!!》

咆哮。

ブウン!!!

辺りの地面を巻き上げる。

「く……なんという咆哮……」

ヴィクトリアが後ずさる。

そして。

カパン!!!

魔鏡神獣の口が開き……

ギユウウウウウ……

魔力が圧倒的な速さで収束。

「っ!?!?……まずい!!!……発動・黒滅魔法・カオス・インテビ
テイ!!!」

レオンが咄嗟に魔力砲撃を発動し、向かい討った。

ズ・・・・・・・・ン・・・・・・・・!!
黒と黒が激突。

「ぐう・・・・こいつ・・・・!!」
レオンが歯噛み。
なんて魔力・・・・・・・・!!

ドオン!!

衝撃波が発生し、辺りを一掃。

「ヴィクトリア!!」

「分かっているっ!!」

ヴィクトリアが水魔法を発動、水のヴェールで人がいる方向を
包み、衝撃波を防いだ。

《ガアッ!!》

魔鏡神獣の姿が掻き消える。

「コイツ・・早いッ!!」

レオンが絶句。

ドン!

魔鏡神獣がレオンの真横に出現、口を開けながらレオンを食いちぎ
ろうと迫る。

「うおおおおああ!!」

レオンが叫び、漆黒の剣を作り、受け止める。

ギ……ン……!!

レオンは魔鏡神獣の口に剣を挟み、受け止める。

「ヴィクトリア、俺の剣をつ……!!」

レオンが叫ぶ。

しかし、レオン以外が触れれば、拒絶反応が起きるが、ヴィクトリアは快く引き受けてくれた。

バチン!!

「くう……」

ヴィクトリアがミスティルティンを掴んだ瞬間、火花のようなものが散ったが、ヴィクトリアはそのまま引き抜き、剣を投げた。

ズン!!

ミスティルティンが魔鏡神獣の眼球に直撃。

《グギヤアアアアア!?》

魔鏡神獣が絶叫。

「ナイスだヴィクトリア!!」

レオンはそのまま走り、漆黒の剣をさらに強化する。

「発動・黒滅魔法・シャドウ・オブ・ブレイド……!!」

ドクン……

え……

今、自分の中で、漆黒の剣……レーヴァティンの気配を感じたような気がするが……

レオンは気にせず、剣を振り下ろした。

レオンの中で、何かが鼓動を始めた。

「これは……っ……」
レオンは胸を押さえる。

「なんだ……一体何が……」
と、そう呟いたレオンの前方で、漆黒と純白の光の柱が立ち上がった。

「っ!？」

ズキン……

「向こうに……いけっ……」
レオンはそういって、歩き出した。

――次回予告――

謎の動悸を感じたレオンは、ある場所へと歩き出す。

そこに居たのは、四人の伝説の宝具使いと、ある強大な力を持つ魔鏡神獣だった。

そこにいるメンバーで応戦するも、圧倒的な力でねじ伏せられてしまっ。

そして、レオンの魔剣が顕現する……

そして、騎士王レオンの神具と、ミールフィリスの神具までもが

顕現し・・・！？

「わが元に君臨せよ・・・・・・・・・・栄光煌く王の剣　《カラディーン》！！！」

ミーテルフィリスが叫ぶ。

そして、ヴィクトリアは、『水碧』と運命的な出会いを果たし！？

次回、カラディーン、お楽しみに。

カラディーン

レオンはある場所へと歩いていった。

「……あそこに……何かがあるのか……？」
レオンは胸を押さえる。

先ほどから胸の動悸が治まらない、あそこに行かなければならない・
・レオンはそんな予感に導かれながら、歩いていった。

ズ……ン……！！

レオンの見つめる先には、圧倒的な魔力の激突。
魔力がぶつかり合う度に、衝撃波がここまで広がってくる。

「……」
レオンはただ、進み続けた。

一方レオンが向かおうとしているその場所では。

「はぁ……はぁ……きついで……まさか、ここまでとはな……」

「
ガイが瓦礫から起き上がる。」

「まったく……何なんだ……アレは……」

ガイが見つめる先には……

「はアッ……！」

セリアが叫び、雷を纏う。

バチバチバチ……!!

そして雷を拳に集中。

「私の専売特許は肉弾戦、レオンの時みたいに剣で戦うときの方が珍しいのよ、私は！……だからこそ……私の実力は肉弾戦で初めて発揮されるのよ!!」

セリアが踏み込む。

踏み込む先には、人の姿をした「何か」、人の姿をとる人でなき者。一瞬で距離をつめたセリアが叫ぶ。

「雷電砲拳流……初撃……「雷牙」!!」

セリアの拳が空気を裂きながら、人の姿をした魔鏡神獣に直撃する。
……そう思われたが……

バシン!!

人の姿をした魔鏡神獣が手のひらで受け止める。

「な……ん……です……てっ!?!」

セリアが絶句。

《f d f k h j 無効 f k h k b》

魔鏡神獣が何かを呟く。

バチン!!

「うあっ!!!!」

セリアが民家突き破りながら50メートル程吹っ飛ばされる。

「発動、風魔法・高位詠唱！！・・・ウィンディア・アィクル！！」
「！！」
近くで様子を見ていた『風翔』のアレミラが叫び、風の剣をその手に纏う。

「はアッ！！！！」
アレミラの姿が掻き消える。

ドン！！

魔鏡神獣背後に現れる、そのまま剣を突く。

「入った・・・かわせる距離じゃあ・・・」
アレミラが薄く笑う。

《・・・・・・・・！！》

魔鏡神獣がいきなり振り返り、手刀で切り裂いてきた。

ガアアアアアアアン・・・・・・・・！！

風と手刀が激突。

圧倒的な衝撃波が辺りを一掃する。

ガン・・・ギアン！！

ガイイイイン！！

そのまま何度も斬りつける。

アレミラが風の刃を横に一閃させる。

アレミラの剣速は通常の数倍ではない、理由は空気抵抗を消してい

るのだ。

風の全てを統べる『風翔』であるアレミラの剣速は光速を凌駕する。もはや剣筋が見えないのだ、防ぐのが不可能な筈の一撃を魔鏡神獣は自らの手でいなし、攻撃を弾き続ける。

ガガガン・ギアン！！

アレミラは魔鏡神獣と距離をとる。

「コイツ・・・確実に遊んでいる・・・」

アレミラが苦笑する。

先ほどからこの魔鏡神獣は自分から攻撃する事が無く、相手の攻撃をいなし、弾く事しか行っていない。

と、その時。

《fkjgkdk発動dkgk》

魔鏡神獣の頭上に強大な魔法陣が展開した。

キ・・・イイ・・・イ・・・イ・・・ン・・・

辺りに邪悪な魔力が満ちる。

その魔法陣が空中へと上昇した。

「なんだ・・・やつめ・・・何を・・・」

アレミラが疑問に思ったその時。

「アレを止めるアレミラっ！！！！」

ガイの叫びが聞こえた。

「っ！！！！」

アレミラも漸くきずく。

「まさか……」

セリアが体を起こし、呟く。

キイイイイイイイイイイ……

甲高い音が響き、魔法陣が更に上昇、そして。

ギイイイイイン……

この国全土を覆う程の大きさへと拡大した。

レオンは空を見上げた。

「これは……まさか!？」

レオンは叫ぶ。

ヴィクトリアは突然現れた魔法陣に驚き、固まる。

「なんだ……これは……」

魔法陣が輝き、圧倒的な魔力を溜め始める。

そう、この国全土に魔力砲撃を放ち、一瞬で消し炭にする気なのだ。

「や……やめろおおおお!!」

アレミラが叫ぶ。

「そんな事はさせないッ!!……ここは私達の家だ!!……私達の居場所だ、そんな……全てを破壊するなど認めない!!」

アレミラが叫び、魔鏡神獣へと走り、横に切り裂く。

《s d k k d k k 邪・魔……》

魔鏡神獣が片腕を振るった瞬間、衝撃波が発生し、アレミラを吹き飛ばし民家へ叩き付けた。

「か……あ………何故だ……何故お前たちは……私達の居場所を……」

アレミラは気を失った。

「アレミラっ!!」

セリアが叫び、立ち上がるうとするが……

ガタン……

すぐに倒れてしまう。

「そんな……アレミラ!……動け……私の体……動けっ!」
セリアが叫んだ。

「ちい!!」

ガイは立ち上がり……

「我が元に顕現せよ……大いなる威光の元に生み出されし者よ……」

ガイが宝具顕現を唱えるが。

《……》

魔鏡神獣が人差し指をガイに向ける。

キユオオオオオオオオ……

魔力が収束し始める。

「くそ……」
無論、負傷したガイにかわすことはできない。

レオンはそんな光景を目の当たりにしていた。
「っ！……させるかあああああ！！！」

レオンは叫び、ミスティルティンを抜き放つ。

ダガン！！

地面を穿ち、魔鏡神獣へと突進する。

《????》

魔鏡神獣がこちらへと首をもたげる。

「うおおおおお！！！」

レオンの速度が超高速の領域に入る、レオンの通った後には砂埃が巻き上げられる。

レオンは剣を振り上げ、振り下ろした。

ガキイイイイイイイイイイイイ……！！！！

魔鏡神獣がかざした片腕と、レオンのミスティルティンが激突。
耳障りな高音が鳴り響く。

衝撃波が発生し、周りの民家を瓦礫ごと吹き飛ばす。

「！！……レオン！！！」

ガイが叫ぶ。

「あなた・・・」
セリアも絶句。

「うおおおおお！・・・切り裂けえええええつ！！」
レオンが絶叫。

《・・・・・・・・！！》
魔鏡神獣の足が一步、後ろに後退する。

ガ・・・・・・・・ン・・・・・・・・
魔鏡神獣の足場に輝が入り始める。
レオンの力に地面が耐え切れないのだ。

《kkkkjjjjjjfjmcjk！！》
魔鏡神獣が何かを叫ぶ。

キイイイイン・・・・・・・・！！
魔鏡神獣の体が魔力に包まれる。

「なら・・・こつちも全力で行くぞ・・・おおおお！！」
レオンが絶叫、漆黒の魔力が体から溢れ出す。

「なっ！？・・・あれは・・・闇の系統だと！？」
戦闘を見ていたガイが叫ぶ。
それもその筈、闇の系統は騎士王レオンにしか扱えない筈なのだから。

「嘘でしょ・・・・・・・・？」

セリアが声を震わせ、呟く。

「あの子……本当に何者なの？」

「はあああああつ！！」

レオンが漆黒の魔力を帯びたミスティルティンで何度も斬りつける。

ガンガン……ギアン！！

徐々に魔鏡神獣が押され始める。

と、今まで戦いを見ているだけだった伝説の宝具使いが立ち上がった。

「何を呆けている……私達も行くぞ……」

なんと、アレミラが二人の後ろに立っていた。

『っ！！』

二人は振り返る。

「あの小僧が何者か……など、もはや無意味……我らが加戦しなければ……誰がすると言うのだ？」

アレミラが告げる。

「我が元に顕現せよ……風の王より賜わりし大鎌よ……世界を駆ける天の翼よ……我が身に宿りて、その姿を示せ……疾風迅雷の風鎌……烈風天鎌ハシグルトヤ！！」

アレミラが叫んだ瞬間、風のような鮮やかな紋章が描かれた大鎌が顕現した。

アレミラの姿が掻き消える。

「おおおおお!!!」
レオンは斬り続けていたが。

《!》

魔鏡神獣が動揺。

ドン……………!

「!!!」

レオンが目を見開く。
魔鏡神獣の後ろに、大きな鎌を持ち、それを振りかぶった白い髪をした女性が現れた。

「ふっ!!!」

その女性が鎌を振りぬく。

魔鏡神獣はソレをモロにくらい、吹き飛んだ。
ガィィィィィィン……………

「……………あなたは……………」

レオンが呟く。

「私の名はアレミラ……『風翔の宝具使い』アレミラ・イグレインだ」

アレミラが名乗る。

「っ!!!」

レオンは絶句。

魔鏡神獣の集中が途切れた事で、魔法陣の輝きが弱まる。

「貴様の名は？」

「え……」

「貴様の名を聞いているのだ」
アレミラの視線が鋭くなる。

「え……あ、レオンです」

レオンが告げた瞬間、アレミラは目を軽く見開き……

「そうか……ではレオン、我らと共に戦ってくれるな？」
アレミラが告げる。

「はい！」

レオンが叫ぶと、軽く微笑むアレミラ。

「セリア、ガイ！……お前たちは背後で援助だ、いいな！！」
アレミラが二人に向け、叫ぶ。

「はいはい……」

セリアがため息。

「了解」

ガイがうなずく。

《d k f k j v k d k ツ！！》

魔鏡神獣の叫び声が響く。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
又もや、魔法陣の輝きが増す。

「来たか……行くぞレオン!!」
アレミラの姿が消える。

「っ!!」
レオンもまた走り出した。

その時。

《dfkjffjkjddkkfkfkfd!?!?》
魔鏡神獣が咆哮を放つ。

「ぐ……」
「うあっ……」
アレミラとレオンが耳を押さえる。

魔鏡神獣が叫ぶと、魔力が体から放出された。
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
魔力の本流が辺りを満たし、一步も動けない。

「なんて魔力だ……!!」
アレミラが絶句。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

魔法陣が今までに無いほど輝き、魔力を遂に溜め始めた。

「まずいぞ……このままでは……」
ガイが呟く。

「けどこの魔力量……異常よ!」
セリアが叫ぶ。

レオンは咄嗟にミスティルティンの力を使ったが、打ち消すどころか、無意味だった。

・
それほどの魔力、それほどのレベル……これを無効にするには……
レオンは考えた。

「そう……レーヴァティン程の力がないと……でもレーヴァティンは……」

レオンは頭を下げる。

ドクン……
「っ!？」

ドクン……
ドクン……
ドクン……
ドクン……

《あきらめないで……レオン……》
レオンの中に、ある女性の声が響いた。

「こ……の……声は……」
レオンは絶句した。

そう……レオンは知っている……昔から何度も聞いた……

《あなたには……皆を守りきる力がある……ソレをあきらめてどうするの?》
女性は続ける。

《前を向きなさい、あなたに出来るのは……それ位しかないの……あなたは弱い……だからこそ……あなたは本当の「強さ」を知っている……》

レオンの頭に……心に……その女性の声が響く。

《行きなさい……レオン……私の……所へ……早くたどり着いて……》

「姉さん……?……」

レオンの目から涙が零れた。

「うん……分かったよ……姉さん……」
レオンは立ち上がった。

「レオン!?!……この中で立ち上げられるのか!?!」
レオンの横のアレミラが絶句。

自分達ですら、立ち上がれもしないというのに……!!

「……そう……圧倒的な力は……」

ドクン……

「ソレよりも大きな力によって……蹂躪するもの……」

ドクン……

「我が元に……君臨せよ……」
レオンが呟く。

「その言葉……まさか貴様……」
アレミラが瞠目。

「世界を終焉へと導く魔剣よ・全てを殲滅し、我を全ての頂へと導かん、漆黒の戸帳よ、今……降りよ、神よ、嘆け恨め……来よ、殲滅の黒王剣へレーヴァテイン……」

レオンが叫んだ瞬間……

グ……ン……

アルビオンが震えた。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……

・

レオンの体から、魔鏡神獣の魔力をも圧倒する程の魔力が溢れる、あふれ出た魔力は、漆黒のオーラとなり、アルビオン全土を覆う。

「うおおおおおおお！！！！！！」

レオンが叫び、片手を伸ばす。

ガシャン……………

レオンの右手に、漆黒の大剣が握られる。

「これは……………」

セリアが絶句。

「ああ……………間違いない……………神の威光そのもの……………神具だ……………」

ガイが目を奪われる。

「レオン……………貴様は……………？」

アレミラが口を開け、絶句。

「行くぞ……………」

レオンが告げ、レーヴァティンを軽く一振り振った。

ガシャン！

キ・・・イ・・・イ・・・イ・・・

天空を埋め尽くしていた圧倒的な魔力と共に、魔法陣が消え去った。

《dfkjfk kfd・・・!?》

魔鏡神獣が叫ぶ。

そして、人差し指を向けるが・・・

レオンが。

「消える」

告げた瞬間。

バチン!!

魔鏡神獣の左腕が消え去った。

《キアアアアアア!!》

初めてあげる魔鏡神獣の悲鳴。

ダガン・・・!!

魔鏡神獣が地面を蹴り、逃げ出した。

「!・・・逃がすか・・・っ!?!」

レオンは目眩に襲われ、膝をつく。

体が・・・っ!!

「レオン!!」

アレミラが慌てて支える。

「魔鏡・・・神獣・・・が」

「大丈夫だ・・・あちらには・・・あのお二方がいる」
アレミラが微笑む。

魔鏡神獣は急いで逃げていた。

しかし・・・

《！！》

魔鏡神獣は立ち止まった。

魔鏡神獣の前に、二人の人物が立ちふさがった。

「やれやれ・・・レオン君には驚かされてばかりだ・・・」
騎士王レオンが。

「ええ・・・感謝しなくちゃ・・・」
ミールフィリスが告げる。

《・・・っ！！》

魔鏡神獣は弱弱しく後ずさる。

「一撃で・・・」

「沈めます」

騎士王レオンとミールフィリスが告げる。

まずは騎士王レオンが。

「我が元に君臨せよ……漆黒の深き終焉より現れし魔剣よ……大いなる名の下に……世界を断ち切る因果の力……我に仇名す全てを喰らえ……漆黒蹂躪の天剣ハアスカロンヤ！」

騎士王レオンが叫んだ瞬間、漆黒のオーラが辺りを満たし……騎士王レオンの手に、一振りの漆黒の剣が握られた。

《fkfkjk……dkfk!!》

魔鏡神獣が叫び、魔力を溜め、突進してくる。

「無駄だ……」

騎士王レオンが剣を一閃。

ズズズズズズズン……

空間ごと、魔鏡神獣の腕を切り裂いた。

《……!?!?》

そして。

「我が元に君臨せよ……全てを包む陽光の太陽……悲しみ、嘆き、その全てを祓い……神の祝福の力を……世界に知らしめ……希望の架け橋となれ……栄光煌く王の剣ハカラデーンヤ！」
ミータールフィリスが叫んだ瞬間、空が割れた。

今まで闇が支配していた空に、一筋の光が注ぐ。

その光がミータールフィリスに降り注ぎ。

ガシャン……
純白の大剣が握られた。

「カラデイン・浄化の神光（ハルトレア・ライト）……行きます・
……」
ミールフィリスがそういつて、剣を振った。

キイイイイイイイイイイイ……
光、圧倒的な光が降り注ぎ、全てを滅却した。

こうして魔鏡神獣の全ては消え去った。

-----次回予告-----

遂に最強の敵を退けたレオン達、アルビオン王国は祝い事で大騒ぎ。

そして、ヴィクトリアにも、運命的な出会いがあった。
「あなたなら……私の変わりになれそう……」

「あなたに・・・『水碧』の力を・・・紋章を譲渡します・・・」

「そんな・・・どうして!?!」

ヴィクトリアは叫ぶ。

次回、水碧の宝具使い、お楽しみに。

水碧の宝具使い

アルビオン王国に、魔鏡神獣が浮上し、大きな危機が訪れた。しかし、その危機は伝説の宝具使いと、異世界からの使者によって防がれた。

アルビオンの人々は、その者達を祝福した。

そして現在はアルビオン城の会談を行う為の部屋にて、国のお偉いさんと謁見中というところだ。

「本当にありがとう。そなた達のお陰で、この国の危機を回避する事ができた。感謝してもきれない。」

レオンとヴィクトリアの二人が座っている座席に向かい合うように座っていた老人が立ち上がり頭を下げた。

「そ。そんな。俺たちはするべきことをしたまでですよ！」

レオンは両手をかざして首をふる。

「ええ、そのとおりです。私たちはこの国にお世話になっているのですから」

ヴィクトリアが微笑む。

.....

レオンは、ヴィクトリアの笑顔に影がさしているのが気になった。無論、その理由を知っているレオンとしては、一々追求するという事はしない。

「そうですか。しかし、異世界からの来客だったとは。それに

加え、闇の系統を持つ者までが……」
老人が告げる。

そう、レオンが闇の系統が使えるという事は、国のお偉いさんの極一部と伝説の宝具使い……そして、騎士王レオンとミールフィリスだけが知る事実だ。

そして、レオン達が住む世界……星鏡世界についても話しはしたが、このアルビオン意外には人が生活できる場所がないので、そのような場所は存在するはずがなく、文献にも何も記されていないらしい。

「では……」
会談部屋に女性の声が響く。

全員がその方向を向く。

この部屋は、大きな丸い机の周りに、円を描くように椅子が配置されている。

その一角に座っていたミールフィリスが声をあげた。

円卓の会議場とでも行ったほうがいいだろうか。

「これで会議が終了という事でよろしいですね……？」
ミールフィリスが取り仕切る。

「ああ……かまわぬよ……本当にありがとう……そなた達には、本当に感謝する」

老人はそう告げると、数人の部下達を引き連れて出て行った。

他にも同じように、偉いさん方が握手を求めてきたりと、色々苦勞

する場面だった。

因みに、こういったことに慣れている本物の王族であるヴィクトリアにとっては、日常茶飯事と変わらないのだが。

そして部屋には伝説の宝具使いと、騎士王レオン、ミートルフィリスだけが残された。

「はぁ・・・面倒ね・・・会議なんて必要ないわよ・・・」
セリアがげんなり告げる。

「おいおい・・・そんなに面倒がるなよ、セリア」
ガイが半眼で突っ込む。

「・・・・・・・・」
アレミラは目を閉じ、じっとしてまま座っている。
寝ているのかとも思ったが、セリア曰く、単に瞑想に耽っているらしい。

やがて、アレミラは静かに目を見開くと。

「お前達、少しは静かにしろ・・・この会議が行われた本当の理由は、異世界の住人を祝福するほかに・・・『水碧』の死についての事が本当の課題ではないのか？」

アレミラが視線を鋭くして、二人を睨む。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人は口を噤む。

ヴィクトリアは唇を噛み、下を向く。

そして、僅かにヴィクトリアの左腕が青く輝いているのが見て取れ

た。

左腕を覆うように刻まれているのは・・・水を司る・・・聖なる文様・・・『水碧』の証だった。

そう・・・レオン達が魔鏡神獣と戦いつている間に、ヴィクトリアにも運命的な出会いがあったのだ。

時はさかのぼり、魔鏡神獣とレオン達が戦闘を繰り返している中、レオンと別れたヴィクトリアは、城の正門へとやってきた。

子供の泣き声、悲鳴・・・さまざまな嘆きが行きかうそこは、もう一つの戦場といっても過言ではなかった。

「ひどい・・・」

ヴィクトリアは顔を歪ませる。

ひどい・・・あまりにもひどい・・・

そこら辺に大怪我を負い、うずくまる人達が山ほどいる。

中にはもう命を落とし、布を被せられた人・・・その人に顔を埋め、泣き喚く家族・・・

そんな光景が広がっていた。

「くっ！・・・」

ヴィクトリアは呻き、大怪我を負っている者達の元へと駆けつけた。

「・・・あなたは・・・」

左腕を全て焼かれた男性が、虚ろな目でヴィクトリアを見上げる。

「今から私があなただを治療する・・・腕をあげる」
ヴィクトリアはそう告げた。

「・・・・・・・・」
男はキョトンとしていたが、言葉の意味がようやく理解できたのか、腕をおおずとあげる。

「・・・・・・・・ふう・・・・・・・・」
ヴィクトリアは深呼吸をし、魔力を集中させる。
やがてしゃがみこみ・・・・

「発動・・・水魔法・・・中位詠唱・エーテ・・・アンセル・・・グリス・・・サイ・・・ヒール・・・ミリエル」
「キ・・・イ・・・イ・・・ン」

ヴィクトリアの周囲に清らかな空気が溢れ、体が青白く輝き始める。

そして、男性の腕にかざすと・・・・
キュウウウウウウ・・・・・・

男性の腕の傷が段々と癒えていく。

男性は目を見開き、驚く。

「あなたは・・・何者なのですか・・・・これほど強力な魔法・・・」

「男性は呟いたが、ヴィクトリアが何も言わないのを見ると、黙って治療を受けた。」

そして、男性の傷が完全に癒え、立ち上がると礼を告げ、去ってい

った。

ヴィクトリアはそのまま癒しの魔力を纏いながら、次々とけが人達を治療していく。

そして、20人にも匹敵する数の者達を治療し終えたヴィクトリアが立ち上がるうとするが……

「ぐっ……」

頭に痛みが走り、思わずよろめく。

「まさか……魔力を使いすぎたか……まあ……尋常ではない数を治療した……だが……私は救って見せる……ここにいる全ての人達を……」

ヴィクトリアは体に鞭を打ち、立ち上がるうとする。

ズキン！！

「っ！？」

体全体に痛みが走り、地面に倒れてしまう。

ヴィクトリアは仰向けに地面に倒れたまま、それでも懸命に惨状を見る。

「ふ……惨めなものだ……私は……王女なのに……何も……誰も救えないのか……」

ヴィクトリアの目から一筋の涙がこぼれる。

王女は……民を……国を……守るために……いるのに……

意識が深淵へと沈んでいく。

「あら、あなたはもう十分救っているのですよ？」
女性の声が響いた。

「……誰……なのだ……？」

そう告げた後、ヴィクトリアは気を失った。

……

「う……」

ヴィクトリアは、意識が浮上していくのを感じ取った。

「ここは……」

ヴィクトリアが目を開ける。

「ああ……良かった」

突然、聞いた事のある声が響いた。

「あなたは……」

ヴィクトリアの前に、最初に腕の治療をした男性がしゃがみ込んでいた。

「あなたに治療してもらった後、あなたが心配になりまして……追いかけていたら地面に倒れていたものですから……それに、あなたを心配してきたのは私だけではありません」

男性が告げると、そろそろと人が集まってきた。

「！！」

ヴィクトリアが愕然とした。

そう、ヴィクトリアの周りにいたのは、ヴィクトリアが治療した人達全員だった。

まさか……私を……？

ヴィクトリアの胸に熱い思いが満ちる。

その時、声が響いた。

「あら、目が覚めたようね」

ヴィクトリアは振り返り、絶句した。

「姉……様……？」

ヴィクトリアが絶句し、呟く。

「姉さま？……私はあなたの姉上ではありませんよ？……誰かと勘違いしておいでは？」

ポニーテールの形で括つてある水色の髪・青いブルーの瞳……ヴィクトリアの知っている限り、ミルフェリーナ第一王女・ハエリス・シア・ミルフェリーナと似ている。

髪の色が違うだけマシだが、一瞬だけ似ていると思ってしまった。これが黄金の髪だったら、思わず抱きついていたかもしれない。

「あの、それではあなたは一体……」
ヴィクトリアが呟く。

「ああ、そうだったわね……私は『水碧の宝具使い』エレイン・マリアガンス
といいます」

エレインが名乗る。

「水碧の宝具使い!?!」
ヴィクトリアが絶句。

「はい、で・・私はあなたに礼を言いに来ました、あなたが全力で治療をしてくれたお陰で、尊い命を救う事ができました・・ありがとうございます」

エレインが微笑む。

「そんな・・・私は途中で・・・」

ヴィクトリアは俯く。

途中で気を失ったヴィクトリアは恥ずかしかったのだ。

「いいえ、それは恥ではありませんよ・・あなたはいくつもの命を救いました・・それであなただけが気絶しても、誰も攻めたりはしません」

エレインが微笑む。

ヴィクトリアはそれだけで救われた気分になった。

「ところで・・あなたの魔力を回復させたのだけど、どうかしら?」
エレインが首を傾げる。

「・・・・・」
ヴィクトリアはために魔法を使い、いつもの調子へと戻っている事が分かり、絶句。

水系統のナイトとして、頂点に立つヴィクトリアだからこそ分かる。傷を癒すだけならば、簡単だ・・しかし、魔力を回復させるのはヴィクトリアでも不可能な事だ。

それほど、魔力回復は高度な魔法だ。

「これは・・・凄い・・・」
ヴィクトリアが驚き、呟く。

「ふふふ・・・どうやら、あなたは治療に関して、大きな力と知識を持っているようですね」
エレインが微笑。

そして、それからは二人でだけが人の治療に専念した。
無論、二人で行う治療の制度と成果は凄まじいものだった。

あっという間とはいかないが、素早い時間で治療していき、すぐに全員を治療し終えた。

そして、ヴィクトリアはエレインと色々な話をした。

自分が異世界の人間だという事・・・
水系統のナイトであること・・・
間違えた自分の姉の事・・・

いつの間にか二人は私語で話すようになっていた。

そしてヴィクトリアはお返したと言われ、魔法のコツを教えてもらった。

そして、ヴィクトリアは治療を開始したのだ。
ある女性が、体に痛みを訴えてきた。

《いい？ヴィクトリア・水系統の魔法は波なの、波は大きな波、小さな波・そういつた自然の流れによって成立するの、水は波紋を広げ、また元に戻る・水は変幻自在・だからこそ、どこに異常があるのか・それをも見つける事が出来る・そして水系統の魔法の真骨頂は……》
エレインに教えられたとおりの言葉を思い出しながら治療する。

「広がる波紋によって・その人の異常の原因そのものを・ハ体から取り除く」

ヴィクトリアが呟いた瞬間、体の青白い輝きがさらに強まる。

《それこそが……》

『癒しと波紋を司る、水の本命』

ヴィクトリアの声と、エレインに教えてもらった言葉が、重なる。

リイ・イ・ン……

青白い光がヴィクトリアの手を伝い、女性の体内に入った瞬間、痛みが消えた。女性が告げた。

それと入れ替わり、女性の体から黒い霧のようなものが抜けた。

「ふう……」

ヴィクトリアは尻餅をつく。

さて、エレインはと、探し出し……城の裏側にてヴィクトリアが見たものは……

地面に吐血し、仰向けに倒れている姿だった。

「つつ!?!」

ヴィクトリアは声にならない悲鳴をあげると、すぐさま駆け寄った。

「エレイン、エレイン!?!? ・ ・ ・ どうしたのだエレインっ!?!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「あら ・ ・ ・ ヴィクトリア ・ ・ ・ 治療は ・ ・ いいの?」

エレインが弱弱しく笑う。

「それどころではないだろうっ!?!? ・ ・ ・ どうしたのだ、誰かに ・ ・ ・ ヴィクトリアの言葉を、エレインは首を振って遮る。

「いいえ ・ ・ ・ けほっ ・ ・ ・ これは ・ ・ ・ 私の抱えていた持病 ・ ・ ・ なの
時に血を吐きながら告げる。

「持病 ・ ・ ・ だと??!」

ヴィクトリアが目を見開く。

ならば治癒で ・ ・ ・ ・ ・

ヴィクトリアの考えを見抜いたように。

「無理よ ・ ・ ・ この病は治癒できない ・ ・ ・ それは『水碧』である
私が一番良く分かっているの ・ ・ ・ 」

エレインが苦笑し、告げる。

「無理だと分かっていたから ・ ・ ・ 私はあなたに技術を伝えたかった
 ・ ・ ・ 私の ・ ・ ・ けほっ!?!? ・ ・ ・ 変わりに ・ ・ ・ なれる人に ・ ・ ・ 」
又もや吐血。

ヴィクトリアはすぐさま治癒魔法を組み立てる。

青い魔法陣が二人のいる地面に展開、二人を包む。

ヴィクトリアの体を青白い輝きが包み込む。
その手をエレインの体に当てる……しかし。

「なんだ……これは……」
ヴィクトリアは思わず告げた。

エレインから教えてもらった治癒魔法の術式で、体内の原因である物を取り除こうとしていたが……
「体の全てが……」

そう、エレインの体はもう、全身がボロボロで、体構造のほとんどが機能を停止しようとしていた。
よくここまで生きていたものだ……と、驚かれるレベルだ。

「こんな……こんな事がっ！」
ヴィクトリアは叫ぶ。

「ふふ……言ったわよね……私のは無理よ……だからね……あなたに私の力を……あげる……あなたなら、私の代わりになれる……」
エレインはこんなときだというのに微笑んでいた。

何故……笑っていられるのだ……エレイン？
ヴィクトリアは涙を零した。

「あなたに……『水碧』の力を譲渡します」
エレインが真剣に告げた。

「そんな……どうして!？」
ヴィクトリアが泣きながら叫ぶ。

だが、ヴィクトリアの質問には答えず、エレインは言霊を呟き始める。

「我・大いなる『水の王』なり・我が主たる者への誓いを破る事適わず・ゆえに我が命を賭して・この者へ祝福の紋章を・
・・・けほけほっ!・・・譲渡・します・・・」

エレインが告げた瞬間、エレインの左腕に・まるで水の精霊が踊っているかのような美しく青い紋章が浮かび上がり・それが光となって、ヴィクトリアの左腕へと転移した。

リイイイイイイン・・・・

「これは・・・」

ヴィクトリアは思わず、左腕を見つめる。

「ふふ・・・これでああなたは・『水碧の宝具使い』として・・・認められたわ・・・私の分まで・・・頑張るのよ・・・ヴィクトリア」

エレインが、まるでわが子を慰めるように、手を涙にぬれたヴィクトリアの頬へと添える。

「待て、待ってくれっ!!・・・私はあなたに何も・・・何もっ!!」
ヴィクトリアが叫ぶ。

「短い間だったけど・・・あなたと過ごした・・・この時間・・・とても楽しかった・・」

エレインも涙を浮かべる。

エレインはヴィクトリアの言葉を聞かず、一方的に話す。

「・・・私・あなたのお姉さまが・・・羨ましいわ・・」

「
．．．．
エレインの瞳から光が消え始め．．．．

最後にこう、呟いたのを．．．ヴィクトリアは見た。

《．．．．ありがとう．．．．》

エレインが．．．瞳を閉じた。

「エレイン．．．おい．．．聞こえているのだろう．．．？．．．エ
レイン．．．エレイン．．．う．．．うあああああ
！！！」

ヴィクトリアは泣き叫んだ。

そして．．．現在に到る．．．

それを聞いた民、ミートルフィリス．．．そしてヴィクトリアは涙を
流した。

他の伝説の宝具使い．．．騎士王レオンは目を閉じて、黙祷した。

レオンも、会ったことは無かったが．．．優しい人物だという事が伝
わってきた。

夜、アルビオン城の庭にある湖の畔にて、ヴィクトリアは一人で座り込んでいた。

月があたりを薄暗く照らし、虫の鳴き声が響く。

「何故・・・私だったのだ・・・エレイン・・・私は何も・・・」
ヴィクトリアは膝を抱え、一人で呟く。

「こんなところにいたのか・・・」
レオンが呟く。

「レオン・・・?」
ヴィクトリアは泣き顔を見せたくなくて、顔を拭いた。
「なんのようだ・・・お前は舞踏会に参加すればいいだろう?」
ヴィクトリアは思わず強く当たってしまった。

ああ・・・私は何をしているのだろう・・・悪いのはレオンではないのに・・・

「まあな・・・でも・・・ヴィクトリアも参加しろよ・・・」
レオンが告げる。

城の内部からは、朗らかな音楽が漏れてくる。

「私はいい・・・私は・・・どうせ・・・」
ヴィクトリアは告げる。

「そうやって・・・何時までも嘆いてたら・・・エレインって人は喜ぶのか？」

レオンが告げる。

っ！？

ヴィクトリアの中で、怒りが爆発した。

「なんだと!？」

ヴィクトリアは立ち上がり、レオンの胸倉を掴む。

「だってそうだろ?・・・ヴィクトリアがそうやっていじいじしてるのを・・・そのエレインって人が見たがるか？」

レオンは冷静に言う。

「お前には分からないだろうっ!!・・・私の目の前で死んでいったエレインが・・・どんな思いを胸に秘めていたのかわ!!」
ヴィクトリアは叫ぶ。

「じゃあそのエレインさんはヴィクトリアになんて言った!!」
レオンも叫ぶ。

「!!」

ヴィクトリアが目を見開く。

「そうやって泣いていたらエレインさんも悲しむだけだろ!!・・・違うかよ!?!・・・何時までも嘆くんじゃねえっ!!」
今度はヴィクトリアの胸倉を掴み、レオンが絶叫。

ヴィクトリアは絶句し、目を見開く。

そして、エレインの言葉を思い出す。

《私の分まで・・・頑張るのよ・・・》

ヴィクトリアは目を見開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・レオン・・・・・・・・」

ヴィクトリアは呟くと。

トン・・・・・・・・

レオンの胸に頭を押し付ける。

そうか・・・・・・・・私は・・・なんて愚かなのだ・・・・・・・・こんなにも
・・・頼りになる存在が・・・近くにいたのに・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・う・・・・・・・・」

ヴィクトリアが嗚咽を漏らす。

「・・・・・・・・ヴィクトリア・・・お前・・・・・・・・」

レオンは軽く目を見開き、ヴィクトリアの頭を優しく抱いた。

「う・・・・・・・・うう・・・・・・・・うわああああん!!」

ヴィクトリアの胸に秘めていた悲しみが溢れ、涙となって・・・声と
なつてあふれ出る。

ヴィクトリアの泣き声が、庭に響いた・・・このときだけは・・・虫
の鳴き声も・・・辺りの音も・・・ヴィクトリアを慰めるように、静
かだった。

そんな光景を、城から見ている人物がいた。

「……『水碧』の奴……馬鹿じゃねえのか……勝手に逝っちまいやがって……クソ……」

男が告げる。

「あら、あなたも悲しいのね」

ミートルフィリスが後ろから男に声をかける。

「ミートルフィリス王女殿下……」

男は頭を下げる。

「あなたが帰ってきたのは知っていたけど……早くない？」

ミートルフィリスが首を傾げる。

「……任務は途中で切り上げました……水碧が死んだと……聞いたので」

男性が顔を逸らす。

「ふふ……きっと……エレインも喜んでるわ……あなたが以外に仲間思いだということにね……『炎皇の宝具使い』……ガレス・フロレンス」

ミートルフィリスが告げる。

「……失礼します」

ガレスはマントを翻し、舞踏会場へと歩いていった。

「あいかわらず素直じゃないわね……でも」

ミートルフィリスは、視線を庭に向ける。

「あら？」

ミールフィリスが目を見開く。

エレーンが、レオンとヴィクトリアを労わる様に二人の頭を撫でて
いる姿が見えたから。

「見間違いよね……」
目を擦りながら、ミールフィリスは会場へと入っていった。

《ヴィクトリア……頑張っ
てね……私……応援して
るから……》

エレーンの声が、風に乗って聞こえてきたように……ヴィクトリ
アは感じたのだった。

――次回予告――

エレーンの死……それはヴィクトリアを成長させる架け橋となっ
たのだろうか……

『水碧』が命を落とし、悲しみに駆られるレオン達だったが、元の
世界に帰るための方法を再び探し始めるレオンとヴィクトリア。

ヴィクトリアの心の弱さを知ったレオンと、女性として一段階成長したヴィクトリア。

そんな二人の前に星鏡世界へと帰るためのヒントが見つかった。

次回、転移魔法陣、お楽しみに。

転移魔法陣

聖天王国アルビオン・そこは、突如出現した謎の領域、魔鏡の庭園の上空に浮かぶ王国。

星鏡世界の住人であるはずのレオンとヴィクトリアは、きずくとアルビオン王国に居た・そして、幾多の戦い・別れを経て二人はまた一步成長したのであった。

「しかし・・・これだけ盛り上がるものなのかよ・・・祭りつて・・・」
レオンが無然と呟く。

「そうだな・・・ルベリージア学院の創立祭でもここまで盛り上がる事はなかった・・・」
ヴィクトリアもまた同じように告げる。

二人がいるのはアルビオン王国市街地。
今日は、アルビオン王国を救った騎士王レオンやミールフィリス・伝説の宝具使い達・そして、レオンとヴィクトリアを祝う為の祭りが開かれている真つ最中だ。
どこの民家も、家の前に店を構えていて凄い数になっている・・・道を埋め尽くすほどだ。

「つたく・・・名前さ出さなきゃばれることはないって・・・いくらなんでも・・・」
レオンがため息。

「ああ・・・以外にお転婆なのだな・・・ミールフィリス皇女

は・・・」
ヴィクトリアもため息。

二人は道を歩いているわけだが、道のほとんどを人が埋め尽くしているため、気を抜けばあつという間に人の流れにつかまって流されてしまっただろう。

そしてレオンはあるものを見つけた。

「お、あれってりんご飴か？」

レオンが、あるものが販売してある屋台を見つけ告げる。

「りんご飴？・・・何なのだそれは」

ヴィクトリアが不思議そうに首を傾げる。

「え・・・ヴィクトリアってりんご飴も知らないのか・・・？」

レオンが驚き、質問を投げかける。

「う・・・うむ、ミルフエリーナの居住区にも祭りはあつた・・・あつたのはあつたのだが・・・王族としての仕事の所為で、祭りなど参加する暇もなかった・・・」

ヴィクトリアは寂しそうに告げた。

そう、王国の住民が祭りで騒いでいる間、ヴィクトリアはアリウスと共に王室の仕事を手伝わねばならなかった・・・無論、アリウスは祭りに行つて来れば良いと言ってくれたのだが、その頃のヴィクトリアは祭りなどくだらない物と思つていたため、祭りごとに関しては無知なのだ。

「成る程・・・」

レオンは納得した、思えば最初の・・・学院に入学した頃のヴィクトリアは堅物だったような気がする・・・今は丸くなっているが。

「……つたく・なら、俺が祭りつてものを教えてやるよ」
レオンは笑うと、ヴィクトリアの手を引いて店を回り始めた。
まずはりんご飴を買ったところだ、資金はミールフィリスから貰
っている為、困るような事はない。

「ほい」

レオンは買ったりんご飴をヴィクトリアに渡す。

「あ・ああ」

ヴィクトリアはおずおずとそれを受け取る。

二人で飴を舐めながら道を進む。

「……ヴィクトリア・もしかしてと思うけど・エレイ
ンのこと……」

レオンは聞いた、聞きづらいことではあるが何時までも根に持って
いては、前に進めない。

ヴィクトリアは僅かに暗くなったが、それでも顔を上げて答えた。

「……確かに私は、エレインが死んだ直後はショックで立ち直れ
なかったが・レオン、お前のお陰で私は進めるようになった・
礼を言うぞ・レオン」
ヴィクトリアが微笑む。

「!……そうか……」

レオンは一瞬ヴィクトリアの笑みに魅せられたが、すぐさま平常心
に戻る。

「私は、エレインの分まで頑張らなければならぬ……星鏡世
界に戻ってもそれは変わらない・そう・星鏡世界に帰っても・
・帰っても・帰っても?」

ヴィクトリアは何かにつかかったように何度もその言葉を繰り返す。

レオンもその言葉に引っかかりを感じる。
帰るって・・・何だ・・・？

待て待て・・・俺たちはそもそもアルビオンの住人では・・・

『ああっ！！！』

レオンとヴィクトリアは同時にお互いの顔を指し、叫んだ。
何事かと周りの住人たちが振り向く。

しかし二人はそれどころではなかった。

『俺達ハ私達ハはもともとアルビオンの住人じゃあないじゃんハな
いではないか！！！』

二人して叫んだ。

「何をのんきに祭りを回っていたのだ、私たちは！！」
ヴィクトリアが目を見開き告げる。

「ああ・・・魔鏡神獣とか、この街の事情に関与しているうちに・・・
順応してしまったのか・・・早く帰らないとっ！！」

レオンが叫びながらヴィクトリアと頷きあい、一斉に城へと全力で走った。

「ふう・・・しかし・・・魔鏡神獣があそこまで一気に攻めてくる

なんて・・・一体何が・・・」
ミールフィリスは自分の部屋・・・つまり、皇女専用のフロアにある部屋にてティーカップを傾けながら休憩していた。

先ほど、水碧の死についての緊急会議が終わったところだったのだ。
「エレイン・・・あなたはやはりあの子達に何か、感じる場所があったんですね・・・」

ミールフィリスは顔を曇らせる。

コンコン・・・
扉がノックされた。

「皇女殿下、城の正門にレオンとヴィクトリアと名乗る二人がいるのですか、通しても構いませんか？」

扉越しに衛兵の声が響く。

「レオン君にヴィクトリアさんですか？・・・はい、構いませんよ・
・通してあげてください」
ミールフィリスは告げた。

5分後・・・
扉を開け、レオンとヴィクトリアの二人が入ってきた。

「どうかしたのですか？・・・祭りを楽しんでいる頃かと思っていたのですが・・・お金も十分渡しましたし・・・」
ミールフィリスが心当たりのありそうな事を順に告げる。

「いえ・・・実は・・・」
レオンがやや遠慮げみに告げる。

「……成る程……すっかり失念してました……あなた達は星鏡世界の住人であり、アルビオンの民ではありませんでしたね……」

寂しそうに告げるミールファイリス。

「ええ、それで……悪いのですが……帰るために情報収集を強力してほしくて……それでここに来たのですが……」

ヴィクトリアが呟く。

「……そうですね……分かりました、ではアルビオンの民に情報を持っているものがあるか聞いてみるようにお触れをだします、すぐにはつきりするでしょう」

ミールファイリスは微笑んだ。

なので、と付け加えて。

「今少し、祭りを楽しんできてくれませんか？……今頃はセリアたちも祭りに参加している頃ですし、救世主たるあなたがたに楽しんでいただかなければ祭りの意味がありませんから」

ミールファイリスがそう告げたので、二人は祭りへと参加する事に決めたのだった。

そして、それから三日が経ったある日。

「本当ですか!!」

レオンは叫んだ。

そこは、円卓の会議場。

その椅子に座っているのは、レオンとヴィクトリア……そして伝説の宝具使いであるセリアとガイ、そしてアレミラだった。

「ああ、間違いないだろう」
そう告げたのはアレミラだ。

ミートルフィリスが少し前に、この国に妙な出来事などがあつたかどうかを聞きまわるように城の兵士達に命令した。

それから二日がたって、住民から妙な魔法陣が刻まれた台座が見つかったという連絡が寄せられた。

その住民が住む地域を担当していたのがアレミラだ。

「話によると、その巨大な台座には魔法陣が刻まれており、魔鏡神獣がこの国に浮上してきたとき、強く光を放っていたそうだ」
アレミラが真剣に告げる。

「魔鏡神獣が浮上したとき……」
レオンが呟く。

その台座は、この国の外れにある森の中にポツンとあつたそうで、今の今まで誰もきずかずにいたのだが、魔鏡神獣が浮上したときに明るく輝いているのをその住人が発見し、それを報告したというわけだ。

「それで……その台座が……しかし……」

ヴィクトリアがレオンの横で、何かを呟いている。

「どうした？」

レオンが尋ねる。

「いや、なんでもない」

魔法陣が刻まれた台座だと？

それではまるで……転移魔法陣ではないか……

ヴィクトリアが悶々と悩んでいる事を露知らず、レオン達は話を進め、その台座を調査する事に決めたのだった。

場所は星鏡世界……

「ふふふ……さあ……そろそろゴールへと近ずいたようだね……」

ジャックはそう呟いた、ジャックの手のひらには一つの水晶球が乗っていた。

その水晶球には、現在アルビオン王国にいるレオン達の姿が映し出されていた。

「さて……仮初の平和は終わりを告げる……そして始まる……絶対的な破壊……そう、アルビオン王国の崩壊がね……」
ジャックは唇を歪ませ、笑った。

「それにそろそろ潮時かな、この『記憶の神玉・アルス』の役目も……」
ジャックの手のひらの上にある透明の宝玉が煌いた。

場所は再び戻り、アルビオン王国。

レオン達一行は、例の台座に向かっていった。

ミールファイリスと騎士王レオンは、大事な会議があるとかでここには来れなかった。

因みに、メンバーはレオン・ヴィクトリア・セリア・ガイ・アレミラの5人だ。

アレミラは案内する為について来たのだが……セリアとガイに居たっては……

《え、本当？…なら私も行くわよ！…どうせ暇だし》
セリアは地味に本音を告げ。

《ほう…それは面白そうだ、城の警備よりはずっとかマシだろう》
ガイに居たってはもっと最悪で、自分の仕事をサボる為についてきた。

「はぁ……それにしてもお前たちは……」
アレミラがジト目で、セリアとガイを睨む。

「何よ〜あんなただけ楽しそうたってそうはいかないわよ？」
セリアが睨む。

ガイは我関せず状態。

それからレオン達一行は森を進み続け、遂に謎の台座へと到着した。

その台座は森の木々に埋もれるような形で存在していた。

「あ……こりゃあ発見できねえわな……」
ガイが台座がある辺りを調べ、呟く。

「どづいことだ？」

アレミラが質問する。

そう、ガイの言葉には妙なところがある。

いくら森の木々に隠れているとはいえ、見つからないほどではない。

「違うぜ、木の所為で見つからねえとか、そういうことを言ってるじゃない・・・この台座を中心に半径1キロ程度まで・・・あらゆる魔力反応を無効にする結界が貼ってあるんだよ」

ガイが鋭く台座を睨む。

「こんな結界・・・この国で・・・いや、この世界で貼れる奴なんていねえよ・・・これだけの物を生み出すとなると・・・人間じゃ無理だぜ・・・」

ガイ以外の全員が、黙りこくった。

「全員気を抜くなよ・・・この台座・・・この世のものじゃあないぞ」

ガイが、そう・・・告げた。

ドクン・・・・・・・・・・

「っ!？」

レオンの中で、何かが鼓動した。

なんだ・・・今は・・・・・・・・・・

「レオン？」
ヴィクトリアも、ようやくレオンの異常に気づいた。

「……………」

なんだよ……………この感覚は……………

そう、まるで不吉な出来事の前触れのような……………

その時、持参していた魔法通信機から声が聞こえてきた。

《ザザザ……………聞こえますか!!》

「!!」

アレミラがすぐさま通信機へと近寄る。

「どうした!!」

《それが……………落ち着いて聞いてください……………魔鏡神獣が……………》

!?

その場の全員に戦慄が走った。

「魔鏡神獣だと!?!……………数は!!」

アレミラが叫ぶ。

《それが……………数え切れません……………圧倒的な数の魔鏡神獣が……………私達の予測では……………軽く一万は超えて……………うわあああつ!?!……………ザザザ!!》

それきり、通信機は沈黙した。
．．．．．
その場の全員が、沈黙した。

と、その時。

ズウウウウウウウウン．．．．．!!
大きな振動がアルビオンを襲った。

「な．．．．につ!?!」
アレミラが絶句する。

そのころ、星鏡世界のジャックは．．．．．
「始まる．．大いなる災い．．．そして君は見るんだ、アルビオン
の悲劇を．．そして．．魔鏡神獣の．．．王をね」
ジャックは悲しそうに呟いた。

そのころアルビオンでは。

「うあああっ!」

ヴィクトリアが左腕を押さえてうずくまっている。

「どうした!?!」
レオンが叫ぶ。

「これは……………」
レオンが絶句。

キユオオオオオオオオオ……………
ヴィクトリアの左腕に刻まれた、水碧の証である紋章が光り輝いている。

ヴィクトリアだけではない。

「くう……………」
セリアには、右腕に刻まれた黄色い紋章が……………

「ちい……………」
ガイには、額に刻まれた茶色い紋章が……………

「何だ……………この痛みは……………」
アレミラには、首元に刻まれた薄い水色の紋章が……………それぞれ輝いていた。

まるで……………自分達にとっての本当の仇敵が現れたのを告げるように……………

そして、あの男も……………

「……………」

-----次回予告-----

・・・遂に始まったアルビオンの崩壊・・・レオン達は・・・人類
は・・・見事この危機を切り抜ける事ができるのか・・・

アルビオン偏最終回。

次回、破滅、お楽しみに。

そして亀裂が最高潮になり、自分たちが立っている地面が大きく傾き始めた。

「まずい！・・・早く飛べ！」

男性は、女性に飛んで向こうに飛び移るように叫んだ。

女性は飛んだ。

何とか飛び移る事には成功したようだ。

次に男性は子供を向こう側へと逃がす為、全力で子供を投げた。

「うわっ！」

子供は驚き、男性を振り返る。

「貴方も早くっ！」

女性が手を伸ばす。

しかし、遅い。

ズズズズン・・・

遂に、半分に切り取られた方は徐々に傾き、男性は傾きに耐え切れずに落ちていく。

「お父さん！！！」

子供が泣きながら叫ぶ。

「・・・元気にしてるんだぞ・・・じゃあな」

男性は微笑むと、国の切り落とされた分の地面と共に、アルビオンの下にある魔鏡の庭園へと落ちていった。

「貴方っ！！！！！」

女性も叫ぶ。

悲劇。

ただそれだけの言葉で表すには足りない程の悲しみが、アルビオンを襲った。

きゃあああああ！

うわあ！？

助けてくれっ！

悲劇にあつたのは、この家族だけではない。

他の住民たちも、国が半分に割れ、落下していくほうにいた人間は全て魔鏡の庭園へと落ちた。

亀裂を飛び越えようとして、向こう側に届かずに落ちていく者、諦めてその場に座り込み、落ちていく者。

多くの人間が犠牲になった。

ゴツツツ！！！！

そして、大きくアルビオンが揺れたと思ったその時。

国の国土の半分が完全に切り離され、完璧に分断された。

その頃、アルビオン城では。

「・・・そんな・・・」

騎士王レオンは眩き、今の惨状を眺めていた。

城の最上階、そこには国の重鎮達と騎士王レオン、ミールフィリスなど国の中心人物たる存在が終結していた。

「・・・」

その時。

ガアアアアアン!!!

空中で何かが竜と激突した。

「!!!」

騎士王レオンはその人物にきずき、絶句した。

「アレミラ!!!」

ミールフィリスが叫ぶ。

そう、アレミラはこの惨状を見て、レオン達の元から離脱、ここま
で風の力を使い高速で飛んできたのだった。

風の刃を纏いながら高速で激突した事で、竜の口の狙いが逸れ、城
を消滅させるという事態は防がれた。

《グオオオオオオオ……》

竜は僅かに首を振る、それだけで圧倒的な突風が発生してアレミラ
を地面へと叩き付けた。

ガアン!!!

「アレミラっ!!!くそっ!!!」

騎士王レオンが叫ぶ、その瞬間騎士王レオンの横を何者かが通り抜
けた。

「ガレスか!?!」

騎士王レオンが絶句。

そう、ガレスはこの事態に平常では居られなかった。自分の故郷、自分の家、そして・・・大切な民・・・その全てを消し去られ、ガレスは怒り狂っていた。

「お前らあああああ！！・・・我が元に集まりたまえ！千の軍勢を打ち破りし炎よ、断罪の時は来た、世界を照らし、その栄光を我が告げよう・・・炎魔法・高位詠唱、ルゲイル・・・エズル・・・スリアシユ・・・ゲヘル・・・F e n i x ・ E n d ！！！」

ガレスが詠唱したこの魔法は、アリウスが使用したのと同じものだ。しかし、規模や力が圧倒的に違う、あの時は力を制限していたアリウスが放ったもの・・・しかし、今回は炎皇の全力だ。

竜にすら匹敵するほどの巨大な不死鳥が顕現した。

《キアアアアアアアアア！！！！》

フェニックスが咆哮。

《グオオオオオオオオ！！！！》

竜もまた咆哮を放つ。

そして、上空でフェニックスと竜の激突が始まった。

その瞬間に。

「発動・風魔法・高位詠唱・・・エアリアルに加護！！」

地面に叩きつけられたアレミラが、力を振り絞り結界を張った。

エアリアルの加護が、残ったアルビオン全土を包み込むように展開した。

それは無論、アルビオンに被害を与えるのを防ぐ為だ。
あれほどの力がぶつかり合えば、本当に国が消し飛ぶ。

人外の力同士が、空中で激突した。

ズ・・・・・・・・・・・・・・・・ウ・・・・・・・・ン・・・・

フェニックスと竜の激突で、上空の雲は消え去り、
空気や光さえも歪ませる。

この世の制限から外れた存在同士がぶつかり合い、
世界が悲鳴をあげる。

ガレスはフェニックスの背中に飛び乗って、戦っている。

赤い炎と邪悪な光、二つがお互いにせめぎあい、
お互いの力を削りあう。

「うおおおおおー!!」
ガレスの絶叫と共に、背中の赤い紋章がさらに輝く。

《キアアアアアアアアアアアアアアアア!!!》

フェニックスも咆哮を放つ。
力が更に増し、竜もまた力を増す。

お互いにとどまる事を知らない力は世界を破壊する様に、
ぶつかり合う。

それを見ているレオン達は……

「……ガレス……」

セリアが呟く。

「あの技って……」

レオンが絶句。

「ああ……間違いない……兄上と同じ、炎皇の宝具使いの魔法だろう」

ヴィクトリアもそう呟く。

「ガレス……伝説の宝具使いの中で、最強筆頭……あいつなら……」

ガイが呟く。

「それより、あなたたちはその台座を調べなさい、これは私達の問題……あなた達はこの世界の者じゃない……なら、早く帰る方法を探すべきよ……」

セリアが上空を見たまま、二人に告げる。

「そんな……でも俺たちは!!!」

「それに、どうやって……」

レオンとヴィクトリアが順に告げる。

「それはもう目の前だろう」

ガイが付け加える。

「この台座は俺達の世界のものじゃない……これはこの世界の技術力じゃあどうにもならないものだろうからな、多分……お前達の世界にはこれと似たような装置があるはずだぜ？」

ガイが微笑む。

「これとつて……」
レオンが首を傾げる。

「ある……」
ヴィクトリアが呟く。

「っ!？」
レオンが絶句。

「本当か!？」
レオンが叫ぶ。
しかし……そんなもの……

「きずかないのか?……台座に魔法陣……恐らくこれは……
転移魔法陣だ」
ヴィクトリアが告げた。

「!?!」
レオンは叫びそうになった。

どうして分からなかったんだ……こんなに分かりやすかった
のに……

「あるんだな……ならば、今からでも使えるはずだ」
ガイが告げる。

ヴィクトリアはすぐさま、台座に駆け寄り、台座の作りを調べる。

その時。

《グルルルルル……》

茂みから、魔鏡神獣が飛び出てくる。

「……お出ましね……」

セリアが告げた瞬間。

バチン！！

セリアの両手に、雷が集中。

その雷は空気をも爆ぜさせるように辺りを照らす。

「我が元に顕現せよ、雷の光の主よ……愚かなる者達を我が前にひれ伏せさせる為……その力を我に与えよ……一撃必殺の雷槍、雷切
ハライキリ……！！」

セリアが叫ぶと同時に、その手に雷が収束し、槍を形作る。

それを、振った。

バゴオオオオオン！！

周りの木々が、魔鏡神獣と共に消えさる。

槍を手首で回し、魔鏡神獣を切り捨て、突き、吹き飛ばす。

「さあ、早く……！！」

セリアが叫ぶ。

キュウウウウウウウウ……

その瞬間、台座の魔法陣が光り始める。

「何だ!?!」

レオンが叫ぶ。

「出来たぞ・・・やはり、これは転移魔法陣だ!?!」
ヴィクトリアが叫ぶ。

ヴィクトリアのいったとおり、台座の雰囲気そのものが転移魔法陣と似ている。

光はさらに強まり、辺りを照らす。

「なら、早くしなさい・・・どうやら・・・相手は暇を与えてはくれないようだし」
セリアが苦笑。

なんと、目の前に魔鏡神獣の大群が迫ってきていた。
セリアとガイが互いに立ちふさがる。

「ここから先は・・・」

「行かせない」

セリアとガイが呟く。

「待てよ・・・俺はまだっ!?!」
レオンが叫ぶ。

「レオン、急げ!?!」
ヴィクトリアは台座の上に立っている。

「この魔法陣、制御が出来ない!?!・・・早くしないと、勝手に発動してしまう!?!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「でもっ!!」

レオンが抵抗した瞬間。

ガアン!!

土がレオンを縛る。

「!?!」

「悪いな、でもお前が言う事を聞かないと・・・お前たちは帰れないだろ」

ガイが苦笑。

そのままレオンを魔法陣の内側へと放り投げる。

「うあ!!」

レオンは呻く。

キユイイイイイイイイ・・・

魔法陣が輝き・・・

「待ってくれ・・・アルビオンはっ!!」

レオンが叫ぶ。

「・・・・・・・・あなた達が星鏡世界へ未来から来たってことは・・・どの道・・・アルビオンは壊滅したってことよね?」

セリアが告げる。

「っ!?!」

レオンが目を見開く。

「なんだ……そういうことね……星鏡世界……か……きつとそ
の世界は……」
アレミラが何かを呟いたが……

「ん、どういうことだセリア？……星鏡世界ってところを知ってい
るのか？」

ガイが告げる。

「……今分かったのよ……きつとその世界はね……」
セリアが苦笑。

キイイイイイイイイイイン……

魔法陣が輝き、光を放った瞬間。

ズ……ン……

上空のフェニックスが消え去り、竜がブレスを溜めているところが
目に映る。

その先にはアルビオン城。

「そんな……」

レオンが絶句。

まさか……これが……過去？……聖天王国アルビオンに
起きた……
こんな……こんな事……

レオンは理解した、何故自分がここに連れてこられたのか……

「ふざけるなああああ！！……認めない……こんな……こん

な世界っ!!」

レオンは絶叫した。

「レオン、どうしたのだ!？」

ヴィクトリアが取り押さえる。

「ようやく……きずいたのね……レオン……」
セリアが苦笑。

「嫌だ!……俺は……この国をつ!!」
レオンが暴れる。

「レオン!!……落ち着け、一体どうしたのだっ!？」
ヴィクトリアが動揺。

「う……くそおおっ!……ミーフィスうううっ!!!!」
レオンは城に向けて絶叫した。

その頃、アルビオン城では。

竜のブレスを目の前で眺めながら、全員が目を閉じていた。

アレミラもガレスも破れ、誰も抗えない。

騎士王レオンとミールフィリスも理解していた、人間では……この化け物には勝てないと。

「ミイテルフィリス様……」
騎士王レオンが呟く。

「……いいのよ……ねえ……それより私の事……ミイフィスって呼んで……」

ミイテルフィリスは急に騎士王レオンのことを見つめる。

「……はい……ミイフィス……皇女……」

若干驚いた表情をしたが、騎士王レオンはそう告げ、微笑む。

ミイフィスも微笑む。

ミイフィスはどうしてもこの言葉を告げたかった、今まで自分を守ってきたくれた大切なナイトに。

「それから……この剣を受け取って」

ミイフィスは自分の背中にあつた剣を騎士王レオンに渡す。

「これは……」

騎士王レオンが呟く。

「これはね……私の婚約を誓う剣……《被剣・ミスティルティン》
《というものよ》

ミイフィスが微笑む。

「っ!!……ありがたく……頂戴いたします」

騎士王レオンが微笑む。

その時。

《ミーフィスううううっ!!》

「っ!？」

頭の中に、見知った少年の音が響く。

「どうかされましたか？」

騎士王レオンが首を傾げる。

急に立ち上がったミーフィスに疑問を抱く。

「………いいえ………なんでもないわ………」

そう………やっぱりあなたは………私の………」

「レオン………あなたは最強のナイトになるのですよ………何故ならあなたは………この私の………ナイトなのだから」

ミーフィスは微笑む。

そう、レオンがブレイド・カーニバルの時に頭に浮かんだ記憶………それは………」

「さよなら………」

ミーフィスの目から、一筋の涙が零れる。

ようやく理解した・・・星鏡世界のレオンの正体を・・・何故彼がアルビオンに来たのかを・・・

ミーフィスは、隣の騎士王レオンを見つめる。

《・・・レオン・・・あなたは・・・私の騎士の・・・未来の姿へ生まれ変わりだったのですね・・・》

《グウウウウウオオオオオオオオオオ!!!》
竜の口からブレスが放たれたと同時に、レオン達の転移魔法陣が輝きを強め、天空へと光を放った。

そして・・・聖天王国の歴史は、ここで幕を閉じた。

レオンとヴィクトリアは、転移魔法陣の力でアルビオンから転移し、そして・・・

-----次回予告-----

時は元に戻り・・・少年の心に傷を残す・・・

そしてレオンは、闇の世界にて再びミーフィスと出会う。

《ようやく思い出してくれた？》

ミーフィスが微笑む。

《教えるわ・・・アルビオンの終焉のその先を・・・そして何故私がここにいるのか・・・そして・・・星鏡世界に起ころうとしている・・・秘密をね・・・》

遂に明らかになるアルビオンの真実、そして魔鏡の庭園とは？

次回、星鏡世界、お楽しみに。

星鏡世界

少年は思った……
自分は何のために生まれてきたのだろうと、この世界で人が生きる意味は何なのだろうと。

どうしてこの世界というものは、思い通りにならないのだろう……
どうしてこの世界というやつは悲しみに満ちているのだろう……
けれど……その答えを求めても、誰も答えはしないのだろう……何
故なら「ソレ」は……自分の中にしかないのだから……

レオンは暗闇の中を漂っていた。
時間の流れ、光、音、気配……何もない……そう、何もない世界で
少年は一人で漂っていた。

「……………」
レオンは目を開ける。

レオンは自分の体が漂っているのにきずくと、すぐさま意識を覚醒
させた。

「ここって確か……………」

前方には漆黒の居城、その城に続くように伸びる一本の道。
そう……ミーフィスやジャックと出会い、戦った場所。

「っ……！」

レオンはミーフィスという言葉で思い出した。
そうだ、自分は先ほどまで聖天王国アルビオンにいたのだ。
ならば、ミーフィスに話を聞かなければ。

「ミーフィスっ!！」

レオンは叫んだ。

レオンの声が反響し、闇の世界に響き渡る。

.....

しかし、あるはずの返事が返ってこない。

「そういえば.....」

と、レオンが思い出す。

「ヴィクトリアはどうしたんだ？」

先ほどまで一緒にいた筈のヴィクトリアがいない。

自分と一緒に転移魔法陣に乗ったのだから、ここに来ているはずなのだが.....

《ここには彼女はいないわよ? ..いいえ、来れないといったほうが正しいかしらね》

闇の世界に見知った女性の声が響く。

「つつ!?!」

レオンは文字通り飛び上がった。

振り向き、そして。

「ミーフィスっ!！」

叫んだ。

間違いない、白と黒の翼を除けば間違はなく、レオンとヴィクトリアが先ほどまで会っていたミーターファイリスそのものだ。

《ふふ……ようやく分かってくれたようね……お帰りなさいレオン……これで私の正体を理解できたはずよね》
ミーフイスが微笑む。

「……………」

レオンの目から涙が零れ落ちる。

《あらあら、泣かせちゃったみたいね》

ミーフイスはレオンの元へと歩み寄ると、レオンを抱きしめた。

《大丈夫よ……私は今、ここにいるもの》

ミーフイスは自分の子供をあやす様な声音で告げる。

それから少したって……………

ようやくレオンの気持ちの整理がついたところで、レオンは質問を投げかける。

「……………ミーフイスは……あの時点で死んだんじゃないのか？」

そう、レオンの知る限りミーフイスは竜のブレスを浴びて、国ごと消えてしまったはずだ。

《確かに……そうね……私はあの時ブレスの攻撃を受けて死んだ……ことになるはずだった……》

ミーフイスが視線を厳しくして呟く。

「え？」

それってどういう……

《私がブレスを受ける直前、レオンが私を庇ったの……》
ミーフィスは両手を胸の前で合わせる。

あの人……確かに……あの人なら出来そうだ。

《私は彼のお陰で攻撃を直撃するという最悪の事態は免れた……けれど、私自身への攻撃を防いでも国は滅んだわ……魔鏡神獣の侵攻を受けた拳句、あれだけの攻撃をくらえばね……》

けれど、と付け加える。

《私は命だけは助かったものの、アルビオン自体が魔鏡の庭園へと落下を始めていたわ……つまりは助かって、あの魔鏡神獣の住処であるあそこへと墮ちれば……どちらにしても死ぬというのが分かったわ……》

ミーフィスは辛そうに語る。

「……少し質問してもいいか？……魔鏡の庭園ってなんなんだ？……それからどうして魔鏡神獣はアルビオンを襲っていたんだ？」

レオンがそう思うのも当然だろう。

《……そうね……魔鏡の庭園が突如……といっても大昔なんだけどね、その起源は世界創造の時期まで遡るわ……》

世界が神によって創造され、人々は魔法と呼ばれる存在を生み出し、生活に取り入れていった。

そして人々はその魔法を使い、国を生み出そうとした・・・しかし
ただの魔法では圧倒的に力や技術が足りなかった・・・

人々は神に願った、もっと大きな力を授けてくれと・・・神はそれに
答え、魔力を七つに分けた・・・それが一般的に知られる世界創造の
神話らしい。

そして、ここから誰も知らない・・・いいや、忘れてしまった記憶
の闇・・・人々は七つに分けられた魔法を使い、一つの聖なる王国を
作った。

その国は魔法と人と神の力によつて繁栄した大いなる国だった。

そしてその国こそが・・・世界で原初となる最初の国・・・聖天王国ア
ルビオンらしい。

その国は人々が集まり、世界で有一無二の国であったため、世界の
全てを掌握し全てをコントロールする・・・いわば、バランスの役
目を果たしていた国だった。

そしてその国の国王になる者は実質的に世界の全てを得る事ができ
る。

しかし、神との盟約でその国を治める事ができるのは光と闇の力を
持つ人間だけというルールを課せられていたらしい。

そして闇の属性と光の属性というのはかなり貴重な系統だったのだ
その時点でその系統を行使できたのは二人だけだったという。

そもそも、光と闇は他の系統とは全くの別物だったらしく、力の大
きさも桁違いで、かなり特別なものだったらしい。

無論、その二人は国の王位に就き、世界を治めた。

平和にいくと思つた矢先だつた。
世界に邪悪が蔓延つた。

それは、その二人の統治を良しとしない人間達だつた。
その者達はアルビオンを離れ、自分達で国をもう一つ作り出したそ
うだ。

そしてその者達はアルビオンに戦争を仕掛けた。

しかし、闇と光と神の加護を得ているアルビオンは文字通り最強の
国だつた。

勝負はあつけなくつき、その者達はそれこそアルビオンの王位に就
いた二人を憎んだ。

そしてそこで、世界に危機が訪れる。

その者達の憎しみに応え、《ある存在》がその者達の願いに応えた。

そう・・それは《シャイターン》と呼ばれる存在だつた。

《シャイターン》は世界から弾き出された魔の存在で、創造神と同
等の力を持った存在だつた。

そして《シャイターン》は、一人にある特別な系統を与えた。

その系統は世界創造の時に造られたものとは違う、零番目の系統・・
・光と闇の二つを合わせ、不協和音の元に創り上げられた・・系
統・・・・・

《ソレが・・・・・》の系統

ミーフィスは呟く。

「影……」

呟いた瞬間、レオンの背中を冷たい感触が走り抜けた。

《そして……影と《シャイターン》の力を受けたその者達は、圧倒的な力でアルビオンを蹂躪し、相手国を破壊しつくした……》

「そんな……」

レオンは絶句した。

「光と闇の系統は……」

《……無理だったの……いくら強大な力であっても、相手は光と闇を元に創り上げた最悪の系統……純粋な光と闇だけでは足りなかった》

ミーフィスが目を瞑り……

《私が知るのはここまで》

ミーフィスが呟く。

「え？」

レオンは目を瞬かせた。

《ごめんなさい……私も全てを知っているわけじゃないの、私はその後の事は全く知らない……言い伝えに残る限りでは、その後の事だけが記録がなく、アルビオンは空中へと浮かんだという事……つまりその間の記録が抜け落ちているの……それに……私に与えられた役目は……これで終わりを告げたのだから》

ミーフィスは寂しそうに呟く。

役目？

ミーフィスの言葉に違和感を覚えた。

《私は魔鏡の庭園へと堕ちた・・・けれど、ある一人の女性と出会った・・・》

「女性？」

レオンが首を傾げる。

《ふふふ・・・きつと驚くわね・・・あなたが聞けば・・・でも、私から話せるのはここまで》

そう呟いた瞬間、ミーフィスの体が光りだした。

「!?!」

レオンは驚いた、ミーフィスの体が光だしたのだから。

《ああ・・・これで私が託された役目は終わった・・・これでやっと・・・》

ミーフィスは微笑む。

そして、ミーフィスの体が透けていく。

「まさか・・・ミーフィス・・・」

レオンもきずいた。

《そうそう・・・最後に言っておくわね・・・魔鏡の庭園は、《シャイターン》が封印された場所であり、《彼女》が眠る場所よ・・・気をつけて、星鏡世界を使って、シャイターンを復活させようとし

ている者達がいるから……」
ミーフィスが微笑みながら告げる。

「……星鏡世界を……使う……？」
レオンが呟く。

《大丈夫、あなたならば……けれどアリスは……》
ミーフィスが寂しそうに告げる。

「ミーフィスっ！」

レオンがミーフィスに駆け寄り、触れようとした瞬間……

「っ!？」

レオンの手が、ミーフィスをすり抜けた。

《……ごめんなさい……でも大丈夫……あなたには仲間がいるから……私にも、レオンやセリア、アレミラ、エレインがいたように……あなたにも……》
ミーフィスはそう告げ。

《さようなら……あなたに、神のご加護があらんことを……》
ミーフィスの体が一際輝き、光の粒となって消え去った。

「ミ……ミーフィスっ!!!」

レオンの絶叫が、闇の世界に響き渡った。

場所はルシアード王国。

「ミールファイリスが役目を終えたか……些か早すぎるような気もするが……」

ジャックは、暗い部屋で呟いた。

「魔鏡神獣……シャイターンの神格から派生した分身ども……愚かしいな……いつの世も……世界を壊すのは人間か」

「ああ……早くレオンと……私が望むのは……それだけなのだから……もう少し……もう少しで、全ての布石がそろおう……その時こそ、私がレオンに全てを教えよう……影の系統と……《星鏡世界・アリス》の全てをな」

ジャックは微笑んだ。

場所は移り、ルベリージア学院。

「はあ……はあ……」

サクラは息をつきながら、前を見る。

前方には、五人の王道賢者達。

「終わりか……終わりだな……さあ、終わらせよう」

一人が告げた瞬間……

ギン！！

「つあ！？」

王道賢者の一人の胸に、剣が突き刺さる。

「え？」

サクラは呆然となる。

「……………」

アリスとルークも、目を見開き、その剣を見つめる。

「何……………」

剣を刺された王道賢者の一人が跪く。

「やれやれ……私にはこんな雑用は向いてないのだが」
その場に突如として、一人の男が現れた。

何時現れたのか、サクラやアリスでも見抜けなかった。

「き……さま……………」

「愚かしい……本当に愚かだ」

男が告げ、腰の剣を抜き放ったと思った瞬間。

ザン！！

王道賢者の一人の首が跳んだ。

絶命する王道賢者。

「何っ!?!」

「貴様？」

「何故!?!」

次々と王道賢者が動揺する。

すると男は、呆然とするアリスたちに向かって、名乗った。

「ああ・・・名乗っておこう・・・私は聖七騎士団所属、エクセリーゼ・ヴァリエル・・・以後お見知りおきを・・・」
エクセリーゼが微笑む。

「貴・・・」

貴様と告げようとした王道賢者の前に、エクセリーゼが突如として現れた。

「っ!?!?」

今の一瞬で、移動したのだ。

ザン!!

今度は、もう一人の下半身と上半身が切り裂かれる。

「ぐあっ!?!?」

「・・・震えよ・・・バルムンク」

エクセリーゼが告げた瞬間、エクセリーゼの持つ剣が紅く光始めた。

「さあ・・・お前達はここで消え去る」

エクセリーゼがそう告げた。

-----次回予告-----

舞台は再び、星鏡世界へと戻る。
苦戦するアリスたちの前に現れたのは、聖七騎士団の一人、エクセリーゼだった。

彼がもたらすのは、破滅か・・・それとも・・・

次回、エクセリーゼ、お楽しみに。

エクセリーゼ

「ぐあっ！」

王道賢者の一人が呻きながら絶命した。

.....

その場に緊張が走る、誰も声を出す事が出来ない。

「あなたは.....」

サクラが目を見開き告げる。

「.....」

アリスは呆然と突然現れたその男を見つめる。

あの人は・・・確か、ルシアーデ王国の.....

突然現れたその男は、王道賢者の一人の首を刎ね、二人目の王道賢者も上半身と下半身を呆気なく斬り飛ばされ、絶命した。

その時、一人の王道賢者が呻いた。

「どういうことだ！！・・・我らに協力するのではなかったのかっ！？」

協力.....？

サクラ・アリス・ルークの三人が眉を顰める。

「すまぬな・・・もはやその必要が無くなった、ただそれだけのことだ」

エクセリーゼは剣についた血を払いながら告げる。

「な……に……そんな勝手な事が……」
王道賢者の一人が呻く。

「……ふん」

エクセリーゼが鼻を鳴らした瞬間、莫大な魔力があたり放たれる。

ズ……ン……

「っ!!」

サクラは思わずよろめく。

「……!!」

アリスは驚き、体が固まる。

エクセリーゼを聖七騎士団の一人と知っており、実際に同じ聖七騎士団であるジョンと戦ったサクラとアリスにしか分からないだろう。

「あの人……同じ聖七騎士団のメンバーだったジョンって人よりも……」
強い……?

ジョンもかなりの使い手だった、宝具を使っていない状況下でアリス、レオンそれにサクラまでもを追い詰めたのだから。

「では……参る」

エクセリーゼが軽い調子で呟く。

ヒュッ……

エクセリーゼの立っていた地面が砕け、エクセリーゼの姿のみが消える。

「ッ」

聖七騎士団の残り三人が絶句する。

「遅いぞ」

エクセリーゼが王道賢者の背後に現れる。

エクセリーゼの手元が動いたと思ったときには、剣が振られた後だった。

ブンッ・・・!!

聖七騎士団の一人の首めがけて剣が迫る。

「つつ」

一人が剣をかわし、バックステップで距離を取った・・・が。

「言った筈だ、遅い・・・とな」

エクセリーゼがさらに踏み込み、そのまま剣を突きたてようとする。

「うおおっ」

男は魔力を体外に放ち、魔力障壁を展開した。

これならば、一撃は防げるだろうと予測した王道賢者。

しかし、エクセリーゼの剣が、障壁を軽い調子で貫いた。

そのまま・・・

ブスッ・・・

「ぐぎゃああああっ!!」

胸を貫き、男が絶叫し倒れた。

エクセリーゼはただ男を見下ろす。

「何故だっ！・魔力障壁は確かに展開したっ・・我らの魔力量ならば、宝具であつても貫けはしないはずだ！！」
その男は喚きながら、エクセリーゼを見上げる。

「・・・お前達がどれだけ強力な魔力を使つて障壁を展開しても無駄だ・・私の《バルムンク》の前では全てが無意味」
エクセリーゼが剣を軽く振る。

キイイイイイン・・・

エクセリーゼの持つ剣の刀身が紅く煌く。

ソレを遠巻きに見ていたサクラが怪訝そつな顔をする。

「何・・・あの剣・・・」

サクラの背中に震えが走る。

「ぐっ・・・くそぉ・・・！」

男が立ち上がるうとするが。

「無駄だと言つた」

エクセリーゼが目を細め、剣を振る。

トン・・・

首が跳ぶ。

その瞬間、今まで黙っていた残りの王道賢者二人が魔法を使い、エクセリーゼに攻撃を仕掛けた。

「発動、高位詠唱……」

「発動！中位詠唱……！」

二人が魔法を唱えるが……

二人の頭上から、水の柱が落ちた。

ビシャアアアアアアンツ！！

「ぐう……ッ」

「じばあッ！？」

二人は真上からの高圧水流による攻撃で「潰れた」。

その水は凄まじく、その地面すら深さ5メートル程抉った。水と一緒に血が滲み、見るに耐えない。

エクセリーゼが水を睨む。

「……エヴェリウスか……余計な事を」

顔を歪ませるエクセリーゼ。

「あら、それは悪かったわね」

エクセリーゼの背後で、水が渦巻き、それが収まる。

そこから現れたのは……

「っ！？」

アリスが絶句。

水の渦から現れたのは、薄い金色の髪を長く伸ばした女性、アリス

に謎の言葉を残した聖七騎士団の一人。

エヴェリウスがアリスを見つけると、微笑んだ。

「貴様、何故ここにいる」

エクセリーゼが睨む。

「いいじゃない、別に」

エヴェリウスが肩を竦める。

「貴様には、別の指令が与えられていたはず・・・それなのに何故だ」
エクセリーゼは問い詰める。

「はぁ・・・相変わらずの堅物・・・もてないわよ?・・・それと、質問の答えだけど・・・指令は完遂したわ、第六の神玉は手に入れたから」

エヴェリウスが告げ、手のひらに持っていた物を見せる。

『っ!!!』

アリス、ルーク、サクラの三人に緊張が走る。

エヴェリウスの手のひらに乗っていたのは、鼠色の玉。

「ほう、神器を倒したか」

エクセリーゼが少しだけ目を見開く。

「ええ・・・《牢獄の神器・ガリブル》・・・それなりには楽しめたわ」

エヴェリウスが微笑む。

「・・・腹黒女め」

エクセリーゼが唇を歪ませる。

とりあえず・・・と、エヴェリウスが告げる。

「はい」

エヴェリウスが、神玉をアリスに向かって投げ渡す。

「!!!」

アリスは立ち上がり、神玉をキャッチする。

アリスは神玉を見つめる。

間違いない、この莫大な魔力・・・神器であった証だ。

「どうして・・・」

アリスは呟く。

「どうして?・・・それは私達が持つていても意味ないもの、あなた達が持つていて始めて意味を成す・・・」

エヴェリウスは微笑む。

「・・・貴様の要らぬ邪魔のお陰で、早く終わりすぎた・・・」

エクセリーゼがため息を吐きながら剣を収める。

剣から紅い光が消えていく・・・それと同時に、辺りに満ちていた莫大な魔力が消えうせる。

「いいじゃないの、どうせあなたの相手になる人間なんてそうそういないわけだし」

いつもの様に遊んでいたのでしょうか?・・・と告げる。

「貴様に話すような事ではない、私に宝具を使わせたものなど・・・アーフェリオン王以外ではないのだからな」

「……………」

エヴェリウスが肩を竦め、苦笑する。

「では、先に戻る」

エクセリーゼが告げた瞬間。

ヒュン……………」

地面を穿ち、姿が掻き消える。

「…………相変わらず下種な男…………強けりゃ良いわけじゃないのに…………」

エヴェリウスが苦笑。

「さて、私もこれで帰るわね」
エヴェリウスが呟く。

「待つて」

サクラが呟く。

「?…………あなたは確か…………」

「サクラ・ファルバレン、生徒会副会長…………」

サクラが名乗る。

「サクラ…………さんね…………私は…………聖七騎士団所属・エヴェリウス・
プランタジネットよ、宜しくね…………小さなナイトさん」
エヴェリウスが微笑む。

「あなたたちの目的は何」

サクラが質問を投げかける。

「随分真正面ね．．ふふ．．やっぱりこの学院は面白いわね．．良いわ、簡単に教えてあげる．．私達の目的は．．世界の変革」
エヴェリウスが微笑む。

変革．．．．？

サクラたちは沈黙。

「まあ、分からないわよね？．．正しいわ、あなた達はこの世界の『真の姿』を知らないもの」

エヴェリウスが告げる。

「．．．．？」

サクラが首を傾げる。

「ふふ．．．まあ．．簡単に言つとそういつこと、それとねアリス」

エヴェリウスがアリスを見つめる。

「．．．．？」

「レオン君．．だったかしらね．．あの子が世界の秘密に近づいたわ．．彼が知れば怒り狂うでしょうね、アリス．．あなたが『影の生贄』として使われる事を知れば」
エヴェリウスが微笑む。

「影の．．生贄？」

アリスが眉を顰める。

「じゃあね、アリス．．あなたにも、神のご加護があらんことを」

エヴェリウスの周りに水が渦巻き、エヴェリウスの体を覆い・・・
して消えた。

・・・

その場の全員が呆然となった。
後に残ったのは、血の匂いだけだった。

場所は移り・・・

「・・・う・・・うう・・・」

レオンは草原のど真ん中で目を覚ました。

痛い・・・頭が割れそうだ・・・まるで・・・長い長い夢を・・・
見ていたような

「・・・?」

レオンの目から涙が零れた

どうして・・・どうしてこんなにも悲しいんだ?

まるで・・・大切なものをたくさん無くしたかのような・・・

「・・・う・・・うあ」

レオンの隣で、一人の少女が目覚めた。

「っ!?!?・・・ヴィクトリア!?!?」

ドオオオオオン!!!!
草原の真ん中で大爆発が起きた。

「ふん!・・・暫くそうしているがいい!」
ヴィクトリアは腕を組む。

「・・・あ・・・あ・・・ぐは・・・」
レオンは逆さまに・・・地面に頭から倒れていた。

「ていうか・・・軽く頭が地面に刺さっているんですが・・・」
レオンが呟く。

それから・・・
「しかし・・・何故私とレオンが同じ場所で・・・」
ヴィクトリアが首を傾げる。

「うゝん・・・」
何かが引っかかる・・・何か・・・とても大切な事を忘れているような・・・

「っ!!!!!!」
レオンの頭に激痛が走る。

「ぐ・・・う・・・うあああああっ!!」
レオンが絶叫し、膝をつく。

「レオンっ!?!」

ヴィクトリアが叫ぶが。

ズキン……………

「うづうづっ……………」

ヴィクトリアも頭を押さえる。

二人の頭に流れ込んだのは、《ある記憶》。

二人の中に大量の情報が流れ込む、それは感情や心を壊されそうになるほどの、圧倒的な感情と情報の本流。

聖王国アルビオン、星鏡世界、ミートルフィリス、セリア、ガイ、アレミラ、エレイン、アルビオン城……………魔鏡神獣。

大量の情報が頭をかき回し、大量の感情が心を埋め尽くす。

「そう……………だ……………俺達は……………」

レオンが呆然と呟く。

「……………私達は……………」

ヴィクトリアの目から涙が零れる。

『アルビオンにいた』

二人で呟いた。

そして、二人は気持ちを整理し……………二人で話しあう。

「そうか……………やはりあれは……………夢ではなかったのか」

ヴィクトリアが左腕の袖を捲る……………そこにあるのは……………青い紋章……………水碧の証。

「エレインとの・・・絆・・・」
ヴィクトリアはそっと、左腕を抱く。

「・・・・・・・・ミーフィス・・・・・・・・」
レオンが呟く。

結局・・・アルビオンのミーフィスも・・・闇の世界のミーフィスも・・・俺に救う事はできなかった・・・
レオンの心を悲しみが埋め尽くす。

それからは、二人で話し合った結果、自分達が体験した事は伏せておき、戦闘中にヴィクトリアが『水碧の宝具使い』として覚醒した事のみをアリウスやアリシアに告げることにした。

無論、レオンがミーフィスから聞いた《シャイターン》の話も伏せおいたほうがいいだろうと判断した、これはヴィクトリアにも教えしていない。

シャイターンか・・・・・・・・調べておいて損はないな・・・
レオンはそう決意した。

そして二人は、学院へと戻り始めた。

場所はルシアーデ王国。

「やれやれ・・・ようやく戻ってきたかア」
シヨンは王の前に立っていた。

「ああ、どうやらそのようだな・私が下した命令も完遂したようだ」

アーフェリオンは玉座に肘をつきながら座る。

ヒュ……

「遅くなりました、主よ」

エクセリーゼが現れ、跪く。

「ああ、ごくろうだったね」

アーフェリオンは微笑む。

「ん？・エヴェリウスのやつはどうしたんだア？」
ジョンが見渡す。

「奴ならば直に来る」

エクセリーゼは言い放った。

「それよりも・・ノアの奴は・・」

エクセリーゼは眉を顰める。

「ああ？・・なんか命令を与えたみたいだぜ？」
ジョンが顎で王の方へとしゃくる。

「本当なのですか？」

「ああ、少し頼みたい事があってね」
アーフェリオンは微笑んだ。

ジョンは苦笑した。

全員集合の命を下しても・・・集まったのは未だに二人とは……………

その頃、ジャックは集合の命を聞き、王の部屋へと歩いていた。
「……………」

黙って歩く。

カッン・・・カッン・・・カッン……………
一定に刻まれていたジャックの足音が止まる。

「誰だ？」

ジャックは振り返る。

ジャックは暗い廊下の奥を睨む。
先ほどから妙な違和感を感じていた。

「僕の気配にきずくなんてね……………」
廊下の柱の影から出てきたのは……………

「お前が私に何のようだ？」
ジャックが睨む。

そこに居たのは、一人の青年。

「いやあ……………一緒に行くこうかと思ってね」
青年が微笑む。

「……………珍しい事もあるな……………ナンバー4（ファイア）……………」

レイドル・ファルバレン」
ジャックは告げる。

「ああ・・たまにはね・・・それに僕とあなたは似ているところがあるから」

レイドルが微笑む。

「似ている・・だと？」
ジャックが眉を顰める。

「ああ、そうさ・・あなたに会いたい人が居るように・・・」

・・・・レオンの事か・・・・
ジャックは考える。

「僕にも会いたい人が居るのさ・・僕の妹・・サクラ・ファルバレンにね」

青年はそつと・・微笑んだ。

――――次回予告――――

レオンとヴィクトリアが学院に戻り、久しぶりの平和がやってきたルベリージア学院。

しかし、まさかの来訪者が・・・・？

次回、日常、お楽しみに。

日常

レオンとヴィクトリアが学院へと到着して半日が経った。学院生徒達は今回の事を詳しく知らされていない為、今回何があったのか知る由もなかった。

時間は夜、十時。

他の生徒は寮に帰り、寝静まる頃だ。

その頃レオン達は生徒会長特別室で話し合いを行っていた。

「え？」

レオンは呆然と呟いた。

「どういうことです・・・それは・・・」
ヴィクトリアも同じように絶句する。

「何って・・・一日で事態が収集できて良かったわね・・・」
アリシアが不思議そうに言い放つ。

レオンとヴィクトリアは思わず顔を見合わせる。

一日・・・？
アルビオンであれだけ長く居たのにも関わらず一日しか経っていない？

「レオン君・・・ヴィクトリア・・・？」

アリスが不思議そうに呟く。

「頭でも壊したか？」

ルークが半眼で突っ込む。

ありえない。

二人がアルビオンに居た時間は半月ほどにも及ぶ．．．にも関わらずこちらの世界では一日も経っていないと言つのか？

レオンが悶々と考えを巡らしていると．．．

「ところで聞きたいのだけど．．．ヴィクトリアの腕に刻まれているのって．．．」

ヴィクトリアの腕にきずいたアリシアが告げる。

「え．．．あ、はい．．．水碧の宝具使いの紋章です．．．その、戦闘中に目覚めたというか．．．」

ヴィクトリアが言葉を濁す。

やはり、本当のことが言えないだけに心苦しい。

「私もアリウス王から伝説の宝具使いの事については話を聞いたわ．．．でも、未だに信じられないわね．．．そんな人達がいたなんて．．．」

アリシアが呟く。

そういつて、首を押さえる。

！！

レオンはきずいた。

「まさか．．．アリシアさん．．．」

するとアリシアは苦笑し。

「ええ、どうやら覚醒．．．したらしいわね．．．」

マジかよ．．．

ヴィクトリアに続いてアリシアさんまで．．．？

これでレオンの周りにはアリウスを含め、三人の伝説の宝具使いが居ることになる。

これって・・・偶然か？
そう思わざるを得ない。

結局、今回の事件の中心であった王道賢者は全員抹殺された為に、事件を追及するのは不可能となった。

因みに、セルヴィアの話では王道賢者がルシアーデ王国と繋がっていたらしく、ミルフェリーナのお偉いさんが集まって緊急会議を開く事になったらしい。

しかし・・・不明な事もあった。

仮にルシアーデ王国と繋がっていたのなら、何故に聖七騎士団のメンバーであるエクセリーゼが、王道賢者を抹殺したのか・・・それが結局分からないままだ。

そうして、今回は解散した。

レオンはルークととりとめもない事を話しながら、寮に向かっていった。

「しかし・・・今回の事件には驚いたよな」学院の上層部だった組織が離反するなんて・・・」
ルークが腕を組みながらため息をついた。

「ああ……」

レオンは言いながらルークを見つめた。

レオンの中に、アルビオン王国に居たルークを思い出した。それと同時に他の出来事も思い出されそうだったので、思考を止めた。

そして寮に到着。

「じゃあなレオン、また明日学院で」

ルークが片腕を挙げる。

「ああ」

レオンもまた不適に返してその場は別れた。

ガチャリ……

扉を開け、部屋へと入る。

「……なんだか……懐かしいな……」

レオンは苦笑し、パチンと指を鳴らす。

すると部屋に取り付けられた魔道灯が光を発する。

そしてベッドへとダイブする。

「はあく……やっぱりここが一番落ち着くな……」

レオンは暫くそうしていたが。

「！……そうだ」

レオンは立ち上がると、机の前へと向かう。

その机の上にあるのは色とりどりの宝玉。

そう、神玉だ。

その上に、自分の持っていたオレンジ色の神玉を加える。

「これで・・・四つ目か・・・」
レオンは考えた。

これを全部そろえて、魔鏡の庭園へと行く事が・・・俺の役目なのか？

《気をつけて・・・魔鏡の庭園は《シャイターン》が封印された場所であり、《彼女》が眠る場所よ》
ミーフィスが告げていた言葉を思い出す。

「シャイターン・・・影の系統を与えた魔の存在・・・か、そんな御伽噺のような話を信じて言われても、普通は簡単には信用できないけど・・・俺が宿した闇の系統だって十分御伽噺の領域だよな・・・」

レオンは自分の掌を見つめ苦笑。

コンコン・・・
誰かがドアをノックした。

「ん？・・・誰だ？・・・こんな夜更けに・・・」
レオンは首を傾げ、ドアを開ける。

「は～い、どちら様・・・って・・・アリス!？」
レオンは、ズザザーと距離をとる。

「ごめんね・・・レオン君、少し渡したいものがあって」
アリスは苦笑し、部屋に入っていいか聞いてくる。

.....

「ありがとう」

アリスを部屋に進め、ホットミルクを渡す。

レオンはティーカップを傾けながらアリスを見る。

「どうかしたのか？ ・渡したいものって ・ ・
レオンが苦笑する。

アリスは、ベッドに座りながら部屋を見渡す。

「あの ・ ・あんまり見渡されると恥ずかしいんだが ・ ・ ・ ・
レオンは思わず呟く。

「 ・ ・ ・ あ ・ ・ ごめんなさい ・ ・ 」

アリスは頬を染め、俯いた。

.....

そのまま気まずい沈黙が続く。

『あの』

二人して声を掛け合ってしまう。

.....

二人で真っ赤になる。

「そ ・ ・ それじゃあ ・ ・ 私から ・ ・ 」

アリスはそういって、持ってきた学院カバンから鼠色の玉を取り出した。

「!・・・それってまさか・・・」
レオンが呟くと、アリスは頷く。

アリスはそれから学院で会ったことを話し出した。

「成る程な・・・そのエヴェリウスって人がアリスに・・・」
レオンは考える。

何のために？

レオンの中に浮かんだのは、その一つに尽きる。

「レオン君達は・・・アリウスさんの・・・」
アリスが告げた。

「ああ・・・神器だったけどな」
レオンが苦笑。

そしてアリスが呟いた。

「・・・私達・・・なんでこんな力〔光と闇〕を宿してるのかな・・・」

「アリス・・・？」

レオンは驚き、アリスを見る。

「こんな力を宿さなかったら・・・レオン君と・・・」
アリスは俯く。

時計の針が、時間を刻む音だけが響く。

「・・・アリス」

レオンはアリスに告げる。

「俺たちはこの力を宿したからこそ、こうして出会えたんだと思っ
ぜ」

レオンが笑う。

「！」

アリスはレオンを見上げる。

「確かに・・・俺達は妙な事に巻き込まれてる・・・でも、それでも俺
達是一緒だ」

レオンは恥ずかしそうに呟く。

「・・・」

アリスは目を見開く。

「だから・・・その・・・」

レオンは顔を真っ赤に染め、俯く。

「ぷ・・・ふふ・・・」

アリスは口を押さえて笑う。

「え、ア・・・アリス!?!」

レオンは恥ずかしさで死にそうになる。

「・・・ありがとう・・・レオン君」

アリスは微笑む。

「・・・!!」

レオンはアリスの笑顔に魅せられる。

「そっだよね・・・だから私はレオン君の事を・・・」
アリスは何かを言おうとしたが。

「レオン君・・・シャワー・・・浴びていつでもいい？」
アリスが驚くべき事を告げた。

は・・・・・・・・・・？

レオンは、自分の心を落ち着かせるため、正座をして精神統一とやらを実行していた。

「・・・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

レオンの眉が歪む。

その元凶は・・・・・・・・

ザアアアアア・・・・・・・・

バスルームから響くシャワーの音。

「アリスと・・・・・・・・同じ部屋に居て・・・・・・・・尚且つ・・・・・・・・シャワー・・・
だと？」

レオンはごくりと唾を飲み込む。

レオンの中では、悪魔と天使が戦争を始めていたりする。

「ルークに知られたら・・・・・・・・殺されるかも・・・・・・・・」

ガチャリ・・・・・・・・

アリスがバスルームを出てくる。

「っ！！！」

レオンは硬直。

「レオン君？」

アリスの声が背中に響く。

レオンは恐る恐る振り返る。

「！！！」

レオンは絶句。

シャンプーの香りが部屋に満ちる。

アリスの白髪が綺麗に煌いており、白いワンピースのような服装に着替えたアリス、はいつもとは違う魅力に満ちていた。

「お・おう」

レオンは若干たじろぐ。

「……………あの・そんなに、見ないで……」

アリスは真っ赤になる。

「すまん！！……………でも……………その……綺麗……だぞ？」

レオンは顔を逸らしながら告げる。

「……………っ」

アリスの顔が林檎の様に染まる。

……………

そのまま沈黙が……………

「俺もシャワーを浴びてくる！」

レオンは逃げるようにリビングを飛び出た。

それから少したって……………

レオンがシャワーから出てくると。

「アリス・・・まだ居たのか？」
レオンは絶句。

「うん」

アリスは部屋の掃除をしていたのか、散らかっていた筈の教科書や生活の道具が綺麗に整頓されていた。

しかし、そこであることにきずく。

「っ!？」

レオンは思った。

そう・・・ベッドの下には、思春期男子お決まりの・・・あの本があることに・・・

「まず・・・い」

レオンはシャワーを浴びたばかりだというのに、冷や汗をかいた。

ふざけるなよ・・・?・・・どこぞのアニメじゃあるまいし・・・
そんなお決まり展開には・・・

その時、アリスが口を開いた。

「あ、後・・・ベッドの下に隠していた本なら・・・捨てたから」
ニッコリと微笑むアリス。

ノオオオオオオオオツ!!!

結局、アリスとレオンはそのまま部屋で話しをしたり、色々と時間を潰していった。

「ふあああ……眠いな……」
レオンは目を擦る。

「うん……そうだね……」
アリスはくらくらし出し、遂に……

パタン……
ベッドに倒れこんだ。

「ッ……」
レオンは絶叫しそうになったが……時計を見ると……

深夜3時を指していた。

「……」
レオンもまた、その場で意識を失うように眠ってしまった。

……
夢を見た……長い……長い……夢の一端を……
あれ……私は……

「っ!？」
アリスは前を見上げる。

アリスが居たのは、真っ白な世界。

何も無い・・・そう何も・・・

キイイイイイイイ・・・

その時、目の前に・・・漆黒の闇が集まり・・・一つの《漆黒の扉》を作り出した。

大きさは、縦が25メートルほどある。

「何・・・これ？」

アリスは門を見上げる。

門？・・・それとも扉・・・？

アリスはその扉とも門とも言える物へと近ずき・・・触れる。

ドクン・・・

「っ！？」

アリスは思わず手を離す。

「・・・」

そして、もう一度触れてみる。

キイイイイイイイン・・・

「何っ!？」

アリスの目の前が黒に塗りつぶされ、目を瞑る。

・・・

アリスは恐る恐る目を開ける。

「っ!!!」
アリスは絶句。

「なに・・・これ!」
アリスは叫ぶ。

アリスは空に浮いていた。
そして、遙か下には大きな王国のような物。
白い民家が立ち並び、中心には大きな純白の城が立っている。

太陽の光を浴びて輝いている王国だった。

「綺麗・・・」
アリスは思わず呟く。

《聖天王国アルビオン》
アリスの中に単語が浮かぶ。
「え?・・・何・・・今の」

その時。
太陽が欠けた。

「っ!!!」
アリスは上を向く。

日食のように太陽が消えていく。
「何・・・何なの・・・?」
アリスは呟く、心が締め付けられる。

ズ．．．．．
辺りが薄暗く染まる。

ドン．．．．．！！！！！！
その時、世界を揺るがすほどの邪悪な魔力が辺りを．．否．．世界を包む。
「な．．．．．」

アリスは下を向いた瞬間、目を見開いた。

先ほどまで輝いていたはずの国が、黒い霧の様な物で包まれていた。国全体を覆うように．．霧が広がり．．やがて．．《影》となった。

「あれは．．．影．．．？」

そして．．．世界に咆哮が響いた。

《オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！》

「ッ！！！！」

アリスは耳を塞ぐ。

何．．．．．？
一体何が．．．．．

《アリス……あなたは这个世界そのもの……》
声が頭に響く。

「!?!?……誰!?!?」

アリスは叫ぶ。

しかしそこで思い出す、確か……魔鏡の庭園で出会った……

《あなたは星鏡世界そのもの……気をつけて……》

そこでアリスは意識を失った。

「っ!!」

アリスはガバツと起きる。

……

「あれ……?」

アリスは首を傾げた。

ここは自分の部屋ではない、だとすると……

アリスは記憶を遡り……

「……そうだ……私……レオン君の部屋で……」

「う……うん……」
アリスの隣でレオンが目を覚ます。

『あ』

二人で言い合った。

そこで。

ガチャリ……

「おいレオン、貴様……何時まで寝て……
ヴィクトリア、登場！……！」

『あ』

今度は三人で言い合う。

……

沈黙が辺りを満たし……

「レオン……き……ききき……貴様あああ……！」
ヴィクトリアが絶叫。

「な……なな……そんなあああつ！？」

ドオオオオオオオオ……！！！！

「それで・・・あなた達は寮を軽く破壊したわけね・・・」
アリシアがため息。

現在はおなじみのいつもの生徒会長特別室。

『すいません』

三人で頭を下げる。

「まったく、みつともないなヴィクトリア・・・それでも私の妹か？」

その時、扉を開けて誰かが告げた。

全員が振り返る。

「なっ！！！！」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「姉さま！！！！」

.....

『えええっ!?!』

その場のレオン、アリスが叫んだ。

-----次回予告-----

学院へと現れた、ヴィクトリアの姉・エリス・シア・ミルフェリーナ。

彼女はかなり戦闘的な王女だった。

「なら、試してみるか？・・・ヴィクトリア」

次回、ミルフェリーナ第一王女、お楽しみに。

ミルフェリーナ第一王女

「ね・・・姉様!？」

ヴィクトリアが叫んだ。

「姉様!？」

レオンとアリスも驚き叫ぶ。

そう、生徒会長特別室に入ってきたのは、金色の髪に青い瞳の女性だった。

その女性はアリシアの方を向く。

「久しぶりだなアリシア、てっきり学院など辞めているかと思っていたが・・・お前の実力なら何処かの部隊が勧誘に来てもおかしくないからな」

金髪の女性が告げる。

「いえ、私は今の生活が気に入っているのよ」

アリシアは微笑む。

実は部隊の勧誘など、とっくの昔から受けているのだが、全部断っているアリシアである。

「ふむ・・・そうか、まあいい・・・それはまた次の機会だ、それより」
そういつて今度はヴィクトリアを睨む。

「あ・・・あの・・・姉様？」

ヴィクトリアが思わず一歩後ろに下がる。

なんと、あの強気なヴィクトリアが恐れを見せている事・・・それがレオン達にとっての驚きだった。

「ヴィクトリア・・・とりあえず・・・久しぶりといっておこう、しかし・・・自分の能力をコントロールする事すらできんのかお前は！」
金髪の女性が叫ぶ。

「ひっつ！」

ヴィクトリアが首を竦める。

・・・怖え・・・

レオンは思った・・・これは、関わった途端に巻き込まれると。
ルークが居たらヤバかったな・・・

ルークが居れば、恐らく声をかけた時点で殺されてしまいそうだな。
ふと、女性がレオンとアリスを見る。

「っ
っ」

二人は絶句した。

睨まれただけなのにに関わらず、体が一瞬硬直した。

「お前達が光と闇の系統保持者か・・・名乗っておこう、私はミルフェリーナ第一王女、エリス・シア・ミルフェリーナ、そしてミルフェリーナ傭兵部隊隊長だ」
エリスが告げる。

傭兵部隊隊長・・・・・・・・？

どこかで聞いた事が・・・・・・・・

「あつ・・・・・・・・グランのいた部隊！！」
レオンが叫んだ。

「ほう・・・貴様・・・グランを知っているのか・・・成る程、では・・・
デュランダル事件の解決に大きく関わったという少年も貴様か」

エリスが納得したように告げる。

「まあ・・グランは副隊長だがな、あのようなヘタレが部隊に居たというだけでも虫唾が走るわ・・古代の遺物なんぞに飲み込まれおつて」

「ところでエリス王女」

アリシアが話しかける。

「ん？」

「ここに来るとは報告を受けていましたが、何故来たのです？・・理由があるのでは？」

アリシアが言うのも最もだ、理由がなければ一国の王女が学院まで来るなどありえない。

エリスは目を閉じ、腕を組む・・そして。

「ここに来たのは他にもない、アリウスからの命令だ」
エリスが告げた。

「兄上の？・・しかし、何故・・」
ヴィクトリアも眉を顰める。

「・・・・・先日、ルシアーデ王国より・・領土を渡せ、との手紙が届いた・・しかし問題はそこではない・・問題は、それを断った場合・・戦争の開始を告げると、記してあった事だ」
エリスが呟く。

『つつ！！？？』

全員が絶句。

「戦争・・・だと・・」

レオンは激しい目眩に襲われた。

アルビオン戦争、幾度となく繰り返され、沢山の命を奪っていった魔の戦い。

その戦争で何度も国は滅されそうになった。

もはや起きないと思っていた・・・しかし甘かった。

その時、ジャックの言葉が甦る。

《本当に？・・・本当に戦争はもう起きないと・・・お前はそう言い切るのか、レオン》

「しかし・・・些か短絡的過ぎるわね・・・まるで・・・戦争を始めたがっているように感じる」

アリシアが呟く。

「・・・兄上はどうすると？」

ヴィクトリアが震える声で尋ねる。

「アリウスはなるべく戦争を回避する為、アーフェリオン王との会談を持ちかけているが・・・恐らく突っぱねられるだけだろう・・・そうなれば・・・」

エリスがため息をつく。

始まるだろう・・・アルビオン戦争が・・・

「とはいっても・・・私たちにはどうする事もできん、待つしかないだろう・・・それで万が一始まったとすれば・・・戦うしかない・・・こちらでも戦力の増強を始めるとの意見も出始めている」

「本当・・・なのですか、姉様・・・」

ヴィクトリアが悲しげに顔を伏せる。

エリスは首を振って肯定。

「だが・・すぐに始まるわけではない、私がここに来たのはもう一つ理由がある・・それは・・私と戦え、お前達」

エリスが暗い空気を吹き飛ばすように告げた。

『は?』

三人でそう呟いた。

・・・・・

「正気ですか・・姉様!？」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「ああ、正気だぞ私は」

エリスは微笑む。

姉様が正気だった事など今まで一度もないのに・・と、ヴィクトリアは呟いていたが。

「戦争が始まらずとも、始まるうとも・・学院の生徒の実力を知っておくことは重要だ、それに興味があるしな・・光と闇の系統と・・ヴィクトリアがどれだけ成長したのかも」

不適に笑うエリス。

レオンはその顔を見て思った。

この人・・本当に王女か・・?・・思い切り百戦錬磨の強者に見えるんだけど・・

「ヴィクトリア・・エリスさんって、どうして傭兵部隊の隊長をしてるんだ?・・王女ってのは戦わないだろ普通・・それに傭兵って

のが一番・・・」
レオンが耳打ちする。

「ああ・・・姉様は元々、天才的な戦闘能力を持っているのだ・・・傭兵部隊の隊長をしているのは、姉様が先代の傭兵部隊隊長を勤めていた者を倒してしまつてな・・・それ以来」
ヴィクトリアはため息。

「それに・・・姉様には・・・ハアレがある」
ヴィクトリアが小さく呟いた。

アレ・・・？
レオンは首を傾げた。

一方、場所はルシアーデ王国。
アーフェリオンはある場所へと来ていた。

アーフェリオンは通路を歩いていた・・・そこは熱気に満ち、通路の下では沢山の人間が何かを行っている。
溶鉱炉や大釜など・・・沢山の容器が存在している。

「・・・しかし、暑いな・・・ここは」
アーフェリオンは呟いた。

そして、アーフェリオンの背後には七人の人間達。

「そう思うだろう？・・・聖七騎士団諸君」
アーフェリオンが微笑む。

そう、背後に居るのは聖七騎士団・レオン達を苦しめたメンバー。
「本当ですね〜・いやぁ・戦争に向けて武器を作り出していた
なんて、僕は知りませんでしたよ」
レイドルが微笑む。

その通りで、聖七騎士団すら、この工房の事を知るのは今回が初めてだった。

「・・・本当ね」

エヴェリウスが通路から下を見つめる。

下にはマグマのような・溶岩のような、赤い液体が流れている。
それをレインのような物で加工しつつ、流れ作業で武器を作っている。

「へエ・・・こいつはすげえじゃねエか」
ジョンが笑う。

やがてその通路を進みきり、目の前に巨大な扉が現れた。
その扉にアーフェリオンが手をかざす。

「この先に何かあんのかア？」
ジョンが質問を投げかける。

「クク・・・入ってからの・・・お楽しみだ」
アーフェリオンは不適に笑うと、何かの呪文を唱えた。

ズ・・・ウ・・・ン・・・ギイイイイイ・・・
扉が甲高い音をたてて開いていく。

目の前が光で満たされる。

.....

「これは.....」

《ソレ》をみたジャックが目を見開く。

「こんな・・・何故・・・こんなところに
エヴェリウスが呆然となる。」

聖七騎士団の前に現れたのは・・・巨大な槍だった。

「これは・・・？」

エクセリーゼがアーフェリオンに尋ねる。

目の前の槍は、長さが30メートルほどだろう・・・しかし・・・その
槍が放つ魔力は・・・

「・・・人間のソレとは違いすぎますね
レイドルが真剣に告げる。」

「白い槍.....」
ゼクシアが呟く。

その槍は白い槍だった、そしてその白い槍の表面には黄金の古代文
字のような物が蛇のように・・・まるで槍を締め付けるように走って
いる。

「・・・神殺しの聖槍「ロンギヌス」.....」
ジャックが呟く。

「？」
ジャックが呟いた単語に、エヴェリウス、ノア、アーフェリオン、
以外の三人が眉を顰める。

「クク．．やはり、分かる者は少なかるう．．．これは聖槍ロンギ
ヌス．．別名が神殺しの聖槍．．．」

アーフェリオンはそう告げると、話し始めた。

「かつて．．世界に邪悪な存在が現れた．．ソレを見た人々は、闇
と光の力を．．そして数千万という人の魂を使ってコレを造った．．
．．」

アーフェリオンが告げる。

その言葉に、レイドル・ジョン・エクセリーゼが眉を顰める。

「古代の人々はそのある存在を封じる為だけに．．この槍を作り出
した．．この槍は．．天上の神々を殺戮し、悪魔すら殺し．．
《神魔》を封印する程の力を持つとされた」
アーフェリオンが目を細める。

「つまり．．これこそが．．人間が神に．．絶対的な存在へと牙
を突き立てるために生み出された．．．対神殺用の神具だ」
アーフェリオンは．．微笑んだ。

ジャックは目を細め、エヴェリウスは憎らしげに顔を歪ませ、ノア
は微笑み．．それぞれの反応を示した。

「よもや．．これを戦争で使う気ですか？」
レイドルはまだ微笑んでいる。

「戦争は単なるお遊びでしかない、私の目的は・・・封印されたある存在を解き放つ事・・・それが私の目的だ・・・それに、この槍はレプリカ・・・本物はここにはない」
アーフェリオンは呟く。

「んだよオ・・・レプリカかよ」
ジョンがため息。

「だが同時に、レプリカですら・・・これ程の力を持っているのだ・・・本物ともなれば・・・」
エクセリーゼが呟く。

「その通り・・・さあ・・・始めようか、クライマックスへと到るまで・・・後少しだ」
アーフェリオンは微笑んだ。

その場で聖七騎士団は一先ず解散した。

「どうするんだア？・・・お前は・・・」
ジョンが呟く。

「・・・私は王に尽くすまで・・・それは変わらぬ、たとえ世界が壊れようと知った事ではない」
エクセリーゼは歩きながら呟く。

「ははア、違いねエ」
ジョンが笑う。

「俺達の目的は、世界の变革・・・つまりないこの世界をぶち壊すだけだ」

ジョンが唇を歪ませた。

「大変なことになったわね、まさか・・・ロンギヌスがあるなんて・・
それもレプリカ」

エヴェリウスは城の屋上に立っていた。

「・・・・ふん・・構わぬ、レオンはもう覚醒済みだ・・後は・・
」

ジャックは微笑む。

「あなた・・・本当にあの子の事しか考えてないの？」
エヴェリウスがため息。

「言ったはずだぞ、エヴェリウスよ・・私はレオンに賭けると・・
お前があの子に賭ける様に・・私もまた・・・」
ジャックは遠い目をして遙か向こうを睨む。

「・・・・そうね・・いよいよ始まるのね、聖七騎士団・・いい
え、ミルフェリーナ王国とルシアーデ王国による・・世界の命運を
賭けた戦いが」

エヴェリウスは悲しげに微笑んだ。

「もう少しよ・・アリス・・あなたももう少しで《彼女》と一つ
になれる・・その時こそ・・覚醒できる・・《星鏡世界の精霊》と
して・・・」

エヴェリウスは呟いた。

ルシアード王国、王の間にて。

「クク・・・さあ・・・始めよう・・・いいや、始めねばなるまい・・・今しばらくお待ちください・・・我が主・・・《シャイターン様》」
アーフェリオンは目を閉じた。

「アーフェリオン王」

目の前にノアが現れる。

「ノアか・・・」

アーフェリオンは目を細める。

「・・・力は戻りましたか・・・？」

ノアが微笑。

・・・

アーフェリオンは片手をかざす、そこから生まれるのは・・・

ズ・・・

掌から漆黒の影が生み出された。

「あと少しだ・・・あと少しで力も完治する・・・おのれ・・・今思うだけでも忌々しい・・・私とシャイターン様を封じたあの女・・・《アリス・イル・エキテス》めが」

「あの女が我が主につき立てた本物のロンギヌスを、私が作り出したロンギヌスで打ち消してくれる」

ガンー！！

アーフェリオンの拳が、玉座を砕いた。

「……………」
ノアは目を細めた。

「新世界など生まれさせてはならぬ……私は……いや……」
「……」
アーフェリオンは目を閉じ。

《我がこそが、この世界の全てを喰らうのだから》
アーフェリオンの声音が変化した。

一方レオン達は、学院の総合訓練場にいた。

「では……行くぞ……！」
エリスが叫んだ。

レオン、アリス、ヴィクトリア、ルークの四人は一斉に駆け出した。

—————次回予告—————
遂に始まったエリスとの戦い、エリスは圧倒的な力でレオン達を蹂躪する。

「どうした、そんなものかお前たちはっ……！」

そして学院ではある異変が起きる……

《グオオオオオオオ……》

「なんだあれは……!?!」
アリシアが叫ぶ。

「魔鏡……神獣……?」
レオンが絶句する。

次回、投影の神器、お楽しみに。

投影の神器

「さあ、来い！」
エリスは叫んだ。

レオン達が居るのは、総合訓練場。
ミルフエリーナ第一王女であるエリスが、レオン達と戦いたいという事で、急遽この場所を使用する事になったのだ。

訓練場に居るのは、レオン、アリス、ヴィクトリア、ルークとそれに加え観客としてアリシアとサクラの姿もあった。

レオン達四人はエリスを囲むように四方に立っている。
ジリ……

レオンが足を一步前に踏み出す。
「はあっ！」

レオンが踏み込む。

キィィィ……

漆黒の剣が顕現、そのまま横に薙ぐ。

エリスはレオンの方を見ようとしない。
レオンは風を切り裂きながら、漆黒の剣をエリスの腹部へと向かって走らせる。

「よし！」

レオンが微笑んだ直後。

ヒュ……

エリスの姿が消失。

「な・・に!？」

レオンが絶句。

ブーン!

レオンの漆黒の剣は空を斬るだけだった。

その時。

「遅いな」

レオンの背後からエリスの声が響く。

「っ!？」

ドン!!

背中に激しい打撃。

「がつ!？」

レオンは吹き飛び、訓練場の壁に叩きつけられた。

ガアアアアア!

あのレオンが、エリスの肘で打撃を食らわされただけで吹き飛んだのだ。

「っ!!！」

ルークが掌に雷を纏う。

バチン!!

「おお!!！」

踏み込み、エリスの真正面から攻撃を加える。

「正面とはな」

エリスが苦笑。

「うおおっ！」

ルークが雷の拳を腹部に向かって叩き付ける。

しかしエリスは足を半歩ずらす事でルークの拳を軽くかわす。

「あ」

ルークが思わず呟いた言葉を無視し、ルークの体がエリスの前を通り過ぎたとき、エリスが足を真上に蹴り上げる。

ドゴォ！

人が与えた攻撃とは思えない激突音が響く。

「が……う」

ルークは思わず吐血。

そしてその場で体をひねって回し蹴りを放った。

ドゴン！

ルークの体が吹き飛ぶ。

「へ……役目は果たしたぜ」

吹き飛ばされている空中で、ルークはニヤリと笑う。

「ん？」

エリスはその顔を見て僅かに眉を顰める。

「ロンギエールの槍！！」

エリスの背後で顕現を唱え終えたヴィクトリアが槍を構える。

エリスは反対側へと視線を走らせる。

「はあ！」

反対側ではアリスが純白の剣を顕現させて、踏み込もうとしている。

「成る程・・・さっきの二人は動揺か、二人の攻撃で私の僅かな隙を作って確実に攻撃を与えようとしていたのか」

エリスが分析をしながら微笑む。

「確かに、暇つぶしくらいは出来そうだな」

「暇つぶしで終わらせるつもりは・・・」

アリスが呟き。

「ありませんよ姉様!!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「はっ！」

アリスが大きく踏み込む。

ダガン！

地面を穿ち、エリスの元へと迫る。

「はあああ!!」

一方反対側でもヴィクトリアが同時のタイミングで踏み込んだ。

「ふ・・・これは」

エリスが笑い、腰の騎士剣を抜き放ち地面に立てる。

「ただの剣では・・・」

アリスが呟き、剣を振りかぶる。

「防げませんよ!!」

ヴィクトリアもまた叫ぶ。

「いいや、防ぐなどと言っておらん・・・私はお前達の攻撃をかわすだけだ」

エリスが二人の攻撃の届く寸前で、アリスとヴィクトリアの手首を掴んだ。

そのまま、思い切り二人の腕を引っ張る。

「なっ!?!」

「しまっ!」

アリスとヴィクトリアが絶句。

「ふん」

エリスはその後剣の取っ手を踏み台にし、空中へと跳躍。

エリスに引っ張られた上に、標的たるエリスの姿が消えたためにエリスに直撃するはずだった二人の攻撃は、アリスとヴィクトリアの自滅となってしまった。

ロンギエールの槍とアリスの純白の剣が激突。

ガアアアアン!!

凄まじい衝撃波をあたりに放つ。

エリスはそれを空中から見下ろしながら、微笑む。

「個人としての戦闘能力は確かに高い……だがそれだけでは私には勝てん」

「それは……どうかな」

空中から声が響く。

「何?」

エリスが思わず頭上を見上げる。

そこには、エリスよりも高い位置に居たレオンだった。

「ち」

アリスが舌打ち。

そこできずく。

「っ・・・太陽と重なって・・・」
そう、太陽と重なっていたために、エリスのレオンに対する反応が遅れた。

ほんの一瞬目を塞がれた・・・その一瞬をレオンは待っていた。

やがてレオンの背中から、太陽を黒く染めるような漆黒の翼が顕現。

一方で観客席の方では。

「うまいわね、レオン君」

アリシアが微笑む。

「本当だね、あの子達、凄く上達してるよね」

サクラが子供のように足をブラブラさせながら呟く。

アリシアは立ちながら、サクラは柵の上に座りながらそれぞれ呟く。

「けれど、それでもあの人には届かないわね」

アリシアが片目を瞑る。

「ん？なんで？」

サクラは不思議そうに首を傾げる。

「あの人はね・・・少し特別な力を持つてるのよ」

アリシアが遠い目をして呟く。

「特別って？」

サクラは興味なさそうに告げる。

「あなた・・・興味なさそうね・・・」

アリシアがため息。

「まあいいわ・・・あの人・・・エリス王女は風系統のナイト・・・そして、《魔道蓄積異常体質》の持ち主」

「何それ？」

サクラが真剣になつて問う。

魔道蓄積異常体質、それは生まれながらにして莫大な魔力を宿した者のことを指す。

その体質を持つて生まれてくるのは千万人に一人とされ、その者が宿す魔力量はその宿した人間自身がコントロールできないほどだといわれている。

かつてその体質について研究している機関があつたが、実験体の暴走によつて研究所とその範囲、直径十キロが焼け野原となつた。

そして・・・

「エリス王女は生まれながらにして、その魔力を完全に掌握、コントロールできた有一の存在なのよ」
アリシアが呟いた。

「おおおおお！！」

レオンが叫び、漆黒の剣を全力で叩き付ける。

しかし・・・

「やるな・・・全く・・・優秀というか・・・無謀というか・・・しかし面白い、これなら私の魔法にも対抗できるな」

エリスが微笑んだ瞬間。

「ちよつとちよつと、これ何？」
サクラが柵から飛び降りる。

「これは……」
アリシアが目を見開く。

「はああああ！！」
アリスの叫びに応えるように、純白の翼が光を放つ。
光はさらに強まり、一対だった翼が二対へと姿を変えた。

つまりアリスの翼が二つから四つへと・二対翼へと「進化」したのだ。

「はあああ！！」
アリスが踏み込んだと同時に、地面が碎ける。
ゴオアアアアアアツツツ！！

砂や瓦礫を巻き上げながら、アリスが全力で突っ込む。

「成る程……これが光の力か！！」
エリスが微笑み、魔力を放つ。

ズン！！！！
辺りが莫大な魔力で満たされる。
ヴィクトリアやルークたちは息を詰まらせるほどだが、アリスは顔色一つ変える気配がない。

「ほう、この魔力を顔色一つ変えずに突っ込んでくるか……面白

い・・・ならば、先ほどあの少年に与えた一撃をお前にも与えよう」
エリスの掌に風が収束。

アリスが黙って純白の剣を振り上げる。
エリスもまた、掌を突き出すように構える。

「風魔法・高位詠唱・風魔の一撃へグエル・エレフォース！！！！」
エリスが告げた瞬間、強大な魔力と共に風の壁がアリスに迫る。

「ッ！！！！」

アリスは剣を横に薙ぐ。

ガアアアアアアアアアアン・・・・・・・・！！！！！！
光と風が激突。

「まずい、ルーク！！私の後ろに！！！！」
ルークはすぐさまヴィクトリアの背後に隠れる。
ヴィクトリアは目の前に水の障壁を展開。

一方アリシア達は。

「ちよつと・・・あれはやばいわよ」
顔を引きたらせたアリシアが呟く。

目の前には、衝撃波があまりに強力すぎて、もはや衝撃波の壁とも
いえるものが迫っている。

その衝撃波の壁は、地面や岩盤を巻き込んでいる・・・これを喰らえ
ば死ぬ可能性もある、そのみならず・・・学院が消え去る可能性も
あった。

「ん〜やばいね〜」

サクラがウインク。

「遊んでないで何とかしなさいっ!!!」
アリシアが叫ぶ。

「仕方ないね〜・・・じゃあ・・・」

バチバチ・・・

サクラが手刀を形づくり、そこに電気を纏わせる。

「後で食堂で甘いもの奢ってもらっよ〜・・・それとレオン君は・・・
まあ、大丈夫かな」

サクラが苦笑。

そして直前まで迫った壁を・・・

「ふっ!!!」

キィィンツツ・・・

澄んだ音と共に手刀で斬った。

バガン!!!

サクラとアリシアの背後・・・つまり学院の立っている位置へ向かおうとする衝撃波だけを切り裂き、二等分にした。

ズ・・・

衝撃波が辺りを一掃し、暫く立った後ヴィクトリアとルークが声を上げた。

「大丈夫ですか・・・ヴィクトリア王女・・・」
ルークが呟く。

「ああ……だがここまでとはな……あと少しで耐えられなかったかもしれん」
「ヴィクトリアがぺたんと座り込む。」

あたりは地面が抉れ、観客席を見ると、ボロボロに倒壊している。

そして……前方から……
ガン・ギアン!!!
剣戟が響く。

「まさか……まだ戦っているのか……!?!」
「ヴィクトリアが目を見開く。」

「はああ!!!」
「アリスは跳躍し、振り下ろす。」

「く……」
「アリスは騎士剣で受け止める。」

ガン!!!

「まさか……ここまでとはな……だが、終わりだ!!!」
「アリスが一気にアリスの懐に踏み込む。」

そのまま……
「っ!!!」

アリスの顎に、アリスが掌底で打撃を与えた。

サクラが叫んだ。

「勝者ゝルベリージア学院生徒諸君ゝ！」

その時。

ズ．．．．．ン．．．．．

辺りを魔力が支配した。

「な．．．．．」

ヴィクトリアとルークが絶句。

「何これ．．．．．？」

サクラが眉を顰める。

魔獣とも．．．人間とも．．．違う．．．こんな魔力はサクラには経験したことがないものだった。

そう、二人を除いて。

「まさか．．．．．」

レオンが立ちすくむ。

「レオン君．．．．．？」

アリスが心配そうに呟く。

「バカな．．．．．」

ヴィクトリアが呟く。

「ヴィクトリア王女．．．．．？」

ルークも首を傾げる。

オンとヴィクトリア。

そして遂にレオンとヴィクトリアは、アルビオンで体験した全てを、アリシア達に話すことに……

「あれは……魔鏡の庭園に住まう……化け物です」
レオンが告げる。

次回、記憶投影、お楽しみに。

記憶投影

場所はルシアーデ王国。

「あなたって人は……」

エヴェリウスが肩を竦める。

エヴェリウスの目の前では、ジャックが片手の上に乗せた神玉に魔力を注ぎ込んでいた。

「わざわざ《投影の神器・アイテール》を使わなくても……いいんじゃないの……？」

「いや……レオンが早く魔鏡の庭園にたどり着く為に必要な事だ、私はそのために段階的に聖七騎士団をぶつけていったのだ」
ジャックがほくそ笑む。

そうか……と、エヴェリウスは思った。

今までの聖七騎士団の行動には、不可解な事が多かった。
まずはジョン……ジョンには指令は出ていなかった……にも関わらずどうしてジョンはデングバルトに赴いていたのか。

「全てはあなたね……ゼクシアをミルフェリーナに送り込ませ、闇の少年に覚醒への糸口を掴ませたのも……ジョンを送り込みアリスにも覚醒への道標……《境界文書》の目覚めへと導いたのも……」
エヴェリウスが呆氣にとられたように告げる。

「クク……その通りだ……全ては我らが目指す世界の為だ、アーフェリオンは《影の力》に吞まれつつある……今の奴ではまともな判断などできまい」

ジャックは無表情で呟く。

「確かにね、今のアーフェリオン王は性格に分裂が見られるわ．．．
純粋なアーフェリオンとしての人格と．．．影の力を持つアーフェリ
オン．．．二人の人格がだんだん入れ替わってきているものね．．．」
エヴェリウスは頷く。

ジャックの掌にある黄色の神玉が更に輝く。

「転生絶界の意志である《彼女》の記憶の欠片より抜粋、《流れる
因果、断ち切る楔．．．我、刻みて意志の名を．．．永久より来たれ．．．
魔の獣よ》．．．《アルトレア界法》．．．《空・エアリアル》」
ジャックが「ある言葉」を呟く。

「アルトレアの世界から引つ張ってきたの？．．．相変わらず無茶な
事を．．．」

エヴェリウスが笑う。

しかし、エヴェリウスは感嘆の念を隠しきれなかった．．．まさか、
本当に自分以外にも《新世界の魔法》を使うものが居たのだから。

黄色の神玉が煌き、宙に浮き上がる。

そして．．．天井をすり抜けて、ある方角へと飛び去った。

そう、レオン達の居るルベリージア学院へと．．．

一方、レオン達の訓練場の上空に歪みが現れた、まるで空が歪んで
いるかのような気配がしたかと思えば．．．

「魔鏡．．．神獣．．．だと．．．？」

レオンが思わず目を疑う。

空中に、白と黒のオーラを纏った竜が一匹・顕現していた。

《グオオオオオオオオオオオン！！！！》

咆哮が響く。

レオン達は一齐に耳を押さえる。

ビリビリと辺りに魔力を放ちながら、ゆっくりと地上に降りてくる。

「ま・まずいわ！・なんだか分からないけど、全員ここから離脱して！！」

アリシアが上を見上げ、叫ぶ。

「ああ、その方がいいな」

「っ！？」

レオンが振り返る。

そこには、いつの間にか意識を取り戻したエリスが平然と立っていた。

「エリスさん・無事だったんですか・・・・！」

レオンは絶句。

あれだけの全力で放ったのに、もう意識を取り戻すとは・

「とりあえず、離脱だ」

エリスがいきなりレオンを脇から抱える。

「うおっ！？」

「喚くな、いくぞ」

エリスの足元に風が収束。

ダガン！！！！

思い切り踏み込み、高速でその場を離脱した。

アリスはヴィクトリアを抱え、四枚となった新たな翼で一気に上昇、離脱した。

ルークは雷系統の持ち主なので、速さにいたっては問題ない。

全員がその場から離脱した瞬間に、竜が舞い降りた。

ズ．．．．．ン．．．．

地響きを響かせて、竜が降り立つ。

レオン達は学院へと一先ず移動し、あの竜を学院の屋上から見つめる。

「一体何．．．？．．あれは．．．．」

アリシアが呆然となる。

「．．．．．」

ヴィクトリアが俯いている。

「．．．．．」

レオンもまた同じだ。

「何だろうね〜アレ．．白と黒のオーラを纏ってる怪物なんて見た事ないよ?」

サクラが興味心身に見つめる。

その竜は何もせず、ただ咆哮を続けるのみだ。

・・・間違いない・・・アレは・・・魔鏡神獣だ、けれど・・・
何故？

レオンとヴィクトリアの中にはこの単語しかなかった。

《グオオオオオオオオ・・・》

魔鏡神獣は咆哮を続ける。

「さて」

エリスがその場を仕切るように告げる。

「説明してもらおうか、ヴィクトリア・レオンよ」

エリスが二人を睨む。

『っ!!』

二人はさらに俯く。

「二人とも・・・まさか・・・あれが何か知ってるの・・・!!?」
アリシアが絶句。

「レオン君・・・」

アリスが眉を顰める。

「レオン・・・お前」

ルークもまた、同じ。

「あ・・・アレ・・・は」

ヴィクトリアがろれつが回らない状態で告げようとする。

恐らく混乱しているのだろう、レオンもまた同じだからだ。

「あれは・・・魔鏡の庭園に住む・・・化け物です・・・」
レオンが小声で呟く。

「?????」

全員が首を傾げる。

アリスを除いて。

「魔鏡の庭園……?」

アリスが呟く。

「まずは……俺と……ヴィクトリアが体験した事を話さないと……
いけません……少し長くなるけど……いいですよね」

レオンがおずおずとその場の全員を見る。

全員が頷いたので、レオンは話し始めた。

……

「成る程ね……つまりは、レオン君とヴィクトリアが体験したアルビオン王国という国での出来事が、この世界で起こっているという事ね……信じがたいけど……信じるしかないわね」
アリシアがため息を吐く。

「……レオン君とヴィクトリアはそんな事を体験してたんだ」

アリスは絶句し、何もいえないようだ。

「しかし……アルビオン王国など……聞いた事がないぞ……ミ
ーテルフィリスという人物も聞いた事がない名だ」
エリスが眉を顰める。

「でもさ……ヴィクトリアちゃんに水碧の称号を与えたのはその国の

人なんですよ？・・・なら信じるに値するでしょ」
サクラは微笑む。

「あなたって・・・本当に人間？」
アリシアが突っ込む。

「というわけで・・・」
何がというわけで、かは分からないが、エリスが呟いた。

「これより、あの・・・魔鏡・・・神獣だったか？・・・その掃討作戦を開始する」

「わーい」

サクラが拍手。

「・・・」

アリシアがジト目で睨む。

「・・・冗談」

サクラが姿勢を正す。

「では、攻撃、防御の役割だが・・・まずは防御陣営だ・・・防御は
ヴィクトリアとアリシアで担当させる、異論はないな？」

エリスが二人を見る。

二人は頷いた。

「レオンの情報が正しければ、相手は強力なブレス攻撃を放ってくるらしい、それを防ぐのが二人の役目だ・・・そして攻撃役は・・・
レオン・アリス・・・お前達だ」

エリスが告げた言葉に、二人は絶句した。

「でも、エリスさんは……」
レオンが呟く。

「私は奴の動きを止める役だ、今は行動を開始していないだけかもしれない、無闇に攻撃だけを加えていれば必ず動きを見せる」
エリスが断言する。

「ねえねえ、私は？」
サクラが自分を指差す。

「おお、サクラか……今思ったが久しぶりだな」
エリスが微笑む。

「うんうん、久しぶりだねエリー」
サクラが告げる。

エリー………？
全員が絶句。

「どうやら仲がいらしい。
なんで生徒会のメンバーってのは全員こんなに凄い人と知り合いなんだ？」
レオンは本気で悩んだ。

「サクラは攻撃の手伝いというより補助役だ、お前の戦闘能力はある意味では最強だからな」
エリスがそう告げ、全員の役割の分担が終了した。

その後、魔鏡神獣が動きを見せた。
《グオオオオオオオオオ……》
魔鏡神獣が吠えると、翼が広がる。

悪魔のような黒い翼だ。

バサ………

魔鏡神獣は一気に50メートル程上昇した。

「まずいぞ！」

ルークが叫ぶ。

ルークの役割は、学院へと危害が加わりそうな場合はそれを撃退する事だ。

ルークの叫びで、レオン達は作戦を開始した。

まずはエリスが攻撃を放つ。

「風魔法・高位詠唱・ハエレフォース・レイヴー！！」

エリスが使ったのは、レオン達の戦いで使用したあの魔法の派生型だ。

風が竜の周りに渦巻き、閉じ込める。

《グアアアアア！！》

竜が一声発する。

バアアアアーン！！

一撃で風が消える。

「何！？」

エリスが絶句。

《グガアアアアアアア！！》

竜の口に黒炎が収束。

圧倒的な熱量が辺りを満たす。

「まずいつ!!」

エリスが叫び。

「我が元に顕現せよ、打ち抜く王の右翼なる者よ……一つ……神速!!」

エリスが叫ぶと同時に、片手に銃器が顕現。

銃……!!?

レオンが横目で確認し絶句。

銃の宝具なんて始めてみたのだ。

「打ち抜く王の左翼……二つ……神力!!」

エリスが叫ぶと同時に、今度は反対側の腕にもう一つの銃器が顕現。

そして……

「一撃必中の魔銃・ホワイト・バレット白虎双銃!!」

エリスが叫ぶと、銃器が純白に染まる。

ダガンダガン!!

二発を同時に放つ。

ガアアアアアアン!!!!

銃の弾丸が魔鏡神獣の頭部に激突。

《グウウウウウオオオオオ!!》

「アリスアたちがまだ指定のポイントまでこれていないのか……!!」

ならば、と付け加える。

「ホワイト・バレット……行くぞ!!」

エリスが叫び、引き金を引く。

バンバンバンバン!!!

右の銃から圧倒的なスピードで連射される弾丸。

《グギャアアアアアアアアア!》

魔境神獣が絶叫。

レオンとアリスが指定のポイントに到着。

「なんて連射速度だよ……あれを食らったらひとたまりもないな……」

レオンがつぶやく。

「レオン君!」

アリスが叫ぶ。

レオンが頷き攻撃を開始。

「おおおおお!!」

レオンが叫び、漆黒の翼と剣を顕現させる。

「はあああああ!!」

アリスもまた純白の二対翼と剣を顕現。

その頃。

「ふう〜到着ね……」

アリシアが呟く。

「……これからだ……」

ヴィクトリアが呟く。

――――次回予告――――

遂に始まった魔境神獣との戦い、レオンたちは勝利することができ
るのか！？

「はああああ！！」
ヴィクトリアが叫ぶ。

次回、王女と銃、お楽しみに。

王女と銃

バババババン！！

白く発光しながら魔鏡神獣へと向かう弾丸。

ガアアアアアアン！！

《グオオオオオオオン・・・！》

魔鏡神獣が絶叫。

しかし大したダメージにはなっていない。

その弾丸の引き金を引いた本人のエリスは舌打ちをした。

「ちっ！！やはリアリウスと同じく魔力が制限されていてはダメージを与えられんか！！」

エリスは思わず左の銃を見つめる。

・・・まだ左を使うわけにもいくまい・・・暫くは右で対処せねば・

「せめてヴィクトリアたちが来るまではな！」

エリスが叫び、引き金を引く。

バン！！

銃弾が一気に二十発程発射された。

その時。

《ガアアアアアアアア！！》

魔鏡神獣が尻尾をしならせる。

ブウウウウンツツ！！

尻尾が急激にエリスに迫る。

「今よ!!」
アリシアが叫ぶ。

その瞬間、レオンとアリスは翼の力を使い跳躍。

一気に魔鏡神獣の頭上へと上昇した。

「うおおおおおつ!!」

レオンは漆黒の剣に魔力を溜め、巨大な漆黒の斬撃として魔鏡神獣へと放つ。

「はあああつ!!」

アリスは純白の剣に魔力を収束。

キイイイイイイン……

アリスの周りに三つの魔法陣が展開し、三つの魔法陣も剣を中心に
して魔力を収束。

「発動・光煌魔法・高位詠唱・三天斬波ハシャイン・アーク」
!

アリスが叫ぶと同時に、剣の切っ先と三つの魔法陣から同時に純白
の光線が放たれた。

二人の攻撃を通すように、風の壁がその場所だけ消える。

しかし。

《ガアアアツ!!》

魔鏡神獣が体を捻り、口を開けながら凄まじい速さで魔力を収束。

そして放つ。

バアアアアツ!!

その通りで、アリシアが片腕を突き出しているだけで、風の方がアリシアをかわしているのだ。

「ふふ・・確かに便利・・というか凄い力ね・・今までは風に働きかけるといっか・・風に私の願いを聞いてもらっていたんだけど・・今は風自らが私に力を貸してくれているような感じがするわ・・」

「

アリシアの首筋の紋章が薄く水色に輝いているのが見て取れた。

やがて煙と突風が収まり、立っていたのは魔鏡神獣だけだった。

《グオオオオオオオオ！！》

魔鏡神獣が咆哮。

口に魔力を収束させ始める。

その的は・・・

「ヴィクトリアっ！！」

エリスが叫ぶ。

「嘘っ！？」

アリシアが叫び、魔法を発動させようとするも・・・

「体が・・・動かない・・・！！？」

アリシアの体が硬直。

「アリシア！？・・どうした！？」

ヴィクトリアが駆け寄り、手をかざす。

・・・思い出せ、体の何処に異常があるのか・・・それを見つけてるのだ・・・！

ポチャン・・・・・・・・・・

ヴィクトリアの中で水の波紋が広がる・・・・・・・・・・
やがてヴィクトリアの体が青白く輝き始める。

原因は・・・・・・・・・・

「風翔の紋章!?」

ヴィクトリアは絶句。

どうして・・・・・・・・・・?

やがてその答えがはつきりとなる。

「そうか・・・アリシアがいきなり力を開放したから・・・強大なその力に体がついていけていない!!」

同時にその時、魔鏡神獣のブレスが放たれようとしていた。

「防げるか・・・私一人で・・・・・・・・」

ヴィクトリアが唾を飲み込む。

その頃エリスは・・・・・・・・

「くそっ・・・間に合え・・・間に合ってくれ!・・・ヴィクトリアを死なせるわけにはいかない!」

エリスは森の中を全力で疾走していた。

その時、エリスの中で・・・・・・・・ある思い出が思い出された。

それは・・・エリス自身がヴィクトリアを・・・大事な人を守る
うとした理由。

・・・場所はミルフェリーナ王国。

その歳はアリウスが調度10歳の誕生日を迎えようとしていたとき
だった。

そのパーティーが行われている城の中で、一人の少女が豪華な部屋
で一人で本を読んでいた。

退屈そうに椅子を前後に動かし、軋ませながら。

「・・・アリウスの奴は・・・今は・・・」

その少女は狭い窓から狭い空を見る。

少女は遂に飽きたように本を閉じる。

パタン

そうして少女は椅子から立って、部屋の大きな扉へと向かっていっ
た。

少女は扉を見上げる。

その扉には大きな南京錠のようなものが、かけられていた。

少女は扉を揺するが、びくともしない。

その少女の名前はエリス・シア・ミルフェリーナ。

エリスはアリウスの次に生まれた子供だったが、何故かこのような
部屋で閉じ込められていた。

金髪の髪をポニーテールでまとめているのが特徴的な少女だ。

「何故・・・私だけが・・・」
エリスは俯いた。

エリスはキツと視線を厳しくし、鍵に向かって魔法を放った。

「はぁ！」

エリスが手をかざすと、風が渦巻き鍵にぶつかる。

ガキン！

風は鍵に触れた途端消滅した。

魔法無効化の術式が、鍵にかけられていたのだ。

「・・・・・・・・くそ・・・・・・・・」

少女は渋々扉から離れ、窓をのぞく。

窓からは狭い空、その空を鳥が飛んでいた。

「・・・私もあんな風に自由に飛んでいたら・・・」

少女にとってこの部屋は、牢獄でしかなかった。

部屋はけして汚くない、綺麗に掃除され、床は赤い絨毯が曳かれ、豪華なシャンデリアが天井に飾られている。

それはそうだろう、ここは王室用の部屋なのだから。

その時、扉の向こうで女性の声が聞こえた。

どうやら城の使用人のようだ。

「聞きました？・・・アリウス様は立派に育っていらっしやるという話ですわ、魔法もとても優秀だそうですねよ？」

「ああ、そうらしいね・・・凄いな、私が王族ならアリウス様と結婚したかったわ」

エリスは扉に走り、聞き耳を立てる。

「でも、アリウス様の妹君であるエリス様は……」
女性が口を噤む。

「……ああ……あのお方は……《化け物》ですからね……嫌
だわ……」
女性が激しい侮蔑を込めて呟いている。

「そうですね〜一人と言われる、魔道蓄積異常体質です
ものね……大きな力を持つが故に忌み嫌われる存在……ああ……
怖い怖い……」

エリスは俯き涙を零していた。

「う……く……う……わ……私は……何故……何故こんな
力を持つて……」

エリスはへなへなと座り込む。

「アリウスと結婚したいのなら譲ってやる……王族になりたいの
なら変わってやる……だから……だから私を自由にしてくれ……
!!!」

エリスは泣きながら呟いた。

そう、エリスは生まれたときから化け物と言われ続けてきた。
魔力を……あまりに強大な魔力を持つが故に嫌われてきた。

エリスにとって、魔力など要らなかった……王族でなくてもいい・
・貧乏な家系で生まれても良かった……ただエリスは自由になりた

かった。

それから長い年月がながれた。

エリスはようやく自由に生活できるようになったが・・・周りの目が変わる事はなかった。

城で勉強に励んでいるときも、城の周りを見ているときも・・・いつもエリスの影で、化け物と呼ぶものは絶える事がなかった。

そしてエリスが9歳の時、一人の赤子が生まれたらしい。

その赤子の名前はヴィクトリア。

美しく、強くあれという願いを込めて名づけられたらしい。

エリスはとても嬉しかった、自分に妹ができた事が。

その妹が成長していく度に、エリスは影ながら喜んでいた。

妹は自分やアリウスほどではないにしろ、かなり優秀な方らしい。

そしてヴィクトリアと庭先で一緒に遊んでいるとき。

「姉様、私は姉様のようなナイトになりたいです!!」

ヴィクトリアはエリスを覗き込み、そう告げた。

「そうか・・・だが大丈夫だろう・・・ヴィクトリアなら私以上のナイトになれる」

エリスは微笑んだ。

エリスはその時、すでにナイトの候補生の称号を手に入れていた。学院に通っていない時点で既に、魔法の高位詠唱が使えるほどにま

で成長していた。

そしてその夜に、城に盗賊が忍び込んだ。

城は混乱し、王族全員を一つの部屋に集めた。

「全員無事ですね？」

当代の王妃、シャルデリア・シア・ミルフェリーナ。

シャルデリアは間違いなく最強のナイトであった。

そして、エリスもまたその部屋に集合していた。

やはり周りの視線が突き刺さったが、エリスは気にはしていなかった。

そこであることにきずいた。

「おい・・ヴィクトリアはどうした!？」

エリスが叫んだ。

周りのものは戸惑うだけ。

「まさか・・・くそっ!!」

エリスは部屋を飛び出した。

「待ちなさいエリス！」

シャルデリアの声を無視して、エリスは走り、大雨がふる街中を走り回った。

探し続けて一時間。

街の十字路で、一人の少女を抱えた黒ずくめの男を見つけた。

「貴様らか・・・ヴィクトリアをさらったのはっ！・・・」
エリスから魔力が放たれた。

「ひいつ・・・化け物っ！！」
男が叫ぶ。

「っ！！」
エリスの体が硬直する。

しかし、エリスにとってはどうでも良かった・・・ヴィクトリアを守るためなら。

「ああああああっ！！！！」
エリスは絶叫し、魔力を放った。

その時、エリスの中で変化が起きた。
体が白く発光していたのだ。

「これは・・・そうか・・・この力が・・・我が元に顕
現せよ・・・ホワイト・バレット！！！！」
エリスは自分の胸に浮かんだ名を叫んだ。

エリスの両手に二丁の白い銃が顕現した。
「はあああああ！！」
エリスは銃を連射した。

「うがあああっ！？」
男は絶命。

一人の少女が地面に降ろされた。

「ヴィクトリアっ！！・・・はあ・・・はあ・・・」
エリスは跪いた。

そのままエリスはヴィクトリアを抱きかかえる。

「・・・う・・・姉様・・・？」

ヴィクトリアは薄っすらと目を開けた。

「ヴィクトリア・・・無事だったのか・・・」

エリスは笑う。

「姉様・・・どうして泣いておられるのですか・・・？」

ヴィクトリアは首を傾げる。

エリスは笑いながら泣いていた。

「はは・・・はは・・・そうか・・・そうだな・・・守ってやる・・・
私が、ヴィクトリアを・・・調度銃も二つある・・・」

もしかしたら、宝具が私の願いを聞いてくれたのかもしれない・・・
と、エリスは思った。

二つの銃があるなら守りぬこう・・・一つでは自分しか守れない・・・
なら二つの銃で、自分と・・・大切な人へヴィクトリアを守ろう・・・
そのために・・・銃が二つあるのだから・・・

エリスはその事を思い出し・・・

「私が・・・私が守るぞ・・・ヴィクトリアっっ！！！！！！」

エリスは全力でヴィクトリアと魔鏡神獣の元へと走っていった。

その頃レオンは……森の中で瓦礫の下敷きになっていた。

レオンは意識がない。

レオンは夢を見ていた。

「ここは……？」

レオンは周りを見渡した。

そしてきずいた。

「俺の……生まれた家……」

レオンの目の前に、ポツンとレンガで出来た家が建っていた。

そして扉が開く。

「いつまで遊んでるの？……ご飯よレオン」
白髪の女性が微笑んだ。

「……ねえ……さん」

-----次回予告-----

レオンは夢を見た、懐かしい……懐かしい夢を……

「姉さん……」
レオンは呟く。

次回、闇の逆鱗、お楽しみに。

人物・用語解説 ？（前書き）

急遽、人物解説を挿みました。

人物・用語解説 ？

―――登場人物―――

レオン・イル・エキテス《re on - i ru - e k i t e s u》

本編主人公、16歳、ルベリージャ学院1-A所属。

魔法系統は古代魔法系統《闇》

性格はめんどくさがりやだが、色々な人達と交流を重ねることで、物事を前向きに考えるようになる。

周りの女性から好意を向けられているが、鈍感なため、きずけていない。

神具は、殲滅の黒王剣ハレーヴァテインヰ

アーティファクトであるハ被剣ミスティルテインヰの適合者。

ミータールフィリス曰く、レオン・シクイルの生まれ変わり。

アリス・ランガルド《a r i s u - r a n g a r u d o》

本編メインヒロイン。

16歳、レオンと同じ組に所属。

魔法系統は古代魔法系統《光》

世界の秘密にちかづくためのハ鍵ヰであり、『光聖の宝具使い』。

神具は再生の白王剣ハヰ。

アーティファクト、ハ境界文書ハロンギヌス・クラウンヰの適合者。

仲間達と過ごすに連れて、レオンに対して特別な感情を抱く。

アリシア・エーテラーゼ《a r i s i a - e - t e r a - z e》

本編のヒロインの1人。17歳、2-B所属。

魔法系統は風、宝具は風王天刃ハウインディーネ。学院最強と噂される生徒。

第三の神器との戦いで『風翔の宝具使い』に目覚める。ジール・ルイラージとの出来事を経て、レオンに薄っすら好意を抱く。

ヴィクトリア・シア・ミルフェリーナ《vikutoria-sia-miruferrina》

本編ヒロインの一人、16歳。

メインに近いヒロインでもある。

ミルフェリーナ王国第二王女。

魔法系統は水。宝具は水真海皇槍ハロンギエールの槍。

性格は厳しいと思われがちだが、実は心優しい。

エグザリオとの戦いを経て、レオンにさりげなく好意を向けるようになるが、レオンは全くといっていいほどきき取っていない。

聖天国アルビオンで、エレイン・マリアガンスから『水碧の宝具使い』としての紋章を譲渡された。

ルーク・ブリトニー《rukubrittoni》

レオンの悪友、組みもレオンと同じ。

魔法系統は雷、宝具は、雷電極拳双ハサンダー・ゲイル

1年生で宝具を発現させており、優秀なグループに入る。

同じ雷使いとして、ルベリーシア学院の副会長である、サクラ・フアルバレンに憧れを寄せる。

アリウス・フィレス・ミルフェリーナ《ariusu-firesu-miruferrina》

ミルフェリーナ王国現、国王。

魔法系統は炎。星鏡世界最強と目される宝具使い。

宝具は炎皇竜の轟剣「ジーク・フリート」

『炎皇の宝具使い』の末裔でもある。

エリス・シア・ミルフェリーナ

ミルフェリーナ第一王女。

性格はヴィクトリア以上に厳しいが、かつて苦しい思いを経験しており、ヴィクトリアを守りたいという思いは誰よりも強い。

魔道蓄積異常体質の持ち主。

魔法系統は風、宝具は白虎双銃「ホワイト・バレット」

セルヴィア・オルセイド《seruvia-oruseid》

ルベリージア学院の理事長であり、アリシアの旧友。

魔法系統は風、宝具は風塵蒼弓「ヘル・シムルグ」

その実力はアリウスやアリシアとも肩を並べるほど。

独特の口調で話し、何事にも柔軟に対処する。

サクラ・ファルバレン《sakura-farubaren》

ルベリージア学院副会長であり、アリシアに匹敵するほどの実力者。

2-A所属、17歳。

魔法系統は雷。

宝具は天剛雷剣「アマノハハキリノツルギ」

子供っぽい口調と雰囲気を持つが、戦闘時には本気になったりもする。

ミルフェリーナ王国第一王女であるエリスとは、旧知の仲。

グラン・ジルグ《gurran-zirugg》
元・ミルフェリーナ傭兵部隊副隊長。
アーティファクト・デュランダルの力を使い学院を襲撃するも、レオンたちの奮闘によって失敗に終わる。

—————???—————

アリス・イル・エキテス
レオンやアリスの前に現れた存在で、アリスと瓜二つの姿をしている。

レオンの事を詳しく知っており、物語終結の鍵を握る。

—————聖天王国アルビオン—————

騎士王レオンハレオン・シクイール
アルビオン王国の騎士王。

圧倒的な力と、分析力を持つ。
常に冷静でいるが、魔鏡神獣から人々を守ろうとする時だけは気性を荒くする。

星鏡世界のレオンとも何らかの繋がりがあるようだ。

ミールフェリス・アルビオン《miterufirisu-rubion》

聖天王国アルビオンの皇女。

戦闘自体にはあまり慣れておらず、強いとはいえないが、その気に

なれば神具をも使用する。

レオンとアリスの精神世界に現れていたのは、二人を覚醒させる為であった。

何者かに役目を与えられていたが、その最後の役目である、ハレオンに影の力の存在を伝える^レ役目を全うし消滅した。

セリア《seria》

アルビオン王国における『雷神の宝具使い』

剣や武器類を使わずに、己の体を酷使して戦う方法である徒手空拳を好む。

宝具は不明。

アレミラ・イグレイン《aremira-igurein》

アルビオン王国における『風翔の宝具使い』

風の全てを支配できる為、空気抵抗など、この世界における制限^レ絶対摂理^レの一つを無効化できるが故に、絶対的な力を行使する。

宝具は、烈風天鎌^レシングル^レ

エレイン・マリアガンス《erein-mariagans》

アルビオン王国における『水碧の宝具使い』

水系統の頂点に位置し、圧倒的な治癒力を持つ。

ほとんど瀕死に近い状態の人間すら治療できる。

ヴィクトリアに並々ならぬ情を寄せていたが、そのヴィクトリアに『水碧』の力を譲渡した後、自分の持病に逆らえずに死亡する。

ガイ《gai》

アルビオンにおける『土帝の宝具使い』

土系統に最も優れ、アーティファクトであるアロンドイトを所持する。

—————ルシアーデ勢力—————

アフエリオン・ギル・ルシアーデ《a - ferion - giru
- rusia - de》
ルシアーデ王国国王。

聖七騎士団の主とも言つべき存在で、聖七騎士団のメンバーからも、敬意を寄せられている。

アリウスと並ぶほどの宝具使いのナイト
《シャイターン》の分身体。

ジャックとエヴェリウス曰く、性格に分裂が見られるらしい。

エクセリーゼ《ekuseri - ze》

精霊守護騎士団の隊長にして、聖七騎士団のメンバー。

アフエリオン曰く、堅物。

能力は、精霊殺しの魔剣・バルムンク。

エヴェリウス《everiusu》

聖七騎士団所属のナイト、ナンバー6のゼクスと呼ばれる称号を持つ。

アリスに接触し、意味深げな台詞を残す。

レオンやアリス・主にアリスに期待を寄せているようで、ジャックとも何らかの関係がある。

ゼクシア・ファイラーベ《zekusia - firabe》

聖七騎士団所属のナイト、謎が多く、かつてルベリージャ学院の生徒会長をしていた。

魔法系統は雷。

アリウス曰く、『雷神の宝具使い』の末裔。

ジョン・ガルーゼ《zyon-garuzé》

聖七騎士団に所属するナイト。

士系統だが、魔法は使わない。ジョン曰く、魔法が苦手。

宝具は不明だが、宝具の影響で鎖の力を使用できる。

アーティファクト、ハオシリスの涙の適合者。

ジャック《zyakkū》

聖七騎士団に所属している存在。

ナイトかどうかは不明。

レオンと何らかの関わりを持ち、多大な期待を寄せている。

唯一レオン以外で黒滅魔法を使える存在。

レオンとの関係の秘密は過去にあるようだ。

レイドル・ファルバレン

聖七騎士団所属のナイトで、一番なぞが多い。

序列ナンバー4。ハファイア

レイドル曰く、サクラ・ファルバレンと何らかの関わりを持つ。

ノア《noa》

ジョンの言葉の中に登場した、聖七騎士団のリーダー。

全てが謎に包まれていて、ハ境界文書を欲している。

その力は判明していないが、サクラの宝具を素手で止める、宝具を使わずに聖七騎士団のメンバーと並び立つ力を行使するなど、別格の存在。

星鏡世界

物語の舞台となる世界。

神と星の力によって作られた世界で、現在ではミルフェリーナ王国とルシアーデ王国がお互いに領土をかけて戦争を繰り返してきた。

魔法

星鏡世界に満ちている魔力を使い、己の心で描いた奇跡を顕現させる力。

宝具

人間の心を魔力によって具現化させた物で、大きな力を持っている。
火・水・土・風・雷の五種類で成り立つ。

黒滅魔法

闇属性の魔法で、通常の魔法とは力の威力が桁違い。
現在の世界の法則に当てはまらない、異端な力。
この魔法を使えるのはレオンとジャックのみ。
有を無へと変える力。

光煌魔法

光属性の魔法で、威力は黒滅魔法と同等。
世界の法則に当てはまらない。
使用できるのはアリスのみ。
無を有へと変える力。

終焉と創造の年代記へエクストラ・クロニクルへ
星鏡世界の神話や成り立ちが記された書物。

コピーや複写本なら多く存在しているが、コピーは原典の半分も記されていない為、さほど重要ではない。

原典の一つが、ミルフェリーナ城の宝物庫に保管されていた。

アリウス曰く、原典はバラバラになり、世界に散らばったらしい。

魔道蓄積異常体質

一人に一人と言う確立で生まれる人間が持つ体質。

圧倒的な魔力を持ってしまったために、化け物よわばりされる事がほとんど。

現在はエリスだけが確認されているが、過去にも幾人が存在したが、能力を暴走させて死亡している。

完全に制御できたのはエリスだけ。

神具

レオンとアリス・騎士王レオンとミールフィリスなどが発現できる存在で、その力は宝具とは別格。

-----神具-----

殲滅の黒王剣へレーヴァテインへ

レオンが所持する神具。

その能力は詳しく分かっていないが、魔力や魔鏡神獣など、世界の「魔力」に深く関係するものを打ち消す力を持つ。

再生の白王剣

アリスの所持する神具、現在は名前だけが登場。

能力、形状ともに不明。

レオンのレーヴァテインと対になると思われる。

漆黒蹂躞の天剣ハアスカロン

アルビオン王国騎士王である、レオン・シクイールが所持する神具。
能力はレオンのレーヴァテインと同列の力。

栄光煌く王の剣ハカラディーン

アルビオン皇女、ミートルフィリス・アルビオンが所持する神具。
能力は、圧倒的な浄化の光で相手をハ焼き尽くす

神器

強大な力を持つ存在、まだまだ謎が多い。

その正体は、神玉と呼ばれる宝玉を埋め込まれた存在。
全部で十体存在するらしい。

超神星魔法

神器だけが行使できる、強大な魔法、通常は太刀打ちすら不可能。

神遺物ハアーティファクト

謎の物質、宝具を上回る程の力を秘めており、非常に危険な存在。
古代の遺物であり、何処からか持ち出されたものだとも言われている。

被剣・ミスティルティン

魔法の力を被う力を持つアーティファクト。

適合者はレオン。

紅天玉・オシリスの涙

物理、魔法を問わず全ての攻撃を防ぐ結界を展開させるアーティファクト。

ペンダントの形状をしており、首にかける形で所持する。

神話にも登場しているようで、古代竜・ニールラグスのブレスをふせぐ程。

適合者はジョンだったが、ノアの手によってレオンに渡る。

呪槍・デュランダル

あらゆる物を侵食し、乗っ取る力を持つアーティファクト。

適合者はグランだったが、グランが現在魔法を使えない為、適合者の有無は不明。

豊穡剣・アロンドイト

デングバルトに祭られていたアーティファクトで、星鏡世界には適合者がいなかったが、聖天王国アルビオンにはガイが適合者だった。能力は、地脈や地面に流れる魔力そのものをコントロールし攻撃させるもの。

境界文書Ⅱ ロンギヌス・クラウン

聖七騎士団も目をつけているらしく、通常のアーティファクトとは違う可能性がある。

能力は、詳しくは判明しておらず、アリスの覚醒を導いたりしたため、複数の能力を持っていることが伺える。

適合者はアリス。

—————超神星魔法—————

氷結の神剣・ブリューナク
神器インフェリオルが使った、超神星魔法、ブリューナクは完全なる勝利や栄光をもたらすとされている神話上の武器のため、人間が抗うこと事態が不可能な存在。

宝墳のエグザリオ

エグザリオが使った超神星魔法で、エグザリオそのものが莫大な魔力の塊となり、攻撃する。

魔弾・ガージ・ヴァーデン

鋼魔の神器・イルマタルが使った、超神星魔法。

莫大な魔力を固め、相手に向かって放つ。

圧倒的な魔力の砲弾のため、半端なものでは防ぐことすら不可能。

聖剣・フルンティング

増尋の神器・バルバトスが使用した超神星魔法。

周りの生命力を喰らい力を増す技。

レオンの前には全く無意味だった。

—————特殊単語—————

聖七騎士団

ルシアーデ王国の裏組織、現在確認されているメンバーはジャック、エヴェリウス、ゼクシア、エクセリーゼ、ジョン、レイドル、ノア

の7人。

絶対運命

ジャックが告げた謎の言葉。

世界が歩もうとする道筋そのもの。

聖天王国アルビオン

星鏡世界とは別の次元に存在した王国。

伝説の宝具使いや光と闇の系統を使う者が存在したりと、物語の複線に大きく関わる存在が多数存在する王国。

魔鏡の庭園の上空に浮いている。

光の再生者

世界が望んだ光の適合者の総称。

アリスの存在理由としての真名。

闇より選定されし者

ジャックが告げた真名。

レオンの事。

光の再生者と正反対の意味を持つ言葉。

魔鏡の庭園

突如として出現した謎の領域。

因みに、いつ出現したのかは不明だが、かなり昔から存在したと思われる。

アルビオンの遙か下に存在するが、星鏡世界からはそのような場所
は確認されていない。

物語の核となる場所、ミートルフィリス曰く、レオンとアリスはこ
こにたどり着く為に生まれてきたらしい。

魔鏡神獣

魔鏡の庭園に住まう、謎の存在。

どの固体も白と黒のオーラを纏っており、強大な魔力を持つ。
その正体は、シャイターの神格から派生した怪物。

神殺しの聖槍

別名ロンギヌスとも言われる存在で、神々を殺戮するほどの力を持つ。

巨大な白き門

ルシアーデ王国の城に眠る謎の扉。

存在理由、能力、役目などほとんどの事が分かっていない。

《聖なる天の光の鍵》と《煌く王の天の鍵》と呼ばれる物が揃ったとき、真の能力が発動されるらしい。

聖なる天の光の鍵

アーフェリオンが告げた謎の言葉。

その全ては不明だが、アーフェリオンはアリスが所持する・・・など、謎の言葉を残した。

煌く王の天の鍵

聖なる天の光の鍵と同じく、謎の言葉。

アーフェリオン曰く、^ハ彼女^ヱが所持しているらしい。

彼女が誰を指すかは不明。

シャイター

世界から弾き出された魔の存在で、世界に影の系統をもたらした。

魔鏡の庭園に封印されているらしく、アーフェリオンの目的がこの存在の解放に当たる。

闇の逆鱗

そこは森の中だった。

あたりには太陽の光が差し込み、地面を照らす。

周りから鳥のさえずりが響いてくる。

そして目の前には一軒の木造の家。

周りには切断された丸太が転がっている。

その家の煙突からは、もくもくと煙が上がっている。

そしてその家の扉が開く。

そこから出てきたのは……

「ねえ……さん……?」

レオンが呆然と呟く。

一軒の木造の家から出てきたのは、白髪の女性。

「レオンく居るなら返事しなさい……ご飯が出来たわよ!」
女性が叫ぶ。

「え……あ……」

レオンが思わず返事をしようとしたところで、レオンの背後から声が響いた。

「はあい!」

レオンは突然の大声に驚きながらも、思わず既視感を覚える。

どこかで聞いた事のある声だ……いや……聞いた事があるとか……そんな話じゃない……これは……

レオンは恐る恐る振り返る。

「っ……!?!?」

レオンは思わず後ろへとよろめく。

レオンが振り返った先に見たのは、一人の黒髪の少年だった。

黒い瞳に……少し癖毛の目立つ黒髪……

「お……れ……?」

レオンは目を見開いたまま立ち尽くす。

「あ、もう……やっと帰ってきたの?……あまり遠くまで行くと危険よっていつも言ってるでしょ……」

女性はため息をつく。

「ごめん……でも、遠くには行って見たいから、ずっとここにジッとしてるのも俺の性格じゃないし……」

少年は俯く。

すると女性は苦笑し。

「……はあ……まあ仕方ないわね、それよりもご飯が出来てるから冷めないうちに食べてしましましょう」

女性は微笑むと、家の中に手招きをした。

「うん!!--」

少年は俯いていた顔を思い切り上げて、叫ぶ。

少年は小走りに家の中に入っていく。

「……」

レオンはどうしようか迷ったが、結局流されるように家に入った。

まずはここが何処なのか確かめなくては・・・しかしレオンの中には既に、一つの答えが浮かんではいたが。

少年は家の中に入ると椅子に座る。

レオンはじつと立っていたが気になることがあった。

「俺にきずいてないのか・・・？」

考えてみればそうだ、レオンは家の前に立っていたはずだから姿が見えてないわけではあるまい、どうして姉さん？・・・はきずいてないんだ？・・・そもそもここは何だ？

どうしてこの家に懐かしい感覚を得る？・・・何故この人に姉さんと言ってしまった？

容姿が同じだから？

雰囲気と同じだから？

レオンには過去の記憶がない、レオンは親戚に引き取ってもらったに過ぎない身だった。

故にこそ、レオンは子供の頃のことは思い出せない。

しかし一つだけ思い出せるものがあつた・・・それが姉の顔と名前。

親戚に聞いた話では、戦争で姉が死んでしまったという話だった。

無論レオンの中にはその記憶だつて残っていた。

敵の攻撃を受けそうになったレオンを庇い、代わりに攻撃を受けてしまった姉の姿。

それで命を落とし、レオンは激しく自分を嫌悪した・・・その記憶は鮮明に残っていた。

その出来事のショックで記憶を失つたのだらうと、親戚達が教えて

くれた。

ならば・・・今、自分の目の前で起こっているこの現象は何だ？

と、レオンが淡い思いに囚われてしまっている頃。

「ごちそうさま！」

少年が食事を終え、立ち上がった。

きずくと、木で出来たテーブルの上に用意してあったシチューやパンが無くなっていた。

レオンはふと家の中を見渡した。

家の中は、木で出来た家具が目立つ。

木で出来た低いタンスが窓際に設置しており、部屋の真ん中に大きなテーブルと、二つの椅子がおいてある。

「はい、相変わらずよく食べるわね〜」
クスクスと笑みを零す女性。

「・・・からかわないでよ・・・それより、また出てくる!!」
少年は握りこぶしを作ると、胸に添える。

「また?・・・レオン・・・あなたって森で一体何をしてるの?」
女性は首を傾げる。

「・・・ん〜探検かな〜ずっと家に居るのはやっぱりつまらないし」
少年はそう呟くと、身を翻して扉に走りよった。

「うおっ!?!」

レオンがあせって避けようとしてももう遅い。

「やばい、ぶつかると!!」

しかしレオンの心配は杞憂に終わる。

スツ……と音をたてるほどに軽い調子で、少年の体がレオンの体をへすり抜けた。のだった。

「え……?」

レオンは呆然となる。

ガチャン!!

扉が勢いよく閉まる。

「……あの子つたら……」

女性はため息をつき、食器を集め始めた。

「……」

レオンの顎先を汗が滑り落ちる。

なんだ……今は……一体何が……

そこでレオンは一つの答えにたどり着いた。

「やっぱり……俺の姿は見えてないんだ……この二人には俺の姿は写らない……となるとこれは……俺の失った筈の……過去?」
レオンは唾を飲み込んだ。

となると……

レオンは女性を見つめる。

「姉さん……なのか……?」

レオンの目から、涙が零れる。

レオンは暫くの間、涙でボヤケタ瞳で、姉……アリスの姿を見つめていた。

アリス・イル・エキテス……レオンのたった一人の家族であり、大切な人。

父親も母親も、ナイトとして戦争の兵士になると祈願していた為、戦争に駆り出されている。

よってレオンの家族は、姉ただ一人だった。

・・・と、レオンが涙を流し続ける。

「姉さんと・・・過去の姉さんと会えたのに・・・話すことも出来ないのか・・・姉さんっ・・・」

レオンが嘆くように呟く。

「・・・？」

アリスがふとこちらを見つめる。

「!!!」

レオンに軽い緊張が走った。

「きずいてくれた」と、思ったのだ。

「・・・今・・・何か・・・気のせいよね・・・」

アリスはそう呟くと、再び食器を集め、外に持って行ってしまった。

ガチャン・・・

扉が閉まる音だけが、無残に響いた。

「・・・く・・・そっ・・・」

レオンは跪いた。

そっだ・・・きずくのはおかしいんだ・・・今・・・レオンが見ているのは・・・過去のだから。

レオンは暫くしたあと、アリス・・・姉の姿を追った。

アリスは家の裏側にある小川で食器を洗っていた。

「……そういえば……」

レオンはふと思った事を呟いた。

「姉さんは……どうしてアリスと同じ姿をして……っ！
！」

レオンはそこで絶句した。

そっだ……何故今まで分からなかった？

アリス・イル・エキテスと……

アリス・ランガルド……

偶然か？……こんな偶然なんてあり得るのか？

容姿がまったく同じで……ファミリーネームは違えど……人物名
が同じ……

「俺……なんで今まで……アリスとはずっと学院で一緒だったの
に……」

レオンは額を押さえる。

おかしい……おかしすぎる……何故分からなかった？

レオンは今、自分の体が他人の物のように感じたのだった。

まるで……《その記憶や情報だけが》切り取られていたような……

何故だ……一体……何が起こっていた……

そこでミーフィスの言葉が甦る。

《あなた達が何故、遂になる属性を宿していると思う？》

なんなんだ……一体何なんだ……
俺って何だ……アリスって何だ……？

俺達は……何故存在している……！？

レオンがジレンマに囚われそうになった時。

「うわあああっ！！」

森の中に、一人の少年の声が響いた。
鳥が羽音をたてて飛び去っていく。

「っ！？」

レオンが声が出た方を振り返る。

「レオン！？」

アリスは立ち上がると、すぐさま食器を落としてしまう。

ガシャアアアン！！

食器が音をたてて割れる。

しかしアリスは気にせず目を閉じる。

瞑想をしているのだろうか……？

「こっちね！」

アリスは呟くと、上半身を傾ける。

バン！！

そんな音をたてて、アリスの背中から《漆黒の翼》が顕現する。

「なっ……！？」

レオンは絶句。

間違いない……アレは……

ダンッ！！

アリスが踏み込むと同時に、地面に足跡が刻まれる。
そしてアリスは凄まじい速さで飛び立った。

「ッ……俺も追わないと……！」

レオンも魔力を込めて、漆黒の翼を顕現させる。

そしてレオンも飛び立った。

その頃……ルシアーデ王国では……

ジャックとエヴェリウスが向かい合って食事を取っていた。

「まさか……あなたと食事をする事になるなんて……考えた事もなかったわ……」

エヴェリウスが切り分けられたステーキにホークを刺し、口に運ぶ。

その部屋は二人だけが使うには些か広すぎる。

長い長いテーブルに、二つだけ椅子が用意され、ジャックとエヴェリウスは向かい合っている。

一方のジャックは、料理には手をつけずに目を閉じている。

「……はあ……これだからあなたは嫌なのよね……女と二人で食事しているっていうのに……女性にばかり喋らせて……紳士のすることとは思えないわ」

エヴェリウスがそう告げたとき。

「食事など、人間が《心の空白》を埋めるために行う行動に過ぎん・
・栄養をとる・・という意味合いはその後で生まれたものだ」
ジャックはぶつきら棒に呟く。

「・・・あなたには純粹に食事を楽しむっていう感情はないのね、
せつかく一流のシェフに作らせているものなのに・・・それにし
ても・・・面白いことを言うのね、心の空白だなんて・・・」
エヴェリウスが微笑む。

「それがどうした・・・？」
ジャックがジロリとエヴェリウスを睨む。

「ふふ・・・心・・・人間だけが持つ物・・・そして人間の希望、人間の
力の象徴・・・けれど・・・その心があるが故に絶望も生まれる」
エヴェリウスがホークをそっとテーブルに置き、微笑む。

「当たり前だ、希望あるところに絶望もある・・・それは世界の摂理・
・遍く世界のどこにも存在する法則だ・・・」
ジャックはようやく食事に手をつけ始めた。

「そうね、でもその心がある所為で《本来存在してはならない物》
も生まれてしまうのよね」
エヴェリウスは呟くと手を叩き、食事を下げさせる。

「・・・何が言いたい？」
ジャックは顔を上げる。

「ん？・・・それはね・・・世界がどう動くかという事よ・・・人間の
可能性を信じた《彼女》が行った「おこな」の事が・・・あの子達
にどういう形で響いてくるのか・・・それが楽しみで仕方ないのよ」

エヴェリウスは妖艶に微笑んだ。

レオンはアリスを追っていた。

「早い・・・なんて速度だっ!!！」

レオンは全力で翼をはためかせてアリスを追いかけるが、アリスはそんな速度など論外だ、というほどの速さでレオンの前方を飛んでいる。

と、突然アリスが急停止する。

「えっ!？」

レオンもまた、急いで速度を遅めてアリスの隣に並び立つ。

どうしたんだ・・・？

アリスの顔を覗きこむ。

「っ・・・」

レオンは胸に痛みが走るのを感じた。

「そうか・・・目の前に居るのに・・・話せないなんてな」
レオンが苦笑。

アリスは下を見つめている。

レオンもそれに習い、下を見る。

「な・・・」

レオンは絶句。

遙か下の森一体に、結界のようなものが広がっている。その結界はとても大きく、空中からの侵入を拒んでいるようにも見えたと。

「……この結界……嫌な感じがする……」
レオンは寒気のようなものを感じ取っていた。

結界は紫色に輝いており、禍々しい魔力を放っている。
「……《タナトスの結界》か……まずいわね」
アリスが顔を険しく歪ませる。

そしてアリスは大きく旋回し、地上へと降りていった。

「ここからは……行けないのか……？」
レオンは呟いたが……

なら……俺が……打ち破る!!

「うおおおおおつ!!」
レオンは右手でミスティルティンを抜き放ち、それを思い切り振り上げ……

ズ……ツツ!!

漆黒のオーラが剣から溢れ、辺りを包む。

「行けえええええつ!!!!」
思い切り振り下ろした。

ザアアアアアツツ!!

巨大な漆黒の斬撃がミスティルティンから放たれる。

ガアアアアアアンツ!!!!!!
漆黒の斬撃と結界とがぶつかり合い、衝撃波が辺りを撫でる。

「何っ!?!」

アリスは突然の莫大な魔力に絶句していた。

一方その頃、レオンは。

斬撃が爆発を起こし、煙が晴れるのを待っていた。
そして煙が晴れる。

「なっ……!?!」

レオンは絶句した。

なんと、レオンの一撃を受けて傷一つ入っていないのだ。

「なんて防御力だ……」

そして。

「確かにこの辺だったはず……」

アリスが地上から戻ってきたのだ。

「しかも……あの魔力の感じ……」

暫く考え込んでいたが。

「っ!…いけないわ…あの結界は命を削る…あまりのんびり
していてはレオンが危ないわね」

アリスが気を取り直す。

命を削る？

俺はそんな経験を……？

そこで、レオンの中にある記憶が思い出される。

《レオン……私に捕まって!!》……

ズキンッ

「痛っ!!」

レオンは頭を押さえる。

しかしその時。

「闇と光……相反する空想の系統……虚像なれど……真実の姿……発動」

アリスは何かを呟いていた。

そして……

キイイイイイン……

アリスの右手には純白の剣が。

キイイイイイン……

アリスの左手には漆黒の剣が。

それぞれ顕現した。

「これはっ!？」

レオンは痛みを忘れ、その光景を見つめる。

光と闇・・・決して相容れる筈のない二つの系統が・・・一人の人間によって顕現した。

「はあっ!!」

アリスは呼気を吐き出し、空中を穿ちながら結界へと突進する。

「ダメだっ!!・・・それはやぶれな・・・」

レオンは最後まで言葉を紡げなかった。

ガアアアアアンツツツ!!

アリスが激突し、大地を揺るがすような衝撃が発生した瞬間。

ピシ・・・・・・・・

「輝が・・・入った・・・?」

レオンが呆然と呟く。

自分の全力を防いだあの結界をいとも容易く?

パキ・・・・・・・・パキ・・リ・・・・イ・・・・イ・・・・リ・・・・イイイイ
ン・・・・・・・・

まるで悲鳴をあげるように甲高い音が響き・・・・結界が粉々に砕けた。

「レオン!!」

アリスは叫び、そのまま紫の煙が満ちる中へと突っ込んだ。

「っ!？」

レオンも後に続く。

レオンは凄まじい速さで飛ぶアリスを見失わないように飛び続けた。

・・・この霧・・・なんだ・・・？

紫色の霧が当たるときに、軽い痺れが走るのだ。

「まさか・・・毒っ!？」

レオンが叫んだ時。

「毒ね・・・でも・・・浄化が出来るはず・・・」
アリスは飛びながら、漆黒の翼をはためかせたが・・・

キイイイイイイン・・・

漆黒の翼が、色落ちするように純白の翼へと変化した。

「こんどは・・・光か!？・・・姉さん・・・姉さんは一体・・・」

レオンがアリスを見つめる。

しかし・・・そこで・・・
ズツ・・・

レオンを強烈な痛みが襲う。

「が・・・あ・・・なあっ!？」

レオンが飛ぶのを失敗し、地面に叩きつけられる。

「痛い・・・なんだ・・・この痛みは・・・う・・・うあああ
っ!!!」

レオンが余りの痛みにした打ち回る。

姉さん・・・

レオンが手を伸ばすが……

届かないのか……姉さん……姉さんは一体……どこに行こうとしてるんだ？

アリスの姿はもうなかった……やがてレオンの周りを闇が包み込む。

視界が真っ黒に染まり、何も見えなくなる。

「姉さん……嫌だよ……俺を……一人に……」
レオンはそこで……《深い絶望》に包まれた。

ガタンッ！！

ルシアーデ王国のジャックは立ち上がった。

「ちょっと……どうしたの？」

エヴェリウスが何かの書類に目を通していたが、ジャックの行動に驚き目を見開く。

「いかん……このままでは……」

ジャックは天井……いいや……その遙か向こうを見つめていた。

今までにないほどの……陰しい瞳で……

その頃、ルベリージア学院では。

「ヴィクトリアっ!!」

エリスがヴィクトリアとアリスの下へとたどり着き、呼吸を落ち着かせていた。

「姉様！」

ヴィクトリアは驚き、固まる。

「間に合った……よかった……ヴィクトリア……私とお前で、アレを止めるぞ」

エリスが指を指す先には……

《グオオオオオオオオオオ……》

魔鏡神獣がブレスを放とうとしていた。

ふと、エリスはアリシアに視線を落とす。

「無事か、アリシア」

「はい……すいません……もっと訓練を積んでおくべきでした・
・まさか『風翔』の力がここまで大きいとは……」
アリシアが俯く。

「いや、いいさ……それより……あとの二人……レオンとアリスはどうした？」

エリスが辺りを見渡す。

その時。

「アリシアさん、ヴィクトリア！」

アリスが純白の翼を使って飛んできた。

アリスが一步前に出て、光の壁を顕現させた。
森一体を衝撃波が一掃する。

その衝撃波は学院にまで及ぶ。

「なんだ……って……うわっ!？」

ルークの方へと、衝撃波の壁が迫り、直撃した。

「ちよつと……今度は何???」

サクラが眉を顰める。

と、前方に圧倒的な速度でせまる衝撃波の波。

「え」

サクラが苦笑い。

バチン!!!

思わず雷を手に纏う。

壁が迫った瞬間……

「はあっ!!!」

手刀一閃。

壁を切り裂いた……はずが。

「切り裂けきれない!?……そんな!？」

サクラも衝撃波に飲まれてしまった。

その頃、ミルフェリーナ王国では。
アリウスは会談を行っていた、ルシアーデ王国の戦争開始について
だった。

「では……」

アリウスが話そうとした瞬間。

アリウスの背後に控えていたものが、アリウスに告げ口をした。

「なに……ルベリージア学院近辺で異常な魔力振動だ！？」

アリウスが叫ぶ。

『……？？』

『魔力……振動ですって……？』

辺りから複数の困惑の音が響く。

「どうなってる」

アリウスが厳しく告げる。

「はっ……それが……今しがた、わが国の魔力研究者達が、偶然魔力感知レーダーを作動させていたところ、ルベリージア学院近辺で凄まじい……もはや異常ともいえる程の魔力振動……及び、魔力循環干渉を確認しました」

男が恭しく告げた。

「魔力……循環干渉……だと！？」

アリウスが絶句。

魔力循環干渉……それは、世界を循環する魔力の流れに直接介入し

てしまうほどの異常な魔力が発生したということ、これはもう世界の破滅といつても過言ではない。

そもそもそんな大それた事は、人間には不可能だ。
それが出来るとしたら・・・神か悪魔か・・・

「一体・・・どうなってる・・・!!」
アリウスは顔を上げ。

「今回の会議は緊急中断・・・これより、ルベリージア学院へと調査団及び、傭兵部隊をいかせる!」
アリウスが叫ぶ。

傭兵部隊・・・?

アリウス様は・・・本気なのか・・・?

声が辺りから漏れる。

「そして・・・俺も向かう」
アリウスが叫ぶ。

「もし、原因が特定できれば・・・それを停止・・・できなければ・・・破壊または・・・生物兵器の場合は・・・抹殺せよ!」

世界は動く・・・一人の少年によって・・・そして・・・世界の深淵で眠る《彼女》もまた・・・

《・・・レオン・・・ダメよ・・・そっちに行つては・・・

ダメ》

アリス達は、なんとか衝撃波を防ぎ、呆然と前方を見つめていた。

「そん……な」

アリスの瞳から涙が零れる。

「……」

エリスは無言で宝具を構える。

「……これは……」

アリシアは呆然と目を見開き、前を見つめる。

「レオン……何を……何をしておるのだったっ……!!」
ヴィクトリアは叫んだ。

アリスたちの前方には……
《グオオオオオオオオオオオオツ!!!!》
空に漆黒の魔力を放ち、絶叫を続ける……レオン〔化け物〕
だった。

マテリアル・エンド

ズ……ン!!

ルベリージャ学院敷地内、惑わしの森にてそれは起こった。

その圧倒的な魔力の波動は、学院一体だけに止まらず、ミルフェリーナ国全体を揺るがすほどの事態となった。

それだけの被害が展開した中心点たるルベリージャ学院は、無論凄まじい被害を受けた。

《グオオオオオオオオ……!!!!》

ビリビリと振動を轟かせ、天空の雲を消し去り、周りの木々をなぎ払い……少年はただ、咆哮を放っていた。

その少年が咆哮を放った後に残ったのは、巨大なクレーターだけだった。

少し前まで豊かな木々が芽吹き、沢山の生物の憩いだった森は見る影もない。

アリスたちは衝撃波を何とか防ぎ、前方をただ呆然と見つめていた。

「レオン……君……なの？」

アリスは思わず我が目を疑った。

「……………」

他のメンバーは息を吞んで事態を見つめている。

を持っていた。

「アリシアよ・・・正直・・・先ほどの竜よりも、今のレオンの方がずっと危険な存在に見えるが？」

セリアがレオンから目を離さずにアリシアに話しかける。

「ええ・・・ですが、レオン君があんなに変貌するなんて・・・一体レオン君に何が・・・」

アリシアがまだ事態を飲み込めない、と言う様に動揺している。

エリスはそんなアリシアを見つめ・・・

「成る程な・・・お前たちはそれだけ・・・あの少年を信用しているということか・・・だがな、その信用はこれからの戦いには不要なものだ」

エリスが冷たく言い放った。

「・・・それは、どういう・・・」

アリシアがエリスを睨む。

「・・・お前はきずいているのだろうか？・・・これだけの被害を発生させた者が無事にすむわけないだろう・・・仮にこの事態が終息したとしても、あのレオンという少年が今まで通りに学院にいることにはできない」

「そんな！！・・・姉様！！・・・レオンはまさか・・・！！」
ヴィクトリアが叫ぶ。

エリスはそれを気まずそうに見つめた後、レオンを睨む。

レオンは相変わらず立ち尽くすように、俯いている。

だが、その圧倒的な魔力が辺りを満たしつつある、このままではそ

の魔力の影響が世界に出始めるだろう。

「恐らく……永久に牢獄に閉じ込められるか……死刑だ」
エリスが言い放つ。

「……………」

アリスはその話を聞いていた。

レオン君が……死ぬ？

考えた事もなかった……

アリスは今、呆然となっていた。

自分の中で、レオンと言う一人の人間の存在がここまで大きくなっていた事に。

嫌だ……レオン君を失うのは……嫌っ!!!!

「レオン君っ!!!!」

アリスは翼をはためかせ、空中へと飛び去る。

「アリスっ!?!」

ヴィクトリアが叫ぶ。

アリスはただ翼を全力で使い、レオンの元へと飛んでいた。

「レオン君……私……レオン君を助きたい……だから……」

アリスは右手に魔力を集中、純白の剣が顕現する。

「だから……止まってええええええええええっ!!!!」

アリスは空中からレオンに向かって、思い切り剣を振り下ろした。

アリスの剣がレオンに迫る、無論アリスも殺そうなどとは考えていない。
寸前で剣を止めるつもりだった。

しかし。

キュイイイイイイ……

レオンの目の前に、漆黒の結界が展開。

ギン！！

アリスの剣を拒む。

「くっ……」

アリスは動きを封じられる。

その時。

ザァン！！

地面を裂いて、黒い触手の様な物が飛び出し、アリスの足、腕、首を……アリスの体を拘束した。

ギ……リリリリ……

触手が体を締め付ける。

「あ……う……ぐう……レ……オン……君……」

アリスは、余りの痛みに涙を浮かべるが何とか耐えて、レオンを見つめる。

レオンはただ無表情に……紅く染まった瞳で……アリスを睨んでいた。

何の感情も籠っていない……抜け殻のような瞳で。

……レオン君の……目じゃない……

「あなたは……誰……なの？」

アリスは眩く。

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

レオンは沈黙を続ける。

「・・・・・・・・あなたは・・・・・・・・何・・・・・・・・」

アリスは一層きつくなる触手の痛みを耐え、質問する。

《・・・・・・・・・・》

レオンはまた応えない。

ギリ・・・・・・・・

「う・・・・・・・・うあつ！！」

アリスは思わず叫ぶ。

バキン！！

「嫌ああああつ！？」

アリスが絶叫。

左腕が折れたのだ。

バアアアアアーン！！

銃声が響き、触手が打ち抜かれ消滅する。

「アリスよ！！撤退しろ！！」

エリスが空中で叫ぶ、恐らく風の魔法を使用しているのだろう。

「う・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

アリスはレオンを再度、惜しそうに見つめるが、飛び去った。

何より、この傷を治さなければならぬ。

しかし。

ギュルルルル！！

漆黒の触手がさらにアリスを追いかけてくる。

「っ！？」

アリスは絶句。

「ホワイト・バレット！」

エリスは叫び、引き金を引く。

「装填・緋牙連弾へジェット・バレット！」

エリスの銃弾が光を放つ。

右の銃の形が変化した。

銃口が長く伸び、細いコンパクトな銃になった。

ダダダダダンッ！！

圧倒的な銃弾が、触手の全てを細切れに打ちつくした。

凄まじい連射能力と、命中能力だ。

アリスは飛び続け、ヴィクトリアたちの元まで戻る。

「アリスっ！」

ヴィクトリアがすぐさま手をかざし傷を調べる。

「・・・左腕の骨と筋肉・・・運動神経までやられている・・・こころうじて感覚神経は無事か・・・ここまで強く・・・レオンが・・・？」
ヴィクトリアがおずおずと告げる。

「・・・あれはレオン君じゃない・・・あんな・・・」

アリスは、無表情なあの瞳を思い出し、身震いした。

「もはや・・・一刻の猶予もないわね・・・レオン君を止めましょう」

アリスは辛そうに告げた。

レオン君・・・私だってやりたくないのよ・・・あなたのこと・・・好きだったんだから!!

アリスは今や、この思いに結論を下した。

今なら分かる、どれだけ自分があの少年に信頼を寄せていたかを。

エリスは銃弾を撃ちまくり、レオンの力を抑えている。

と・・・

「・・・まずいぞっ!!・・・全員、衝撃に備えろっ!!!!!!」
エリスが叫んだ。

《・・・d j f j j k d k k》

レオンは何かを告げ、顔を上に上げた。

そして、片手を前に伸ばす。

キュイイイイイイイイイイイイイイイイ・・・
掌に漆黒の魔力が集まり始める。

ズ・・・ン・・・

辺りに魔力が満ちる。

キン・・・キン・・・キン・・・

レオンの背後に三つの漆黒の魔法陣が展開、グルグルと回り始める。
《・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！》
レオンは目を見開く。

キイイイイイイン・・・・・・・・ツツ！！！！
漆黒の波動が、放たれた。

ズガガガガガガンツツツ！！！！
地面を削りながら迫る、漆黒の波動。

レオンの前方に立つものは全て消えるはずだった、無論アリスたちも。

だが、その一撃を炎の壁が防いだ。

ズツツ・・・・・・・・ンツ！！！！

炎の壁と漆黒の波動が激突、お互いに消滅した。

「今は・・・・・・・・まさか！！」

ヴィクトリアは振りかえる。

「ふん・・・・・・・・邪魔くさいのが来たな」

エリスが舌打ち。

「面倒とは・・・・・・・・これまた・・・・・・・・嫌な歓迎振りだね、エリス」

後ろから、沢山の部下を引き連れ、宝具・ジーク・フリートを顕現させて・・アリウスが立っていた。

「兄上・・・・・・・・何故・・・・・・・・ここに・・・・・・・・!?」

ヴィクトリアが叫ぶ。

「いや、何・・・・・・・・莫大な魔力干渉を感知してね・・・・・・・・来て見たんだけど・・・・・・・・」

アリウスがレオンを見つめる。

「一体何があつた？」

アリウスがきつめの口調で告げる。

「分かりません・・・レオン君が急に・・・」

アリスが嗚咽を交えて告げた。

「ふむ・・・」

アリウスは考え込む。

やはり・・・レオン君だったか・・・予想が的中するとは・・・
アリウスは苦笑を隠せない。

「しかし・・・これは由々しき事態だ、俺がジーク・フリートの力で炎の壁を顕現させていなければ、今頃全員消滅していたな」

アリウスが腕を組む。

「っ！？」

アリウスの部下を含めた全員が絶句する。

あの・・・星鏡世界最強ともいわれた男が、宝具でなければ死んでいたと言つたのだ。

「だが、悩んでいても仕方はない・・・何故レオン君があんな姿になつたのかは分からないが、これ以上・・・レオン君の罪を重くするわけにはいかない・・・総員聞け！！！！」

アリウスが背後を振り返り叫んだ。

「なんとしてもここでレオン君を止めなくてはならない、彼はわれらが国を救ってくれた英雄・・・なればこそ、今度は我々で彼を救お

うではないか！」

アリウスがジーク・フリートを掲げる。

おおおおおおおお！！！！

全員が武器を掲げた。

それを見たアリウスはアリスたちに再度、視線を戻す。

「さて・・・騎士達の気合は十分、これからだよ・・・レオン君を・・・救うのは」

アリウスが告げた言葉に、アリスたちが一斉に絶句する。

「アリウス・・・貴様・・・まさか・・・」

さすがのエリスも驚いているようだ。

アリウスは肩を竦めるだけだ。

「・・・甘いな・・・あの少年を・・・レオンのしたことを罪には問わぬのだな？」

エリスがアリウスを見つめる。

「・・・俺はね・・・恩を忘れるほど馬鹿じゃない・・・それに・・・ヴィクトリアの想い人ならね」

アリウスがニヤリと笑う。

「なっ！！」

ヴィクトリアの顔が真っ赤に染まる。

「そ・・・そんなわけないだろうっ！？・・・大体私が何故レオンなどを・・・す・・・すす好きにならねば・・・」

ヴィクトリアの、アリスにかけていた治癒術式が一瞬乱れたのを、アリウスは見逃さなかった。

「ほう？・・・だそうだよアリスちゃん・・・良かったね、ヴィクトリアは譲ってくれるそうだ」
アリスはウインク。

「っ・・・！？」

アリスの頬が真っ赤に染まる。

「何っ！？・・・私は何も譲るとは・・・！！」
ヴィクトリアが待ったをかける様に手を伸ばす。

「へえ・・・これは驚いた、ヴィクトリアはレオン君の事が・・・
・・・ああ、因みにアリシア、隠れても無駄」
アリスは背後のアリシアを見ずに告げた。

アリシアの肩がビクンと振るえ、顔が染まる。

「だが、遊んでいる暇はない・・・来るぞ」
アリスがレオンの方を向く。

《ぐおおおおおおおおおつ！！！！！！》

レオンが絶叫。

漆黒の魔力が空を覆い、太陽を隠す。

「まったく・・・なんて魔力だ・・・これが闇の力か」
アリスがため息。

「でも・・・炎皇として・・・君をこれ以上進ませるわけにはいかない！！」

アリスが叫び、思い切り体を前に傾けた。

それを見たエリスは、無言で風魔法を発動。
アリウスの足に風を起こした。

ダガンツ！！

地面に足跡を穿ち、アリウスはレオンの方へと直進した。

言葉のない完璧な連携に、周りの騎士達から羨望の眼差しがエリスに向けられた。

アリウスは空気を裂きながらレオンに突進する。

「……………」

アリウスは黙って、ジーク・フリートを構える。

《……………》

レオンはアリウスを見つめる。

確かに……………何の感情も写っていない……………虚ろな瞳だ……………
アリウスはそう感じた。

「まるで……………心の中に閉じこもっているような……………だが……………
レオン君、俺は君を救ってみせる……………」『炎皇の宝具使い』として！！」

アリウスの速度が上昇。

ジーク・フリートを思い切り横に薙ぐ。

ブオオオオオンツツ！！！！

空を切り裂きながら迫る、静謐を纏った剣閃。

ガアアアアアアアアアアアアンツ！！！！！
しかしアリウスのジーク・フリートが、漆黒の結界に阻まれる。

「おおおおおっ！！！」
アリウスが叫ぶ。

キイイイイイッ
ジーク・フリートが紅く発光する。

パキ……ピシ……
黒の結界に輝が入る。

《……！！》
レオンは目を見開くと、漆黒の翼を顕現させた。
違うのはその長さ。

通常は十メートルもないが、今の翼は地平線の向こうまで続きそう
なほど長い。
軽く三百メートルはあろうかという翼をはためかせ、空中へと飛ぶ。
そして。

《……ツッ！！》
レオンは漆黒の翼をアリウスに向かって思い切り振り下ろした。

「何っ！？」
アリウスが咄嗟にジーク・フリートで受身を取る。

ズウウウウウン……！！！！
アリウスに、漆黒の翼が叩きつけられる。

アリウスは上からの圧力と、地面との間で凄まじい力を受けて吐血する。

「ぐはっ……」

《……》

レオンは効果を確認し、再度翼を持ち上げる。
もう一度振り下ろすつもりなのだろう。

「させない、エリスっ!!」

アリウスが叫ぶ。

「分かっているっ!!」

エリスがレオンの背後に出現。

「時間は稼げた……左の銃を使う……ホワイト・バレット・装填・力双破碎へグレイス・バレット」!!」

エリスが叫んだ瞬間、左の銃が光りだす。

バン……

それだけだ、立った一発の銃弾……それが……エリスの宝具の真の力。

レオンは漆黒の結界で防ごうとする。
しかし。

パキ……キ……イイイ……イイン!!!

銃弾が何の抵抗もなく、結界を貫いた。

そのままレオンに直撃した。

ズ．．．．．ン．．．！！！！
砂埃を巻き上げてレオンが地面に叩きつけられる。

「相変わらず凄い宝具だな．．．右は圧倒的な速さ．．．神速を司り．
．．．左は圧倒的な力．．．神力を司る．．．二つで一つの宝具．．．
ホワイト・バレット．．．」
アリウスは苦笑。

だが、苦笑が許されたのはそこまでだ。

レオンが地面から起き上がり、片手を振るう。
それだけで、衝撃波が発生し、二人を遙か向こうに吹き飛ばした。

「ぐあっ！！」
「う！！」

レオンはその頃．．．．．

俺は．．．．．一体．．．．．？
レオンは真っ暗な世界で一人で漂っていた。

「また．．．．．ここなのか．．．．．」
レオンの前には漆黒の居城。

「俺は一体．．．．．っ！！」

レオンは絶句した。

レオンの目の前に、アリスを締め付ける「自分」の姿が映像で現れたのだ。

「なんだよ……これ……俺は一体何をしてるんだよ!!!」
レオンの叫びが当たりに響いた。

-----次回予告-----

レオンは漆黒の世界を走る、アリスを……皆を苦しめる自分を止めるために。

そこでレオンは自分の心の扉を開く。

《ようこそ……よくきてくれたわ……レオン……》
女性は微笑む。

「姉さん……」

《……さあ……始めましょう……私達家族の……愚かな選択の結果を……そして、あなたとアリスの物語の終焉を……改めて……ようこそ……魔鏡の庭園へ……私の弟……レオン》
アリスは微笑む。

「私はレオン君を救いたい……そのために……ここまで来たんだからっ!!!」

アリスは叫び……そして……

次回、《エクスカリバー》、お楽しみに。

―――あとがき―――
次回からは、アルビオン戦争偏の始まりです。

エクスカリバー

レオンは漆黒の世界を走っていた。

「急がないと、急いで俺を止めないとっ!!」

レオンが向かっているのは漆黒の居城。

理由は簡単だ、今の今まであの城には入ったことがないからだ。

「何かあるとすれば、あの城しかないんだ!」

レオンは叫んだ。

バァン!!

背中が弾け、漆黒の翼が姿を現す。

ダンッ!

地面を蹴って、一気に加速する。

「・・・早く・・・」

レオンは空を切り裂きながら一直線に進む。

しかし・・・

「なんで・・・城に近づけない・・・」

レオンが翼を使って進んでいるのにも関わらず、城との距離が一向に縮まらないのだ。

「くそっ!!」

ブォンッ!!

さらに加速する。

「待ってるよ・・・皆!!」

一方その頃ルベリージア学院では。
「レオン……なのか……あれは……」
ルークが呆然と呟いた。

横にはサクラが立っている。

「うん、どうやらそうみたいだね……心配？」
サクラが微笑む。

「……はい」

「そっか……でも大丈夫だと思うよ、だって……アリスちゃん
がいるもん……でも……辛いよね……大切な人が……目の前から消
えるのは」

サクラの中である思い出が甦った。

……待つて……待つて……お兄ちゃん……！！

《さようなら……サクラ》

「レイドル……兄さん……」
サクラが唇をキュッと噛む。

「サクラ副会長？」

ルークが不思議そうに覗き込む。

「え、あ……なんでもないよ……！！」
サクラは笑う。

「ふっ!!」

アリウスは呼気を吐き出し、腰を捻る。

捻り、肘からの腕力・その全てを乗せて思い切り横に薙ぐ。

ブウォンッ!!!

風を切り裂きながらジーク・フリートが一閃される。

《ツ・・ f j k k d》

レオンが片腕を横にかざす、すると闇の壁が顕現。

ギンッ・・

アリウスの一撃を防いだ。

《ッ!》

レオンが片腕を思い切り振る。

バゴオオオオッ!!

「くっ・・・」

アリウスが吹き飛ぶ。

《・・・・》

シッ・・ツッ・・タア・・アッ・・ン!!

レオンが翼で空気を叩き、爆音を響かせながら空中へと浮上した。

アリウスは姿勢を戻した途端、叫んだ。

「今だ!・・総員、魔法射撃、放てえっ!!」

アリウスが片手を空中のレオンへと向けた。

レオンを囲むように地上に展開していた騎士達は一斉に魔法の詠唱を開始し、完了した。

ドオオオオオオオオオオ！！
周りから炎や水、風の刃や土の槍など、強力な魔法が一斉に放たれた。

《・・・ツ・・・》

バサアアアン・・・

レオンの巨翼がレオンの体を包み込むように展開した。

キンキンキンキン！！

魔法のことごとくが全て、漆黒の巨翼に《反射》された。
受けるのではなく、反射だ。

魔法が翼に吸収されたと思えば、放った者のいる方向に放たれたのだ。

返されたといっても過言ではなかった。

ガガガガアアアアンツ！！

うあッ！？

ぐ！！

くあッ！

騎士達が全員、自らの放った魔法の被害を受けて吹き飛ばされた。

バゴオオオオオオツ！！

レオンの体を包み込んでいた巨翼が思い切り広がる。

その広げられた翼は風を叩き、辺りに衝撃波として放たれた。

「ちいっ！」

アリウスが炎を放とうとしたが。

「ウィンディーネ!!」

アリシアの叫びがあたりに響く。

すると、風の全てがアリシアの命令に従うかの様におさまった。

「アリシア……」

アリウスが呟く。

ザリツ……

アリウスの背後から、発光するウィンディーネを携えたアリシアが現れた。

「力が戻ったか」

アリウスが問う。

「はい、まさか伝説の宝具使いとしての力がここまでとは思わなかったもので」

アリシアが苦笑。

するとアリウスも苦笑を漏らし、頷いた。

「確かに……だがまあ、最初はそんなものだ……俺でも炎皇の力を支配するには一ヶ月ほどかかったからな」

ところで、とアリウスが付け足す。

「アリスちゃんはどうか? ……ヴィクトリアが治療しているはずだが……」

「ええ、凄まじい速さで回復しています……それもありませんほどの完璧さで」

アリシアが目を細める。

「そうか……やはり水碧としての力の影響か……」

純白の二対翼が顕現、一気に跳躍した。

ダンッ

「今・・・行くから・・・レオン君」

アリスは目に強い決意を讃えて、飛び去った。

「・・・アリス・・・お前はそこまでレオンのことが・・・ふと、ヴィクトリアの胸にチクリと痛みが走ったが、頭を振って忘れようとする。」

「今は・・・私も戦わねばなるまい・・・力を・・・貸してくれ・・・エレイン」

ヴィクトリアの決意に応えるように、水碧の紋章が煌いた。

レオンは全力で飛翔し、全力で城へと向かう。
しかし近づけない。

「・・・ん？」

レオンは飛びながら目を凝らす。

今・・・あの城の景色が揺らいだような・・・

「まさか・・・」

レオンはひらめいた。

キイイイイイイ・・・

漆黒の剣が右手に顕現した。

そのまま全力で突進した。

「うおおおおおつ！！・・・切り裂けえええええつ！！」

レオンは空間を切り裂くように、剣を振り下ろした。

パキン……………
今まで見えていた城という景色に輝が入る。

「やっぱり……あの城は本当にあるわけじゃない……ただの幻想だ!!」

レオンが叫んだ瞬間、頭に声が響いた。

《ふふ……正解》

「っ!?!」

レオンの目の前に白い光が現れる。

「……っ……眩しいっ!?!」

レオンが目を腕で隠す。

景色が完全に砕けた瞬間、光がなだれの様にレオンを包んだ。

「うわああああっ!!」

……………

レオンは意識を失った。

《正解よ……レオン……ようやく会えた……私の弟……レオン》

声が……聞こえたんだ……

懐かしい……人の声……

この声は……

「姉さん……？」

レオンが恐る恐る目を開けた。

目の前に居たのは漆黒の大きな結晶に封じ込められた女性。

そして、アリスと瓜二つの姿。

「姉さんっ!!」

レオンは叫んだ。

《……ふふ……ごめんなさい、こんな姿で》

アリスは体の全てを結晶のようなもので閉じ込められており、表情も体も動かない。

ただ、声だけが頭に響く。

「姉さん……なんだよ、その姿……」

レオンが結晶に近づく。

《……ごめんなさい、今の私はあなたに触れることは出来ない……それより気づいてる？……今あなたがいる場所が……何処なのかを》
声が寂しそうに響く。

アリスを封じていた結晶は宙に浮いており、レオンが手を伸ばしても触れることは出来ない。

レオンは周りを見渡す。

そこは不思議な場所だった。

あたりは黒い霧のようなもので満たされ、空中には黒い結晶の欠片が浮いている。

そして、レオンの立っている足元には何かの古代文字が……いい

や。

「巨大な魔法陣……」
レオンが呟く。

そしてその魔法陣の中心には、一本の巨大な白い槍が突き刺さっている。

まさか……ここは

《……そう……ようこそ……ここは魔鏡の庭園……《シャイターン》が封印された場所であり……星鏡世界の対となる世界……》
アリスの声が響く。

《レオンに全てを教えてあげる……この世界に起こる真実を……そしてアリス・ランガルドの役目を……そして……正体をね》

「……アリスの……正体……？」

レオンが呟く。

《そう……まずは……改めてようこそ……と言うべきよね》
宙に浮いている黒結晶に閉じ込められたアリスが呟く。

レオンはもう一度周りを見渡す。

あたりは全て漆黒の霧に覆われ、宙にはアリスを封じた黒い結晶のようなものが浮いており、レオンが立っている場所は円形の儀式上のような所だった。

そしてその円形の儀式上には魔法陣が刻まれており、その中心点には一本の槍が刺さっている。

アリスの結晶は調度その槍が刺さっている地点の空中へと浮いてい

る。

「どうして・・・姉さんはそんな結晶のようなものに閉じ込められてるんだ・・・？」

レオンは問う。

《これは・・・ただの結晶ではないの・・・私に残されたのがこれしかなかったと言うだけ・・・じゃあ教えるわね・・・これは封印式よ》
アリスの声が魔鏡の庭園に響く。

封印式・・・？

《この結晶はその槍と連動しているの・・・私のこの結晶は、私の肉体を凍結して、精神エネルギーだけを活動させるものなの・・・この結晶とそこにある《ロンギヌス》の二つを合わせて発動する術・
・《究極封印式・アシユタロテ》》

910

「それが・・・シャイターンを封じている式なのか・・・？」
レオンが問う。

《ええ、その通り・・・そしてこの魔鏡の庭園は、全部で三つ存在している《転生絶界》の一つ・・・星鏡世界における《堕ちた世界》・
・》

「転生・・・なんだって・・・？」
レオンが首を傾げる。

《・・・ふふ・・・転生絶界は姿を変える・・・遍く《三柱界》の何処にも存在している世界であり・・・存在しない世界でもある》

「何を言ってるんだ・・・？」

レオンが眉を顰める。

《・・・そうね、ごめんなさい、あなたには今、必要ないものだったわね・・・さて、どこから聞きたいの？》

「・・・」

レオンは沈黙する、聞きたい事がありすぎて、何を聞いていいのか分からないのだ。

《・・・じゃあ、私が教えてあげる・・・あなたに・・・アリスの正体を・・・絶望しないでね・・・》

アリスは寂しそうに呟いた。

「レオン君っ!!・・・私・・・レオン君を救うから・・・救ってあげるからっ!!」

アリスは叫び、全力でレオンの元へと向かう。

ドクン・・・

アリスが気づかないほどの深い所で、何かが鼓動を始めた。

「うおおおおっ!!」

「はあっ!!」

アリスとアリシアが宝具を思い切り叩きつける。

バサン!!

しかし、漆黒の翼が広がり、それを防ぐ。

「く……硬い……」

アリシアが歯軋りをする。

ウィンディーネが翼に阻まれ、動かない。

「ジーク・フリー……」

アリウスは最後まで告げる事が出来ない。

レオンの翼が爆発的に展開、二人を吹き飛ばす。

バツゴオオオオオオオンッ!!!

「ぐっ……」

アリウスが吹き飛び、地面に叩きつけられる。

ドオオオオオン!!!

その時。

「はああああっ!!!」

空中からアリスが現れ、純白の剣を叩き付けた。

ゴツツドオオオオン!!!

《……ツ……》

レオンが僅かにひるむ。

「レオン君、私決めたの……もう、迷わない!!!……全力でレオン君を救う!!!」

アリスは叫ぶ。

その時。

キイイイイイイイン・・・・・・・・
懐が輝いている。

「これ・・・・・・・・境界文書・・・・・・・・？」
アリスが絶句する。

その時、頭に声が響いた。

《・・・・・・・・それ・・・・・・・・世界の・・・・・・・・アリ・・・・・・・・の正体・・・・・・・・な
の・・・・・・・・それ・・・・・・・・と・・・・・・・・》
誰かの声が頭に流れ込んでくる。

「この声・・・・・・・・確か・・・・・・・・」
そう、アリスが魔鏡の庭園というところで出会った・・・・・・・・瓜二つの女
性。

それと混じって、別の声も聞こえた。

《そんな・・・・・・・・ありえ・・・・・・・・俺・・・・・・・・認めない！！・・・・・・・・嫌・・・・・・・・
そんな・・・・・・・・》
レオンの声だ。

《ふふ・・・・・・・・所詮・・・・・・・・アレ・・・・・・・・私の・・・・・・・・分・・・・・・・・仮
初の・・・・・・・・生命・・・・・・・・》

「レオン君っ!？」
アリスは叫んだが・・・・・・・・声はもう聞こえなくなった。

何・・・・・・・・今は・・・・・・・・何・・・・・・・・?

ドクン・・・・・・・・
「っ!!！」

アリスの中で何かが鼓動した。

何・・・・・・・・？

ドクン・・・・・・・・

キュイイイイイイイイ・・・・・・・・

突然、アリスの体が発光し始める。

「何・・・・・・・・これ・・・・・・・・」

アリスは体を見つめる。

この・・・・・・・・感じ・・・・・・・・

そうだ、レオン君の魔力をミルフエリーナ城で感じたときと・・・・・・・・
同じだ・・・・・・・・

そして・・・・・・・・アリスは無意識に呟いていた。

「神・具・・・・・・・・？」

「なんだ・・・・・・・・あれは・・・・・・・・」

エリスが呆然と空中のアリスを見やる。

アリスの体から発せられた白い光が辺りを照らし始めている。

それと同時に、レオンに匹敵するほどの魔力が漏れているのも分かる。

「・・・・・・・・」

アリウスはただ、アリスを見つめていた。

そして呟いた。

「光の衣纏いて・・・・・・・・光の再生者・・・・・・・・君臨せん・・・・・・・・そして・・・・・・・・
太陽遍く世界を照らす時・・・・・・・・創造の剣が姿を現す・・・・・・・・」

アリウスを無意識に呟いたのをエリスが聞きとがめる。

「ん？・・・なんだその言葉は・・・？」

「・・・実は新たにエクストラ・クロニクルの原典が見つかったね・・・それにこう書いてあったんだ・・・そして今の光景が余りにもソレに近いものだったから・・・遂・・・」

アリウスが苦笑しているが、目は笑っていないかった。

「私に・・・力を貸してくれるの・・・？」

アリスに応えるように光が一層輝く。

アリスは両手を空へと突き出した。

「我が元に君臨せよ・・・」

さっきまで闇に隠れていた太陽がもう一度姿を現す。

《・・・！！？》

レオンが空中で後ずさる。

すると・・・

大空に純白の魔法陣が展開した。

キユイイイイイイイイン・・・

大空に展開した魔法陣はルベリージャ学院の全てを照らし、デングバルトにまで影響を与えていた。

「エデル様!!」

男が叫ぶ。

「どうした!」

エデルがある工房に入ってくる。

「それが・・・魔道具が起動しないのです!!」

「何・・・どういう・・・」

エデルが告げようとした瞬間。

ドクン・・・

心臓が大きく脈打った。

「な・・・ん・・・」

エデルは恐る恐る外に出る。

「っ!!!!」

エデルは絶句した。

東の方角の空が、純白の光に覆われているのだ。

「一体・・・これは・・・」

エデルが絶句している隣では、住民が跪いて神の名を唱えている。

「レオン君・・・」

エデルは呟いた。

「世界を照らす聖なる光よ、我が下に集いてその真の力を示せ・・・

神よ・・・讃えよ・疼け・来よ・・・絶対神代の神剣・・・再生の

エクスカリバ
「白王剣!!!!」

アリスが叫んだ瞬間、光が辺りを照らす。

「うあっ!!」

地上のヴィクトリアは目を塞ぐ。

余りの光量に目を開けていられない。

「これは……………」

エリスが呻く。

「なんて光だ……………」

アリウスはジーク・フリートを目前にかざしている。

「これって…………アリスちゃん…………なの…………？」

アリスアは呟く。

キイイイイイイイイイイ……………

アリスの掲げられた両手に、一振りの白い剣が握られた。

ガシャン……………

《dkjggjvkdkツ!!!!》

レオンが叫び、漆黒の波動を放つ。

が、全て消え去った。

バチン!!!!

《!?!》

「無理だよ……そんな邪悪な闇の力……レオン君の力じゃないもの……レオン君の闇は、もっと優しいはずだよ？」
アリスは微笑む。

キイイイイイイイイ……
エクスカリバーが輝きを増す。

《グオオオオオオオオオ!!》
レオンが絶叫。

「苦しいよね……でも大丈夫……今なら分かるよ……あなたはレオン君の……《心の闇》でしょ……だから今……自由にさせてあげるから」

アリスはゆっくりと羽ばたき、レオンに近づいた。

そして……ゆっくりと……そつとレオンの頭をかき抱いた。
《……!!》

「大丈夫……あなたは……もう消えてもいいんだよ……
レオン君は……私が守ってあげるから……あなたは……もう帰りなさい……？」
アリスは微笑んだ。

《……アリス……姉さん……》
レオンは僅かに安心したような顔になると、微笑んだ。

そして……
ガクン……

レオンの首が力なく垂れ下がる。

アリスはそつとレオンを抱いた。

「おかえり……レオン君」

そつ、呟いた。

ヴィクトリア地上からその姿を見ていた。

何故だろう……何故自分の心は痛む？

喜ぶべき事ではないか……

「う……うう……」

ヴィクトリアは涙を流した。

そのヴィクトリアをそつとアリウスが抱いた。

「……すまない、ヴィクトリアには恋愛に関することを教えなかったからね……悲しい思いをさせてしまったか……」

「……」

エリスはそれを黙ってみていた。

「……あゝあ……アリスちゃんに……奪われちゃったかな……でも、お似合いよ、レオン君」
アリシアは目元の涙をそつと拭った。

キュウウウウウウン……

闇の翼が消える。

それと同時にアリスは魔力を放った。

「エクスカリバー……あなたの力でこの森を元に戻すよ……

」

アリスは空へと剣を掲げる。

キイイイイイイイン……

やがて光が辺りを包み、そして……

全ては元に戻る……戦いが始まる前の……豊かな森へと

……

それは不思議な光景だった、土がむき出しだった地面に木が生え、急速に成長していく。

まるでそれは……神の再生にも等しかった……

その頃……ルシアーデ王国では……

「皆のもの、始めるぞ……これより、アルビオン戦争の開始

だ！！！！」

アーフェリオンは、何十万と集まった兵士に向かって叫んだ。

おおおおおおお！！

アーフェリオンの背後には七人の人影。

その内の一人、ジャックは呟いた。

「レオン……私達の物語を……始めよう」

そして、レオンは……

《さあレオン……この真実を知り……アリスの正体を知り……あなたはどんな選択をするの？》

「……」

レオンは呆然と立ち尽くした。

-----次回予告-----

「俺は……」

「アリスを……」

次回、アリス、お楽しみに。

アリス

《じゃあ・・・教えてあげる、アリスの正体と・・・その役目をね》
アリスは悲しそうに呟いた。

「・・・・・・・・」

レオンは緊張で唇が乾き、言葉をつむげない。

そして・・・・《希望》は《絶望》へと変わる。

その頃の星鏡世界のアリスたちは。

アリスが見事レオンを止め、今は各々が治療を受けているところだ。

「しかし・・・見事なものだな・・・」

エリスが呟いた。

「ああ、まさかヴィクトリアがここまで強力な力を行使できるようになるとは・・・」

アリウスも目を見開き、呟く。

アリスたちは今、エクスカリバーの力で元通りとなった森の中で、
ヴィクトリアによって治療を受けているのだが、ただの治療ではな
かった。

アリスたちの周りをドームのように青い結界のような物が包んでい
るのだ。

その青い結界の中には、アリウスやエリス、アリシアたちが座り込
んでいる。

その結界の中に居るだけで、アリウスたちの傷が治癒されていつているのだ。

「……空間閉塞指定の治癒魔法……こんな魔法が存在したの……」

アリシアが呆然と呟く。

「いや、俺の知る限りそんな反則的な魔法はない……もしそんなものがあるなら医療魔法界の基礎その物が覆されているはずだ」
アリウスが真剣な表情で告げる。

「……そうか、お前はそこまで強くなっていたのか、ヴィクトリア」

エリスは嬉しそうに、しかし若干寂しそうに呟いた。

ヴィクトリアは結界を維持するのに集中力を裂いている為、会話には参加できない、ひたすら目を閉じて、結界の外側から手を当てて魔力をコントロールしている。

「レオン君……」

アリスが結界の中で呟いた。

レオンは今、ルベリージア学院にて医師に直接見てもらっている。理由は簡単だ、レオンの魔力が消えた後もレオンが目を覚まさないのだ、まるで魂が抜け落ちたように。

呼吸は安定していた為、怪我はないとは分かったのだが、一応かけてみたヴィクトリアの治癒魔法でも目を覚まさなかった。

医師によると、精神内で何かがあったと考えるのが妥当らしい。

「大丈夫よ、アリスちゃん……レオン君はそんな簡単に死にはしな

いわ」

アリシアが微笑む。

「・・・はい」

アリスは表情を和らげるが、内心は穏やかではなかった。

なんでだろう・・・凄く胸騒ぎがする・・・まるで、とても嫌な出来事がレオン君に迫っているような・・・

「レオン君・・・」

アリスはもう一度、顔を上へ・・・空に向けて呟いた。

場所は魔鏡の庭園、そこには今、レオンと・・・意識だけの状態であるアリス・イル・エキテスが二人で会話を・・・いいや、真実を語り合おうとしていた。

《じゃあ、教えてあげる・・・アリスの正体と・・・彼女の役目を》

アリスの声が響いた。

ごくり・・・

そんな擬音語が聞こえてきそうな程、そこは無音だった。

《アリスはね・・・私から生まれたの》

アリスは告げる。

・・・

「え・・・？」

レオンは思わず呟いた。

生まれ・・・た・・・？

姉さんから……？

「それは……どういう……」

《ああ、因みに言っておくけど……普通の生まれるとは違う……《出産》ではないわ……《誕生》したの……彼女はね？……私という《意志》から……私自身が生み出した、私の分身体……《星鏡世界の精霊》よ》
アリスの声が響く。

「……分身……なんだよ……それは……」
レオンの顎先から、冷汗が滴り落ちる。

ポチャン……
汗の落下音が響く。

それに……

「精霊……？……何を……一体姉さんは何の話しを……」

《……ごめんなさい、理解はできないのが当たり前……じゃあハツキリと言うわね、彼女は人間ではない……私が生み出した《人の形をした人形》であり仮初の生を受けた者……《アリス・リオ・テレーネ》……それが彼女の正体よ》
アリスの声が、魔鏡の庭園に無慈悲に響いた。

分からない……分からなかった……単純に……理解が出来ない……
ワカラナイ。

「なんだ……それは……」

この女は何を言っている？
こいつは何を言っている？

「何を言ってるんだっ！！・・・ちゃんと説明しろ！！」
レオンは怒りの余り、絶叫した。

《・・・アリス・リオ・テレネ・・・その言葉が示すのは《生贄》
そして《残虐なる無垢な魂》・・・彼女はシャイターの生贄になる
ために生み出された、ただの人形・・・所詮アレは仮初の生命・・・
《私》という人間の出来損ない・・・それが彼女の全て》

「・・・いけ・・・にえ・・・」

レオンはその言葉を理解できない・・・理解したくなかった。

それを認めてしまえば、今までアリスと過ごしてきた全ての時が・・・
思い出が嘘になってしまふような気がしたから。

「生贄ってことは・・・何か・・・シャイターのつてことが・・・」

レオンが朦朧となりながら問う。

《そうよ、彼女はシャイターに喰われる為にある・・・理由は》

「そんなの認めないっ！！！」
アリスの声を遮ってレオンが叫ぶ。

「シャイターに喰われる為にいる！？・・・そんな残酷な事が有っていいわけがない！！・・・アリスは俺達と同じ人間だ！！・・・皆と笑い、戦い、思い会う・・・アリスは俺達と同じ人間だ！！！」
レオンは叫び、息を吐く。

《そうね・・・じゃあこのことも話しておかなければならないわね・・・私がアリスを生み出すとき・・・私が彼女に与えたのは・・・肉体

と命・・・そして光の力・・・でもね、私が与えたのはそれだけ・・・
何が言いたいか分かる？》
アリスが問う。

「・・・どういう意味だ・・・」
レオンがゾツとするほどの声で問い返す。

《簡単よ、私は彼女に《心》は与えなかった》

「っ!？」

レオンは絶句した。

「けど・・・今のアリスは・・・」
レオンはうるたえた。

《ええ・・・それが有一の・・・私にとつての予想外・・・心を持たぬ
筈の人形が・・・何故・・・レオン・・・あなたと交わっただけで心が生
まれたのか・・・私にはそれが理解できなかった、だから私は気にな
ったの・・・あなた達二人には私すら・・・世界すら・・・《絶対運命》
もすら理解できない《何か》があると思った・・・ねえ、レオン・・・
教えて?・・・あなた達をそこまでさせるのは・・・一体何?》
アリスは心底不思議そうに呟く。

・・・レオン君

・・・レオン君!

・・・私・・・もう迷わない・・・全力でレオン君を救う!!

そう、レオンの心に、アリスの叫びは届いていた。

それを聞いて理解できた・・・俺は・・・俺は・・・
理解できているからこそ、レオンは迷わない。

質問の内容を理解し、レオンは・・・なんだ、そういうことか・・・と、思った。

「・・・・・・・・」

レオンの中から怒り、恐怖、絶望・・・そういったモヤモヤした全てが取り除かれた。

「簡単だよ」

レオンの声に対して、アリスの息を呑む様子が伝わる。

レオンは結晶に閉じ込められ、身動きが取れないはずの姉を見上げる。

「俺がアリスを好きだからだ」

レオンはそう呟いた。

《・・・・・・・・》

アリスは呆然となった。

《それだけ・・・？・・・それだけの思いであなた達は・・・これほどの《奇跡》を起こしたの？・・・そんな事って・・・》

今度はアリスが慌てる番だった。

「姉さん・・・俺は・・・俺達は・・・世界を変えるよ、アリスがシャイターの生贄に使われるなら・・・俺が・・・俺達仲間が・・・全力をもってそれを止める」

そう、レオンは一人ではない。

今のレオンには、ヴィクトリアが・・・アリシアが・・・アリウスが・・・セルヴィアが・・・ルークが・・・ミートルフィリスが・・・沢山の人達がついている。

だからこそ迷わない・・・迷う必要は何処にもない。

「たとえば、アリスが人間でなかったとしても・・・関係ない、今のアリスは俺達の仲間だ、俺はそれを信じてる・・・自分の・・・みんなの力を」

レオンはそう告げ、そして。

《・・・無理よ・・・だって・・・だってシャイターンは《神魔》なのよ・・・神と同等の力を持つ存在・・・それがシャイターン・・・人間では勝てない存在・・・それが神なのよ・・・？・・・それに元々アリスを生贄に捧げるのは、そうしなければシャイターンが復活してしまうから・・・それを防ぐ為に・・・私はアリス・ランガルドを生贄に捧げると・・・《契約》したの・・・それを・・・世界の摂理を・・・運命を破壊する気？》

アリスの声は震えている。

「大切な人が・・・好きな人が消える運命なんて・・・そんなのは認めない、それをシャイターンが邪魔するなら・・・神を殺す」

レオンはそう告げた。

《・・・》

アリスは絶句した。

そして叫びだした。

《無理よ・・・あなた達ではアレには勝てない！！・・・アレに勝てる事が出来るのは、《完全退魔》の力を持つ《聖天の宝具使い》でもなければっ！！》

アリスは絶叫する。

「聖天の・・・宝具使い？・・・つてのが何かは知らないけど・・・それでも俺達は抗う・・・そんな運命は破壊する・・・皆が笑って暮らせる世界に・・・俺達が変わるんだ・・・俺達人間の《意志》で・・・それが俺の決意だ！！」
レオンは宣言した。

《・・・あは・・・はは・・・そう、そうなのね・・・レオン、あなたにはこれだけの強さがすでに備わっていたと言う事ね・・・なら私が心配する必要も無かったのね・・・なら、私からも言ってくわ・・・シャイターンは神よ、アレに勝利する方法は《無い》でも・・・あなたの言う人の思いや意志が・・・世界の運命すら超える物なら・・・あなた達に託しても構わないわよね・・・レオン・・・こっちに来て《アリスの声が、レオンを誘うように告げた。》

「？」

レオンは結晶に近づく。

《・・・レオン、あなたに私の持つ《煌く王の天の鍵》を与えます》
アリスが告げた瞬間。

キイイイイイイイン・・・

結晶が純白の光に包まれる。

「っ！！」

レオンは余りの眩しさに目を細める。

ふと、レオンの中に、温かい何かが入り込んでくるのが分かった。

「何を・・・したんだ・・・？」

レオンが胸を押さえる。

《・・・あなたに・・・《星天界アルトレア》へと続く扉を開ける鍵の片割れを与えたの・・・本当は私の役目なのだけど・・・いいわ、あなたに託す・・・さあ、あなたの答えは聞いたわ・・・もう帰りなさい？・・・あなたの大切な人達が待ってるわ・・・それに・・・もうすぐ・・・《アルビオン戦争》も始まってしまおう》

「・・・？」

レオンは最後の方を聞き取る事が出来なかった。

《レオン・・・これが本当の最後・・・あなたとアリスがもしも・・・十の神器と・・・光と闇の力でこの・・・魔鏡の庭園への道を切り開く事ができたなら・・・この中心に刺さっているロンギヌスに神器を埋め込みなさい》

アリスの声を聞き、レオンは槍を見つめる。

よく見ると、槍に十個の穴が開いている。

「神器をはめ込むと・・・どうなるんだ・・・？」

《ふふ・・・さあね・・・お楽しみ・・・かな・・・でも・・・絶対に《彼》に先を越されないで・・・《彼》はどうやらロンギヌスを破壊しようしているようだから・・・そうなたら誰にも手を出せなくなる》

「・・・彼・・・？」

レオンは呟いた。

《アーフェリオンよ》

「・・・あの人・・・って・・・ええ！？」

レオンが絶句。

《アレは人間じゃない・・・今の彼は影の力に吞まれつつある・・・彼と戦うときは気をつけて・・・彼は影の力を振るってくるから》
アリスは深刻そうに告げる。
《それと・・・ジャックには気をつけて》

え・・・？

レオンが思った瞬間、レオンの目に白い霧がかかり始める。

「なんだ・・・急に・・・眠く・・・」

《あなたの肉体があなたを呼んでいるのよ・・・さあ・・・行って・・・レオン・・・あなたは・・・世界を・・・私を・・・
・・・助けて・・・》

・・・
そしてレオンは意識を失った。

「う・・・ん・・・」

レオンはうめき声を上げた。

目を開けると、見慣れた天井が視界に飛び込んでくる。

「俺は・・・帰ってきたのか・・・」
レオンは重い体を無理やり起こす。

・・・！？

「重い・・・まるで自分の体じゃないみたいだ・・・」
レオンは体がいう事を利かないのを感じて、絶句した。

そこで。

バタンツ!!!

保健室の扉が開き、アリスが飛び込んできた。

「レオン君っ!!!」

アリスは泣きながら、レオンに抱きついてきた。

「うおっ!?!」

レオンは体の痛みを無視した。

何故なら……

「アリス……ただいま」

「え……?」

そつと、レオンはアリスを抱いた。

「っ!?!」

アリスは顔を真っ赤にし、固まった。

そこに。

「なっ!?!」

「ん?……げっ!?!」

レオンがのけぞる。

ヴィクトリアが入り込んできたのだ。

「お……おおお……お前えええええっ!!!……」

ヴィクトリアが突っ込んできた。

「待て待て!!!……俺は……って……え?」

レオンは絶句した。

ヴィクトリアがレオンを抱きしめたから。

「心配したのだぞ・・・お前が・・・目を覚まさないから・・・あんな事がもう一度繰り返されるのかと・・・私は・・・う・・・う・・・」
ヴィクトリアは涙ぐむ。

あんな事とはエレインのことだろう。

「ああ・・・ごめん・・・」

と、そこに・・・

「目が覚めて何よりよ・・・レオン君」

アリシアとアリウスとエリスが入ってきた。

と、アリシアがレオンに近づき・・・頬に口付けをした。

「なっ!?!」

レオンは顔を真っ赤にする。

甘い香りが遠のく。

「おかえりなさい・・・良かったわ・・・」

アリシアが優しく微笑む。

いつもより優しい表情に見えるのは気のせいだろうか・・・?

と、そこでアリウスが告げた。

「レオン君・・・目が覚めてよかった・・・でも理解してると思っけど・・・君の与えた被害は凄まじい物だ・・・」

「・・・・・・・・!!」

レオンは絶句。

「はい」

レオンは告げた。

「待つてくれ兄上、レオンは・・・・・・・・
ヴィクトリアがフォローに入る。」

「君の罪は不問とする」

アリウスが朗々と告げた。

え・・・・・・・・？

レオンとヴィクトリアがポカンとなる。

「ふん・・・・・・・・」

エリスが鼻を鳴らす。

「君はこの国の恩人だ、それをみすみす刑にかけたりはしないよ・・・
レオン君、仲間に心配をかけてはいけないよ・・・それと・・・
これを渡しておこう」

アリウスが差し出したのは・・・黄色い宝玉。

「これってまさか・・・・・・・・」

「ああ、あの竜が消えたとき、この玉が出てきたんだ」
アリウスから神玉を受け取る。

「なんで魔鏡神獣から・・・・・・・・」
レオンは疑問に思った。

それから少したって、部屋に残ったのはアリスとレオンの二人だけになった。

「レオン君……大丈夫……？」

アリスが心配そうに覗き込んでくる。

「ああ……ありがとう……アリス」

レオンは呟くと、アリスを抱き寄せた。

「……えへへ……」

アリスが微笑む。

レオンも苦笑する。

レオンは思った。

ああ……この人を……

アリスは思った。

守ってあげたい……

二人のシアワセな時間は、短かった。

その頃ミルフエリーナ城では。

アリウスが重鎮達を前に、こう宣言した。

「始めよう……アルビオン戦争の始まりだ……！」

おおおおお！！

会議場に歓声が響く。

ヴィクトリアはその部屋の扉の前で、ショックを受けていた。

「始まるのか・・・また・・・」

-----次回予告-----

今回は少し本編から離れ、サイドストーリーを投稿します。

夏休み特別偏です！

夏休み特別番外編・夏の思い出・恋する少女達 前編 (前書き)

今回は夏休みと言う事で、それに合った物語を投稿してみました。
この短編は、前編・後編で続けます。

尚、今まで投稿してきた本編とは全く別物です。

夏休み特別番外編・夏の思い出・恋する少女達 前編

ミルフエリーナ王国国外の最南端に存在する《ヴォルピリス海岸》。そこは白い砂浜と綺麗な透明度を持つ海が広がるリゾート地だ。

その海にルベリージャ学院の生徒達が特別研修として訪れていた。

そして、その砂浜に立ち、海に向かっていている男子が一人居た。

「ふっふっふ……ついに来たぜ……海に……海に来たぜええええ……！」

海に向かってルークが吼えた。

「ザアアアアーン！！」

ルークの声に呼応するように波が白い砂浜に乗り上げる。

「おいルーク、海はいいだろ、それよりも早く着替えちまうぞ」
レオンがルークに向かって呼びかけた。

するとルークは凄まじい速さで振り返ると……

「何言ってるんだレオン！海といえば綺麗なお姉さんたち！……もといビキニだろっ！！」

ルークが砂浜で雑談をしていた若い女性たちを指差す。

女性たちは驚くと、ルークから逃げるように遠ざかっていった。

「あっ……待ってくれ！！」

ルークが女性を追いかけ始めた。

結局、砂浜にポツンと残されたのはレオンのみとなった。

砂浜に押し寄せる波の音を聞きながら、レオンは呆然とルークを見ていた。

「……………さっそくナンパかよ……アイツも相変わらず……………」

「あの・・・レオン君・・・」
「ん？」

レオンは背後から聞こえた声に振り向き、そして目を見開いた。

「んなっ!？」

レオンの後ろには白を基調としたビキニを着たアリスが立っていた。

「レオン君・・・その・・・似合う・・・かな・・・」

アリスは頬を染めて、視線を宙に漂わせながら呟く。

だが、レオンの心を占めるのは・・・

・・・ビ・・・ビキニ・・・だっ?・・・アリスが・・・あの内気な
アリスがビキニ・・・?

レオンは噴き出しそうになる鼻血に抵抗する為、思わず鼻を押さえる。

「あ・・・ああ、凄い・・・似合ってる・・・ぞ」

レオンは呆然となりながら呟く。

「うん・・・ありが・・・とう」

アリスは太股を擦り合わせて呟く。

そのまま2人はお互いに俯きながら突っ立っていたが・・・

「あら、もう海に出ていたのね」

2人の真横から声が入り込んだ。

レオンとアリスは横を見つめ、絶句した。

そこには・・・

「ア・・・アリシア・・・会長・・・なんですか・・・?」

レオンが後ずさりながら呟く。

レオンとアリスの隣に、赤色のビキニを着たアリシアが立っていた。

炎の如き赤い髪が風で靡きながら、陽光の光を浴びて煌いていた。あまりの美貌と美しさと、スタイルの良い体に、周りに居た彼女連れの男性たちがアリシアを呆然として見つめ、自分の彼女に足を踏まれている。

そこでレオンはある事実に気づいた。

「もしかして・・・とは思いますが・・・アリスにビキニを着せたのは・・・」

「あら、良く気づいたわね、そ、アリスちゃんなら似合うと思ってね、着せてあげたの」

アリシアが微笑み、胸で組んでいた腕を解く。

「っ!!!???」

その瞬間に目に飛び込んできた豊満な胸に思わずレオンの目を固定化される。

「ふふふ」

アリシアはこれぞとばかりに見せ付けているようにも見えた。

「・・・・・・・・」

レオンは呆然と反対側を向いた。

「・・・ビキニがはち切れそうな胸って・・・アリかよ・・・」

と、そこで。

「ぐほっ!」

アリスがレオンのわき腹を肘で強打した。

「もう・・・アリシア会長ばかり・・・ばか」

アリスが若干不機嫌そうに呟いた。

「な・・・何故に・・・」

レオンには何故アリスが不機嫌になったのか分からなかった。

そして漸く諦めたのか、ルークがとぼとぼと歩いて戻ってきた。

「はあ・・・結局今回もナンパ失敗かよ・・・って」

ルークはレオン達の元へと近づき、顔を上げる。

「な・・・ななな・・・ななななな・・・」

ルークは目の前に広がる理想郷ユトレピアに目を見開いた。

「ま・・・眩しい・・・アリスちゃんとアリシア会長のビ・・・ビキ
二に・・・」

ルークが砂浜に膝を打ち付ける、あまりの破壊力に膝が折れたのだ。
更にそこで追い討ちをかける者が・・・

「おゝい、皆あ！」

全員がその声が出た方向を向く。

そこにはスクール水着を着たサクラが走ってきていた。

「ス・・・スク水っ!？」

レオンが叫ぶ。

「サ・・・サクラっあなたっ!!!」

アリシアも顔色を変えて叫ぶ。

因みにルークは・・・

「はは・・・ははは・・・もう・・・もうダメだ・・・俺は死んでも良い・
・ご馳走様でした・・・」

鼻から血を噴き出して砂浜に埋まっていた。

「コイツ・・・まさかロリコン・・・」

レオンが半眼でツッコむ。

「サクラ、あなたちゃんと水着を渡したはずでしょ!？」

アリシアがサクラに向かって叫ぶ。

「だって・・・アリシアが渡してきたのってただの水着だったじゃん
かあ・・・」

サクラが頬を膨らませてアリシアを睨む。

「何か悪いところあった!？」

「ん〜・・だつて・・つまらないでしょ」

サクラは最高の笑顔で微笑んだ。

アリシアは呆然となっていたが、ふと周りを見渡し・・納得する羽目となった。

そう、周りで事態を見守っていた男子生徒たちや男性観光客が全員、鼻血を吹いて倒れていた。

「う・・・嘘だろ・・・？」

レオンが呆然と周りを見渡す。

「す・・凄いです・・サクラさん・・」

アリスも口を両手で押さえながら、呟く。

「いやいや、真似しなくていいからな、アリス」

レオンはアリスが要らぬ道へと踏み外すのを阻止した。

そして・・・ルークがある事に気づき、呟いた。

「そういえば・・・ヴィクトリア様は・・・？」

「ああ、そういえば居ないな・・・どうしたんだろ」

レオンもルークの言葉に頷く。

「ふふ・・・直に来るわよ、ヴィクトリアちゃんなら」

サクラが悪戯をした子供のような顔で微笑む。

「・・・ああ・・・また何かされたのか、ヴィクトリア・・・」

と、共通の答えが出ていたりする。

性格が硬派と思われがちなヴィクトリアだが、実は柔和な性格をしており、アリウスが放っているような王族の威厳とやらは皆無なのだ。

因みに、アリウス曰く。

《いやいや、それがヴィクトリアの良い所だよ、そういう雰囲気

持っているからこそ国民の本当の願いや意志を理解できるんだ……
レオン君、ヴィクトリアの事を頼んだよ》

と、海に来る前にアリウスが意味ありげな笑顔で言っていたが、頼んだよ……とは一体何だったのだろうか。

レオンには理解出来なかった。

「という事は、未だヴィクトリアは来ないって事ですか？」

「ええ、そうみたいね、なら暫く時間を潰しましょうか」

レオンの質問にアリシアが頷く。

「ねね、アリシア、私と一勝負どう？」

そう言つて、サクラがビーチバレーのボールを翳した。

それを見たアリシアは、獰猛な笑みを浮かべ、サクラのボールを奪い取った。

「へえ……良い度胸ね……サクラ、バレーって言つのは身長が高いほうが有利なのよ、スパイクが決めやすくなるもの」

アリシアは上から目線でサクラを見下ろす。

「ふふん、アリシアこそ、最近日ごろの生徒会の書類を全部私に回してくる恨み……ここで晴らすもん！」

サクラも視線を厳しくしてアリシアを見上げる。

二人の間にメラメラと炎が燃え盛っているように見えたのは、レオンだけではないだろう。

「じゃ、行くわよ」

アリシアはバレーコート線の線を引き、ネットを立てる、そして完成するのを確認すると、サクラとコート越しに向かい合い、お互いを睨む。

そしてそこで思い出すようにサクラが告げた。

「ちよつと待つて、二人だけって寂しいでしょ、だから……ここはチーム対抗戦ってどう？」

サクラが微笑む。

『チーム対抗戦?』

サクラ以外の全員が、同時に復唱した。

.....

それから十分後。

「成る程ね、納得したわ」

アリシアはサクラからルールを聞き、納得の意を示した。

サクラが言ったのはこうだ。

《まず、このメンバー内で人数が合うようにチーム訳をするの、そしてその後試合をして、勝ったチームにはこの海で予約しておいた《海の家・ブルーオーシャン》っていう施設で涼む事が出来るの、それでもって負けたチームはこの暑い日差しの中、歩いて飲み物を買ってきてもらおう・・・って事でどう?》

「良いじゃないですか、それなら納得できますし」

ルークもこの意見には賛成の様だ。

「でしょ?それに・・・年頃の女の子が、日焼け止めクリーム・・・もといサンオイルを塗らないなんてありえないでしょ」

サクラが人差し指を立てる。

『あ』

アリシアとアリスが同時に呟いた。

どうやら忘れていたらしい。

「.....アリスちゃん.....アリシア.....本当に女の子.....?」
サクラが半眼でツッコむ。

そして、一先ずパラソルの下へと移動したレオン達は、大変な思いをする羽目になる。

「レオン・君、その・・・サンオイルを塗って下さいっ！」

「んなっ!？」

アリスの言葉にルークが眉を吊り上げる。

そしてレオンへと振り返り、首を絞め始める。

「お・ま・え・アリスちゃんからサンオイルを塗ってくれと頼まれるだとお・・・？」

「う・ぐ・首が・首が絞まる!？」

レオンが足掻くが、ルークとは思えないほどの握力で首を絞めてきた。

火事場の馬鹿力というやつだろうか・・・？

「はな・せっ！」

レオンが何とか手を振りほどき、息をつく。

「まったく・・・お前はしょっちゅうナンパしてるだろ？」

「それとこれとは別物だ!・・・はあ・・・羨ましい・・・ルークが俯きながら立ち上がる。

「ん、何処行くんだ？」

「なに、少し体が鈍っててな・・・足とかの関節が硬くなってるんだよ、それを解しておこうと思ってな」

ルークがレオンに向かって呟くと、太陽が照りつける砂浜を歩いていった。

「そうか・・・にしても・・・ヴィクトリアの奴・・・遅いな・・・」

レオンが憂鬱そうに呟いた。

「あの・・・レオン君、サンオイル・・・」

アリスが悲しげにレオンを見つめる。

「う……」
子犬の如き視線に殺られるレオンであった。

結局、レオンはアリスに言われるがままにサンオイルを塗る事になった。

二人がやって来たのは、先程まで居た砂浜から少し離れた所にある砂浜だ。

レオン達の頭上には何かの実がなった巨大な木が立っており、それが日を遮ってくれている。

レオンはサンオイルを手につけて、アリスを見つめる。

アリスは目を閉じて砂浜にうつ伏せになっている、無論、シートは持ってきた。

「……」

レオンはサンオイル独特の滑りのある感触に、思わず唾を飲み込む。

「な……なあアリス、止めるなら……今だぞ……？」

レオンが呟く。

「う……うん、でも……大丈夫……」

「な……何が大丈夫なんだ……？……じゃ、じゃあ……塗るぞ」

レオンがアリスに跨って、少しずつ掌をアリスの白い背中に近づけていく。

そして、少しずつ塗っていくことにした。

「ひゃっ……」

レオンがアリスの背中に触れた瞬間、アリスがうめき声をあげた。

「っ……大丈夫か……？」

レオンの肩がビクリと震える。

「う……うん、続けて……」

「んっ・・・ふぁ・・・う・・・んっ・・・」

アリスが頬を染めて荒い息を吐きながら、体をくねらせる。

「・・・・・・・・・・」

レオンはなるべく、その声を聞かないようにしながらサンオイルを塗っていた。

その所為だろう、背後に立つ者の気配に気づく事ができなかった。

「えい」

レオンの背後でそんな掛け声があがる。

・・・・・・・・えい・・・？

レオンが首を傾げた瞬間、思い切り肩を押され、アリスの背中と脇に、レオンの手が思い切り滑り込んだ。

「ひぁぁぁあつ!？」

アリスが体をビクンビクンと痙攣させて叫んだ。

「うわっ、ごめんアリス!!」

レオンがすぐさま立ち上がり、アリスに謝るが・・・・・・・・

「誰だ! 一体・・・・・・・・つて・・・・・・・・」

レオンの後ろに立って居たのは・・・

「いやぁ・・・中々初々しいよ、レオン君とアリスちゃん」

サクラが若干気まずそうに呟く。

「サクラさん!？何でこんな事したんですか!？」

レオンが叫ぶ。

「うん・・・理由は・・・面白そうだったからなんだけど・・・まさかアリスちゃんが感じやすい体質だったなんて・・・・・・・・・・リアクションが大きくて驚いちゃった・・・」

サクラが苦笑する。

「それだけですか!？」

「そうそう、でもレオン君、事實は小説より奇なり……ってよく言うでしょ?」

サクラがグツと親指をたてる。

と、そこで……

「レ……レオン君……レオン君がここまで大胆だったなんて……」

アリスが荒い息を吐き、頬を紅潮させて呟く。

「つつつ……!!!」

レオンが声にならない悲鳴をあげた。

その後、レオン達は元の場所に戻ってきたわけだが……

「あら?どうしてレオン君とアリスちゃん……二人揃って目を逸らしてるの?」

アリシアが首を傾げる。

「いやぁ……あはは」

サクラが苦笑しながら二人を見つめる。

それにアリシアが目を見開くと。

「サクラ……あなたまた何かしたわね」

「え、そ……そんな事ないよう」

サクラが逃げ腰で呟く。

そんなこんなで、アリシアにこつ酷く説教を喰らったサクラはレオンとアリスに頭を下げて、一応は和解した。

「大丈夫、アリスちゃん?」

「は……はい……」

アリシアの質問にアリスが頷く、まだ頬が染まっているのは、先程

の感触が残っている所為だろう。

「でもよく良い経験だったんじゃないのか？」
ルークがレオンに向かって尋ねる。

「お前なあ……そんなわけないだろ」

「でも……参ったわね、アリスちゃん……こんな変な精神状態じゃ
まともに動けないわね……人数が合わないわ……例えヴィクトリア
を足しても人数不足ね……」
アリシアがため息をつく。

その時だ、声が響いたのは。

「私が居るわよ！」

『？』

全員がその方向を向く。

「あ……あなた……」

アリシアが呟き……

『セルヴィア理事長！！』

全員が復唱した。

それに……

「ヴィクトリア！？」

レオンが叫んだ。

そう、そこに立って居たのは、青のビキニを着ているセルヴィアと、
その横に立っているヴィクトリアだった。

「う……うむ、何とか間に合ったか……」

ヴィクトリアの水着は黄色を基調とした小さいフリルがついた水着
だった。

「到って普通だな・・・」

「あ、ああ・・・」

ルークとレオンが呟く。

そして、全員が集合した。

「では、ビーチバレーの試合を始めたいと思います！」

アリシアが朗々と宣言した。

レオン達の周りには、ルベリージャ学院の生徒たちや、他の遊泳客達が集まっていた。

その後、チーム分けを開始し、決定した。

チームAは、アリシア、レオン、ヴィクトリアの三人。

チームBはサクラ、セルヴィア、ルークの三人。

審判はアリスが担当する。

「で・・・では、チーム対抗戦、ビーチバレーを開始したいと思えます」

アリスが告げ、レオン達はお互いにコートについた。

「では・・・サブ権はチームBからお願いします」

「ふっふっふっ・・・」

サクラがボールを地面に打ちつけながら、チームA（主にアリシア）を睨み。

そして、ボールを片腕で宙へと投げ、サクラの体が加速をつけて跳躍。

「ふっ！」

サクラが呼吸を吐き出し、ボールを思い切り打ち込んだ。

ツ・・・シツ・・・パアアアーン！！

凄まじい空気を打つ音と共にボールが凄まじい速度で打ち出された。

「ちょっと、いきなりジャンプ・サーブ!?」

ボールが空気を纏いながら凄まじい速さでコートへと迫る。

「任せる!」

レオンが叫び、アンダーの構えをとり、ボールを受け止める。

そしてそのまま上に打ち上げる。

「ヴィクトリア!」

「分かっているッ!」

レオンの言葉にヴィクトリアが頷く。

ヴィクトリアがセッター（スパイカーにとって丁度良い位置にボールを上げる人）の役目を負い、落下してきたボールを丁度良い位置に上げる。

本来、ビーチバレーは二人が基本なのだが、特別ルールとして三人でプレイしているのだ。

「任せて!」

アリシアがライトから入り、思い切り跳躍、そして思い切り打ち込んだ。

ボールは丁度コートの右端に迫る。

誰も反応できていない。

唯一人を除き。

「はあッ!」

サクラがスライディングを綺麗に決めて、ボールを地面すれすれで拾い上げる。

「うそっ!?!」

アリシアが叫ぶ。

そして。

「セルヴィアちゃん!!」
サクラが叫ぶ。

「ちゃんは止めなさいって・・・言ってるでしょ!!」
セルヴィアが瞬間的に跳躍し、凄まじい腕力でボールを打つ。

バアアアアーン!!

そしてボールはレオン達のコート（ヴィクトリアの真横）に叩きつけられる。

「へ・・・?」

呆然と声を上げたのはヴィクトリア。

「・・・今・・・ボール見えた？」
アリシアが呟く。

「・・・見えませんでした・・・」
レオンが冷や汗を垂らしながら呟く。

良く見ると、ヴィクトリアの綺麗な金色の髪がはらはらと地面に散つたのを、レオン達は確認した。

「あら、ごめんなさい、遂ね・・・金色の髪を見ると力が籠ってしま
うのよ・・・ほら、アリウスに見えてね」

セルヴィアがウインクで誤魔化す。

「・・・怖ええええ・・・」

レオンは粛々と思った。

「アリウスさん・・・敵に回してはいけない人を敵にしていますよ・・・」

「き・・・きゃあああつ!!」

ヴィクトリアの悲鳴が遅れて砂浜に響いた。

そう、セルヴィアのボールは、レオン達に視認させることを許さず

に砂浜へと突き刺さったのだ。

結果……

「やったあ！アリシアに勝ったあ！！」

サクラが砂浜の上で跳ねる。

「……まさか、サクラに負けてしまうなんて……会長失格かしら……」

アリシアが本気で悩み始める。

周りで観戦していた人達は、あまりの凄まじい戦いに息を呑み、呆然としている。

それもその筈、バレーのコートが荒れに荒れているのだ。

砂浜の砂は全て吹き飛ばされ、ネットはボロボロに破れ、そしてボールが破裂して使い物にならなくなった（既に五個目）。

「でも、まさかアリシアがここまでやるなんて……」

「そっちこそ……でも、負けたのはショックだったわ」

サクラとアリシアは満足げに微笑みながら呟いている。

「な……なあ、レオン……俺たちは……生きてて良かったんだよな……」

「ああ……生き残れたのは奇跡だな……」

ルークとレオンはコート隅で小さく固まって震えていた。

あまりの試合の白熱さに、恐怖を覚えたのだ。

「んっっ……良い運動になったわあ」

セルヴィアは背伸びをしながら呟いている。

何気に化け物だった。

その後、試合に負けたレオン達は、砂浜を歩いて少し遠くにある店

まで飲み物を買っていく事になった。

レオンは飲み物程度なら一人で十分だと思い、アリシアやヴィクトリアには来なくとも良いと言ったのだが。

《何言ってるのよレオン君、こんな所で行かなかつたら、サクラに馬鹿にされるだけじゃない》

《私は負けたのだ、ナイトたるもの、己の敗北はきちんと受け入れるべきだ》

と、言う風に、全く聞き入れてもらえなかった。

ザクツザクツ・・・と、砂浜を歩く足音が響く。

「暑い・・・」

レオンは思わず頭上の太陽を見上げ、呟いた。

「そうだな・・・」

レオンの横を歩くヴィクトリアも苦笑しながら頷いた。

「大丈夫よ、この程度でダウンする程、柔な鍛え方はしていないでしょ?」

アリシアも苦笑する。

やがて、飲み物を販売している店まで到着する事ができた。

そして人数分の飲み物を購入し、もう一度歩いてサクラたちの元へと戻る。

と、そこで・・・

「ごめん、レオン君、私ちよっとお手洗い行って来るわね」

「あ、はい、分かりました」

アリシアの言葉にレオンは頷いた。

「ヴィクトリアと先に戻っても良いわよ」

「分かりました・・・じゃあヴィクトリア、戻るか」

「うむ、そうするか」

ヴィクトリアも頷いた。

レオンとヴィクトリアは二人並んで砂浜を歩く。
「そういえば、ヴィクトリアとこうして二人になるのって久しぶりだな」

レオンの言葉にヴィクトリアは頬を染めると。

「そ、そうだな・・・」

「最近色々あつて大変だったからな」

レオンはため息をついた。

「そうだな・・・だが、私としては・・・レオンと居る事ができて嬉しかったり・・・」

「ん、なんか言ったか？」

「あ、いいや、何でもない!!」

ヴィクトリアは大袈裟に誤魔化す。

その後は無言で歩き続け、お互いに肩が触れるか触れないかの距離を保ちながら歩き続ける。

その時だ、横を歩いていたヴィクトリアがピクリと顔を上げた。

「どうした？」

「あ、いや・・・今・・・一瞬魔力を感じたように思ったのだが・・・」

ヴィクトリアは海の方角を見つめ、眉を顰めた。

レオンも海を見つめ。

「・・・気のせいじゃないのか？・・・魔力なんて感じないぞ」

「そう・・・だな、うむ・・・気のせいだろう・・・って、きゃっ!!」

ヴィクトリアが思わず砂浜に躓き、体勢を崩した。

「危ないっ!!」

レオンが叫び、前へ倒れようとするヴィクトリアを抱きとめる。

「大丈夫か？」

「え・・・あ・・・あり・・・ありがとう・・・」

ヴィクトリアが頬を真っ赤に染め上げて、上目遣いでレオンを見る。

「っ・・・」

レオンはその視線に釘付けになった。

ヴィクトリアの瞳は潤み、頬は真っ赤に染まっている、さらに、ヴィクトリアから甘い果実のような香りが漂い、レオンの鼻腔を攪る。金色のサラサラした髪がヴィクトリアを抱えるレオンの腕を包む。

「・・・」

砂浜のど真ん中で見つめあい、そのまま固まる。

そしてそのまま見つめあい、やがてヴィクトリアが目を閉じた。

少しだけ、瞼が震えているのが分かり、レオンは思わず息を呑んだ。

その時・・・

ズツ・・・ツツ・・・ン!!!!!!

砂浜を圧倒的な魔力が包み込んだ。

「ッ!!」

レオンとヴィクトリアはすぐさま離れると、戦闘態勢へと移行した。

そして二人が見つめる先には・・・《天使》が居た。

「ア・・・アリス!？」

レオンとヴィクトリアが同時に叫んだ。

そう、二人の前方に立って居たのは、純白の双翼を生やしたアリスだった。

しかも右手には純白の剣が顕現済み。

「何を・・・してるの・・・？」

アリスが俯いたまま、呟いた。

レオンとヴィクトリアの背中に悪寒が走る。
それは圧倒的な格の違い、存在としての差・・・そういった超絶的な
感覚を思い起こさせる。

「ア・・・アリス・・・これは・・・その・・・」
ヴィクトリアが思わず退く。

「そ・・・そうだぞアリス・・・早まるな・・・良く分からんが早ま
るなッ！」
レオンも叫ぶ。

「レ・・・レレ・・・レオン君の・・・」

アリスが踏み込む。

ダガンッ！！

それだけで、砂浜が穿たれ、陥没する。

『ひいつ！？』

二人揃って絶叫する。

「馬鹿ああああああ！！」

アリスがレオンの立つ場所へと純白の剣を叩き付けた。

ドッ・・・ツッゴオオオオオオオオオオオアアンッ！！！！

その日、砂浜で前代未聞の大爆発が起き、巨大なクレータが出来た。

そしてその後、レオンはアリスから（何故か）説教を受け、一時間
後に開放された。

「はあ・・・死ぬかと思った・・・」

レオンはソファーに寝そべった。

「はは・・・ま、嫉妬した女は神をも殺す・・・ってね」
ルークがしみじみと頷く。

「ご苦労様だったわね・・・レオン君・・・」

「そうだよ、人生これから！」

アリシアとサクラもレオンを不憫に思ったのか、声をかけてくれた。

今、レオンたちが居るのは海の家・ブルー・オーシャン。

外があまりにも暑いので、施設内で休憩する事にしたのだ、施設内は水魔法と風魔法が混合で発動しているらしく、とても涼しい。

「・・・アリス・・・なんであんなに怒ってたんだろ・・・」

レオンの呟きに、その場の全員がため息をついた。

「・・・レオン、お前いつか凄い苦労するぞ・・・女がらみでルークが呟いた。

「そうだね・・・レオン君のお嫁さんは大変だよ・・・」

「そうね・・・」

サクラとアリシアも頷く。

「・・・??」

レオンは首を傾げるばかりだった。

因みに、その場にアリスとヴィクトリアは居ない。

二人だけは、外で何か話し合っているようだ。

「ま・・・後で聞いてみるか・・・」

レオンは天井を見上げ、呟いた。

散々な被害を被ったレオン、そしてその加害者であるアリスと、被害者のヴィクトリアは、二人きりで砂浜で座り込んで話し合っていた。

「何故、あのような事をしたのだ？・・・アリス」

「何故って・・・」

二人はやがてレオンの事を話し合う。

「ヴィクトリアちゃん・・・ううん・・・ヴィクトリアは・・・レオン君の事が・・・好きなの？」

「んなつ!?!」

次回、夏休み特別番外編・夏の思い出・恋する少女達 後編、お楽しみに。

ヴォルピリス海岸の海は、夕暮れ時になると夕日が海に映り、二つの太陽があるような綺麗な景色を見ることが出来る。

その綺麗なオレンジ色をした夕日が海に映った海の砂浜に二人の少女が横に並んで腰を降ろしていた。

「アリス・ひとつ聞いていいか」

二人の少女のうち、金髪の髪をした少女・ヴィクトリアが呟いた。

「・・・うん・・・」

それに純白の髪をした少女・アリスが頷く。

二人の周りは、波の音以外は一切ない。

まるで二人を邪魔しない様に、波の音以外は一切音がたたない。

「何故・・・いや・・・やはりやめよう・・・」

「今日は悪かった」

ヴィクトリアは一度言葉を止めると、アリスに向き直り、頭を下げた。

アリスはそれに驚き、目を見開いた。

「え・・・えっ?・・・な、なんでヴィクトリアちゃんが謝るの?」

アリスが慌てふためく。

「え・・・そ、それは・・・なんとというか・・・レオンとだな・・・」

ヴィクトリアも言い辛そうに呻く。

『・・・』

その後は沈黙が包む。

実際のところ、ヴィクトリアもアリスも自分が何を言えばいいのかはつきりと分かっていないのだ。

だが、なんとなく話さなければならぬ・・・という一心でこうして二人でここに来たわけだが・・・いざとなって何をしたいのか分か

らなくなつてしまつていた。

「……………」

「…ええい！何をしておるのだ…！…一体私は何故こんなところに来たのだ…！？」

ヴィクトリアは心の中で叫ぶ。

「……………」

「…私はヴィクトリアちゃんと話さなきゃ、と思つて来たのに…何を話せばいいの？」

「…私…何かをヴィクトリアちゃんに聞いて確かめなきゃならない…でも…何を？」

二人は自分の気持ちが抱えている《何か》を未だに理解出来ないで居た。

ヴィクトリアもアリスも何かを聞きたいのに…それが何なのかはつきりしない。

心と行動の矛盾。

二人はそんなジレンマに陥っていた。

そして…そんな二人の空気を破つたのは以外にもヴィクトリアだった。

「…アリス…アリスは…何故あんな事をしたのだ…？」

ヴィクトリアの言っているのが、先程の砂浜での出来事の事だとアリスには分かつていた。

「……………何故つて……………」

どうして…………？

アリスはまた妙な気持ちになつてしまふ。

レオンの事となるとどうしても自分の気持ちをコントロールできない。

まるで心が勝手に体を動かすように・・・
先程の砂浜での出来事も、レオンとヴィクトリアが抱き合っているのを見たからだ。

二人の光景を見た瞬間、胸にチクリと痛みが走った、だからその痛みを何なのか考えているうちに自分の体は勝手に動いていた。

分からない、何故自分があんな行動をとったのか・・・
と、そんなアリスを不思議に思ったのだろう。

「アリス・・・大丈夫か？・・・嫌なら答えなくともいいのだが・・・」

「・・・ねえ・・・ヴィクトリアちゃん」

「ん・・・なんだ？」

アリスは暫くの間を空けて・・・

「ヴィクトリアちゃんは・・・レオン君の事をどう思ってるの・・・？」

アリスはヴィクトリアの方を見ずに呟いた。

それにヴィクトリアは動揺する。

「ど・・・どうとはどういう意味だ！？」

「その・・・レオン君の・・・事・・・今まで色々助けてもらってるから・・・」

アリスは気まずそうに呟く。

ヴィクトリアはレオンとの出来事を少しずつ思い出し、頬が熱くなるのを感じた。

「わ・・・私は・・・レオンには感謝しているのだ・・・初めて会った時は気に食わない男子だと思っていた・・・だが、ルークの兄の事件で助けてもらって・・・」

そう、そこからだったのだろう。

ヴィクトリアは気に食わない男子だと思っていたレオンを、頼りに

なる男子と思い始めた。

そして様々な出来事と事件を通じて、レオンの実力を認め、そして信用し合うようになった・・・更にはアリウスまでもがレオンを認めたときは本当に驚いた。

あの兄が自分以外の男を認めることなど滅多になかったからだ。

それからだ、ヴィクトリアはレオンを見るたびに不可解な感情を抱くようになった。

「その・・・なんとというか・・・レオンを見てみると・・・一緒に居ると・・・胸を締め付けられるような感覚がするようになったのだ・・・病気かと心配になって兄上に聞いて見たりもした・・・だが・・・」

「
ヴィクトリアは俯く。

《ヴィクトリア、それは誰もが一度は体験する感情だよ、まあ確かに精神病の一種ではあるかもね・・・でも、その思いを抱けるというのはとても幸せなことなんだよ》

アリウスは優しい笑みでそう告げていた。

「何故ならそれは人として誇れるべき感情なのだから・・・と」
ヴィクトリアは台詞を反芻するように呟いた。

「・・・」

そしてアリスは理解した。

「・・・ヴィクトリアちゃんは・・・ああ、やっぱり・・・私と同じ・・・」

「そう・・・なんだ・・・やっぱり・・・ヴィクトリアちゃんは・・・ううん、ヴィクトリアは・・・」

ヴィクトリアはアリスが自分の名前を呼び捨てで呼んだ事に何ら違和感は覚えなかった。

寧ろ、此方の呼び名のほうがアリスとの関係上相応しい感じがした。だからこそヴィクトリアはアリスの方を見たりはしない。

「ヴィクトリアは・レオン君の事が好きなんだ……」
さすがのヴィクトリアもこの台詞には度肝を抜いた。

「んなっ!？」

顔が真っ赤に染まり、心臓の鼓動がトクトクと早く脈打つ。

やはり変だ、こんな事が起きるなんておかしい。

ヴィクトリアは心の内でそう思う。

「そ・それは……私が……レオンの事を……1人の……お、男として好きだと……思っている……そういう事か……?」

ヴィクトリアはアリスの方を見つめ、呟く。

「うん……だって……分かるの……ヴィクトリアの思いが」

アリスは俯きながら呟く。

「分かる……だと?……な、何故そのような事が……」

「だって……」

アリスはヴィクトリアを遮って呟いた。

「だって私も……レオン君の事が好きだから」

ヴィクトリアは胸にちくりと痛みが生まれたのを自覚した。

「……アリスは……レオンが……好き……なのか……?」

ヴィクトリアは呆然と呟いたが、何故か心は乱れない、寧ろ……
「うん……私はレオン君の事が好き、それだけは……私の……

……本心」

ああ……そうか、と……ヴィクトリアは思った。

漸く、漸く……こうしてアリスの言葉を……《ライバルの言

《葉》を聞いた事でわかった。

この胸の痛みが・・・切なさが・・・そして・・・愛しさが・・・
全てレオンに対する物だったという事が・・・

「そうか・・・私も・・・レオンの事が好きだったんだな・・・

」
ヴィクトリアは初めて、この邪魔だと思っていた胸の苦しみを愛しいと思えた。

そして・・・二人はお互いを見つめた。

二人の目に迷いは無い、ただ・・・お互いを認めたという感情だけだ。

「私・・・レオン君の事だけは譲れない・・・例え他の全てを捨てたとしても・・・レオン君に対する思いだけは捨てられない」

アリスはヴィクトリアを鋭い瞳で睨みつけた。

ヴィクトリアはアリスの視線に震えた。

まさか、あのアリスがこれほどまでの覚悟を抱いていたという事に・・・だ。

だが・・・震えても・・・『恐怖』は感じない、心を今占めるのは・・・『闘争心』だ。

そして・・・ヴィクトリアも・・・

「私もだ・・・レオンの事だけは・・・諦めたくない」

ヴィクトリアもアリスを睨み、そしてお互いに微笑んだ。

「なら・・・私達は・・・」

「ああ、一応は・・・ライバル・・・という事だな」

アリスとヴィクトリアはお互いの手を握り合った。

砂浜に映った二人の影は、手を握り合っているながらも戦っているよ

うに見えた。

その頃、海の家・ブルー・オーシャンでは。

「ルーク、悪いんだけど飲み物持ってきてくれないか？」

レオンは自分の割り当てられた部屋で椅子に座って呟いた。

「え、俺かよ……まったく……仕方が無い奴だぜ……ソ
ーダか？」

「ああ……なんでもいいや」

「分かった」

ルークはお金を手に持つと部屋を出て行った。

「……はあ……それにしても……アリスとヴィクトリア
は一体何をしてるんだか……もう日は暮れちゃったのに……」

レオンは椅子から立ち上がり、窓の外を見つめ、呟いた。

ズツ………

「っ!!」

レオンは目を見開いた。

「なんだ……今……馬鹿みたいに強大な魔力を感じたような
……」

レオンは真っ黒い海を見つめ、呟いた。

ガタンッ!!

「レオン、今の魔力は!!」

飲み物を持ったルークが部屋に駆け込んできた。

レオンは振り返り頷いた。

「ああ……この海に……何か居る」

ズツ………ン!!!!

「まただ！」

ルークは飲み物を片方レオンに投げると、窓脇に立った。

レオンはルークから受け取った缶のプルタブを開けてジュースを飲む。

「一先ず、下のフロントまで降りるぞ、もしかすると……混乱が起きていくかも……けどな」

レオンとルークは頷き、そして部屋を出た。

そして案の定。

「どうなっているんだ！なんだ今の魔力は！！！」

フロントで一人の男が叫んでいた。

他にも客の数人が不安そうに話し合っている。

「そ……そう言われましても……此方では対処のしようがありません……」

フロントのお姉さんはオロオロとなって呟いた。

「ふざけるな！こっちはそれどころじゃ……」

「あ……やっぱりこうなってたか……」

レオンは半眼で呟いた。

「ん……ま、仕方ねえわな」

ルークも頷いた。

そしてそこで声が響いた。

「皆さんお静かに！！！」

『……』

その場の全員が一斉に声が出た方向を向く、そこに居るのは赤い髪

を伸ばした女性とピンク色の髪をツインテールにした少女……
アリシアとサクラだった。

「私達はルベリージア学院のナイトです、只今よりこの海域にて調査を行いますのでお客様の皆様は自室にお戻り下さい！」
アリシアの声は隅々までよく通った。

その声に納得したのか、騒いでいた男も静まると鼻を鳴らして。

「お前らナイトなのか、ならさつさとこの事態を沈静させる、失敗したら許さんぞ」

「はい、精一杯期待にお応えします」

アリシアは男の言い分にも反論せずに頷いた。

まあ、サクラは若干、眉を顰めていたが。

……

「というわけで、今からこの海に潜む『何か』を調査するわ」

アリシアはレオン達に向かって呟いた。

「しかし……なんなんすかね……この海に居る何かって……
ルークが呟いた。

「分からないわ、それに今までここに魔獣が居るなんて聞いたこと
もないもの」

アリシアはため息を吐いた。

そして

「アリシア会長……！」

声が響いた。

「あら、ヴィクトリアにアリスちゃん？今まで何処に……」
アリシアは首を傾げた。

「あ……あの……少しだけ話し合いを……」

アリスは苦笑しながら呟いた。

「……………うん……？」

レオンは二人の雰囲気違和感を覚えた。

「なあ……アリス、ヴィクトリア……」

『なに（なんだ）？』

二人は同タイミングで呟く。

「……なんか……雰囲気変わったか……？」

レオンは思わず呟いたが……

「それはきつと……乗り越えたんだよ」

と、レオンの真横にいつの間にか立っていたサクラが頷いた。

……………？？

レオンは首を傾げた。

「まあいいわ、アリスちゃんとヴィクトリアも戻ってきたし……

これで漸く始め……」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そこでアリスアの声遮るように、凄まじい揺れが海の家を襲った。

「な……………」

レオンが目を見開く。

「まずそうね……皆、ここを出るわよ……！！」

アリスアの声で全員が頷き、外へ出た。

レオン達は砂浜を走り、その先にセルヴィアが立っているのを確認した。

「セルヴィア！？あなた何してるの……！」

「何って……今から出てくる《化け物》を退治するのよ、あなた

「たちも手伝ってもらおうけどね」
セルヴィアは無表情で海を指差す。

そして全員が海を見て、絶句した。
少し砂浜から離れたところで、海が渦潮のような巨大な渦を作り出していた。

直径は100メートルはあるだろうか・・・
そしてそこから莫大な魔力が無尽蔵に溢れ出している。

「あなた・・・ここに何が居るのか知っているのね？」

「ええ・・・ここに居るのは・・・《コカトリス》よ」

セルヴィアの言葉にアリシアが目を見開き・・・

「うそ・・・だってアレは神話の化け物・・・」

ズツ・・・ウウツ・・・ン！！！！

「う・・・」

ヴィクトリアが思わずよるめく。

「なに・・・この魔力・・・」

アリスはヴィクトリアを支えながら呟く。

そして・・・

海が裂けた。

ザッ・・・アアアアアアン・・・！！！！！！

海が裂け、そこから青黒い魔力の柱が空へと伸びる。

その魔力は今まで月を隠していた雲を吹き散らし、空をも裂く。

一瞬で、今まで闇に閉ざされていた海に月光が映る。

《グウウウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！》

そして凄まじい咆哮が響いた。

その咆哮は音圧となってレオン達を襲う。

海水が砂浜に一気に押し寄せた。

そしてそれが津波となって一気に迫り……

「……」

そこでいつの間にか宝具を顕現させたセルヴィアが弓を引いた。

狙いを定め……一気に放つ。

ヒュッ……オオオオアアアッ!!!

そして風の矢が津波を打ち抜き、一気に波が消え去った。

「凄い……」

レオンは呻いた。

だが、次の瞬間、レオンは思考を停止させた。

「なんだ……アレは……」

海の……今まで津波で姿を隠していた化け物が姿を現したのだ。

「……竜……か？」

ルークが呆然と呟く。

異様な姿だった、全身が青緑の鱗に覆われ、足は二本だけあり尻尾はかなりの長さがある。

そして一際目を引く……大きな翼。

まるでトカゲに翼をつけたような感覚。

「アレがコカトリス、別名《海の幻竜》……太古の神話時代に生息していたといわれる化け物……魔獣とは次元が違うわ」

そして、とセルヴィアは付け加える。

「この星鏡世界に僅かだけ生息するドラゴンと同じく、強大な力を持った古代の眷属……幻獣コカトリス……それがあの化け物の正体」

《グオオオオオオオオオオオ……!!》

コカトリスは咆哮を空へ放つ。

「サクラ、あなた確かドラゴンを切り裂いたって話があるわよね？」
アリシアが呟く。
するとサクラは半眼で。

「え〜・・・それ・・・かなり理想化されてるよ・・・確かにドラゴンとは一戦交えたけど、一太刀斬り付けただけで、切り裂いたわけじゃないよ」
でも、と呟く。

「アレがもしドラゴンと同じ幻獣なら・・・ただじゃすまないかも」
幻獣との戦闘経験があるサクラが告げているのだから間違いないだろう。

「でも・・・なんでそんな化け物が居るの？しかも現在に・・・」
アリシアが首を傾げた。

「大方、深海で眠りについていたのでしょね、そして今になって目覚めたと」
セルヴィアが目を閉じる。

「なんて間が悪い・・・」
ルークが呟いた。

「でも泣き言は言っていられないわ、行くわよ！」
アリシアは息を吸い、そして叫んだ。

「我が元に顕現せよ、風を束ねし大いなる双刃よ。大地を駆け、天を掴め、疾風迅雷の双剣、ウインディーネ風王天刃！」

そしてそれに続いて。

「我が元に顕現せよ、神速で天壤を駆け抜けし者よ、アマノハハキリノツルギ雷の神罰を虚るなる者へと下せ・・・一撃神刹の神刀・・・天剛雷剣！」

「我が元に顕現せよ、水の加護を受けし聖槍よ。流れ、瞬き、沸きあがれ！水真海皇槍《ロンギエールの槍》！」
「我が元に顕現せよ、雷の力を司りし拳の鎧よ、轟き、世界に雷鳴を、鳴り響かせよ・サンダー・ゲイル雷電極拳双！！」
風の双剣がアリシアの両手に、雷の太刀がサクラの右手に、水の槍がヴィクトリアの手に、雷を纏う鉤爪がついた武器がルークの拳に、それぞれ現れる。

「レオン君！」

「ああ！」

アリスとレオンも頷く。

「発動・光煌魔法・ライト・ブル・エクレス白天創剣！」

「発動・黒滅魔法・シャドウ・オブ・ブレイド黒波檄剣！」

二人の両手に二振りの白と黒の剣が顕現した。

《グオオオオオオオ！！》

キユウウオオオオオオオツ……………！！

突然コカトリスが口を大きく開き、そこに魔力を凄まじい速さで収束させ始める。

ビリビリと、魔力が肌を圧迫する。

「なんて魔力……………！」

アリシアが目を見開く。

そしてコカトリスの口内に青黒い魔力の炎が顕現する。

「行くよ、アリシア！！！」

「分かっているわ！！！」

サクラとアリシアがお互いに頷く。

ガキイイイイイイイイン・・・・・・・・！！！！！！！！
激突し、凄まじい高音が響く。

「う・・・・・・・・」
ヴィクトリアが唇を歪める。

槍の先端がやはり鱗で止められている。
それだけ押し込んでも火花が散るだけだ。
「ぐ・・・・・・・・ぬ・・う」

ヴィクトリアは思い切り槍を押し込む。

ギギ・・・・・・・・

だが槍は食い込まない。

そこでヴィクトリアは叫んだ。

「ルーク！私の槍の取っ手に全力の一撃をぶつける！！！」
「分かりました！！！」

セルヴィアの風の魔法で、同じく宙に居たルークが雷を両手に収束させ、叫ぶ。

「おおおおおお・・・・・・・・！！！」

ルークは雷を集め、そして思い切り落下する。

ヴィクトリアは槍を縦に突き立てる。

そう、ヴィクトリアはこう考えているのだ。

ヴィクトリア一人の力で足りぬなら、真上からルークのパンチを槍にぶつけ、その分の力を槍の押す力へと変えようと。

そして槍の逆の先端にルークが全力で拳を振り下ろした。

「喰らええええええええええ！！！」

ルークが絶叫した。

……私の仲間には……

『……手を出させない!!』

ドクン……

その時、不可解な事が起こった。

二つの白と黒の魔法陣が一つに合わさったのだ。

「なに……これ……融合……？」

二つの魔法陣が融合し、白でも、黒でも……いや、何色でもない。透明な魔法陣が生まれた。

それと同時に凄まじい神の如き魔力が二人を包む。

「アリス……」

「うん……行くよ、レオン君」

二人は頭に浮かんだ魔法技名を叫んだ。

『発動・星天魔法、ブリヴェール・エターニティ神羅王閃!!!!』

二人が同時に叫んだ瞬間、透明な魔法陣から《何か》が放たれ、それが槍付近一帯にぶつかったのを最後に……全てが消え去った。

音も、月光も、コカトリスも、海水も……全て。

最後に残ったのは……

ヴィクトリアの槍だけだった。

そして、レオン達は見事コカトリスを倒し、観光客から盛大に祝福された。
色んな料理からお土産まで……全部無料で持って帰ってくれと押し付けられた。

因みに、今回の事件で、このヴォルビリス海岸は閉鎖される事となった。

理由は簡単で、こんな化け物が居たら商売にならない事と……海水が一部消えた事だった。

理由は不明だった、丁度レオンとアリスが魔法を放った周辺だけがぽっかりと穴が開いているのだ。

普通なら海に部分的な穴が開けば、水が殺到するはずだが……何かに弾かれているようにその空間だけは水が浸入することなく、空気のような《何か》が渦巻き、水を……海を拒絶しているらしい。

それが、ミルフェリーナ王室から派遣されてきた魔道学者の意見だった。

そこは貴重な研究材料となるらしく、駆けつけたアリウスも苦笑していた。

結局、二人が放った魔法がなんなのか……誰にも分からなかった。

そしてレオン達は学院へと帰還する事となった。

そこでヴィクトリアが話しかけてきた。

「レ……レオン、その……一緒に帰らないか？」

ヴィクトリアのこの言葉には全員が絶句した。

「あ……ああ……」

「レオン君っ！ー！」

アリスが叫んだ。

「な・・・なんだ？」

「一緒に帰ろう？」

アリスは真剣に呟いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「い・・・一体・・・何がどうなってるんだあああ！？」
レオンの絶叫が夏の青空に響き渡った。

夏休み番外編・夏の思い出・恋する少女達

後編（後書き）

次回から本編に戻ります。

次回、遂に戦争が開始されて・・・！？

開戦

その時、世界は再び大混乱に陥った。

その時、沢山の人々が我先にと大移動を始めた。

その時、ミルフェリーナ王国とルシアーデ王国が始めて、戦争を始めるとお互いに宣言した・・・その日こそが・・・《第四次アルビオン戦争》の始まりだった。

レオンの朝はいつもと変わらない・・・だが、その日だけは違った。ルベリージア学院にしては珍しく、朝礼があるとの放送がかかったのだ。

生徒達は全員困惑気味の表情を醸し出しながら、中央グラウンドへと集まっていた。

レオンもそそくさと朝における最低限の事をして外へ出た・・・そこで。

「よう、レオン」

レオンの隣の部屋から出てきたルークと出会った。

「ようルーク・・・眠そうだな・・・」

レオンは苦笑する。

そのまま二人は中央グラウンドへと向けて歩き出した、時間は朝6時・・・普段ならまだまだ眠っていても支障が出ることは無い時間帯・・・だが今日に限っては違う。

「ったくよ・・・なんなんだ、朝っぱらから放送でたたき起こしやがって・・・」

ルークは眠そつな目を擦りながら呟いている。

「ん・・・・・・何かあったのか・・・」

レオンは考え込んだ。

その時。

「レオン君！」

アリスの声が響き、レオンとルークが左・女子寮を見ると、調度アリスが駆けて来るところだった。

「レオン君、ヴィクトリアがいないの・心当たりない？」

「ヴィクトリアが・・・？」

レオンはますます分からなくなった・ヴィクトリアが・いない？まさか・・・この放送と何か関係が・・・？

そして、生徒達は全員、中央グラウンドへと集合した。

ざわざわと、生徒達が何故集合がかかったのかを討論している様子が伺えた。

その時・・・

「皆さん、おはよう・・・と言いたいところだけど・・・そうもいかないわ、今回何故朝から放送をかけて皆さんを呼び出したのか・・・それには一つの原因があります」

アリシアが《いつもどおり》で挨拶をした・・・だが、若干ピリピリした感覚が漂ってきているのに気づいた生徒はレオンだけではなかった。

・・・

全員がシン・・・と黙り込む。

レオンもアリスもルークも・・・黙り込んだ。

「・・・今朝方・・・ミルフェリーナ王国・国王・アリウス・フィレス・ミルフェリーナ王より、《第四次アルビオン戦争》の開始

が告げられました」
アリシアが告げた。

.....

全員がその言葉を理解するのに、相当な時間を要した。

やがて.....

何だよ・・・それ!?

どういうこと!?

嫌だよ!!

混乱の嵐が起きようとした、その時。

ズバアアアアアアアアン!!!

雷光の光と共に爆音が放たれた。

生徒全員が一斉に静まる。

「全員静かにしなさい!!」

サクラの怒号が響き渡った。

全員がサクラの始めて見せる激昂に驚き、驚きを隠せない。

「あなた達はルベリーシア学院の生徒です!!!... だったらあなた達がここで騒いでどうするのですか!?!」

サクラが叫んだ。

教員達・・・そしてアリシアまでもが驚いて固まっていた。

無論、レオン達も同じく絶句。

「あなた達が不安を感じるの是最もです!... ですがそれ以上に戦う力を持たない者達は・・・もっと大きな恐怖を感じています!... あなた達は《ナイト》なのです・・・ならば、ここで動揺してはいけません!!」

サクラの声は隅々まで響き渡り、生徒達を冷静にさせた。

凄い………

レオンはそう思った、先ほどまで冷静さに欠けていた生徒達を、こうしてまとめる事ができたのだから……。これが……。生徒会副会長・サクラ・ファルバレン。

そしてアリシアがサクラと入れ替わるようにして、声を上げた。

「その通りよ！確かに戦争は恐ろしいわ……。でも、私達以上に恐怖を感じている人達も大勢います！。私達はこの戦争に対して……。住民の避難場所として、この学院を貸し出します……。そして、ルシアーデ王国のナイトたちがここまで攻めてくるのは確実です！。……。そこで相談です……。この学院を守護する思いを持つナイト達！。……。どうか拳手を……。！」

そういつてアリシアは頭を下げた。

全員に動揺が走った、あのアリシアが頭を下げた事……。それは生徒達を混乱させるに足る出来事だった。

「アリシアさん……」

レオンが呟いた。

そしてレオンが手を上げようとした瞬間。

周りの生徒が一齐に手を上げたのだ。

「っ！？」

レオンは絶句する。

そして中心から広がるように、拳手をするナイトたちが増えていき……。やがて全員が拳手をするという事態にまでなった。

「皆……！！……ありがとう……！！」
アリシアは頭を再び深く下げた。

それから時間が経過し、時間は昼頃……
ルベリージア学院は避難民達の避難場所として貸し出された……無論、それだけでは足りない……そのため学院は、各方面の協力者達に連絡を回し、避難民を匿う様、頼み込んだ。

それに応えてくれるものは……現れなかった……
だが、その時……学院へ訪れた者が居た。

レオンとアリスは生徒会長特別室へと呼び出された。
因みにルークは、避難民達の誘導に借り出されている。
部屋に入ったレオンとアリスは絶句した。

部屋に居たのは……
「トラークアさん……！！……エデルさん……！！」

そう、学院へ強力を申し出てくれたのは、ネルクス市市長・トラークア・ゲリボルと……デングバルトの管理者・エデルだった。

「やあ、久しぶりだね……レオン君」
「久しぶりですな」

二人はそういつて、学院の次の避難場所となる場所の提供に、ネルクス市とデングバルトを貸し出すと言ってくれたのだ。

「今回の戦争には驚いたけど……僕達は君達に恩がある」
エデルが。

「その通り、あなた方には街を救っていただいた……なればこそ……このトラークア、精一杯協力させていただきます」
トラークアがそれぞれ告げた。

そう・・・今までレオン達が積み上げてきた人と人とのつながり・・・
それこそが、希望の道を紡いだのだった。
アリシアは涙ぐみ、サクラは微笑んだ。

そして少しばかりの話し合いを終え、エデルがレオンに近寄ってきた。
た。

「レオン君」

「はい？」

レオンがエデルに向かって首を傾げる。

「今回の戦争は辛い・・・下手をすれば命を落とすだろう・・・それでも・・・君は戦うのかい？」

エデルが真剣な瞳で睨みつけてくる。

「・・・はい」

レオンは眼光に一瞬たじろいだが、頷いた。

するとエデルは微笑み。

「そうか・・・ならばこれは君にこそ相応しい」

エデルがそういって差し出したのは・・・

「これは・・・魔道具ですか・・・？」

レオンが問う、エデルの掌に乗っていたのは一つの笛だった。

「ああ・・・そうだ・・・この笛を・・・君に託す」

エデルはそういって、笛をレオンの掌に握らせた。

「なんの効果があるんです・・・？」

「それは・・・吹けば分かる・・・だが、それを使うのは・・・危機が訪れたときだけだ・・・本当の危機、何かを守りたい物があって・・・それでも自分では届かない時・・・その笛を吹きなさい・・・君の元へ

と・・・《ある存在》が駆けつけて・・・力を貸してくれる・・・きっと・
・彼らの・・・《勇壮なる翼》が、君を救ってくれるだろう」

そして二人が避難民達を誘導していった、無論数人の護衛のナイト
をつけたが。

・・・

そして部屋にはアリシアとサクラ・・・レオンとアリスだけが残され
た。

「・・・ごめんなさいね・・・レオン君、アリスちゃん」

アリシアがそう告げた。

「なっ!?!?・・・何をいつてるんですか!・・・アリシアさんは悪くな
いですよ!」

レオンは叫んだ。

「そうね〜アリシアは悪くないよ、全てはこの戦争の引き金となっ
たルシアーデ王国が悪いんだし」
サクラが微笑む。

「・・・そう・・・ね・・・ありがとう」

アリシアが漸く微笑む。

それから二人はアリシアから話しを受けた。

それは、二人はミルフェリーナ城へと来させる事・・・そこにはアリ
シアとサクラも連れてくるようにとの事だった・・・因みにセルヴィ
アは既に、ミルフェリーナ城に居るらしい。

「それが・・・アリウス王からの命令よ」

アリシアがため息をついた。

その頃、ルシアーデ王国では……

アーフェリオンが玉座に座り、目を閉じていた。

その玉座の下には《5人》に人影があつた。

やがて、アーフェリオンが口を開く。

「聖七騎士団諸君……遂にこの時が来た……大いなる《救い》をこの世にもたらす為に、我らは立ち上がった……この星鏡世界を変える為に……さあ……行こう……大いなる聖戦の始まりだ……！」

聖七騎士団……その創設の理由……それは……

「世界の变革を……促す事……世界に《破壊という名の救い》をもたらす事……それが我らの存在理由……」

ノアが呟いた。

「なればこそ……我らは進まねばならぬ……邪魔するものをなぎ払い……世界を救う為に」

エクセリーゼが呟く。

「そうだ……開戦の狼煙を上げよ……今こそ我らの救いを……世界に響かせる……！……《大型殺戮魔法・露と成りし光・アルテミス》……チャージ開始……照準をミルフェリーナ城へ……全ての戦力を消し去ってやれ！」

アーフェリオンは叫んだ。

その頃、レオン達は。

学院外へと出て、レオンがアリシアを……アリスがサクラを……そ

れぞれ運ぶ事となった。

「それでは……行きます……!」

キイイイイイン……

レオンとアリスの背中から、漆黒と純白の翼が顕現した。

いぎ空へと……と思った瞬間。

ドツツガアアアアアアアン……!!

学院の校舎で大爆発が起きた。

「何っ!?!」

レオンが叫ぶ。

バチバチ……ズガアアアアアアアン……!!

校舎から黄色い光……雷が空へと伸びた。

「雷……?」

サクラが眉を顰める。

レオンは体を震わせた、この……サクラにすら匹敵するほどの雷・

・そう……かつてアリウスとの戦いで見た……

その時、声が響いた。

「ダメね……あなた達を先に行かせるわけにはいかないわ」

煙の中から声が響く。

……

その場の全員が絶句する。

そして……

黄色い髪を伸ばした女性がそこに立っていた。

「ここは・・・私・・・聖七騎士団所属・ナンバー5《アハツエーン》ゼクシア・ファイラーベが相手をするのだから」

そこで・・・一人の少女が震えていた。

「・・・・・・・・そんな・・・・・・・・ゼ・・・ク・・・シア・・・会長・・・・・・・・？」

「久しぶりね、アリシア・エーテラーゼ」
ゼクシアは妖艶に微笑んだ。

そう、この瞬間に・・・二人の生徒会長は・・・刃を交えることになる。

その頃、ミルフェリーナ王国では。

「・・・・・・・・兄上・・・・・・・・」

ヴィクトリアが呟いた。

「すまない・・・・・・・・だが、戦わねばならない・・・・・・・・これは・・・民を守るための戦いだ」

ヴィクトリアは、城の出口でアリウスと向かい合っていた。

ヴィクトリアは常に着用している学院の制服・・・一方でアリウスは赤を基調とした騎士甲冑に身を包んでいる。

まるでそれは、戦いに行く己が騎士を引き止めようとする王女のように見えた。

「・・・・・・・・無事に・・・帰ってきてくれ・・・・・・・・!!」
ヴィクトリアはアリウスの胸に飛び込んだ。

厳しい《いかめしい》甲冑の所為で、温かみを知ることにはできない

が、二人にはそんなものは関係なかった。

「ああ……そうするよ……では……進軍!!」
アリウスはヴィクトリアに背を向けると、叫んだ。

「……っ!!」

ヴィクトリアは声にならない叫びを上げ、崩れる事しか出来なかった。

「そう……全てはこの時の為にある……この世界を《救う》のは……
はたしてどちらか……レオン……お前が《真》に目覚めるに
は……まずは《闇の力を失わせる》所から始めなければ……」

「
ジャックは唇を歪め、微笑んだ。

ミルフェリーナ城の頂上に立ったジャックの周りを《闇》が渦巻いた。

「さあ……来い……レオン……お前がミルフェリーナ城にたどり着
いた時……私と戦う事になるのだから……そして教えられる……
……お前と私の……関係をな」

「その時こそ……目覚めるのだ……アリスを救う為の……《ナ
イト》にな」

—————次回予告—————

「何故、何故あなたが聖七騎士団なのですかあっ!?!」

アリシアは泣き叫びながら、ウィンディーネを振るつ。

「ふふ、いい悪意・・・さあ、早く・・・あなたの全力を見せて・・・」

ゼクシアが微笑む。

そしてレオンもまた・・・

「ジャック・・・」

「ああ・・・やっと・・・やっと・・・」

《始まりは・・・私があなたを作ったことで始まったの・・・
アリス？》

「私・・・私・・・私って・・・何・・・？」

アリスは崩れ落ちる。

「ヴィクトリア様！・・・高濃度エネルギーがこの城に・・・！！」

「何！？」

次回、風と雷の舞・エレクトロ・ダンス、お楽しみに。

風と雷の舞・エレクトロ・ダンス

「そ．．．そんな．．．何故．．．あなたがここに．．．？」

アリシアは突然現れた乱入者に対してそう告げた。

「ふふふ．．．あなたとこうして会えるなんて．．．運命とは皮肉な物ね」

一方で黄色の髪をした女性．．．ゼクシアは微笑んだ。

．．．．．ゼクシア．．．ファイラーベ．．．なんでここに．．．
レオンは呆然とゼクシアを睨む、するとゼクシアは微笑み。

「何故ここに居るのか．．．そう聞きたいようね？．．．レオン・イル・エキテス」

「レオン．．．君．．．どうして．．．レオン君とゼクシア会長が知り合いな．．．？」

アリシアは俯きながら質問を投げかける。

「え．．．あ、それは．．．．．」

レオンは思わず口を噤む。

そこで助け舟を出したのは以外にもゼクシアだった。

「あなたが懸念することは無いわ、私はあなた達の敵．．．それだけ」

「敵．．．？．．．．．なんで．．．．．どうして．．．ゼクシア会長が聖七騎士団に居るのですか．．．」
アリシアの声が震える。

「何故．．．その問いには答えるわけにはいかないわね、私の役目はあなた達を倒すこと．．．それ以外は興味がない．．．けれど．．．闇の選定者と光の再生者だけは先に進めるように言われた．．．だからあなた達2人は通してあげる」

ゼクシアがそう告げる。

レオンとアリスは驚いてお互いを見つめ合う。

「何故ですか？・・・何故私とレオン君だけを・・・」

アリスは呟く。

「だってあなた達の力が無ければ、魔境の庭園への道が開けないから・・・それだよ、それ以外はここで止める」

ゼクシアが告げた瞬間、凄まじい魔力が放たれる。

ズ・・・ン・・・！！

「くっ・・・」

アリスアが呻く。

二人の生徒会長・・・その二人が今・・・ここで相對している事・・・それは、歴史に残るほどの戦いへと発展する・・・

その頃、ルシアーデ王国では。

アーフェリオンが一人で、玉座についていた。

「・・・っ・・・おのれ・・・何故・・・我の邪魔を・・・」

アーフェリオンはまるで《もう一人の自分》に話しかけるように、一人で頭を押さえて呻いていた。

「・・・ぐっ・・・出てくるな・・・我が・・・」

《私の体を返せ・・・！！》

玉座のある部屋に《もう一つの声》が響く。

「ふふ・・・ははは・・・お前が出てくる必要は無い・・・どうせこの体は・・・シャイタン様の封印場所までの乗り物に過ぎん・・・それまでは・・・」

《ふざけるな！・・・貴様に体は渡さん！！・・・直ぐに戦争を回避しろ！！》

「ぐ．．．あああつ！！」
アーフェリオンが叫ぶ。

「おのれ．．．本体の精神が体を．．．だが．．．言った筈だ．．．私の力を．．．お前如きの魔力で払うことなど．．．できん！」

《．．．私の．．．を．．．返．．．》
やがてもう一つの声が小さくなっていき、やがて聞こえなくなった。

「はあ．．．はあ．．．邪魔はさせん．．．私の計画を邪魔する者は．．．排除する」

アーフェリオンは息を荒くつき、立ち上がった。

「．．．そう．．．全ては．．．わが主の為に」

そして、ルベリーシア学院では。

アリシアとゼクシアが向かい合っていた。

レオン達は息を呑みながらその光景を見つめていた。

二人の生徒会長．．．どちらも強者であり、伝説の宝具使い。

「．．．ゼクシア．．．会長．．．」

アリシアは呟いたが．．．

．．．いいえ、ダメ．．．今は私個人の事情より．．．戦争を止めることが最優先．．．自分の感情に囚われてはダメ．．．

「レオン君．．．先に行って」

アリシアは言い放った。

「え．．．でも．．．」

「いいの！．．．ゼクシア会長．．．いいえ、ゼクシア・ファイラーベは私が止める」

アリシアはレオン達に背を向けているため、表情は見えないが、凄まじい決意の元に言っていると言う事は読み取れた。

「分かりました．．．行くぞ！．．．アリスー！！」
レオンは地を蹴って大空へと浮上した。

「うん！．．．行きますサクラさん！！」

「うん、いいよ！．．．気をつけてね．．．アリシア」
サクラは最後にそう告げると、アリスに掴まって大空へと飛び上がった。

「ありがとう．．．レオン君．．．．．《ゼクシア会長》．．．」

「あら、私の事は会長ではなく呼び捨てで呼んでくれると思っていたのだけど」

ゼクシアは面白そうにアリシアを見つめる。

「いいえ、確かにあなたはゼクシア・ファイラーベです．．．でも、私にとってはゼクシア《会長》のままです．．．だから．．．．．」
キイイイイイ．．．ン．．．．．

甲高い音と共に、風がアリシアの周りを踊る。

「あなたを．．．止めます」

「ふふ．．．止める．．．甘いわね．．．」

バチバチ．．．バチン！！！！

雷がゼクシアの体を包む。

二人は互いを睨み合い．．．そして、思い切り踏み込んだ。

「っ！！」

「．．．！！！！」

風と雷が近ずき・・・・・・・・

ドオオオオオオオオンッ!!!

圧倒的な魔力と衝撃波が、発生し辺りを一掃した。

レオンとサクラを乗せたアリスは全速力で空を進み、ミルフェリーナ城へと急いでいた。

「アリスさん・・・大丈夫なのか・・・」

レオンは呟いた。

「大丈夫よ、アリスはそこまで軟じゃない・・・でも・・・驚いた・・・
ゼクシア・ファイラーベ・・・先代・・・ルベリージア学院生徒会長・・・
そして歴代最強の雷使い・・・」

サクラが呟いた。

「最強の雷使い・・・・・・・・？」

レオンが並走飛行しているアリスに掴まっているサクラに質問を投げかける。

「ええ・・・彼女の事は・・・私も詳しくは知らない・・・けれど、アリスがあの人のお話を聞いて、生徒会長の位についたっていうのは知ってる？」

サクラがレオンを見つめ、レオンは頷く。

「アリスとゼクシア・ファイラーベは年代が違う・・・だから、アリスとゼクシア・ファイラーベが、学院で直接であったというわけではなかった・・・けれどアリスは・・・学院の伝説として残っているゼクシア会長の噂を聞いたの・・・」

そう・・・だからこそ憧れた・・・アリシアにとって・・・ゼクシア・ファイラーベという生徒が行った行事や・・・生徒達が向ける信頼の瞳・・・その全てが・・・彼女を・・・アリシアを魅了した。

「直接あつたことはない・・・けれどアリシアは憧れを持った・・・見た事もないその生徒会長にね・・・そして偶然の産物かもしれないんだけど・・・偶々ゼクシア会長が学院を訪問したの・・・その時アリシアは生徒会会長の任についていた・・・それでアリシアはゼクシア・ファイラーベと色々話をしたらしいの・・・」
サクラは遠い過去を振り返るように、話す。

「ゼクシア会長・・・私は・・・あなたに憧れを持っていた・・・」
アリシアはゼクシアと鏝迫り合いを続けながら睨む。

「知っているわ、あなたあの時・・・私に尋常じゃない信頼を寄せていたものね」
ゼクシアが微笑む。

「ええ・・・私はあなたのような人になりたい・・・近づきたいと思つて生徒会長になりました・・・そして私はあなたからアドバイスを受けました・・・覚えてますよね？」

「・・・」
ゼクシアは口を閉ざした。

調度一年半前・・・その頃の学院の生徒会長は、1年の生徒が担当するとする異例な事態に陥っていた・・・理由は、その《ある少女》が

優秀すぎた為だ。

そして、学院の生徒会長特別室で、二人の少女が向かい合っていた。

《もしも・・・あなたが私に近づきたいのなら・・・私の事を忘れなさい》

ゼクシアは告げた。

《・・・な？・・・何故ですか！？・・・私はあなたのようになりたくて・・・》

アリシアは泣きそうな表情をする。

《・・・無理よ・・・あなたが私になるのは無理・・・だってあなたはあなたなのだから》

ゼクシアは自分の子供を教え、諭すように呟く。

《え・・・それは・・・どういう・・・》

《あなたが私の影を追いかけている限り・・・あなたが私に追いつくことは無いからよ》

《っ!!!!》

アリシアは絶句した。

《あなたはあなたの道を進めばいいの・・・私の影ばかりでは・・・私より前進することは無い・・・だから私を《追いかけてはダメ》・・・《追い抜かなければならない》・・・分かるでしょ？・・・あなたは優秀よ・・・恐らくは私より》

《そ・・・そんな！？・・・私なんて・・・》
アリシアは絶句する。

《いいえ、謙遜する必要は無いわ．．あなたは強くなる．．きっと、誰にも届かない高みへと進むことが出来る．．．忘れないで、あなたは．．．私よりも強くなる、だから．．》

閉じていた目を開けて、ゼクシアを睨みつける。

「．．．私を忘れ、影を忘れ．．．私の面影を捨てなさい．．．只管に前へと進みなさい．．あなたは．．．そう教えてくれましたよね．．．なのに！！」

ギアンツ！！！！

二人の間に火花が散り、お互いに吹き飛ばされる。

「何故あなたは．．．ルシアーデ王国に．．．ついているのですか！？」

アリシアは叫ぶ。

ゼクシアはそれに答えない。

バチバチ．．．．バチン！！！！

拳に雷を収束、空気を爆ぜさせる程の雷の本流が辺りを圧倒する。

「．．．私は．．．自らの選択が間違っているとも．．．正しいとも思わない．．．けれど．私には恩がある．．それを返したいだけ」
ダガンツ！！

ゼクシアが踏み込んだ瞬間、地面に足跡が穿たれる。

「っ！！！！」

アリシアの周りに風が収束する．．．そこから風の刃を無数に飛ばす。
ヒュイン．．ヒュイン．．ヒュイン！！

「甘い」

ザンツツ．．．！！

ゼクシアは雷の纏う手刀で、風の刃を切り裂く。

「っ!？」
ゼクシアが怯む。

・今!・・・今の状態なら・・・一気に攻撃できる・・・!!
ゼクシアの腕が上に上がりきっている状態を見たアリシアは思い切り肘を捻り、思い切りゼクシアへと手刀を一閃させる・・・と思ったが・・・

「・・・どう・・・して・・・?」

アリシアの風を纏った手刀は、ゼクシアを切り裂くことはなかった。何故なら、アリシアの手刀がゼクシアの首もとの一歩手前で止まっていたからだ。

アリシアの手刀は、ゼクシアに触れる直前で震えながら停止している。

ゼクシアが微笑み、アリシアの胸元を切り裂いた。

ズバンツ!!

「うあああああつ!!」

アリシアは胸元から血を噴き出しながら思い切り吹き飛ばす。

アリシアの制服の胸元は切り裂かれ、無残にも大量の血が腹部を染める。

「・・・どうして・・・どうして私の手は・・・」

「ふふふ・・・言うておくけど・・・私は何もしていない・・・ただ《あなた自身》が私への攻撃を躊躇った・・・それだけ」
ゼクシアは楽しそうに告げる。

・・・私・・・自身?・・・まさか・・・私は迷ってるの?・・・それもまだ希望を持つてるの?・・・ゼクシア会長が戻ってきてくれるっ

て・・・？

「そん・・・な・・・」

「あなたは私が傷つくのを恐れている・・・だからあなたは私へと攻撃する事ができない、あなた・・・私が言った事を何一つ理解できていないのね」

ゼクシアが告げた言葉に、ビクンとアリシアの肩が震える。

「確かに今の私はあなたにとって、忌むべき存在かもしれない・・・けれど、今のあなたを見る限り、昔の私が言った事を何も理解できていない、言った筈よ・・・私を忘れなさい・・・とね」

アリシアは呆然と目を見開いて、地面を見つめる。

「・・・私は・・・私は・・・嫌だ・・・やっぱり私には・・・」

その時、《ある少年》の声が響いた。

《こつやつてくすぶっているのは見たくないです・・・アリシアさんはいつも通りでいいんです・・・風のように・・・綺麗なアリシアさんで》

「・・・！！」

アリシアは目を見開いた。

その時。

「終わりね・・・伝説の風翔・・・どれほどの者かと思っていたけど、恐らく紋章が・・・力の発現者の選択を誤ったわね・・・これでは役に・・・」

ゼクシアは最後まで言葉を紡げない。

「・・・」

アリシアが莫大な魔力を放ちながら立ち上がった。

・・・そう・・・思い出した・・・私は一人じゃない・・・皆が・・・
レオン君がいる。

「そう・・・覚悟・・・決まったのね・・・アリシア」
ゼクシアは微笑む。

「はい」

アリシアが告げた瞬間、掌にウインディーネが顕現した。

「・・・顕現の言霊を無しで？・・・それほどの才能ということね」

ゼクシアは目を見開いた。

「・・・私は・・・もう迷いません・・・私には負けられない理由があるから、だから・・・ここであなたを・・・倒します」

アリシアがウインディーネを構える。

キィィィン・・・

アリシアの首元にある紋章が空色に煌く。

「本気ね・・・そう・・・私はこれを守っていた・・・あなたが本気を出さなければ・・・面白くないもの・・・それに・・・私にも帰らねばならない場所があるから」

ゼクシアの魔力が急速に上昇、ゼクシアの体を黄色く染め上げる。

「わが元に顕現せよ・・・天走る雷の炎よ・・・天より舞い降り我に未来を切り開く力を・・・我に与えよ・・・アマノムラクモツルギ雷刃切断剣！」

ゼクシアが叫んだ瞬間、ゼクシアの両手に雷の双剣が握られた。

そして・・・二人は全く同じタイミングで踏み込んだ。

「はああああっ！！！！」

「はあッッ！！！！」

「く……」

ゼクシアは双剣を横に構えて受け止める。

ピシン……

ゼクシアの双剣に輝が入る。

「っ!？」

ゼクシアは一気に距離をとる。

二人は先ほどから激突を繰り返していた。

ガン・ギアン・ガイイインツ!!!

ピキン……

アリシアの双剣にも輝が入る。

「!！」

ザアアアア……

二人はお互いに地面を吹き飛びながら、互いを睨む。

次で……

アリシアは決意を固める。

決める!!

ゼクシアは心の中で叫ぶ。

「はああああああああつ!!!」

アリシアは絶叫し、魔力を最大限まで高める。

空色の魔力が辺りに満ちる。

あまりの魔力に地面がひび割れ、地震を起こす。

それを見たゼクシアは微笑んだ。

「・・・そう・・・それがあなたの全力・・・素晴らしいわね」
ゼクシアは双剣を構える。

ズ・・・ン・・・!!

黄色い魔力がゼクシアから放たれる。

それと同時に右腕に刻まれた黄色い紋章が輝く。

空色と黄色い魔力は辺りを包み、そして・・・周りの全てを破壊する。

「はあああああ!!!!」

「・・・あなたには・・・負けないわ!!」

アリシアとゼクシア・・・二人が一気に走った。

ダガンツツ!!!!

二人が翔けた瞬間、地面が碎け散る。

「はあああああ!!!!」

二人は同じように叫びながら、思い切り双剣を振りかぶる。

アリシアは空色の魔力を纏いながら。

ゼクシアは黄色い魔力を纏いながら。

《あなたは・・・進み続けなさい・・・アリシア》
アリシアの中に、あの日のゼクシアの台詞が蘇る。

・・・分かっています・・・だから・・・私は勝つ!!!!

二人の距離が近づき、そして・・・
激突。

キュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!

黄色と空色の魔力がお互いにドーム状に広がり、二人を包む。

「はあああああ!!!!」

アリシアは双剣を押し込む。

パキン・・・パキパキ・・・

双剣に輝が入りながら、広がる。

アリシアはそれを黙って見つめる。

宝具とはその者の心の結晶・・・砕ければ・・・その者の宝具は消滅し・・・二度と元には戻らない・・・それはつまり・・・宝具使いでは・・・ナイトでは無くなるということ。

アリシアはそれを知っている・・・だが・・・

「引けない・・・ここだけは・・・私の全力でいかななくてはならないの・・・」

パシン・・・パキ・・・パキン・・・

双剣の輝が広がり・・・やがて双剣が輝で覆い尽くされた。

後一撃でも振るえば・・・アリシアの宝具は砕け、アリシアはナイトではなくなる。

「それでも・・・私は・・・」

アリシアはさらに魔力を高める。

ギシギシと双剣が・・・ウインディーネが悲鳴をあげる。

だがそれはゼクシアも同じだった・・・ゼクシアのアマノムラクモノツルギも、輝が入り、悲鳴をあげている。

ゼクシアはそれを見て、ふ・・・と微笑み、呟く。

「最後にしては・・・良い結末ではないわね」

「ええ・・・まったくです・・・私とあなた・・・結局・・・最後まで・・・理解しあう事はないのですね・・・」

アリシアの目から涙が零れる。

「さあ・・・終わりね・・・」
ゼクシアは微笑み、そして力を込める。

パキン・・・
お互いの宝具が少しだけ砕ける。

「はあああああああつ!!!」
お互いに絶叫し、鏢迫り合いを一度止め、距離をとる。

そして思い切り踏み込んだ。
アリシアは思い切り体を捻り、全力で双剣を振るつた。
ゼクシアは全力で双剣を振り上げて、振り下ろした。
「はあああああああ!!!」

二人はぶつかり合った・・・そして・・・
パ・・・キ・・・パキイイイイイイイイイイイイイイ・・・
甲高い・・・澄んだ音を響かせて・・・二人の宝具は砕け散った。
この瞬間・・・二人のナイトが・・・資格を失った。

その瞬間・・・アリウス、ヴィクトリアが思い切り目を見開いた。
アリウスは軍の先頭で・・・ヴィクトリアは城の内部で・・・

そして二人は・・・
粉塵が収まり、二人は入れ違いで立っていた。
二人はお互いに背を向けて、立ち尽くしている。
「・・・やはり・・・強いわね・・・あなた・・・」
ブシュン!!!

ゼクシアの首筋から血液が噴き出し、前のめりになり・・・

「ふふ……けれど……あなたも……もう……ナイ・トでは……なくなつて……」

ゼクシアは地面に倒れた。

ドシャァン!!

二人が戦つた後は無残にも景色が残されていない……山も……緑も……何も無い。

「……そう……ですね……あ……私は……もう……学院の……生徒……会長ではないのね……はは……でもまあ……後は……」

アリシアがふらりとよろめく。

「サクラ……に……任せて……いいわ……よね……レオン……君……私……」

アリシアは吐血すると、地面へと倒れ……その瞳から……光が消えた。

ドクン……

「っ!？」

レオンは思い切り振り返つた。

「どうしたの？」

アリスとサクラが不思議そうにレオンを見つめる。

「いや……今……何か……大切な何かがこの世界から消えたよう……な……そんな感じが……」

レオンは《余分な事》を頭から消し去り、城の正門を叩く。

その時。

「ああ……やっと来てくれた……レオン」

レオン達の背後から声が響く。

「っ！？」

三人が一斉に振り向く。

「っ！！・・・ジャック！！！」

レオンは叫んだ。

そう・・・そこに居たのは・・・黒いマントを着た男・・・ジャック
だった。

ドクン・・・

「っ・・・」

アリスは胸を押さえる。

・・・なに・・・この・・・動悸・・・は？・・・この人から・・・
何か・・・

「さあ・・・始めよう・・・ようやくここまで来た・・・長い
長い物語は・・・終わりを告げる・・・レオン・・・お前と私で・・・
・始めよう・・・レオンの《闇の力》を《覚醒》させる為に」

ジャックは妖艶に微笑んだ。

その時、アリスの頭に声が響く。

《さあ・・・アリス・・・あなたも始めましょう》

「っ！？」

アリスは呆然と立ち尽くした。

目の前が、《漆黒の世界》になっていたからだ。

「いつの・・・まに・・・？」

目の前には一本の白い槍・・・そして黒い結晶に閉じ込められた女性。

《ようこそ……魔境の庭園へ》

「……テレ……ポート……違う……さっきまで私はレオン君と……」

アリスは動揺し始める。

《あわてなくても良いの……あなたにも……《真実》を知って
もらわないといけないから》

《さあ……教えてあげる……あなたの《正体》をね》

――――次回予告――――

遂にレオンはジャックと……アリスは《アリス》と出会う。

一方で、サクラは城の内部でヴィクトリアと共に、セルヴィアが手
に入れた聖七騎士団の情報が記された書類を閲覧する事に……

「そん……な!?!……兄さん……?」

サクラは絶句する。

書類に刻まれた《レイドル・ファルバレン》という名前が示すのは
……?

「な……に!?!」

レオンは絶句する。

「レオン……お前を……鍛えると言っただろっ?」

次回、ファルバレン家、お楽しみに。

ファルバレン家

「ジャック……!!」

レオンは叫んだ。

するとジャックは微笑む。

「ふふ・ははは・漸くここまで来たんだ・・始めよう・お前を・」

そこでジャックの言葉を遮るようにサクラが叫んだ。

「レオン君っ!!・・アリスちゃんがない!!」

サクラの悲鳴がレオンの背後から響く。

「っ!？」

レオンは振り返る。

・・・いない・・何故？

レオンが最初に抱いた思いはそれだけだった。

それはそうだろう、先ほどまでサクラの隣にいたアリスが突然いなくなっただから・・誰にも・・真横のサクラにすら気づかせずに

「・・な・・なんで・・」

レオンの呟きを聞いて、ジャックが微笑んだ。

「連れて行かれたのだよ・・《彼女》にね・・お前はもう分かるはずだ・・魔境の庭園で会った筈だ」

「っ!?!?・・姉さんに!？」

レオンが叫ぶ。

「お姉さん・・?・・レオン君の？」

サクラが眉を顰める。

しかしそこでジャックが唇を歪める。

「お前・・・邪魔だ・・・関係の無い者にここに留まる資格はない・失せろ」

ジャックが片手をサクラへと向ける。

その瞬間、見えない力に押される様にサクラの体が吹き飛ばされた。

「きゃあっ！！！」

サクラの体が城の正門へと高速で向かう。

「まずい！！」

レオンは叫んだ。

あの速度で門にぶつかれば、サクラの体は唯ではすまない。

が、そんな心配は杞憂だった。

ガチャン・・・

巨大な門が独りでに開いたのだ、まるでサクラに合わせる様に。

サクラはそのまま丁度開いた門の中・・・城の内部へと放り込まれた。

「きゃあっ！？」

そして、門が勝手に閉じ始める。

ギイイイイ・・・ガチャン！！

門が閉まり、鍵がかかった様な音が響く。

一方サクラは吹き飛ばされた後、暫く宙に浮遊していたが、地面に落とされた。

「ちよっ！！」

ドスン！！

「痛あああ！！」

サクラは尻餅をついた

サクラは立ち上がると、閉まりきった門へと近づき、腕で押してみ

る・・・だがビクともしない。

「レオン君！！」

叫ぶが、返事が返ってくる様子はない。

「一体・・・何が起きたの??」

サクラは城の内部で呆然と立ち尽くした。

「ジャック！・・・サクラさんに何をした!??」

「何も、邪魔者には退散してもらうに限る・・・今ここで殺しても良かったが、それでは《レイドル》の奴が困りそうだからな」

ジャックが慥然とした口調で呟いた。

「さて・・・レオン・・・私たちも行こうか」

ジャックが片手を振るう。

ズツ・・・

辺りを漆黒の波動が包み始める。

「闇の・・・力・・・」

レオンは呆然と呟く。

「ふふふ・・・行くぞ・・・《お前が私を理解》できるように・・・」

ジャックがそう告げた瞬間、レオンは意識を失った。

その頃、サクラは城の内部にいたヴィクトリアとセルヴィアと合流し、アリスとレオンにあった出来事を話した。

「成る程ね・・・つまりは・・・レオン君とアリスちゃんの持つ《あの力》は、この戦争の裏で暗躍している《何者か》にも通じてい

るという事かしらね・・・」
セルヴィアは豪華な王族専用のソファーに腰掛けて呟く。

「それに・・・サクラ副会長の言った事が本当だとすれば・・・この城は幽閉されたと言っ事になるぞ・・・」
ヴィクトリアが額を押さえながら呟く。

サクラはセルヴィアの向かいに腰掛けていた。

セルヴィアとサクラの二人がソファーに座って、王族であるヴィクトリアが立つたままというのは若干気が引けたが、ヴィクトリア自身が許可を出したので、従わざるを得ない。

「・・・レオン君・・・それにアリスちゃんまで・・・あの二人って・・・相手に・・・ルシアーデ王国にとって何なのかな・・・」
サクラが呆然と呟く。

「分からないわ・・・けれど、ジョーカーである事には違いないわね・・・そういえばサクラ、あなた何か聞いていない？・・・レオン君やその突然現れた敵が言っていた言葉とか」
セルヴィアが問いかける。

「・・・」
サクラはそこで思い出した。

《お前は《魔境の庭園》で出会っている筈だ・・・《彼女》とな・・・》

《姉さんが!?!?》

「そういえば・・・魔境の庭園とか・・・言っていた気がする」

「魔境の庭園?・・・何なのですか?・・・それは」
ヴィクトリアが露骨に眉を顰める。

「分からない・・・けれど・・・レオン君がその単語を聞いて動揺してた・・・」

サクラが思い出すように告げた。

「レオンが・・・？・・・やはりレオンは・・・いいや、あの二人は私たちが知らない事に関わっている？」

「そうね・・・きっと・・・あの二人は特別なのよ」
ヴィクトリアの言葉にセルヴィアが頷く。

「それから・・・レオン君が姉さん・・・って」
サクラが呟く。

「お姉さん？・・・レオン君にお姉さんが居たの？」
セルヴィアが首を傾げる。

サクラは首を振る。

「・・・そう・・・どちらにしろ・・・私たちには知らない事が多すぎるわね」

セルヴィアがため息をつき、ソファーへともたれる。

「あの・・・セルヴィア理事長・・・サクラ副会長・・・私は城の戦略対策室へと行きますので・・・これで・・・」

ヴィクトリアが頭を下げて、この部屋を出て行った。

「魔境の・・・庭園・・・か」

セルヴィアが釈然としない面持ちで呟いた。

その頃、対策室へと着いたヴィクトリアは。

「戦況はどうだ？」

ヴィクトリアの目の前で通信機をつけている男へと質問を投げかける。

「はっ、それが・・・アリウス様が部隊を専攻させているお陰で、敵軍の動きに支障が見られます、このまま押し切れば・・・あるいは」

「そうか・・・このまま何事も無ければいいが・・・」

ヴィクトリアは戦場で戦っているであろうアリウスへと届くように呟いた。

そしてアリウスは。

「掛かれええええ!!」

アリウスが片手を敵軍へと向ける。

敵兵は絶句する。

「なっ!?!?・・・敵の王だと!?!?・・・馬鹿な、何故戦場に!?!」

「お前たち・・・悪いが加減はしない!・・・・炎魔法・高位詠唱・

《F e n i x ・ E n d》!!」

アリウスが叫んだ瞬間、巨大なフェニックスが顕現、相手の兵士を全て飲み込む。

《キアアアアアアアアン!!!!》

「うわああああ!!」

「た・・・助け!!!!」

「やめろおおおお!!!!」

ズウウウウウウウンッ!!!!

その全てを平等に叩き伏せる。

アリウスが絶叫する。

「アーフェリオン……《アルテミス》を放つなど……許さん!!!」

アリウスの怒りが魔力となり、辺りを包んだ。

その時、気づいた。

「おい……あの光の先って……ミルフェリーナ城じゃないか……？」

一人の兵士が呟くのを、アリウスは聞いた。

「……ま……さ……か……」

アリウスは呆然と立ち尽くした。

「逃げろおおおお!!!……ヴィクトリアあああああつ!!!」
アリウスの絶叫が、戦場に響き渡った。

その頃、ミルフェリーナ城では。

「ヴィクトリア様……強大な魔力反応がこちらに向かってお
ります!!!」

「何!?!」

ヴィクトリアは叫ぶと、すぐさまオペレーターに映像を表示させた。

そこに移っているのは茜色の光の柱が、此方へと向かってきている
所だった。

「あれは……アルテミス……」
オペレーターの一人が呟く。

「おい! 貴様、アレが何か知っているのか!?!」
ヴィクトリアが叫ぶと、そのオペレーターは震えながら説明を始めた。

「あれは・・・殺戮魔法アルテミス光です・・・アルテミスは魔道砲撃の一つに分類されるのですが・・・その威力は別次元です・・・そしてあの光の恐ろしい所は・・・別にあります」
オペレーターは無表情に告げる。

「なんだ・・・その恐ろしい所と言うのは・・・」
ヴィクトリアが震えながら質問を投げかける。

「はい・・・あの光は・・・ただの魔力の塊ではありません・・・あの光は・・・魔力結合を破壊するのです・・・」

「魔力結合の・・・破壊・・・だと・・・」
馬鹿な・・・
ヴィクトリアは呆然と、迫る光を見つめる。

魔力結合・・・魔力物質の結合を示す事象で、それは世界の万物を形作る上では必ず必要な現象だ、分子結合を破壊するという事と同義の意味でもある・・・つまり人間であろうと物質であろうと・・・全てを消し去ってしまうのだ・・・存在そのものを消滅・・・又は蒸発させる・・・それがあのアルテミスの力なのだという。

ソレはもはや、結界を張れば凌げるだとか・・・そういう話ではない・・・触れれば魔力だろうと消し去る・・・つまり・・・
「逃げようが・・・ありません・・・」

その場の全員が・・・呆然と立ち尽くした。

そして・・・

「くそ・・・ここ・・・までか・・・？」

ヴィクトリアは目を閉じる。

だが・・・その時。

「ヴィクトリア様……前を……ご覧ください」
オペレーターの呆然とした声が聞こえる。

「……な……あれは……何故……」

ヴィクトリアは目を見開いた瞬間、絶句した。

アルテミスが光が……突然何か邪魔されたように折れ曲がり、隣に立っている《水の塔》へと直撃コースを変えたのだ。

ゴツツツツツッ！！！！！！

凄まじい横揺れが城を襲う。

「きゃっ！！！」

ヴィクトリアは思わず座り込む。

アルテミスが水の塔へと直撃した事で、水の塔が蒸発……その衝撃が辺りを襲った。

「……何故……一体……何が……」

ヴィクトリアは気づかない……左腕に刻まれた《エレインの水碧の紋章》が輝いている事に。

《ふふ……頑張ってね……ヴィクトリア……》

《誰か》の音が、辺りに響いたような気がした。

その頃、時は少し遡る……セルヴィアとサクラは、客室間にて《ある資料》を閲覧しようとしていた。

「……これは……？」

サクラは、セルヴィアが差し出した紙の束に目を見開く。

「これはね……聖七騎士団の資料よ」

「っ！？……これが？……でも……なんで私に……」

サクラは首を傾げた。

「……ええ……この資料に書かれた……聖七騎士団のメンバーの名前の中に……《気になるファミリーネーム》を持つナイトが見つかったから」

セルヴィアがサクラに資料を押し付ける……まるで……早く見ろ、とでもいいだけに。

サクラは疑問を残したまま、資料の聖七騎士団のメンバー表に目を通す……序列ナンバーが1から進み……やがて……《4》で止まる。

「え……？？」

サクラは《4》の数字が描かれた所で視線のスライドを止める。

「どうしたの？」

セルヴィアがサクラを鋭い視線で睨む。

まるで……何かを待っているように。

「これ……どういう……こと……？」

サクラが震える指で、紙に書かれた《レイドル・ファルバレン》という名前を指す。

「それが？」

「うそ……う……そ……」

サクラの目から突然涙が溢れ出す。

……そんな……ありえない……だってあの人は……もういない……筈……だって……あの人は……行方不明に……

サクラの涙が紙を濡らす。

「どうして……レイドル……兄さん……の名前が……ここに……」

サクラの言葉にセルヴィアが思い切り反応する。

「やっぱり……この《ファルバレン》ってファミリーネーム……あなたの家の者なのね……」

セルヴィアがため息をつく。

「うそ……うそ……」

「……はなして貰える？……あなたの家の……秘密を」
セルヴィアはサクラを促す。

サクラは暫くうな垂れていたが、やがて顔を上げて、話し出した。

「私の家系である《ファルバレン家》は……戦闘能力が非常に高い《剣の一族》だったの……家では強さこそが全て……強さがない者は……すぐに落ちこぼれの烙印を押される……そんな所だった……」

サクラは生まれながらにして、非常に高い戦闘能力を持って生まれた……学業も……戦いでも……サクラは誰にも負けなかった。

サクラは何時しか《最強の剣使い》としても、期待されるようになった。

《サクラ……お前はファルバレン家の全てを担う……当主になるのだぞ》

よく、その当時の当主であった《マキエルス・ファルバレン》から言われたのを良く覚えている。

だが、サクラには気になっている事があった……それは兄の事だ。

兄、レイドル・ファルバレンは、ファルバレン家の生まれにも関わらず……戦闘能力に恵まれず、落ちこぼれとして扱われた。

《サクラ、アレは最早お前の兄ではない・・・下僕として扱え》

サクラは無論そんな扱いはしなかった・・・だが、兄はある日逃亡した・・・ファルバレン家の扱いに耐え切れなかったのだろう・・・と、そう感じた。

サクラは探した・・・探して探して・・・漸く、ある街で兄の姿を見つけた。

「お兄ちゃん！！・・・待つてよ・・・お兄ちゃん！！！」

《・・・さよなら・・・サクラ》

兄は寂しげに微笑むと、姿を消した・・・それが、サクラが兄と最後に会った日だった。

それ以来というもの・・・兄の行方は全く掴めず、結局・・・サクラは搜索を断念した。

「それ以来・・・兄さんとは会わないと・・・思ってた・・・てつきり死んだものと・・・思ってた・・・」

サクラは嗚咽を交えながら呟く。

セルヴィアは黙って聞き入っている。

「けど・・・」

「あなたのお兄さんの名前が・・・聖七騎士団のメンバーにあるという事は・・・」

セルヴィアが謎をとくような口調で話す。

「うん・・・生きていたんだと・・・思う・・・そして目的は・・・」

サクラがそこで黙り込む。

「自分を蔑ろに扱った……あなたの家に復讐する為」
セルヴィアが呟いた。

……
……
その場を沈黙が包んだ……

そして……アリスは。

「……そんな……私って……私って……」

アリスは魔境の庭園で崩れ落ちた。

あまりにも……ひどい真実だったから、あまりにも耐えられない程の《痛み》が襲い掛かったから。

《けれど……レオンはあなたを選んだ……《私》ではなく……
《あなた》をね……アリス……あなたは……どんな選択をする
の？》

アリスの声が魔境の庭園に響いた。

「……私は……」

アリスが答えを導き出すのには……かなりの時間が必要だった。

そしてレオンは。

「……なに？」

漆黒の世界で、ジャックに向かって尋ねた。

「言った筈だ……レオン……お前を私が鍛えるとき……私と
レオンの事について話すのは……レオン……お前が《真》に目
覚めてからだ」

ジャックはそう告げると、漆黒の剣を構えた。

バルムンク

「はあっ!!」

レオンは叫びながら剣を振り下ろす。

ヒュオッ!

空を引き裂きながら剣がジャックに迫る。

だがジャックは微笑んだまま。

ガアアアアアン!!

漆黒の剣を横に構えて受け止める。

ぎりぎりとして剣を合わせて鏢迫り合いを続けながら、ジャックとレオンは至近距離で睨み合っていた。

「……ふふ……ははは……私が怖いかな？」

ジャックは優しく微笑む、さながら自分の子供の帰りを待っていた母親の様に。

「……なんだ……お前の目的は何だ、俺を殺したければ本気で掛かって来いよ、なのに……なんで俺を鍛えようだなんて言いやがるんだ？」

レオンは思い切りジャックを睨む。

「殺す?……私がお前を?……違うな、私はレオンの為にここに……最も私は、ミールフィリスの様に役目を与えられているわけではないがね」
ジャックは悲しそうに微笑んだ。

「……ミールフィスが……役目……?」

レオンが眉を顰める。

「そう……あいつは……役目を与えられていただけだ……所詮は使

いきりの魂でしかない、だが私は違う。私は《アリス》から役目を与えられた存在ではないからな・・・」

ジャックがレオンの瞳を覗き込む。

「っ!！」

ギアアアン!!

二人の間に火花が散り、一度お互いに距離をとる。

「・・・お前・・・何者なんだ・・・どうして俺の事を・・・姉さんの事を知っているんだ・・・？」

レオンが呟く。

「・・・言つた筈だ、《私はお前であり、お前は私》だとな・・・所詮私は・・・いや、この話はまだすべきではないな、さあレオン・・・私と戦え、それが・・・私とお前の物語の幕開けを告げるのだから」

ジャックは妖艶に微笑んだ。

一方でアリスは・・・

《分かつたでしょう?・・・あなたは・・・私が生み出した人形・・・けれど、レオンはあなたを選んだの・・・あなたを《救う》道をね》

《結晶の中にある《アリス》が、アリスに向かって話し掛ける。

「・・・私は・・・人間じゃなかったんだ・・・」

アリスが俯きながら呟く。

《・・・ええ、そうよ・・・けれど・・・あなたは《心》を手に入れて人間となった・・・本来起こる筈の無い《奇跡》が・・・起きた・・・いいえ、起きてしまった・・・あなたがもしも・・・レオンと出会わずにいって・・・心を手にする事がなければ・・・あなたはあの森ですつと眠つたままだった・・・そして時が満ちればあなたは《神魔》への生贄と

して喰われて、世界は再び《仮初の平和》を手に入れていた．．けれどあなたが変わってしまった．．狂ってしまった．．けれど．それは奇跡といわれる物．．あなたとレオンが出会った事そのものが．．《大いなる奇跡》だという事を理解なさい》
《アリス》は諭すように告げる。

「．．．．私．．．レオン君と一緒に居たい．．それだけが私の望む《願い》だから．．．もしもシャイターンが世界を壊そうと．．喰らおうとしているのなら．．私はそれを止める．．」

アリスが立ち上がり、結晶の中に閉じ込められた《哀れな主》を見つめる。

《そう．．．．ならば進みなさい．．あなたが納得できるまで．．．例えそれが．．世界にどんな変革を齎す物だとしても．．でも．．あなたには少し話を聞いてもらわなければ．．この世界の本当の秘密を．．．》

《アリス》の声が響く。

「．．．．世界の．．．秘密？」

アリスが首を傾げる。

《．．．そう．．．ねえアリス．．．この世界は．．．あなた達が見てるこの星鏡世界は．．．《本当の姿》ではないの》

．．．．．？

アリスが眉を顰める。

《．．．．この世界は全て．．．《私という一人人が想像した理想の世界》なのよ．．．全てが偽りであり全てが真実．．．さあアリス、あなたには教えるわ．．．この世界の全てが．．．》

「・・・偽りで染められた世界だという事を」
漆黒の世界でジャックがレオンに囁く。

「・・・偽り？」

レオンが眉を顰める。

「そつだ・・・この世界は全てが嘘・・・だから真実を教えなければ・・・誰もが知らない世界の真の姿を・・・レオン、この世界の成り立ちについて疑問を抱かないか？」
ジャックは剣を消して両手を広げる。

「・・・成り立ち・・・だと？」

「そつだ・・・お前が見たアルビオン・・・あの世界に起きた出来事と・・・私たちが知っている《創造の伝説》との違いが・・・あまりにも大きいこと・・・簡単に言えば《エクストラ・クロニクル》に載っている神話の全てが・・・偽りだと言う事を」

「・・・何を・・・言ってるんだ・・・エクストラ・クロニクルが・・・」

レオンは思わず絶句する。

「お前も読んだ事くらいはあるだろう？・・・この世界の闇と光が対立して・・・それを見た神がこの世界から異端分子として排除した・・・光と闇の伝説を」

ジャックがレオンを見つめる。

・・・

レオンはそれを見た事があった・・・アリスが学院に入ったばかりの頃・・・アリスの系統が光だと分かったアリシアに、エクストラ・クロニクルのコピーを見せてもらっていた。

「それが・・・どうしたんだよ・・・？」

「・・・レオン・・・この世界には・・・光と闇という系統は・・・存在していないのだよ」
ジャックは告げた。

「・・・え・・・？」
レオンは思わず・・・立ち尽くした。

「え・・・？」

魔境の庭園でアリスは呟いた。

《・・・この世界に・・・光と闇は存在しない・・・そんな系統は・・・存在しない・・・神はそんな系統を作ったりはしていない》
魔境の庭園に、無慈悲なアリスの声が響いた。

その頃、戦場の最前線で指揮をとっていたアリウスは、少し高い丘の上に立って戦場の流れを見ていた。

今も、アリウスの立っている丘の下では戦いが繰り返されている。一秒ごとに人が死ぬ、死んで死んで・・・それが繰り返される。

と、背後で絶叫があがった。

「アリウス王！！覚悟おおおお！！！」

相手の・・・ルシアーデ王国の兵士が剣を振り上げて、アリウスの背中へと切りかかってきたのだ。

だが、その剣が届く事は無い・・・何故ならもう終わっているから。
ゴオオオオオアアアアアツ！！！！

アリウスと兵士の間には炎の壁が顕現、反応しきれずにあいての兵士が炎の壁に突っ込み、そのまま全身を焼かれる。

「うっっ．．．うおおおおああああつ！！！！？」
兵士が絶叫する。

「た．．．助けっ！！！！．．．うがああああつ！！！！」
そして兵士が頭を抱えて、暴れ続け．．．全てが消え去る。

パキン．．．．．

やがてガラスが砕けるように、炎の壁も消え去る。

アリウスは一步も動かない、振り返りもしない。

ただ、前を見る．．．進まなければならぬから．．．たとえ自分が狂おうとも。

「そうだ．．．進まなければ．．．ならない．．．例え何を犠牲にしても．．．例え俺がこの心の痛みに耐え切れずに．．．狂ってしまった」

アリウスは胸を抑えこむ。

人は争わなければ生きていけないから、それが世界の《ルール》だから。

そして．．．．．

ズ．．．．．ン！！！！

辺りを圧倒的な魔力が満たす。

「っ！」

アリウスが思わず息を詰まらせる。

「．．．．．何が．．．来る」

アリウスは前方を睨む、敵軍の溢れた前方を睨む。

そして《一人の男》が、軍の真ん中を歩いてくる。

その男が進もうとする道を、敵軍の兵士たちは開ける、身を引いて

頭を下げる。

核が違うから、自分たちとは違うから。

そしてその男は軍の最前線へとやってきた。

「……久しぶりです……アリウス王」

赤い・血よりも赤い・《紅色》の光に包まれたエクセリーゼが告げた。

「……アーフェリオン王の騎士……確か、エクセリーゼだったな」

アリウスが見下すように告げる。

「はい、名を覚えていただけるとは……光栄至極……なればこそ・アリウス王、あなたをこれ以上……先には行かせない」

エクセリーゼはそう言って、腰に配刀されている剣を抜き放つ。

キイイイイイイイイン……

その剣は紅く輝いている、そしてその剣からは膨大な魔力があふれ出している。

「その剣……」

アリウスは眉を顰める。

二人の実質的な距離は200メートル程かけ離れているのにも関わらず、二人の声はお互いに届いていた。

「これ以上……我が主であるアーフェリオン王の元には行かせない……」

エクセリーゼはそう告げると、思いきり体を前に倒す……そして踏み込む。

ダアアアアン！！

エクセリーゼがたった一步踏み込んだだけで、遠く離れたアリウスの元へと一直線に飛んでくる。

「……………」

アリウスは掌に炎の剣を顕現させ、向かい打つ。

「ッ……………」

エクセリーゼが小さく呼気を吐き出して、紅く発行する剣を振りかぶる。

ガアアアアアアンツ！！！！

崖の先端でアリウスとエクセリーゼが激突。

ピシ……………バゴオオオオオオン！！！！

二人のぶつかり合いの衝撃波が崖を襲い、一気に崩壊する。

「ちっ！！」

アリウスは跳躍し、空中からエクセリーゼを睨む。

衝撃波はそのまま広がり続け、兵士たちをなぎ払っていく。

その中でエクセリーゼは空中の遙か高くにいるアリウスを一瞥すると、思い切り跳躍してくる。

さらに崩れる崖の岩を使って飛び移りながらアリウスへと向かってくる。

「……………崩れる崖の岩の瓦礫を使って上がってくるのか……………たいした運動能力だ」

アリウスは苦笑すると、一気に掌へと炎の魔力を集中、そして放つ。バゴオオオオオオゴオオオアアツツ！！！！

劫炎とも言つべき圧倒的な火力を秘めた炎がエクセリーゼを呑みこもうとする。

だがエクセリーゼはその炎の柱を睨みつけると、剣を目の前に翳した。

「・・・この《幻想》を切り裂け・・・《バルムンク》」

エクセリーゼの命令と共に剣が更に輝き、それをエクセリーゼが振る。

ヒュウウウオオオツ！！

空を引き裂きながら剣が炎を・・・《削り取る》
バキイイイイインツ！！！！

炎が全て砕け散った。

「なっ・・・！！？」

空中のアリウスが絶句、地上へと落下を始める。

「・・・なんだ・・・アレは・・・魔力を切り裂いた？」

「レオン君の剣と同じ類か？・・・いやだがアレは・・・」

アリウスは少し考えたが、いつまでもこうしては居られない。

地上へと落下を始めているため、あと少しでエクセリーゼがいる地面へと到着してしまう。

一方のエクセリーゼは落下してくるアリウスを睨み、剣を構える。

「ふっ！！」

エクセリーゼが腰と肘を思い切り捻る。

体の回転と腕力の全てを乗せた一撃だ。

「ちっ・・・はあっ！！」

アリウスはすぐさま炎剣を顕現させると、落下の余力を利用して剣を思い切り振り下ろす。

二人は接近し、そして激突。

ガキイイイイイイイイン……！！！！
赤と紅が激突、衝撃波が発生し、辺りを撫でる。

周りの兵士たちはその魔力に恐怖し、頭を抱えて蹲る。

『はあああああ！！』

二人で同じように叫びながらぶつかり合う。

そして剣を打ち合わせ、削り合わせ、激突しあう。

その度に地面が砕け、大気が悲鳴をあげる。

ガン・ギアン・ゴドン！！！！

二人の激しい剣戟は、誰も追いつく事ができぬ極地にある。

アリウスは強い。

エクセリーゼは強い。

二人の剣筋はもはや音速を越え、ぶつかり合う。

「はああああ！！」

「ぶつ！！」

炎の剣と紅い剣がぶつかり合う。

シツ……ツ……ツツタアアアツン！！！！

二人の剣が空気を震わせ、衝撃波となり辺りを巻き込む。

『つ！！！！』

アリウスとエクセリーゼの姿が同時に& amp; #25620…き
消えた瞬間、複数個所で同時に火花だけが散る。

二人は高速で移動しながら剣を交え続ける。

ガガン・ギアン！！！！

「く……………」

アリウスは高速の剣戟の中、思わず呻いた。

「……炎剣がもたない……………」

そう、アリウスの炎剣は先ほどから何度も折れているのだ。

エクセリーゼの紅剣が触れるたびに、剣が弱まり、五回ほど合わせれば砕け散ってしまう。

何とか急速で炎を顕現させてはいるものの、いずれは追い付かなくなる。

「…………俺が……追い詰められる…………か」

アリウスは苦笑し、思いきり踏み込む。

ガアアアアアアアン！！！！

アリウスがエクセリーゼと鏝迫り合いを始める。

「どうしました？……あなたの力はこんな物では無い筈だ、最強のナイトとして、アーフェリオン王と並び証されるあなたが、この程度なわけがない」

エクセリーゼは微笑む。

「それとも……私の力がどのような物か分かりませんか？」

ギアン！！！！

二人は思い切り弾かれて、お互いに吹き飛ばす。

「……そうだな……できれば説明してほしいな……お前の剣……宝具でも無ければアーティファクトでもない……その力は何だ？」
アリウスが話し掛ける。

「…………いいでしょう……このままでは埒が明かない……私のこの剣は《精霊殺しの魔剣・バルムンク》……世界に満ちる

《幻想・魔力》・・・全ての霊的な全てを断ち切る魔のツルギ・・・
あなたならば、これがどれだけ危険な力か分かるでしょう」
エクセリーゼは剣を頭上に掲げる。

キイイイイイ・・・

剣が応える様に煌く。

「・・・紅い・・・剣・・・」

アリウスはその剣に《恐怖》を覚える。

・・・確かに・・・恐ろしいまでの強大な力だ・・・だが。

「止まらない・・・お前たちが何故戦争を起こしたかったかは知らないが・・・ミルフエリーナに害をなすなら・・・切り捨てるだけだ」

アリウスは呟く。

「そう・・・それでいい・・・これで私も本気を出せる・・・」

エクセリーゼが剣を突き出す。

「・・・」

アリウスが目を閉じ宝具顕現を唱え、宝具を顕現させる。

バゴオオオオオオオオオオオオ！！

圧倒的な魔力と共に、ジーク・フリートが顕現する。

ガシャン・・・

「さあ・・・来い」

アリウスは剣を構える。

「・・・はああああああああ・・・」

エクセリーゼは低く叫び始める。

キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・

それと同時に紅い光が辺りを照らし、満ち始める。

そこでアリウスが目を見開いた。

「・・・なんだ・・・この力は・・・」

異常だ、放たれている魔力量かもはや・・・人間の領域に無い。

そして・・・バルムンクの刀身が《溶解始める》。

ドロドロと紅い液体になり始める。

「け・・・剣が・・・液体に・・・お前・・・一体何を・・・」

と、アリウスの言葉を遮って、エクセリーゼの《咆哮》が響いた。

《うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！》

エクセリーゼは空に向かって叫ぶ。

それと同時に魔力も上昇し始める。

バルムンクが溶解、エクセリーゼの体内に吸収され始める。

紅い液体がエクセリーゼを呑み込む。

そして。

ギユウウウウウオオオオオオオオオオ！！！！

紅い光が空へと伸びる。

「くう・・・」

アリウスは思わず腕を目前に翳す。

・・・なんだ・・・何が起きて・・・

そしてアリウスが目を開けたその前には。

「お・・・お前・・・」

アリウスが絶句する。

目の前に居たのは、体が真っ赤に染まり、発行を続けるエクセリー

ぜだった。

《・・・どうだ？・・・これが私のバルムンクが持つ能力《魔融合・マジック・スレイヴ》・・・その力は私の肉体にバルムンクの持つ力を移動させ、その能力を何倍にも・・・何十倍にも引き上げる・・・さあ・・・これでも私と戦いきれるか？・・・因みに、この姿を見せたのは・・・アリウス王・・・あなたが始めてだ》
エクセリーゼは片手を此方へと向ける。

「っ！！！！！」

アリウスは咄嗟に横へとステップを踏む。
分からない・・・分からないが悪寒がした・・・そうしなければ・・・命を落とす・・・と。

エクセリーゼはそのまま片手を振り下ろした。

「っ!？」

ブシャアアアアン！！！！

「が・・・う・・・はっ・・・」

アリウスの右肩が深く抉られて、血が噴き出す。

ふらりとよろめくアリウス。

「・・・なんだ・・・い・・・今の・・・は・・・？」

《何も・・・ただ・・・今の私の力は・・・人間の領域に無い・・・ただそれだけの話ですよ》
エクセリーゼは笑う。

「・・・どういう・・・意味・・・だ？」

アリウスは痛みを耐えながら眉を顰める。

《・・・いいでしょう・・・教えます・・・今の私の力は・・・

人の力を超えた・・・神の力・・・今の私には《制限》がない・・・そして《

エクセリーゼが片手をス・・・と驚いた瞬間、紅い剣が虚空に現れる。それも複数、十本ほどの紅い剣が宙に浮いている。

「・・・まさか・・・さっきの剣か・・・」
アリウスは目を見開く。

《・・・そう・・・今の私には制限が無い・・・そして私の《剣の力》においては・・・今現在・・・最強だ》
アリウスが片手を此方へと再び向ける。

《さあ・・・受けてみてください・・・私の《剣の神》としての力を》

—————次回予告—————

戦いが進むに連れて・・・聖七騎士団との邂逅が進むにつれて、世界の秘密が明らかになっていく。

レオンとアリスが向かう先にある物は一体・・・？

そしてアリウスが遂に炎皇としての力を振るう！！

「これが・・・炎皇の力・・・《神炎天乱・フレイム・カステイリオーネ》・・・行くぞ」

そして、セルヴィアとサクラモルシアード王国へと向かう事に決め

る。

「待っていて……兄さん……」

次回、炎皇覚醒、お楽しみに。

炎皇覚醒

だが……

「いや……この程度ではないさ」

アリウスの声が響く。

《っ！！》

エクセリーゼはすぐさま後ろへと跳躍する。

アリウスがよろめきながら立ち上がる。

「……封印・解除……魔力出力限界の規定を強制解除・
ミルフエリーナの刻印より抜粋……封印式……開呪」
アリウスが告げた瞬間……

ズ……ン！！！！

辺りに魔力が満ち始める。

赤い……エクセリーゼの《紅》ではなく《赤》の魔力が満ちる。

そしてそれはアリウスの体から発せられる物だった。

《……なんだ……この魔力は……まるで今までとは……
》

エクセリーゼは絶句し、質問を投げかける。

「俺の魔力は大きすぎるために……常に封印されているのさ……
王室の馬鹿な老人共の所為でだがな」

アリウスは不適に笑うと、体を下げて戦闘態勢に入る。

「そして封印を《開呪》した俺の力は……今までの……
20倍だ」

アリウスが笑い、踏み込む。

《…来るか！？》

エクセリーゼは意識を集中させる……

トン……

《っ！？》

エクセリーゼの真横にアリウスの姿が現れる。

……馬鹿な……かなりの距離があつた筈だ……それを一瞬で……？

「……」

アリウスは神速ともいえる速さで剣を一閃。

バアアアアン！！！！

《が……あ……》

エクセリーゼの腹部が切り裂かれる。

《…馬鹿…な…私に…気づかせずに……これ程の…》

エクセリーゼの体が崩れ落ちる。

地面にエクセリーゼの血液が大量に漏れ出し、地面を染め上げる。

「……終わつたか？……いや、これだけではない筈だ……そうだろうか？」

アリウスは思い切り距離をとる。

《……ああ、その通りだ》

やがてエクセリーゼの声が響き、地面に伏していた筈のエクセリーゼが突然立ち上がる。

それは重力に逆らうようなゆつたりとした動作だった。

《ふふ……ははは……これが《あなた》の本当の力か……ははは……そう、私はこれ待っていた……だからこそ……

全力で行けるのだ……行くぞアリウス王……私の宝具をもって……
あなたを倒す》

そう……エクセリーゼはこれ待っていた……アリウスの全力と戦う事……アーフェリオンの元で戦い……そして死ぬ事……それがエクセリーゼの望み。

エクセリーゼは両手を突き合わせ、宝具顕現を唱える。

《我が元に顕現せよ……幾百の剣戟を齎す聖剣よ……数多を切り裂き……我が王たるその証を……この世に突き立てよ……獄燕の
アキレウス
羅刹剣！》

エクセリーゼが両手を離すと、両掌の間に一振りの騎士剣が顕現した。

その剣は異様だった……全てが紅い……それは恰も血の湖に
漬け続けたかの様な紅。

エクセリーゼはソレを構える。

「なんとという邪気……まるで呪詛の塊だな」
アリウスは剣を睨む。

「人の憎しみや恨み……そういった物が凝縮されている……
あれは宝具なのか？……それとも……」
アリウスも剣を構える。

そして二人は同時に踏み込んだ。
ダガン！！！！

地面に足跡が穿たれ、二人は突き進む。

《おおおおお！！》

エクセリーゼは剣を振りかぶり、ジーク・フリートに叩きつける。

「ここでは負けられない!!」
アリウスが叫んだ。

ガガガン!!!

火花が散り、お互いに距離をとる。

「俺は進むぞ・・・例えその先に破滅が待っているようにも」
アリウスの決意が・・・完全に決まる。

その時。

ドクン・・・・・・・・

「っ!？」

ドクン・・・・・・・・

ドクン・・・・・・・・ドクン・・・

「これ・・・・・・・・は」

アリウスは自分の体を見つめる。

体が・・・・・・・・赤い光に包まれている・・・そして。

「背中が・・・・・・・・熱い」

アリウスの背中には《炎皇》としての紋章が刻まれている。

その光景をエクセリーゼは黙って見つめていた。

《・・・・・・・・》

ただ黙って宝具を構える。

「・・・・・・・・そうか・・・そういう事か・・・これが炎皇としての
力か・・・・・・・・」

アリウスが告げた瞬間、アリウスの体を炎が包んだ。

そして炎の明かりが辺りに放たれる。

キイイイイイイイアアアアアアアアアアアアアア!!!

圧倒的な劫火が空を・地面を・世界を染め上げる。

《ぐ・・・・・・・・》

エクセリーゼは思わず目を塞ぐ。

炎がアリウスの周りを渦巻いており、近づく事すら許さない。
やがて炎がその火力を抑え始め・・・やがて消える。

《な・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・その姿は》

エクセリーゼは思わず目を見開いてアリウスを見る。

アリウスは《赤い騎士甲冑》に包まれて立っていた。

その騎士甲冑は赤い文様が走っており、所々に炎が燃えている。
そう・・・言葉で表すなら・・・

《・・・・・・・・ふふ・・灼熱の騎士・・・・というわけか？》

エクセリーゼは苦笑する。

エクセリーゼからはアリウスの表情は見えない。

理由は顔を甲冑の冑が覆っているからだ。

「・・・・・・・・」

アリウスは内心で驚いていた。

・・・・・・・・これが・・・・炎皇としての真の姿・・・・・・・・

アリウスはエクセリーゼを睨み、ジーク・フリートを構えなおす。

「・・・・・・・・行くぞ」

アリウスが告げたのはそこまでだった。

《・・・・・・・・》

エクセリーゼもまた、剣を構えた。

「なっ……」
レオンが絶句する。

「……まさか……本当に分かるのか……俺の考えが……動きが……」

「お前……なんで……」
レオンはジャックを見つめる。

「……本当に覚えていないのか……？……この私をジャックは寂しそうにレオンを見つめてくる。」

「……何を……言って……」

「なら、もう少し話を進めよう……先ほどの……光と闇の伝説の話だね」

レオンを遮って、ジャックは呟く。

「!!」

レオンは固まった。

先ほどまでは話を行っていたのだが、ジャックが《光と闇は存在してない》と言った直後、急に斬りかかって来たのだ。

「本当はこの話も……レオンに私を思い出させる為に話したことなのだが……思い出せないのなら……もう少し進めようか、世界の真実を」

ジャックは再び立ち止まり、レオンを見る。

「……」

レオンもまたジャックを睨む。

そしてレオンは遂に真実を知る事になる……世界の真の物語を。

その頃、アリスは。

「そん．．．な．．．じゃあ．．．私とレオン君は．．．《本来存在してはならない系統》を使っていたの．．．？」
アリスは呆然と呟く。

《その通り．．．光と闇とは．．．神が生み出した系統ではない、本来存在して良い系統ですらない．．．光と闇なんて．．．人間が都合のいい様に《シャイターの力を改変しただけの系統》なのだから》

．．．．．

アリスは目を見開き続ける。

《．．．．．あなたは行っていないから分からないかも知れないけれど．．．世界には原初となる聖天王国アルビオンという国があったのよ．．．》

《アリス》の言葉にアリスが絶句した。

「聞いた事がある？．．．ううん．．．どこかでその単語を．．．」

アリスは考える。

何処かで聞いた事があるような．．．

《けれどその国は《影》によって滅ぼされてしまうの．．．》

場所は移りレオンとジャックの世界。

「そしてレオン．．．お前が行ったあのアルビオンは．．．《偽りのアルビオン》なのだよ」
ジャックが告げた。

「……何……？」

レオンは思わず呟いた。

……偽り……？

「分からないだろうな、私の告げた言葉の意味が……だが、それは当たり前的事だ・私とて・これを言うのはかなり辛いものがある……だがお前は知らなければならぬ……だからこそレオン……教えよう……あのアルビオンは……本来一度滅ぼされている」

ジャックの言葉に、レオンの頭は真っ白になった。

《昔……そう……あなたやレオンが生まれる前……世界が創られて間もない頃……聖天王国アルビオンという国が生まれたの……その国は繁栄を続け、遂には世界を統べるほどの国となった……けれど……世界は《影》の力によって滅ぼされてしまうの……それはあなたに話したわよね？》

《アリス》の言葉にアリスは頷く。

《そしてここからが偽りの始まり……エクストラ・クロニクルの原典には……《影の力世界を覆い、終焉へ続く始まりの鐘が鳴り響く……その時、アルビオンを治めし二人の王と王妃が立ち上がる……光と闇を宿して……》……これがエクストラ・クロニクルに記された伝説……けど違う……光と闇は最初から人間が宿していた系統じゃない……アルビオンの歴史はそこで一度終わりを告げた……》

《アリス》の声が響く。

「そしてアルビオンの歴史はそこで終わったはずなのだ．．．しかしそこで矛盾が起きる．．．．．レオン．．．《お前が行ったアルビオン》は一体なんだ？」
ジャックは言い放った。

「．．．．．なにが．．．．．言いたい．．．」
レオンは呆然と呟いた。

「建国されて直ぐに滅びたアルビオン．．．だが．．．レオンが知るアルビオンは．．．さらにその後存在していた．．．分かりやすく言えば．．．《一度滅びた筈の王国が何故存在していた？》．．．そして．．．レオンの知るアルビオン王国には《影》などという単語があつたか？」

ジャックに言われてレオンは目を見開いた。

「そう．．．そんな言葉は誰も言っていないかつただろう？．．．何故なら知らなかったからだ．．．あそこにいたミールフィリスも．．．レオン・シクイールも．．．誰も知らなかったのだよ．．．影の系統など．．．」
ジャックはただ無感情に呟く。

「つまり．．．何だよ．．．俺が行ったあのアルビオンは．．．」

「レオンが知るアルビオンは．．．《原初》ではなく．．．《第二の原初》なのだ．．．アルビオン王国は一度滅びた．．．だが何故滅びた筈の王国が未だに存在していたのか．．．ソレこそが世界の矛盾点．．．その真実を知るのは．．．《アリス》と《私》だけだ」

《原初であつたアルビオンは一度滅びた．．．影によつて滅ぼされた．．．けれどね．．．人間というのは醜いよ．．．強大な力があればそれを手に入れたいと考へてしまふ．．．それこそが心の闇だから．．．そして一度滅ぼされたアルビオンにも生き残りがいたの．．．その者達は影の力を元に新たな力を生み出したの．．．それこそが．．．》

「光と．．．闇．．．そんな．．．そんな事つて．．．」
アリスは思わず口を押さえる。

《そう．．．光と闇とは神が生み出した系統ではないの．．．光と闇は人間が生み出した《不完全な系統》であり《神魔の因子を持つ系統》．．．それこそが光と闇の正体．．．太古の人々は影の力を元に二つの系統を生み出した．．．そしてその力を使つて．．．一度滅びたアルビオンを創り上げた．．．神の力に頼らず．．．人の力だけで》

《アリス》の声が魔境の庭園に響き渡る。

「それじゃあ．．．」
《ええ．．．そして《第二のアルビオン》を創りだした彼らは．．．影の力を隠蔽した．．．誰にも知られないように．．．光と闇が．．．神魔の力を元に創り上げられた《危険な系統》である事を隠すために．．．》

「そして光と闇は神聖な系統として祀り上げられる事になる．．．それを危険な系統とは知らずにな」
ジャックは呟く。

「待てよ……それじゃあ光と闇を宿した人間ってのは……」
「そう……光と闇を宿した人間とは《シャイターンに成り得る因子を持つ存在》という事にもなる……そしてソレを宿した人間が二人なのもそれが原因だ……元々光と闇は片方ずつで一人だけという制約があったからこそ、そして……太古の人々は……その二つの系統を生み出してしまった罪悪感と共に……希望も抱いていた……この二つの系統があれば……シャイターンの力にも対抗できると考えた」
ジャックはレオンを見つめる。

「……ちよつと待てよ……でもシャイターンはどうやって封印されたんだ？……例え国を創り上げても、シャイターンが居たんじゃまた滅ぼされるだけだろ？」
レオンは尋ねた。

そう、レオンがアリスから聞いた話では、《究極封印式》と呼ばれる物でシャイターンが封印されたと聞いていた。

「その通り……シャイターンは封印されたのはされたが、人間如きの力では……神魔の力を抑えるなど不可能だ……だが、そこで一人の男が立ち上がった……その男はペンタゴンの5系統と光と闇を使つて、その封印式を組み上げ……封印した……そしてその男はこう呼ばれた……《聖天の宝具使い》とな」
ジャックはその単語を懐かしむように告げる。

「……待てよ……その男は何者なんだ……？……人間じゃないのか？」
レオンが尋ねる。

「ふふ……レオン……その答えは《お前の中にある》」
ジャックは微笑んだ。

《それこそが世界の真実・・・そして私の役割は・・・《聖天の宝具使い》が生み出したこの封印を、支えるために選ばれた《人柱》なの・・・分かってくれた？・・・この世界の真実を》

《アリス》の声音が柔らかいものになる。

「人柱・・・だからあなたはその結晶の中に・・・」

アリスは目を見開く。

《ええ・・・私も選ばれた時は驚いたわ・・・世界の真実を《教えられた時》は絶望したもの・・・そうして私は光と闇の二つを《あるお方》から授かり、それを・・・レオンとアリス・・・あなた達二人に授けた・・・それが真実・・・あなたはともかくとしても・・・レオンを巻き込むのはかなり辛かった・・・けれど・・・信じて良かったと思ってる・・・あなたとレオンが・・・こうして世界を救うために戦ってくれているから・・・これで漸く・・・《世界の歴史改変》は終了になる・・・これで後はあなた達がここにたどり着けば・・・全てが終わる》

《アリス》は呟く。

「それこそが真実・・・お前の姉であるアリスは、その人柱に選ばれたために・・・魔境の庭園に閉じ込められた・・・分かるだろう？・・・そしてアリスはお前と《アリス・リオ・テレーネ》にそれぞれ闇と光を授け・・・眠りについた・・・お前の記憶が無いのは、アリスが魔境の庭園の力を使って・・・世界改変を行ったためだろう・・・お前の中に《アリスが戦争でレオンを庇って命を落とす》という作

り物の記憶を刷り込ませた……だからお前の頭は混乱し、《擬似的な記憶喪失》という現象を生んだ……だが、それも終わる……私がここで封じられた記憶を元に戻す……そうすればお前は……《私の真の姿》を受け入れてくれるようになる……さあ……行こう……レオン」

ジャックが歩き出し、レオンの目の前に現れる。

「っ!!」

レオン驚いたが、不思議と恐怖は感じなかった。

そしてジャックはそれに微笑んで、掌をレオンの額に当てる。

「さあ……忘れら去られた忘却の記憶……その全てを……お前は取り戻す……その時こそ……私はお前と本気で戦う事ができるようになる」

ジャックのその言葉を最後に、レオンは意識を失った。

その頃、アリウスは。

「……これが……炎皇の力が……」

アリウスは呟く。

……神炎天乱・フレイム・カステイリオーネ……アリウスの頭に、突然単語が浮かんだ。

「……それが……この力の名前か……」

アリウスは己の体を見下ろす。

《はは……凄まじい魔力だ……さあ……これからが本番だ……行くぞ……アリウス王!!!》

遂に二人の力がぶつかり合う。

―――次回予告―――

遂に世界の真実へと到ったレオンとアリス、そしてアリスが戦線に加わる。

アリウスは己の全力をもってエクセリーゼとぶつかり合う。

「うあああああああつ！！??？」

レオンは叫ぶ。

「そうだレオン・・・お前にはその記憶を取り戻してもらおう必要がある・・・私が語った中にはお前の真実はまぎれていない・・・だが、その記憶こそがお前の真実へと繋がる扉だ」

レオンはジャックの力によって自分の過去を垣間見る。

そこにあるのは驚きの真実。

「そう・・・か・・・ジャック・・・お前は・・・」

次回、ジャック、お楽しみに

ジャック

《おおおおおっ！！！！》

エクセリーゼが咆哮を放ちながらアリウスに迫る。

「・・・・・・・・」

対してアリウスは黙ったまま、迫るエクセリーゼを見つめ、やがて剣を横に翳した。

ガアアアアアアン！！！！

圧倒的な速度で突撃したエクセリーゼだが、軽い調子でアリウスに受け止められた。

《はは・・は、こんなにもあっさりと私の攻撃を受けましたか・・
》

ギリギリ・・・・・・・・

お互いに鏝迫り合いをしながら睨む。

「お前の攻撃はこの程度ではないだろうか？・・まさか全力の私とは戦えないと言わないか？」

《ええ、当たり前です・・やはりあなたは王だ、それでこそ私が全力を出す相手にふさわしい》

エクセリーゼはニヤリと笑うと、魔力放出量をさらに押し上げる。

紅色の魔力が辺りを照らす。

キイイイイイイ・・・・・・・・

やがて甲高い音と共に、アリウスの宝具から激しい火花が散り始める。

しかしアリウス自身は動かない。

「・・・成る程な・・・確かに聖七騎士団のメンバーなだけはある」
アリウスの台詞と共にお互いがお互いの宝具に力を込める。

ギギギアアン!!!

思い切り火花が散り、お互いに吹き飛ばす。

アリウスは地面の上を吹き飛びながら思った。

「・・・アイツに今から追撃をかける事が出来れば・・・」
と、その時。

ギアアアアン・・・・・・・・

「っ！」

アリウスは驚き背後を見る。

何と、赤い炎の騎士甲冑の背中部分に炎の赤い翼が顕現している。

「これなら・・・・・・・・」

アリウスが微笑み、翼をはためかせる。

ガクン！という様な擬音語が聞こえてきそうな程、後退していた体を停止させて真逆の方向へと突き進む。

圧倒的な慣性が働くが、アリウスは関係無しに一気に前方へと突き進む。

一方で相手の猛攻を見たエクセリーゼは。

《な・・・！・・・あの体制から立て直して私に追撃をかけてきた・・・？》

エクセリーゼは愕然として相手を睨む。

現在も圧倒的な速度でエクセリーゼに迫ってきている。

恐らくあの赤い翼が原因だろう。

先ほどまでは、アリウスにあんな力は無かった。

《成長している……伝説の力を制御している?……この短時間で……?》

そして、アリウスはエクセリーゼに迫りながら考えた。

「俺の力は……恐らく……願う事か……俺の願いに共鳴して騎士甲冑が力を《形》としてこの世に出力する……そういう仕組みか」

……そう、不安定な炎がこの世界の物を形作るように。炎が鉄を溶かし、そしてもう一度形としての命を吹き込むように。

「ならば……俺が望むのは……」

アリウスが呟いた瞬間、スピードが更に増す。

そして……

《ふふ……来い、アリウス王!!》

エクセリーゼが宝具を思い切り振り上げた。

「はあ!!」

アリウスは宝具を横に構えて思い切り薙いだ。

その頃、ミルフェリーナ城では。

「本当に行くのですか……セルヴィア理事長……サクラ副会長」
ヴィクトリアが2人を見つめる。

「ええ、私達は相手の国に乗り込むわ」

「うん、ごめんなさいヴィクトリアちゃん……けれど、私達は行かなきゃならないの……兄さんの為にも」

セルヴィアとサクラの覚悟は決まっていた。

と、その時。

ガチャン・・・・・・・・・・

「っ!?!?」

その場の全員が城の入り口を振り返った。

理由は簡単で、先ほどまでビクともしなかった扉が開いたからだ。

「・・・・・・・・アリス・・・・・・・・?」

ヴィクトリアが呟く。

そう、城に入ってきたのは白髪蒼眼の少女。

アリス・ランガルドだった。

「皆・・・・・・・・ごめんなさい・・・待たせて・・・でも、私はもう戦えるから」

アリスは微笑んだ。

そして、その頃のルベリージャ学院は。

「急げ、早くアリスア会長ともう1人の女性を運べ!!」

生徒達が大慌てだけが人を運んでいる。

因みに、今運び込まれてきたのはアリスア達だ。

先ほど、驚くほどの魔力の激突が確認されたため、すぐさま学院の生徒達が見に行ったのだが・・・そこで見たのは、血まみれで倒れたアリスアの姿だった。

すぐさま水系統と風系統の得意な生徒達が集まって治療を始めた。

アリスアと、黄色の髪の女性はお互いに危険な状態で、後少しでも発見が遅れていたら死んでいたらしい。

そして・・・・・・・・・・

「どう・・・いう・・・事・・・?」

治療を始めている生徒を監督していた医療関係の教師が絶句した。

「どうしました?」

ルークがすぐさま尋ねる。

「そ・・・それがね・・・アリシアさんから・・・魔力を感じないの・・・」

「は?」

「いや・・・だからね、アリシアさんの体から魔力反応を全く感じないの・・・それに・・・宝具特有の波動も感じない・・・まさかとは思ったけど・・・」

医療担当教師が口に手を添えて後ろへと一歩退く。

ルークの心にも嫌な予感が広がる。

「彼女・・・ナイトとしての素質が失われているわ」
医療の教師はそう告げた。

「つつつ!!??」

ルークは声にならない悲鳴をあげた。

そして・・・アリウス達の戦場からやってきた《敵兵》が、遂にルーク達を襲う。

更にはその戦いで、1人の少年が・・・《新たなる伝説》として生まれる変わる事になる。

そして、世界の終わりの場所で・・・一人の少年と、一人の男の物語が幕を閉じようとしていた。

「ああ・・・長い・・・酷く長かった・・・だが・・・これで終わる」

ジャックがレオンの額に手を添える。
レオンは動けない・・・いや、《動かない》。

「ふふ・・・そうか、私に分かるか・・・だがそれは当たり前だ・・・さあレオン・・・行くぞ、お前が《真》に目覚めるために・・・必要な記憶を取り戻しに・・・そして私を理解するために必要な記憶も・・・」

ジャックが小声で何かを告げ、レオンの中に何かが入ってくる。

「・・・なんだ・・・これ・・・」
レオンはただ、自分の中に入ってくる《何か》を必死に理解しようとする。

だが。

D f k c f l d l v l d c l d b k c v k d k l v g l c l d l s
x c k v j d k d c l v l v g ; l d c l f k d j k f j c k j s
d k f k k d s k d f k l d l d l

理解できない《何か》、圧倒的な情報の本流・・・それが《流れ込む》。

「う・・・うあああああああああああつ!!!!!!!!!!」
レオンはあまりの情報量に絶叫する。

痛い。

痛い。

痛い。

圧倒的な痛みが頭を支配する。

「レオン、余分な情報は受け流せ・・・お前が得るべきは情報の終焉・・・それ以外はいらぬ」

ジャックは微笑む

「あああああつ！！！！」

レオンは目を見開いて叫び続ける。

・・・何だよ・・・これ・・・一体・・・何が・・・

レオンは思った。

圧倒的な情報の流れに翻弄されながら、レオンは必死に情報を受け止める。

やがて・・・・・・

キオオオオオオオオ・・・

レオンの頭に甲高い音が響き始める。

そしてレオンは・・・《過去》を垣間見る。

フツ・・・という様な軽い調子で、レオンの脳が機能を停止した。

始まりは・・・一体いつからだったのか・・・それは誰にも分からない。

ただ・・・一人の少年は・・・目の前を歩く一人の女性を見上げていた。

太陽が傾き始めている黄昏時の中で、その空間を占めるのは二人の気配だけだった。

「姉さん・・・どこに向かおうとしているの・・・？」

少年は尋ねる、自分の前を歩く、自分の姉に。

「うん、大事な場所よ・・・あなたが《生まれ変わる》為に必要な力を貰いに行くの」

二人は只管に森の中を歩き続けている。
彼は1時間は経っただろう。
只管・・・ただ只管に前へ・・・前へ進む。

やがて二人は森を抜ける、そして目の前に巨大な遺跡の様な建造物が現れた。

「姉さん・・・これ・・・何の建物なの・・・？」
少年は尋ねる。

だがその女性は黙って歩く、少年もまた黙って姉に続く。
そしてその遺跡の中に入る。
その中は真っ暗だった、只管に真っ直ぐの道が続くだけ。

カツ・・・コツ・・・カツ・・・コツ・・・
二人分の足音だけが響く。

そして。

「着いたわ」
女性は告げた。

そこは異様な場所だった。
円柱を書いたような空間で、足元には《七角形》の魔法陣が描かれている。
少年はふと天井を見上げる。

「・・・凄い・・・」
少年は呟いた。

その丸い空間の天井には何かの壁画が描かれている。
白い翼と黒い翼を持つ二人の人間が、お互いに剣をぶつけ合っている。

まるで戦っているかのよう。

女性はそれを見て、悲しそうに瞳を潤ませると、パチンと指を鳴らした。

ポツ……!

そんな音をたててその空間に明かりが灯る。

何処が光っているかは関係ない、空間その物が光っているから。そしてそれと同時に目の前の壁だった部分が砂のように消え去っていき、更にその奥には下へと続く階段が現れた。

……まだ……歩くんだ。

少年はそう思うと、姉に続く。

二人は階段を降り続ける。

「レオン」

前を歩く女性は呟いた。

「なあに、姉さん」

レオンは呟く。

「……レオンはもし……苦しい事が起きたらどうする？」

姉は……アリスは尋ねた。

「苦しい事……？……うん……分からないや」

レオンは首を傾げた。

「そう……じゃあね……もしも……大切な人がレオンにできて……その大切な人が苦しんでいたら……レオンはどうしてあげたい？」
アリスは歩きながら尋ねる。

「……大切な人……姉さんとか？」

「うん、私じゃない……もつと大切な人……例えばずっと」

緒にこの人と居たいと思える人とか・・・そういう風に思える人よ」

「うん・・・多分・・・僕がその人の代わりをしてあげたいな」

レオンは微笑みながら告げた。

それにアリスは目を見開く、だがレオンからは確認できないが。

「どうして・・・そう思うの？」

「だって、そんな風に思える人なら・・・救ってあげたいし・・・その人と同じ苦しみを背負ってあげたいから」

レオンは嬉しそうに呟いた。

アリスは立ち止まると、レオンの方を振り返る。

「姉さん・・・どうしたの？」

レオンは尋ねずに居られなかった、理由は・・・

「どうして泣いてるの？・・・姉さん」

「・・・ごめん・・・なさ・・・い、私・・・あなたに苦しみを・・・絶望を背負わせてしまうの・・・」

アリスは嗚咽を交えて呟いた。

「何を言ってるの・・・？」

レオンは尋ねた。

だがアリスは再び前を向くと歩き出した、レオンには・・・アリスが必死に悲しみを堪えている様に見えた。

やがて二人は《一つの壁画》がある空間まで来た。

その空間はとても広い・・・オーケストラの会場のようだった。

そして二人はその壁画に近づいていく。

その壁画に近づくと、息苦しくなってくるのは気のせいではない。

「姉さん……苦しいよ……」

「ごめんね……少し我慢して……」

アリスは振り返ると、悲しそうな笑みを作ったまま進む。

「う……」

レオンは呻く。

……苦しい……どうしてこんなにも……苦しい……？

レオンはそう思った。

「大丈夫よ……それはあなたの体が拒絶反応を示しているだけだから……あの石版はこの世にあつてはならないものだからね……だからレオンという存在その物がアレを拒絶しているの」

そして二人は遂にその石版の前まで到着した。

レオンはもう苦しんでは居なかった、何故ならもう慣れてしまったから。

「レオン……もう慣れたの？……やっぱりあなたは……《神魔の因子が濃い》のね」

アリスは悲しそうに目を伏せる。

レオンは目の前の壁画を見つめる。

そこに描かれているのは、一人の男を相手に戦う、白と黒の少女と少年。

「何なの……これ」

レオンは尋ねた。

「これは……《世界の記憶》……光と闇の力を持った二人が《世界を救う物語》」

の程度の方で、私に適うとでも?》

「いいえ、でも……」

アリスは残ったもう片方の手を前に翳す。

「来て……エクスカリバー」

キオオオオオオオオオオオオオ!!!

光の嵐が起き、その手に純白の剣が握られる。

そしてソレを一閃させる。

白刃一閃。

だが。

《無駄だ、砕ける《ブレイク》》

その一言と共に、白い剣が砕け散った。

キイイイイイアアアアアアアアアアアア!!!!!!

悲鳴をあげる様に純白の剣が砕ける。

「っ!?!」

アリスは目を見開く。

そして。

ズグン……ガバン!!!!!!

アリスの胸を黒い手が貫いていた。

ブシャアアアア!

血が噴き出す。

「う……ぐ……ごはっ……」

アリスは呻く。

「ね……姉さん!!!!……ぐっ……」

レオンは悲鳴をあげるが、漆黒の剣の痛みがそれを上回る。

《はは・・・愚かだな・・・ニンゲン風情が私に牙を立てようなどと・・・愚かしい》

「く・・・でも・・・これであなたを封じる準備はできたわ」

アリスは微笑んだ。

《・・・はは・・・またか・・・だが今回はそう簡単にはいかぬ・・・《私の分身》を星鏡に放っておいた》

シャイターンは笑う。

「・・・大丈夫よ・・・私はその為にレオンを・・・」

《ははははは！笑わせるな、人間如きが居ようと変わりはせぬ・・・

・小僧》

「ひっ・・・」

レオンは後ずさる。

《はは・・・お前は私を止められるか？・・・はは・・・ははは・・・お前は私を止められるか？》

質問を繰り返す。

だが、レオンは答えられない。

《・・・はは・・・そうか・・・恐怖か・・・はは・・・いい感情だな、そのまま怯えているがいい・・・人間》

やがて、その声が消え始め、同時にアリスの体が透け始める。

「っ・・・姉さん！！」

レオンは叫ぶ。

《大丈夫・・・レオンは一人じゃない・・・だから私の元までたどり着いて・・・その為に・・・私は・・・レオンを・・・ああ、それと・・・》
《後は頼んだわよ、アリス・ランガルド》・・・》
アリスは笑って、レオンを見つめる。

そして唇が動く。

・・・さよなら・・・と。

「っ・・・姉さんっ！！！！！！」

レオンの絶叫が響いた。

レオンは一人で座り込んでいた。

分からない・・・何が起きたのか。

アリスに遺跡に連れられて、石版の前に立たされて・・・アリスが死んだ。

「どうして・・・一体・・・姉さんは何に関わらされていたんだよ・・・」

レオンは俯く。

と、レオンは自分の腹部に刺さった漆黒の剣が黒いオーラを出しているのに気づいた。

「な・・・何・・・？」

レオンは漆黒の剣に手を伸ばし・・・触れる。

ドクン・・・

「っ・・・！！」

レオンの中で何かが変わってしまった。

全てが・・・自分が歩こうとしていた《当たり前の運命》が変わってしまったのを感じる。

自分が今まで過ごしていた世界から弾き出された、そんな感覚。

「な．．．なんだよ．．．」

レオンは恐怖する、今．．．この瞬間、この剣に触れた瞬間に．．．
全てが変わってしまったから。

そして、そこで声が響いた。

「そうだレオン、お前はこれで《世界の輪から外れた》」
「っ！！」

レオンは前を見上げる、そこに一人の男が立っていた。

奇妙な男だ、全てが黒い．．．髪も服も．．．瞳も．．．全てが黒い男。
「だ．．．誰．．．？」

レオンは後ずさりながら尋ねる。

「始めまして．．．と言うべきか、だが如何せん．．．私には《名が無
い》」

男は苦笑する。

「え．．．名前が．．．無いの．．．？」

レオンは首を傾げる。

「ああ、何故なら私は．．．《お前から生まれた》からな」

「え？．．．お．．．俺からって．．．」

レオンは首を傾げる。

「そう．．．私はお前．．．お前は私．．．私はレオン．．．お前の《
願い》と《闇の力》が一つになった結果生まれた存在だ」

男は告げる。

「え．．．え．．．？」

レオンには分からない事ばかりだった。

すると男は微笑み。

「良い・・・分からずとも・・・いずれ分かるときが来る・・・そうだな、
せめて・・・《私を造った主として》名前をくれないか？」
男は寂びそうに微笑む。

「な・・・名前？・・・え・・・う、うん・・・名前か・・・ど
んな名前がいいの？」

「私には意志が無い・・・レオン、お前が決めてくれ」
男は苦笑する。

「それじゃあ・・・」
レオンは考えた。

「・・・レオン・・・じゃあ同じ名前だし・・・うん・・・あ！！
「それじゃあ・・・《ジャック》でどう？」
レオンは呟いた。

「ジャック・・・理由を・・・理由を聞かせてくれ」
「うん・・・何となく」
レオンは笑った。

すると男はきよとんと目を見開き、微笑んだ。

「そうか・・・なら私はジャックだな、レオン・・・礼を言う、私に
名を授けてくれて」
ジャックは微笑んだ。

「ううん、こっちこそ適当な名前だったし・・・それで・・・さ、
ジャックは一体・・・何者・・・なんだ？」
レオンは尋ねた。

「私か・・・私は何者でもないさ、ただ・・・レオンに従う」

ジャックは跪いた、まるで主君に接するように。

「さあ……レオンの願いを」

「願い？」

レオンは首を傾げる。

「そうだ、何でも良い……レオンが望むなら……なんでもいい」

「うん……」

と、そこでアリスにおきた悲劇を思い出した。

レオンの目から涙が零れる。

「姉さん……」

「……悲しいか」

ジャックは尋ねる。

「うん……何で……姉さんは……それに……あの黒い手……」

レオンは先程の黒い手を思い出し、身震いする。

「アレは……《存在してはならない者》だ」

「アレが何か知ってるの!？」

レオンは叫んだ、その瞬間に刺さった剣が傷を抉るが関係ない。

「ああ……レオンはアレが憎いか？」

「……憎い……っていうより……分からない……どうして姉さんが」

レオンが俯く。

「そうか……ならば……私とレオンでアレを倒そう」

ジャックは呟いた。

「え?……倒す……倒せるの?……俺と……ジャックで」

レオンは目を見開く。

「ああ、レオン次第だな……強くなれば……誰にも負けないほど……強くなれば……」

ジャックの言葉に、レオンは頷いた。

なら……俺は倒す……さっきの何かは分からないけど……俺がアイツを……倒す」

レオンの言葉と同時に、剣が体から勝手に抜ける……まるで意志を持ったかのように。

「え……？え……？」

レオンは慌てた。

「ふむ……どうやらレオンの決意に闇が答えたか……レオン」

ジャックは勝手に抜けた剣を掴み、掲げる。

「この剣に誓おう……私が……レオン、お前を鍛えろ……レオンが望む物を……レオンが守りたい物を……私も守ろう……レオンが壊したい物を……私も壊そう……私はレオンの為に居る……それを忘れないでくれ……」

ジャックは告げた。

「うん……分かった、俺……ジャックと……っ!?」

突然、レオンの頭に痛みが走った。

レオンが倒れる。

「っ!……レオン!」

ジャック駆け寄る。

そしてレオンを抱える。

「これは……《世界改変》?……まさか……あの女か?……」

「・・・くそ・・・」

ジャックは眉を歪める。

レオンの視界に霧のような物が掛かり始める。

目の前が真っ白になって・・・全てが消えていく。

記憶も・・・消える。

「ジャック・・・俺・・・は・・・」

レオンは沈む意識に抗い、言葉を発する。

ジャックはソレを真剣に聞く。

「俺・・・の・・・願い・・・は・・・大切・・・な人を・・・守れる・・・力が・・・欲しい」

レオンは告げた。

ジャックはそれに微笑んだ。

「ああ・・・分かった・・・だが、レオン・・・私は来るべき時まで姿を眩ます・・・例えレオンの《敵》としてでも・・・私はレオンの願いを叶える・・・そして恐らくレオンは私を忘れる・・・だが、安心して・・・私は・・・」

それが・・・ジャックの言葉だった。

レオンの目が見開かれた。

目の前にはジャックの姿。

「・・・お・・・お前は・・・ジャック・・・なのか？」

レオンは呟く。

ジャックは微笑んだ。

「《おかえり》・・・レオン」
ジャックは告げた。

-----次回予告-----

遂に自分の過去を取り戻したレオン、そしてジャックとの《修行》が始まる。

「レオン・・・お前の闇の力を・・・消す」

その頃セルヴィア、サクラ、アリスの三人はルシアーデ城へと急いでいた。

そして。

「直ぐにだ・・・ルベリージア学院に保管されている《神玉》を全て奪え」

アーフェリオンは命じる。

「了解だ」

ジョンは微笑む。

次回、ルークVSジョン、お楽しみに。

ルークVSジョン

場所はルシアーデ王国・戦況観察室。

「それで、現在の戦場進行率はどれくらいだ」

アーフェリオンはその部屋の中にある円卓の中心にて呟いた。

彼の他にも12人程の人間が円卓のテーブルに座り込んでいる。

「は、現在、我が軍は相手国を侵略しつつあります・・・ミルフエリ
ーナ王国国王、アリウス王が率いてきた軍と出くわした時は焦りま
したが、聖七騎士団・エクセリーゼ卿の活躍によって切り抜けまし
た」

1人の男が立ち上がり告げる。

「そうか・・・ではこのまま進行を続けよ、私はこれで失礼する」

アーフェリオンが立ち上がると同時に、円卓のテーブルに座ってい
た全員が立ち上がり敬礼した。

アーフェリオンは部屋を出ると、こう告げた。

「ジョン・ガルーゼ」

「呼んだかア？」

アーフェリオンの目の前に突然ジョンが現れた。

何の気配も無く、音も無く、突然現れた。

「ああ、少し頼まれてもらいたい」

アーフェリオンはそのままジョンを睨む。

「何だ？頼みつてのは」

「・・・今からルベリージア学院に行け」

アーフェリオンの言葉にジョンは顔を歪めた。

「あア？・・・あんな餓鬼共が集まってる場所に行つてどうするん

「だア？」

「・・・あそこには神玉がある」

アーフェリオンの言葉にジョンは目を見開く。

「・・・そうか・・・今まであの2人が集めた神玉を全て奪うのかア？」

ジョンが微笑む。

アーフェリオンが頷いたその瞬間には、ジョンの姿は消えていた。

「・・・これで全ての神玉が揃う・・・あの2人が持つ七つの神玉と、私の持つ・・・」

アーフェリオンが告げた瞬間、アーフェリオンの周りに三つの玉が現れ、ぐるぐるとアーフェリオンの周りを回り始めた。

「はは・・・そう・・・私の持つ三つの神玉が合わさったときにこそ・・・真の力も目覚める、本来神玉とは・・・《神魔の力を十等分した物》なのだからな」

アーフェリオンは微笑んだ。

その頃、ルークは迫り来るルシアーデ王国の兵士たちを撃退していた。た。

「うおおおおおっ！！！」

ルークは掌に雷を纏って思い切り殴り飛ばす。

「ごはっ!？」

相手の兵士は圧倒的な一撃を受けて吹き飛ばす。

「ふう・・・それにしても、きりが無い・・・」

ルークは周りを見渡しながら呟いた。

周りではルベリーシア学院のナイト達が応戦を続けている。

その時。

「土魔法・中位詠唱！凱竜咆哮！」
アルカイズ・セラン

ルークの背後で敵の魔法が放たれる。

「くそお！」

ルークは振り向きざまに手刀を一閃。

ヒュッ！！

風を切り裂きながら、ルークの一撃が相手から放たれた土の塊を断ち切る。

更にそこから相手の懐まで一気に詰め寄り・・・思い切り腹部へと掌底を打撃として与える。

ドゴン！！

敵の体がくの字に折れ曲がる。

「く・・・あ・・・」

相手の体が崩れ落ちる。

「よし！」

ルークは微笑んだ。

・・・レオンほどじゃ無いけど・・・俺だって戦える！

ルークは他の苦戦している生徒を助けようと、足を踏み出した・・・その瞬間。

ズッ・・・ツ・・・ツ・・・ツン！！！！

辺りを魔力が満たす。

「な・・・」

ルークの体がよるめき、地面に座り込む、それ程の魔力だった。

「ったくよオ・・・まさかこの俺がこんな所に送り込まれるとはな

ア・・・」

ルークの前方から男の声が響いた。

「ッ!!!」

ルークは首を思い切り戻し、前を睨む・・・そこに居るのは赤髪をした男。

「誰だ・・・お前は・・・」

「ああ?・・・俺か?・・・ま、名乗ってもいいかア、俺は聖七騎士団所属・ジョンだ」

ジョンの言葉聞いた瞬間にルークは思い切り踏み込む。

ダガンツ!!!

ルークが踏み込んだ瞬間、地面が陥没する。

「おおおおおおおおおつ!!!」

思い切り雷を収束させる。

「ああ?何だア?・・・つか・・・俺ってよほど雷系統の人間と縁があるよな」

ジョンは笑顔のままルークを向かいつつ。

ガアアアアアアアン!!!

衝撃波が発生し、辺りを撫でる。

雷の拳がジョンへと直撃した。

そして粉塵が晴れるのをルークはじっと待つ。

「・・・コイツが・・・レオンたちを襲った聖七騎士団・・・」

そう、ルークがジョンの名を聞いたとき、襲い掛かったのは、レオンからジョンという聖七騎士団が襲ってきたと聞いていたからだ。

そして。

「そうだ、俺があ闇と光の二人を襲った・・・最も、あん時はデングバルトの魔道具が目的だったんだが・・・失敗したしなア・・・」

舞い上がっている粉塵の中から声が響く。

ルークは目を見開く。

「はん・・・なんで生きてんだ？・・・そう言いたげだなア」

ジヨンは微笑む、そして・・・粉塵が完全に払われる。

「っ!？」

そしてルークは絶句する。

ルークの放った雷の拳は、ジヨンに届く前に《何か透明な物》に止められていた。

「なん・・・だ、これは・・・」

もしこれがレオンやアリス、サクラだったなら相手の宝具だと気づいただろう・・・だが、ルークには分からなかった。

「おらア！」

ジヨンがニヤリと笑い、《透明な鎖》を思い切り振り回す。

ドゴンツ!!

「があ!？」

ルークの腹部に何かが直撃する。

・・・・・透明な・・・何かがあるっ!!

ルークはそのまま吹き飛び、やがて体勢を立て直し地面を滑る。

「透明な・・何か・・宝具か・・？」

ルークは腹を抱えながら呟く。

「ははは!その通りだぜエ!!・・・たくよオ・・この生徒は感が良過ぎんだよ」

ジヨンは笑う。

「・・・」

ルークは相手を睨む。

・・・ここに聖七騎士団が来たって事は・・・何か目的があるって

事だ、考える・・・何が相手の目的だ？・・・それだけでも事を有利に運べる・・・！

すると、ジョンの方からルークの悩みを払拭してくれる。

「何が目的か・・・そんな顔をしてるなア・・・教えてやるうか？俺の・・・いや、俺たちの目的は神玉を全て回収する事だ」

ジョンが獰猛に笑う。

「っ！！！！」

ルークは絶句する。

「はは・・・さてとオ・・・始めるか・・・神玉の在り処・・・吐いてもらうぜエ？」

ジョンは言い放った。

「はあっ！！」

レオンは上半身全てを捻り、剣を振り切る。

ヒュアアアアツツ！！

肘の捻りと胴体の回転による遠心力・・・その全てを乗せてジャックの剣に叩きつける。

ガイイイイアアツ・・・ツンツ・・・！！

耳に聞こえないほどの高音が響く。

ガガガガン！！

それと同時に《二人》の立っている闇色の地面が悲鳴をあげる。

お互いに漆黒の剣を軋ませながらレオンとジャックは鏝迫り合いを続ける。

「ふ・・・中々・・・良い斬撃だった」

ジャックは微笑んだ。

レオンはそれに微笑むと、更に力を込める。

ピシ……………

レオンの剣に輝が入る。

「くそ…………俺の方が早く碎ける…………」

レオンは舌打ちをする。

「甘いぞ、レオン……剣を合わせるている最中によそ事は考えるな」
ジャックの表情が消え、無表情と化する。

レオンの背筋に悪寒が走る。

「ちっ！！！」

レオンは跳躍し、一度ジャックから距離をとる。

そして二人で睨みあい、同時に踏み出し…………

『おおおおおおおっ！！！！』

二人が互いにぶつかり合った。

ガッツドオオオオオツ…………オン！！！！

二人から衝撃波が放たれた。

因みに、何故レオンとジャックが戦っているのか…………それを知るには少し時を遡る。

「ジャック…………ジャックなのか…………？」

レオンは目の前に立っている青年を見つめる。

「ああ…………漸く…………《目覚めて》くれたか…………」
ジャックは微笑む。

「…………まさか…………今のが真実…………なのか…………」
レオンは額を押さえ、呟いた。

「そうだ・・・今見せた事こそが真実・・・そして・・・レオンの姉、アリスに起きた真実だ」

ジャックは少し寂しそうに呟いた。

「・・・俺は・・・一度シャイターンに出会ってるのか・・・」
レオンはあの記憶の《黒い手》を思い出して、背筋を震わせる。

「恐れを感じるのは当たり前だ、シャイターンは《人間》にとって敵対者だからな、恐怖を感じるのは人間としての本能に近い」
ジャックは語り続ける。

「なあ・・・あの・・・《石版》は何なんだ・・・？」
レオンは記憶の中に登場の中に存在した謎の石版を思い出した。

そう、シャイターンの手はあの石版から現れたのだ。
するとジャックは憂鬱そうに・・・

「アレか・・・アレはな・・・《テトラモルフ・トルテミウス》と呼ばれる《世界を繋ぐ扉の鍵穴》だ」
ジャックは告げた。

「世界を・・・繋ぐ・・・？」

「そうだ・・・そして・・・次元を繋ぐ扉、《断罪の白き門・エクテメロン》を起動させる為のパーツでもあるがな・・・最も・・・《今は必要ない知識》だが」

ジャックの言葉にレオンは首を傾げるしかない。

「とりあえず・・・私はお前から生まれた・・・そして・・・レオン、お前は《私を倒さなければならぬ》・・・分かるか？」

「・・・は？」

レオンは呆然と立ち尽くした。

「お前は私を生み出した・・・いや、生み出してしまった・・・な

ればこそ、レオン・・・お前は私を倒してくれ、私は・・・《元のあるべき場所》へと帰らなければならぬ、つまり・・・《お前の中》にな

ジャックが言うには、ジャックという存在は性格には《人》ではなく《レオンという人間から派生した力の一部が顕現した者》という扱いらしい、レオンと同じ黒滅魔法が使用できるのもレオンの力から生まれたものだから・・・つまり《闇そのもの》といっても過言ではないらしい。

そしてそのジャックが存在している限り、レオンの真の力は目覚めないのだという。

それもそうだろう、パズルに例えるなら、ジャックというピースが欠けているのだ。

結局それでは幾ら修行してもレオンの力が完全になる事は無い。

「だからこそ、お前は私を取り込まねばならない・・・そして・・・私を取り込む方法は・・・《お前の全力をもって私をねじ伏せる事》だ」

「おおおっ!!!」

レオンの剣が空を裂き、ジャックの剣を裂く。

ガイイイイン!!!

だがジャックは微笑んだまま、たじろぎもしない。

「く・・・」

レオンは顔を歪める。

そして、ジャックの反撃が始まる。

「はっ」

軽い・・・本当に軽い調子でジャックが剣を薙ぐ。

レオンはそれを軽く受け止めようとする・・・だが。
ガッツ・・・ドゴン!!

レオンは圧倒的な力に押され、吹き飛んだ。

「な・・・」

レオンは地面に剣を突き立てて、体を止めようとする、が・・・
「甘いな、そんな余裕を与えらると思うのか」

ガガアアアーン!!

ジャックの剣がレオンに追い討ちをかける。
剣で叩きつけられて、地面に倒される。

「く・・・そつ!!」

レオンは歯軋り。

ジャックは尚も追撃を続けてくる。

ガン・ギアン・ゴドン!!

次々と剣がレオンに叩きつけられる、それもどの一撃も重い。
その度にレオンの背に接している地面がひび割れ、陥没していく。

ガン・ガン・ガアアアーン!!

「ぐ・・・は・・・」

レオンが吐血する。

そして・・・ジャックが全力で剣を振り上げた。

無論、馬乗りに近い状態で剣を叩きつけられていたため、レオンは
反撃できない。

そして・・・剣が振り下ろされた。

・・・死ぬ。

そんな当たり前の事が、頭に浮かぶ。

「死ぬのか？……」

レオンは迫り来る剣を呆然と眺めながら呟いた。
ジャックは相も変わらず無表情。

ドクン……

レオンは目を思い切り見開いた。

「おおおおああああああつ！！！！！！」

レオンは絶叫し、《腕を振る》。

ツ……ツ……ツツツガツ……アアアアアアアン！！！！！！
凄まじい音が、闇の世界に響いた。

「……え？」

レオンは目を思い切り見開いた。

ジャックは自分の砕かれた剣を見つめ、微笑んでいる。

そしてレオンの右手には《重い感触》。

「これ……」

レオンは自分の右手を見つめ、驚きの声をあげた。

そう、レオンの右手にはレーヴァテインが握られていた。

「合格だ」

ジャックの言葉が響く。

「え？」

レオンは首を傾げる。

「今までの訓練は、お前が神具を自由に引き出せるようになるため、

行っていた事だ」

ジャックの意図する事が理解できた瞬間だった。

そう、いくらレオンが実力を上げてても結局は《人間に有効な手段》でしかない、だが今回の相手は《神》なのだ、神具も無しに戦うなど馬鹿げている。

「そして……遊びはここまでだ、レオン……お前の闇の力をここで消す」

「え……」

その瞬間、レオンは自分の力の全てを失った。

「おおおおお!!」
ルークは自らの宝具・サンダーゲイルを使って思い切りジョンを殴る。

ギャリン!!!

だが、その雷の一撃もジョンの鎖に止められてしまう。

「くそっ!!!」

ルークは一度跳躍し、空中で雷を一気に収束……それも、この一帯が吹き飛ばすほどの魔力を……だ。

「ちっ……まずいなア……今の俺はオシリスの涙を持ってねエ……
となると……本気で行かねエとな」

ジョンはルークの雷に目を細めながら呟いた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!」

ルークは喉が張り裂けそうな程、絶叫し、雷を収束させる。

・・・このまま宝具が耐え切れなくても構わない！！

「一撃で仕留める！！」

ルークは叫んだ。

その時。

・・・ドクン・・・

《ルークの右腕》が一瞬疼いた。

・・・？

しかし、その時のルークには《ソレが何を指しているのか》理解できなかった。

その瞬間に、西の空が赤く染まった。

「なんだア？」

ジヨンはその方角を睨む。

赤い・・・炎の赤が西の空を照らす。

そしてその赤が放たれていた場所では。

「はあ・・・はあ・・・終わっ・・・た・・・はあ・・・」

アリウスは目の前に横たわる《エクセリーゼ》を見つめながら呟いた。

-----次回予告-----

遂にジヨンとの戦いは佳境へと到る！

「我が元に顕現せよ！！」

ジヨンは叫ぶ。

「何だ……この……疼きは……」
ルークの右腕に紋章が浮かぶ。

そして……レオンは。

「俺の……力が……が……」

「お前の力は取り除いた……さあ、私を倒して見せろ……君臨せよ、レーヴァテイン」

そして、ジャックがレオンの神具を使って、レオンを殺しにかかる。

次回、雷神転生、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152t/>

聖天の宝具使い

2011年10月30日19時09分発行